金ヶ森西遺跡発掘調査報告書

—— 湖南中部流域下水道管理用
道路関連遺跡発掘調査報告書II ——

1980

滋賀県教育委員会
滋賀県文化財保護協会

序

湖国近江は、長い歴史と美しい景観を今日に至るまで伝えつづけている地域であるが、近年に至って、県下全域でくり広げられるほ場整備事業とともに、京阪神のベットタウン化が急進展し、大きな変貌を余儀なくされている。そして、そのような中ですすむ琵琶湖の汚染もピッチを上げている。このため「富栄養化防止条例」の施行とともに、公共下水道の整備が急がれており、県下各地で工事がとりくまれている。

本調査も、かかる下水道整備工事に伴なって実施したものであり、多大の成果を得ることができた。本書が、近江の地域史の解明に幾分かの寄与をなすことを願うとともに、一日も早く下水道整備計画が完成し「美しい湖国」の復活することを願うものである。

昭和56年3月

滋賀県教育委員会事務局
文化部文化財保護課長　沢　悠光

001.2
Sh27

例　　言

1．本書は、守山市金ヶ森町、三宅町に所在する、金ヶ森西遺跡の発掘調査報告書である。そして、本書は、さきに刊行した湖南中部流域下水道管道路関連遺跡発掘調査報告の第２冊である。

2．本調査は、滋賀県湖南中部流域下水道事務所の依頼にもとづき、滋賀県教育委員会が、財団法人滋賀県文化財保護協会の協力を得て実施した。なお、現地調査および報告書作成には、滋賀県教育委員会事務局文化部文化財保護課技師大橋信弥が担当した。

3．現地調査および資料整理には、財団法人滋賀県文化財保護協会主任調査員別所健二(現草津市教育委員会社会教育課技師)、同谷口徹（現滋賀県埋蔵文化財センター技師）および大橋美和子の諸氏の全面的な協力を得たほか、福井昭彦、尾谷　孝、中西和多隆、水野敏昭、辻　浩、三宅　治、井入　勉、大崎義彦、美濃部力、谷口考司、中村　明、川立長司、玉村　光、川那辺法子、南部慶子、竹内義明、杉江尋幸、高田　正、辰己邦子、中山順子、桧垣みどり、墨谷敦子、北野隆司の諸君が参加した。

4．本書の執筆は、大橋、谷口、大橋美和子があたり、それぞれ文末に分担を明記した。なお遺物写真については、寿福　滋氏を、校正については安岡扶紀氏を煩わした。記して謝意を表したい。

金ヶ森西遺跡発掘調査報告書

—— 湖南中部流域下水道管理用道路
関連遺跡発掘調査報告書II ——

目　　次

はしがき

例　言

Ⅰ．はじめに…… 1

Ⅱ．地理的・歴史的環境…… 2

Ⅲ．調査の経過…… 21

1．第一次調査…… 21

2．第二次調査…… 24

3．第三次調査…… 33

Ⅳ．遺　　構…… 34

1．溝　　跡…… 34

2．方形周溝墓…… 42

3．竪穴住居址…… 43

4．掘立柱建物跡…… 46

5．土　　坑…… 47

6．そ の 他…… 50

Ⅴ．遺　　物…… 52

1．土　　器

a．弥生土器　b．古式土師器　c．須恵器

d．施釉陶器　c．黒色土器　f．土師器

2．木　　器…… 60

3．石 製 品…… 62

4．自然遺物…… 65

Ⅵ．考　　察…… 66

1．金ヶ森西遺跡出土の布留式土器について…… 66

2．金ヶ森西遺跡の性格について —むすびにかえて —…… 77

出土遺物観察表…… 79

図　版　目　次

PL1. 遺　構　1. T－1　全景(北より)　2. T－2　全景(北より)
PL2. 遺　構　1. T－3　全景(南より)　2. T－4　全景(北より)
PL3. 遺　構　1. T－6　全景(東より)　2. T－7　全景(南より)
PL4. 遺　構　1. T－8　全景(南より)　2. T－9　全景(南より)
PL5. 遺　構　1. T－10　全景(南より)　2. T－11　全景(南より)
PL6. 遺　構　1. T－12　全景(南より)　2. T－13　全景(南より)
PL7. 遺　構　1. T－15南半部(北より)　2. T－15中央部(南より)
PL8. 遺　構　1. T－15北半部(南より)　2. T－16　全景(南より)
PL9. 遺　構　1. T－17　全景(北より)　2. T－18　全景(南より)
PL10. 遺　構　1. T－19　全景(南より)　2. T－20　全景(南より)
PL11. 遺　構　1. T－21　全景(北より)　2. T－24　全景(南より)
PL12. 遺　構　1. T－25　全景(北より)　2. T－26　全景(西より)
PL13. 遺　構　1. T－27　全景(北より)　2. T－28　全景(南より)
PL14. 遺　構　1. T－15　SD25　近景(東より)　2. T－15　SD26近景(西より)
PL15. 遺　構　1. T－15　SD29　近景(西より)　2. T－19　SD29近景(南より)
PL16. 遺　構　1. T－27　SM2　近景(西より)　2. T－28　SM2近景(東より)
PL17. 遺　構　1. T－11　SH1　近景(南より)　2. T－17　SH2近景(西より)
PL18. 遺　構　1. T－17　SH2　近景(南より)　2. T－28　SH3近景(南より)
PL19. 遺　構　1. T－10　SB1　近景(東より)　2. T－13. SB3近景(南より)
PL20. 遺　構　1. T－15　SB4　近景(北より)　2. T－20　SB5　SK19　近景(西より)
PL21. 遺　構　1. T－21　SB6　近景(北より)　2. T－20　SK18　SX5　近景(西より)
PL22. 遺　構　1. T－18　SK17　近景(西より)　2. T－17　SD37　木器出土状況(東より)
PL23. 遺　物　H007～C029(T－1包含層)　H046(T－2　SD4)　E049　H052(T－3包含層)

PL24. 遺　　物　E058　E060(T－9　SD19)　E065(T－9　SK3)　E091(T－10　SD20)　E114　E123　(T－10　SD21)

PL25. 遺　　物　E136　E140(T－10　SD21)　E165　E167(T－13　SD24)　E175～E235(T－15　SD25)

PL26. 遺　　物　E224(T－15　SD25)　E241(T－15　SD26)　E244　E248(T－15　SD28)　E303～E313(T－15　SD29)　E328(T－16　SD34)

PL27. 遺　　物　E340　E350(T－16　SD34)　E366　E368(T－16　SX2)　E376～E420(T－17　SD38)

PL28. 遺　　物　C421(T－17　SD38)　E435～E440(T－18　SD41)　E452～E465(T－18　SK17)　E469(T－19　SD42)

PL29. 遺　　物　E476　E477(T－19　SD42)　E495～E521(T－20　SD51)　E526(T－20　SK19)　E537(T－20　SX5)

PL30. 遺　　物　E524～E531(T－20 SK19) E538～E540(T－20 SX5) E542(T－20 ピット内) E555(T－21　SD51) E583(T－26 SD66)

PL31. 遺　　物　E550(T－21　SD51)　E577　E578(T－25　SD63)　E584　C595(T－28包含層)　E600～E661(T－28　SD70)

PL32. 遺　　物　1．C001～H017(T－1包含層)　2．B018～P017 (T－1包含層)　E028～E030(T－1　SD3)

PL33. 遺　　物　1．E031～C033(T－2包含層)　E034～H042(T－2　SD3)　2．E043(T－2　SD3)　E044～H047(T－2　SD4)　C048～H052(T－3　包含層)　G053　E054(T－3　SD6)　E055～E059(T－9　SD19)

PL34. 遺　　物　1．E059～E063(T－9　SD19)　E064　E065(T－9　SK3)　E066～E068(T－10　SD20)　2．E069～E080(T－10　SD20)

PL35. 遺　　物　1．E081～E093(T－10　SD20)　2．E094～E101(T－10　SD20)

PL36. 遺　　物　1．E102～E109(T－10　SD20)　2．E110～E113(T－10　SD20)　E115～E118(T－10　SD21)

PL37. 遺　　物　1．E119～E131(T－10　SD21)　2．E132～E141(T－10　SD21)

PL38. 遺　　物　1．E142～E149(T－10　SD21)　2．E150～E158(T－10　SD21)

PL39. 遺　　物　1．E159　E160(T－10　SD21)　E161　E162(T－13　SD22)　E163～E168(T－13　SD24)　E169～E170(T－15

包含層) E171 E172(T－15 SD25)
2．E173～E185(T－15 SD25)

PL40. 遺　物　1．E186～E197(T－15 SD25)　2．E198～E209(T－－15 SD25)

PL41. 遺　物　1．E210～E217(T－15 SD25)　2．E218～E226(T－15 SD25)

PL42. 遺　物　1．E227～E234(T－15 SD25)　2．E237～E238 E243(T－15 SD25)　E242(T－15 SD26) E245 (T－15 SD28)

PL43. 遺　物　1．E246～E251(T－15 SD28) E252～E258(T－15 SD29)　2．E259～E270(T－15 SD29)

PL44. 遺　物　1．E271～E280(T－15 SD29)　2．E281～E291(T－15 SD29)

PL45. 遺　物　1．E292～E298(T－15 SD29)　2．E299～E312(T－15 SD29)

PL46. 遺　物　1．E314 (T－16 包含層) E315～E317 (T－16 SD33) E318～E325 (T－16 SD34)
2．E326～E338 (T－16 SD34)

PL47. 遺　物　1．E339～E352(T－16 SD34)　2．E353～E364(T－16 SD34)

PL48. 遺　物　1．C365(T－16 SD34) E366～369(T－17 SX2) E370 E371(T－17 SD35) E372(T－17 SD37) E373～E379(T－17 SD38)　2．E380～E389(T－17 SD38)

PL49. 遺　物　1．E390～E400(T－17 SD38)　2．E401～E414(T－17 SD38)

PL50. 遺　物　1．E415～E419(T－17 SD38) E422 E423(T－17 SD39) E424(T－17 SH2) E425(T－18 SD40) E426～E428(T－18 SD41)　2．E429～E444(T－18 SD41)

PL51. 遺　物　1．E445(T－18 SK16) E446～E453(T－18 SK17)
2．E454～E466(T－18 SK17)

PL52. 遺　物　1．E467(T－18 SK17) E468～E481(T－19 SD42)
2．E482～E485(T－19 SD42) E486～E493(T－20 SD51)

PL53. 遺　物　1．E494～E504(T－20 SD51)　2．E505～E516(T－

20　S D51)

PL54.　遺　　物　1．E518～E524(T－20　S D51)　E526～E534(T－20 S K 19)　2．E535　E536(T－20　S K19)　E537～E541 (T－20　S X 5)　E542(T－20　ピット内)　E543～E547 (T－20　S D51)

PL55.　遺　　物　1．E549～E556(T－20　S D51)　E557～E560(T－24包含層)　E561(T－24　ピット内)　2．E562～E572(T－25 S D63)

PL56　遺　　物　1．E573～E578(T－25　S D63)　E579～C583(T－26　S D66)　E584(T－27　S D67)　E585～E587(T－27　S K 26)　2．E588～C595(T－28包含層)　E596～E599(T－28　S D69)　E601(T－28　S D70)

PL57.　遺　　物　1．E602～E614(T－28　S D70)　2．E615～E626(T－28　S D70)

PL58.　遺　　物　1．E627～E638(T－28　S D70)　2．E639～E644(T－28　S D70)

PL59.　遺　　物　1．E645～E652(T－28　S D70)　2．E653～E659(T－28　S D70)　E660(T－28　S H 3)　E661～E662(T－28　ピット内)

PL60.　遺　　物　W01～W07(T－15　S D28)

PL61.　遺　　物　1．模造鏡(S001)　2．S002～S005(T－19　S D19)

PL62.　遺　　物　1．S006(T－10　S D20)　S007(T－15　S D29)
2．S008～S011

PL63.　自 然 遺 物

PL64.　T－1　平面断面実測図

PL65.　T－2　平面断面実測図

PL66.　T－3　平面断面実測図

PL67.　T－4　平面断面実測図

PL68.　T－6　平面断面実測図

PL69.　T－7　平面断面実測図

PL70.　T－8　平面断面実測図

PL71.　T－9　平面断面実測図

PL72.　T－10　平面断面実測図

PL73.　T－11　平面断面実測図

PL74.　T－12　平面断面実測図

PL75.　T－13　平面断面実測図

PL76. T－15(a)平面断面実測図
PL77. T－15(b)平面断面実測図
PL78. T－15(c)平面断面実測図
PL79. T－16 平面断面実測図
PL80. T－17 平面断面実測図（第1遺構面）
PL81. T－17 平面断面実測図（第2遺構面）
PL82. T－18 平面断面実測図
PL83. T－19 平面断面実測図
PL84. T－20 平面断面実測図
PL85. T－21 平面断面実測図
PL86. T－24 平面断面実測図
PL87. T－25 平面断面実測図
PL88. T－26 平面断面実測図
PL89. T－27 平面断面実測図
PL90. T－28 平面断面実測図
PL91. T－1～T－5断面図
PL92. T－6～T－11断面図
PL93. T－15断面図
PL94. T－12 T－13 T－16～T－19断面図
PL95. T－20～T－21 T－24～T－28断面図
PL96. 土器実測図 C001～P027(T－1 包含層)
PL97. 土器実測図 E028～C030(T－1 SD3) E031～C033(T－2包含層)
E034～H043(T－2 SD3) E044～H047(T－2 SD4)
C048～H052(T－3包含層) G053～E054(T－3 SD6)
E055～E056(T－9 SD19)
PL98. 土器実測図 E057～E063(T－9 SD19) E064 E065(T－9 SK3)
E066～E075(T－10 SD20)
PL99. 土器実測図 E076～E100(T－10 SD20)
PL100. 土器実測図 E101～E113(T－10 SD20) E114～E124(T－10 SD21)
PL101. 土器実測図 E125～E142(T－10 SD21)
PL102. 土器実測図 E143～E160(T－10 SD21) E161 E162(T－13 SD22)
E163～E168(T－13 SD24) E169～E170(T－15 包含層)
PL103. 土器実測図 E171～E196(T－15 SD25)
PL104. 土器実測図 E197～E218(T－15 SD25)
PL105. 土器実測図 E219～E238(T－15 SD25) E239～E242(T－15 SD26)
E243(T－15 SD25) E244～E247(T－15 SD28)

PL106. 土器実測図 E248～E251(T－15 SD28) E252～E276(T－15 SD29)

PL107. 土器実測図 E277～E299(T－15 SD29)
E300～E313(T－15 SD29) E314(T－16 包含層) E315

PL108. 土器実測図 ～E317(T－16 SD33) E318～E327(T－16 SD34)

PL109. 土器実測図 E328～E356(T－16 SD34)

PL110. 土器実測図 E357～C365(T－16 SD34) E366～E369(T－16 SX2)
E370 E371(T－17 SD35) E372(T－17 SD37) E373
～E380(T－17 SD38)

PL111. 土器実測図 E381～E400(T－17 SD38)

PL112. 土器実測図 E402～E421(T－17 SD38) E422 E423(T－17 SD39)
E424(T－17 SH2) E425(T－18 SD40) E426～E430
(T－18 SD41)

PL113. 土器実測図 E431～E444(T－18 SD41) E445(T－18 SK16) E446
～E458(T－18 SK17)

PL114. 土器実測図 E459～E467(T－18 SK17) E468～E482(T－19 SD42)

PL115. 土器実測図 E483～E485(T－19 SD42) E486～E505(T－20 SD51)

PL116. 土器実測図 E506～C525(T－20 SD51)

PL117. 土器実測図 E526～E536(T－20 SK19) E537～E541(T－20 SX5)
E542(T－20 ピット内) E543～E549(T－20 SD51)

PL118. 土器実測図 E548～E556(T－21 SD51) E557～E560(T－24 包含層)
E561(T－24 ピット内) E562～E569(T－25 SD63)

PL119. 土器実測図 E570～E578(T－25 SD63) E579～C583(T－26 SD66)
E584(T－27 SD67) E585～E587(T－27 SK26)

PL120. 土器実測図 E588～C595(T－28 包含層) E596～E600(T－28 SD69)
E601～E610(T－28 SD70)

PL121. 土器実測図 E611～E636(T－28 SD70)

PL122. 土器実測図 E637～E659(T－28 SD70) E660(T－28 SH3) E661
～E662(T－28 ピット内)

PL123. 木器実測図

PL124. 石器実測図

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図…… 1
第２図　守山市域の遺跡分布図…… 3
第３図　調査トレンチ設定図…… 29
第４図　新旧遺構対照表…… 34
第５図　遺構配置図…… 39
第６図　第１号方形周溝墓（ＳＭ１）実測図…… 43
第７図　第２号方形周溝墓（ＳＭ２）実測図…… 44
第８図　第１号竪穴住居址（ＳＨ１）実測図…… 45
第９図　第２号竪穴住居址（ＳＨ２）実測図…… 46
第10図　第３号竪穴住居址（ＳＨ３）実測図…… 47
第11図　第４号竪穴住居址（ＳＨ４）実測図…… 47
第12図　第１号掘立柱建物跡（ＳＢ１）…… 48
第13図　第２号掘立柱建物跡（ＳＢ２）…… 48
第14図　第３号掘立柱建物跡（ＳＢ３）…… 48
第15図　第４号掘立柱建物跡（ＳＢ４）…… 48
第16図　第５号掘立柱建物跡（ＳＢ５）…… 49
第17図　第６号掘立柱建物跡（ＳＢ６）…… 49
第18図　第16号土坑（ＳＫ16）…… 50
第19図　第５号不明遺構（ＳＸ５）…… 51
第20図　Ｔ－24　遺物出土状況…… 54
第21図　Ｔ－25　遺物出土状況…… 57
第22図　服部遺跡旧河道出土引鍬・えぶり…… 60
第23図　有孔円板出土状況…… 61
第24図　布留式土器編年細分案…… 70

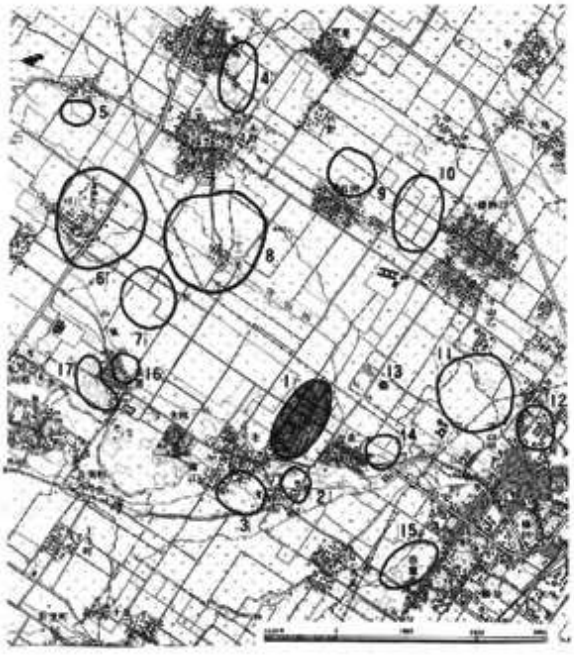
Ⅰ．はじめに

昭和48年以降本格化した、滋賀県下水道整備計画の一環をなす、湖南中部流域下水道管渠埋設工事は、昭和52年、守山市金ケ森町、大門町、横江町付近において、管渠埋設および管理用道路建設に着手することになり、当該地が、周知の遺跡、金ケ森西遺跡、大門遺跡、横江遺跡に該当するところから、事前に発掘調査を実施して、その保存に万全を期すことになった。調査は、滋賀県湖南中部流域下水道事務所の依頼に基づき、滋賀県教育委員会が三次にわたって実施した。大門・横江遺跡については、第一次調査で完了したので、すでに報告したところであるが、[註1]金ケ森西遺跡については、土地買収の関連もあり、昭和52年度、昭和53年度、昭和54年度の三次にわたって実施し、昭和55年度整理調査を実施した。

調査は、管渠が地表下５ｍを押し貫き工法で施工すること、管理用道路も仮設道であるため、全面調査とせず、遺跡の広がり、性格を把握すべく、部分的に実施し、ピット部分を除き意識的に完掘しなかった遺構も、かなりの数に達した。なお、ピット部分については、当初予定地に遺構が存在したため、計画変更して工事実施された。したがって、当該地が本格的な道路として整備されるに当っては、改めて保存策を構ずる必要があると考える。　　（大橋信弥）

註

(1)　大橋信弥・谷口徹『湖南中部流域下水道管理用道路関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ－横江遺跡・大門遺跡－』（滋賀県教育委員会　1978）



遺跡名	種類	時代
1．金ケ森西遺跡	集落跡	古墳
2．大門遺跡	集落跡	弥生
3．横江遺跡	集落跡	弥生～鎌倉
4．寺中遺跡	集落跡	弥生～平安
5．赤野井浜遺跡	集落跡	弥生
6．杉江遺跡	集落跡	古墳～鎌倉
7．欲賀遺跡	集落跡	古墳～鎌倉
8．赤野井遺跡	集落跡	弥生～平安
9．石田遺跡	集落跡	古墳～鎌倉
10．播磨田西遺跡	集落跡	古墳
11．吉身西遺跡	集落跡	古墳～平安
12．吉身中遺跡	集落跡	古墳
13．庭塚遺跡	古墳	古墳
14．金ケ森遺跡	集落跡	平安～鎌倉
15．焔魔堂遺跡	集落跡	古墳～平安
16．欲賀寺遺跡	集落跡	白鳳
17．欲賀南遺跡	寺院跡	古墳

第１図　遺跡位置図

II. 地理的・歴史的環境

(1) 地理的環境

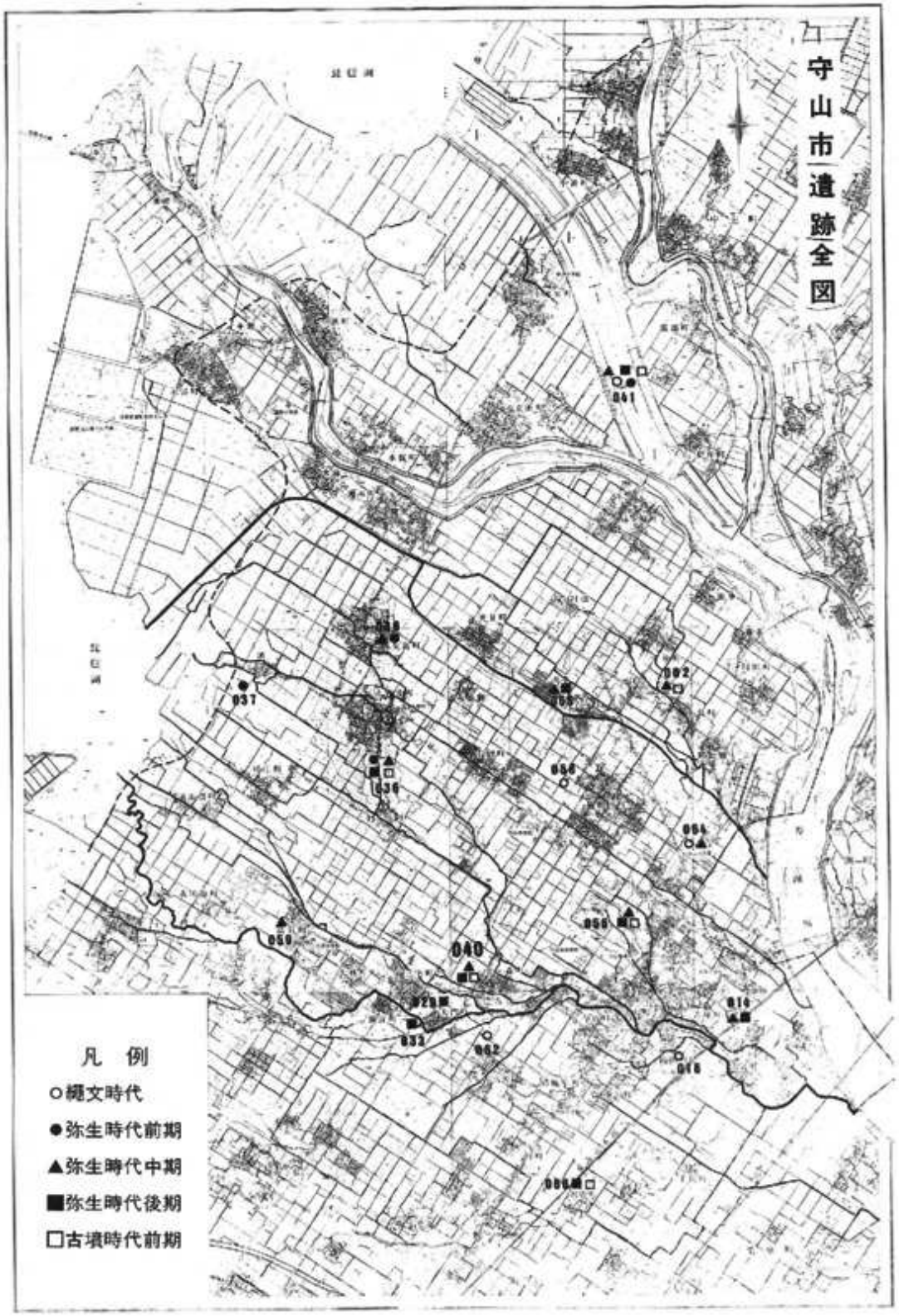
守山市域は、湖東平野の南西部、野洲川の下流から湖岸にかけての扇状地性三角洲上に位置している。従って、当地の人々は、太古より野洲川がもたらした肥沃な土壌の恩恵に浴する一方で、しばしば訪れる洪水との闘いをよぎなくされてもきた。まさに、当地の歴史は、野洲川とともにあると言っても過言ではあるまい。本稿では、当地の諸環境を考えるにあたり、まず野洲川の盛衰を考えることから始めたいと思う。

現在の野洲川

野洲川は、その水源を御在所山に発しており、鈴鹿山脈南西斜面の水を集めて流下し、水口町に至って甲賀山地を西北流する杣(そま)川と合流、山間平野を形成しながら北西に流れを転じ、栗東町伊勢落付近から平野部に出て、以下扇状地性三角洲を形成しながら野洲町竹生で南北に分流、守山市街を左に見て約5kmで湖岸に達する。この野洲川の上流域には、例えば信楽山地にみられるような粗粒の花崗岩地帯や、水口丘陵などの古琵琶湖層群が広く露出しており、いずれも風化、浸食され易い。このような性質により、これらの地域から流下してくる野洲川は、一旦豪雨となると大量の土砂を運び出して、下流に肥沃な氾濫原を急速かつ広大に形成していったようである。守山市域の大半は、こうした野洲川の堆積物によって成り立っている。

一方、野洲川そのものも、先述のごとき著しい流出土砂によって河床が平地より2～3mも高い典型的な天井川の様相を呈している。そのために護岸用の堤防は年々高く築かれ、現在は平均値でも7～8m、最高値は立田、新庄付近の 9.5～10mを計る。それは、もはや堤防というよりも延々と間断なく続く丘陵とでも称すべき人為的な景観である。

正和元年(1312年)の三上神社の案文によると、当時、流れは既に現況に近い2流となっていたようであるが、堤防の存在は疑問であり、その流れもいまだ固定的ではなかった様相がうかがえる。従って、現在のように流路が固定されて天井川化するのは、中世末ないし近世以降と考えられる。この頃、耕地の拡大とその防衛のために築堤が開始されたのであろう。しかし、築堤し流れを固定すれば、流下する多量の土砂によって川床は徐々に上昇する。それは、周辺の耕地への分水に支障をきたすと同時に、疎水能力を低下させ豪雨時の堤防決壊をまねくことにもなった。中世末以降、水利紛争と洪水災害に関する記載が頻繁に文献に登場するようになる。以後、水利紛争は、昭和26年野洲川ダムの完成で、石部頭首工から引水する守山幹線水路の通水によって、又、洪水災害は、昨今の大規模河川改修工事による南北両流一本化によって、それぞれ終止符が打たれるまでの長期間、継起的に当地の人々を襲った。その間、川床の上昇と築堤が互いに競われ、堤防は今や丘陵のごとき様相を呈するようになった。その意味では、小高い堤防そのものが、野洲川との長い宿命的対決の苦闘の証とも言えよう。



第２図　守山市遺跡分布図

守山市内発掘調査時代別一覧表

縄文時代

遺跡番号	遺跡名	調査年・月	原因	内容	文献等
M 016	吉身北	1981. 12	店舗建設	縄文土器片	
M 041	服部	1978他	河川改修	縄文晩期末土器片等	「服部遺跡発掘調査概報」県、市教委
M 058	播磨田東	1975. 02	個人住宅	縄文土器片	
M 062	古高	1980	市宅造	サヌカイト製凹基無茎式・凸基無茎式石鏃	「古高遺跡発掘調査報告書」市教委
M 064	播磨田東	1977	民間宅造	下層より縄文後期土器片、石錘等	

弥生時代前期

M 036	赤野井	1977	県営圃場整備	前期（新段階）土器片	
M 037	赤野井浜	1975	県営圃場整備	前期（新段階）土器片	「遺跡分布調査報告書」市教委
M 038	寺中	1975	県営圃場整備	前期（新段階）土器片	「遺跡分布調査報告書」市教委
M 038	寺中	1981. 01～03	市宅造	前期（新段階）土器片	「滋賀文化財だより7」県文保協
M 041	服部	1978他	河川改修	居住関連遺構・水田址、前期（古～新段階）土器片等	「服部遺跡発掘調査概報」県、市教委

弥生時代中期

M 002	小島	1980. 04～05	民間宅造	下層より中期～古墳時代前期の方形周溝墓16基	
M 014	益須寺関連	1979	民間宅造	溝状遺構より中期（Ⅳ様式）の台付甕	
M 036	赤野井	1977	県営圃場整備	扁平片刃石斧・環状石斧他中期土器片	
M 038	寺中	1981. 03～07	市宅造	中期の方形周溝墓9基他、溝・土坑・ピット等	「守山市文化財調査報告書第11冊」市教委
M 040	金ケ森西	1979	下水道	溝より中期（Ⅱ様式・Ⅴ様式）の土器片	本報告
M 041	服部	1978他	河川改修	居住関連遺構（Ⅳ様式）、方形周溝墓 360基以上（Ⅱ～Ⅳ様式） その他服部遺跡の範囲内の新庄で、寛政11年（1799）に4個の銅鐸が発見されている。	「服部遺跡発掘調査概報」県、市教委
M 056	吉身西	1982. 02	下水道	中期の方形周溝墓1基	
M 059	欲賀南	1980. 10～11	市道新設	蛇刃石斧、石戈	
M 064	播磨田東	1977. 12～	民間宅造	竪穴住居49棟（Ⅳ様式～5c中頃）、石斧・石鏃等	

遺跡番号	遺跡名	調査年・月	原因	内容	文献等
M 065	川中	1981. 02～08	県宅造	下層の溝より中期(Ⅳ様式)土器片	「川中遺跡発掘調査概要」市教委

弥生時代後期

M 014	益須寺関連	1979. 07～09	民間宅造	後期～古墳時代初頭の方形周溝墓3基	「益須寺関連遺跡発掘調査報告書」市教委
M 029	大門	1980. 11～1981. 03	都市計画道路	T－1トレンチ下層に後期の土器片（流入物か）	「大門遺跡調査概要」市教委
M 033	横江	1978. 01～03	下水道	後期の旧河道2条と土拡1基	「湖南中部流域下水道管理用道路関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ」県教委
M 036	赤野井	1977	県営圃場整備	後期土器片	
M40	金ケ森西	1979	下水道	溝より後期の土器片	本報告
M 041	服部	1978他	河川改修	居住関連遺構、旧河道、溝等	「服部遺跡発掘調査概報」県、市教委
M 056	吉身西	1981. 08	個人住宅	方形周溝墓2基	
M 056	吉身西	1982. 02	下水道	この頃の方形周溝墓1基	
M 065	川中	1981. 02～08	県宅造	後期末～古墳時代前期（庄内式）の溝1条、木庖丁	「川中遺跡発掘調査概報」市教委
M 066	伊勢	1981. 04～07	民間宅造	竪穴住居址（五角形プラン1棟、隅丸方形プラン8棟）	
M 066	伊勢	1982. 04	個人住宅	竪穴住居址(五角形プラン)1棟	

古墳時代前期

M 002	小島	1981. 08～12	下水道	方形周溝墓1基	
M 036	赤野井	1977	県営圃場整備	方形周溝墓、溝等多数	「ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書」Ⅴ県教委
M 040	金ケ森西	1976	下水道	旧河道肩部より壺とともに滑石製有孔円板4点	「遺跡分布調査報告書」市教委
M 040	金ケ森西	1979	表採	布留期の滑石製模造鏡、滑石製双孔円板など採集	「滋賀文化財だより44」県文保協
M 040	金ケ森西	1979	下水道	布留期の住居址5棟、方形周溝墓2基、土拡、溝等	本報告
M 041	服部	1978他	河川改修	居住関連遺構、溝、井戸等	「服部遺跡発掘調査概報」県、市教委
M 056	吉身西	1978. 08～09	郵便局新築	初頭の土拡、溝	「吉身西遺跡発掘調査報告書」市教委
M 066	伊勢	1981. 07～10	民間宅造	布留期の竪穴住居址（方形プラン）10棟、方形周溝墓6基	

中世以前の野洲川

では、このような堤防が築造される以前、つまり中世以前、野洲川はどのような流れを守山の地に刻んでいたのだろうか。それを、今に跡をとどめる自然堤防状のたかまりや微地形、さらに条里制地割などから復元してみると、現在の南北２流以外にも２条の主流旧河道がかつては存在し、それぞれが中小の分流を伴なって、微高地間をぬい、網状に流れていたものと推測される（第２図）。

今はなき主流旧河道としてまずあげられるのが、守山市の中心市街から西方へ伸び、金ケ森・欲賀・森川原・山賀などをぬけて草津市芦浦・下物に至る流路で、総延長4.5㎞を計る。この河道は、かつての野洲・栗太両郡の自然的境界をなしていたようであり、「境川」の称がその一端を物語っている。もっとも、現在の境川は、周辺の湧泉を集めて流れるわずか３ｍ幅の小河川にすぎない。ただ、守山郷土誌によれば、明治時代末期にもいまだ32ｍ余の川幅を維持していたようであり、両岸に残る自然堤防状の高まりから、その盛時には 100ｍを越える川幅を保っていたことがうかがえる。

両岸に残る自然堤防の発達は著しく、周辺との比高差１ｍ前後、幅50ｍから 200ｍの規模で境川筋にそって展開する。先述の各集落は、いずれもこの自然堤防上に立地して、あたかも街村のような景観を保っている。一方、境川の河口にあたる烏丸崎には鉤状砂嘴が発達し、かつての境川の威容を裏付けている。

このように、往時の境川は、現在の南北２流に匹適する規模をほこっていたのであろう。ただ、現有の２流のように固定的な流れを維持していた訳ではなく、枝状に分岐する数多くの分流を持っていたようである。金ケ森付近で分岐する守山川、三宅付近で分岐する山賀川などは、そうした分流の中で比較的規模の大きなものであったと考えられ、その痕跡を今に良く残している。

もう１つの主流旧河道と考えられるのは、阿比留付近で現野洲川と別れて北西に流れる江西（こうさい）川（法龍川）筋である。この旧河道と現野洲川に挟まれた阿比留や小島には、今も湧水を伴う後背湿地が散見される。又、阿比留から今市・荒見付近では、流域に自然堤防状の微高地が連綿とみられ、矢島付近から下流域に至ると自然堤防に人為的な築堤（六条堤など）が加えられて、野洲川破堤時の洪水予防の役割を担っている。江西川の河口部は、幕末以降継起的に行われた新田開発に伴う埋め立てによって、その自然的景観を失っているが、かつては円弧状に突出する砂洲の発達がみられたようである。江西川には、比較的大きな分流らしきものは認められない。ただ、微高地間をぬって網状に走る多数の細流を確認することができる。

以上、今はなき２条の主流旧河道についてその復元を行ってきたが、現有の南北２条も又、既述のように中世以前は様相を大きく異にしていた。つまり、現在の丘陵のごとき堤防によって流れを固定されることはなかった。従って、主流旧河道同様、いくつかの中小分流を伴っていたであろう。事実、両流に挟まれた幸津川や立田地先には、湖へ向かう比較的規模の大きな流路の痕跡が追認できる。

このように、中世以前の守山市域は、現在の南北２流を含めて大きく４条の河道が存在し、

おのおの中小の分流を伴って微高地間を網状に流れていたと考えられた。そして、こうした景観こそ、むしろ自然の野洲川の流れに近いものであったと言える。中世以降、耕地の拡大とその防衛に端を発した築堤は、川床の上昇とそれにみあう堤防の構築が相互に競われ、結果として丘陵のごとき様相をなして流れを南北２流におし込めることになった。その意味からも、現在の野洲川は、極めて人為的な河川であるということができよう。

中世以前の守山市域

これまで、野洲川を中心にその盛衰をみてきた。その結果、中世以前の野洲川が、現在のそれといささか異なることが明らかになった。以下、その成果を踏まえて、中世以前の守山市域の景観をえがいてみることにしよう。

当地は、条里制地割が示すように、古くから農業的土地利用が進んでおり、そのために地盤の地均化が著しい。従って、以前の微地形的変化が消失してしまっている場合も多く、現在の景観がそのまま中世以前の景観であるとは考え難い。それは、時代を遡及すればする程、異なるものであったと考えられる。近年、守山市内では、開発に先行して市内各所で矢継早に発掘調査が実施されており、それに伴って旧地形がわずかずつではあるが明らかになってきている。その成果は、現在は同じ平坦な水田であっても、掘削すると、耕土直下に遺構を切り込む安定した地山が露呈する場合がある一方で、耕土下にさらに旧耕土や整地層が数層介入し、その下に旧河道や浅い沼沢地を確認する場合も多い。このことは、当地も、かつては比較的起伏に富む地形であったことを示すものとして興味深い。

こうした所見は、これまで述べてきた野洲川旧河道の生成と相関をなすものと考えられる。中世以前、自然に近い流れを保っていた４条の野洲川河道は、流出する大量の土砂によって、おのおのの両岸に自然堤防を形成してきた。自然堤防は、周辺の水田面より明らかに１ｍ前後高い微高地となって、現在にその姿を留めている。そして、多くの現集落が、この微高地上に立地していることに気がつく。古来より、集落が平野内でわずかでも高燥な地を選んで立地してきた様相を、うかがい知ることができよう。一方、河道やその分流に挟まれた地は後背湿地となり、湖岸近くに展開する低湿地とともに、最も低く湿潤な地所を占めていたであろう。又、両者の中位に位置する平地には、わずかな凹地を縫って中小の分流が網状に流れ込み、モザイク的な微地形を呈していたと考えられる。中世以前さらに条里制地割施行前の守山市域の地理的景観は、このように比較的変化に富む地形をなしていたようである。そして、こうした旧地形は我々が市内各所の発掘調査によって得てきた所見とも一致するものではないだろうか。

さて、これまでは旧地形の復元を平野部に限ってきたが、この平野が琵琶湖と接する湖岸汀はいったいどうであったろうか。湖岸汀も、古くより変化がなかったとは考え難い。琵琶湖の水位の変動、そして長期にわたる野洲川の沖積作用に伴って、伸張・収縮が幾度となく繰り返されたであろう。

琵琶湖の水位の変動を招くものとして、現在、大きく２つの要因が考えられる。その１つは、琵琶湖唯一の流出河川である瀬田川の土砂が堆積した結果、それが必然的にもたらす(注1)湖水面の

絶対的上昇である。他の要因は、「造盆地運動」と称される地殻変動をともなった地震によって起こる、湖岸域の土地の沈降、つまり湖水面の相対的上昇である。これら両要因が相互に作用し合って、しばしば湖岸汀を変化させてきたものと考えられる。それを、湖岸・湖底遺跡を通して歴史的にみておこう。

縄文時代中期、おそらくその後半頃、琵琶湖の水位が異状に低下し、湖岸汀は大きく後退したようである。その結果、湖中へ流入する河川の浸蝕は著しいものとなり、深い幾筋もの開析谷を発達させることになった。かつて、湖岸に生活し遺跡を形成してきた縄文人は、以後湖岸を去り、その痕跡を残さない(注2)。この湖岸が再び安定するのは、縄文時代後期から晩期にかけてである。ゆるやかな水位の上昇と、沖積平地の形成が開始された。この様相は、ひとり琵琶湖周辺の変化ではなかった。日本の平野の大半を占める臨海沖積平野も又、当時活発な形成過程にあった。この期を一にする様相は、歴史的環境の項で述べるように、極めて重要な意味を内包していた。とまれ、この頃、野洲川は、多量の土砂を集めて琵琶湖にそそぎ、活発な沖積作用によって湖岸汀をしだいに伸張させていたであろう。そして、琵琶湖周辺の各所で、低湿地の消長が繰り返されていたと考えられる。

こうした状況は、次の弥生時代、さらに古墳時代以降も原則的に変わることなく継続された。この間、水位もしだいに上昇していったと考えられるが、大中の湖南遺跡の調査結果をみると、弥生時代中期初頭段階で、現在よりもいまだ1.26m低かったようである。

条里制地割の施行期になると、野洲川の沖積作用は相当進展し、先の中世以前の景観に近いものができあがっていたであろう(注3)。当時の湖岸汀は、条里制地割の施されている範囲から推定して、現在の浜街道（主要地方道彦根・近江八幡・大津線）の浜側約１里前後のラインが考えられる。もっとも、現在の南北２条の流域については、近世以降の流路固定化によって三角洲が著しく発達し、湖岸汀が大きく琵琶湖側に張り出しているが、当時の湖岸汀は、木浜・幸津川・小浜そして中主町吉川あたりを結んだラインと考えるのが妥当かと思われる。

(2) 歴史的環境

これまで、中世以前の守山市域について、その地理的環境を概観してきた。以下、当地にやって来た我々の祖先が、こうした地理的環境といかに闘い、それを制圧してきたかをみることにしよう。ただ、本稿の叙述は、一応古墳時代前期までとし、以降は稿を改めさせていただく。叙述方法は、個々の遺跡や遺構の羅列を排して、歴史的叙述となるように努めたい。

縄文時代

我々の祖先が、この守山の地に最初の痕跡を残したのは、縄文時代にさかのぼる。もっとも、服部遺跡以外の各遺跡では、他の遺物に混入して、わずかの土器片や石製品が採集されているに過ぎない。周辺では、野洲町和田遺跡、五之里遺跡で晩期の遺物を採集している。ただ、いずれの採集地も、山手を遠く離れた微高地ないし微高地縁辺である点は、留意されてよいだろう。服部遺跡では、晩期末の遺構や遺物が、やはり湿地をひかえた微高地上に確認され、次の

弥生時代前期のそれらと分かち難く共存している。後・晩期の集落立地が低地へと移り、ひきつづき弥生時代前期の集落としても受け継がれていく現象は西日本に比較的多いようである。(注4)この現象は同期が、ちょうど「自然からの収奪的生産」つまり狩猟・採集経済から、「人間の行為に依って自然の産物を高める生産方法」つまり日本列島では水稲農耕を受容・開始した、大きな画期であるだけに重要である。

先に地理的環境の項でも触れたように、当時、日本の平野の大半を占める臨海沖積平野は、活発な形成過程にあった。このことと期を一にして、琵琶湖周辺でも沖積平地の形成が著しかった。湖岸近くの各所では、低湿地の盛衰がひんぱんに繰り返され、河道やその分流に挟まれた土地の後背湿地化も著しかったであろう。こうした湿地の相次ぐ誕生は、来たる原始的な水稲農耕に不可欠な水補給の条件を、自然的に保証していくことにもなった。そして、低湿地近くへの集落の移動は、自然環境の変化に符合するように、縄文時代後・晩期に開始され、弥生時代以降に受け継がれていく。

近年、低湿地での水田址の発見が相次いでいる。北九州では、板付遺跡で晩期末（夜白式）の水田址が発見され、各種の木製農具が出土している。又、菜畑遺跡では、晩期中葉（山ノ寺式）の水田址が発見され、農具として石庖丁２点が出土した他、扁平片刃石斧、磨製石鏃、紡錘車など、従来弥生時代のメルクマールと考えられた遺物が検出されている。そして、熊本県の上南部遺跡では、実に晩期初頭にさかのぼる稲のプラントオパールが、土器の胎土分析によって確認され、当時の水稲農耕を裏付けている。このように、晩期にさかのぼる水田址の発見は、今のところ九州地方に限られている。(注5)ただ、先の西日本にみる集落移動の一般的傾向から考えると、晩期にさかのぼる水田址が、西日本各地でも発見されてくる可能性があろう。

そうした場合、従来、縄文晩期の土器片に散見されたモミ痕の発見とは大きく異なる意義がある。水田址の発見は、それが要する一定程度の高度な技術体系の獲得と、それを実施する集団の組織化を前提とするからである。それは、もはや弥生時代に通じる生産機構が不可逆の形で到来してきていることを物語っており、そこに狩猟・採集が補完的に行われていたとしても、以前の「自然からの収奪的生産」の段階とは区分すべきであろう。「時代区分にあたっては、第１には、１つの社会に古いもの、おくれたものがどんなに残っているか、ということよりも、新しいもの、進んだものが、もはや後へもどすことのできない力を以てあらわれているかどうか、ここに注目すべき」だと思う。(注6)

考古的研究は、少なからず土器研究がその先導をなし、時代区分も又、土器による区分が主導権を握ってきた。従って、弥生時代とは「弥生土器を用いた時代」と定義されて、縄文土器を用いた縄文時代とは区分されるのが通常である。(注7)それは、土器を時間の物差しとし、土器を通して時代を語ろうとする考古的研究法の場合、確かに便利ではある。しかし、本来、土器は労働要具の一部でしかない。従って、生産機構が不可逆的に変化したからといって、労働要具の一部である土器が、相即的に必ず変化するとは考え難い。むしろ、若干の遅速を生じるのが、自然であるように思う。事実、水田址の発見されている九州の縄文晩期においても、縄文土器の一貫とした変化の足どりがあり、ただちに水稲農耕に適合する弥生土器的な器種構成へと変

化していない。ところが、一方において、弥生的な農具や石製品などの労働要具が、既に伴出してきてもいた。もはや、労働要具の一部でしかない土器によって時代を区分する方法は、歴史的理解の側面からみると困難であるようにも思われる。

弥生時代前期

守山市内で、これまでに弥生時代前期の遺構・遺物が出土しているのは、赤野井遺跡、赤野井浜遺跡、寺中遺跡、服部遺跡の4遺跡を数える。いずれも琵琶湖の旧湖岸汀まで1kmに満たない低地にある。赤野井遺跡、赤野井浜遺跡、寺中遺跡は、かつての主流旧河道である境川の分流の守山川筋に位置しており、守山川が生み出した網状流間の微高地に居をかまえ、その後背湿地や低湿地で原始的な水稲農耕を開始したものと考えられる。

当時、人々が水稲農耕に利用し得た自然の後背湿地や低湿地は、限られている上に小規模で分散的であった。従って、そうした生産域に規制されて、集落も又小規模に点在せざるを得ない。上記の3遺跡は、同じ川筋にありながら、おのおの数百mの至近距離を保って点在していた。もちろん、生産域を異にしながらも、各集落が相互に関連を保って、1つのまとまりを示したことは想像に難くない。

一方、現有の野洲川の南北流間に位置する服部遺跡でも、縄文時代晩期末以来の集落を維持している。弥生時代前期に属す遺構として、微高地上に居住関連の各遺構が、微高地端部から低湿地にかけて水田址が広がっている。水田址は、黒色の有機質泥土を基盤とする湿田である。水田は、小畦を多用し、大畦を適時配している。その区画は、等高線に規制されており、等高線に平行する畦を長く、直交する畦を短くして、おのおのの区画内にフラットな面を維持する配慮がなされている。従って、傾斜の変化に応じて畦が微妙に変化する。近年、西日本を中心に各地で検出例が報告され始めている「不定形小区画水田」に属すものであろう。水田址には、等高線に平行ないし直交気味の水路が数条確認される。(註8) 等高線に平行する水路は、比較的高い位置に作られており、おそらく引水用の水路と考えられる。引水時、水路の適当な箇所に水口が設けられ、上位の水田から順次下位の水田へと水が引き込まれていったのであろう。等高線に直交する水路は、各水田の水を集める排水用の水路と考えられる。

こうしたタイプの水田に類する民俗例が、最近スマトラで確認されている。(註9) 彼地では、焼畑から普通水田への移行期にあらわれる、特殊な水田形態であるようだ。形態上の類似点とあわせて、留意すべきであろう。とまれ、不定形小区画水田は、原地形にさほど手を加える必要もなく、特に低い土木技術しかもたない場合には、労少くして功の比較的多い、効果的な水田経営ではなかったかと考えられる。

服部遺跡のこうした不定形小区画水田は、一応、前期末頃の所産と考えているが、さらに古い類例として、先の菜畑遺跡の縄文晩期中葉のものがある。これまで、弥生時代当初に大陸から導入された水田というと、板付遺跡、津島遺跡（岡山県）、そして安土の大中の湖南遺跡などで検出されている、湿田性のいわゆる「大区画水田」のタイプを想起しがちであった。しかし、不定形小区画水田も又、当初より導入された可能性(註8)が高い。当時、異なる2タイプが、稲作技術

の一環として相次いで導入され、低湿地の状況に応じて、おのおの使い分けがなされたものと考えられよう。

守山市外の周辺で、前期の遺物を採集した遺跡として、草津市志那中遺跡・芦浦観音寺境内遺跡、中主町八夫遺跡などがある。草津市の2例は琵琶湖に近く、湖岸の低湿地を、又、八夫遺跡は野洲川に近く、野洲川の後背湿地を、それぞれ利用して水稲農耕を営んでいたのであろう。

弥生時代中期

中期初頭頃、服部遺跡は、野洲川の大規模な氾濫に遭遇したようである。遺跡一帯は、粘土や微砂によって厚くおおわれ、景観は一変する。やがて、前期の住居や水田が存在したその上に、今度は方形周溝墓が累々と構築され始める。かつての居住域・水田域は、広大な墓域に変化したようである。墓域は、中期のほぼ全期間存続し、その間に構築された方形周溝墓の数は360基を越える。墓域内における方形周溝墓のあり様からみて、周辺に点在した幾つかの集落の共同墓地となっていた可能性が考えられる。

一方、守山川筋では、寺中遺跡や赤野井遺跡で、前期から継続する中期の遺構や遺物が確認されるのに対して、赤野井浜遺跡では、中期以降の遺構・遺物がみあたらない。河口に近い赤野井浜遺跡は、守山川筋の氾濫によって、従来水田として利用してきた低湿地が埋没し、他へ居を移したものと考えられる。河川統制の未発達な、むしろ野放しに近い当時にあっては、活発な沖積作用そして間々襲来する洪水によって、自然景観は刻々と変化しており、低湿地が埋没することもしばしばであったろう。

しかし、こうした自然の弊害を乗り越えて、新たな湿地の開発が果敢に行われてもいた。先の服部遺跡や守山川筋の各遺跡以外にも、境川筋では、本報告の金ヶ森西遺跡を始め欲賀南遺跡、益須寺関連遺跡で、又、江西川筋では、小島遺跡、播磨田東遺跡、川中遺跡などで、中期の遺構・遺物が検出されている。各水系ごとに、それが生み出した後背湿地を中心として、しだいに開発されていく様がうかがえよう。そうした過程では、自然の湿地をほぼそのままの形で水田に利用してきた従来の方式に加えて、一定の自然改造を伴う耕地の確保・拡大の努力が図られ始めたものと考えられる。それは、まず、野放し同然の河川を統制する事から始まったであろう。しばしば訪れる洪水から湿田を守るため、自然堤防の補強が急がれた。あわせて、引排水のための用水工事が、水田面積の増大とともに、その規模を拡大していった。それは、当初、個々の集落ごとに自己完結する程度のものであったと考えられるが、河道の中小分流から本流周辺へと可耕地が広がるにつれ、そうした作業はしだいに大規模となり、個別の集落の能力を越えるものとなった。こうして、水系ごとの各集落が共同して、河川の治水と水田の開発にあたるようになった。水と土地を契機として、水系を単位に各集落がまとまりを開始したのである。可耕地は拡大し、生産は安定した。しかし、その際、水と土地をめぐって有利な条件を確保するための確執が各集落間に生じ、それはしだいに集落間の優劣関係となって集団内に反映するようになったと考えられる。それでも、新たな開発がひきつづいて企だてられている段階では、

その関係はさほど深刻には至らなかった。ところが、一定の技術条件のもとでの可耕地には限りがある。そうなった時、集団内に生じる緊張関係は、いきおい他の水系の持つ可耕地へと向けることで、解決が計られたと予想される。集団内に生じ始めた可耕地の不足が、やがて他集団の土地所有欲を喚起した。略奪は労働して得るよりも容易である。ついに、集団間の争いが始まった。

服部遺跡では、中期末になって、方形周溝墓の周辺に住居が構築され始めるが、その住居内から鋭利な磨製石剣や磨製石鏃などが出土している。又、遺構に伴うものではないが、赤野井遺跡では環状石斧(注10)が、欲賀遺跡では石戈が採集されている。いずれも戦闘用の武器として製作・使用されたものであろう。当地に居を構えた諸集団も又、農業生産に従事する一方で、土地をめぐって血なまぐさく争ったと考えられる。それは、水稲農耕を受容し文明社会に至る過渡期において、避けて通ることのできない、生業部門の重要な一翼でもあった。後漢書が伝える「倭国大乱」の記載も又、こうした事態の断片を伝えるものとして興味深い。

集団間の抗争を示す考古的証拠として、石製武器の発達とともに、高地性集落の出現を掲げることができよう。近江でも、これまで湖西地方を中心に、その痕跡を追うことができた。そして最近、湖東地方でも、竜王町堤ケ谷遺跡で、蒲生平野の眺望に恵まれた丘陵頂部から、中期中葉の土器とともに有柄式磨製石剣・石槍・大型石鏃などの石製武器が出土し、高地性集落として報告されている(注11)。この堤ケ谷遺跡のすぐ西側は、三上山を頂点とする三上丘陵が広がっており、当地を含む野洲川流域はむろん、遠く湖西一帯を一望することができる(注12)。そして三上山山麓でも、野洲町東浦遺跡や北桜遺跡で中期末の土器片がおのおの採集されており、将来、この丘陵の一角で高地性集落が発見される可能性が考えられる。

弥生時代前期、湖岸沿いの服部と赤野井周辺の大きく２地点で、水稲農耕を開始した当地の人々は、中期に入って、それぞれの水系にそって可耕地を拡大し、水系ごとのまとまりを強めながら、ついには可耕地の不足から各集団間で争いを開始した。そして、それは中期段階で終焉を迎えることなく、後期以降に持ち越されたのである。

弥生時代後期から古墳時代前期

弥生時代後期になると、畿内およびその周辺では、石製武器が急激に消滅する。服部遺跡でも、この時期多量の遺物が出土しているにもかかわらず、石製武器を１点も確認することができない。このことは、中期以来の争いが急速終りをつげたとみるべきであろうか。現在、石製武器のこうした消滅は、鉄製武器の普及によるものと考えられている。鉄製品は錆化腐朽し易く、又再利用されて遺存しにくいが、近年、普及を裏付けるように発見例がわずかずつ報告され始めている。おそらく、中期に始まった争いが、石製武器の需要を急激に高め、やがて、より高度な鉄製武器の普及、ひいては鉄製品各種の発達を加速化していったものと考えられる。後期においても高地性集落が各地で存続する事実は、武器を石製から鉄製のものへと発展させながら、争いがますます激しく継続されたことを物語るものであろう。

継続する争いの過程で、当初は可耕地の不足を補うためか、逆にそうした侵害に対する復讐

のためだけにおこなわれた争いが、しだいに直接的な生産欲とはかけはなれ、領域の拡大を主目的とするようになったと考えられる。水と土地を契機として開始された争いは、もはやその基礎をなした河川水系を越え、大きく地域単位のまとまりを示し始めたであろう。この間、集団間には、争いの結果にもとづいて、その優劣関係がしだいに明確になっていったに違いない。この場合、優位に立った集団は、それが土地とのつながりが深い農耕民である場合、争いに勝利したからといって、敗れた集団の成員をまるごと移動させることは基本的に困難である。結局、劣位の集団へ支配権は及んでも、土地と成員は従来のままであり、ただ剰余生産物の「貢納」と「力役」が、集団に対して義務づけられたであろう。

長きにわたった争いは、各集団内部をも大きく変えていく。かつて、集団の維持に必要であった職務機能——例えば、成員に対する懲罰、水と土地の管理、祭祀、そして紛争の解決など——を調整・代行してきた族長は、争いの過程で、まず軍事指揮権を高め、次いでさまざまの職務機能を漸次奪取して、終にはその力によって成員を抑圧するようになったと考えられる。長期化する争いが、集団内で族長の突出と、成員の相対的な従属関係を生み出すに至ったといえよう。従って、先の集団間の優劣関係つまり集団相互の支配・服属関係も、その実際は族長相互の関係として示され、族長を通じて集団を支配する方式がとられていたであろう。

各集団を次々と服属下に置き、広大な地域を支配することになった優位集団の族長すなわち首長は、配下の集団おのおのの職務機能を優位的に掌握し、集団が生み出す富を貢納の形で吸収して、唯一人、強力な人格的自由を実現していった。他方、配下の各成員は、首長の下に隷属して無権利の状態に置かれるに至ったと考えられる。首長の下には、又これら一般成員とは異なる「奴隷」が集中するようになったであろう。魏志倭人伝にも「邪馬台国」を特色づけるものとして、その記載が散見された。しかし、それは先述の一律的な隷属状況からみても成員相互の階級分化の結果とは考え難く、争いや懲罰を原因として発生し、あくまでも首長の下に独占所有される「家内奴隷」として、いまだ生産的な労働力には転化していなかったであろう。

弥生時代後期から古墳時代初頭頃、社会は以上のような状況で、首長を頂点として地域ごとの割拠状態にあり、おのおのが弥生時代以来の地域性をいまだ色濃く残していたものと考えられる。しかし、それもそう長くは続かなかった。やがて、地域間の割拠状態は打ち破られ、地域を越えた首長どうしの政治的な連合関係が生まれる。そして、連合を裏付ける実体として、前方後円墳の造営が開始された。墳墓は共同墓地内から独立墳へという傾向を顕著にし、その規模も力役の徹底を物語るように大型化する。そして前方部では、集団祭祀を奪取した結果としての、首長権継承儀礼が定着していったのであろう。しかし、この期に副葬されている鏡・玉・剣といった呪術宗教的色彩の濃い遺物の存在は、確かにその祭祀様式が首長権継承のベールに厚くおおわれ、首長を主体とするものに変様はしているものの、従来の集団祭祀と完全に決別しているとは考え難い。このことは、絶大な首長権そのものも、彼が集団的諸機能を果たす限りにおいて維持できるにすぎないことを、はからずも示していることになろう。この意味で、この段階では、首長も集団的臍帯から完全解放されておらず、したがって社会に対して独立の公権力として対立する面は、いまだ弱かったと考えられる。文明の扉は、既に施錠を解か

れてはいるが、いまなお閉じられたままであるといえよう。

さて、こうした時代背景の中で、個別守山市域に住む人々はどうした変化を示したであろうか。まず、そのことを遺跡立地からみてみよう。弥生時代前期以来、中期を通して母村的位置を占めた服部遺跡及び赤野井周辺では、この時代に至ってもその拠点的性格を堅持しながら存続する。一方、中期に始まった各水系ごとの開発は、ますます活発となる。特に境川筋のそれは著しいものがある。境川筋では、中期から継続するものとして、益須寺関連遺跡や金ケ森西遺跡がある他、新たに大門遺跡、横江遺跡、吉身西遺跡、伊勢遺跡などが出現する。こうした遺跡の広がりは、その立地からみると、より高燥な地への移動と考えられ、境川が生み出す自然堤防上へ移り住む傾向が読みとれよう。この傾向は、古墳時代後期になるとさらに著しくなり、境川筋で最も高位な現在の守山中心市街周辺に集中し、そこで大規模な集落を形成することになる。このように、遺跡の立地がしだいに高燥な地へと向かう傾向は、水田の開発自体がそうした傾向にあることの証左でもあり、湿田農耕から乾田農耕への発展に規制されて、遺跡立地そのものが変化をみせていると考えられる。ただ、服部遺跡で出土している木製農具をみると、弥生時代後期後半から古墳時代初頭のそれは、湿田ないし半湿田的な組成と形態を示しており、乾田開発に適したそれらへと変化するのは、5世紀後半以降である。たえまざる農業生産力の発展[(註13)]は、生産性の高い乾田開発をしだいに指向するようになっていたが、その完全な実施は、朝鮮半島からの北方系乾田農法の導入と、農具へ装着するに足る鉄の国内量産体制[(註14)]が確立する5世紀代を待たねばならなかったといえよう。

なお、守山市内では、弥生時代後期から古墳時代初頭に至る間、旧河道の発達が著しく、同期の遺跡を調査すると、しばしば旧河道がそれ以前の遺構を抉りながら流れているのに遭遇する。服部遺跡でも、4条の大規模な旧河道が中期の方形周溝墓を抉ってながれ、周辺には粘土が厚く堆積する。中期段階比較的安定していた野洲川が、この頃再び各所で氾濫を繰り返し、自然景観を大きく変えていったと予想される。こうした地形の不安定が、一方で、遺跡立地の高燥化に拍車をかけたのかもしれない。

方形周溝墓について

以上、我々の祖先が、この守山の地に足を踏み入れ、水稲農耕を発展させながら、その可耕地不足からやがて土地をめぐって争いを生じ、終に地域的なまとまりを示すに至る過程をみてきた。最後に、この時代の墓制について、特にこの間その盛衰をみる方形周溝墓について、思いつくまま筆を加えることにしたい。

現在、方形周溝墓の検出例はうなぎ登りの状況にあり、滋賀県下でも、既に 560基余が確認されている。そのうち守山市内では、 410基余を数える。ただ、方形周溝墓の研究自体は、莫大な資料が提示されているにもかかわらず、その数に圧倒されたかのように余り進展しているとは考え難い。それは、1つに、個々の事象にとらわれ過ぎる余り、大局的な見地からの考察がなおざりにされているためではないかと思われる。従って、ここでは、そうした狭視性を排し、弥生時代以降の歴史的性格をとらえなおすことから始めて、個々の事象を分析する指針と

したい。

古来、我々の祖先にとって、「土地」は居住のみならず、食糧その他の生活資財を無限に内蔵する「天与の一大宝庫」であった。我々の祖先は、こうした土地に積極的に働きかけ、土地に内蔵する富を獲得してきた。しかし、生産力の低い当初にあっては、諸個人毎の生産活動では、自己を維持・再生産し得るものではなく、諸個人は極めて自然な一定の組織（共同体）への直接の帰属を前提として、生産活動を展開してきたと考えられている。従って、共同体存続下では、土地に対する共同労働と共同占取が根幹をなし、共同体こそが生産・分配・所有を真に自己完結する社会単位たり得たといえる。諸個人は、共同体の一構成員として組織化されて始めて、労働主体として土地に対することができ、富の獲得を期待することができたのである。

ただ、共同労働と共同占取が支配的な共同体内においても、私的（「家族」的）労働とそれに対応する私的占取自体、極めて古い段階から見い出される所であり[注15]、共同体の内部において生産諸力がいっそうの発展をとげる結果、それに照応してそうした私的占取の契機がよりいっそう拡大されていったと考えられる。縄文時代あるいはそれ以前においても、動産の一部、例えば労働用具や植物質食料の一部について、私的労働を裏付けるかのように私的占取の拡大傾向が指適され、そのことを考古的研究によって裏付ける試みもなされている。こうした私的占取の拡大傾向は、共同労働と共同占取を旨とする共同体にとって対立する矛盾的要因であり[注16]、その放置は終局的に共同体を崩壊に導く。共同体は、私的占取の拡大傾向に共同体規制の強化を持って対峙した。そして、縄文時代以前、つまり「自然からの収奪的生産」段階にあることは、私的占取の拡大傾向そのものにおのずから限界を与え、矛盾的要因は共同体規制の強化によって解消し得る程度のものであったと考えられる。

ところが、弥生時代以降、「人間の行為に依って自然の産物を高める生産方法」つまり水稲農耕の確立は、やがてそれがもたらす剰余生産物の恒常的確保、即ち富の蓄積を実現する。富の蓄積は、そのとり方をめぐって、共同体内に埋没してきた「家族」形態を変革するのみならず、共同体内での「家族」の自立を、従来にない力強さで喚起する。それは、共同体存続の根幹をなす共同労働と共同占取に対抗して、私的（「家族」的）労働と私的占取を飛躍的に発展させ、ついには水稲農耕の母胎であり、かつ共同体成立のいわば物質的土台でもある土地そのものの私的占取すら指向し始めたと考えられる。「共同体によって共同に占取された土地のまっ只中に、しかもそれにまさしく対立して、私的に占取されたもろもろの土地が形づくられ始め」たのである。「家族」は、共同体内で古い共同体秩序に裂け目をつくり、共同体に対する脅威[注17]となって抬頭してきており、もはやその矛盾は共同体規制の強化によっても解消し得るものではなくなってきている。こうした、共同占取と私的占取の二律性によって示される、高度に発達した共同体が「農業共同体」である。従来、この社会形態は、その概念をあまり歴史的に踏まえることのないまま考古的事象と即結されて、安易に使用される傾向にあったが、本来、農業共同体は、共同体の成長過程において、水稲農耕との関連で現出する優れて質的な歴史概念であるといえよう。

従って、水稲農耕の導入とともに始まる弥生時代は、旧い共同体が解体し、やがて農業共同

体へと発展する歴史的段階として位置付けられる。弥生時代に属す考古的事象は、基底にそうした歴史的性格が脈打っており、それに規制されながら、その下で、地域に根ざした個性を発展させていたと考えられる。その事を、墓制、特に最も弥生時代的な墓制と考えられる方形周溝墓を通してみてみることにしよう。

方形周溝墓は、その形態上、溝が完全に回るもの、陸橋部をもつもの、溝を共有し連接するもの等、種々の偏差を含む極めて複雑な様相を呈している。しかし、そうした様相を越えて、それらがともに墓壙を区画するという共通の意図に基づいて掘開されていることに留意すべきであろう。方形周溝墓も、周溝を撤去すれば、木棺墓・土壙墓という他の墓制に変様してしまう。つまり、方形周溝墓が方形周溝墓たる所以は、墓壙にあるのではなく、墓壙を区画している溝にあるということができ、そこに方形周溝墓の第一義的な意味を見い出し得るといえる。この溝によって墓壙を方形に区画する習慣は、個性的な発展をとげている各地域社会を越えて、弥生社会に共通してみることができるばかりか、それ以前の縄文社会には確認されない事象でもある。しかも、方形周溝墓は、それが単独で存在することは珍しく、複数の方形周溝墓、あるいは木棺墓・土壙墓といった他の墓制を介在させて、集団墓の形をとるのが通常である。墓が群在して共同墓地を形作るこうした習慣は、縄文社会以来の古い伝統を引き継ぐものでもある。方形周溝墓にみる、このような新しい様相と古くからの伝統的な様相は、先の弥生社会に与えられた歴史的性格をふり返る時、極めて興味深い考古的事象であるように思われる。

弥生時代に始まる水稲農耕は、かつて共同体内に埋没を強いられてきた「家族」の自立を喚起し、共同体内で共同占取に対抗する私的（「家族」的）占取を大きく発展させることになり、ついには共同体存続の母胎をなす土地そのものの私的占取すら指向するようになっていた。このことが埋葬観念にも反映し、従来共同体が占取してきた共同墓のまっ只中に、個々の「家族」が「家族」単位に墓壙を区画し、区画内を占取し始めたと考えられる。その表徴が方形周溝墓であるといえよう。ただ、それは、あくまで共同墓地内での現象であって、共同墓地から突出して独立墓的なあり方を示すまでにはいたっていない。方形周溝墓の出現は、土地占取関係の発展を反映して、「家族」単位の墓域を可視化するに至っているが、いまだ共同墓地内にあって共同占取から完全に自立していないことを物語っている。このように、方形周溝墓は、この時代の土地占取形態にみる共同占取と私的占取の二律性を最も良く示す墓制であるということができよう。このことが、例えば方形周溝墓から出土する供献品や副葬品にも影響を与え、土地占取のあり方に規定される形で、共同体的なそれと家族的なそれを二律的に発展させていたと考えられ、両者の役割分担がなされていた可能性も考えられる。

近年、方形周溝墓を扱った報告書や論文の中には、複数の方形周溝墓を１単位とするグルーピングを行っている例が散見され、方形周溝墓の構築順序を追認する試みがなされている。それによれば、各単位が直線的な成長を示すもの、ブロック状に群居するものの両者を基本として、いくつかのタイプが存在するようである。この事象は、共同体が占取する共同墓地内が、墓地設定の当初から、原則として各「家族」単位に大きく区分けされており、「家族」はその区内で、計画的に次々と方形周溝墓を構築していった可能性が考えられる。従来、方形周溝墓

を新たに構築する契機としては、「家族」内の主である族長の死が考えられてきた。しかし、主体部の明らかなものに限っても、単葬墓形式のものが多く、多葬墓であってもその数が当時の「家族」構成員に比べて少ない傾向のものが多い現在、方形周溝墓構築の契機については、もう少し柔軟性をもって考えても良いように思われる。つまり「家族」に与えられた区分けがなお広く残っている場合には、族長以外にも各成員の死を契機として構築されることもあり得た一方で、区分けの面積がわずかともなれば、やむなく1基の方形周溝墓に、族長の死とは関係なく多葬される事もあったのではないかと考えられる。それは、当時、「家族」内に占める族長の地位がいまだ微弱であったこととも関連するのであろう。ただ、多葬される場合も、その方形周溝墓の区画内が、1「家族」によって世襲され、永続的な土地占取へと転化していったとは考えられない。この段階では、各「家族」は、共同墓地の一画を分与され、その中に方形周溝墓を構築して一時的な土地占取を実現しながらも、次々と移動するのが常であった。墓地の終局的な占取は、あくまで共同体に委ねられていたと思われる。

さて、弥生時代の墓制には、方形周溝墓のように溝によって区画されることのない墓制も多い。木棺墓、土壙墓、各種土器棺墓などがそうである。土器棺墓は、少くとも近畿地方の場合その使用は限定的であり、胎児及び小児用に限られて、それのみで墓域を構成することはない。もっとも、こうした土器棺には、底部ないし下腹部に穿孔を受けている例が多く、方形周溝墓の供献土器との関連で注目されて良い。木棺墓や土壙墓は、方形周溝墓の主体部の主要な構成要素でもある。ただ、周溝によって区画されることがない点で大きく異なる。従来、こうした墓制と方形周溝墓が同一の遺跡から発見される事例も多いことから、被葬者の階層差——共同体内における「家族」間の差ないし「家族」内の差——と考えられてきた。しかし、一方では、服部遺跡のように莫大な数の方形周溝墓にもかかわらず、他の墓制が1基も介在しない例もある。このことは、方形周溝墓と他の墓制の相異を、一律に被葬者相互の階層差とする従来の見解に疑問をいだかせずにはおかない。両者の相異が、区画・無区画にあることを考えると、無区画の墓制にも、考古的事象としては表われにくい形で、例えば土塁や小さな柵のようなもので、あるいは個々の「家族」の意識下で、本来区画されていたのではないかと考えることもできる。又、当初より方形周溝墓以外に区画する習慣はなくとも、土地に対する私的占取の萌芽期でしかないこの時代、そうした占取観念自体いまだ混沌としたものであって、方形周溝墓が墓制の中で唯一私的占取を可視化しているからといって、このことがそのまま階層差を明示していることにはならないという理解も成り立つ。その場合、服部遺跡の例は、共同墓地に対して私的占取の観念が、各「家族」総体として強力に意識された結果に過ぎず、被葬者のすべてが優位な階層に属していたとは限らないことになる。逆に、共同墓地が木棺墓や土壙墓という無区画墓だけで構成されているからといって、すべての被葬者が劣位の階層に属していたとも考え難い。ただ、共同墓地に対する私的占取の観念が、余り働かなかったに過ぎないことにもなろう。今後、さらに検討を加えるべき課題である。

いずれにしても、方形周溝墓という墓制が、弥生時代の各種墓制のなかで、当時の歴史的性格を最も良く体現した考古的事象である点はゆるがない。本稿では墓制に限って述べてきたが、

それ以外の居住域や水田（生産）域にも、同様に当時の歴史的性格が反映しているはずである。ここでは、そうした方面にまで稿を進める余裕はないが、例えば居住域において、集落をめぐる環濠に対して、集落内で住居址群がいくつかのブロックとしてグルーピングできる場合などは、その事を示唆していると考えられる。又、水田域については、灌漑用水路に対する、1枚ごとの水田の関係が留意される。ただ、水田域の場合、それが直接生産と結びつく事象であるだけに、墓域や居住域に増してその意味は大きい。おそらく、当時、1枚ごとの水田は、各「家族」単位に共同体によって一時的に分与され、各「家族」ごとにある程度自立的な経営が行われていたと考えられる。ただ、経営上ある程度自立的たり得たからといって、それが、同時に、生産単位を示すのではない。生産の根幹をなす水田及び治水施設の開発・維持は、個々の「家族」毎に自己完結し得るものではなく、それらを包括した共同体さらには共同体連携によって始めて可能となったであろう。したがって、水田の終局的な占取はあくまで共同体にあり、「家族」はその一部を一時的に分与され、ある程度自立的な経営をゆるされていたに過ぎない。分与される水田自体、原始的平等を維持するために、定期的に割り変えされていた可能性すら考えられる。分与される水田の優劣が、その世襲化に伴ってやがて「富」の格差を生み、共同体を内面から打ち崩すことにもなるからである。

さて、弥生時代中期以降、水と土地を契機として、やがて争いが恒常化したと考えられた。争いは、その性格上、各「家族」内で男性の女性に対する相対的な優位を生み、一方で既述のように争いを指揮する族長の権限を高めたであろう。そのことが、方形周溝墓にも少なからず反映しているものと考えられる。弥生時代中期以降、古墳時代前期に至る間に、性別の明らかになった方形周溝墓被葬者を概観すると、女性に対し男性の厚葬化が識別できないだろうか。一方、族長層の優位性が方形周溝墓群内で、その位置・規模・形態上の格差として表出してきてはいないだろうか。服部遺跡で、調査区南端から検出された弥生時代中期末の方形周溝墓群は、その中央に1辺20m前後の大規模な1ないし2基を配し、周辺に1辺10m余の十数基が散在している。中心のそれは、周溝の内周を方形に、外周を円形に掘り込む傾向にあり、その点でも周辺の方形周溝墓と異なる。弥生時代後期から古墳時代前期にかけて、格差はさらに進行し、終に共同墓地をぬけ出して独立墓をいとなむものがあらわれる。それは、共同占取に対する私的占取の突出現象として注目されるが、副葬品に示される様相は、いまだ共同体的祭祀から完全に決別しているとは考え難かった。おそらく、独立墓そのものも、共同占取の臍帯を引きずるものであっただろう。ともかく争いの過程で優位に立った族長は、広大な地域を支配下に置く首長として独立墓をいとなむに至ったが、他方、配下の共同体成員は、古墳時代になっても、旧来とさして変わらぬ方形周溝墓を、延々と共同墓地内で構築し続けていた。守山市内に限っても、小島遺跡、赤野井遺跡、金ヶ森西遺跡、伊勢遺跡などで、同期の方形周溝墓が確認されている。おそらく、弥生時代以来の共同占取と私的占取が、共同墓地内で二律的に展開していたものと考えられる。そして、この関係がさらに発展するには、もう少し時を要した。

5世紀代に始まる鉄の国内量産体制は、北方系乾田農法の導入と一体となって、鉄製農耕具を広く普及させることにもなった。それは、しだいに共同体内の各「家族」に浸透し、「家族」

的個別経営が著しく成長していった。水田を始めとした土地に対する共同占取と私的占取の関係も逆転し、私的占取の優位の下、共同占取はもはやその形骸を留めるに過ぎなかったと考えられる。この頃、有力となった「家族」の墓制として、群集墳が構築され始める。群集墳も方形周溝墓に類して群集するが、それは横穴式石室の形態が示すように世襲を意図しており、「家族」ごとの永続性を帯びた土地占取へと転化しているものと考えられる。方形周溝墓から群集墳への変遷の背景には、土地占取観念の大きな発展を読み取ることができるであろう。そして、両者の間隙を埋める墓制として、近年平野部を中心に検出例の相次ぐ〝方形・円形周溝状遺構〟がある。方形周溝墓の発展形態として、かつ又、群集墳に連なる形態として、今後留意すべき墓制であるといえよう。

以上、土地占取のあり方を基軸として、極めて荒削りな形で方形周溝墓をとらえ返してみた。その結果、方形周溝墓は、水稲農耕がもたらした土地の共同占取と私的占取の二律性を明確に示し始めた、初源期の墓制としての歴史的性格を担い、それがそのまま一系的な発展形態であるとは考えられないが、のちの〝方形・円形周溝状遺構〟や群集墳への系譜が考えられた。今後、読者諸賢の御批判をあおぎながら、具体的な資料検討に役立てて行きたいと思う。

（谷口　徹）

註

(1) 谷口　徹「おわりに」(『湖南中部流域下水道矢橋処理場中間水路浚渫工事予定地内埋蔵文化財試掘調査報告書Ⅰ』滋賀県教育委員会　1980)

(2) 丸山竜平「琵琶湖底に眠る水没遺跡を探る」(『えとのす』　1975)

(3) 水野正好『大中の湖南遺跡調査概要』(滋賀県教育委員会　1968)

(4) 潮見　浩「中・四国縄文晩期をめぐる二、三の問題」(『日本考古学の諸問題』考古学研究会　1964)

(5) 「日本の稲作の起源」(『歴史公論』1．1982)

(6) 井上　清『日本の歴史』上巻 (1963)

(7) 佐原　真「農業の開始と階級社会の形成」(『岩波講座日本歴史』1．1975)

(8) 工楽善通「西日本の水田遺構」(『考古学研究』114．1982)

(9) 高谷好一、前田成文、古川久雄「スマトラの小区画水田」(『農耕の技術』4．1981)

(10) 大橋信弥「守山市服部遺跡出土の磨製石剣について」(『滋賀文化財だより』28．1979)

(11) 丸山竜平「弥生時代から古墳時代へ」(『古代研究』12．1977)

(12) 岩崎貞也「湖東における高地性集落の調査」『滋賀文化財だより』68．1982)

(13) 谷口　徹「三・四世紀の木製鋤」(『滋賀文化財だより』28．1979)

(14) 飯沼二郎『日本の古代農業革命』(1980)

(15) ここでいう「家族」は、現在の単婚小家族とは異なり、幾組かの血縁的な小家族の結合体としての大家族を意図したもので、しばしば「世帯共同体」という用語で説明されているものに相応する。ただ、「共同体」は、既述のように、本来、生産・分配・所有を自己完結する完全な経済

整体であると考えられる。従って、「共同体」の中に、さらに複数の「世帯共同体」が存在するという図式は、不可解である。ここでは、とりあえず家族に「」を付して、その意に変えたい。

(16) 佐々木藤雄「原始共同体の陥穽」(『異貌』1号. 1973他)

(17) 大塚久雄『共同体の基礎理論』

参考文献

(1) 『守山市史』(守山市史編纂委員会 1974)

(2) 小林健太郎「Ⅰ. 地形と地質」(『草津市吉田の条里景観遺存地区の歴史地理学的調査報告』滋賀県教育委員会 1974)

(3) 辰己 勝「二. 野洲川下流平野の地形」(『五之里遺跡発掘調査報告』滋賀県文化財調査年報 1976)

Ⅲ．調査の経過―日誌抄―

Ⅰ．第Ⅰ次調査（1978年３月３日～３月31日）

３月３日（金）曇

県道北側の田地にトレンチＴ－１（旧ＮＴ－１）を設定して、バックボウによって掘削を開始、耕土層、床土直下の黄灰褐色砂質粘土層では、若干の遺物が出土するが、遺構の検出には至らなかった。

３月４日（土）曇

○ユンボの侵入不可能のため、Ｔ－16は、手掘りで掘削を開始する。床土直下において近・現代の陶磁器片十数点が認められる。

○Ｔ－１の南壁沿いをユンボで深掘りを行なったところ、地山と思われる灰黄色粘土層を検出。

３月６日（月）晴

○Ｔ－１全面をユンボにて更に掘り下げ、灰黄色粘土層で遺構の検出をすすめる。若干のピット、溝を検出。

○遺構検出状況の写真撮影完了。

３月７日（火）晴

○Ｔ－１の遺構掘り下げ、ＳＤ３は比較的深く、上層より土師器片、下層より須恵器片を多量に検出する。

○Ｔ－１　西壁断面及びＳＤ３断面実測完了。

○Ｔ－７・８・９を設定し、ユンボにて掘削開始、黄灰色粘土層の遺構面まで掘り下げる。ピット及び数条の溝跡を検出した。

３月８日（水）晴

○Ｔ－１の全体を清掃して写真撮影を完了。

○Ｔ－７、Ｔ－８の遺構検出、写真撮影。

○Ｔ－16を引き続きユンボにて掘削、トレンチ北側に黒色土の落ち込みあり、古式土師器片を多量に含有する。

３月９日（木）曇

○Ｔ－16　ユンボにて第Ⅱ層の掘削完了。

○Ｔ－23では、耕土層及びⅡ層をユンボにて掘削を行なった。トレンチ北東部に地山面が確認

されるが、南西部は、厚い攪乱土におおわれる。これを除去したが、遺構は確認されなかった。
○T－23の北方に接してT－24を設定、ユンボにて遺構面まで掘削を行なう。遺構面の残りは良く、多数のピット、溝跡等を検出。
○T－1　平板実測（1／100）、1／20実測。

3月16日（木）曇
○T－1　1／20実測完了
○T－9の遺構検出、写真撮影を行なう。
○T－16では遺構面まで掘削完了。多数のピット、溝跡を確認、特に北東隅に広がる三角状の溝跡は、多量の古式土師器片を包含すると考えられる。
○T－24の遺構検出。
○T－24の北側に設定したT－26の遺構検出を開始する。北東から南西へ走る大きな溝跡（SD66）は、出土遺物より古墳時代前期と考えられる。

3月17日（金）曇時々雨
○T－24・25の両トレンチの遺構検出を完了し、写真撮影を行なう。
○T－16の遺構検出、古墳時代前期の溝跡と同時期の柱穴が多数切り合っている模様。

3月18日（土）曇時々雨
○T－16の遺構検出完了、全面を清掃して写真撮影完了。
○T－25の遺構掘り下げ開始。

3月20日（月）晴
○T－25のピット及びSK23・24の掘り下げ完了。SK24はその掘り方より井戸跡と考えられる。
○T－7のSD14及びSD15を掘開、遺物は皆無。
○T－7・8・9の平板実測（1／100）を完了。

3月21日（火）晴
○T－24の遺構掘り下げ、ピット、溝跡が多数切り合って存在する。
○T－25のSK23・24の平面実測（1／20）。

3月22日（水）曇のち雨
○T－25　SD63の第Ⅰ層掘り下げ開始。
○T－24の全面を清掃し、写真撮影を行なう。

3月23日（木）曇

○T－24の割り付け、平面実測（1／20）

○T－25ではSD63の第Ⅰ層（黒褐色粘質土層）を掘開、古式土師器片を多量に含有していた。

3月24日（金）曇のち雨

○T－24　平面実測（1／20）を完了し、レベルの記入を行なう。

○T－25の平面実測図にレベルを記入。全面を清掃し、写真撮影を完了。SD63の第Ⅰ層除去後、50cm巾で深掘し、セクションの観察を行なう。

○T－16　遺構掘り下げ開始。

3月25日（土）晴のち曇

○T－16　ピット及びSD32・33の掘り下げ完了、割り付けを行ない、平面実測（1／20）。

○T－24・25　両トレンチの断面実測完了。

○T－8の遺構掘り下げ開始。

3月26日（日）晴

○T－8の遺構掘り下げ完了、全面の清掃をし、写真撮影。

○T－16の北東に三角状に広がるSD34の掘り下げを行なう。深さ0.8mの大きなもので古式土師器を多量に含む。

○T－25のSD63の断面実測。

3月27日（月）曇

○T－16のSD34の掘開完了、平面実測（1／20）及びレベル記入。SX2を掘り下げたところ須恵器片が出土。

○T－8　断面実測完了。トレンチ設定図(1／500)の作成。

3月28日（火）曇のち雨

○T－9のSD19を西壁に沿って1m巾を深掘りしたところ、溝肩部で布留期の高坏・甕と共に有孔円板4個が出土する。直ちに、平面実測（1／10）及び写真撮影を行なう。

○T－25ではSD63の断面図作成完了。

3月29日（水）晴

○昨日、T－9の、SD19より出土した有孔円板等の平面実測（1／10）を完了し、レベル記入。

○T－16では溝等のレベル記入。

3月30日（木）曇のち晴

○Ｔ－９の全面を清掃し、写真撮影。

○Ｔ－16　溝等の断面図作成。

3月31日（金）晴

○Ｔ－９　平面実測（１／20）を完了し、レベル記入。資材を徹収して、現地調査を完了する。

（別所健二・大橋美和子）

２．第２次調査（1978年11月15日～1979年２月５日）

11月15日（水）曇

○資材搬入及びテントの設置、前回調査したＴ－１に接して、巾10ｍ、長さ20ｍのトレンチＴ－２を設定。

ユンボにてＴ－２の掘削開始。耕土層、灰黄褐色粘質土（床土）、灰黒色粘土層等を除去した後、地山と思われる黄褐色土層が現われ、遺構としては、溝状遺構を検出、遺物も若干含まれる。

11月16日（木）晴

○Ｔ－２の遺構掘開々始。須恵器・黒色土器・土師器等が出土する。

○Ｔ－２の東壁面の断面図作成。

11月18日（土）晴

○Ｔ－２の溝掘開続行。

○Ｔ－２の北方10ｍの地点にＴ－３を設定し、ユンボにて掘削、地山確認の為、北壁に沿って１ｍ巾深掘りを行なう。

11月20日（月）曇時々雨

○昨日の雨の為排水作業。Ｔ－２　北壁の断面実測完了後、全面の清掃を行ない写真撮影。

○Ｔ－３　遺構検出。

11月21日（火）晴

○Ｔ－３の溝ＳＤ６～ＳＤ８の掘開続行。ＳＤ６より若干の須恵器・土師器片が出土。

○Ｔ－３の北方に10ｍ×20ｍのトレンチＴ－５を設定し、ユンボにて掘削開始。

11月22日（水）晴

○Ｔ－５　ユンボにて黄褐色土層の地山まで掘り下げを行なったが、遺構及び遺物は皆無であ

った。念の為、北壁に沿って１ｍ巾の深掘りを行なったが、遺構無しと判断する。
○Ｔ－２の平板実測（１／100、１／50）を完了し、レベルを記入。ＳＤ３、ＳＤ４断面図作成。
○Ｔ－３・Ｔ－５の中間地点に10ｍ×18ｍのトレンチＴ－４を設定、耕土直下よりスキ跡検出。

11月23日（木）晴
○Ｔ－３の壁面実測を完了。

11月24日（金）晴
○Ｔ－３　平板実測（１／100、１／50）を完了し、レベルを記入。
○Ｔ－５　壁面実測。
○Ｔ－４　ユンボにて第Ⅲ層下の黄灰褐色砂質土層まで掘り下げ、溝を検出した。

11月25日（土）晴
○Ｔ－４の巾を５ｍより10ｍに広げる。北東から南西に走る溝跡３本を検出、遺物若干出土。
○Ｔ－５の壁面実測完了。

11月28日（火）曇
○前回調査したＴ－16の北側にトレンチＴ－17を設定、ユンボにて掘削開始。
○Ｔ－４　午前中排水作業、午後より遺構の掘り下げ。

11月29日（水）曇時々雨
○Ｔ－４　遺構掘開完了。
○Ｔ－17のＳＤ38は、前回調査のＴ－16、ＳＤ34の続きと思われ、黒褐色粘土層が厚く堆積し、古式土師器片を多量に含む。ＳＤ38を切って走るＳＤ35、ＳＤ36の掘り下げ続行、若干の遺物を含む。
○Ｔ－17の北側に接してトレンチＴ－18を設定し、ユンボにて掘削開始。

11月30日（木）曇時々晴
○Ｔ－４の壁面及び溝の断面図作成完了。
○Ｔ－17　ＳＤ35、ＳＤ36の掘り下げ完了。
○ユンボにてＴ－18、Ｔ－19の掘削、遺構検出。

12月１日（金）晴
○Ｔ－４の全面を清掃し、写真撮影完了。
○Ｔ－17のＳＤ35、ＳＤ36の平板実測及びレベル記入を完了、南壁断面図作成完了。
○ユンボにてＴ－28の掘削開始。

12月4日（月）曇

○T－28の遺構検出。溝・ピット及び竪穴住居址（？）を検出。特にSD70は、南東から北西に走る大きな溝跡で、古墳時代前期の遺物を多量に含む。

○T－19の北側に接してT－20を設定し、ユンボにて掘削開始、遺構検出。

12月5日（火）

○T－20の北側に隣接してT－21を設定、ユンボにて掘削開始。

○T－4　平板実測（1／100、1／50）完了、レベル記入。

○T－28　住居址SH3は、2m×2mの小型で、黒褐色粘質土の下に炭化物の層が堆積。住居址又は土拡の可能性も考えられる。若干の遺物を検出。

12月6日（水）晴

○T－28の溝掘り下げ後住居址SH4を掘り下げる。一応柱穴は、残っているが、浅いものである。又、トレンチ東側のSH5は、残りの良い柱穴を有するが、炭化物、遺物等は認められない。SH3の断面図作成完了。

12月7日（木）晴

○T－28　遺構掘り下げ続行、SD70の断面図作成完了。

12月8日（金）晴

○T－28　遺構掘り下げ完了。全面の清掃を行い、写真撮影。

○T－26　溝跡・ピット等の掘り下げ。

12月9日（土）晴

○T－28の東壁断面図作成、平板実測(1/50)完了。

○T－26　方形周溝墓の残骸と考えられる溝跡を掘り下げるが、遺物は皆無。SD66は多量の古式土師器片を含む。

12月11日（月）曇時々雨

○T－28の壁面実測完了。

○T－26　遺構の掘り下げ完了、全面を清掃し、写真撮影。

12月12日（火）晴

○T－28　平板実測（1／100）完了。レベルの記入。

○T－26　壁面実測完了。

○T－21のSD51は、T－20、SD51より続くもので、T－21の北側に向かって流れており、

砂層となって広がる。弥生土器、古式土師器片を多量に含む。他にピット多数を検出。

12月14日（木）晴

○T－20の北半分は、黒褐色粘土層でおおわれている。南側の溝等を掘り下げる。

12月15日（金）曇

○T－20　SK19を掘り下げる。古式土師器片を多量に含み、炭化層も検出される。

○T－20のSD51を約30cm全面に掘り下げたところ、地山を検出、精査したところ井戸跡とも考えられる円形の土坑が現われる。

○T－21　SD53の平板実測（1／100、1／50）完了。レベルを記入。

12月16日（土）晴

○T－26　平板実測（1／100、1／50）完了。レベル記入。

○T－20　遺構の掘り下げ続行。

12月18日（月）晴

○T－20の全面を清掃し、写真撮影。

○T－21　平板実測（1／100、1／50）完了。レベル記入。

○T－19　遺構の掘り下げ開始。

12月19日（火）曇

○T－21　壁面実測完了。

○T－20　平板実測（1／50）完了。レベル記入。

○T－19　遺構の掘り下げ開始。SD42より炭化物の層を検出。

12月20日（水）雪

○T－19　多数のピット・小溝等掘開。T－18より続くSD42には、多量の遺物含有。平板実測（1／100、1／50）完了。

○T－18　遺構掘り下げ開始

12月22日（金）曇

○T－19　SD42をおおう炭化層の写真撮影完了後、さらに掘り下げる。全面を清掃し、写真撮影。

○T－18　溝・土坑等の掘り下げ続行。SD41には、多量の遺物含有。SK16は、黒褐色粘質土下に、赤褐色の焼土が10cm巾で堆積、遺物を少量検出。SK17は、黒褐色粘質土下に薄い炭化層が堆積、多量の古式土師器を検出した。

12月25日（日）晴

○T－17　6m×6mの竪穴住居址の残徴を検出。残念ながら、削平されている為、残存度は非常に悪く、わずかに溝・柱穴が認められる。

12月26日（火）晴

○T－18の全面を清掃し、写真撮影。

○T－17　竪穴住居址掘り下げ。

12月27日（水）晴

○T－19・T－20　両トレンチの壁面実測。

○T－17　竪穴住居址の掘り下げ完了。SK15より受口状口縁甕出土。

12月28日（木）晴

○T－18　SK17出土土器の平面実測（1/10）完了。

○T－20　溝等の断面図作成。

○T－17　竪穴住居址の写真撮影完了。SD38掘り下げ続行。

1979年1月8日（月）晴

○T－21の平面実測（1／20）完了。

○T－17の竪穴住居址の平面実測（1／20）。

○T－26の北側に隣接してT－27を設定、ユンボにて掘削開始。

1月9日（火）晴れ

○T－17のSD38掘り下げ続行。多量の古式土師器片を検出。又、溝底より、完形の木製鍬が出土した。

○T－20　SX5底より、杭列検出。SX5は、井戸の可能性がある。しかし、杭列は、井戸よりも溝と関係するものか。

○T－27　ピット・溝・土坑等多数検出。

1月10日（水）曇

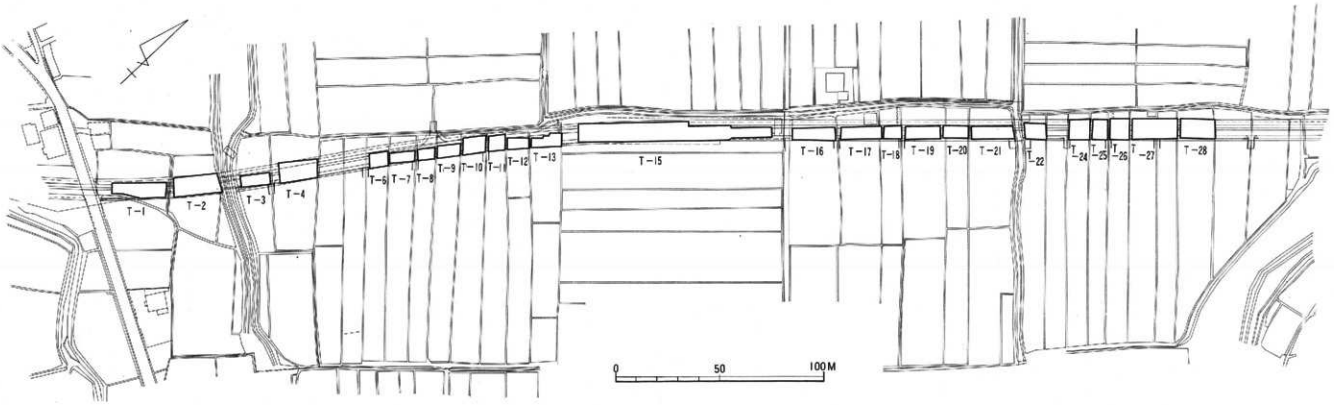
○T－16　SD34掘り下げ完了。鍬の写真撮影。

○T－27　遺構検出、トレンチ北西側の溝は方形周溝墓の一部と考えられる。

○T－12・T－13を設定し、ユンボにて掘削開始。

○T－20　SX5内の杭列の写真撮影。

1月11日（木）


T-1
T-2
T-3
T-4
T-5
T-6
T-7
T-8
T-9
T-10
T-11
T-12
T-13
T-15
T-16
T-17
T-18
T-19
T-20
T-21
T-22
T-24
T-25
T-26
T-27
T-28
0
50
100M

第3図 トレンチ設定図

○引き続きＴ－12の南側に隣接してＴ－10・Ｔ－11を設定。ユンボにて掘削開始。
○Ｔ－27　遺構掘り下げ開始。

1月12日（金）曇
○Ｔ－27の遺構掘り下げ。
○Ｔ－12・13の両トレンチの遺構検出。ピット多数、溝等を検出。

1月13日（土）曇時々雨
○Ｔ－13の遺構掘り下げ続行。
○Ｔ－６を設定、ユンボにて掘削開始。

1月16日（火）晴
○Ｔ－17の平板実測（１／50）完了。レベル記入。

1月19日（金）雪
○Ｔ－27のＳＤ66掘り下げ完了。須恵器を若干含む。

1月20日（土）晴
○Ｔ－27の全面を清掃し、写真撮影。
○Ｔ－12・13　両トレンチの遺構掘り下げ開始。

1月22日（月）曇
○Ｔ－27の平板実測（１／50）完了、トレンチ壁面観察。
○Ｔ－12の遺構掘り下げ完了。
○Ｔ－11の遺構検出、ピット多数。

1月23日（火）晴
○Ｔ－27の割り付け、平面実測（１／20）完了。
○Ｔ－11の遺構掘り下げ完了。

1月24日（水）晴
○Ｔ－27の壁面実測完了。レベル記入。
○Ｔ－11・12・13及びＴ－17の全面を清掃し、写真撮影完了。

1月25日（木）晴
○Ｔ－12・13の平板実測（１／50）完了。

○T－10のＳＤ20、ＳＤ21の掘り下げ開始。東から西に平行して流れており、出土遺物より時期差は認められない。

1月26日（金）曇

○T－13の平面実測（1／20）。

○T－11・12の平板実測（1／50）完了、平面実測（1／20）を完了。

○T－10のＳＤ20、ＳＤ21の掘り下げ続行。古式土師器を多量に検出。

1月27日（土）晴

○T－13の平面実測（1／20）完了。

○T－11・12・13の壁面実測及びレベル記入を完了。

○T－10の溝掘り下げ続行。

1月31日（水）晴

○前日の雨の為、一日中排水作業。

2月2日（金）曇

○排水作業

○T－10　ＳＤ20掘り下げ続行。

2月3日（土）晴

○T－6の排水作業。排水の為側溝を掘る。

○T－10のピット及び溝等の掘り下げ完了。平板実測（1／100、1／50）及びレベル記入完了。

2月5日（月）曇後雨

○T－6の平板実測（1／100、1／50）及びレベル記入完了。溝ＳＤ14より受口状口縁甕検出。

○T－6・10の全面を清掃し、写真撮影完了。

○調査完了、機材撤収。

（大橋美和子）

3．第3次調査（1980年3月1日～3月31日）

・3月1日：資材運搬。トレンチ設定。トレンチは、工事範囲一ぱいの10m幅を計画したが、東側では、両側辺が附帯工事による破壊のため調査不可能とわかる。従って、東端は5m幅のトレンチとし、西へ向かうにしたがって漸次幅を広げる計画に変更する。遺構検出面までの掘削は、バックホーを利用する。バックホーの爪先には、鉄板を取り付ける。さっそく掘削開始。耕土・床土直下に黄灰褐色粘土の地山を確認し、この面で広げる。

・3月2日：基準杭・ベンチマークを、当調査区の近くへ移動する。

・3月3日～3月4日：掘削継続。トレンチ両側には、土層確認と排水のための側溝を掘る。トレンチにそってほぼ中央には、かつて当地に構築されていたハウス施設のコンクリート基礎が確認され、その施設に伴うと考えられる撹乱が随所で露呈する。遺構として、若干のピットの他、南北に走る溝1条（SD29）を確認する。

・3月5日～3月9日：附帯工事による破壊が少なくなったため、トレンチ幅を7m、次いで10mにする。ただ、排土面積が限られるので、南半を先に調査し、南半終了後、北半を調査する分割調査の方式に変更する。南半の調査の結果、ピットが数ケ所で群在しており、内1群では2間×1間以上の小規模な掘立柱建物が建っていたものと考えられる。各ピットの色調は、大きく3様に識別することが可能なようである。溝は、やはり南北に流れるもの4条（SD25～SD28）を確認する。その他、不定形な若干の土坑が検出された。ピット及びSD28については、平面略図用の平板図（1／100）作成後、掘開する。他の遺構は、工事の過程で破壊されることがないため、遺構確認に留める。

・3月10日～3月14日：南半で検出した各遺構の写真、平面実測（1／20）を行なう。その後、遺構及び遺構面の保存を計るため、山砂を南半均一に約30cm余充填する。

・3月15日～3月17日：北半に積み上げられた排土を、バックホーで南半掘削部に移動し、北半調査の準備をする。この間、基準杭の逃げ杭を、周辺の水田5ケ所に移し、あわせて、水田畦畔や道路等を加えたトレンチ設定平板図（1／500）を作成する。

・3月18日～3月24日：北半の調査を開始する。若干のピットの他、南半につながる溝4条（SD25～SD28）、土坑若干を検出する。遺構の平面略図（1／100）作成。SD26・SD25については、土器の包含が予想されたため、時期決定及び一括資料の確保の目的で掘開する。予想通り多量の土器が出土する。又、掘開の結果、両溝とも南に広がる微高地から北への流路を保つ溝であることが明らかとなった。他の3条の溝も、同様の流路を保つものと考えられる。その他、土坑1例（SK8）についても掘開し、おのおの断面観察（1／20）を行なう。

・3月25日～3月27日：北半全体を清掃し、写真撮影。平面実測（1／20）を行なう。

・3月28日～3月31日：北半にも南半同様に遺構保存のための山砂を充填し、南半に積み上げた排土を埋めもどす。資材撤去。現地調査終了。

（谷口　徹）

Ⅳ. 遺　　構

三次にわたる調査で検出した遺構は、総数で129ヶ所をこえるが、その大部分は自然流水路とみられる溝跡で、およそ73条を数え、明確な遺構としては、方形周溝墓２基、竪穴住居址５棟、掘立柱建物６棟、土坑26基、その他性格不明遺構６ヶ所、そしてピット多数である。このうち、土坑・ピットについては、後述するように、本遺跡がおそらく野洲川の氾濫によって、かなりの削平を受けているとみられ、竪穴住居址の残骸の可能性が高い。時期としては、一部で奈良・平安時代の遺構がみられるが、大部分が古墳時代前期のもので、後述のように、遺物では弥生中期～後期のものが若干みられる。なお調査が三次にわたり、トレンチ番号・遺構番号に統一性がなくなるため、報告書では、すべて通し番号を付すこととした。ただし調査時の番号で一部報告したものもあり、対照表を作成して、混乱をさけることとした。(注1)

１．溝　　跡

上述のとおり、73条にのぼる溝跡を検出したが、大部分が自然流水路とみられる。ただし、人工的に掘削されたものも若干認められ、集落内の排水用に設けられたものと考えられよう。次にその概略を解説しておきたい。

ＳＤ１　調査区の南端、Ｔ－１で検出した小さな溝で、東から西へ直線的に流れる自然流水路である。幅45ｍ、深さ６㎝を測り、およそ２層に区分される。出土遺物はなく、削平のためか西側では検出できなかった。

第４図　新旧遺構番号対照表

新トレンチ番号	旧トレンチ番号	新遺構番号	旧遺構番号
Ｔ－１	ＮＴ－１	ＳＤ１ ＳＤ２ ＳＤ３	ＳＤ１ ＳＤ２ ＳＤ３
Ｔ－２	ＳＴ－１	ＳＤ３ ＳＤ４ ＳＤ５	ＳＤ２ ＳＤ１ ＳＤ３
Ｔ－３	ＳＴ－２	ＳＤ６ ＳＤ７ ＳＤ８	ＳＤ２ ＳＤ１ ＳＤ３
Ｔ－４	ＳＴ－３	ＳＤ９ ＳＤ10 ＳＤ11 ＳＤ12	ＳＤ４ ＳＤ３ ＳＤ２ ＳＤ１
Ｔ－６	ＳＴ－17	ＳＤ13 ＳＤ14	ＳＤ２ ＳＤ１
Ｔ－７	ＮＴ－２Ａ	ＳＤ14	ＳＤ１
		ＳＤ15	ＳＤ２
Ｔ－８	ＮＴ－２Ｂ	ＳＤ16 ＳＤ17 ＳＸ１	ＳＤ１ ＳＤ２ ＳＸ１
Ｔ－９	ＮＴ－２Ｃ	ＳＤ18 ＳＤ19 ＳＫ１ ＳＫ２	ＳＤ２ ＳＤ１ ＳＫ１ ＳＫ３
Ｔ－10	ＳＴ－16	ＳＤ20 ＳＤ21 ＳＨ１ ＳＢ１	ＳＤ２ ＳＤ１ ＳＨ１ －
Ｔ－11	ＳＴ－15	ＳＨ１ ＳＢ１	ＳＨ１ －
Ｔ－12	ＳＴ－14	ＳＢ２ ＳＫ３	－ ＳＫ１

新トレンチ番号	旧トレンチ番号	新遺構番号	旧遺構番号
T－13	ST－13	SD22	SD 3
		SD23	SD 2
		SD24	SD 1
		SB 3	SB 2
T－15	ST－12	SD25	SD 5
		SD26	SD 4
		SD27	SD 3
		SD28	SD 2
		SD29	SD 1
		SB 4	SB 1
		SK 4	SK 5
		SK 5	SK 6
		SK 6	SK 4
		SK 7	SK 3
		SK 8	SK 2
		SK 9	SK 1
T－16	NT－ 3	SD30	SD 2
		SD31	SD 1
		SD32	SD 4
		SD33	SD 5
		SD34	SD 3
		SX 2	SX 1
		SK10	SK 1
T－17	ST－ 5	SD35	SD 1
		SD36	SD 2
		SD37	SD 6
		SD38	SD 5
		SD39	SD 3
		SH 2	SH 1
		SK11	SK 1
		SK12	SK 4
		SK13	SK 3
		SK14	SK 2
		SX 3	SX 1
		SX 4	SX 2
T－18	ST－ 6	SD40	SD 3
		SD41	SD 1
		SD42	SD 2
		SK15	SK 1
		SK16	SK 2
T－19	ST－ 7	SD42	SD 1
		SD43	SD 2
		SD44	SD 3
		SD45	SD 4
		SD46	SD 5
		SK17	SK 1
T－20	ST－ 8	SD47	－
		SD48	SD 2
		SD49	－
		SD50	－
		SD51	SD 1
		SD52	－
		SB 5	－
		SK18	SK 1
		SX 5	SX 1
T－21	ST－ 9	SD49	SX 1
		SD51	SD 2
		SD53	SD 1
		SB 6	－
T－24	NT－ 5	SD54	SD 8
		SD55	SD 9
		SD56	SD10
		SD57	SD 3
		SD58	SD 7
		SD59	SD 2
		SD60	SD 5
		SD61	SD 6
		SK19	SK 2
		SK20	SK 1
		SX 6	SX 1
T－25	NT－ 6	SD58	SD 3
		SD59	SD 3
		SD62	SD 4
		SD63	SD 1
		SK21	SK 1
		SK22	SK 2
T－26	ST－10	SD64	SD 3
		SD65	SD 2
		SD66	SD 1
		SM 1	SD 4
T－27	ST－12	SD66	SD 6
		SD67	SD 2
		SD68	SD 4・5
		SM 2	SD 3
		SK23	SK 3
		SK24	SK 2
		SK25	SK 1
		SK26	SK 4
T－28	ST－11	SD69	SD 3
		SD70	SD 2
		SD71	SD 1－b
		SD72	SD 1－a
		SM 2	SD 4
		SH 3	SH 1
		SH 4	SH 2

ＳＤ２　同じくＴ－１で検出された溝で、南北流するとみられる。ＳＤ１とほぼ直交するとみられ、南半が削平のため消失している。幅60ｍ、深さ７㎝をはかり、出土遺物はない。ＳＤ１・ＳＤ２とも時期不明であるが、Ｔ－１の包含層からは、12世紀中葉～後葉とみられる黒色土器埦、土師器皿、羽釜などが出土しており、まとまらない小ピットともに、かかる時期が、一応推定されるだろう。

ＳＤ３　Ｔ－２・Ｔ－１のそれぞれ南端から北端を蛇行しながら東西流する自然流水路で、幅1.7ｍ、深さ35㎝と、やや規模の大きい溝である。およそ２層に区分され、各層から混在した形で、多くの土器が出土している。弥生土器、古式土師器も若干混入するが、主体をなすのは、６世紀前半（陶邑のⅡ－１・２段階）とみられる須恵器坏・坏蓋・壺および土師器坏・皿であった。この付近では、かかる時期と遺構はこれまで未発見であり、ＳＤ４とともに、この上流の金ケ森集落に重複して存在することを推測させる。

ＳＤ４　ＳＤ３の北側を円弧を描いて東西流する細い溝で、幅 0.6ｍ、深さ18㎝を測る。出土遺物は多くないが、９世紀代の土師器坏・皿などが中心で、上流側に当該時期の遺構の存在が予想される。

ＳＤ５　Ｔ－２の北端に一部検出された溝で、山賀川の現河道と重複する可能性もあり、山賀川のある時期の河道の一部とみられる。なお出土遺物はなく、時期は不明である。

ＳＤ６　Ｔ－３の南半を東西流する自然流水路で、幅 2.8ｍ、深さ33㎝を測る。出土遺物は多くないが、黒色土器埦・甕をはじめ、土師器・須恵器・灰釉・緑釉などがあり、おおよそ11世紀代のものである。

ＳＤ７　ＳＤ６の北側を東西流する溝で、幅 3.0ｍ、深さ30㎝以上を測り、北接するＳＤ８に切られている。ただし出土遺物はなく、時期は明らかでない。

ＳＤ８　ＳＤ７の北側を一部切って東西流する水路で、幅 3.6ｍ、深さ30㎝以上をはかる。出土遺物はなく、時期は判明しない。

ＳＤ９　Ｔ－４の南端の一部を、やや弧を描いて東西流する水路で、幅 1.8ｍ、深さ38㎝をはかる。ＳＤ10に切られているほか、出土遺物はなく、時期を判断する材料はない。

ＳＤ10　ＳＤ９とＳＤ11の間を南北流する水路で、北端はＳＤ11に切られ明らかでなく、南端でＳＤ９を切っている。幅 0.9ｍ、深さ７㎝の小さな溝で、出土遺物はなかった。

ＳＤ11　Ｔ－４の中央を東から西へ斜めに流れる直線的な水路で、幅２ｍ、深さ33㎝を測る。人工的な溝を思わせるつくりであるが、出土遺物はなく、性格は明らかにし難い。

ＳＤ12　ＳＤ11の北側を、ほぼ平行して東西流する細い溝で、幅 0.5ｍ、深さ22㎝を測る。この溝で出土遺物はなく、時期不明である。

ＳＤ13　Ｔ－６の南東の角を横切って東西流する溝で、幅 0.6ｍ、深さ28㎝をはかる。出土遺物は僅少で、時期の判明するものはない。

ＳＤ14　Ｔ－７の南東角からＴ－６の北西角へ東から西へ横切る溝で、幅 0.8ｍ、深さ28㎝をはかる。出土遺物は少なく、図示できるものはなかった。Ｔ－７でＳＤ15を切っている。

ＳＤ15　Ｔ－７で、ＳＤ14の北側を東西流して、ＳＤ14に切られて消滅する水路で、幅 0.7ｍ、

深さ37cmを測る。出土遺物は僅少で図示しうるものはなく、時期は不明である。ただし、SD13～SD15出土の小破片は古式土師器とみられ、一応古墳時代前期とみることができよう。

SD16 T－8の南端を東西流する水路で、幅 0.4m、深さ10cmをはかる。遺物の出土は少なく、一応布留式の時期におさまるものとしておきたい。

SD17 SD16の北側を平行して東西流する、やや大きな水路で、幅 1.9m、深さ30cmをはかる。遺物の出土は少ないが、一応布留式土器とみられ、詳細は明らかでない。

SD18 T－9の南端を屈曲して東から西へ流れる溝で、SD19との切り合いが明瞭でない。幅 1.0m、深さ10cm以上をはかり、布留式土器を多数含む。

SD19 T－9の北3分の2を占める深い落ち込みで、T－10南側にみえるSD20の肩が、SD19のものとすれば、大規模な旧河道となる。全掘していないので、深さは不明であるが、幅はT－9内で 8.5mをはかる。一部トレンチを入れただけであるが、大量の布留式土器が出土した。いずれも古い様相をもつもので、一時期に埋没したものとみられる。

SD20 T－10の南端に右岸肩口のみがみえる河道で、上述のとおりT－9のSD19と一連のものとみられる。T－10内での幅 4.0m、深さ4.2cmをはかり、上層からは布留式土器が、下層から布留式土器に混在して、庄内式並行とみられるものや、弥生中期に遡るものも出土している。

SD21 SD20の北側にほぼ並行して東西流するとみられる水路で、幅 2.6m、深さ60cmをはかる。溝内からは、布留式土器を主体とする古式土師器が出土しており、下層より庄内式並行とみられる土器が出土している。SD21の北側には、後述するように、竪穴住居址の残骸とみられる、ピット・小溝が広く分布しており、遺跡の南端を区画するものと考えることも可能である。

SD22 T－13の南側にやや屈曲して南北流する水路で、幅 2.2m、深さ37cmをはかる。出土遺物は少ないが、いずれも布留式土器であった。

SD23 SD22の北側で、SD24を切り込んで南北流する水路で、幅 1.1m、深さ17cmを測る。出土遺物は少なく、図示し得るものはないが、一応布留式とみられる。

SD24 SD23に切られて左岸肩口は一部しか知り得ないが、幅 1.3m、深さ23cmをはかる水路で、布留式土器がかなり出土している。

SD25 T－15の南端を東西流する水路で、幅 2.5m、深さ58cmをはかる。溝内から大量の布留式土器が出土している。

SD26 T－15のほぼ中央を東西流する水路で、幅 2.6m、深さ56cmを測る。出土遺物は少ないが、庄内式並行と布留式の土器が混在していた。

SD27 SD26の北に並行して東西流するとみられる水路で、幅 2.3m、深さ45cmをはかる。出土遺物は、全形を伺えるものはないが、布留式の可能性が高い。

SD28 SD27に北接して、南北流するとみられる水路で、幅 5.5m、深さ75cmを測る大規模なものである。出土遺物がそれほど多くなく、布留式土器を主体とするが、弥生後期とみられる土器が若干混在していた。

S D29　S D28の北側を、ほぼ平行して南北流するとみられる水路で、幅 2.0m、深さ65cmを測る。出土遺物はかなり多く、大部分が布留式土器であり、一部庄内式並行のものが混在する。

S D30　T－16の中央を東西流するS D31から分岐する細い水路で、幅 0.3m、深さ17cmを測る。遺物はほとんどなく、時期不明である。

S D31　T－16の中央を東西流する大きな水路で、幅 3.5m、深さ26cmをはかる。出土遺物はなく、時期不明。

S D32　S D31の北側をやや屈曲して東西流する水路で、幅 1.2m、深さ15cmを測る。出土遺物は全くない。

S D33　S D32の北を、ほぼ並行して東西流する水路で、幅 1.0m、深さ10cmを測る。

S D34　T－16の東北コーナーで検出された水路で、左岸肩口のみを検出した。T－17北西コーナーで検出したS D37と同一の可能性があり、これを右岸肩口とすれば、幅 3.5m以上、深さ70cm以上の大規模な旧河道になるとみられる。T－16ではS D32・S D33に、T－17ではS D35・S D36に切られており、前後関係が判明する。T－16では布留式土器が大量に出土しており、庄内式並行とみられる土器が若干混在していた。

S D35　T－17の南端を東西流する水路で、幅 0.8m、深さ25cmを測る。出土遺物は少なく、布留式土器とみられる。

S D36　S D35の北側を、ほぼ平行して東西流する溝で、幅 1.4m、深さ30cmを測る。出土遺物もS D35とほぼ同じ傾向を示す。

S D37　S D34の項で述べた通りであるが、出土遺物は少ない。

S D38　T－17の南端をやや弧を描いて南北流する水路で、S D37にほぼ東接している。幅 1.9m、深さ65cmを測り、溝内より布留式土器が大量に出土した。そして須恵器蓋坏1点が含まれていたことは注意されよう。

S D39　T－17の北端を東西流する溝で、幅 0.7m、深さ18cmを測る。出土遺物は比較的多く、布留式土器を主体としている。

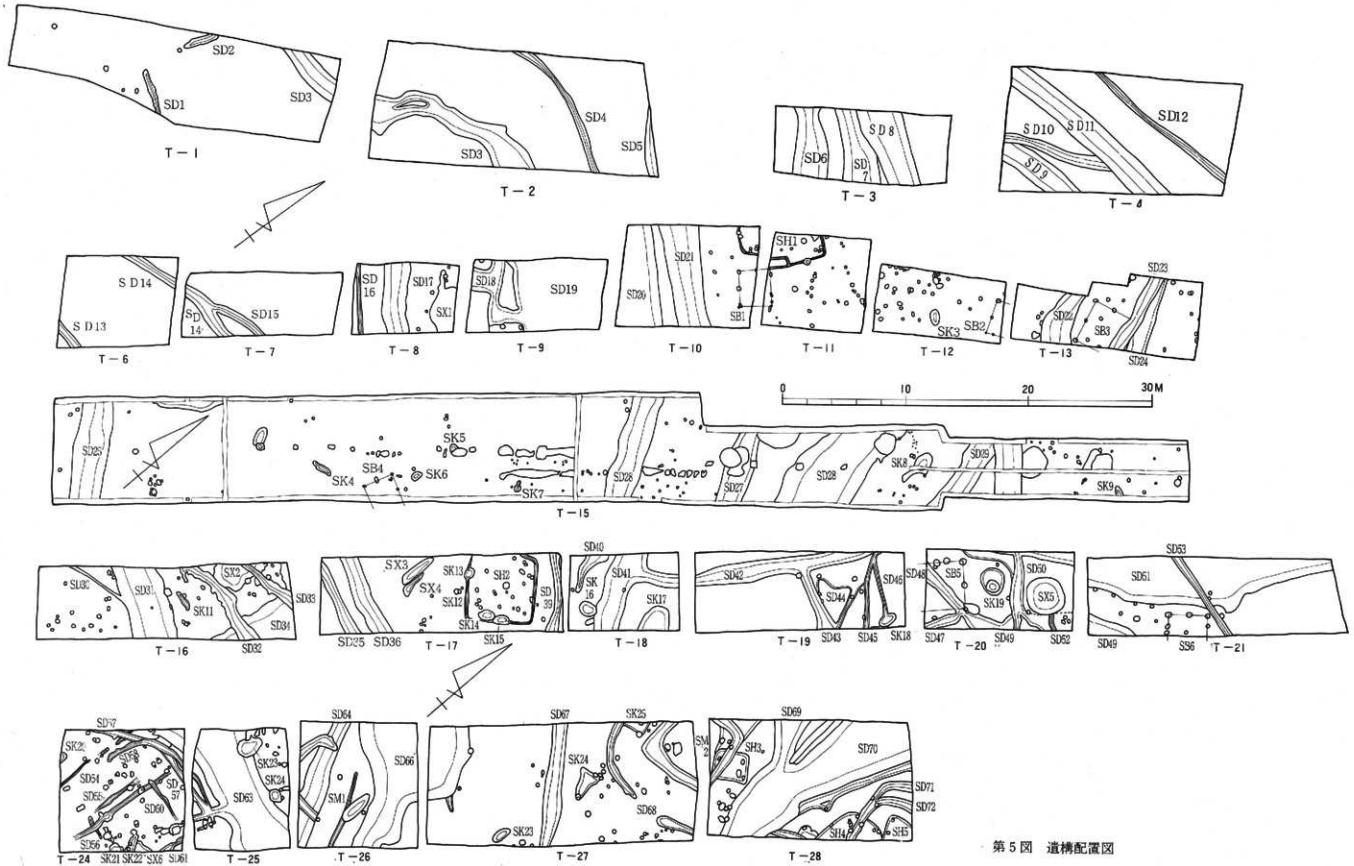
S D40　T－18の南端に一部検出された不整形の溝で、土坑の可能性も考えられる。幅 1.8m、深さ17cmを測り、出土遺物は少なく、時期は明らかでない。

S D41　T－18の中央を南北流する、大きな水路で、幅 2.0m、深さ43cmを測る。溝内より布留式土器が大量に出土している。

S D42　S D41から分岐して、T－19を横切って南北流するとみられる水路で、幅 1.0m、深さ45cmを測る。T－18では、ほとんど遺物の出土はみないが、T－19では、大量の布留式土器が出土した。やや新しい様相を示すとみられる。

S D43　T－19の中央付近を東西流して、S D42に流入するとみられる水路で、幅 0.8m、深さ35cmを測る。遺物の出土なく、時期は不明である。

S D44　S D43から分岐して、S D42に流入するとみられる水路で、幅 0.5m、深さ32cmを測る。出土遺物は少ないが、布留式土器とみられる。


T－1
T－2
T－3
T－4
T－6
T－7
T－8
T－9
T－10
T－11
T－12
T－13
T－15
T－16
T－17
T－18
T－19
T－20
T－21
T－24
T－25
T－26
T－27
T－28
0
10
20
30M

第５図　遺構配置図

ＳＤ45　ＳＤ44の北側で、ＳＤ42を切り込んで掘削された細い水路で、幅 0.4ｍ、深さ28㎝を測る。若干の布留式土器片を出土した。

ＳＤ46　ＳＤ45の北を、土坑ＳＫ18から東西流して、ＳＤ45と合流する水路で、幅 0.3ｍ、深さ10㎝を測る。出土遺物は皆無であった。

ＳＤ47　Ｔ－20の南東コーナーから南北流してＳＤ48に流入する水路で、幅 0.8ｍ、深さ20㎝を測る。出土遺物は全くなし。

ＳＤ48　Ｔ－20の南端を東西流するとみられる水路で、幅 1.0ｍ、深さ35㎝を測る。遺物は、小破片がごく少数出土したのみである。ＳＤ49を切り込んでいる。

ＳＤ49　Ｔ－20とＴ－21の一部の東側に広がる落ち込みで、落ち際の一部が検出されるにとどまる。ＳＤ47・ＳＤ48・ＳＤ50・ＳＤ52・ＳＸ５に切られているが、出土遺物は皆無で、時期は明らかにできない。Ｔ－20で幅 1.8ｍ、深さ30㎝をはかる。

ＳＤ50　Ｔ－20の中央を東西流する水路で、ＳＤ49を切り込み、ＳＤ51に切られている。幅 1.0ｍ、深さ30㎝を測る。出土遺物は全くなし。

ＳＤ51　Ｔ－21の西半、Ｔ－20の西端で検出された旧河道状の落ち込みで、最大幅 4.0ｍ、最も深いところで70㎝を測った。出土遺物は、かなりの量に達し、弥生中期後葉・弥生後期の土器を若干混在しているが、その中心は、布留式土器で、それも古い様相を示すものである。

ＳＤ52　ＳＤ49を掘り込んでつくられた溝で、ＳＸ５に取りついている。幅 0.4ｍ、深さ８㎝をはかる小溝で、出土遺物は全くなかった。

ＳＤ53　Ｔ－21の中央を斜めに東西流する小路で、幅 0.5ｍ、深さ10㎝を測る。ＳＤ51を切り込んでおり、出土遺物は検出できなかった。

ＳＤ54　Ｔ－24の西コーナーを南北流するとみられる細い水路で、幅 0.2ｍ、深さ５㎝を測る。出土遺物はなし。ＳＤ57に切られている。

ＳＤ55　Ｔ－24の中央付近を、ＳＤ54とほぼ平行して南北流するとみられる小水路で、幅 0.5ｍ、深さ５㎝をはかる。出土遺物なく時期不明。

ＳＤ56　ＳＤ55の東側を平行する浅い溝で、幅 0.5ｍ、深さ35㎝を測る。ＳＤ60によって切られており、遺物は小破片であった。

ＳＤ57　Ｔ－24の北コーナーを、やや弧を描いて、Ｔ－25のＳＤ62に合流する小水路で、幅0.5ｍ、深さ38㎝を測る。出土遺物は小破片のみであった。

ＳＤ58　ＳＤ57を切り込んだあと、その北側を平行して、同じくＳＤ62に合流する水路で、幅 0.6ｍ、深さ16㎝を測る。出土遺物は全くなし。

ＳＤ59　ＳＤ56に切られた溝で、幅 0.4ｍ、深さ10㎝を測り、きわめて浅く、大部分が消失している。

ＳＤ60　ＳＤ56を切って、ほぼ直交する小水路で、幅 0.5ｍ、深さ10㎝を測る。出土遺物はなかった。

ＳＤ61　Ｔ－24の東コーナーを横切る水路で、幅 0.7ｍ、深さ12㎝を測る。これも出土遺物は全くなかった。

S D62　T－25の南端を南北流して、S D63に流入するとみられる水路で、幅 0.6m、深さ12cmを測る。出土遺物はなし。

S D63　T－25の東コーナーから西コーナーに東西流する水路で、幅 3.8m、深さ70cmを測る。上層より布留式土器を主体とする土器が大量に出土、弥生土器若干が混入していた。

S D64　T－26南コーナーから南北流する水路で、幅 1.9m、深さ20cmを測る。遺物は少ないが、一応布留式とみられる。埋没後第1号方形周溝墓が築造されている。

S D65　S D64とS D66の間を南北流する水路で、幅 0.4m、深さ7cmを測る。遺物は少なく、明確ではないが、布留式とみられる。S D64と同じく、第1号方形周溝墓に切られている。

S D66　T－26とT－27にまたがる大溝で、東西流するとみられる。幅9m、深さ55cmを測り、出土遺物も布留II式を中心にかなり多い。T－27では須恵器出土。

S D67　T－27の中央を東西流する水路で、幅 1.4m、深さ37cmを測る。出土遺物は少ないが、畿内第II様式とみられる弥生土器が出土しており、本遺跡では最も古い遺構とみられる。

S D68　T－27の北側を円弧を描いて、東西流するとみられる水路で、幅 0.6m、深さ20cmを測る。浅いためか、一部で削平のため消失している。出土遺物なく、時期不明。

S D69　S D70と分岐して東西流する水路で、幅 2.3m、深さ28cmを測る。出土遺物は多くないが、布留I式を主体とする。

S D70　T－28を斜めに南北流する大規模な水路で、幅 4.9m、深さ67cmを測る。出土遺物はきわめて多く布留I式から布留III式までも含んでいた。

S D71　S H 4を切り込んで、やや屈曲しつつ南北流する水路で、S D72が分枝する。幅 0.6m、深さ20cmをはかり、遺物は少なく時期は判然としないが、一応布留II式以降とみられる。

S D72　S D71から分岐した水路で、幅 0.8m、深さ10cmを測る。出土遺物は、S D71とほぼ同様とみられる。

S D73　T－27の北側を東西流する水路で、幅 0.8m、深さ35cmを測る。下層で検出されたもので、出土遺物より、布留I式とみられる。

2．方形周溝墓

調査区の北の端付近で2基の方形周溝墓とみられる遺構を検出した。いずれも削平を受けており、出土遺物も少なく、今一つ性格は明らかでない。

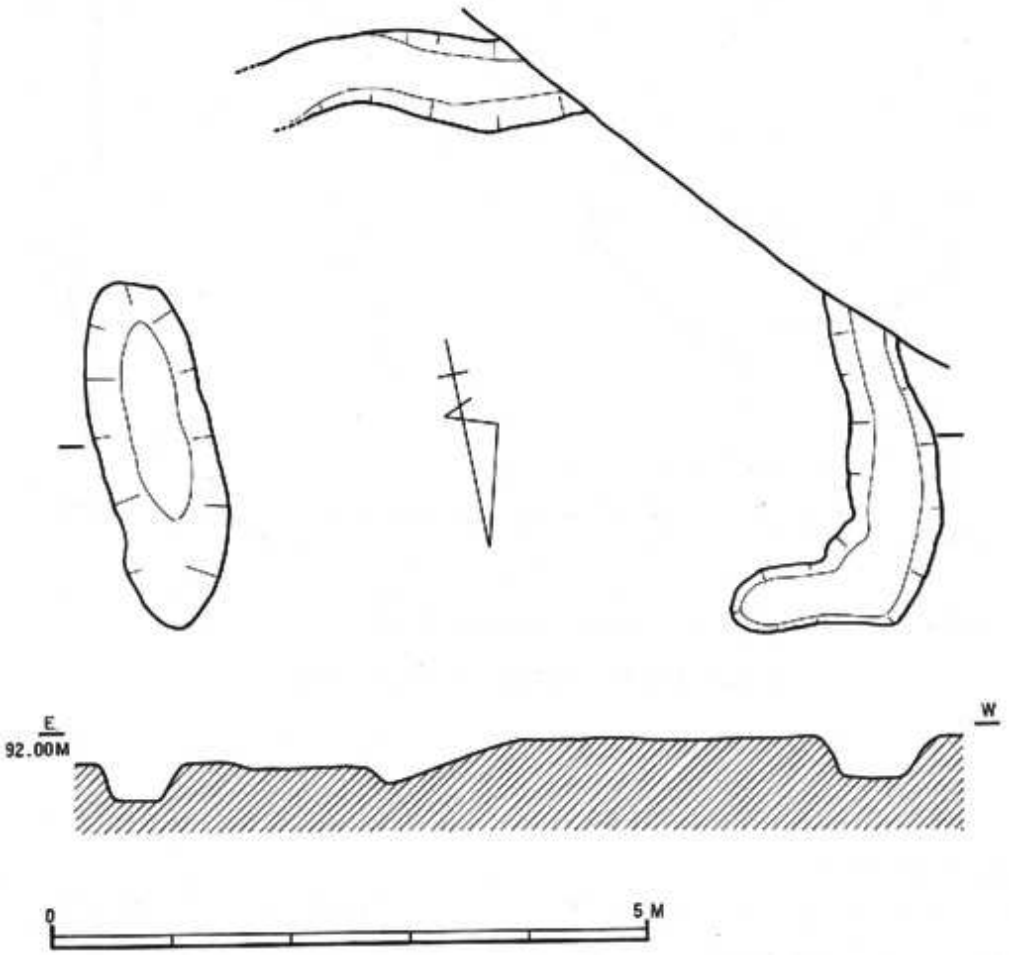
S M 1　T－26で検出されたもので、主軸はN－6°－Eを示し、内区で東西 5.2m、南北 3.8mを測り、周溝は東辺で 1.0m、深さ30cm、南辺で推定 0.8m、深さ43cm、西辺で 0.8m、深さ35cmを測る。いずれも周溝は浅く、後世の削平により、北辺および東辺、南辺の一部は消失したとみられ、本来は全周していたとみられる。溝内は、黄灰褐色粘質土の地山に上層黒灰色砂泥、下層淡灰褐色砂泥に分かれたが、いずれにも遺物は皆無であり、時期等不明であるが、布留式とみられる。S D64・S D65に切られており、布留式か或は布留式以前と推定される。なお内区において、主体部等、埋葬施設は検出できなかった。

S M 2　T－27・T－28にまたがって検出されたもので、主軸はS M 1とほぼ等しく、N－13°

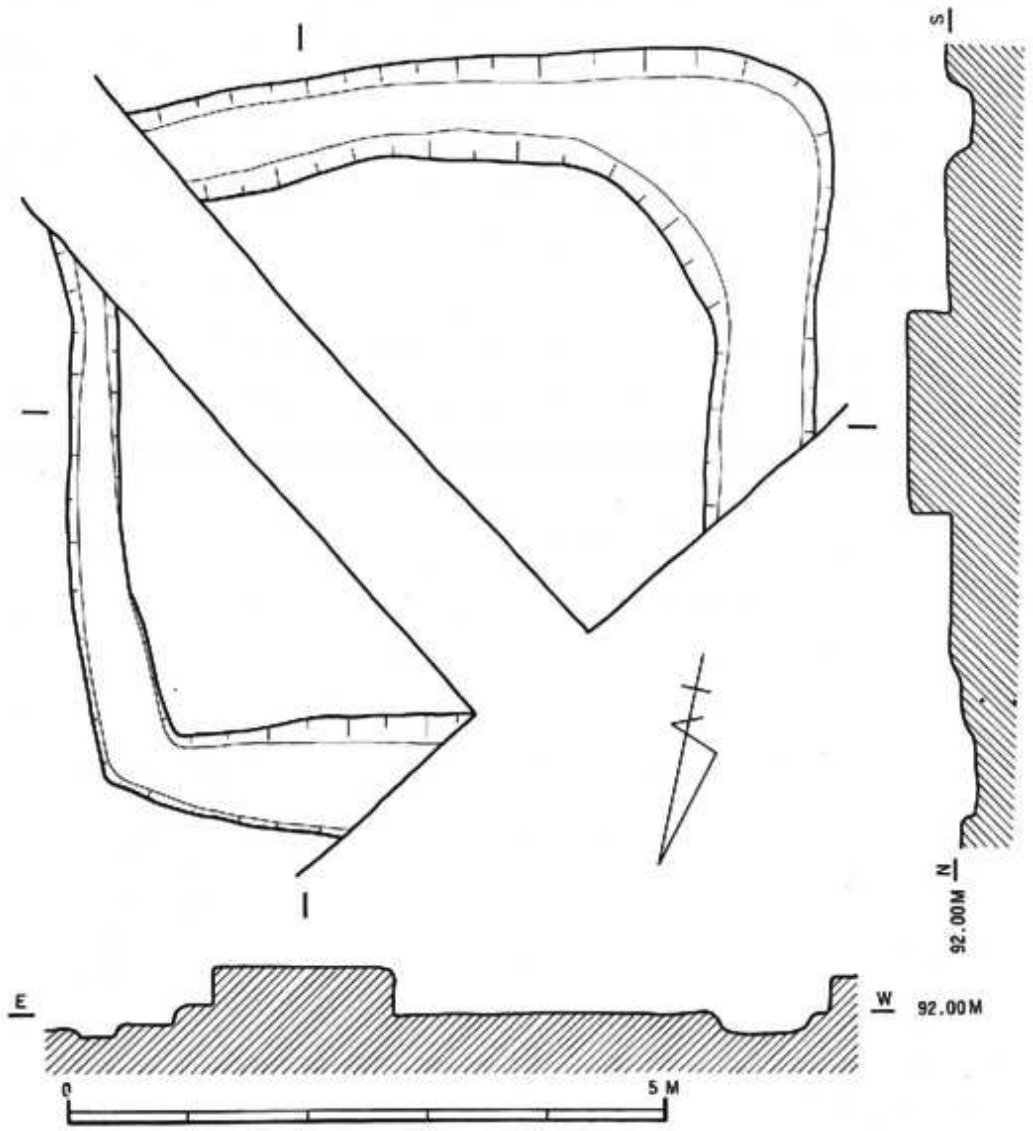
－Eを示し、内区で東西 5.1m、南北 4.6mをはかった。周溝は全周するとみられ、東辺で 0.5m、深さ15cm、南辺で 0.8m、深さ27cm、西区で 0.9m、深さ15cm、北辺で 1.0m、深さ24cmを測り、コーナー部は、やや浅くなっていた。溝内は黄灰褐色粘質土の地山に、暗黒灰褐色粘質土を充塡しており、ここでも遺物の出土はほとんどないが、南溝第３層より、受口状口縁甕、壺の破片が出土し、おおよそ布留Ⅰ式の古い段階とみられる。なお東辺は、布留Ⅰ式の新しい段階とみられる竪穴住居址（ＳＨ３）に切られており、この推定を裏付ける。このほか、内区に土壙（ＳＫ27)が所在するが、関連は不明。又ＳＤ68が大きく円弧を描いて、本遺構を廻るごとくであるが、これも関連不明である。

３．竪穴住居址

調査区の中央付近および北端で、合計５棟の竪穴住居址とみられる遺構を検出した。やや不明瞭なものもあるが、いずれも削平が著しく、このほかにもプランの消失したものもかな



第６図　第１号方形周溝墓（ＳＭ１）平面実測図



第７図　第２号方形周溝墓（ＳＭ２）平面実測図

りあると推定される。

ＳＨ１　Ｔ－10・Ｔ－11にまたがり検出されたもので、大部分が削平され、わずかに壁溝のみが残存していた。西半は調査区外で、規模は明らかでないが、東区から推定するなら、一辺2.3ｍの隅丸方形を呈するとみられ、幅14cm、深さ６cmの壁溝がめぐる。主軸はＮ－34°－Ｅ

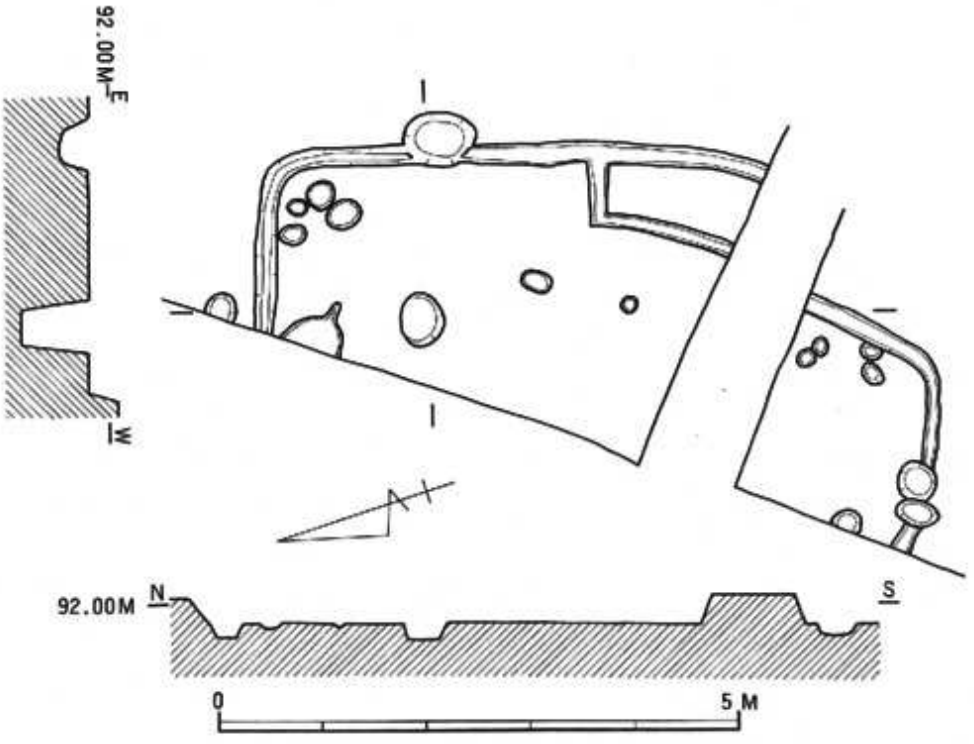
を示し、柱穴は不明確であるが、東北コーナーの柱穴は、径20cmの円形であった。出土遺物は皆無で、時期は明らかにできない。

ＳＨ２　Ｔ－17の北半に検出されたもので、西辺の一部が調査区外に出るが、ほぼ全形が知られる。これもＳＨ１と同じく、削平されて壁溝をわずかに残すにすぎない。規模は一辺 1.9 mの隅丸方形を呈し、壁溝は北辺、南辺、東辺の一部をめぐる。東辺に接して土坑２基（ＳＫ14・ＳＫ15）、南辺に１基（ＳＫ13）が検出され、中央付近に炉跡の痕跡があって、焼土が広がる。主柱穴は４ケ所で、径40～50cm、深さ25cmであった。出土遺物は少ないが、布留Ｉ式の古い段階と考えられる。

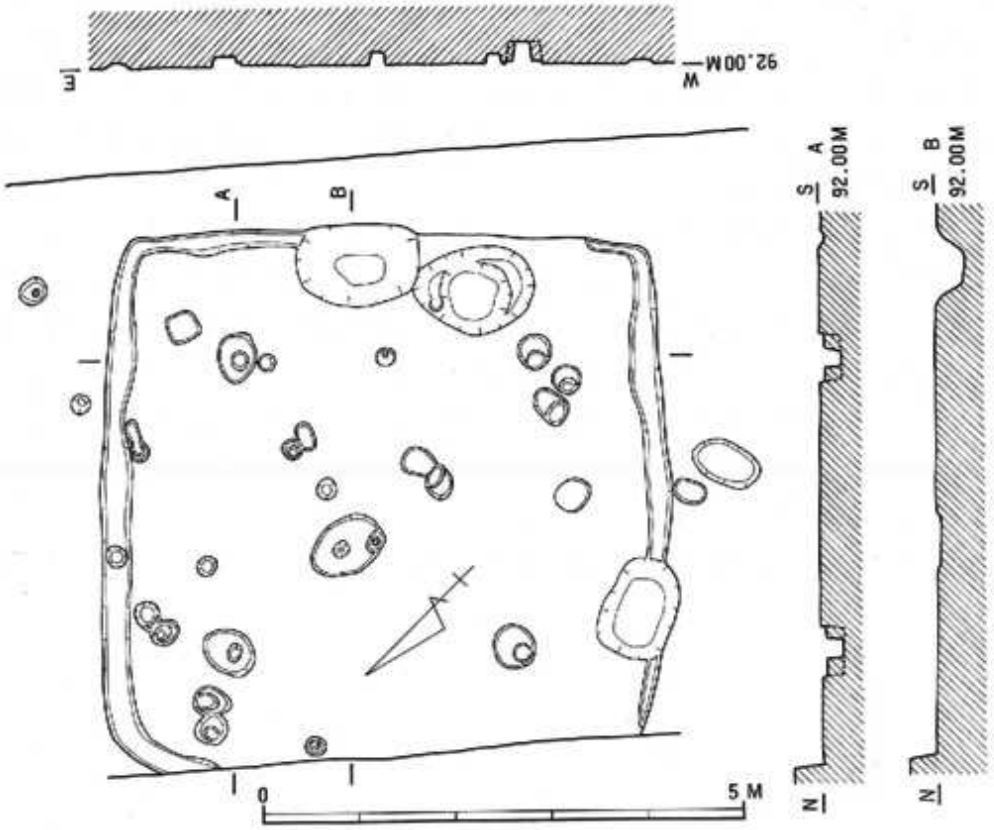
ＳＨ３　Ｔ－28の南端で検出した、隅丸方形の竪穴住居址である。上述のとおり、ＳＭ２を切って築造されており、一辺 2.6～ 3.0m、深さ18cmのやや小型の住居址である。柱穴は、北、東、西コーナーの三ケ所で検出され、これも残りはきわめて浅い。覆土中より布留Ｉ式（新）段階の遺物が出土しており、おおよその年代が把握される。

ＳＨ４　Ｔ－28の東辺に一部検出された隅丸方形の竪穴住居址である。ＳＤ71とＳＨ５により切られ、一辺 4.0m以上、深さ14cmをはかり、明確な柱穴は検出できなかった。これも残りは悪く、出土遺物も皆無であった。

ＳＨ５　ＳＨ４に接して北側に所在する隅丸方形の竪穴住居址である。西コーナーの一部を検



第８図　ＳＨ１平面実測図



第9図　ＳＨ２平面実測図

出したにとどまり、全様は明らかでないが、一辺 2.9m以上をはかる。ＳＨ４を切っており、後出することが知られる。ただし出土遺物はなく、年代は明らかにできない。

４．掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は、多数のピットが検出されているにもかかわらず、確認できるものは、きわめて少ない。これは調査範囲が限定されていることもあるが、遺跡の本来的な性格を示すとも考えられる（なお後述）。

ＳＢ１　Ｔ－10とＴ－11にまたがって所在する東西二間、南北二間とみられる建物跡で、柱間寸法はすべて 1.3mで、中軸はＮ－58°－Ｗである。

ＳＢ２　Ｔ－12とＴ－13にまたがって所在する、推定東西二間、南北一間の南北棟とみられる。ただし身舎の東列は未検出である。柱間は桁行で 1.4m、中軸はＮ－33°－Ｗであった。

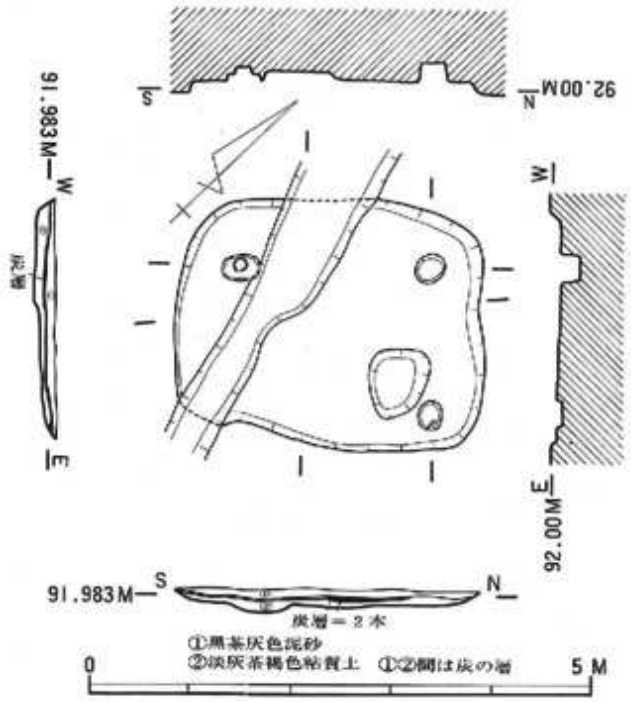
ＳＢ３　Ｔ－13の中央、ＳＤ22とＳＤ23の間に所在する。東西二間、南北二間の南北棟と推定

される。東側の柱穴は、ＳＤ23に切られ消失している。柱間は、桁行で1.75m、梁間で1.75mをはかり、中軸はＮ－33°－Ｗを示す。

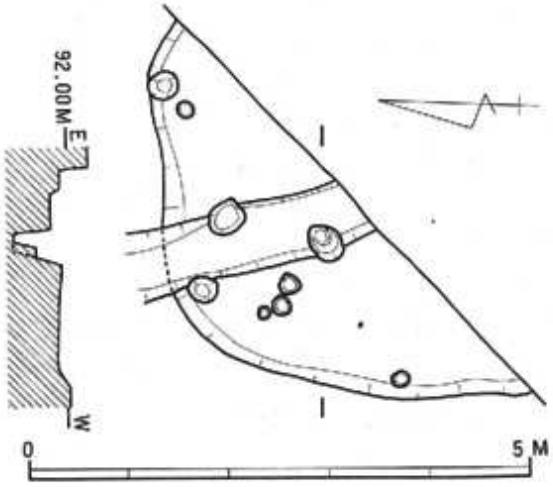
ＳＢ４　Ｔ－15の中央に西端のみ検出されたもので、南北一間、東西一間以上の東西棟とみられる。柱間は梁間で 1.4m、桁行で 1.3mをはかり、中軸はＮ－41°－Ｗを示す。

ＳＢ５　Ｔ－20の南北に所在する、東西二間、南北一間の東西棟とみられる。柱間は桁行で 1.8m、梁間で 2.2mをはかり、中軸はＮ－48°－Ｗを示す。南半はＳＤ47～49によって、一部柱穴が確認できなかった。

ＳＢ６　Ｔ－21の中央に西端のみを検出したもので、南北二間、東西一間以上の東西棟とみられ、柱間は桁行で 1.5m、梁間で 1.5mをはかる。中軸はＮ－48°－Ｗを示す。



第10図　ＳＨ３平面実測図



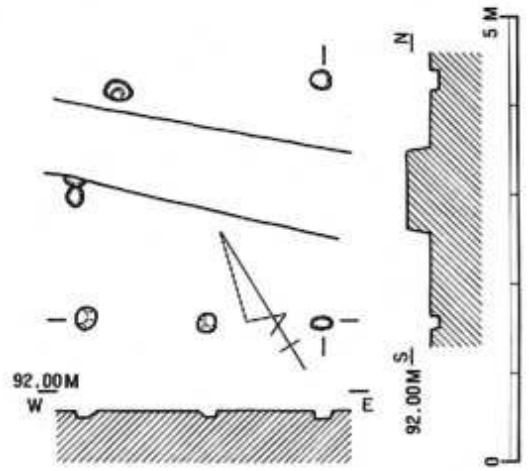
第11図　ＳＨ４平面実測図

５．土　　坑

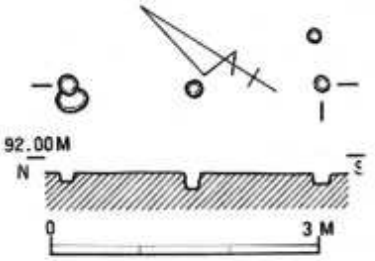
土坑は20数基発見されている。その多くは竪穴住居址に関連するものとみられ、いわゆる土坑墓とみられるものはなかった。

ＳＫ１　Ｔ－９の南端で検出された円形土坑で、径0.82m、深さ0.15mをはかる。中央に炭化物がかなり含まれており、竪穴住居址に関連するものか、出土遺物より、一応布留Ⅰ式（新）とみられる。

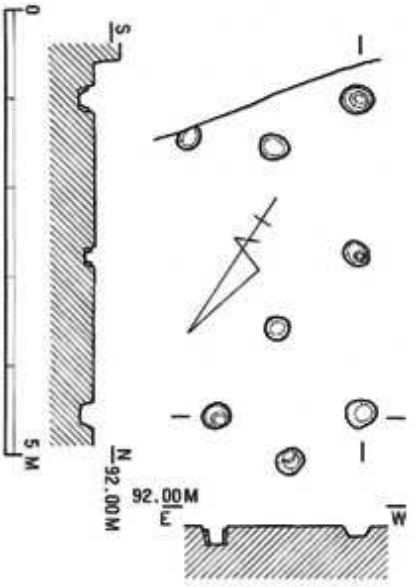
ＳＫ２　Ｔ－９のＳＤ19の埋没後、それを切り込んでつくられた円形土坑で、径1.26m、深さ0.42mをはかる。同じく中心部に炭化物と焼けた土器片が多くみられる。布留Ⅰ式（新）と



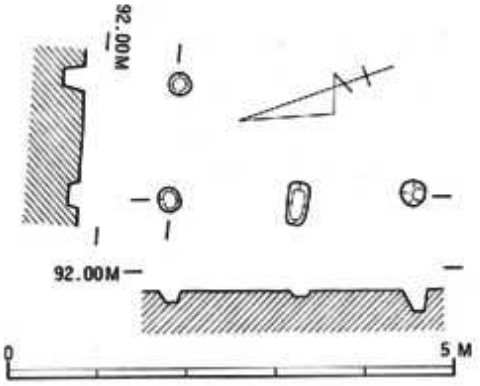
第12図　ＳＢ１平面実測図



第13図　ＳＢ２平面実測図



第14図　ＳＢ３平面実測図



第15図　ＳＢ４平面実測図

みられる。

ＳＫ３　Ｔ－12の中央に所在する、長楕円形土坑で、長径1.24ｍ、短径 0.8ｍ、深さ0.3 ｍをはかる。出土遺物は少なく、実態は明らかでない。

ＳＫ４　Ｔ－15のＳＢ４の西に所在する。長楕円形土坑で、長径 1.8ｍ、短径50cm、深さ20cmをはかる。出土遺物はなく性格不明。

ＳＫ５　ＳＢ４の北に所在する長楕円土坑とみられるが、東半を後世の攪乱で消失しており、規模は不明であった。

ＳＫ６　ＳＢ４とＳＫ５の中間に所在する長円形土坑で、長径 0.9ｍ、短径0.65ｍ、深さ17cmをはかる。これも出土遺物はなかった。

ＳＫ７　ＳＫ５の東に所在する瓢形土坑で、長径 0.9ｍ、短径 0.7ｍをはかる。性格は不明。

ＳＫ８　ＳＤ28とＳＤ29の間に所在する変形の土坑で、南北 3.1ｍ、東西 1.2ｍ、深さ23cmをはかる。出土遺物はなかった。

ＳＫ９　Ｔ－15の北端で検出された、長楕円形土坑、長径 0.8ｍ、短径 0.4ｍ、深さ17cmをは

かる。布留式とみられる土器片数点が出土した。

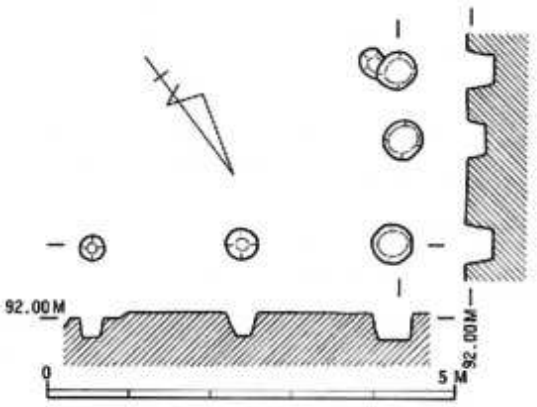
S K10　T－16の中央に所在する長楕円形土坑、長径 1.6m、短径 0.4mをはかる。出土遺物はなかった。

S K11　竪穴住居址ＳＨ２の南に接して所在する楕円形土坑で、長径0.85m、短径0.55m、深さ６cmをはかる。出土遺物はないが、ＳＨ２に関連するものか。

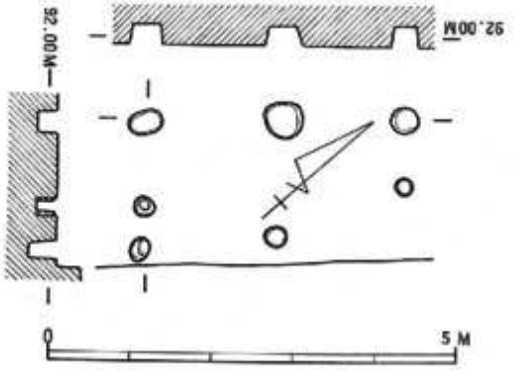
S K12　ＳＨ２の屋内土坑、長径 1.1m、短径0.75mの長円形を呈し、深さは６cmをはかる。出土遺物は小破片で少ないが、一応布留式とみられる。

S K13　同じくＳＨ２の屋内土坑で、長径 1.3m、短径 0.9mの楕円形を呈す。深さ30cmをはかり、若干の布留式土器片を出土した。

S K14　ＳＨ２の屋内土坑で、長径1.35m、短径0.78m、深さ30.0cmをはかる。出土遺物は布留Ⅰ式（古）とみられる。



第16図　ＳＢ５平面実測図



第17図　ＳＢ６平面実測図

S K15　T－18のＳＤ41を一部切り込んでつくられた円形土坑で、長径1.45m、短形1.04m、深さ42.0cmをはかる。出土遺物はなかった。

S K16　T－18の北よりに所在する楕円形土坑で、東半が調査区外で全形は不明。短径2.51m、深さ32.5cmをはかる。最下層（第④層）より、炭化物とともに多くの土器が出土した。布留Ⅰ式（新）のものが多い。

S K17　T－19の北端に所在する楕円形土坑で、ＳＤ46とつながる。長径 1.5m、短径 0.9m、深さ21.0cmをはかり、布留Ⅱ式とみられる土器の出土が知られる。

S K18　T－20の中央に所在する大型の円形土坑、長径2.15m、短径1.85m、深さ60cmをはかる。布留Ⅰ式とみられるが、詳細は不明。

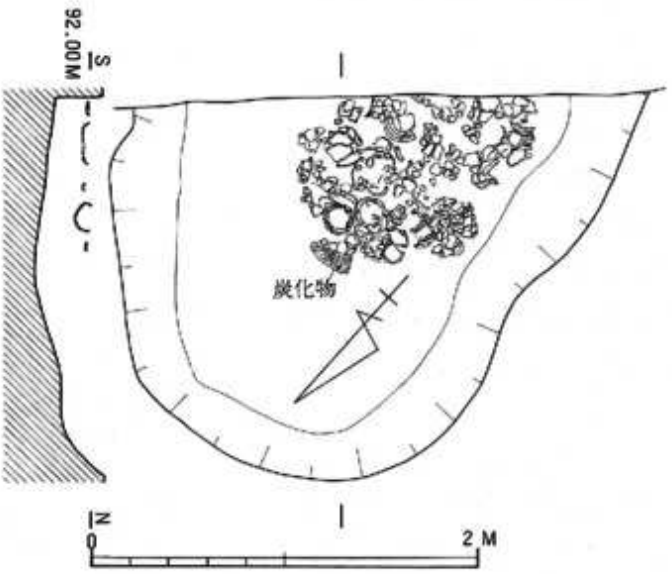
S K19　T－24の東端で一部検出された円形土坑で、径 1.0m、深さ21.5cmをはかる。ＳＫ20を切っており、出土遺物は少なく、一応布留式と考えられる。

S K20　ＳＫ19の北にＳＸ６を切りこんでつくられた長方形土坑で、東側が調査区外で、全形は不明。長辺は 1.6m以上、短辺は0.68m、深さ18.0cmをはかる。出土遺物は破片が少しで詳細不明。

S K21　T－25のＳＤ63の北に所在する楕円形土坑、長径 2.1m、短径 1.3m、深さ20.0cmを

はかる。若干の土器は出土するが性格は不明。

S K22　S K21の東に所在する楕円形土坑で、長径1.25m、短径0.85m、深さ75cmをはかる。S K21と同じく出土遺物は少ないが、S D63の上層に切られており、布留Ⅰ式（古）よりやや古い可能性はある。



第18図　S K16平面実測図

S K23　T－27のS D67の南に所在する楕円形土坑で、長径 1.7m、短径 0.7m、深さ 10 cmをはかる。出土遺物はなく、性格は不明。

S K24　S D67の北側に所在する平面三角形の土坑で、長辺 2.5m、最大幅 1.8m、深さ15cmをはかる。若干の土器の出土が知られ、布留Ⅰ式期のものとみられる。

S K25　S M 2の南に所在する三角形の土坑で、西半は調査区外である。長辺 2.5m以上、短辺 1.8m以上、深さ20cmをはかる。出土遺物はなく性格は不明。

6．その他（S X）

性格不明の遺構をS Xとして一括した。この中には、土坑或は旧河道とみられるものもあるが、今後の検討に委ねたい。

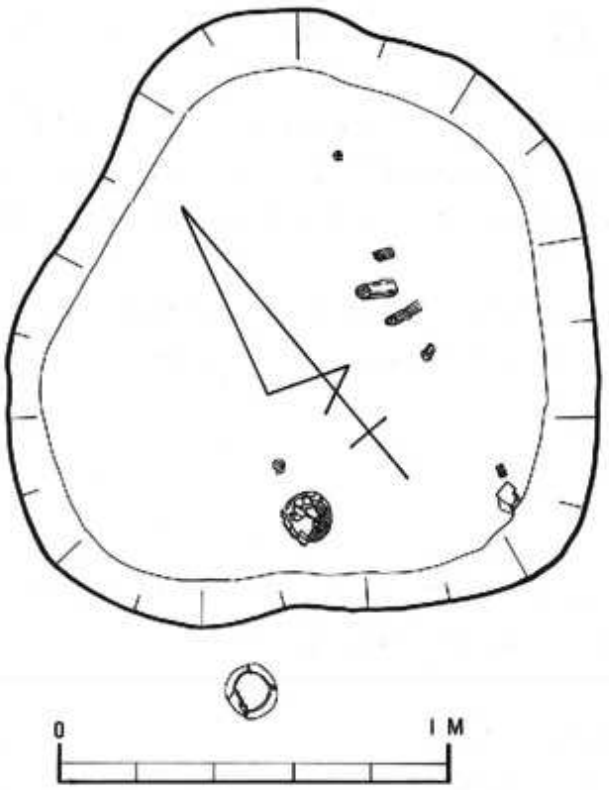
S X 1　T－8とT－9にまたがり所在するほぼ円形の落ち込み。径おおよそ 1.0mをはかり、布留式土器を包含する。完掘しなかったため性格不明。

S X 2　T－16の西北に所在する、不整形の落ち込み。長辺 3.5m以上、短辺 2.5m、深さ20cmをはかる。S D32、S D33に切られており、庄内式とみられる土器を若干出土する。土坑状のものか。

S X 3　T－17の中央に所在する長楕円形の土坑。長径 3.2m、短径 0.6m、深さ 20 cmをはかる。次にのべるS X 4と接しており、何らかの関係を有するとみられる。出土遺物は全くなかった。

S X 4　S X 3に東接する不整形土坑。長径 2.5m、短径 1.1m、深さ 23 cmをはかる。これも出土遺物はなかった。

S X 5　T－20の北に所在する円形の大きな落ち込み。径 3.0m、深さ40cmをはかる。中央に杭が一本あり、形態的には井戸とみられるが、出土遺物も少なく、時期、性格とも明らかで



第19図　ＳＸ５平面実測図

ない。弥生後期の可能性はある。

ＳＸ６　Ｔ－24のＳＫ20に切られる落ち込み。大部分が調査区外で性格不明。出土遺物もなかった。

（大橋信弥）

註

(1) 大橋信弥「守山市金ケ森西遺跡出土の有孔円板について」（『滋賀文化財だより』No.18，1978）。同「再び守山市金ケ森西遺跡出土の石製模造品について」（『滋賀文化財だより』　No.44，1980）

V. 遺　　物

今回の調査によって出土した遺物は、コンテナにして約30箱余にも達したが、その大半は、溝内より出土したものである。土器類では、古式土師器を中心に、弥生土器・須恵器・土師器・黒色土器・施釉陶器等多種に及ぶが、主体となるのは、古墳時代前期の古式土師器で、器種・数量共、出土遺物中最も多い。

又、木製品では、T－16の古墳時代前期と思われるSD34底より完形の鍬をはじめ10数点が出土し、石製品では、滑石製模造品をはじめ、石斧・砥石などが、自然遺物としては、えぐりのある桃の果核の出土等が知られる。

1．土　　器

a．弥生土器

若干の弥生土器が溝内より出土している。当遺跡最古と考えられる畿内第Ⅱ様式並行の壺形土器が一点、第Ⅳ・Ⅴ様式並行の甕・壺・高坏等が少量検出された。

弥生時代中期

弥生時代中期の土器には、甕・壺・高坏がある。

甕　口縁部の形態によりA・Bの2タイプに分類される。

甕A（E066・E067）　外湾してのびる頸部より、短く直立して立ち上がる口縁部が付く甕で、口縁部内外面に粗いハケ調整を行っている。大津市滋賀里遺跡(注1)、同春日山遺跡(注2)等に類例を求めることができる。

甕B（E562・E563）　いわゆる受口状口縁で、大きく屈曲する頸部より口縁部が丸味を有して内反気味に立ち上がる。E563は、口縁部外面に粗い斜方向の粗いハケ調整を行い、E562は、櫛状具による弧状文を廻らすもので、大津市滋賀里遺跡、同高峰遺跡(注3)、草津市志那中遺跡他、県内で数多く出土しており、甕A・B共に近江における畿内第Ⅳ様式並行の甕形土器(注4)として典型的と言えるものである。

壺（E584）　漏斗状にのびる口頸部に、やや偏球状の体部を有す壺。器体外面は、ハケ調整後ナデを行い、口頸部から体部上半にかけて櫛描直線文を廻らすもので、大中の湖南遺跡(注5)、大津市南志賀遺跡、守山市赤野井遺跡(注6)他に類似品が認められ、畿内第Ⅱ様式の新段階に並行するものである。

壺（E068）　口頸部が外湾してのびるもので、口頸部外面には縦位、内面には横位の粗いハケ調整を行っており、長浜市鴨田遺跡溝Aの遺物中に形態的に類似しているものが認められる。(注7)

高坏（E548）　T－21・SD51出土の高坏で、ほぼ完形をとどめる。坏底部と口縁部は、不明瞭な甘い稜によって分けられ、脚部は、細い筒状の脚柱部に屈折して開く裾部が付く。器体内外面共磨滅が著しく、坏部外面にわずかにヘラミガキの痕跡をとどめる。この種の高坏は、畿内第Ⅳ様式に通有なものである。

弥生時代後期

弥生時代後期の土器は、甕・壺・器台がある。

甕ＡⅠ（E543・E544）　受口状口縁を有する甕で、口縁部が頸部より直立して立ち上がる。E543は、口縁部外面に横ナデ調整後左下がりの櫛描列点文を廻らし、E544は、さらに上半に横ナデを加える。

壺（E545）　外開きの口頸部に、丸味のある受口状口縁を呈する壺で、口頸部外面にハケ調整を施す。頸部に凸帯を貼り付け、櫛描列点文を廻らすもので、長浜市鴨田遺跡、草津市志那中遺跡ＳＥ２、守山市横江・大門遺跡(注8)、同服部遺跡等で類例が認められる。

高坏（E244）　坏底部に稜をなして口縁部が大きく外反して開く坏部。磨滅が著しく調整等は不明であるが、弥生後期末の上六万寺遺跡のものと類似しており、県内でも草津市片岡遺跡(注9)をはじめ、大津市榿木原遺跡(注10)、他多数の遺跡に類似品が認められる。

器台（E552）　弥生時代の器台としてＴ－21・ＳＤ51より一点出土している。口縁端部を大きく下方に垂下させて、外面に６条の凹線文を廻らす。大津市部屋ケ谷遺跡(注11)をはじめ大津市榿木原遺跡等に類似品が認められる。

ｂ．古式土師器

本遺跡で出土した遺物の大半が古式土師器で、器種も甕・壺・高坏・器台・鉢・有孔鉢と多種に及んでいる。特に溝内より布留式と汎称されている土器が多量に出土しており、当遺跡における在地性の土器との関係が注目されるが、後に詳しく検討することとして、ここでは形式分類にとどめる。

甕　最も出土量の多い器種であるが、磨滅が著しい上、残存度も悪く、ほとんど口縁部のみで、全形を知り得るものは皆無であったため、主に口縁部の形態によりＡ～Ｄの４タイプに分け、さらに細分した。

甕Ａ類　無文の受口状口縁を有する甕で、主に端部の形態と口縁部の屈曲の度合いによりＡⅡ～ＡⅨの８種に細分した。底部については良好な資料にめぐまれないが依然丸底化はすすんでいないとみられる。

甕ＡⅡ（E252・E253・E620・E318）　E620のように口縁部外面に沈線を廻らすものがあるが、大半は無文で、ゆるやかに外反して端部を丸く収めている。

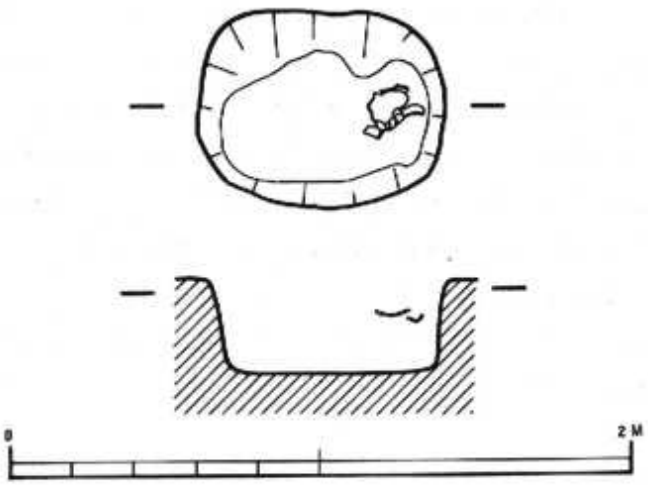
甕ＡⅢ（E072～E074・E114～E121・E172～E183）　端部をわずかに外方へ引き出し、上端を平担に収める。

甕ＡⅣ（E075・E076・E122・E123・E267～E276・E382～E387）　端部を強く外方に引き出し、上端を凹状（ＡⅣ－ａ）に収めるものと、平担（ＡⅣ－ｂ）に収めるものがある。

甕ＡⅤ（E077～E079・E277～E279）　端部を強く外方に引き出し、上端が大きく外傾する。

甕ＡⅥ（E280・E630）　口縁部が内反して立ち上がるもの。

甕ＡⅦ（E124・E281～E284・E331～E333）　頸部の屈曲及び口縁部立ち上がりの度合いが非常に弱いもの。



第20図　T－24ピット内土器出土状況

甕AⅨ（E371・E635）　口縁部が中位でふくらんで斜上方にのび、端部を外方へ引き出し上端を平担に収める。

甕B類　口縁部が、「く」字形に外反してのびる甕。

甕BⅠ（E057・E125～E128・E191）　端部を丸く収めるもの。

甕BⅡ（E081・E082・E129・E130・E162）　端部を内側に肥厚させる布留式に通有なもので、県内では、野洲町下繰子遺跡(注13)、長浜市鴨田遺跡、湖西線関連遺跡他多数で出土している。

甕C類（E131・E390・E537）　「く」字形に反外してのびる口縁部で、端部を上方にわずかに摘む甕で県内では、米原町入江内湖西野遺跡他(注14)で出土が知られる。

甕D類（E032・E199）　口縁部が外湾気味にのびるもの。

壺　口縁部の形態によりA～Gの7タイプに分類した。

壺A類　二重口縁を有するもの。

壺AⅠ（E290・E135・E200）　口縁屈折部に明瞭な段を有するもので、口縁部外面にハケ調整後横方向の細いヘラミガキを加える（E290）。

壺AⅡ（E291～E293）　口縁屈折部は、AⅠより甘く、内面に弱い段をなすか（E293）、又は、全く段をなさないもの（E291・E292）がある。

壺B類　口縁部が直線的又は、外湾してやや大きくのびるもの。

壺BⅠ（E294・E295・E397）　口縁部が直線的に外反して大きくのびる壺で、E580は、頸部外面に凸帯を貼り付けるもの。

壺BII（E201・E240・E296）　BIよりは、口縁部が短く、器壁も分厚いものである。

壺BIII（E398～E400）　大きく外湾してのびる口縁部で、内外面共横ナデ調整を行っており、頸部外面には、ハケ調整痕が残る。

壺C類　口頸部が短く「く」字形に外反する壺。

壺CI（E084・E085・E164）　口径12cm前後で、短く外反する口縁部を有するもの。

壺CII（E542）　口径11cm前後とやや小型の壺。

壺D類（E058）　口径9.6cm、器高12cmの小型の壺で、口縁部は、わずかに外反して上方にのび、体部は球状で丸底を呈す。体部外面は、ハケ調整後ナデ、下半にはヘラケズリを行う。

壺E類（E464）　頸部で屈曲後、口縁部がほぼ直線的に上方にのび、中位で大きく屈折し外上方にのび、端部を上方にわずか拡張するもので、内外面共ハケ調整後横ナデを行う。

壺F類（E641）　直口する口縁部に屈折して短く外方にのびる端部が付く。

壺G類（E202・E538）　口径25.9cmの壺で、外開きの口縁部が中位で屈折し、さらに内反して立ち上がる。口縁部外面には、横ナデ調整後ヘラ状具による斜線文を綾杉状に廻らす。この種の壺は、邇向遺跡などに類似品が認められ、瀬戸内系のものか。

小型丸底壺　小型丸底壺は、口径、器高とも10cm前後のものが多い。(第35)大半が著しく磨滅をうけており調整手法等の観察は不可能なため、プロポーション・口縁部の形態によりA～Dの4タイプに分けた。

A（E090・E206・E303・E407）　扁平な体部にやや内湾気味に外上方に大きく開く口縁部が付くもので、口径が体部最大腹径を凌駕する。口縁部内外面・体部外面にハケ調整後細いヘラミガキを施すもの（E206）と、口縁部内外面共横ナデ調整、体部外面ハケ調整後ナデを行うもの（E090）がある。

B（E064・E091・E137・E207～E209・E304・E305）　小さな球状の体部に、「く」字形に外反して開く口縁部が付く。口縁部内外面にハケ調整後ナデを施す。体部外面ハケ調整後ナデ、内面は、指ナデにより成形を行う（E207～E209）。

C（E643）　全体のプロポーションは不明であるが、小型で、丸底を呈すると思われるので、小型丸底壺の類に入れた。口縁部が短くやや内湾気味に立ち上がり、器体内外面共指押え及びナデにより調整を行う。体部内面には1cm弱の粘土紐巻き上げ痕が明瞭に残る。

D（E644）　Cと同様に小型丸底壺の類としたが、口縁部がわずかに受口状をとどめるもの。

高坏　高坏の出土量は、甕に次いで多いが、全形をとどめるものは少なく、大半が脚柱部のみであった。ここでは、少量ではあるが、時期の判別しやすい坏部を4タイプに分け、さらに細分を試みた。

高坏A類　比較的浅い坏部で、口縁部が、直線的に外反してのびるもの。

AI（E060・E092～E094・E138・E139・E212）　底部と口縁部の境界が、明瞭な稜によって分けられるもの。

AII（E165・E306・E599・E600）　底部と口縁部の境界が甘く、丸味を有するもの。

高坏B類　深い坏部で、平底の底部より口縁部は、大きく外湾して斜上方にのびる。

・ＢⅠ（E140）　口径30cmの大型の坏部で、口縁部と底部の境界は、明瞭な段によって分けられる。

ＢⅡ　（E213～E214・E368）　口径18cm前後の坏部で、器壁は比較的薄手で、精巧な作りである。脚部は低く、付根よりゆるやかに「ハ」字状に開く。

高坏Ｃ類（E095）　小型の精緻な高坏で、椀形の坏部に短く開く脚部が付く。坏部内外面に細いヘラミガキを施し、脚部外面には縦方向のヘラケズリを行う。色調は、赤褐色の地に外面ススを重ねて黒色に仕上げる。大津市北大津遺跡、米原町入江内湖西野遺跡等で、形態の類似した高坏が出土しており、庄内式並行か。(注16)

高坏Ｄ類（E096・E141・E518）　半球状の坏部で、丸底の坏底部より丸く内湾してのびる口縁部を有し、内外面共横ナデ調整により仕上げる。

高坏Ｅ類（E166）　小型の高坏で、小さな半球状の坏部に、大きく「ハ」字状に広がる脚部が付くと思われる。

器台　小型丸底壺とセットをなすもので、口径10cm前後の小型の器台で、形態によりＡ～Ｃの３タイプに分類した。

Ａ（E158・E159・E419・E521・E522・E657・E658）　出土した器台の中では、最も数量の多いもので、E158・E521のように受部の底部と口縁部は、稜によって明瞭に分けられるものと、甘く不明瞭なE419がある。やや内湾して広がる脚部が付く。

Ｂ（E234・E313・E369・E372・E523）　受部と脚部が対称をなす器台で、「ハ」字状に開く。外面ナデ調整、脚部内面は、ハケ調整後ナデを施す。E372のように、受部がやや丸味を有するものもある。

Ｃ（E112・E233）　受部は浅い皿状を呈し、内外面を横ナデ調整により仕上げる。

鉢　出土した個体数はわずかであり、口縁部・底部のみの出土で、全形を知り得るものはなかったが、口縁部の形態によりＡ・Ｂの２タイプに分類した。

鉢Ａ（E535）　口頸部は、短く「く」字形にのび、端部を上方に摘みあげ、外側に面をつくる。口縁部内外面共横ナデを行い、体部外面にハケ調整を施す。脚部を有するかとも考えられる。

鉢Ｂ（E541）　頸部でゆるく屈曲した口縁部は、やや内湾気味に外上方にのびるもので、内外面に横方向の細いヘラミガキを施す。

鉢Ｃ（E560）　口縁部が短く「く」字に外反するもの。台付鉢型土器（E536）、高台状の底部を有する鉢で、東海地方に類例の多い器種である。県内では湖北において（鴨田遺跡ほか）多数の出土が知られているが、県内においてまだ出土例が少なく新旭町堀川遺跡で一点出土している。(注17)

有孔鉢（E409・E577）　底部が２点出土しているが、全形を伺えるものでなく、底部中央に径１cm前後の円孔を穿つもの。

ミニチュア土器（E578）　手づくねの粗製品で、平底の浅い坏状のものである。

c．須恵器

若干の須恵器が、主にT－1～T－3包含層・溝内より出土している。一応、坏蓋、坏身、甕、壺、高坏、水瓶等の器種があるが、点数は少なく、時期も6世紀前半～10世紀とばらつきがある。

坏蓋A（C029・C030・C033・C421・C525）　天井部にツマミを持たないタイプで、天井部・口縁部境界が凹線により明瞭に分けられるもの（C029・C033）と、天井部から口縁部にかけなだらかな曲線を描くもの（C030・C421・C525）がある。C029・C033は、陶邑II－2段階に比定され、C030・C421・C525は、II－5段階に比定される。(注18) 前者はおおよそ6世紀前半代に、後者は6世紀後半代に比定される。

坏蓋B（C048）　ツマミを付けるもので、低く、扁平な天井部から、口縁部を下方に短く下ろすタイプで、陶邑編年のIV－II段階と比定され、7世紀中葉と考えられる。

坏身A（C036・C583）　丸味のある底部に、強く内傾する立ち上がり部を有するタイプで、受部は、どちらも外上方に短くのびる。陶邑編年のII－6段階に比定され、7世紀中葉のものである。

坏身B（C037～C039・C365）　安定した平底の底部から体部が外上方に伸びるもので、陶邑のIII－2段階に比定される。

坏身C（C049）　高台を有する坏身で、底部外縁に低い逆台形の高台が付く。陶邑のIII－3段階に比定される。

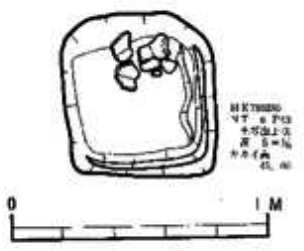
その他の器種　甕口頸部（C001）が一点出土しているが、外開きの口頸部で、端部をすっきりと収めるもので、陶邑のIV－2段階に比定できる。ほかに高台の付く壺底部（C040）、「ハ」字状に開く高坏（C041）などがあり、それぞれ、IV－1段階、II－6段階に比定される。

d．施釉陶器

緑釉、灰釉が若干出土している。器形はいずれも埦で、緑釉（G053）は、やや軟質で、黄緑色を呈する。灰釉は図示できるものはないが、東海系と思われる。

e．黒色土器

T－1包含層より若干の黒色土器埦、小皿（B015・B016）が出土している。埦は、磨滅が激しく調整、成形等は観察しにくいが、口縁部内面に一条の沈線を廻らす。体部、口縁部が内湾してのびるものをAタイプ（B017・B018）、体部が内湾し、口縁端部が内反するものをBタイプ（B021～B025・B054）。高台は、断面逆台形で、0.3～0.5 cm前後のものが多い。黒色土器埦については、久野部遺跡七ノ坪地区においてやや詳細に検討されており、(注19) これを参照にすれば、本遺跡のA・Bタイプは、久野部遺跡C・Dタイプとほぼ一致すると考えら



第21図
T－25ピット内土器出土状況

れる。又、先に調査された横江、大門遺跡とは、一連の関係にあり、本遺跡出土の黒色土器もほぼ同時期の12世紀前半の年代が想定される。

f．土師器

土師器は、T－1～T－3包含層・溝より若干出土している。器種には、奈良末～平安時代の坏・皿類、平安末～鎌倉前半の皿・羽釜等がある。皿類は、いずれも粘土板成形で、口縁部に一部ナデ調整を施すもので、奈良末～平安時代の皿をA類とし、鎌倉時代の皿は、B～D類に分類し、さらに大小により細分した。羽釜は、口縁部が内傾、端部を方形に収めるもので、つばは短い。同様の皿・羽釜が、久野部遺跡、横江・大門遺跡等で出土している。

坏類（H046・H047・H052）　平底の底部より、体部は、直線的に外上方にのびるもので、平城宮跡SD650に類例がある。(注20)

皿A類（H042・H043・H045）　平底の底部で、口縁部が短く外反してのびるもので、口縁部内外面共横ナデ調整を行う。

皿B類（H004・H005～H009）　丸味のある平底の底部より口縁部が内湾してのびるタイプで、口径14cm前後のものをBI（H004）、口径7～9cm前後のものをBII（H005～H009）とした。

皿C類（H010）　平底の底部より口縁部は、内湾してのび、端部は、外反して尖り気味に収めるもの。

皿D類（H011・H012・H013）　丸底の底部で、口縁部は外反してのびるタイプで、口径16cm前後のものCI（H011）、口径8～10cm前後のものをCII（H012・H013）とした。

（大橋美和子）

註

(1) 田辺昭三ほか『湖西線関連遺跡発掘調査報告』（滋賀県教育委員会　1974）

(2) 丸山竜平「大津市堅田真野春日山遺跡調査報告」（『滋賀県文化財調査年報　昭和五十年度』滋賀県教育委員会　1976）

(3) 丸山竜平「弥生時代から古墳時代へ」（『古代研究』12，1977）

(4) 大橋信弥・別所健二・谷口徹「草津市志那中遺跡」（『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書V』滋賀県教育委員会　1978）

(5) 水野正好『大中の湖南遺跡調査概要』（『滋賀県文化財調査概要』第5集　滋賀県教育委員会　1967）

(6) 山崎秀二「守山市赤野井遺跡」（『滋賀県文化財調査年報　昭和五十一年度』滋賀県文化財保護協会　1977）

(7) 中谷雅治ほか「鴨田遺跡」（『国道8号線長浜バイパス関連遺跡調査報告書III』滋賀県教育委員会　1973）

(8) I－（注1）参照

(9) 福永信雄・勝田邦夫「上六万寺遺跡」（『東大阪市遺跡保護調査会年報I』東大阪市遺跡調査

会　1975）

(10)　丸山竜平・中西常雄・石原道洋「草津市片岡遺跡」（『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅲ－Ⅱ』滋賀県教育委員会　1976）

(11)　林博通・葛野泰樹・須崎雪博『椿木原遺跡発掘調査報告Ⅱ』（滋賀県教育委員会　1976）

(12)　丸山竜平「古代国家生成期における山上町部屋ケ谷弥生高地性集落の評価をめぐって」（『文化財と自然を守る講演の集い』資料　皇子山を守る会　1979）

(13)　大橋信弥・別所健二・谷口徹「野洲町下緑子遺跡E・S地区」（『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅳ－Ⅱ』滋賀県教育委員会　1977）

(14)　田中勝弘『矢倉川中小河川改修に伴う入江内湖西野遺跡発掘調査報告書』（滋賀県教育委員会　1977）

(15)　石野博信・関川功『纒向－奈良県桜井市纒向遺跡の調査－』（桜井市教育委員会　1976）

(16)　中西常雄『北大津の変貌』（1979）

(17)　中村博司ほか『堀川遺跡発掘調査報告書』（滋賀県文化財調査報告書』第五冊　1974）

(18)　中村浩『陶邑Ⅲ』（『大阪府文化財調査報告書』第30輯　大阪府教育委員会　1978）

(19)　大橋信弥・別所健二・谷口徹『久野部遺跡発掘調査報告書－七ノ坪地区－』（滋賀県教育委員会　1977）

(20)　奈良国立文化財研究所『平城宮跡発掘調査報告書Ⅵ』（奈良国立文化財研究所学報第23冊　1974）

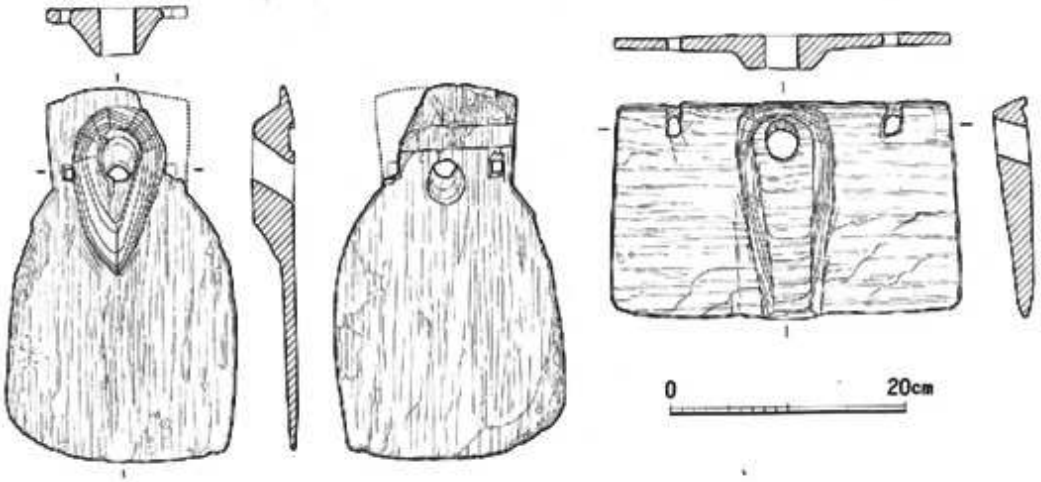
2．木製品

引　鍬（W001）

現存長24.3cm、最大幅（刃縁幅）13.7cm、厚さ 0.7cm前後の鍬の身である。T－16・SD34から出土した。全体に鍬としては脆弱なつくりであり、刃縁も直線的で比較的幅広い。一面には柄孔をとりまくように紡錘形の舟形突起が作り出されており、柄孔が鍬身となす着柄角は、柄が舟形突起の存在しない側に伸びていると考えると、おおよそ55度の鋭角となる。これらの事から機能的には引鍬、又形態上は広鍬あるいは平鍬の範疇に属するものと考えてよいだろう。

さて、本例の場合、舟形突起が存在しない面つまり手元面の柄孔上方には、刃縁と平行する溝が削り込まれている。溝の部分で欠損しているが、本来溝は中広の台形を呈していたと考えられる。同様の溝をもつ引鍬が、県下服部遺跡（第22図参照）や湖西線関連遺跡を始め、奈良県纒向遺跡[注1]、大阪府瓜生堂遺跡[注2]、などにある。服部遺跡のものには、図のように柄孔の両側に孔を穿っている。溝に類する加工を施したものとして、同位置に段を有する類例も多い。県下大中の湖南遺跡[注3]の他、奈良県唐古遺跡[注4]、大阪府池上遺跡[注5]、富山県江上遺跡[注6]、などに出土例があり、江上遺跡のそれには、やはり柄孔両側に孔が穿たれている。その他、溝や段などを有しないが、孔のみ穿つ例が、大中の湖南遺跡、大阪府恩智遺跡[注7]、同亀井城山遺跡[注8]などにある。

いずれも共通する形態を備えており、同様の機能、用途が考えられて興味深いが、そうした中で江上遺跡出土例中１点の引鍬は示唆的である。江上遺跡のそれは、段に「あて板」と考えられる板材が固着したまま出土しており、孔には「木釘」が打ち込まれて鍬身とあて板を固定していた。あて板は柄孔を被うように固定されている。おそらく、柄孔上方に削り込まれた溝や、孔のみ穿たれたものにも、本来類似のあて板が装備され、孔のあるものには固定を意図する木釘が打ち込まれていたと考えて良いだろう。



第22図　服部遺跡旧河道出土引鍬・えぶり

なお、本例の引鍬には、柄孔の両側に孔を穿った痕跡はみあたらないが、同部位の両側縁に切り込みがみられる。同様の切り込みをもつ引鍬例も多いが、その中で大中の湖南遺跡例の切り込み部には、紐状のもので結縛した痕跡が残っているようである。孔と同じく、あて板を固定したり、さらには鍬身と柄の両者を固定させる機能が考えられるのではないだろうか。(注10)

こうして、引鍬の手元面の柄孔上方に削り込まれた溝や段には、あて具が本来装備されており、柄孔の両側の孔や切り込みは、それをさらに固定させる役割りを担っていたものと予想された。引鍬は、周知のように、耕起後の土塊を細分かつならすための鍬である。従って、細分のための垂直的な動作と、ならすための手前に引く水平的な動作の連動となる。加えて着柄角は、通常60度前後の鋭角である。作業時、鍬身や柄にかかる力の方向は複雑となろう。鍬身の手元面に装着されたあて板は、背面に削り出された舟形突起とともに、上記のような複雑な力の分散に対応すべく考案された、衝撃吸収の機能を果していたと考えられる。

なお、以上のようなあて具を装備したり、その固定のための細工を施すのは、引鍬に圧倒的に多い事例ではあるが、必ずしも引鍬に限定されたものではなかったようである。図示したように服部遺跡出土の「えぶり」にも段や孔が施されており、本来同様の装備がなされていたのであろう。類例は池上遺跡などにもある。ただ、両例とも比較的肉厚で舟形突起をもつなど、えぶりとしてはいささか強靱な作りであり、いわば鍬とえぶりの中間形態とでも称すべきものであり、機能的にもおそらく両者の中位に位置するものであったと考えられる。

板状木製品（W002）

現存長35.3cm、幅 7.7cm、厚さ 4.1cmを計り、断面が不定五角形をなす板材である。上端は、手斧様工具を斜めに数回打ち下ろして切断している。下端は、手斧様工具を四方より打ち込んでおり、その部分で欠損する。表面は摩耗しており、一部で手斧様工具による削痕が認められるに過ぎない。工具の当り幅は、最大値で 6.0cm前後を計る。T－15・SD28から出土したもので、古墳時代前期の所産である。

棒状木製品（W003）

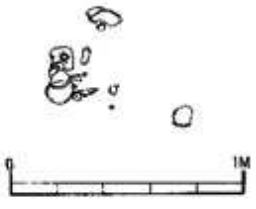
現存長30.3cm、直径 3.1cmを計り、断面が円形の棒状品である。下端は欠損しているが、上端は２方向から断続的に削り落として端部とする。用途は不明だが、柄の可能性が考えられる。T－15・SD28より出土した。

棒状木製品（W004）

現存長49.7cm、長径 3.1cm、短径 1.6cmを計り、断面が不定形ながら楕円形を意図した棒状品である。下端は欠損しているが、上端は斜めに削り落として端部とする。３と同様の木取りを施しており、３同様柄の可能性が考えられる。

用途不明木製品（W005～W007）

いずれも欠損や摩耗が著しく、その用途は推し計るべくもないが、W006には２箇所で切り込み痕が、又、W007には手斧様工具の削痕が、それぞれ確認される。W007の工具の



第23図
T－9　有孔円板出土状況

当り幅は、最大値で 3.5cm前後を計る。T－20・SD51より出土した。

（谷口　徹）

註

(1)　『湖西線関係遺跡調査報告書』（滋賀県教育委員会　1973）

(2)　『纒向』（奈良県立橿原考古学研究所　1976）

(3)　『瓜生堂』（財団法人大阪文化財センター　1980）

(4)　『大中の湖南遺跡調査概要』（滋賀県教育委員会　1967）

(5)　末永雅雄・藤岡謙二郎・小林行雄『大和唐古弥生式遺跡の研究』（京都帝国大学　1941～1942）

(6)　『池上遺跡　第四分冊の一　木器編』（財団法人大阪文化財センター　1978）

(7)　富山県立埋蔵文化財センターに於て、遺物を実見させていただいた。

(8)　『恩智遺跡』（瓜生堂遺跡調査会　1980）

(9)　『亀井・城山』（財団法人大阪文化財センター　1980）

(10)　黒崎直「木製農耕具の性格と弥生社会の動向」（『考古学研究』63．1970）

3．石製品

a．石製模造品

本遺跡からは、滑石製の模造品が合計７点出土している。その内訳は、模造鏡１点、大型有孔円板２点、小型有孔円板４点である。次にその概要を述べる。

模造鏡（C001）　径 5.2cm、厚さ 1.2cmの円板に径 1.5cm、高さ 0.8cmのツマミ(註1)を削り出したもので、ツマミの両側から径 0.6cmの円孔を穿ち貫通させている。重量は55.2ｇをはかり、石材は蛇文岩系滑石である。鏡面に当る部分は丁寧にみがかれ、各方向の調整痕が認められるが、上面は粗いカット面を残している。本品は調査による出土品ではなく、昭和55年２月第１次調査地点に隣接する工事現場で、地元の三品定雄氏によって、多くの土器とともに採取されたものである。第１次調査では、この地点で、布留式土器を大量に出土した水路（SD19）を検出しており、伴出した土器も、ほぼ同じ内容をもつものであった。したがって本品も、おおよそ古墳時代前期後半代に比定されよう。この種の遺物は、県下においてこれまで知られておらず、本例をもって初見とするが、他府県にあっては、土製品も含めて、多くの場合、祭祀遺跡からの出土が知られている。(註2)

有孔円板（S002～S005）　これらは、T－９・SD19の肩口から、小型丸底壺、高坏とともに一括出土をみたもので、S002は、大型の単孔円板で 径3.25cm、厚さ0.35cm、重さ9.2ｇをはかり中央に径0.35cmの小円孔を穿っている。両面とも数方向から研磨され、円孔は単一方向より穿つ。

S003は、小型の単孔円板で、３分の１強が欠失しているが、径 2.0cm、厚さ0.19cm、重さ1.8ｇをはかり、中央に径0.19cmの円孔を単一方向より穿つ。研磨はほぼ単一方向から加えている。

S004も、小型の単孔円板で、径 1.8cm、厚さ0.21cm、重さ1.6ｇをはかり、中央をややズレて、円孔を一定方向より穿つ。研磨は一定方向からなされている。

S005は、同じく小型の単孔円板で、周囲がやや欠失しているが、径 1.5cm、厚さ0.38cmをはかり、中央よりややズレて、径0.12cmの円孔を一定方向から穿つている。なお研磨は数方向より加えられ、石材は4点とも蛇文岩系滑石であった。

これら4点は、小型壺、高坏と共伴し、一括出土したこと、水路の肩口からの出土状況からみて、具体的な祭祀をほうふつさせるものがある。

有孔円板（S006） 本品は、T－9の北隣りのT－10を東西流するSD20の上層から出土をみたもので、小型の単孔円板である。径 2.2cm、厚さ0.3cm、重さ2.2gをはかり、ほぼ中央に、径 0.2cmの小円孔を単一方向より穿つている。両面とも、数方向よりの研磨痕がみられる。

本品を出土したSD20は、上述のとおり下層は庄内式並行期の土器を主体に、若干の弥生中期後半の土器を混在するが、上層は、布留Ⅰ式（新）ないし布留Ⅱ式（古）を主体とする土器からなっており、本品は後者の時期に該当する。なお石材は蛇文岩系滑石であった。

有孔円板（S007） 本品は、T－15の北辺を東西流するSD29の上層より出土をみたもので、径 3.1cm、厚さ0.3cm、重さ6.1gをはかる大型の双孔円板で、ほぼ中央に、径0.15cmの小円孔を二個ならべて穿つている。研磨は両面とも、ほぼ一定方向よりなされていた。石材は蛇文岩系滑石であった。本品を出土したSD29は、一部庄内式並行とみられる土器も含むが、そのほとんどが布留Ⅰ式（新）を伴出しており、本品も、当該時期にかかるものとみられる。

以上、今回の調査において出土をみた滑石製模造品の概要を述べた。いずれも本遺跡を東西流する水路より出土したもので、布留式土器を伴出する点も共通している。一般にこの種の遺物は、古墳時代前期後半から中期の古墳や祭祀遺跡から多くの出土が知られており、本遺跡例も、何んらかの祭祀に使用されたとみられる。大場磐雄氏は、祭祀遺跡をまつりの対象によって分類し、(1)自然物を対象とする祭祀（山岳・岩石・湖沼・海島・樹木等）。(2)古社の境内および関係地の祭祀。(3)墳墓に付属する祭祀。(4)住居に付属する祭祀の四種を指摘しておられる。(注4) 本遺跡の場合は明らかに(1)の自然物を対象とするものと考えられるが、その具体的な内容は明らかでない。ただ、今回発見された模造鏡および、今回調査地点の東200m付近の水出中において発見された小型珠文鏡の存在は、その点について、若干の示唆を与えると考える。すなわち、有孔円板についても、その形態から、鏡を模したものとみられており、本遺跡においては、自然水路の近辺で、鏡を使用した水神に対する祭祀が繰り返しなされていた可能性が推測されてくるのである。

ところで、県内におけるこの種の遺物の出土例については、西田弘氏によって集成が行われているが、(注5) 出土状況の明確なものについて、若干検討を加えておきたい。

まず古墳など埋葬に関連するものとしては、栗東町新開古墳例、同毛刈古墳例、下味古墳例、(注6) (注7) (注8) 同大塚越古墳例、守山市服部遺跡例などがあり、その中心をなすのは玉類で、剣形模造品、有孔円板の出土は少ない。(注9) (注10) 自然水路ないし溝からの出土例としては、本遺跡例のほか、野洲町下緑子遺跡例、(注11) 秦荘町軽野正境遺跡例などがあり、すべて有孔円板であった。(注12) 住居址出土例としては、守山市吉身南遺跡例があり、(注13) 有孔円板2点、臼玉16点が知られる。また、守山市播磨田東遺跡

では、有孔円板 118点、剣形模造品18点、勾玉12点など大量出土し、半製品、チップ・原石のほか玉作工房址とみられる遺構が検出されており、畿内周辺では希れな製作所跡として注目される。[(注14)] なお時期は一部を除いて、古墳時代前期・中期に比定される。

以上のように、この種の遺物の出土は、県内においても、全国的な出土例とほぼ同じ傾向を示すことが明らかとなった。そして有孔円板については特に、自然水路や溝などと関連深いことが明らかになった。そして、播磨田東遺跡の存在は、野洲川下流域が、かかる「まつり」の中枢であったことを示すと考えられる。

なお本遺跡出土の石製模造品の製作手法は必ずしも播磨田東遺跡のものと同一ではなく、別な製作場所が考えうる可能性もあろう。いずれにしても、本遺跡が、かかる祭祀のきわめて盛行したムラであったことは、否定し得ぬところである。

（大橋信弥）

b．石製品

蛤刃石斧未製品（S008） 長さ15.2cm、幅 4.6cm、厚さ 3.2cm、重さ 344 g を計る。石材は硬質頁岩を利用している。平面は長楕円形であるが、幅に対し長さの比が大きく、全体として細長い感を受ける。断面は楕円形を呈す。表面は、礫面と敲打痕でおおわれ、いまだ刃部が形成されておらず、仕上げの研磨も施されていない。河原石に打圧を加えて材を整え終った段階の、未整品と考えられる。T－27トレンチのSD67付近の排土内から採集したものである。SD67からは弥生時代中期初頭の土器も出土しており、同期の遺物の可能性が考えられる。

砥石（S009） 長さ18.1 cm、幅 5.1 cm、厚さ 1.4cm、重さ 313 g を計る。石質は硬質頁岩である。一面は河原石の自然面を利用し、他面は割裂による剝離面のままである。両側辺は、断続的な打圧を加えて、材を整えている。形態上、中部山岳などで古墳時代になっても使用された打製石鏃に似る。ただ、自然面の側に縦方向を基調とする研磨痕が良く認められ、仕上げ用の砥石と考えられる。T－15トレンチのSD25より布留式併行の土器とともに出土した。

砥石（S010） 長さ16.1 cm、幅 3.7 cm、厚さ 2.3 cm、重さ 217 g を計る。石質は硬質頁岩である。四角柱状の河原石を利用している。一面のほぼ全域に縦方向を基調とする研磨痕が確認され、S009同様、仕上げ用の砥石と考えられる。排土内の採集品である。

砥石（S011） 現存長 6.5cm、幅 7.0cm、厚さ 2.6cm、重さ 176 g を計る。石質は砂岩である。板状に剝離させた素材の4面を、砥石として使用している。4面とも、長期の研磨によって凹状を呈している。排土内の採集品である。

なお、石材の鑑定は、滋賀文京短期大学の宇野光一氏にお願いした。記して感謝の意を表したい。

（谷口 徹）

註

(1) 大橋信弥「守山市金ケ森西遺跡出土の有孔円板について」 同「再び守山市金ケ森西遺跡出土の石製模造品について」（前掲）において予報した。

(2) 大場磐雄編『神道考古学講座』第二巻 原始神道期 （1972）参照

(3) 注(2)に同じ

(4) 大場磐雄『祭祀遺跡－神道考古学の基礎的研究－』（1971）

(5) 小野真一『祭祀遺跡』・『祭祀遺跡地名表』（ニューサイエンス社 1981・1982）

(6) 西田弘・鈴木博司「新開古墳」（『滋賀県史蹟調査報告』第12冊 滋賀県 1961）

(7) 西田弘「毛刈古墳」（同上書所収）

(8) 鈴木博司・近江昌司「下味古墳」（同上書所収）

(9) 柴田実ほか『滋賀県史蹟名勝天然記念物概要』（滋賀県 1936）

(10) 大橋信弥・山崎秀二・谷口徹・辻広志『服部遺跡発掘調査概報』（滋賀県教育委員会 1980）

(11) 大橋信弥・別所健二・谷口徹「野洲町下鈴子遺跡Ｅ・Ｓ地区」（『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅳ－Ⅱ』滋賀県教育委員会 1977）

(12) 近藤滋・石橋正嗣・石原道洋『軽野正境遺跡発掘調査報告書』（秦荘町教育委員会 1979）

(13) 山崎秀二ほか『古身南遺跡発掘調査報告書』（『守山市文化財調査報告書』第６冊 1980）

(14) 山崎秀二「守山市播磨田東遺跡出土の石器」（『滋賀文化財だより』No.7 滋賀県文化財保護協会 1977）、同「守山市播磨田東遺跡の玉作工房址とその遺物」（同上 No.18 1978）

4．自然遺物

本遺跡では、主として多くの溝内より、自然木が出土したほか、Ｔ－16・Ｔ－15の溝内より、桃の果核が比較的多く出土している。すなわち、近接して所在するＳＤ34・ＳＤ29の溝内より、それぞれ、60個＋α、35個＋αの桃の果核が出土をみたのである。そして興味深いのは、そのうち前者には10個、後者には２個の、半月状にえぐられたものが認められたことである。この種の遺物については、すでに兼康保明氏が、新旭町森浜遺跡の出土例を中心に、詳細な論究をされており、桃のもつ呪力と関連して、意識的に集めて「まじない」に使用されたことを指摘されている。ＳＤ29・ＳＤ34からは、一部庄内式に並行するものもあるが、大半が布留Ⅰ式（新）段階[(註1)]とみられる土器が大量に出土しており、ほぼ森浜遺跡に近い年代とみられる。したがって、本遺跡の場合も、明確な根拠はないが、何らかの祭祀に使用された可能性はあろう。なお本遺跡例については、えぐりのあるものもないものも、核長 2.7～ 1.9cmで、大きなちがいはみとめられなかった。 （大橋信弥）

註

(1) 兼康保明「半月状にえぐられた桃の果核についての覚書－高島郡新旭町森浜遺跡出土資料を中心として－」（『近江地方史研究』第７号 1978）

Ⅵ. 考　　察

1．金ケ森遺跡出土の布留式土器について

a．布留式土器研究略史

今回の発掘調査で、各トレンチより多量の布留式土器が出土した。しかし、先にも述べたように大半が溝内からの出土で、混在が著しく、残念ながら層位的に把握することはできなかった。ここでは、従来の畿内における布留式土器研究に導かれて当遺跡の土器について若干の考察を行ってみたい。

まず、今日までの畿内における布留式土器研究は、昭和13年の末永雅雄氏による「布留式土器」の提唱以後、昭和30年代に至るまで、遅々として進まなかったが、ようやく昭和31年に刊行された岡山県笠岡市高島王泊遺跡の報告によって編年的細分が一歩前進せしめられた。(注1) その報告書の中で、坪井清足氏は、王泊第五層が、小若江北遺跡出土の土器に併行することを指摘されたのである。(注2)

さらに、昭和37年、大阪府船橋遺跡の調査によって、近畿地方で始めて「布留式土器」に先行する土器群が確認されたのを始め、遺構に伴わなかったが、O地区において布留式土器が層位的に把握され、小若江北遺跡→ＯⅠ→ＯⅡ→ＯⅢ・ＯⅣという編年的細分が呈示された。(注3)

近年の資料の増加に伴い、編年的細分も諸氏により検討されるようになった。

まず、木下正史・安達厚三氏等によって飛鳥地域出土の古式土師器の型式学的・層位学的の両面から詳細な検討がなされ、坂田寺下層→上ノ井手遺跡ＳＤ031、藤原宮ＳＤ912及びＳＤ914→上ノ井手遺跡井戸ＳＥ030下層→同上層という編年的細分が試みられた。そして、伊勢湾地域に普遍的なＳ字状口縁甕型土器が、大和地方においても広く分布することから、畿内の古式土師器の編年に対比され、Ｓ字状口縁甕の分類と編年の試案を論じられた。(注4)

次いで石野博信氏は、布留式土器を三型式に分類され、纒向４～６式＝布留１～３式と位置づけされ、布留３式には、古式の須恵器が伴出するとされた。ただこれは、同一地区の層位的な調査によるものではなく、平城宮下層（纒向４式）→小若江北（纒向５式）→纒向辻地区土坑35（纒向６式）と他地域の土器を型式的に比較検討されたものであった。

又、前方後円墳出現期の社会を、検討しようとされた都出比呂志氏は、(注5) その立論の一根拠として、布留式土器の細分を論じられた。都出氏は、布留式を古・中・新相の三期に区分することを提唱され、河内の資料で、中相に小若江北式を、古相に良好な資料ではないとした上で、船橋ＨⅠ地点、馬場川Ｔ地点の資料を呈示し、新相として船橋ＯⅠ・ＯⅡを上げ、大和の資料として上ノ井手井戸下層を、小若江北と船橋ＯⅠの間に位置づけられた。

そして近年、奈良県発志院遺跡の報告書が刊行され、藤井利章氏によって(注6) 畿内の布留式土器が包括的に検討された。そこで次にやや詳しく紹介したい。

発志院遺跡では、(注7) 溝・土坑等より多量の布留式土器が出土し、かつそれらが、層位的に取り

上げられている。中でも神築田溝SD50は、巾6.5m、深さ0.8mの大溝で、最上層・上層・中層・下層・最下層の5層に分層、各々、最上層＝布留3式（古）、上層＝布留2式（新）、中層＝布留2式（古）、下層＝布留1式と比定された。

まず、最下層からは、少量の弥生土器が出土したが、下層には、古式の布留式土器が多量に含まれており、甕・壺・小型丸底壺・器台・高坏等がある。甕B2類は、端部を丸く、又は尖り気味に収めるもので、丸底のやや胴長を呈し、内面は、ヘラケズリにより調整を行うものである。壺は、二重口縁で、口縁屈折部には、明瞭な段を形成する等、布留式土器の古式としての特徴をよく供えている。小型丸底壺は、口径が、体部最大腹径を凌駕するものはなく、体部内面ヘラケズリ、体部外面は、細いハケ調整を施し、下半にヘラケズリを行うものがある。これらは、船橋OI及び王泊第5層のものに類似するとして下層＝船橋OI＝王泊第5層＝布留1式とされた。

中層では、甕B2類の口縁部内側の肥厚が非常に顕著なものとなり、その数も甕全体の約75％という高い割合を占める。高坏は、下層のものに比べ小型化し、外面にハケを多用していたものから横ナデ調整が主流となり、小型丸底壺に関しても大きな変化はみられないが、高坏と同様に横ナデ調整を行うものが多くなるなど、布留1式に比べ新しい様相を呈し、船橋OIIや上ノ井手井戸SE030上層のものに類似するとされた。

上層では、甕B2類の比率が、約50％と若干少なくなり、肥厚の度合いも布留2式（古）より弱くなり、端部内面に段を有するようになる。

壺は、二重口縁A類が全く廃絶し、かわって直口壺D型式が圧倒的多数を占めるようになり、布留1式で盛行した外面ハケ調整は姿を消しヨコナデ仕上げに変わる。又、下半にヘラケズリを施すものもある。

小型丸底壺においては、ハケ調整は全く使用されず、すべてヨコナデ調整により、下半には、ヘラケズリが多用されるようになる。さらに、この段階で、一点のみであるが、古式の須恵器（陶邑I－2）が共伴するとし、中層より新しい様相を示すものとされた。

SD50最上層は、土師器甕・壺類の減少化、坏A類の増加に伴う須恵器の多量使用の時期である。須恵器には、高坏・坏身・坏蓋・壺・鉢などがあり、5世紀後半の年代があてられる。又、溝SD206・SD113・SD204では、SD50最上層より須恵器の出土量は、爆発的に増え（古）段階での須恵器の比率は23％であったが、（新）段階では、土師器60％、須恵器40％と高い割合を示し、器種では土師器・須恵器共に坏類が圧倒的に多くなる。これを布留3式とし、2式と同様古・新に細分されるが、層位的に把握されたものではなく、須恵器の形式編年に依拠したものである。

以上、これまでの布留式土器についての編年研究のあらましを述べた。そこで次に、これまでの諸研究を包括的に論じた藤井氏の編年案の検討を中心に、若干の問題点を提出しておきたい。

b．布留式土器の細分

庄内式から布留式へ

まず、藤井氏は、船橋遺跡O地区の出土遺物と発志院遺跡を対比して船橋ＯⅠ＝布留１式、ＯⅡ＝布留２式、ＯⅢ・ＯⅣ＝布留３式と理解し、ＯⅡと共に少量の須恵器を共伴したＨⅡ、ＫⅡ出土の土器をＯⅢ＝布留３式（古）の時期に含まれるべきであるとし、又、ＯⅠとＯⅡの間に１形式入るとの可能性を示唆しておられる。そして、木下・安達論文に関しては、坂田寺下層→上ノ井手溝031→上ノ井手井戸ＳＥ030下層→同上層の細分案に対して、細分の理由はみあたらないとして坂田寺下層＝上ノ井手溝031＝布留１式とし、上ノ井手ＳＥ030下層、同上層＝布留２式（古）と理解され、さらにＳＥ030上・下層は、細分の可能性があると考えられている。

確かに坂田寺下層と上ノ井手溝ＳＤ031の細分については、木下・安達氏も述べておられるように坂田寺下層に若干の古い内容が含まれるが、その年代差は、微差であり近似したものと言えよう。又、藤井氏も指摘されているように、甕・壺類には、形態的な差はほとんど認められず、鉢Ａ類の小型化及び坂田寺下層出土の小型丸底壺Ａ類と上ノ井手溝出土のＢ類の形態、調整手法等の差違を時間的経過による産物と理解するには検討を要するであろう。

只、都出氏が一部資料を呈示して指摘されているように今後の資料増加によって、庄内式土器から布留式土器への移行の土器群が、さらに詳細に把握された場合、細分の可能性はあると考えるが、現時点での限られた資料の中では細分は不可能と言える。

船橋ＯⅠの位置づけ

安達・木下氏は、船橋ＯⅠを上ノ井手井戸上層よりやや新しい要素をもつが、ほぼ併行するものとされていたのに対し、藤井氏は、船橋ＯⅠを上ノ井手溝・同井戸030下層及び神築田溝ＳＤ50下層に併行するものと考えておられる。しかしながら、船橋ＯⅠは、次にみるようにもっと複雑な要素を含んでおり、時期的にもさらに幅広く考えうると思われる。

まず、ＯⅠには、口縁端部がわずかに内厚する甕類や、扁球状の体部に外反してのびる口縁部を有する小型丸底壺（109～111）で上ノ井手井戸ＳＥ030下層のＣ類に類似したものを含んでいるかと思えば、高坏類には、安達氏が指摘されるように井戸下層のものより明らかに新しいものがあり、井戸ＳＥ030上層でＣ類としている坏部が、大きく外反する口縁部の端部を削って平坦な面をなすもの（121～124）やさらに新しい、坏部が椀形を呈するもの（116・117）も含んでおり、高坏を見る限りでは、上ノ井手井戸ＳＥ030上層と同時期又は、若干新しくなると思われる。又、船橋ＯⅠは、藤井氏が、言われるように、神築田溝ＳＤ50下層出土土器と類似するものがあるが、椀形を呈する坏部を有する高坏（116・117）は、神築田溝ＳＤ50中層出土の高坏Ｃ１類（278～280）に、又、内湾気味に上方にのびる坏部（118）は、神築田溝ＳＤ50中層出土の高坏Ｂ２類（267～277）に類似するものである。

したがって、船橋ＯⅠは、安達・木下氏の言われる上ノ井手井戸下層及び上層、藤井氏の言われる神築田ＳＤ50中層および下層を含むものとみられ、上ノ井手井戸、神築田の資料によって、船橋ＯⅠは、新・旧に細分されうると考える。

船橋ＯⅡの位置づけ

藤井氏は、船橋ＯⅡを上ノ井手井戸ＳＥ030上層＝神築田ＳＤ50中層と理解されているが、上

記のことを考慮するなら、当然船橋ＯⅡの時期は、さらに下がるものと見られる。

まず、ＯⅡ出土の高坏（216）は、丸い塊形をなすもので、神築田ＳＤ50上層出土の高坏Ｃ２類（374・375）と類似するものである。

又、船橋遺跡においては、ＯⅡより最古式の須恵器が共伴している（ＴＫ73型式、陶邑Ⅰ－１段階）。一方、神築田ＳＤ50上層においても、最古式の須恵器（Ⅰ－２段階）が共伴しており、船橋ＯⅡ出土土器は、神築田ＳＤ50上層とほぼ並行すると言ってもよいと考える。

神築田溝ＳＤ50下層土器の再検討

次に、発志院遺跡の編年で、藤井氏は、神築田溝ＳＤ50の出土遺物を中心に布留１～３式に分類され、各々（古）、（新）に細分されている。しかし布留１式については、細分を保留され、神築田溝ＳＤ50下層を布留１式にあてられている。

神築田溝ＳＤ50下層出土の甕類は、口縁端部が内厚する甕Ｂ２類より、端部が尖り気味又は丸く収めるＢ１類の方が多く、これが細分の要素と言えるかどうかは、もう一つ判然としない。しかし、小型丸底壺は、船橋ＯⅠや、上ノ井手井戸ＳＥ030下層と類似するものが多く、口径が体部最大腹径を凌駕するものはなく、同径又は口径が小さくやや球形化した体部より短く「く」字形に外反するものである。調整は、内面ヘラケズリ、外面には、細いハケ調整を行い、下半にヘラケズリを施すものもある。この種の小型丸底壺は、明らかに船橋ＯⅠ出土のもの（109～111）や、上ノ井手井戸ＳＥ030下層のＣ類と類似するものであり、小若江北及び上ノ井手溝ＳＤ030出土のものとは明らかに異なる。小若江北及び上ノ井手溝ＳＤ030出土の小型丸底壺は、口径が、体部最大腹径を凌駕するものであり、内外面に細いヘラミガキを施すものである。

高坏類は、小若江北及び上ノ井手溝ＳＤ030出土の口縁端部を尖り気味に収め、丁寧な調整を施すものよりむしろ、ハケ調整、ナデを併用したやや粗い調整のものが多い。又、口縁端部も外反気味に収めるもので、上ノ井手井戸上・下層出土のものに類似すると考えられる。

以上、神築田ＳＤ50下層出土土器は、布留１式でも、小若江北及び上ノ井手溝よりは新しい様相を呈するもので、船橋ＯⅠ・上ノ井手井戸ＳＥ030下層に類似する。藤井氏は、布留１式の細分を保留されたが、従来の資料においても細分は可能と思われ、小若江＝上ノ井手溝＝布留１式（古）、船橋ＯⅠ＝上ノ井手井戸ＳＥ030下層＝神築田ＳＤ50下層＝布留１式（新）と細分されると考える。

ｃ．県下出土の布留式土器

以上、前節において近畿地方における編年的研究の概要と若干の私見を述べたが（第24図参照）、次に、県内出土の布留式土器について簡単に記してみたい。

県内では、近年の発掘調査の増加に伴い、布留式土器を出土する遺跡も次第に知り得るようになり、昭和45年に調査された長浜市鴨田遺跡をはじめ、大津市滋賀里遺跡・入江内湖西野遺跡・野洲町下緑子遺跡・同五之里遺跡・長浜市高田遺跡等の他、未報告のものを含めると多数にのぼる。このうち、長浜市鴨田遺跡[注8]・同高田遺跡[注9]・入江内湖西野遺跡等において若干の検討がなされているが、一括性のある良好な資料に恵まれないためもあり、県内の布留式土器研究

第24図　布留式土器編年細分（案）

		河内	大和	発志院
布留Ⅰ式	古	小若江北	坂田寺下層 上ノ井手溝	
	新	船橋ＯⅠ（古）	上ノ井手井戸下層	神築田ＳＤ50下層
布留Ⅱ式	古	船橋ＯⅠ（新）	上ノ井手井戸上層	神築田ＳＤ50中層
	新	船橋ＯⅡ （須恵器出現）	（須恵器出現）	神築田ＳＤ50上層 （須恵器出現）
布留Ⅲ式	古	船橋ＯⅢ		神築田ＳＤ50最上層
	新	船橋ＯⅣ		伝法池ＳＤ206

は、畿内に比べてかなり立ち遅れの感がある。

そこで、まず最初に、先に検討した上ノ井手遺跡、発志院遺跡出土遺物を比較資料として県内の布留式土器についておおよその位置づけを行ってみたい。

長浜市鴨田遺跡

長浜市鴨田遺跡は、姉川流域に位置する縄文～奈良時代にかけての複合遺跡である。遺構としては、自然流路とみられる溝が大部分を占め、各溝は、弥生土器と古墳時代初頭の土器が混在しており、層位的に取り上げることはできなかったとされている。ただ、周知のことであるが、湖北という地理的関係から、山陰・北陸・東海・畿内の接点として複雑な文化相を示しており、その内でも伊勢湾東海系の影響がかなり濃厚である。

まず、溝Ａ（沼沢地）では、近江・東海系の甕に混じって、布留式に通有な口端部が肥厚する甕が６点出土している。口縁端部を丸く収めるもの２点（上ノ井手遺跡Ａａ類）、平担又は、わずかに内傾するもの４点（上ノ井手遺跡Ａｂ類）で、体部は、やや胴長の丸底を呈し、外面ハケ調整、内面ヘラケズリを行う。又、近江型の受口状口縁甕には、口縁端部が外傾するもの（金ケ森ＡⅤ類）と口縁部立ち上がりが非常に甘いもの（金ケ森ＡⅧ類）があり、体部はほぼ球形で丸底を呈する。

小型丸底壺には、小さな扁平な体部から大きく外反してのびる口縁部で、外面に丁寧なヘラミガキ調整を施す上ノ井手遺跡Ａ・Ｂ類や、同じく扁平な体部に、口縁部が体部最大腹径を上回るもの、同径のもの等上ノ井手遺跡Ｃ・Ｄ類に類似するものもある。

高坏は、坏部が内湾して開く東海、元屋敷式の影響を受けたもの（９・10）や、坏底部と口縁部境界に甘い稜をなして口縁部が外反してのび、脚柱部より屈折して開く裾部を有するものなどがある。この種の高坏に関しては、資料不足により不明であるが、時期的には、下がる可能性を持つものと思われる。

小型器台も量的には多くないが、主に元屋敷期のもので、受部が浅い皿状を呈するものである。

以上、溝Ａでは、近江・東海系土器の多い中で、若干ではあるが、畿内系の甕、小型丸底壺なども認められ、そのほとんどが上ノ井手溝及び間非戸下層に並行すると考えられる。又、東海系の土器では、元屋敷期を中心に一部、高坏など石塚期よりも新しいものも含まれると推測されるが(注10)、今一つ判然としない。又、溝７出土の小型器台（7—22）は、発志院遺跡、神築田溝

ＳＤ50上層出土の小型器台Ｂ１類に類似するもので布留２式（新）まで下がる可能性もある。

入江内湖西野遺跡

入江内湖西野遺跡は、内湖の干拓工事に伴い、多量の遺物が発見された遺跡である。昭和51年矢倉川改修工事に伴い、内湖の一部が調査され、明確な遺構は検出されたかったが、包含層より大量の土器が出土した。一応第１層・第２層上部・第２層下部・第３層の４層に分層して遺物を取り上げたが、混入が著しく、一括遺物としての明確さには欠けるとされる。しかし、大半が布留式土器で占められており、第２層下部出土土器をみると、第３層で中心を占めていた近江型甕Ａ類に代わって、畿内型の口縁端部が肥厚する甕Ｂ類が多くなり、端部を平坦又は、わずかに内傾する上ノ井手遺跡Ａｂ類が主体を占める。

小型丸底壺（56・62）は、扁球状の体部より、口縁部が外反してのびるもので、口径と体部最大腹径が、ほぼ同径である。この種のものは、上ノ井手井戸030下層出土の小型丸底壺Ｂ類に類似するものである。

又、壺Ｇ類とする口縁部が２段に屈曲するもの（34）は、神築田溝ＳＤ50下層出土の甕Ａ１類に類似する。

高坏（１～35）は、ほとんど坏底部・口縁部が、甘い稜をなして口縁部が外反してのびるもので、端部を丸く収めるものもあり、ほとんど指押え及び横ナデ調整を行っている。いずれも中ぶくれの脚柱部より屈折して開く裾部を有するもので、発志院遺跡高坏Ｂ１類に類似するものである。

小型器台の出土量は少なく、受部がやや内湾状にのびる皿状を呈し、脚部は、大きく「ハ」字状にのびるもので、神築田溝ＳＤ50下層に類例が認められる。

以上、第２層下部には、上ノ井手井戸ＳＥ030下層及び神築田ＳＤ50下層の出土土器に類似するものが多いが、若干、時期の下がるものも含まれると考える。又、第２層上部出土の土器は、下部のものと比較してやや時期は下がると思われるが、微差と考えられ、第２層上部で共伴した須恵器は、５世紀末～６世紀前半の年代が推定され、或いは、混入したものと考えられる。

長浜市高田遺跡

長浜市高田遺跡は、姉川とその支流である草野川の沖積作用によって造られた長浜平野の位置する低地性の遺跡である。昭和53年、長浜市教委が実施した調査で、明確な遺構の検出はなかったが、旧河川敷内の氾濫によって堆積したとみられる遺物包含層を検出し、弥生時代末～古墳時代初頭の遺物を多量に出土した。この内、布留式並行の土器は、第７層と８層より検出されているが、鴨田遺跡と同様、北陸・東海系の土器もかなり出土している。

まず、第７層では、新・古の土器が混然とした状態で検出されており、庄内式並行の土器及び東海・元屋敷期のＳ字状口縁台付甕などの他に布留式に通有な土器も若干含まれる。甕類では、口縁端部が内厚する上ノ井手遺跡Ａａ類、Ａｂ類があり、小型丸底壺・高坏には、上ノ井手遺跡井戸ＳＥ030下層のものに類似しているものが多い。第７層は、庄内～布留１式の段階と考えられる。

第８層は、第７層とあまり差が認められないが、やや新しく、東海・石塚期の壺（1130）の他、

畿内系の土器としては、小型丸底壺（ 1157 ）、高坏（1154）など、神築田ＳＤ50中層に類似するものを含んでおり、第８層は、布留１式（新）～布留２式（古）段階と考えられる。

以上の他、湖北においては、多数の出土例が知られるが、資料として良好とは言えず、一応省略したい。ただ、湖北町今西遺跡では、出土遺物は少量であるが、古式の布留式土器が出土しており、口縁端部が丸く内厚する畿内型甕（上ノ井手遺跡Ａａ類）や、庄内式に近いと考えられる口縁部が大きく開く小型丸底壺などが出土しており、庄内又は、庄内直後の時期があてられると考える。(注11)

大津市滋賀里遺跡

湖西地域では、大津市滋賀里遺跡・同穴太遺跡・同北大津遺跡他が知られる。

湖西線の工事に先立って調査された大津市滋賀里遺跡(注12)では、方形周溝墓及び住居址より庄内又は、布留式並行の土器が出土しており、報告書によれば、その一部が、小若江北遺跡に類似するとされているが、明確なことは不分明である。しかし、出土した布留式土器は、明らかに古い様相を呈しており、布留１式段階に相当すると考えられる。

又、ⅣＢ区下層でもかなりの布留式並行の土器が出土しているが、新・旧混在した状態で、明確な判断はできない。しかし、出土遺物の中には、上ノ井手井戸下層出土の甕Ａｂ類、神築田ＳＤ50下層出土の甕に類似するもの（Ｃ166）や、壺Ｃ１類に類似するもの（Ｃ165・Ｃ167）などが含まれており、一応、布留１式段階に相当するとみられるが、一方、甕類などに時期的に新しいと思われるものも存在しておりⅣＢ区下層には、須恵器出現直前までの土器もあると考えられる。

ⅢＥ区上層には、五世紀中葉～６世紀前半までの須恵器と共に土師器も共伴しており、発志院遺跡、神築田ＳＤ50最上層及びＳＤ206出土のものに類似しており、布留３式の段階のものと思われる。

大津市穴太遺跡

大津市穴太遺跡は、滋賀里遺跡の北方に位置しており、国道 161号線バイパス工事の建設に先立つ試掘調査の際に発見された遺跡で、少量ではあるが、布留式並行の土器が出土している。甕は、口縁端部が内厚して上端を平坦に収めるもので、上ノ井手遺跡Ａｂ類に類似するものである。小型丸底壺は、扁平な体部に、大きく外反して開き、外面に細いヘラミガキを施し、底部にはヘラケズリを行うもの（２）と、球状の体部に短く「く」字形に外反して開く口縁部を付し、外面に細いハケ調整を行うもの（３）の２個体あり、上ノ井手井戸下層出土の小型丸底壺Ｃ・Ｄ類に類似するものである。高坏は、底部と口縁部境界に甘い稜をなして口縁部が外反してのびる坏部で、外面横ナデ調整、内面ヘラミガキを施すものである（４）。脚部は、（４・５）共、細いヘラケズリを施した脚柱部より屈折して広がる裾部が付く。

以上、穴太遺跡出土の土器は、一括遺物としてまとまったもので、上ノ井手井戸下層出土の土器と類似しており、又先に見た滋賀里遺跡ⅣＢ区下層のものとも共通するものである。一部の資料なので、明言はできないが、滋賀里遺跡と同様に布留１式を中心にその前後の年代があてられると思う。

上記の他、湖西では、まだ未報告であるが新旭町森浜遺跡において多量の布留式並行の土器が出土しており、湖西地域における古墳時代前半を考える上で逸することのできない点を付言しておきたい。(註13)

野洲町下繰子遺跡

湖南地域においてもすでに幾つかの遺跡が知られているが、上記と同様、明確な遺構に伴うものではなく、資料も比較的少ない。

野洲町下繰子遺跡では、旧河道より布留式土器が若干出土しているが、弥生土器及び庄内式並行の土器の混入も認められ、一括資料としては扱い難いものである。しかし、畿内型甕では、口端部上端が平坦又は、やや内傾する上ノ井手遺跡Ａｂ類がみえ、小型丸底壺にしても、全体の形態は不明であるが、口縁部が外反して長くのび、上ノ井手井戸下層に類似するものと考えられ、下繰子遺跡の布留式土器は、布留１式（新）段階を中心に前後の時期が推定される。

野洲町五之里遺跡

五之里遺跡・富波Ｉ区第２地区ＳＫ22内より布留式土器がまとまって出土している。まず、近江型受口状口縁甕（195～201）は、口縁部がすべて無文で横ナデ調整によるものである。これは、布留式並行の近江型甕としての特徴であり、金ケ森西遺跡において最も多いＡⅢ類と一致する。又、口縁端部が肥厚する畿内型甕も出土している。口縁部上端を平坦に収め、外面ハケ調整、内面ヘラケズリを行う体部がほぼ球状を呈する上ノ井手井戸下層Ａｂ類に類似するものである。又、壺では、口縁部が外反してのび、端部が強く内傾する発志院遺跡、神築田ＳＤ50下層出土の壺Ｃ２類に類似のものも出土している。しかし、残念ながら土坑ＳＫ22内では、甕・壺類のみで他の器種を共伴していないため、詳細な時期判断はできない。おそらく布留１式段階のものと考えられる。

以上、県内出土の布留式土器を簡単に検討してみたが、他にも多数の遺跡において布留式土器を出土している。

上記の限られた資料によって県内の状況を明確にすることはできないが、全体的に見て、県内の布留式土器は、非常によく似た出土状況を示していると考えられる。まず、湖北・湖西南部・湖南の各地において布留１式（古）段階のものが少量ではあるが認められる。しかし、各地共、布留１式（新）段階になると遺物の量は、最も多くなり、以後布留２式（新）段階までつづいている。しかし、かなりの地域差も認められ、湖北地方南部においては、北陸・東海系の影響が強く、長浜市鴨田遺跡では、畿内系20％、北陸・東海系30％の比率を示し、湖西南部においては、北陸・東海系は若干で、あとは畿内系と近江系が半々を占める。一方、湖南地域においては、近江系が、圧倒的に強く、特に甕類では、受口状口縁甕が、80％という高い比率で出土している。

又、須恵器との共伴関係であるが、船橋ＯⅡにおいて最古式と考えられるＴＫ73型式、又発志院遺跡神築田ＳＤ50上層・最上層でＴＫ73型式に次ぐＴＫ103・ＴＫ208・ＴＫ109－Ⅱ型式と比較的類似するものが出土している。しかし、県内においては、現在のところ、須恵器と布留式土器の共伴関係を示す良好な資料はなく、今後の検討が必要と考えられる。

d．金ケ森西遺跡Ｔ－10・ＳＤ20出土土器

先に、県内出土の布留式土器について簡単な検討を加えてみたが、次に金ケ森西遺跡Ｔ－10・ＳＤ20出土土器に関して考察を進めてみたい。

ＳＤ20は、東西に流れる旧河道で、深さ0.42ｍ、巾４ｍの溝である。隣接するＳＤ21も出土遺物より、同時期に形成、埋没した旧河道の一部と考えられ平行して東西に走る。

ＳＤ20上層は、布留式土器を多量に含む黒褐色粘土層が堆積しており、下層は、少量の弥生土器及び庄内式並行の土器類を含む。これは、ＳＤ20に限らず、金ケ森西遺跡のすべての溝に共通して言えることであるが、上層（黒褐色粘土層）にのみ遺物が厚く堆積し、下層には、極少量検出されるにとどまる。

ＳＤ20上層には、甕Ａ・Ｂ・Ｃ類がある。甕Ａ類には、ＡⅢ・ＡⅣ・ＡⅤ・ＡⅥの４タイプがあり、Ａ類についで多いのが、ＢⅡ類である。実測できたものは、１点（Ｅ082）のみであるが、実測のできなかったものが数点あり、上端が平坦又は、わずかに内傾するものである。中には、内傾の強いものもあり、上ノ井手井戸上層と神築田ＳＤ50中層の（208）に類似したものもある。甕Ｃ類としたものは、口頸部が短く「く」字形に外反するものである。又、ＳＤ21には、口縁部が短く外湾してのびる発志院遺跡甕Ｃ類に類似するものがある。

ＳＤ20出土の壺類は、少なく、実測できたものはなかったが、ＳＤ21には、二重口縁で、頸部に凸帯を廻らす壺口縁が一点（Ｅ135）出土している。

小型丸底壺には、Ａ・Ｂ類があり、Ａ類（Ｅ090）は扁平な体部に大きく開く口縁部が付くもので、口縁部内外面共横ナデ調整、体部外面も上半ナデ、内面ヘラナデを行う。上ノ井手井戸下層や鴨田遺跡溝Ａ出土のものに類似するものである。

Ｂ類（Ｅ091）は、球形の体部に内湾気味に開く口縁部で、内外面共横ナデ調整を行い、体部外面下半にヘラケズリを施す。県内でもこの種の小型丸底壺は、多数出土しており、外面細いハケ調整を施すものや後ナデを行うものがある。鴨田遺跡溝Ａ、大津市滋賀里遺跡、同穴太遺跡他で出土している。

高坏には、Ｂ・Ｃ類がある。Ｂ類（Ｅ092・Ｅ093）では、口縁部が外反して開き端部を尖り気味に収める。内外面共ナデ成形によるが、わずかにハケ調整痕を残すものである。発志院遺跡や県内でも多数出土している。

Ｃ類（Ｅ096）は、丸味のある坏部で、発志院、神築田ＳＤ50中層に類似のものがある。脚柱部は、やや中ぶくれの柱状部に屈折して広がる裾部が付くものがほとんどであるが、比較的短い脚柱部に、短く屈折して開く裾部を付すもの（Ｅ101・Ｅ102）があり、神築田ＳＤ50中層の中に類例を求めることができる。

器台は、ＳＤ21より受部が一点（Ｅ159）出土している。受部口縁部と底部境界は、甘い稜によって分けられ、口縁部は、短く外反してのび、端部を平坦に収めるものである。県内での出土は、あまり知られていないが、発志院遺跡・神築田ＳＤ50下層出土のものにやや類似するものが認められる。

下層には、弥生中期の土器の他、庄内並行と思われる坏部が椀状を呈する高坏（Ｅ085）や、

浅い皿状の器台（E112）等がみられ、高坏は、入江内湖西野遺跡や北大津遺跡他に類似するものが認められる。

以上、簡単ではあるが、ＳＤ20及び21出土土器の検討を行ってみたが、全体的に布留式でもやや古相のものが多いと考えられる。まず、甕ＢⅡ類では、上ノ井手井戸下層出土の甕Ａａ類及びＡｂ類に類似するものが圧倒的に多い。しかし、少量ではあるが、強く内湾してのびる口縁部や、高坏の中には、坏部の丸いものなどがあり、これらは、布留２式（古）段階と推測される。又、小型丸底土器は、上ノ井手井戸下層出土のＣ・Ｄ類に類似するものであり、布留１式（新）段階と思われる。

一方、Ｔ－10・ＳＤ25もほぼ同時期に形成された溝であるが、若干、新しい様相も認められる。甕ＢⅡ類では、上ノ井手遺跡Ａｂ類と共に端部が強く内傾するＡｃ類が出土している。高坏（E213）は、底部・口縁部境界に稜をなし、口縁部が外反して直線的にのびるもので、布留１式（新）段階のものであるが、脚部の中には、やや中ぶくれの柱状部より大きく屈折して広がる裾部が付くもの（E216・E217）など、発志院遺跡・神築田溝ＳＤ50中層出土のものに類似するものが認められる。又、器台（E234）は、受部が「ハ」字状に開くもので、神築田溝ＳＤ50中層出土の器台Ｂ類に類似するものである。

以上、ＳＤ20・21及びＳＤ25は、布留１式（新）段階を中心時期として、その前後の時期（布留１式～布留２式）を含むものである。このことは、当遺跡の年代をも示すもので、布留期の古い段階にその中心時期を考えることができる。

（付）　受口状口縁甕型土器

受口状口縁甕型土器については、近年、資料の増大に伴い、その研究は、著しい進展をみせ、系譜及び編年的細分等についても「北大津遺跡」において中西常雄氏によって試みられたのを始め、諸氏により検討がなされている。その結果、弥生時代後期の受口状口縁については、形態及び調整・施文等により、その編年は、次第に明らかにされつつの感があるが、未だ布留期のものについては、充分な言及はなされておらず、不明な点も多い。(注14)

金ケ森西遺跡でも、甕型土器の約80％が近江系受口状口縁甕型土器で占められている。その大半が、布留期のものと考えられるが、層位的に把握できなかったため、編年的細分には至らなかった。

一応、本遺跡出土の受口状口縁甕型土器を口縁部の形態などによりＡⅠ～ＡⅨの９タイプに分類したが、中でも、ＡⅢ類－端部をわずかに引き出し上端を平坦に収めるもの－が最も多い。しかし、弥生時代後期と考えられるＡⅠを除いて、ＡⅡ～ＡⅨ類に、今の段階では時期差は認め難く、将来に保留したい。

しかしながら、ＳＤ20・21とＳＤ25を比較した場合、ＳＤ25出土の受口状口縁が、頸部の屈曲が小さくなり、口縁部の立ち上がりも甘くなり鈍い段をなす（AⅧ）など若干新しい様相を呈すると考えられなくもない共伴の遺物でも、時期的に近似するとしながらも若干新しいもの

も加わっており、これを時期的な一つの特徴と言い得るかもしれない。さらに、長浜市鴨田遺跡溝A出土の受口状口縁甕型土器は、体部は球状で、内面をヘラケズリにより成形を行っているが、当遺跡出土のものはすべてナデ（全形は不明であるが肩部のみの観察において）調整によるもので、より新段階の近江型甕は畿内型甕の如く内面ヘラケズリを併用するようになるとも推測されるのである。

（大橋美和子・大橋信弥）

註

(1) 末永雅雄ほか「大和に於ける土師住居趾の新例」（『考古学』9－10　1938）

(2) 坪井清足『岡山県笠岡市高島遺跡調査報告』（岡山県高島遺跡調査委員会　1956）

(3) 田辺昭三・原口正三・田中琢・佐原真『船橋II』（平安学園考古学クラブ　1962）

(4) 木下正史・安達厚三「飛鳥地域出土の古式土師器」（『考古学雑誌』60－2　1974）

(5) 石野博信・関川尚功『纒向』（前掲）

(6) 都出比呂志「前方後円墳出現期の社会」（『考古学研究』103　1979）

(7) 藤井利章ほか『発志院遺跡』（『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第41冊　奈良県立橿原考古学研究所　1980）

(8) 丸山竜平ほか「野洲郡野洲町五之里遺跡発掘調査報告」（『滋賀県文化財調査年報　昭和五十一年度』滋賀県教育委員会　1978）

(9) 宮成良佐『高田遺跡調査報告書』（長浜市教育委員会　1980）

(10) 大参義一「弥生式土器から土師器へ－東海地方西部の場合－」（『名古屋大学研究論集（史学）』第47輯　1968）

(11) 中谷雅治『滋賀県湖北町今西遺跡発掘調査報告書』（湖北町教育委員会　1974）

(12) 須崎雪博「穴太遺跡出土の古式土師器」（『滋賀文化財だより』No.13，滋賀県文化財保護協会　1978）

(13) 兼康保明「よみがえる湖西の古代－水没した森浜遺跡を追って－」（『湖国と文化』第3号　滋賀県文化体育振興事業団　1978）

(14) 石原道洋「『受口状口縁甕土器』について」（『宮司遺跡・十里町遺跡調査報告書』所収　長浜市教育委員会　1977）

2．金ヶ森西遺跡の性格―むすびにかえて―

今回の調査は、湖南中部流域下水道整備計画にもとづく、配管工事にともなう調査で、結果的には、守山川と山賀川にはさまれた一帯に所在する金ヶ森西遺跡の中央部をほぼ南北に串ざしするような形で、トレンチを設定することになり、遺跡の南北の広がりについては、ほぼ確認できた。すなわち、今回調査したT－1からT－2のうち、山賀川以南に所在するT－1・T－2、および、山賀以北に所在するT－3・T－4では、奈良時代以前に遡及する遺物が皆無であるのに対し、T－6以北においては、出土遺物の大半が、布留式土器に対応するものであること、T－4～T－5付近が、自然水路が錯綜し大規模な旧河道である可能性が推定されることなどから、この付近に金ヶ森西遺跡の南端が推測され、T－28付近から以北守山川に到る部分では遺構は検出されず、旧河道の様相を示すところから、一応、本遺跡の北限を推定することができると考えるのである。

周知のように、野洲川下流域の、古代景観の復元的研究によるなら、現在は守山市北端に本流をもつ野洲川の旧本流が、律令時代前後までは、本遺跡のやや南に所在し、旧野洲郡と旧栗太郡の郡界をなしていたことが明らかにされており、本遺跡が、本来、旧野洲川北岸の微高地として形成されていたこと、したがって、旧野洲川の洪水により、大きな影響を受けていたことが予想されるのである。本遺跡がこの周辺では、やや高い場所に占地しているのにかかわらず、古墳時代前期の一定期間しか、ムラを存続し得なかったのは、この点をぬきにしては、考えることはできなかったと考える。

上述のように、本遺跡の中心的な存続期間は、いわゆる布留式土器の盛行期に限定されるが、周辺に弥生時代の遺跡が存在したことは、若干出土をみた弥生土器の存在から推定される。したがって、おそらく本遺跡の東に所在した弥生時代のムラが、古墳時代前期後半ごろから、本遺跡に移動したとも考えうるであろう。

本遺跡は、遺構の分布から、大きく三つの地域に分けることができる。すなわち、T－10付近からT－15付近、T－17からT－21付近、T－24からT－28付近の三つの地域である。今、これをA・B・C区と仮称するなら、これらはいずれも、大規模な河道により分断されており、それぞれにおいて、竪穴住居址や、その残骸とみられるピット群が存在している。ただC区では、竪穴住居址に切られて、方形周溝墓が検出されており、一時期墓地として占地されていたことが明らかである。墓地と集落の関係については、十分な資料がなく明確にしがたいが、A・B・Cの三つの集落が並存したのではなく、短期間ながらも、居住地域の移動がおこなわれたことが知られる。このことは、本遺跡が上述のとおり、旧野洲川本流の右岸微高地に所在しているため、たびたび洪水にみまわれ、同じ集落内でも移動を余儀なくされたのであろう。本遺跡内を東西に貫流する多数の溝は、洪水のはげしさを示すものであろう。

県内における布留式段階の集落調査は、意外に少なく、いわゆる布留式土器を大量に出土した遺跡としては、新旭町森浜遺跡と本遺跡ぐらいであり、この段階の集落のあり方を考えるうえで、本遺跡の存在は注目されるが、本遺跡にみられた不安定な様相は、この時期のムラが、

琵琶湖周辺から、やや内陸部へ後退していたことをうかがわせる。すなわち、本遺跡の場合、調査地が中心部でないこともあろうが、ムラが多くの溝により寸断され、散在する傾向が伺えるからである。ただ溝内より出土した土器の量や、石製模造品などにみえる祭祀遺物のあり方は、本遺跡が、かなりの規模をもっていたことが推測されるのである。さきに指摘した、石製模造品による「まつり」の盛行も、このように考えてくるなら、洪水になやまされた、古代人の祈りを示すものかも知れない。

（大橋信弥）

註

(1) 守山市編『守山市史』上巻（守山市役所　1973）

小林健太郎「地形と地質」（『草津市吉田の条里景観遺存地区の歴史地理学的調査報告』草津市役所　1974）

辰己　勝「野洲川下流平野の形成」（『地表空間の組織』1981）

出土遺物観察表

T－1　包含層出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考	
須恵器	甕		C001		○外開きの口頸部で、端部上端は外傾する面をなす。	○内外面共回転ナデ調整 ○口縁部と体部の接合点にヘラ先痕残存	色調 暗青灰色 胎土 細砂多量含有 焼成 堅緻	
	水瓶		C002	口径 3.4	○頸部より短かく直立する口縁部で水平にのび、端部を上方にわずかに肥厚させる。	○内外面共回転ナデ調整	色調 暗灰色 胎土 精良 焼成 堅緻	第Ⅱ層
	瓶		C003	底部 9.0 高台高 1.0	○高台は高く、断面逆台形を呈し、やや外下方にのびる。 ○体部は、ゆるやかに内湾してのびる。	○体部内外面共回転ナデ調整 ○貼り付け高台、貼り付け後ナデ	色調 淡灰色 胎土 精良 焼成 堅緻	
土師器	皿	AⅠ	H004	口径 14.4	○口縁部は、ゆるやかに内湾してのび、端部を丸く収める。	○粘土板成形 ○内外面共指押え	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	第Ⅱ層上層落ち込み
		AⅡ	H005 ～ H009	口径 7.2～9.8 器高 1.7～1.75	○丸味のある平底の底部より、口縁部は内湾してのび、端部を丸く収める。	○粘土板成形 ○内外面共指押え	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	H008 第Ⅱ層上層落ち込み
		B	H010	口径 8.8～9.6 器高 1.5～2.0 底径 4.0	○底部は、平底を呈し、口縁部はやや内湾気味にのびる。端部は、短かく外反して、尖り気味に収める。	○粘土板成形 ○内外面共指押え	色調 淡赤褐色 胎土 良好 焼成 良好	第Ⅱ層
		CⅠ	H011	口径 16.4 器高 2.35	○丸味のある底部より、内湾してのびる口縁部は、外反し、さらに端部を外方にわずかに引き出し丸く収める。	○粘土板成形 ○内外面共指押え	色調 褐色 胎土 良好 焼成 良好	
		CⅡ	H012 H013	口径 8.6～10.4	○丸味のある底部より、口縁部は外反してのびる。端部を外方にわずかに引き出し丸く収める。	○粘土板成形 ○内外面共指押え	色調 褐色 H013 淡赤褐色 胎土 良好 焼成 良好	
	羽釜		H014	口径 25.4	○口縁部は、やや内傾し、端部は方形を呈する。 ○つばは、下方にのび、断面三角形で端部を丸く収める。	○粘土紐つみ上げ ○口縁部内外面共指ナデ ○体部内面粗いハケ調整	色調 淡茶褐色 (断) 灰黒色 胎土 細砂多量含有 焼成 良好	南壁トレンチ第Ⅱ層
	皿		B015	口径 9.6 器高 1.5	○平底の底部より、体部は内湾気味にのび端部先端を鋭角に収める。	○粘土板成形 ○内外面共指押え	色調(内)淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	灰黒色
			B016	口径 10.4	○丸味を有する底部より、口縁部は外反してのび端部を丸く収める。	○粘土板成形 ○内外面共指押え	色調 黒灰色 胎土 良好 焼成 良好	

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考	
黒色土器	椀	A	B017 B018	口径 15.4 16.0	○体部は、ゆるやかに内湾し、端部を丸く収める。	○粘土紐つみ上げ ○口縁部内外面共横ナデ ○体部内外面共指押え及びナデ ○口縁部内面に一条の沈線	色調 外面一部及び内面黒色、内外面淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	第Ⅱ層
		B	B019 B020	口径 14.6 16.7	○体部は、ゆるやかに内湾し、口縁部は内反、端部を丸く収める。	○粘土紐つみ上げ ○口縁部内外面共横ナデ ○体部内外面共指押え及びナデ ○口縁部内面に一条の沈線（B019）	色調 外面一部及び内面黒色、内外面淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	B 019 第Ⅱ層
			B021	底径 6.0 高台高 0.8	○断面逆三角形の高台で、端部は丸い。	○貼り付け高台、貼り付け後ナデ	色調 褐色 胎土 良好 焼成 良好	
			B022 B023	底径 5.0 高台高 0.5	○断面逆台形の低い高台で、外端または内端で接地する。	○貼り付け高台、貼り付け後ナデ	色調(内)黒色 (外)淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	
			B024	底径 6.4 高台高 0.4	○断面逆台形の高台で、やや内傾する。	○貼り付け高台、貼り付け後ナデ	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	南壁トレンチ 第Ⅱ層
			B025	底径 5.0 高台高 0.3	○断面逆台形の低い高台で、外傾する。	○貼り付け高台、貼り付け後ナデ	色調 淡茶褐色 胎土 良好 焼成 良好	
陶磁器	椀		K026	底径 7.6 高台高 0.8	○断面逆台形の安定した高台で、端部を丸く収める。 ○体部は、内湾気味に斜上方にのびる。	○削り出し高台 ○内外面共回転ナデ調整	色調 淡灰色と白色の釉 胎土 精良緻 焼成 堅緻	
			P027	口径 16.4	○直線的に斜上方にのびる体部で、端部をわずかに外方に引き出す。	○内外面共回転ナデ調整	色調 白色 胎土 精良緻 焼成 堅緻	

T－1　SD3　出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考	
弥生土器	壺		E028	底径 7.0	○安定した平底を呈す。	○底部側面指ナデ ○内面指押え	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	第Ⅱ層
須恵器	坏蓋	A	C029	口径 13.6 器高 5.0	○天井部は高く扁平な蓋で、体部は内湾して外下方にのびる。体部と口縁部の境界は、凹線により明瞭に分けられる。 ○口縁部は、わずかに外方にひらき端部に内傾する面をとり鋭角に収める。	○天井部はほぼヘラ削り調整 ○内外面共回転ナデ調整 ○天井部に巻き上げ痕残存	色調 暗灰色 胎土 精良 焼成 堅緻	第Ⅱ層
			C030	口径 14.6	○天井部から体部にかけてゆるやかな曲線を描き外下方に流れるものと思われる。 ○口縁部は、直線的に外下方に流れ端部を丸く収める。	○内外面共回転ナデ調整	色調 淡灰色 胎土 精良緻 焼成 堅緻	

T－2　包含層出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考	
古式土師器	甕	A Ⅱ	E031	口径 14.7	○受口状口縁で、頸部より屈曲して短かく上方に立ち上がり、端部を外方に引き出す。上端部はやや凹状を呈す。	○口縁部内外面共横ナデ調整 ○頸部内面ハケ調整後指ナデ	色調 淡褐色 普通 胎土 細砂少含有 焼成 良好	第Ⅰ遺構面
	高坏		E032		○背の低い脚部で、付根から「ハ」字状にゆるやかに開く。	○外面ハケ調整後ナデ ○内面指押え ○内面にしぼり目及びヘラ先痕残存	色調 淡赤褐色 やや軟 胎土 良好 焼成 やや	第1遺構面
須恵器	坏蓋	A	C033		○丸味のある体部より口縁部は、屈曲して直線的に下方に流れ、端部はやや内傾する。	○内外面共回転ナデ調整	色調 灰色 良軟 胎土 精良 焼成 やや	第Ⅰ遺構面

T－2　SD3　出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考	
古式土師器	壺		E034	底径 3.2	○小さな平底を呈し、わずかに屈曲して体部へとつづく。	○内外面共指押え	色調 淡褐色 普通 胎土 細砂含有 焼成 良好	
	高坏		E035		○背の低い脚部で、付根より大きく「ハ」字状に開く。	○外面ハケ調整後ナデ ○内面指押え及びナデ	色調 淡褐色 普通 胎土 細石多含有 焼成 やや軟	
須恵器	坏身	A	C036	口径 11.2	○低く、短い立ち上がり部は強く内傾し、先端は、上向きに丸く収める。 ○受部は短かく外上方にのび先端は丸く収める。	○内外面共回転ナデ調整	色調 灰色 良緻 胎土 精緻 焼成 堅	
		B	C037～C039	口径 11.4～14.3 底径 8.0～9.3	○安定した平底の底部、底部から体部にかけて丸味をもって屈曲する。 ○体部は、直線的に斜上方にのび、口縁端部を丸く収める。	○内外面回転横ナデ調整 ○底部ヘラ切り未調整（C038） ○底部に粘土紐巻き上げ痕残存（C039）	色調 灰色 良軟 胎土 精良 焼成 やや	
	壺		C040	底径 8.4 高台高 0.9	○平坦な底部の外縁に外側にふんばる高台が付く。 ○底部より体部にかけ甘い屈曲をもって外上方にのびる。 ○高台は、外方に三角形状にはり出しやや凹状の端面を呈す。内先端で接地する。	○体部下端ヘラ削り ○体部内外面共回転ナデ調整 ○貼り付け高台、貼り付け後ナデ	色調 白色 好 胎土 良 焼成 軟	
	高坏		C041	底径 9.4	○比較的背の低い脚部で、なだらかに「ハ」字状に開く。 ○端部は、外傾する面をなし内下端で接地する。	○内外面共回転ナデ調整	色調 暗青灰色 良緻 胎土 精緻 焼成 堅	

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
土師器	皿		H042 H043	口径 13.9～14.2 底径 10.0 器高 1.95	○底部は、平底を呈し、口縁部は、外反して斜上方にのび端部を丸く収める。	○粘土板成形 ○口縁部内外面共横ナデ調整 ○底部内面指押え	色調 褐色 胎土 良好 焼成 良好

T－2　SD4　出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
古式土師器	甕		E044	底径 3.6	○上げ底の底部。	○内面指押え ○外面ナデ	色調 淡茶褐色 胎土 細砂多量含有 焼成 良好
土師器	皿		H045	口径 14.0	○浅い皿で、体部は、斜上方に大きくのびる。体部と底部の境界は甘い屈曲で分けられるが、不明瞭である。	○内外面共横ナデ調整	色調 淡赤褐色 胎土 良好 焼成 良好
	坏		H046 H047	口径 13.0 底径 6.8 7.6	○体部は、外上方へ直線的にのび口縁端部を丸く収める。 ○底部は、安定した平底を呈す。	○内外面共指押え及びナデ	色調 淡赤褐色 胎土 良好 焼成 良好

T－3　包含層出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考	
須恵器	坏蓋	B	C048	口径 12.5	○低く、扁平な天井部で、体部から口縁部にかけてゆるく湾曲する。口縁部は、短かく垂下して、端部は尖る。	○天井部ヘラケズリ ○体部、口縁部内外面共回転ナデ調整	色調 淡灰色 胎土 良好 焼成 軟	赤褐色砂土
	坏身	C	C049	口径 12.0 底径 7.5 高台高0.35	○平坦な底部の外縁に、低い高台が付く。 ○体部は、底部より丸い屈曲をもって斜上方にのびあがり端部を丸く収める。 ○高台は、低い逆台形を呈す。	○体部内外面共横ナデ調整、手ズレの痕がある ○底面ヘラケズリ調整 ○貼り付け高台、貼り付け後ナデ	色調 暗青灰色 胎土 精良 焼成 堅緻	〃
	塊		C050	底径 7.4 高台高 1.0	○体部は、ゆるやかに内湾してのびる。 ○やや外傾する。断面逆三角形を呈する、高い高台で、端部を丸く収める。	○体部内外面共横ナデ調整 ○貼り付け高台、貼り付け後ナデ ○底部、糸切り	色調 淡茶褐色 胎土 精良 焼成 不良	〃
土師器	甕		H051	口径 22.4	○「く」字状に屈曲する頸部より、口縁部は、外反して開き、端部をわずかに上方に引き出し、外傾する面をなす。	○口縁部外面指押え及び横ナデ調整 ○口縁部内面ハケ調整後横ナデ調整 ○体部内面ハケ調整	色調 黒褐色 胎土 良好 焼成 良好	
	坏		H052	口径 13.0 底径 7.8	○平底の底部より、体部はやや内湾気味に斜上方にのび口縁端部を丸く収める。	○粘土紐巻き上げ ○内外面共指押え及び横ナデ調整	色調 淡赤褐色 胎土 良好 焼成 良好	

T－3　SD－6　出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考	
緑釉	埦		G053	底径 6.7 高台高 0.6	○低い断面逆台形の高台でやや内傾する。	○貼り付け高台、貼り付け後ナデ	色調 黄緑色好 胎土 良 焼成 良好	灰色砂層
黒色土器	埦	B	B054	口径 13.4	○体部は、ゆるやかに内湾してのび、口縁部は外反、端部を丸く収める。	○粘土紐巻き上げ ○体部外面指押え及びナデ ○体部内面横方向のヘラミガキ ○体部内面口縁部に一条の沈線を廻らす	色調 内外面共黒色 胎土 良好 焼成 良好	灰色砂層

T－9　SD19　出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考	
古式土師器	甕	AⅡ	E055 E056	口径 14.2～14.4	○受口状口縁を有する甕で、頸部で鋭く屈曲し、口縁部は曲折して外反気味に短かく立ち上がり、端部をわずかに外方に引き出す。端部は、平坦な面を呈す。	○口縁部外面横ナデ調整 ○体部外面斜方向のハケ調整 ○口縁部内面ハケ調整（E056） ○体部内面ハケ調整後指ナデ	色調 淡褐色含好 胎土 細砂良 焼成 良	下層（砂層）
		BⅠ	E057	口径 12.0	○「く」字形に外反する口縁部で、中位でややふくらみ、端部は、外方にわずかに引き出し丸く収める。	○内外面共横ナデ調整	色調 淡褐色好 胎土 良好 焼成 良	上層
	壺	D	E058	口径 9.5 器高 13.8	○口縁部は、わずかに外反しながら上方にのび、端部を尖り気味に収める。 ○体部は、ほぼ球状を呈し、底部は丸底。	○口縁部内外面共横ナデ調整 ○体部外面ハケ調整後ナデ下半及び底面ヘラケズリ ○体部内面指押え及びナデ、粘土紐接合痕残存	色調 淡褐色好好 胎土 良 焼成 良	上層
			E059	底径 5.4	○安定した平底の底部で、屈曲して体部に続く。	○内外面共指押え	色調 淡褐色好好 胎土 良 焼成 良	下層（砂層）
	高坏	AⅠ	E060	口径 16.7 底径 7.5 （坏部）	○坏底部は、やや丸味のある平底を呈し、体部は、直線的に斜上方にのびる。口縁端部を丸く収める。	○坏底部の上に粘土紐をつけ加えて体部を形成するため接合部外面に低い凸帯状の段をなす。坏底部指ナデ、体部及び口縁部ナデ ○内面ナデ	色調 赤褐色有好 胎土 細砂含 焼成 良	上層
			E061		○中ぶくれの脚柱部で、裾部は屈折して外方に広がる。	○内外面共指押え及びナデ	色調 暗茶色有好 胎土 細砂含 焼成 良	上層
			E062		○比較的背の低い脚柱部で、やや中ぶくれに「ハ」字状におだやかに開く。屈折して広がる裾部を付すと思われる。	○外面ハケ調整 ○内面指押え及びナデ、しぼり目残す	色調 淡褐色好好 胎土 良 焼成 良	上層

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考	
			E063		○直線的に「ハ」字状に開く脚柱部で、屈折して広がる裾部を付すと思われる。	○磨滅激しく調整は不明 ○内面にしぼり目を残す	色調 淡褐色 胎土 細砂含 焼成 良好	上層

T－9　SK2　出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考	
古式土師器	小型丸底壺	B	E064	口径 7.6 最大腹径 7.7	○「く」字形に外反して開く口縁部で、端部を丸く収める。 ○肩の張る体部で、ほぼ球状を呈すと思われる。口径と体部最大腹径はほぼ同じ。	○口縁部外面ハケ調整後横ナデを行なう ○体部外面ハケ調整後ナデ ○口縁部内面ハケ状具を横位に用い、その後横ナデを行なう ○体部内面指ナデ	色調(内)黒色 (外)淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	第Ⅰ層
	高坏		E065	底径 10.0	○低い脚部で、「ハ」字状に大きく開き端部を丸く収める。 ○脚部側面に焼成前に6個の円孔を穿つ	○外面ハケ調整後ナデ ○内面上半指押え及びナデ、下半はハケ調整後ナデを行なう	色調 淡赤褐色 胎土 良好 焼成 良好	第Ⅰ層

T－10　SD20　出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考	
弥生土器	甕	A	E066 E067	口径 22.8 27.0	○口頸部は、ゆるやかに外湾して開き、口縁端部は、短かく外反して立ち上がり尖り気味に収める。 ○倒鐘形の体部を有すると思われる。	○口縁部外面横方向のハケ調整 ○頸部外面に縦方向のハケ調整 ○口縁部内面横方向のハケ調整 ○E067は、内外面共磨滅が著しい	色調 暗褐色 胎土 良好 焼成 良好	
	壺		E068	口径 14.8	○口縁部は、湾曲して外上方にのび、端部を外方にわずかに引き出し丸く収める。	○端部外面横方向に、口頸部外面縦方向にハケ調整を行ない、一条のヘラ描沈線を廻らす ○口頸部内面にハケ調整後口縁部にナデを施し、7条単位の櫛描列点文を廻らす	色調 暗褐色 胎土 多細砂含 焼成 良好	
	高坏		E069 ～ E071		○比較的背の高い太い脚柱部で、筒状の柱状部より屈折して、開く裾部が付くもの。	○E069の内外面指ナデ及び指押え ○E070外面ハケ調整後指ナデ 内面指ナデ及び指押え、しぼり目残存	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	
古式土師器	甕	AⅡ	E072 ～ E074	口径 10.6～15.6	○いわゆる受口状口縁で、丸く屈曲する口縁部は屈折し、外反して立ち上がる。端部は、やや外方に引き出し平坦に収める。	○口縁部内外面共横ナデ調整 ○頸部及び体部外面ハケ調整を行なう ○口縁部外面無文	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	上層
		AⅣ	E075	口径 20.4	○頸部は、鋭く屈曲し、口縁部は、稜をなして外反して立ち上がり、端部を強く外方に引き出し平坦に収める。	○口縁部内外面共横ナデ調整 ○頸部及び体部外面ハケ調整後ナデ ○体部内面ナデ	色調 淡茶褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	上層

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考	
古式土師器	甕		E076	口径 17.2	○頸部は、丸くゆるやかに屈曲、口縁部立ち上がりは、外面に甘い稜をなし、外反してのびる。 ○端部を強く外方に引き出し、平坦に収める。	○口縁部内外面共横ナデ調整 ○頸部外面ハケ調整 ○頸部内部指押え及びナデ	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	上層
		AV	E077 ～ E079	口径 16.0～17.0	○頸部の屈曲は鋭く、口縁立ち上がり部外面に稜をなす。口縁部は、外反してのび端部を強く外下方に引き出し外傾面をなす。端部先端を鋭角に収めるが、丸く収めるのもある。 (E077)	○口縁部内外面共横ナデ調整 ○頸部外面ハケ調整 ○頸部内面指押え及びナデ	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 やや不良	
		AVI	E080	口径 12.2	○口縁部は、受口状を呈するが、立ち上がり部の後は甘く、ほぼ内湾気味に短かくのび、端部を丸く収める。	○口縁部内外面共横ナデ調整 ○体部外面ハケ調整 ○内面指押え及びナデ	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 やや不良	上層
		BII	E081 E082	口径 13.3	○丸味のある「く」字形に屈曲する頸部より口縁は、外上方にのびあがり、端部を内側に肥厚させる。上端はやや内傾するが丸味を有する。	○口縁部内外面共横ナデ調整 ○体部内面ヘラケズリを行なう	色調 (外)ススけ付着 (内)淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	上層
			E083	底径 2.6	○丸味のある平底を呈し、中央がやや凹む。 ○体部は、内湾気味に斜上方にのびる。	○外面叩き調整 ○内面指押え	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	上層
		CI	E084 E085	口径 12.4	○「く」字形に外反してのびる口縁部で端部を丸く収める。	○口縁部内外面共横ナデ調整	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 やや不良	
	壺		E086	底径 5.0	○安定した平底を呈し、体部は直線的に斜上方にのびる。	○内面指押え	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	
			E087 E088	底径 5.3 4.8	○底部は、上げ底を呈し、屈曲して体部に続く。	○外面ハケ調整、内面にはくもの巣状にハケ調整を施す(E087) ○内外面共指押え(E088)	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	
			E089	底径 4.4	○突出気味の小さな平底を呈し、屈曲して体部へと続く。	○内外面共ハケ調整	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	
	小型丸底壺	A	E090		○口縁部は、内湾気味に外上方に大きく開き、頸部は「く」字状に屈曲して、張りの小さい扁平な球状の体部へ続く。 ○口径は、体部最大腹径を凌駕する。	○口縁部内外面共横ナデ調整 ○体部内面横方向にハケ状具を細かく移動させ調整を行なう	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	
		B	E091	口径 8.0 器高 9.1	○口縁部は、内湾気味に外上方に開き、端部を丸く収める。 ○頸部は、「く」字形	○口縁部内外面共横ナデ調整 ○体部外面上半指ナデを行なう	色調 淡赤褐色 胎土 良好 焼成 良好	

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考	
古式土師器					に屈曲し、球状の体部に続く。底部は丸底。	○体部外面下半ヘラケズリ ○体部内面指ナデ（上→下） ○内面局部に粘土紐接合痕残存		
	高坏	AI	E092 E093	口径 17.2 16.8	○口縁部が直線的に外上方にのびあがり端部を丸く収める。 ○坏部の口縁部と底部は、稜によって分けられるもの。	○内外面共横ナデ調整（E092） ○内外面共ハケ調整後横ナデを行なう（E093）	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	
			E094	口径 16.6	○比較的浅い坏部で、口縁部は、直線的に外上方にのび、端部は外反して丸く収める。 ○坏部の口縁部と底部は、稜によって分けられるもの。	○磨滅が著しく調整不明	色調 暗褐色 胎土 1～2㎜粒大の砂粒含有 焼成 不良	
		C	E095	口径 12.4 底径 5.2	○小型の高坏で、坏部口縁部はやや内湾しながら上方にのび、端部を丸く収める。口縁部と底部は、稜により明瞭に分けられる。 ○脚部は、ゆるやかに「ハ」字状にのびる低いもので、3個の円孔を穿つ。	○坏部外面細いハケ調整後ナデ、さらにヘラミガキを加える ○坏底部ヘラケズリ ○脚部外面横方向のハケ調整 ○坏部内面ヘラミガキ脚部内面指押え及びナデ、下半にヘラケズリを施す	色調(外)黒色 (内)赤褐色 胎土 細砂少量含有 焼成 良好	上層
		D	E096	口径 14.2	○口縁部・底部の境界はなく、丸底の底部よりロ縁部は内湾してのびあがり端部を丸く収める。	○内外面共横ナデ調整	色調 淡赤褐色 胎土 良好 焼成 良好	
			E097 E098		○比較的背の低い太身の脚柱部で、「ハ」字状におだやかに開き、屈折して開く裾部を有するもの。	○内外面共指ナデ及び指押え	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	上層
			E099 E100		○直線的に開く脚柱部で、弱い屈曲をもって開く裾部。	○外面指押え ○内面ナデ及び指押え ○内面に粘土紐巻き上げ痕（E101）やしぼり目残存（E100）	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	
			E101 E102	底径 8.8 9.1	○付根より外下方へ直線的に開く脚柱部で、ゆるく折れて短かく開く裾部を有す。 ○端部を丸く収める。	○外面縦方向のハケ調整、内面にしぼり目残存（E101） ○裾部内外面に指押え	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	
			E103 ～ E111		○中位でふくらむスマートな脚柱部で、屈折して広がる裾部が付く。	○外面磨滅が著しく調整不明 ○E108、E110、E111の外面にハケ調整痕、おそらくヘラナデまたは指ナデを加えるものであろう ○内面指押え及びナデ、しぼり目残存のものあり	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	下層

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考	
	器台	C	E112		○受部は、皿状を呈し、端部は、外傾して面をなす。	○内外面共指押え及びナデ	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	
			E113	底径 9.6	○「ハ」字状に開く脚部で、端部を丸く収める。 ○3個の円孔を穿つ。	○内外面にハケ調整痕が残存しており、ハケ調整後に、ナデを行なったと思われる	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良	

T−10 SD21 出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考	
古式土師器	甕	AⅠ	E114 〜 E120	口径 11.6〜19.5	○受口状口縁を呈し、頸部はゆるく屈曲し、口縁部は外反して立ち上がる。端部は、外方に引き出し平坦に収めるが、やや丸く収めるものもある（E120）。 ○あまり肩の張らない体部が続く。	○口縁部内外面共横ナデ調整 ○体部外面ハケ調整、ハケ目を斜方向に交差させている（E117） ○体部内面ハケ調整後ナデを行ない平滑に仕上げる ○頸部内外面に指押え	色調 淡褐色 胎土 細砂含 有好 焼成 良好	
			E121	口径 9.1	○頸部は、ゆるく屈曲し、口縁部は短かく外反気味に立ち上がり端部をわずかに引き出し丸く収める。	○口縁部内外面共横ナデ調整 ○体部外面指押え及びナデを施す ○体部内面指押え及びナデを施す。又ハケ目痕を残す		
		AⅣ	E122 E123	口径 19.9 13.3	○頸部は、鋭く屈曲し、口縁部は、明瞭な稜を有して外反し又は、直立して立ち上がる。 ○端部は、外方に強く引き出し平坦に収める。	○口縁部内外面共横ナデ調整 ○頸部外面指押え ○体部外向ハケ調整、内面にナデを行なう	色調 淡褐色 胎土 細砂含 有好 焼成 良	E 123 下層
		AⅧ	E124		○口縁部は、受口状を呈するが、立ち上がりはHく、ほぼ内湾気味に短かくのび、端部を丸く収める。	○口縁部内外面共横ナデ調整		
		BⅠ	E125 〜 E128	口径 12.2〜17.0	○頸部は、「く」字形に屈曲、口縁部は、外反して直線的にのびるもの（E130）と、やや内湾気味にのびるものがある。 ○端部は、丸く収める。 ○体部は、肩の張らないほぼ球状を呈す（E131）。	○口縁部内外面共横ナデ調整 ○口縁部外面斜方向のハケ調整（E130） ○体部内面ヘラケズリ後ナデを施す（E131）	色調 淡褐色 胎土 細砂含 有好 焼成 良	
		BⅡ	E129	口径 15.6	○「く」字形に外反してのびる口縁部で、端部は、内側に小さく肥厚し内傾する面をなす。	○口縁部外面横ナデ調整 ○口縁部内面横方向のハケ調整 ○頸部外面にハケ目痕を残す	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	
			E130	口部 17.8	○「く」字形に外反してのびる口縁部で、端部は、内側に肥厚し、大きく内傾する。	○口縁部内外面共横ナデ調整	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良	上層

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考	
古式土師器	甕	C	E131	口径 13.6	○頸部は「く」字形に屈曲し、口縁部は外反して上方にのび、端部は上方につまみ出し外傾する面をなす。 ○体部は、やや張りのある球状を呈す。	○口縁部内外面共横ナデ調整 ○体部外面細目のハケ調整 ○体部内面ヘラケズリ後頸部付近にナデを行なう	色調 茶褐色 (外)ス ス付着 胎土 良 好 焼成 良 好	砂層
		D	E132	口径 17.0	○頸部は、ゆるやかに丸味をもって屈曲し、口縁部は、外湾してのび端部を丸く収める。	○口縁部外面横ナデ調整 ○口縁部内面ハケ調整後横ナデを行なう ○体部外面ハケ調整	色調 淡褐色 胎土 良 好 焼成 良 好	
			E133	底径 4.0	○安定した平底の底部で体部は、斜上方にのびる。	○外面叩き調整を施す ○内面指押え	色調 淡褐色 胎土 良 好 焼成 良 好	
			E134	底径 2.8	○やや突出気味で、中央が凹む丸味のある底部。	○外面叩き調整を施す ○内面指押え及びナデ	色調 淡茶褐色 胎土 砂粒含有 焼成 良 好	
	壺	AⅠ	E135		○二重口縁の壺、口縁屈折部の外側は凸帯状に突出して段をなす。 ○頸部外面に、断面三角形の凸帯を廻らす。	○口縁部内外面共横ナデ調整	色調 淡赤褐色 胎土 細砂含有 焼成 良 好	
			E136		○ほぼ球状の体部をなし、丸味の底部を有す。	○外面ナデ ○内面指押え及びナデ ○内面に粘土紐接合痕残存	色調 淡褐色 胎土 良 好 焼成 良 好	
	小型丸底壺	B	E137	口径 7.2	○「く」字形に短かく外反してのびる口縁部で、端部を丸く収める。 ○球状で丸底の体部を付すと思われる。	○口縁部内外面共横ナデ調整	色調 淡褐色 胎土 良 好 焼成 良 好	
	高坏	AⅠ	E138 E139		○比較的浅い坏部で、口縁部は直線的に外上方にのび、端部を丸く収める。 ○坏部の口縁部と底部は、稜によって分けられる。	○外内面共指押え及びナデ	色調 淡褐色 胎土 良 好 焼成 良 好	
		BⅠ	E140		○大型の坏部で、口縁部は、ゆるやかに外上方にのび端部は、さらに外反して丸く収める。 ○坏部の口縁部と底部は、稜により明瞭に分けられる。	○坏部内外面共指押え及びナデ	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良 好	
		D	E141	口径 14.0	○口縁部と底部の境界はなく、丸底の底部より口縁部はゆるやかに内湾してのび、端部を丸く収める。	○坏部内外面共ナデ	色調 淡茶褐色 胎土 良 好 焼成 良 好	
			E142		○ゆるやかに「ハ」字状に開く比較的低い脚部。 ○丸底の坏部が付くと思われる。	○内外面共指押え及びナデ	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 やや不良	

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
古式土師器	高坏		E143〜E151		○中ぶくれの開きの小さな脚柱部で屈折して広がる裾部が付く。	○磨滅しており調整は詳らかでないが、外面縦方向のナデ、またヘラナデを施しているものがある ○内面指押え及びナデ、しぼり目及び粘土紐接合痕残存	色調 淡褐色好 胎土 良 焼成 良好
			E152〜E154		○大きく「ハ」字状に開く脚柱部、屈折して開く裾部が付く。 ○脚部上方に3個の円孔を穿つ。	○内外面共指押え及びナデ、E0152の外面は、ヘラミガキを行なう ○内面にしぼり目を残す	色調 淡褐色好 胎土 良好 焼成 良
			E155	底径 4.7	○細身で開きの弱い脚部。 ○端部を丸く収める。	○外面磨滅しており調整不明 ○内面指押え及びナデ、ヘラ先痕を残す	色調 淡褐色好 胎土 良好 焼成 良
			E156 E157		○細身で、筒状の脚柱部。 ○屈折して開く裾部が付くと思われる。	○外面ヘラナデを施す ○内面指押え及びナデ、しぼり目残存	色調 淡褐色好 胎土 良好 焼成 良
	器台	A	E158 E159	口径 9.5	○受部口縁部と底部は、甘い稜によって分けられ、口縁部は、短かく外反してのび、端部を平坦に収める。 ○ゆるやかに「ハ」字状に開く脚部。 ○脚部に3個の円孔を穿つ。	○坏部内外面共横ナデ調整 ○外面ヘラナデ（E158）	色調 淡褐色好 胎土 良好 焼成 良
			E160	口径 2.9	○小型の器台と考えられるもので、受部は小さく皿状を呈し、脚部は「ハ」字状に広がる。	○手づくね ○外面ヘラナデ ○内面指押え及びナデ	色調 淡褐色 胎土 細砂含有好 焼成 良

T−13 SD22 出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
古式土師器	甕	AⅡ	E161	口径 12.0	○頸部が丸く屈曲し、口縁部は、短かく外反して立ち上がる受口状口縁を呈す。 ○端部は、わずかに引き出し平坦に収める。	○内外面共横ナデ調整	色調 淡褐色好 胎土 良好 焼成 良
		AⅣ	E162	口径 16.4	○頸部は、丸味をもって屈曲し、口縁部は、外反して立ち上がる。 ○端部は強く外方に引き出し平坦な面をなす。	○内外面共横ナデ調整	色調 淡褐色 胎土 細砂含有良 焼成 やや不良

T−13 SD24 出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
	甕	BⅡ	E163	口径 16.5	○「く」字形に外反してのびる口縁部で、	○内外面共横ナデ調整	色調 淡褐色 胎土 良好

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
古式土師器					端部は、内側に肥厚し、内傾する面をなす。		焼成 良好
	壺	CⅠ	E164	口径 7.7	○直線的に斜上方にのびる口縁部で、端部を丸く収める。	○口縁部外面縦方向のハケ調整痕をとどめる ○口縁部内面磨滅しており調整不明	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 やや不良
	高坏	AⅡ	E165	口径 17.9	○口縁部が、大きく斜上方に開く坏部で、底部との境界は不明。 ○端部を丸く収める。	○外面指押え及びナデ ○内面ハケ調整後ナデを行なう	色調 茶褐色 (断面)黒色 胎土 細砂含有 焼成 やや軟
		E	E166	口径 7.6	○高坏の坏部と考えられ、小型で口縁部は、丸く湾曲する。	○内外面共横ナデ調整	色調(外)暗灰色 (内)赤褐色 胎土 良好 焼成 良好
			E167 E168	底径 11.0 11.9	○やや中ぶくれの開きの弱い脚柱部に屈折して広がる裾部が付く。 ○裾端部を丸く収める。	○脚柱部外面ナデ、裾部外面指押え横ナデ後ハケ調整を行なう ○裾部内面横ナデ、脚柱部内面には、しぼり目及び粘土紐接合痕をとどめる	色調 赤褐色 胎土 良好 焼成 良好

T−15 包含層出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
古式土師器	甕	AⅡ	E169	口径 13.7	○頸部は屈曲し、水平にのび口縁部は短かく外反してのびる。端部をわずかに引き出し平坦に収める。	○内外面共横ナデ調整	色調 淡灰褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好
	壺	BⅠ	E170 E171	口径 20.6 24.1	○頸部は、「く」字形に屈曲し、口縁部は、大きく外反して開き、端部をわずかに上方に肥厚する。	○外面横ナデ調整 ○内面横ナデ調整、ハケ調整痕を残す	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好

T−15 SD25 出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
古式土師器	甕	AⅢ	E172 〜 E183	口径 11.7〜15.9	○頸部は、丸く屈曲し、口縁部は、短かく外反して立ち上がり、端部をわずかに引き出す。 ○端部は、ほとんど平坦に収めているが、やや凹気味(E182、E183)に収めているものや丸く収めているものもある。	○磨滅が著しく調整は詳細ではないが、口縁部内外面は、横ナデを行っていると思われる ○体部外面にハケ調整を施す	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好
		AⅣ	E184 〜 E186		○頸部は、丸味をもってゆるく屈曲し、口縁部は外反して短かく立ち上がる。端部を強く引き出し平坦に収める。	○口縁部内外面共横ナデ調整	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考	
古式土師器	甕	AⅦ	E187～E190	口径 13.9～19.3	○一応受口状を呈するが、口縁部は、頸部で「く」字形に屈曲後、中位に段をなし、外反して立ち上がるもので、立ち上がりの度合いは、非常に弱い。 ○端部は、外方に引き出し上端を平坦に収める。	○口縁部内外面共横ナデ調整 ○体部内面ヘラケズリ（E187）	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	
		BⅠ	E191	口径 15.5	○「く」字形に屈曲する頸部より外反して開く。口縁部で、端部を平坦に収める。	○口縁部内外面共横ナデ調整 ○体部外面ヘラケズリ ○頸部内面指ナデ	色調 淡赤褐色 胎土 良好 焼成 良好	
		BⅡ	E192		○「く」字形に外反して開く口縁部、端部を内側に肥厚し丸味をもってわずかに内傾する。	○内外面共磨滅が著しく調整不明	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 やや不良	
			E193～E195	口径 13.5～15.8	○外反して開く口縁部で、中位がややふくらむ。 ○端部は、内側に肥厚し、上端を平坦に収めるものとやや内傾するものがある。	○口縁部内外面共横ナデ調整。E193は外面に、縦方向のヘラミガキを加える ○頸部外面に指ナデ及び強いナデを行なう	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	
		BⅢ			○肩の張らない球形の体部を有すと思われる。	○体部外面ハケ調整、内面口頸部には、ハケ調整、体部内面にはヘラケズリを施す（E194）		
			E196～E198	口径 15.7～15.8	○「く」字形に外反して開く口縁部で、中位がややふくらむ。 ○端部は、内側に肥厚し、大きく内傾する。	○口縁部内外面共横ナデ調整 ○体部外面ハケ調整 ○体部内面ヘラケズリ	色調 淡褐色 胎土 1～2㎜大の砂粒含有 焼成 良好	
		D	E199	口径 15.0	○「く」字形に屈曲する頸部よりやや外湾気味に開く口縁部で、端部を丸く収める。	○内外面共磨滅が著しく調整不明	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	
	壺	AⅠ	E200		○二重口縁を呈し、口縁部は、屈折して大きく外湾気味に開く。端部は、上方に拡張しており尖り気味に収める。口縁屈折部は、外面に甘い稜をなす。	○内外面共磨滅が著しく調整不明	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 やや軟	
		BⅡ	E201	口径 15.0	○外反して開く口縁部、端部を丸く収める。 ○頸部屈曲は弱く、球形の体部を有すと思われる。	○口縁部外面指押え、ハケ調整後ナデを行なう ○口縁部内面横ナデ調整	色調 淡褐色 胎土 1㎜大の砂粒含有 焼成 やや軟	
		G	E202	口径 21.5	○太い外開きの頸部が付くと思われ、口縁部は、屈折し内反して上方にのびる。 ○端部は、内側にわず	○口縁部外面磨滅 ○口縁部内面横ナデ調整	色調(外)赤褐色 (内)黒色 胎土 1～2㎜大の砂粒含有	

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考	
古式土師器					かに肥厚し、内傾する面をなす。 ○口縁屈折部は、外面と凸帯状に突出して段をなす。		焼成 良好	
	壺		E203 E204	底径 5.3～5.5	○中央部がわずかに凹む上げ底を呈し、体部は、屈曲して斜上方にのびる。	○外面指押え及びナデ ○内面 指押え、ハケ目痕残存（E0204）	色調 淡褐色 胎土 砂粒含有 焼成 良好	
			E205	底径 5.6	○不安定な平底を呈す。	○磨滅著しく調整不明	色調(外)黒色 (内)淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	
	小型丸底壺	A	E206	口径 約10	○大きく外方に開く口縁部で、小さくやや扁平な体部が付くと思われる。	○頸部外面に、ハケ目痕をわずかに残す。口縁部内外面共細いヘラミガキを施す。 ○体部外面にヘラミガキ、内面ナデ	色調 淡赤褐色 胎土 良好 焼成 良好	
		B	E207 ～ E209	口径 9.9	○小さな球形の体部より、「く」字形に弱く屈曲して口縁部は、外上方にのびる。 ○端部は、尖り気味に丸く収める。	○口縁部内外面共横ナデ調整 ○体部外面、ナデ及び指押え ○体部内面指押え及びナデ後ヘラナデを行なう	色調 淡褐色 胎土 1～2㎜大の細砂含有 焼成 良好	
	鉢（底部）		E210 E211	底径 4.5 4.2	○高台状の底部で、上げ底を呈す。	○底部外面にドーナツ状の粘土紐を貼り付け、側面及び外面指押えにより成形 ○底部内面、ヘラケズリ、ヘラ先痕残存		
	高坏	AⅠ	E212	口径 27.0	○高坏の坏部で、口縁部は、大きく外反してのび端部は面をつくる。	○口縁部外面横ナデ後、縦方向のヘラミガキを加える ○口縁部内面横方向のヘラミガキ	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	
		BⅡ	E213 E214	口径 17.6 17.9	○比較的深い坏部で、底部・口縁部境界はやや甘い稜をなして、口縁部は、直線的に外上方にのびる。 ○端部を丸く収める。	○内外面共横ナデ調整（E0213） ○端部内外面に横ナデ調整、口縁部内外面縦方向のヘラミガキ（E214）	色調 赤褐色（E213） 淡褐色（E214） 胎土 良好 焼成 良好	
			E215		○比較的背の高い脚部で、付根よりゆるやかに漏斗状に開く。屈折して広がる裾部が付くと思われる。	○外面磨滅しており調整不明 ○内面にしぼり目残存	色調 赤褐色 胎土 細砂含有 焼成 不良	
			E216 ～ E225	底径 9.7～12.8	○開きの小さい、やや中ぶくれの脚柱部。 ○脚柱部より、裾部は屈折して広がり端部を丸く収める。	○外面磨滅しており、調整不明のものがあるが、縦方向にヘラケズリを行なうものが多い ○内面指押え及びナデ、しぼり目残存	色調 淡赤褐色又は淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	
			E226 ～ E232		○細身の開きの弱い脚柱部で、屈折して広がる裾部が付くと思われる。	○ほとんど外面に縦方向のヘラケズリを行なうが、横方向の細いヘラミガキを重ねるものもある（E226、E227）	色調 淡赤褐色又は淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考	
古式土師器						○E 232 の外面は、ハケ調整を行なう ○内面指押え及びナデ、しぼり目残存		
	器台	C	E 233	口径 10.0	○受部は直線的に斜上方に大きく開き、端部を上方に拡張し、外側に面をなす。	○内外面共磨滅しており調整は不明であるが、坏部は、横ナデを行なっていると思われる	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	
		B	E 234	口径 9.4	○受部は内湾して外上方にのび、口縁部は、弱い屈曲をもってやや外反する。 ○端部を丸く収める。	○口縁部内外面共横ナデ調整 ○体部外面指ナデ	色調 淡赤褐色 胎土 良好 焼成 良好	
			E 235 ～ E 237	口径 11.0	○ゆるやかに「ハ」字状に開く脚部で、端部を丸く収める。	○脚部外面細いヘラミガキを重ねる（E 236） ○脚部内面指押え及びナデ	色調 淡褐色 淡赤褐色（E 237） 胎土 良好 焼成 良好	
	土錘		E 238	径 2.3 器高 1.8	○ほぼ、球形を呈す。中央部に径 0.7㎝の円孔を貫く。	○手づくね ○指押え	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	

T－15　SD26　出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考	
古式土師器	甕		E 239	底径 3.5	○上げ底の底部。	○外面ハケ調整	色調 暗茶褐色 胎土 良好 焼成 良好	
	壺	B Ⅱ	E 240	口径 11.4	○外反して開く口縁部で、端部を丸く収める。	○内外面共磨滅のため調整不明	色調 淡赤褐色 胎土 細砂含有 焼成 不良	
	小型丸底壺		E 241		○ほぼ球形の体部で、丸底を呈す。		色調 淡赤褐色 胎土 良好 焼成 良好	
	高坏		E 242		○ゆるやかに「ハ」字状に開く脚柱部。屈折して広がる裾部が付くと思われる。	○外面ハケ調整 ○内面指押え及びナデ、しぼり目残存	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	

T－15　SD27　出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考	
古式土師器	壺		E 243	底径 5.0	○わずかに上げ底を呈し、体部は斜上方に大きく開く。	○内外面共ナデ	色調(内)淡褐色 (外)赤褐色 胎土 細砂含有 焼成 やや軟	

T－15　SD28　出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考	
弥生土器	高坏	A	E 244	口径 32.6	○坏底部は、丸底気味に、大きく開き、口縁部は、外湾して斜上方にのび、端部を丸く収める。	○内外面共磨滅が著しく調整不明	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考	
弥生土器	高坏				○坏底部と口縁部の境界は、明瞭な稜によってわけられる。			
			E245	口径 28.2	○高坏の坏部で、坏口縁部は、直線的に斜上方にのび、端部は外面と面をなす。	○外面細いヘラミガキを重ねる ○内面ハクリ	色調 淡茶褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	
古式土師器	甕	AⅡ	E246 ～ E248	口径 14.9～17.5	○頸部で丸く屈曲し、口縁部は、外反して短かく立ち上がる。 ○端部は、わずかに外方に引き出し、平坦またはやや内傾気味に収める。	○口縁部内外面共横ナデ調整 ○体部外面ハケ調整 ○体部内面指押え及びナデ	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	
		AⅣ	E249	口径 10.4	○頸部は、鋭く屈曲し、口縁部は、短かく内反気味に立ち上がる。口縁立ち上がり部は丸味を有す。 ○端部は、強く外方に引き出し平坦に収める。	○内外面共横ナデ調整	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	
			E250 E251	底径 3.5 3.6	○底部は、わずかに上げ底を呈す。	○外面ハケ調整	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	

T－15　SD29　出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考	
古式土師器	甕	AⅡ	E252 E253	口径 14.2 15.0	○頸部は、ゆるく屈曲し、口縁部は、外反して立ち上がる。 ○端部は、平坦に収めるか、わずかに凹状を呈するものもある（E0253）。	○内外面共横ナデ調整 ○E253は、内面にハケ目痕残存	色調 淡褐色 胎土 1㎜大の砂含有 焼成 良好	
		AⅡ	E254 ～ E258	口径 12.8～17.5	○頸部で屈曲した口縁部は、外反して短かく立ち上がる。 ○端部を外方に引き出し、平坦に収める。	○内外面共横ナデ調整	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	
			E259 ～ E266	口径 10.6～15.6	○頸部で屈曲後、口縁部は、短かく直立気味に立ち上がり、端部を外方に引き出し、平坦に収める。	○内外面共横ナデ調整	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	
		AⅣ	E267 ～ E276	口径 11.5～16.8	○頸部は、丸味をもって屈曲し、口縁部は、外反または直立気味に立ち上がる。 ○端部を強く外方に引き出し、上端を平坦または凹状に収める。 ○あまり肩の張らない球状の体部を有すと思われる。	○口縁部内外面共横ナデ調整 ○体部外面ハケ調整	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	
		AⅤ	E277 ～ E279	口径 17.2～18.0	○頸部は、丸く屈曲し、口縁部は、外反気味に立ち上がる。 ○端部を強く外方に引	○口縁部内外面共横ナデ調整 ○体部外面ハケ調整 ○体部内面指押え及び	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考	
古式土師器					き出し、外傾する面をなす。 ○球状の体部を有すと思われる。	ナデ		
		AⅦ	E280	口径 13.9	○頸部は、小さく屈曲し、口縁部は、内反気味に短かく立ち上がる。 ○端部を丸く収める。	○口縁部内外面共横ナデ調整	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	
	甕	AⅦ	E281 ～ E284	口径 10.4～14.3	○頸部は「く」字形に屈曲し、口縁部は、やや外反気味に立ち上がる。口縁立ち上がり部の屈折は、非常に弱く、鈍い稜をなしている。 ○端部をわずかに外方に引き出し、平坦に収める。	○口縁部内外面共横ナデ調整	色調 淡褐色有 胎土 細砂含 焼成 良好	
		BⅡ	E285 E286	口径 16.0 16.8	○外反してのびる口縁部で、中位でややふくらむ。 ○端部は、内側に丸味をもって肥厚し、やや内傾する。	○口縁部内外面共横ナデ調整 ○E285の内面にハケ目痕が認められる	色調 淡褐色 胎土 1㎜大の砂粒含有 焼成 良好	
			E287 E288	底径 2.8 2.9	○底部は、上げ底を呈し、体部は、内湾気味に外上方にのびる。	○外面ハケ調整 ○内面指押え	色調 淡褐色 外面スス付着 胎土 1～2㎜の砂粒大含有 焼成 良好	
			E289	底径 2.4	○小さな平底の底部。	○内外面共ハケ調整	色調 暗灰褐色 胎土 良好 焼成 良好	
	壺	AⅠ	E290	口径 29.2	○二重口縁の壺、口縁屈折部の外側は凸帯状に突出して段をなし、内面は、明瞭な稜線によって画される。 ○口縁部は、直線的に斜上方にのび、端部を丸く収める。	○外面ハケ調整後、横方向のヘラミガキを加える。 ○内面ヘラミガキ	色調 淡赤褐色 胎土 良好 焼成 良好	
		AⅡ	E291 ～ E293	口径 19.5～22.0	○二重口縁を呈し、口縁屈折部は、丸味のある鈍い稜をなす。口縁部は、外湾してのび端部を丸く収める。	○内外面共ハクリ	色調 淡赤褐色有 胎土 細砂含 焼成 良好	
		BⅠ	E294 E295	口径 17.8 20.5	○口頸部は、直線的に外上方にのび、端部を丸く収める。	○内外面共磨滅が著しく調整不分明であるが、横ナデ調整を行なっていると思われる	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	
		BⅡ	E296 E297	口径 14.1 12.0	○口頸部は、外湾して開き、端部を上下にわずか拡張し、外側と面をなす。	○内外面共横ナデ調整 ○E255の頸部内面にハケ調整が認められる	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	
			E298	底径 4.9	○平底の底部	○外面指押え	色調 淡褐色有 胎土 砂粒含 焼成 良好	

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考	
古式土師器	甕		E299〜E302	底径 3.7〜5.2	○わずかに上げ底を呈し、体部は屈曲して外上方にのびる。	○内外面共ハケ調整を施すものがある（E301、E302）が、他は、指押え及びナデを行なう	色調 淡褐色又は淡赤褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	
	小型丸底壺	A	E303	口径 10.5 器高 6.3 腹径 7.9	○口縁部は、やや内湾気味に外上方にのび、端部を丸く収める。 ○体部は、小さく扁平で、口径は、腹径を凌駕する。	○口縁部内外面共横ナデ調整 ○体部外面ハケ調整後ナデ ○体部内面ナデ	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	
		B	E304	口径 8.0	○頸部は「く」字形に屈曲し、口縁部は外反して開く。 ○端部は、尖り気味に収める。	○内外面共横ナデ調整	色調 淡褐色 胎土 砂粒含有 焼成 良好	
			E305		○小さな、球状を呈す体部で、「く」字形に外反して開く口縁部を有すと思われる。	○内外面共ナデ	色調 淡赤褐色 胎土 良好 焼成 良好	
	高坏	AⅡ	E306	口径 15.1	○高坏の坏部、やや内湾気味に外上方にのび、端部を丸く収める。	○内外面共横ナデ調整	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	
			E307		○開きの小さい脚柱部で、上方に3個の円孔を穿つ。 ○坏底部は、平底を呈し、口縁部境界は甘い稜をなす。	○脚柱部外面ナデ	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	
			E308〜E311		○開きの小さい脚柱部で中位でややふくらむ、屈折して広がる裾部が付くと思われる。	○外面ナデまたはヘラケズリを行なう ○内面しぼり目残存	色調 淡褐色又は淡赤褐色 胎土 良好	
			E312	底径 15.5	○高坏脚部の裾部で、「ハ」字状に大きく開き、端部を丸く収める。	○外面ハケ調整後ナデ ○内面ナデ	色調 淡茶褐色 胎土 良好 焼成 良好	
	器台	B	E313	口径 9.3 底径 10.3 器高 8.8	○受部は、内湾気味に斜上方に開き端部を丸く収める。 ○脚部は、ゆるやかに「ハ」字状に開き端部を丸く収める。 ○脚部上方に3個の円孔を穿つ。	○外面指押え及びナデ ○坏部内面指押え及びナデ ○脚部内面ハケ調整を行なう	色調 淡褐色 胎土 1㎜大の砂粒含有 焼成 良好	

T−16 包含層出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考	
古式土師器	甕	AⅡ	E314	口径 14.8	○頸部は、丸く屈曲し口縁部は、屈折後、外反して立ち上がる受口状口縁を呈する。 ○端部は、丸く収める。	○内外面共横ナデ調整	色調 淡褐色 胎土 1〜2㎜大の砂粒含有 焼成 良好	Ⅱ層〜Ⅲ層上面

T－16　SD33　出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考	
古式土師器	甕	AⅡ	E315	口径 13.8	○頸部は、丸く屈曲し、口縁部は外反して短かく立ち上がり、端部を丸く収める。	○内外面共横ナデ調整	色調 淡褐色好 胎土 良 好 焼成 良 好	
	壺	AⅡ	E316	口径 24	○二重口縁を呈する壺で、口縁屈折部は、非常に弱い稜をなしさらに外反してのび、端部を丸く収める。	○磨滅激しく調整不明	色調 暗茶褐色 胎土 細砂含有好 焼成 良 好	
	高坏		E317		○細い筒状を呈する中実の脚柱部。	○外面ヘラケズリ ○内面指押え及びナデ	色調 暗茶褐色好 胎土 良 好 焼成 良 好	

T－16　SD34　出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考	
古式土師器	甕	AⅡ	E318	口径 13.2	○頸部は、丸く屈曲し、口縁部は短かく外反気味に立ち上がり端部を丸く収める。	○口縁部内外面横ナデ調整 ○体部外面ハケ調整	色調 淡褐色好 胎土 良 好 焼成 良 好	
		AⅡ	E319～E324	口径 12.0～16.0	○頸部で屈曲し、口縁部は、外反して立ち上がり、端部を外方に引き出し、上端を平坦に収めるか、または丸く収める。	○口縁部内外面共横ナデ調整 ○体部外面にハケ調整を施す ○体部内面指押え及びナデ	色調 淡褐色 胎土 細砂含有好 焼成 良 好	
		AⅡ	E325～E327	口径 15.4～16.4	○頸部は、「く」字形に屈曲し、口縁部は、直線的に上方にのび、端部をわずかに引き出し、平坦またはやや内傾する面をなす。 ○立ち上がり部は甘い。	○内外面共横ナデ調整 ○体部外面にハケ調整	色調 淡褐色 胎土 細砂含有好 焼成 良	
		AⅣ	E328～E330	口径 10.2～16.6	○頸部は屈曲して水平にのび、口縁部は、明瞭な稜をなし外反して立ち上がり、端部を強く引き出し平坦に収める。	○内外面共横ナデ調整 ○体部外面ハケ調整	色調 淡褐色 胎土 細砂含有好 焼成 良	
		AⅦ	E331～E333	口径 13.6～14.0	○頸部は、丸く屈曲し、口縁立ち上がり部は甘くゆるい。口縁部は短かく外反して立ち上がり端部を丸く収める。	○内外面共横ナデ調整	色調 淡褐色好 胎土 良 好 焼成 良	
		BⅡ	E334 E335	口径 14.8 15.0	○「く」字形に外反してのびる口縁部で、端部は、わずかに内側に肥厚し、上端を平坦に収める。	○口縁部内外面共横ナデ調整	色調 淡褐色 胎土 良 好 焼成 良 好	
			E336 E337	底径 3.2～3.8	○上げ底の底部で、体部は、斜上方に内湾してのびる。	○体部外面ハケ調整 ○体部内面ハケ調整後ナデを行なう	色調 淡褐色有 胎土 細砂含有好 焼成 良	
		AⅠ	E338 E339	口径 18.2 17.5	○二重口縁で、外開きの口縁部が中位で屈折し外反して立ち上	○磨滅しており調整不明	色調 茶褐色有 胎土 細砂含軟 焼成 やや	

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考	
					がる。 ○端部を丸く収める。			
古式土師器	壺		E340	底径 4.4	○底部は、上げ底を呈し、体部は斜上方に内湾してのびる。	○体部外面にハケ調整 ○体部内面にハケ調整後ナデを行なう	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	
			E341	底径 5.4	○底部は、わずかに上げ底を呈し、体部は斜上方に大きく開く。	○底部側面ヘラケズリ	色調 黒色 胎土 良好 焼成 良好	
			E342 ～ E345	底径 5.2～7.0	○平底の底部で、体部は屈曲して斜上方にのびる。	○内外面共指押え及びナデ	色調 淡茶褐色 胎土 良好 焼成 良好	
			E346	底径 4.2	○丸味のある平底の底部で、中央がやや凹む。体部は屈曲してのびる。	○内外面共指押え及びナデ	色調(外)淡褐色 (内)黒色 胎土 良好	
			E347		○やや突出気味の平底の底部で、ゆるく屈曲して球形の体部へと続く。	○外面に指ナデ ○内面指押え及びナデ	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	
	高坏		E348 E349		○背の低い脚部で、大きく「ハ」字状になだらかに開く。	○E348の外面にハケ調整、内面指押え ○E349内外面共ナデ及び指押え	色調 淡赤褐色 胎土 良好 焼成 良好	
			E350	底径 12.1	○「ハ」字状に大きく広がる脚部で、端部を丸く収める。 ○脚部中位に3個の円孔を穿つ。	○磨滅が著しく調整不明、外面にヘラミガキ痕残存 ○内部ナデ及び指押え	色調 淡赤褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	
			E351 ～ E353		○付根より直線的に開く、脚柱部。 ○脚部中位に3個の円孔を穿つ。	○外面磨滅が著しく調整不明 ○内面にしぼり目残存	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	
			E354 ～ E356	底径 6.4 8.4	○小型の高坏で、低い脚部は「ハ」字状にゆるやかに開き、端部を丸く収める。 ○脚部下方に3個の円孔を穿つ。	○内外面共ナデ調整	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	
			E357 E358		○開きの小さい直線的にのびる脚柱部で、屈折して広がる裾部が付く。	○外面ヘラケズリ後ナデ（E357） ○内面に指押え及びナデ、しぼり目及び巻上げ痕残存	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	
			E359 ～ E361		○中ぶくれの脚柱部で屈折して開く裾部が付く。	○外面指押え及びナデ ○内面に指押え、しぼり目残存	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	
			E362 ～ E364		○細い筒状の脚柱部で屈折して開く裾部が付く。 ○丸底を有する坏部が付く（E362）。 ○E364は、中実化	○脚部外面ヘラミガキ後下方に横ナデ ○内面に指押え、しぼり目残存	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	
須恵器	坏身	B	C365	底径 8.0	○平底の底部で、体部は直線的に斜上方にのびる。	○内外面共回転ナデ調整	色調 淡灰色 胎土 良好 焼成 良好	

T－16　SX－2　出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考	
古式土師器	甕	AⅢ	E366 E367	口径 12.4 14.8	○受口状口縁で、頸部で屈曲し、口縁部は短かく外反して立ち上がり端部をわずかに外方に引き出す。	○内外面共横ナデ調整	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	
	高坏	BⅡ	E368	口径 17.8	○坏底部は、ほぼ平底を呈し、口縁部は大きく外反して開き端部を丸く収める。坏底部と口縁部の境界は明瞭な稜をなす。 ○脚部は、比較的短かくゆるやかに「ハ」字状をなして広がる。	○磨滅が著しく調整は不明	色調 淡赤褐色 胎土 良好 焼成 やや軟	
	器台	B	E369	口径 10.9	○坏底部と口縁部の境界はなく、丸く内湾してのびる端部を丸く収める。	○内外面共指押え及びナデ	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	

T－17　SD35　出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考	
古式土師器	甕	AⅤ	E370	口径 13.5	○頸部は丸く屈曲し、口縁部は外反して短かく立ち上がる。口縁部立ち上がりの度合いは非常に甘い。 ○端部をわずかに外方に引き出し、外傾面を呈す。	○口縁部内外面共横ナデ調整	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	
		AⅨ	E371	口径 13.0	○頸部で弱く屈曲後、口縁部は、中位でややふくらんで、斜上方にのびる。端部は、外方に強く引き出し、上端を平担に収める。	○口縁部内外面共横ナデ調整 ○頸部内外面に指押え	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	

T－17　SD37　出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考	
古式土師器	器台	B	E372		○「ハ」字状に大きく開く脚部にやや内湾気味に外上方にのびる受部が付く。	○受部内外面共横ナデ調整 ○脚部外面ヘラケズリ	色調 淡赤褐色 胎土 良好 焼成 良好	

T－17　SD38　出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考	
古式土師器	甕	AⅠ	E373 ～ E381	口径 11.2～19.7	○頸部は、丸く屈曲し、口縁部は、外反して短かく立ち上がる。 ○端部は、外方に引き	○口縁部内外面共横ナデ調整 ○体部外面ハケ調整 ○体部内面指押え及びナデ	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考	
古式土師器					出し、上端を平坦またはやや凹状に収める。			
	甕	AⅣ	E382〜E387	口径 13.9〜19.7	○頸部は、丸くゆるやかに屈曲し、口縁部は外反して短く立ち上がる。 ○端部は、外方に強く引き出し、上端を平坦またはやや凹状に収める。	○口縁部内外面共横ナデ調整 ○体部外面ハケ調整 ○体部内面指押え及びナデ	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	
		AⅦ	E388〜E389	口径 13.0 17.0	○頸部は「く」字形に屈曲し、口縁部はさらに外反して短かくのびる。口縁立ち上がり部の度合いは非常に甘く、弱い受口状を呈す。 ○端部を丸く収める。	○口縁部内外面共横ナデ調整 ○体部外面ハケ調整 ○体部内面指押え	色調 淡褐色 胎土 砂粒含有 焼成 良好	
		C	E390 E391	口径 21.0 22.2	○「く」字形に外反してのびる口頸部。 ○端部はわずかに外方に肥厚し(E390)外側に面をなす。	○口縁部内外面共横ナデ調整 ○体部内面ヘラケズリ(E390)	色調 黒灰色(E394) 淡褐色で内面にスス付着(E395) 胎土 砂粒含有 焼成 良好	
			E392	口径 13.2	○頸部は、「く」字形に屈曲、口縁部は、外反して外上方にのびる。中位がややふくらむ。 ○端部は内側に肥厚し、上端を平坦に収める。	○口縁部内外面共横ナデ調整 ○体部内面ヘラケズリ	色調 淡褐色 外面スス付着好 胎土 良好 焼成 良好	
		BⅡ	E393 E394	口径 14.8 15.2	○頸部は、「く」字形に屈曲、口縁部は中位がふくらみ、外上方に外反してのびる。球形の体部が付くと思われる。 ○端部は、内側に肥厚し、強く内傾する面をなす。	○口縁部内外面共横ナデ調整 ○体部外面ハケ調整 ○体部内面ヘラケズリ	色調 淡茶褐色 E392 スス付着好 胎土 良好 焼成 良好	
			E395	底径 3.4	○底部は、あげ底を呈すが、全体に丸味を有し、体部は、内湾気味に斜上方にのびる。	○外面ハケ目痕が認められる ○内面指押え	色調 淡赤褐色 胎土 細砂含有 焼成 不良	
	壺	AⅠ	E396		○二重口縁の壺、口縁屈折部の外側は、凸帯状に突出して段をなし、内面は、明瞭な破線によって画される。 ○口縁部は、外湾気味に斜上方にのびる。	○内外面共ハクリ	色調 暗茶褐色 胎土 良好 焼成 良好	
		BⅠ	E397	口径 14.5	○頸部は、「く」字形に屈曲し、口縁部は、外反してのびる。 ○端部をやや尖り気味に収める。	○内外面共横ナデ調整	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考	
古式土師器	壺		E398	口径 16.8	○頸部で屈曲した口縁部は、大きく湾曲して、斜上方にのび、端部を丸く収める。	○口縁部内外面共ハケ調整後横ナデを行なう ○頸部内外面にハケ調整	色調 淡赤褐色 胎土 良 好 焼成 良 好	
			E399 E400	底径 4.5 4.6	○底部は、平底を呈すが、底部外端に内傾する面をなす。体部は、底部で大きく屈曲して斜上方にのびる。	○底部側面指押え、外下端に強い横ナデを行なう ○底部内面ハケ調整(E399)	色調 淡 褐 色好好 胎土 良 焼成 良	
			E401	底径 5.0	○底部は、わずかに上げ底を呈す。	○内外面共指押え	色調 淡 褐 色好好 胎土 良 焼成 良	
			E402 〜 E405	底径 3.1〜4.2	○中央が凹む上げ底部で、体部は、屈曲して斜上方にのびる。 ○球状の体部が付くと思われる。	○外面ハケ調整を施すものが多い ○内面ハケ調整	色調 淡 褐 色色 または淡赤褐色 胎土 良 好 焼成 良 好	
			E406	底径 4.0	○突出気味の底部で中央が大きく凹む。 ○球状の体部が付くと思われる。	○内外面共ハケ調整を行なう	色調 淡 褐 色好好 胎土 良 焼成 良	
	小型丸底壺	A	E407		○やや偏平な球状を呈す、小さな体部で、頸部で屈曲して外上方に大きくのびる、口縁部を有すと思われる。	○内外面共ナデ	色調 赤 褐 色好好 胎土 良 焼成 良	
	鉢		E408	底径 4.5	○高台状の底部で、上げ底を呈す。	○内外面共指押え	色調 淡 褐 色好好 胎土 良 焼成 良	
	有孔鉢		E409	底径 3.2	○中央が凹む上げ底の底部で、体部はわずかに屈曲して斜上方にのびる。 ○底部中央に径1cmの円孔を穿つ。	○外面にハケ目痕が認められる ○内面指押え	色調 淡 褐 色有 胎土 砂粒含 焼成 良 好	
			E410		○太く短い脚柱部で、裾部はゆるやかに「ハ」字状に広がる。	○内外面ハクリ	色調 淡赤褐色 胎土 砂粒含有 焼成 良 好	
	高坏		E411	底径 11.4	○やるやかに「ハ」字状に開き、水平にのびる裾部で、端部を丸く収める。 ○脚部に3個の円孔を穿つ。	○内外面共指押え及びナデ	色調 淡赤褐色 胎土 良 好 焼成 良	
			E412 〜 E416		○おだやかに漏斗状に開く脚部。 ○脚部上方に3個の円孔を穿つ。	○磨滅が激しく調整は分別しにくいが、内面にハケ目痕を残すものがある(E413、E415)	色調 淡 褐 色 又は淡赤褐色 胎土 良 好 焼成 良	
			E417		○開きの弱い中ふくらみの脚柱部で屈折して開く裾部が付く。	○外面ハクリ ○内面指押え及びナデ、しぼり目残存	色調 赤 褐 色好好 胎土 良 焼成 良	
			E418		○開きの弱い細身の脚柱部で屈折して開く裾部が付く。	○外面指押え及びナデ ○内面指押え及びナデ、しぼり目残存	色調 淡 褐 色好好 胎土 良 焼成 良	

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
古式土師器	器台	A	E419	口径 9.6	○内湾気味に開く受部で口縁部は、外反して短かく立ち上がり端部を丸く収める。	○内外面共横ナデ調整	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好
			E420		○大きく「ハ」字状に開く脚部で、上方に3個の円孔を穿つ。	○外面ヘラミガキ ○内面指押え及びナデ	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好
須恵器	坏蓋	A	C421	口径 10.3 器高 3.6	○小型の坏蓋で、天井部、体部の境界は不明瞭でなだらかに外下方に流れる。 ○口縁部は、屈曲して下方に下ろし、端部を丸く収める。	○天井部ヘラ切り未調整 ○体部、口縁部外面回転ナデ調整 ○内面、回転ナデ調整	色調 灰色 胎土 精良緻 焼成 堅

T−17 SD39 出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
古式土師器	甕	BⅡ	E422	口径 15.8	○頸部は、「く」字状に屈曲し、口縁部は外反してのびる。 ○端部は、内側に肥厚しわずかに内傾する。	○口縁部内外面共横ナデ調整	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好
	鉢		E423	底径 4.2	○底部は、上げ底を呈し、体部で屈曲して外傾する高台状を呈する。	○底部側面指押え、ハケ目痕残存 ○底部内面指押え	色調(内)淡褐色 (外)黒色 胎土 良好 焼成 良好

T−17 SH2内SK14 出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
古式土師器	甕	AⅡ	E424		○頸部は大きく屈曲し、口縁部は、短かく直立して立ち上がり、端部を平坦に収める。	○内外面共横ナデ調整	色調 淡褐色 胎土 1㎜大の砂粒含有 焼成 良好 SII−2

T−18 SD40 出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
古式土師器	甕	AⅡ	E425		○頸部は丸く屈曲し、口縁部は短く直立気味に立ち上がる。 ○端部を外方に引き出し、丸味のある平面に収める。	○口縁部内外面横ナデ調整	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好

T−18 SD41 出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
古式土師器	甕	AⅡ	E426 〜 E430	口径 13.4〜17.0	○頸部でゆるく屈曲し、口縁部は直立又は外反してのびる。 ○端部を外方にわずかに引き出し、上端を平坦に収める。	○口縁部内外面共横ナデ調整 ○体部外面ハケ調整 ○体部内面指押え	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考	
古式土師器	甕	AⅣ	E431	口径 16.9	○頸部は丸く屈曲し、口縁部は外反して立ち上がる。 ○端部を外方に強く引き出し上端を平坦に収める。	○口縁部内外面共横ナデ調整 ○頸部外面指押え	色調 黒灰色（スス付着） 胎土 細砂含有 焼成 良好	下層
			E432	底径 3.5	○平底の底部で丸味を有す。	○外面粗いハケ調整 ○内面指押え	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	
	壺	AⅠ	E433 E434	口径 14.7～16.4	○二重口縁を呈し、外開きの口縁部は中位で屈折し外反して立ち上がる。口縁屈折部は、凸帯状に突出して段をなし、内面は明瞭な稜線によって画される（E433）。 ○端部を丸く収める。	○内外面共磨滅しており調整は判別できないが，口縁部内外面共横ナデを行なっていると思われる	色調 淡赤褐色 胎土 良好 焼成 良好	
		BⅠ	E435	口径 15.1	○斜上方に大きく湾曲してのびる口縁部で端部を丸く収める。	磨滅しており調整不明	色調 赤褐色 胎土 砂粒含有 焼成 やや軟	
			E436	底径 3.7	○突出した平底の底部。	○内外面共指押え	色調 淡茶褐色 胎土 良好 焼成 良好	
			E437	底径 2.4	○小さな平底の底部で体部はわずかに屈曲して大きく外上方にのびる。	○内外面共指押え及びナデ	色調 赤褐色 胎土 良好 焼成 良好	
	小型丸底壺		E438	最大腹径 5.5	○扁平な球状を呈す小さな体部で、頸部で屈曲して外上方に大きくのびる口縁部を有すと思われる。	○内外面共指押え及びナデ	色調 淡赤褐色 胎土 良好 焼成 良好	
	高坏		E439 ～ E441	底径 8.5	○小型の背の低い脚部で、大きく「ハ」字状に開いてのびる。 ○脚部中位に3個の円孔を穿つ（E439、441）。	○脚部外面ナデ指押え ○脚部内面指押え	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	E440、下層
			E442		○比較的背の低い脚部で、付根より「ハ」字状に開き、裾部に到ってさらに広がる。 ○裾部付近に3個の円孔を穿つ。	○脚部外面ナデ ○内面指押え及びナデ	色調 褐色 胎土 良好 焼成 良好	
			E443 E444		○開きの弱い中ぶくれの脚柱部。屈折して広がる裾部が付く。	○磨滅しており調整不明	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	

T－18　SK15　出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考	
古式土師器	甕	AⅠ	E445	口径 15.0	○頸部は丸くゆるやかに屈曲、口縁部は短かく直立して立ち上がる。 ○端部はわずかに外方に引き出し上端はやや内傾する。	○口縁部内外面共横ナデ調整	色調 淡褐色 外面スス付着 胎土 1～2mmの砂粒含有 焼成 良好	

T－18　SK16　出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考	
古式土師器	甕	AⅡ	E446～E448	口径 12.9～15.2	○頸部はやや鋭どく屈曲し、口縁部は水平にのび屈折後外反してのびる。 ○端部を丸く収める。	○口縁部内外面共横ナデ調整	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	
			E449		○頸部で屈曲後口縁部は短かく直立して立ち上がる。 ○端部をわずかに外方に引き出し、上端を平坦に収める。	○口縁部内外面共横ナデ調整 ○頸部外面指押え	色調 淡褐色 胎土 良 焼成 良好	
		AⅢ	E450～E457	口径 13.5～16.7	○頸部は、ゆるやかに屈曲し、口縁部は外反してのびる。 ○端部は、外方に引き出し、上端を平坦または凹状に収める。	○口縁部内外面共横ナデ調整 ○頸部外面指押え ○体部外面ハケ調整、内面指押え及びナデ	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	
		AⅣ	E458	口径 17.8	○頸部で屈曲後、口縁部は外反して立ち上がる。 ○端部を強く外方に引き出し、上端はやや外傾する。	○口縁部内外面共横ナデ調整 ○体部外面ハケ調整	色調 暗褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	
		AⅦ	E459	口径 15.6	○頸部は、ゆるく屈曲し、口縁部は外反して短かく立ち上がる。口縁立ち上がりの度合いは非常に弱く、甘い稜を形成。 ○端部をわずかに外方に引き出し上端を平坦に収める。	○口縁部内外面共横ナデ調整	色調 淡褐色 胎土 良 焼成 良好	
			E460 E461	底径 3.3 3.8	○わずかに上げ底を呈する底部。	○磨滅が激しく調整は判別できないが、外面はハケ調整を行なっていると思われる	色調 暗褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	
	壺	AⅡ	E462	口径 16.5	○二重口縁を呈し、口縁部は頸部で屈曲後直口して上方にのび、中位で屈折して、やや内湾気味に斜上方に開いてのびる。口縁屈折部は凸帯状に突出し段をなし、内面は明瞭な稜線によって画される。	○磨滅が激しく調整の判別は困難であるが、口縁部内外面共横ナデ又はナデを行なっていると思われる	色調 赤褐色 胎土 淡良 焼成 良好	
		BⅡ	E463	口径 16.5	○大きく外湾してのびる口縁部。 ○端部を丸く収める。	○磨滅が激しいが外面にハケ調整痕が認められる	色調 淡褐色 胎土 良 焼成 良好	
		E	E464	口径 20.5	○頸部で屈曲後、口縁部はほぼ直線的に上方にのび、中位で大きく屈折し外上方にのびる。 ○端部は、上方にわずか拡張して、外側に面をつくる。	○口縁部内外面共ハケ調整後横ナデ、頸部外面付近と内面にハケ調整痕をとどめる	色調 淡褐 胎土 良 焼成 良好	
			E465		○頸部、肩部のみの残存であるが体部は、	○外面ハクリ ○内面粘土紐接合痕を	色調 淡褐色 胎土 細砂含有	

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考	
古式土師器					大きな、ほぼ球状を呈すると思われる。	明瞭に残し、指押えが認められる	焼成 良好	
	甕		E466 E467	底径 5.8 6.2	○中央がわずかに凹む、上げ底を呈し、体部へは屈曲して斜上方へとのびる。	○内外面共磨滅しており調整不明	色調 淡褐色(E466) 赤褐色(E467) 胎土 良好 焼成 良好	

T−19 SD42 出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考	
古式土師器	甕	AⅠ	E468 〜 E474	口径 12.3〜14.8	○頸部で丸く屈曲し、口縁部は、短かく外反して立ち上がる。 ○端部はほとんど外方に引き出さず上端を丸く、又は平坦に収める。	○口縁部内外面共横ナデ調整 ○内外面共ハクリが激しく調整の分別は困難であるが、体部外面にハケ調整痕をとどめるものがある	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	
		AⅡ	E475 〜 E478	口径 13.4〜15.7	○頸部で丸く屈曲し、口縁部は直立又は外反して立ち上がる。 ○端部は、外方に引き出し、上端を平坦に収める。	○口縁部内外面共横ナデ調整 ○体部内外面共ハクリ	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	
		AⅣ	E479	口径 16.0	○頸部で屈曲後、口縁部は、外反して短かく立ち上がる。 ○端部は、外方に引き出し上端は外傾する。	○口縁部内外面共横ナデ調整 ○体部外面にハケ調整	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	
		AⅠ	E480	口径 19.2	○二重口縁を呈し、口縁部は、中位で屈折後、外湾して大きく開く。 ○屈折部は甘い段を形成。 ○端部を丸く収める。	○内外面共ハクリ	色調 淡茶褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	
	壺		E481	底径 5.2	○平底の底部。	○内外面共ハクリ	色調 淡茶褐色 胎土 細砂多量含有 焼成 良好	
			E482	底径 6.5	○底部は、平底を呈すが、底部輪台への充填が充分でなく、中部付近がやや凹む。体部へは、屈曲して斜上方にのびる。	○底部側面に指押え	色調 淡赤褐色 胎土 良好 焼成 良好	
			E483 E484	底径 3.2 5.2	○上げ底の底部。	○底部側面に指押え ○E483は、外面にヘラケズリを行っている	色調 淡褐色 E483(外)黒色 胎土 良好 焼成 良好	
	高坏		E485		○比較的背の低い脚部で、付根よりゆるやかに「ハ」字状に開く。	○内外面共ハクリ	色調 淡赤褐色 胎土 良好 焼成 良好	

T－20　SD51　出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考	
古式土師器	甕	AⅠ	E486 E487	口径 14.0～16.7	○頸部で屈曲し、口縁部は、外反又は真立して立ち上がる。 ○端部は丸く収める。	○口縁部内外面共横ナデ調整 ○体部外面ハケ調整	色調　淡褐色 胎土　細砂含有 焼成　良好	
		AⅡ	E488 ～ E501	口径 13.8～17.4	○頸部は丸く屈曲し、口縁部は外反して立ち上がる。 ○口縁部立ち上がりの度合が弱く、甘い稜をもつものがある（E497～E500）。 ○端部は外方に引き出し、上端を平坦に収める。	○口縁部内外面共横ナデ調整 ○体部内外面共ハクリが激しいが、外面にハケ調整痕を残す	色調　淡褐色 胎土　細砂含有 焼成　良好	
		AⅣ	E502 ～ E506	口径 11.9～16.6	○頸部は「く」字形に屈曲、口縁部は外反してのびる。E502、E503の立ち上がりは弱く外反の度合いは他に比べて大きい。 ○端部は、強く引き出し、上端を平坦に収める。	○口縁部内外面共横ナデ調整 ○体部外面ハクリが激しいがハケ調整を残すものがある（E502）		
		AⅦ	E507	口径　13.0	○口縁部は明瞭な受口状をなさずほぼ内湾して立ち上がる。	○口縁部内外面共横ナデ調整	色調　淡褐色 胎土　良好 焼成　良好	
	壺	AⅠ	E508		○大型の二重口縁で、口縁屈折部は、凸帯状の段をなし、大きく外反してのびる。	○外面ハクリ ○内面ヘラミガキ	色調　淡褐色 胎土　良好 焼成　良好	
		AⅡ	E509	口径　19.6	○二重口縁の壺、外開きの口縁部は、上方で屈折して、さらに外反してのびる。屈折の度合いは弱く、甘い稜を有す。 ○端部は、平坦に収めるが丸味をもつ。	○内外面ハクリ	色調　淡褐色 胎土　細砂含有 焼成　不良	
			E510	口径　18.7	○外開きの口縁部は、上方で屈折し、外反してのびる。屈折部には、凸帯を貼り付け、明瞭な段をなす。 ○端部を丸く収める。	○口縁部内外面共横ナデ調整後、外面にハケ状具により綾杉状に施文を行なう	色調　赤褐色 胎土　良好 焼成　良好	
			E511 E512		○二重口縁を呈すると思われる。口縁部は、外開きにのび屈折して開く、E511の頸部外面に凸帯を貼り付けヘラ状具による刻目を施す。	○口縁部内外面共横ナデ調整	色調　淡褐色 胎土　細砂含有 焼成　良好	
		BⅠ	E513	口径　17.2	○頸部で屈曲後、口縁部は、外反して長くのびる。端部は丸く収める。	○内外面共ハクリ	色調　淡褐色 胎土　良好 焼成　良好	
			E514 E515	底径　5.7 5.4	○安定した平底を呈す。	○外面ハケ調整、内面ハケ調整後ナデ（E514）	色調　黒色（E514） 暗褐色	

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考	
古式土師器							胎土 (E515) 1～2㎜大の砂粒含有 焼成 良 好	
	壺		E516	底径 5.4	○底部は、わずかに上げ底を呈す。 ○パレスタイル式の体部を有すと思われる。	○底部側面指押え ○底面ヘラケズリ	色調 淡褐色 胎土 良 好 焼成 良 好	
	壺		E517	底径 7.5	○上げ底の底部より体部は、大きく外上方に開く。	○外面ハケ調整後ナデ ○内面ハケ調整 ○底面ヘラケズリ	色調(外)淡褐色 (内)黒灰色 胎土 良 好 焼成 良 好	
	高坏	D	E518	口径 10.5	○高坏の坏部で、内湾して上方にのび、端部を丸く収める。	○内外面共ハクリ	色調 淡褐色 胎土 良 好 焼成 良 好	
	高坏		E519 E520		○比較的背の低い、中ぶくれの脚柱部で、屈折して広がる裾部が付く。	○外面ヘラケズリ、内面指押え及びナデ、粘土巻き上げ痕残存(E519) ○E520は、外面ハクリ、内面指押え及びナデ	色調 淡褐色(E519) 赤褐色(E520) 胎土 良 好 焼成 良 好	
	器台	A	E521	口径 10.0	○受部はやや内湾気味にのび、口縁部は外面に稜をなし、外反して立ち上がる。 ○脚部は直線的に外上方に開き、脚部上方に3個の円孔を穿つ。	○受部内外面共横ナデ調整	色調 淡褐色 胎土 良 好 焼成 良	
	器台	A	E522		○受部は、丸味を有し、内湾気味にのびる。 ○脚部は、直線的に外上方に開く。	○受部外面横方向のヘラミガキ、内面横ナデ調整 ○脚部外面縦方向のヘラミガキ、内面板状ナデつけ	色調 淡褐色 胎土 良 好 焼成 良	
	器台	B	E523		○受部が、直線的に斜上方に開くもの。	○内外面共ハクリ	色調 淡褐色及び赤褐色 胎土 良 好 焼成 良	
	器台		E524	底径 12.5	○直線的に、大きく「ハ」字状に開く脚部で、端部を丸く収める。中位に3個の円孔を穿つ。	○外面ヘラケズリ ○内面指押え及びナデ	色調 淡茶褐色 胎土 良 好 焼成 良	
須恵器	坏蓋	A	C525	口径 11.8	○天井部から外下方へ直線的に流れる口縁部で、端部は、強く内傾した面をなす。	○内外面共横ナデ調整	色調 暗青灰色 胎土 精 良 焼成 堅 緻	上層

T－20　SK18　出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考	
古式土師器	甕	AⅡ	E526 E527	口径 13.7 15.0	○頸部は、丸く屈曲し、口縁部は、屈折して短かく立ち上がる。 ○端部を丸く収める。	○口縁部内外面共横ナデ調整	色調 暗褐色 胎土 細砂含有 焼成 良 好	

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考	
古式土師器	甕	AⅤ	E528 〜 E530		○頸部は、小さく「く」字形に屈曲し、口縁部は屈折して短かく内反気味に立ち上がる。 ○端部は、外方に引き出し、上端は、内傾する。	○口縁部内外面共横ナデ調整	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	
	高坏		E531	底径 8.6	○小型の高坏の脚部で付根よりゆるやかに「ハ」字状にのび、端部を丸く収める。	○外面ナデ及び指押え ○内面ハケ調整後ナデ	色調 淡茶褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	
			E532		○E531と同様小型のものであるが、脚部は、短い脚柱部より徐々に広がる裾部を付す。	○内外面共ナデ及び指ナデ ○外面にハケ調整痕残存	色調 淡赤褐色 胎土 良好 焼成 良好	
			E533 E534		○比較的背の低い脚部で、ゆるやかに「ハ」字状に開く。 ○E533は、脚部下方に3個の円孔を穿つ。	○外面磨滅のため調整不明 ○E533の内面にしぼり目、又E534の内面にヘラ先痕残存	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	
	鉢	A	E535	口径 14.4	○口頸部は、「く」字状に小さく屈曲し、口縁端部を上方に引き出し、外側に面をつくる。	○外面ハケ調整	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	
	脚台		E536		○付根よりやや内湾気味に広がるもので台付鉢の脚台と思われる。	○外面ハケ調整 ○内面指押え	色調 暗茶褐色 胎土 良好 焼成 良好	

T−20　SX5　出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考	
古式土師器	甕	C	E537	口径 15.4	○「く」字状に屈曲する頸部より口縁部は外反して開き、端部を上方にわずかに摘む。	○内外面共横ナデ調整	色調 淡赤褐色 胎土 良好 焼成 良好	
	壺	G	E538	口径 25.9	○外開きの口縁部は、中位で屈折し、さらに内反して立ち上がる。屈折部は、突帯状に段をなす。又端部は、内・外面にわずかに肥厚し、上端を平坦に収める。	○口縁部外面横ナデ調整後、ヘラ状具による斜線文を綾杉状に施らす。 ○端部内面に指押え、口縁部内面は、ハケ調整後ナデを施す。	色調 淡赤褐色 胎土 細砂少量含有 焼成 良好	
			E539	底径 5.0	○上げ底の底部より、体部は屈曲して内湾しながら外上方に大きく開く。	○外面指押え及びナデ ○内面ハケ調整	色調(外)黒灰色 (内)淡赤褐色 胎土 良好 焼成 良好	
	小型丸壺	B	E540		○体部は、ほぼ球状を呈し、頸部で「く」字状に屈曲して口縁部は外反して開く。	○内外面共指押え及びナデ調整	色調 淡赤褐色 胎土 良好 焼成 良好	
	鉢	B	E541	口径 15.7	○頸部でゆるく屈曲した口縁部は、やや内湾気味に外上方にの	○内外面横方向の細いヘラミガキ	色調 淡茶褐色 胎土 良好 焼成 良好	

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考	
					び、端部を丸く収める。			

T－20　P－1　出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考	
古式土師器	壺	CⅡ	E542	口径 11.2	○「く」字形に屈曲した頸部より口縁部は、外反してのび、端部を丸く収める。 ○体部は、ほぼ球状を呈すと思われる。	○内外面共磨滅しており調整不明	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 やや不良	

T－21　SD51　出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考	
弥生土器	甕		E543 E544	口径 13.7 13.5	○大きく屈曲する頸部より口縁部は、ほぼ直立して立ち上がる。 ○端部上端は、内傾する面をなす。	○E543の口縁部外面は横ナデ後櫛状具による左下がりの列点文を廻らす。E544は列点文を施した後にさらに横ナデ調整を加える ○口縁部内面横ナデ調整	色調 茶褐色 E543外面スス付着 胎土 細砂含有 焼成 良好	
			E545	口径 11.9	○外開きの口頸部は、さらに水平にのび、屈折して上方に立ち上がる。 ○頸部外面に、突帯を貼り付ける。	○口縁部内外面共横ナデ調整 ○口頸部外面ハケ調整、突帯付近に櫛状具による列点文を廻らす ○口頸部内面ナデ	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	
	壺		E546	口径 21.7	○外反して開く口縁部は、上方において屈折し、さらに外反気味に短かく立ち上がる。屈折部は、突帯状に段をなす。	○内外面共横ナデ調整	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	
			E547	底径 12.9	○安定した平底の底部。	○外面ハケ調整後ナデ ○内面指押え	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	
	高坏		E548	口径 21.2 底径 11.5	○坏底部より口縁部がやや外反気味に立ち上がる浅い坏部。 ○端部は、ほぼ平坦に収める。 ○脚部は、細い筒状の脚柱部に屈折して開く、裾部が付き、裾部下端をわずかに上方に肥厚させる。 ○脚部に6個の円孔を穿つ。	○内外面共磨滅が激しいが、口縁部外面に横方向の、底部には縦方向のヘラミガキを施し、又、内面はヘラミガキを行なった後、口縁部付近に横ナデ調整を加えると思われる ○脚部はナデか	色調 茶褐色 胎土 2～3㎜大の砂粒含有 焼成 良好	
			E549	底径 9.0	○筒状の脚柱部に短かく開く裾部を付す。裾端部を上方にわずかに拡張する。	○内外面共横ナデ調整	色調 淡褐色好 胎土 良好 焼成 良好	

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考	
弥生土器	高坏		E550	底径 14.6	○太い脚部で「ハ」字状にゆるやかに開き、端部を丸く収める。 ○脚部中位に6個の円孔を穿つ。	○外面に粗いハケ調整痕をわずかに残すが、磨滅が激しく実測不能 ○内面指押え及びナデ	色調 淡褐色好 胎土 良 好 焼成 良 好	
			E551		○中空で筒状を呈する脚柱部よりやや内湾気味に開く裾部。	○外面ハケ調整後ナデ、ヘラ状具による沈線を4条廻らす ○内面指押え及びナデ、裾部にハケ調整痕		
	器台		E552	口径 29.7	○外開きの口縁部で、端部を大きく垂下させる。	○端部外面に四線文を6条廻らす。 ○内面横ナデ調整	色調 暗茶褐色 胎土 1～2㎜大の砂粒含有 焼成 良 好	
古式土師器	高坏		E553 E554		○開きの小さい中空の脚部。	○外面磨滅しており調整不明 ○内面指押え及びナデ	色調 淡褐色好 胎土 良 好 焼成 良 好	
			E555		○脚部は、やや内湾気味に「ハ」字状に広がる。	○内外面共磨滅しており調整不明	色調 淡赤褐色好 胎土 良 好 焼成 良 好	
			E556		○小型の高坏で、脚部は短かく「ハ」字状に大きく開く。下方に4個の円孔を穿つ。	○内外面共ナデ	色調 淡褐色好 胎土 良 好 焼成 良 好	

T－24　包含層出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考	
古式土師器	甕	A	E557	口径 15.6	○頸部は丸く屈曲し、口縁部は短かくほぼ直立する。 ○端部は外方にわずかに引き出し、上端はやや内傾する。	○内外面共磨滅しており調整不明	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 やや不良	
	壺		E558	底径 6.8	○上げ底で、中央部がわずかに凹む。	○磨滅しており調整不明	色調 淡茶褐色好 胎土 良 好 焼成 良 好	
			E559	底径 5.2	○突出気味の底部で平底を呈す。	○内外面に指押え	色調 淡褐色好 胎土 良 好 焼成 良 好	
	鉢	C	E560	口径 9.2	○頸部でゆるく屈曲し、口縁部は、外反気味に短かくのび、端部を丸く収める。	○口頸部内外面共横ナデ調整	色調 淡赤褐色好 胎土 良 好 焼成 良 好	

T－24　P－28　出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考	
古式土師器	壺		E561	底径 7.8	○安定した平底の底部で、体部は屈曲して斜上方にのびる。	○底部側面に指押え	色調(外)淡褐色 (内)黒色 胎土 1～2㎜大の砂粒含有 焼成 良 好	

T－25　SD63　出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考	
弥生土器	甕		E562 E563	口径 14.0 21.0	○頸部は、丸くゆるやかに屈曲し、口縁部は、内反して短かく立ち上がる。口縁立ち上がりは丸味を有す。 ○端部は、内傾して丸く収める。	○口縁部外面横ナデ調整後櫛状具による弧状文を廻らす（E562） ○口縁部外面右下がりの粗いハケ調整後上半に横ナデを行なう。内面には指押え（E563）	色調 淡褐色 胎土 1～2㎜大の砂粒含有 焼成 良好	
古式土師器	甕	A Ⅰ	E564 E565	口径 15.2 17.2	○頸部屈曲後、口縁部は、外反して短かくのびる。 ○端部の外方への引き出しは弱く上端をほぼ平坦に収める。	○口縁部内外面共横ナデ調整	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	
			E566 E567	口径 15.0 15.4	○頸部屈曲後、口縁部は、外反して短かくのび、端部を外方へ引き出し、上端を平坦に収める。	○口縁部内外面共横ナデ調整 ○頸部外面及び口縁部内面に指押え	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	
		B Ⅰ	E568 E569	口径 14.4 14.8	○直線的に外上方にのびる口縁部で、端部をやや尖り気味に収める。	○磨滅しており調整不明	色調 淡褐色 胎土 2～3㎜大の砂粒含有 焼成 良好	
			E570	底径 6.6	○安定した平底を呈するが、外側と接地しない面が残る。体部へは、強く屈曲して斜上方にのびる。	○外面ハケ調整後ナデ ○内面指押え	色調(外)淡褐色 (内)黒色 胎土 1～2㎜大の砂粒含有 焼成 良好	
			E571	底径 3.6	○突出した底部で、平底を呈す。体部は内湾気味に上方にのびる。	○外面指押え ○内面ハケ調整後ナデ	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	
			E572		○底部は、ほぼ丸底を呈するが、中央部がわずかに凹む。 ○体部は、球形を呈すると思われる。	○底面ヘラケズリ、体部外面指押え ○内面、指押え及び指ナデ	色調(外)淡褐色 (内)淡赤褐色 胎土 良好 焼成 良好	
			E573	底径 3.0	○小形の壺で、球状の体部を有すると思われる。突出した平底の底部。	○内外面に指押え	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	
	高坏		E574	底径 12.0	○開きの弱い脚柱部より屈折して開く裾部が付く。 ○端部は、面をなし丸味がある。	○脚柱部内外面に指ナデ	色調 淡赤褐色 胎土 良好 焼成 良好	
			E575		○開きの小さい脚柱部で直線的に開く。	○坏部との境界にハケ目痕残存 ○脚柱部外面磨滅	色調 淡赤褐色 胎土 良好 焼成 良好	
			E576		○小型の脚部で、ゆるやかに「ハ」字状に開く。 ○脚部中位に3個の円孔を穿つ。	○内外面共磨滅しており調整不明	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
	有孔鉢		E577	底径 7.8	○安定した平底の底部で、底部中央に直径1.2cmの円孔を穿つ。	○外面ナデ ○内面指押え及びナデ	色調 淡褐色好 胎土 良好 焼成 良好
土ミニチュア器			E578		○小型の手づくね品で平底の底部で、体部は内湾気味にのび、口縁端部を丸く収める。	○手づくね	色調 淡褐色好 胎土 良好 焼成 良好

T－26　SD66　出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
古式土師器	甕	AⅡ	E579	口径 14.5	○頸部は丸く屈曲し、口縁部は外反して短かく立ち上がる。 ○端部は、わずかに外方に引き出す。	○頸部外面指押え	色調 淡茶褐色 胎土 1㎜大の砂粒含有 焼成 良好
	壺	BⅠ	E580	口径 15.7	○口縁部は、直線的に外反して外上方にのび、端部を丸く収める。 ○頸部外面に中0.7cmの凸帯を貼り付ける。	○口縁部内外面共横ナデ調整	色調 淡褐色有 胎土 細砂含 焼成 良好
			E581	底径 4.1	○やや突出気味の上げ底の底部。	○磨滅しており調整不明	色調 淡赤褐色 胎土 良好 焼成 良好
	高坏		E582		○太く短い脚柱部で、「ハ」字状に大きく開く。	○脚部付根及び下半に指押え	色調 赤褐色有 胎土 細砂含 焼成 良好
須恵器	坏身	A	C583	口径 10.2 器高 4.1	○やや小型の坏蓋で、強く内傾する立ち上がりを有する。 ○受部は、内湾気味に外上方へ短かくのびる。 ○底部は、やや丸味を有する。	○器体内外面共横ナデ調整 ○底部は、ヘラケズリ後、ヘラ先又はナデによる調整を行なう	色調 青灰色好緻 胎土 良緻 焼成 堅

T－27　SD67　出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
弥生土器	壺		E584	口径 13.8 底径 6.1	○体部は、中位に最大腹径を有する偏球状を呈し、ゆるやかな曲線を描いてすぼまり頸部に到る。 ○頸部でゆるく屈曲し、口縁部は直線的に外上方に開き、端部上端を平坦に収める。 ○底部は、平底を呈す。	○器体外面ハケ調整後ナデを行ない、あと櫛状具(8条)による直線文を口頸部に6帯、又体部上半にも数帯廻らす ○底部側面に指押え ○内面指押え及びナデ	色調 淡褐色 胎土 1～3㎜大の砂粒含有 焼成 良好

T－27　SK24　出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考	
古式土師器	甕	A Ⅱ	E585	口径 14.1	○頸部で屈曲後、口縁部は短かく外反して立ち上がり、端部上端はやや外傾する。	○口縁部内外面共横ナデ調整	色調 淡褐色有 胎土 細砂含 焼成 良好	
	壺		E586 E587	底径 5.8 4.8	○底部は、上げ底を呈し、体部へは強く屈曲して外上方にのびる。	○内外面共ハケ調整後ナデ（E586） ○底部側面に指押え	色調(外)淡褐色 (内)黒色 胎土 細砂含有 焼成 良好	

T－28　包含層　出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考	
古式土師器	甕	A Ⅱ	E588	口径 13.8	○頸部は、小さく屈曲し、口縁部は、外反して短かくのびる。 ○端部は、丸く収める。 ○体部は、ほぼ球状を呈すると思われる。	○口縁部内外面共横ナデ調整、頸部付近に指押え ○体部外面ヘラ描沈線交差 ○体部内面ナデ	色調 暗褐色 外面ス付着 胎土 良好 焼成 良好	
			E589	口径 12.3	○頸部は、「く」字形に屈曲し、口縁部はほぼ直立して立ち上がる。 ○端部は、外方に引き出し、内傾した面をなす。	○内外面共磨滅しており調整不明	色調 淡褐色有 胎土 細砂含 焼成 良好	
		B Ⅱ	E590	口径 15.8	○口頸部は、「く」字形に屈曲後、直線的に外反してのびる。端部は、内側に肥厚し、丸味のある内傾面を呈す。	○口縁部内外面共横ナデ調整 ○頸部内面以下ヘラケズリ	色調 黒褐色 胎土 良好 焼成 良好	
			E591	口径 13.1	○頸部は、「く」字形に屈曲、口縁部はやや内湾気味に外上方にのびる。 ○端部は、内側に肥厚し、強い内傾面を呈す。	○口縁部内外面共横ナデ調整 ○体部内面ヘラケズリ	色調 暗褐色 胎土 良好 焼成 良好	
	壺		E592	底径 4.2	○あげ底の底部、体部へは強い屈曲をもって斜上方にのびる。	○底部側面及び内面に指押え	色調 暗茶褐色 胎土 良好 焼成 良好	
	高坏		E593		○比較的低い脚部で、開きの小さい脚柱部より屈折して裾部に到る。	○外面磨滅のため調整不明 ○内面ナデ	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	
			E594		○中空で細身の脚柱部。	○外面磨滅しており調整不明 ○内面指押え及びナデ	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	
須恵器	瓶		C595	底径 6.4	○断面逆三角形を呈する高く、安定した高台。	○体部内外面共横ナデ調整 ○底面糸切り ○貼り付け高台、貼り付け後ナデ	色調 灰白色 胎土 良緻 焼成 堅	

T－28　SD69　出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考	
古式土師器	甕	AⅠ	E596	口径 17.3	○頸部屈曲後、口縁部は、外反して短かくのび、端部をやや外方に引き出す。上端はわずかに外傾面を呈すが、ほぼ平坦に収める。 ○口縁部立ち上がりの度合は弱く、丸味を有す。	○内外面共横ナデ調整 ○頸部外面に指押え	色調 淡褐色好 胎土 良 焼成 良	
		AⅠ	E597	口径 14.0	○頸部は鋭く屈曲、口縁部は直立して立ち上がり、上端は、外傾する面を呈す。	○口縁部内外面共横ナデ調整 ○肩部外面にハケ目痕残存 ○頸部外面には、口縁部との折合の際のヘラ先残存	色調 淡褐色ス 外面煤付着 胎土 良好 焼成 良好	
		BⅡ	E598	口径 14.2	○頸部は「く」字形に屈曲し、口縁部は直線的に外反してのびる。 ○端部は、内側に肥厚し、内傾する。	○口縁部内外面共横ナデ調整 ○体部内面ヘラケズリ	色調 茶褐色好 胎土 良 焼成 良好	
	高坏	AⅠ	E599 E600	口径 14.8 18.1	○比較的浅い坏体部でほぼ直線的に外反してのび口縁端部を丸く収める。 ○坏底部は、丸味を有すると思われる。	○体部内外面共横方向の細いヘラミガキを施す（E599） ○体部内面に縦方向のヘラミガキ（E600）	色調 淡赤褐色 胎土 1㎜大の砂粒含有（E600） 焼成 良好	

T－28　SD70　出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考	
古式土師器	甕	AⅠ	E601 ～ E610	口径 12.7～16.2	○頸部は丸く屈曲し、口縁部は、外反して立ち上がる。 ○端部は外方へ引き出し、上端を丸く収めるものと、平坦に収めるものがある。	○口縁部内外面横ナデ調整又はハケ調整を行うものもある。 ○頸部外面に指押え ○体部外面ハケ調整	色調 茶褐色ス 外面煤付着のあり 胎土 細砂含有 焼成 良好	
			E611 ～ E613	口径 10.8～15.1	○頸部の屈曲が小さいもので、口縁部も、短かく直立して立ち上がり、端部を外方へ引き出し、上端を丸く又は平坦に収めるもの。	○口縁部内外面横ナデ調整のもの、またハケ調整を施すものがある。 ○頸部外面に指押え ○体部外面ハケ調整	色調 淡褐色好 胎土 良好 焼成 良	
			E614 ～ E620	口径 12.7～15.2	○頸部の屈曲が弱く、また口縁部立ち上がりの度合の甘い丸味を有するもの。 ○端部をわずかに外方へ引き出し、上端を丸く、または平坦に収めるものであるがE619、E620は、端部の引き出しはなく上端を丸く収める。	○口縁部内外面共横ナデ調整。E616E618は、ハケ調整痕残存 ○頸部付近及び体部内面指押え ○E620の口縁部外面に、一条のヘラ描沈線	色調 淡褐色又は暗褐色 胎土 良好 焼成 良好	

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考	
古式土師器	甕	AⅣ	E612〜E627	口径 10.2〜15.8	○頸部は「く」字形に屈曲し、口縁部はゆるやかに外反して立ち上がるもの、また直立気味に立ち上がるもの(E627)がある。 ○端部は、外方へ強く引し、平坦に収める。	○口縁内外面共横ナデ調整、E621は口縁部外面にハケ調整痕残存 ○頸部付近に指押え ○体部外面にハケ調整 ○E626の口縁部外面に一条のヘラ描沈線を廻らす	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	
		AⅤ	E628 E629	口径 13.8 口径 14.0	○頸部は「く」字形に屈曲し、口縁部は外反して短かく立ち上がる。 ○端部は、外方へ強く外傾する面をなす。	○口縁部内外面共横ナデ調整 ○体部外面にハケ調整	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	
		AⅥ	E630	口径 11.8	○頸部は「く」字形に屈曲、口縁部は弱く屈折し内反して立ち上がる。 ○端部を外方へ引き出し平坦に収める。	○口縁部内外面共横ナデ調整	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	
		AⅦ	E631〜E634	口径 12.0〜17.3	○頸部の屈曲及び口縁立ち上がりの度合が非常に弱いもので、わずかに受口をとどめるものである。 ○端部は、外方へ引き出し平坦に収める。	○口縁部内外面共横ナデ調整 ○頸部外面及び体部内面に指押え ○体部外面ハケ調整	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	
		AⅨ	E635	口径 14.5	○ゆるく屈曲する頸部より、口縁部は中位でややふくらみながら斜上方にのびる。 ○端部を外方へ引き出し上端を平坦に収める。	○口縁部外面ハケ調整後横ナデ ○頸部外面にハケ調整 ○内面横ナデ調整	色調 暗灰褐色 胎土 良好 焼成 良好	
	甕	BⅠ	E636	口径 12.4	○頸部で「く」字形に屈曲後、口縁部はやや内湾気味にのびる。 ○端部は、内側に肥厚し、やや丸く収める。	○口縁部内外面横ナデ調整 ○体部内面ヘラケズリ	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	
			E637	口径 13.5	○「く」字形に外反して短かくのびる口縁部で端部は、外側に面をなす。 ○体部は、球状を呈すると思われる。	○口縁部内外面共横ナデ調整	色調 淡茶褐色 胎土 細砂多量含有 焼成 良好	
			E638	底径 3.0	○上げ底の底部。	○外面磨滅しており調整不明	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	
			E639	底径 3.6	○底部は平底を呈し、体部は大きく外上方へ開く。	○外面ハケ調整 ○内面ハケ調整痕残存	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	
	壺	BⅠ	E640	口径 13.7	○口縁部は「く」字形に外反してのび上方においてさらに外反する。 ○端部は、外側に面をなす。	○口縁部内外面横方向のハケ調整後横ナデを加える。	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	
		F	E641		○口縁部は、短かく上方にのび、端部は、	○磨滅のため調整不明	色調 淡赤褐色 胎土 良好	

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考	
古式土師器					外方に屈折して外側に面をなす。		焼成 良好	
	壺		E642	底径 5.6	○底部は、ほぼ平底を呈し、体部は屈曲して大きく外上方へのびる。	○底部側面に指押え ○内面ナデ	色調(外)淡茶褐色 (内)黒色 胎土 良好 焼成 良好	
	小型丸底壺	C	E643	口径 6.4	○小型の壺で、体部はほぼ球状を呈すと思われ、内湾してすぼまり頸部に到る。 ○口縁部は、短かく内湾気味に立ち上がり端部を丸く収める。	○口縁部内外面、肩部外面横ナデ調整 ○内面指押え、粘土紐巻き上げ痕残存	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	
		D	E644	口径 8.2	○小型の壺で、口縁部はわずかに受口状の形態をとどめるものの、ほぼ内湾気味に短かくのび端部を外方へ引き出す。	○口縁部内外面共横ナデ調整	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	
			E645 E646		○脚部付根よりゆるやかに「ハ」字状に開くもので、中位に4個の円孔を穿つ。	○外面ハケ調整 ○内面指押え及びナデ	色調 淡褐色(E645) 淡赤褐色(E646) 胎土 良好 焼成 良好	
	高坏		E647		○開きの小さい脚柱部で、屈折して開く裾部を付すもの。	○外面ヘラケズリ ○内面、指押え、しぼり目残存	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	
			E648	裾径 16.7	○大きく「ハ」字状に広がる裾部で下端を丸く収める。 ○裾部に円孔を穿つ。	○外面ナデ ○内面ハケ調整後ナデ	色調 暗褐色 胎土 良好 焼成 良好	
			E649 ～ E651		○おだやかに「ハ」字状に開く低い脚部で小型で、塊形の坏部を有するものと思われる。 ○脚部中位から下方にかけて3個の円孔を穿つ。	○E649、E651の外面にハケ調整痕をとどめるが、ナデを加えている。 ○E649の内面ハケ調整、他指押え	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良	
			E652 ～ E656		○裾身で筒状の脚柱部、屈折して開く裾部を付す。 ○E656はやや中実化している。	○外面縦方向に細いヘラケズリ。E652、E653は、ハケ調整後ヘラケズリを加える。 ○内面指押え及びナデ、しぼり目残存	色調 赤褐色(E655)他は淡茶褐色 胎土 良好	
	器台	A	E657 E658	口径 8.5	○受部は、やや内湾気味にのび、口縁部は外面に稜をなし外反して立ち上がる。 ○E658の口縁部立ち上がりの度合は甘く丸味を有する。 ○端部を丸く収める。	○E657の受部内外面に細いヘラミガキ ○E658磨滅のため調整不明	色調 淡褐色(E657) 赤褐色(E658) 胎土 良好 焼成 良好	
須恵器	坏身		C659	口径 13.5	○比較的浅い坏身で、体部は外反して直線的にのび口縁端部を丸く収める。	○内外面共回転ナデ調整	色調 灰白色 胎土 良緻 焼成 堅	

T－28　SH３　出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考	
古式土師器	甕	A Ⅱ	E６６０	口径　17.0	○頸部は小さく「く」字形に屈曲し、口縁部は短かく外反して立ち上がる。立ち上がりは甘くやや丸味を有す。 ○端部は外方へ引き出し上端を平坦に収める。	○口縁部内外面共横ナデ調整 ○体部外面ハケ調整	色調　暗褐色 胎土　細砂多量含有 焼成　良好	

T－28　ピット内　出土土器

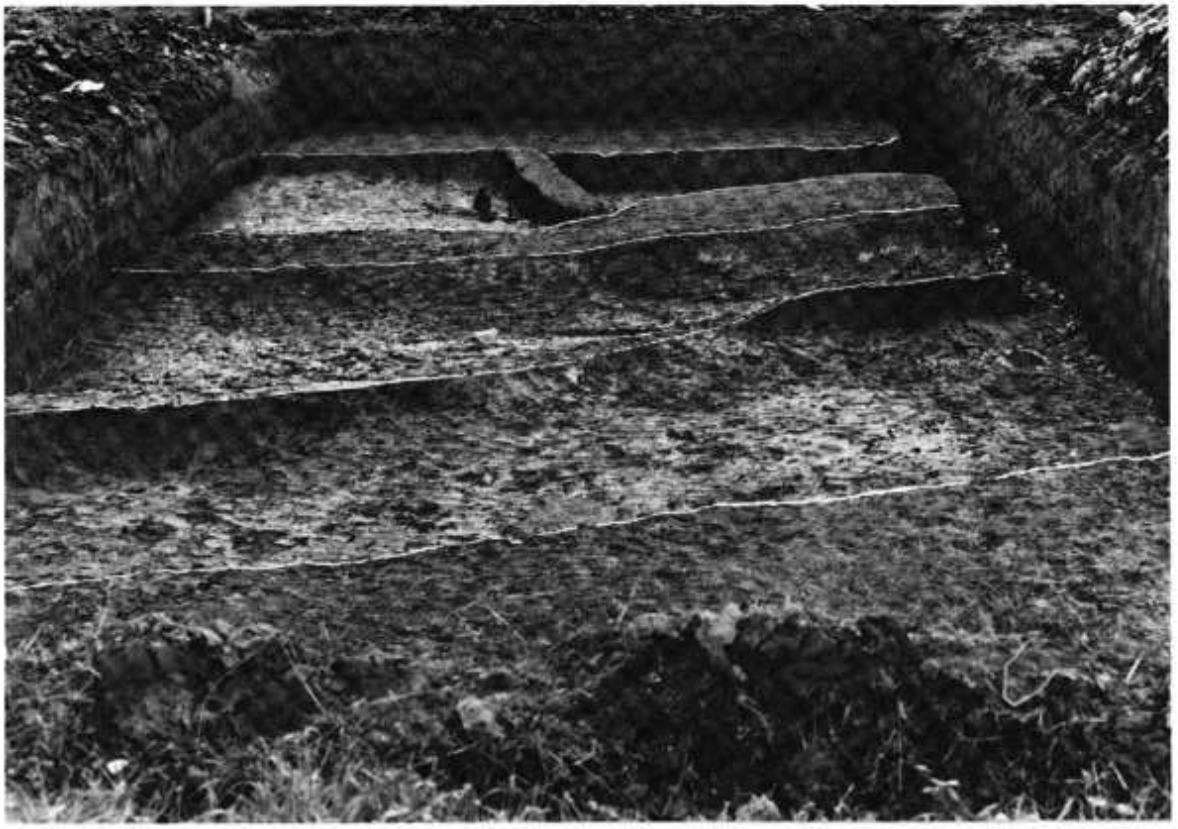
器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考	
古式土師器	甕	A Ⅱ	E６６１	口径　14.8	○頸部屈曲後、口縁部は外反して立ち上がり、端部を丸く収める。	○口縁部内外面共横ナデ調整 ○頸部内外面に指押え	色調　淡褐色 胎土　細砂含有 焼成　良好	P－21
		A Ⅱ	E６６２	口径　13.0	○頸部で丸く屈曲した後、口縁部は、短かく外反して立ち上がる。 ○端部を外方へ強く引き出し上端を平坦に収める。	○口縁部内外面共横ナデ調整 ○頸部付近及び内面に指押え	色調　淡褐色 胎土　細砂含有 焼成　良好	P－7

図　　版

T－1　全景(北より)

T－2　全景(北より)

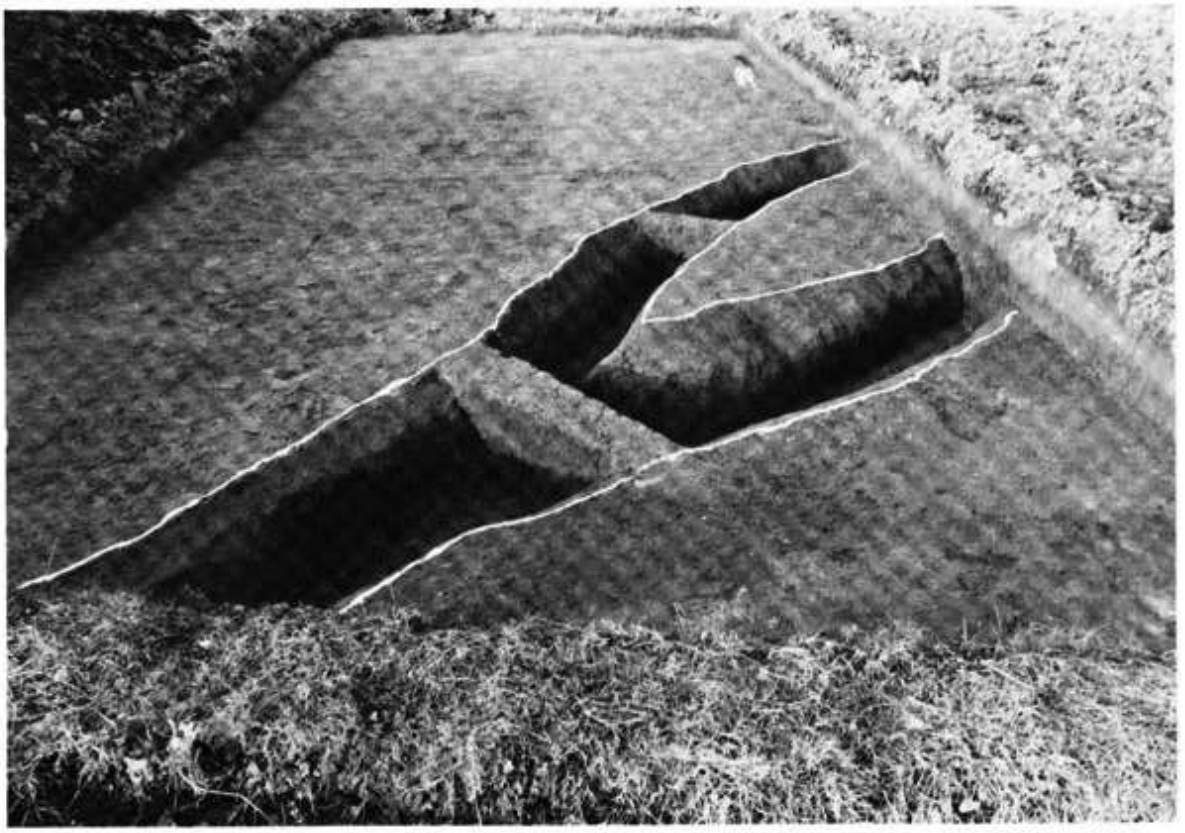
PL. 2



T－3　全景(南より)

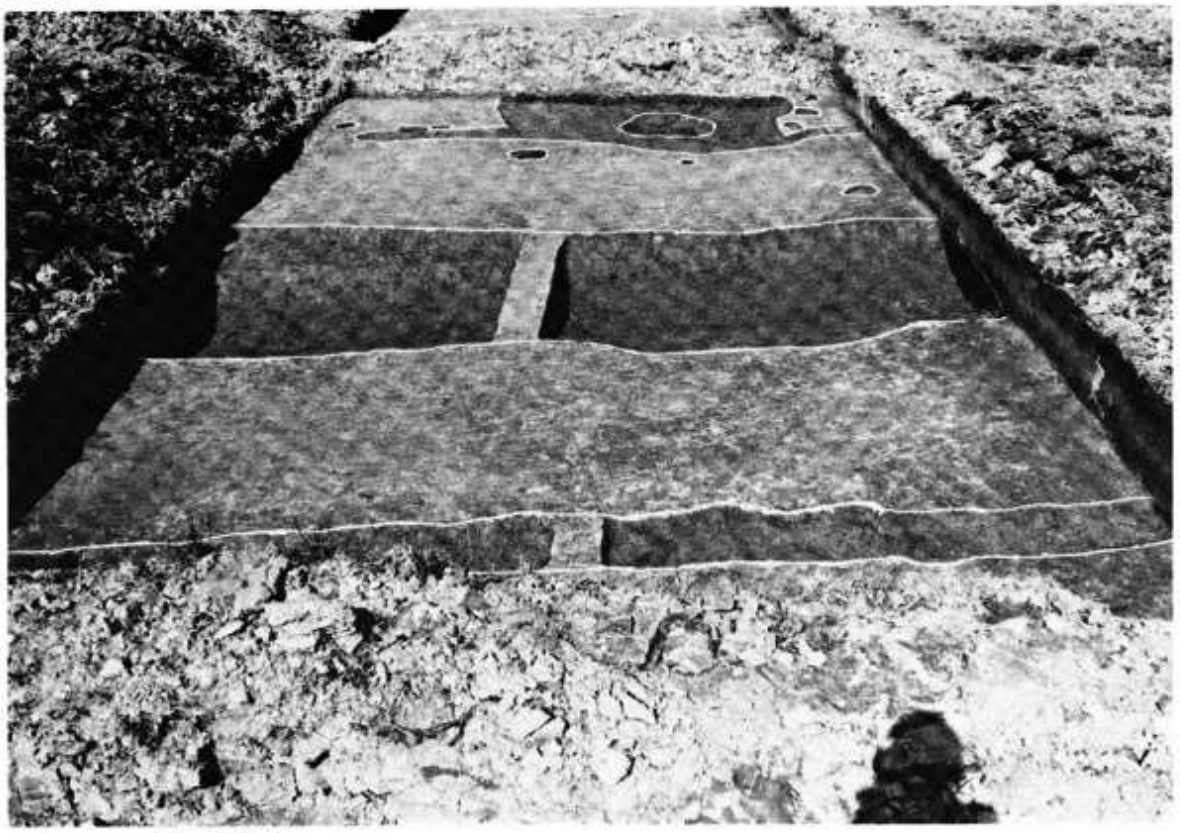
T－4　全景(北より)

T－6　全景(東より)

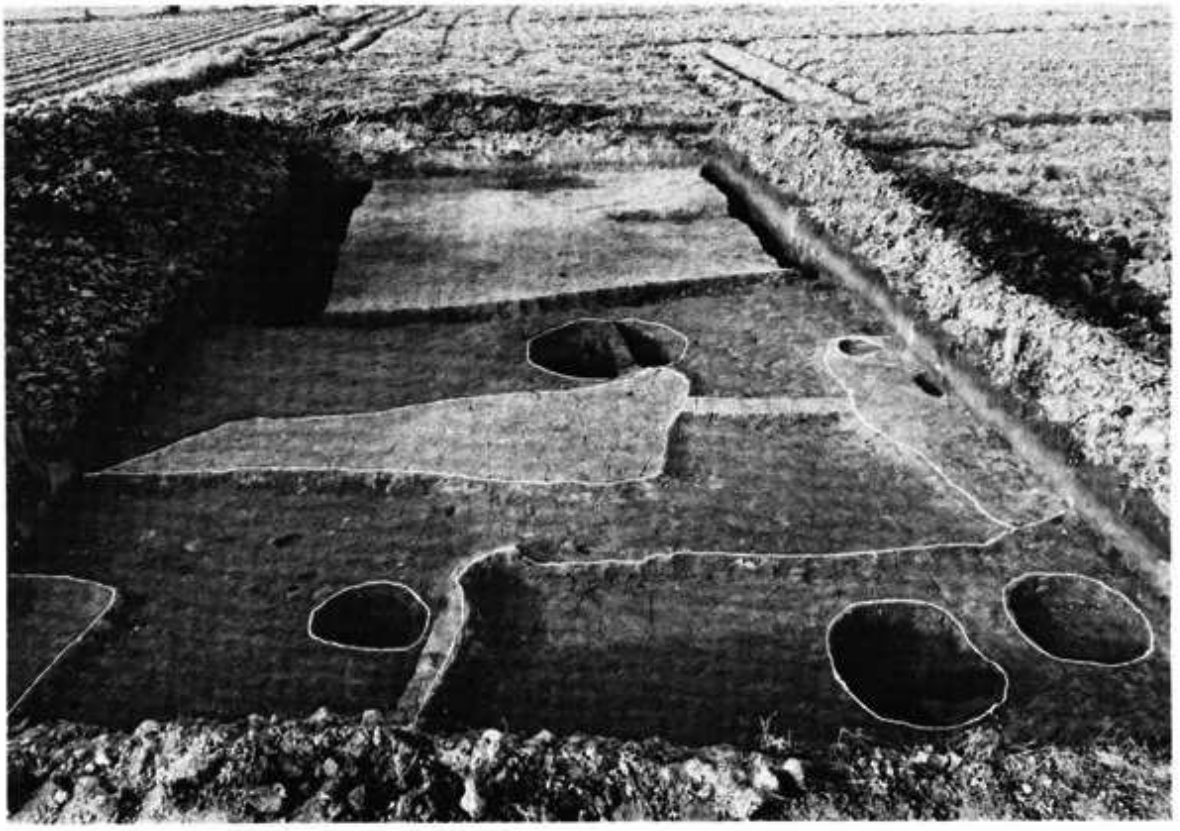


T－7　全景(南より)

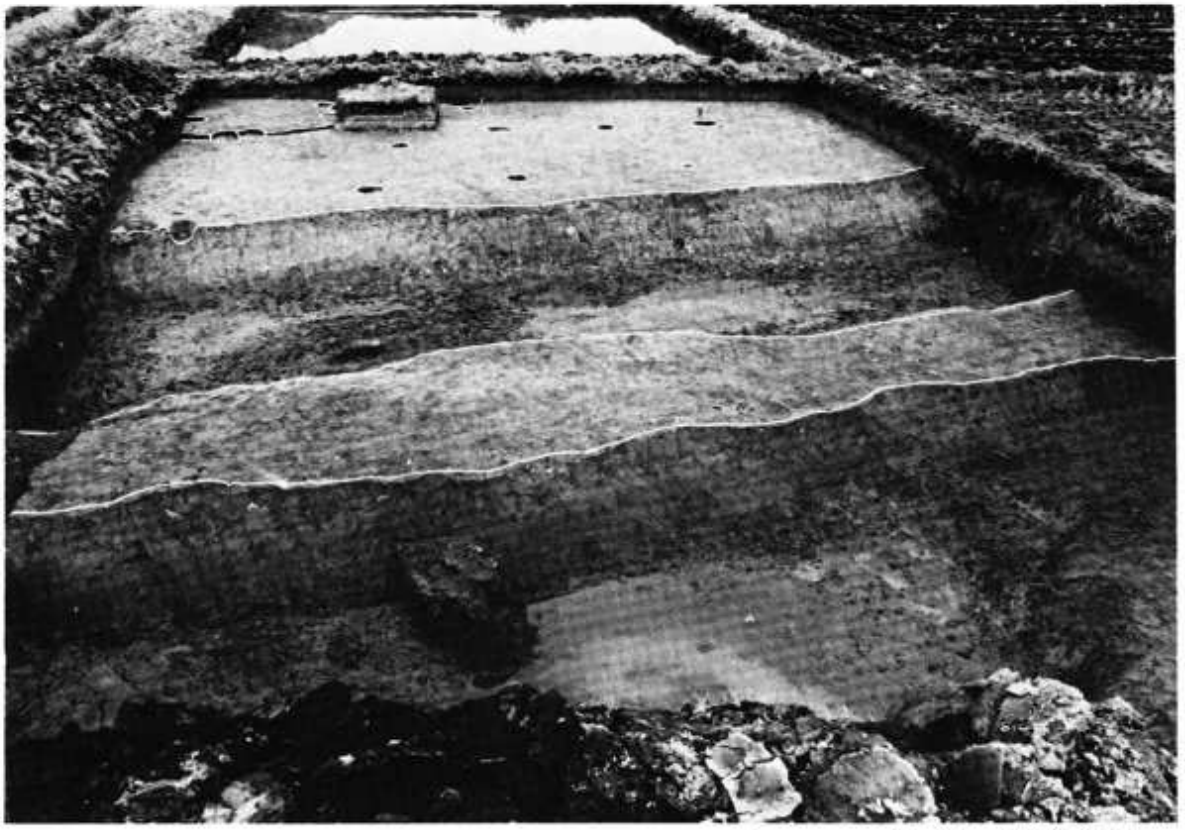
PL. 4



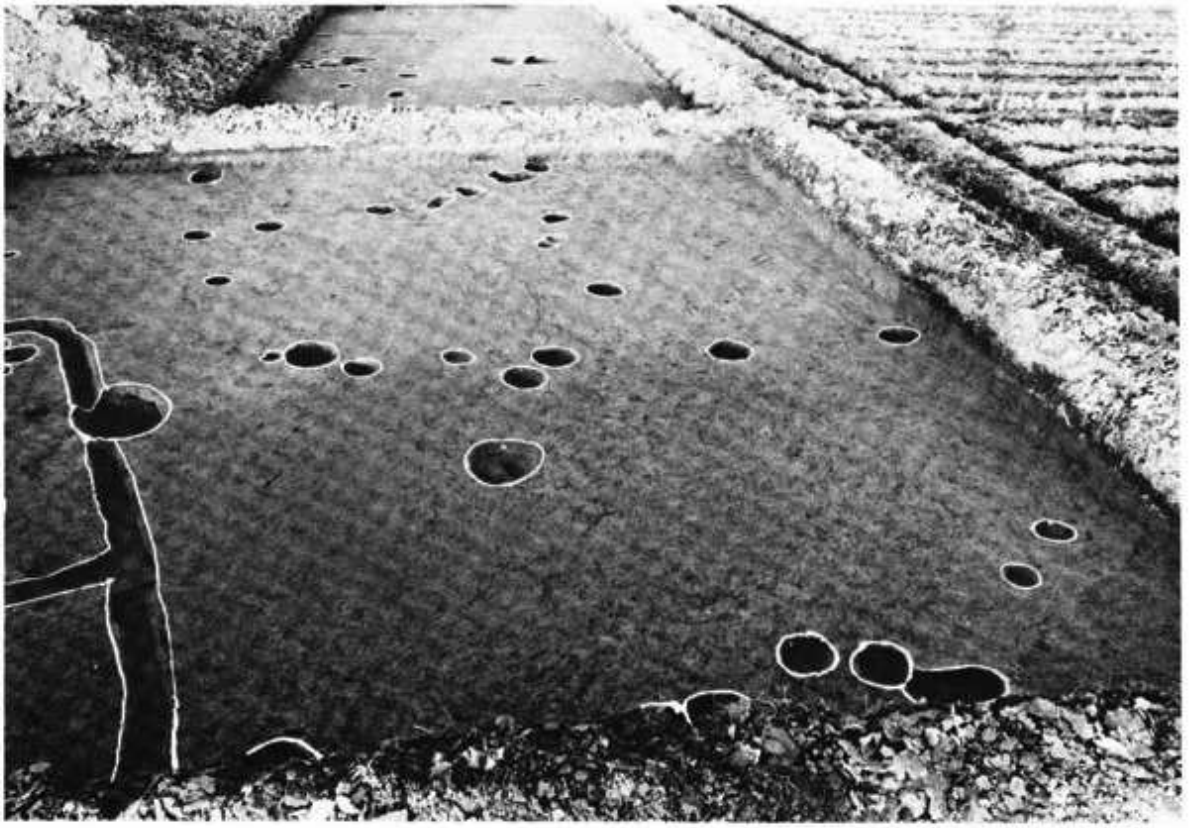
T－8　全景(南より)



T－9　全景(南より)

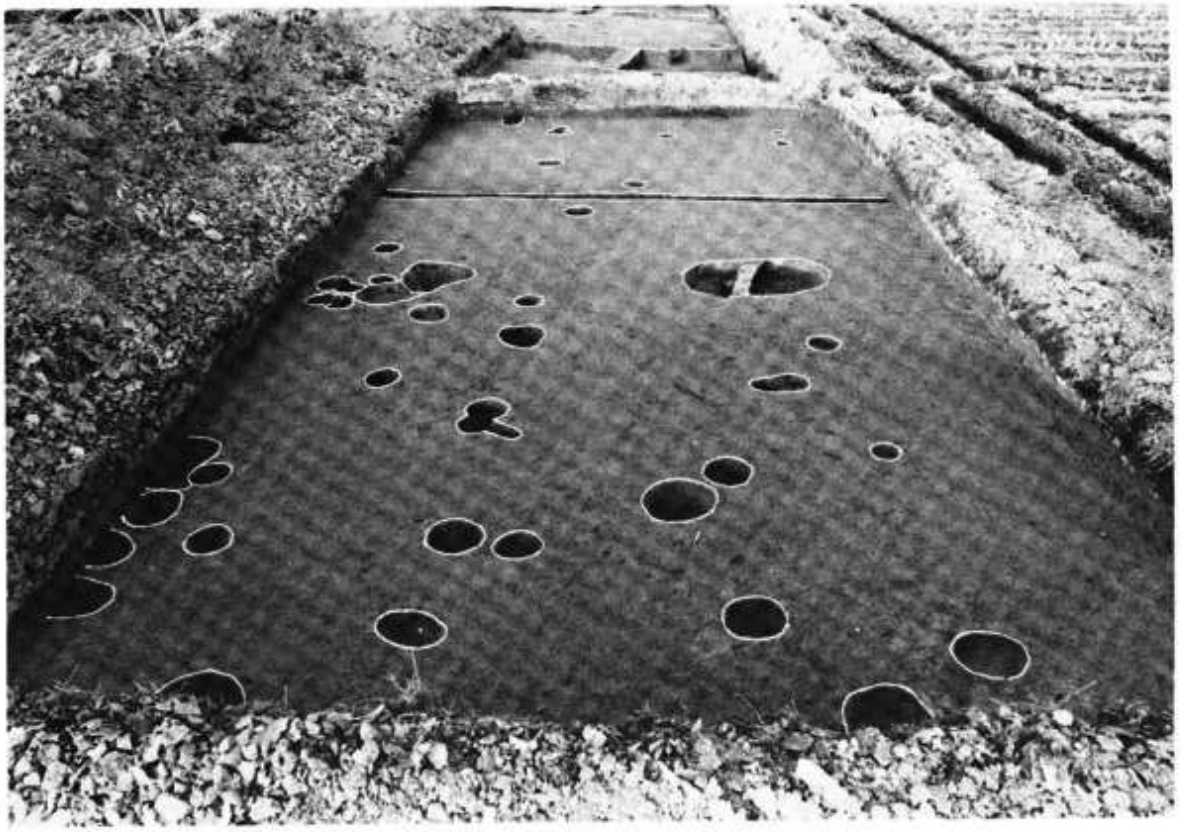


T－10　全景(南より)

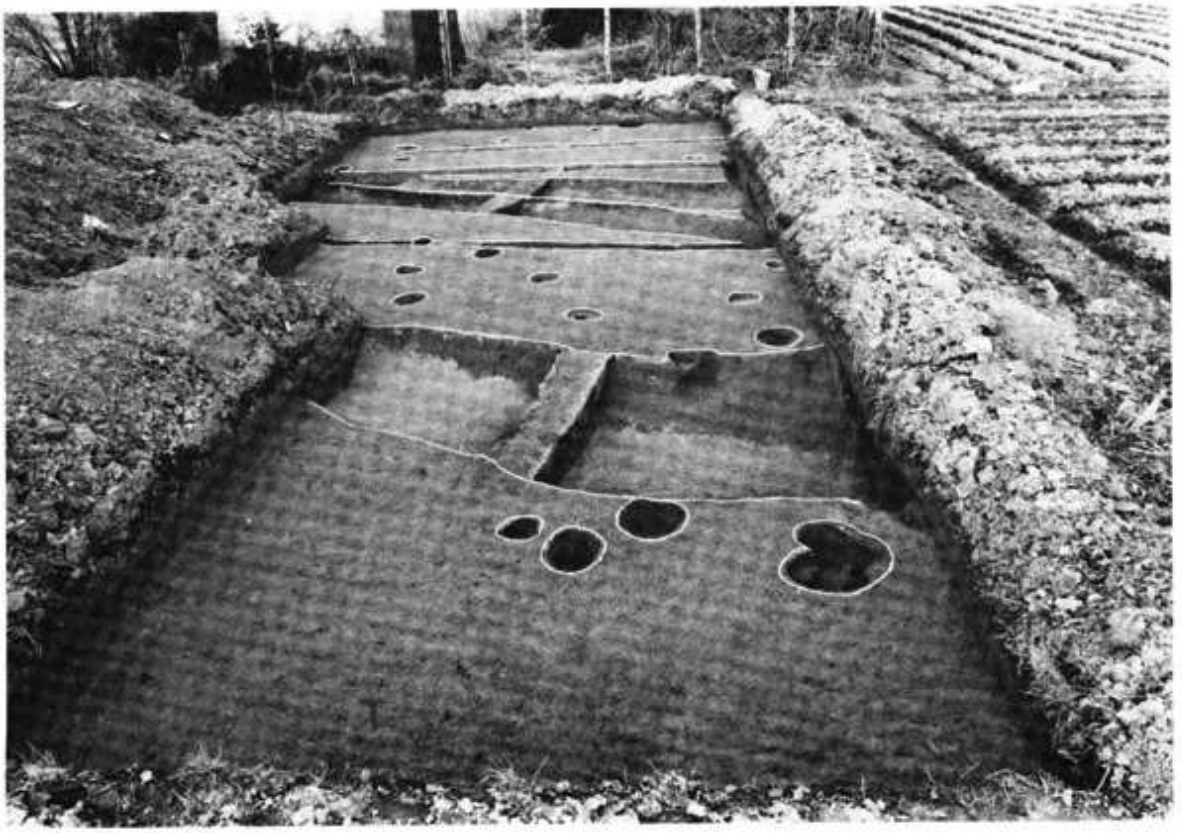


T－11　全景(南より)

PL. 6



T－12　全景(南より)



T－13　全景(南より)

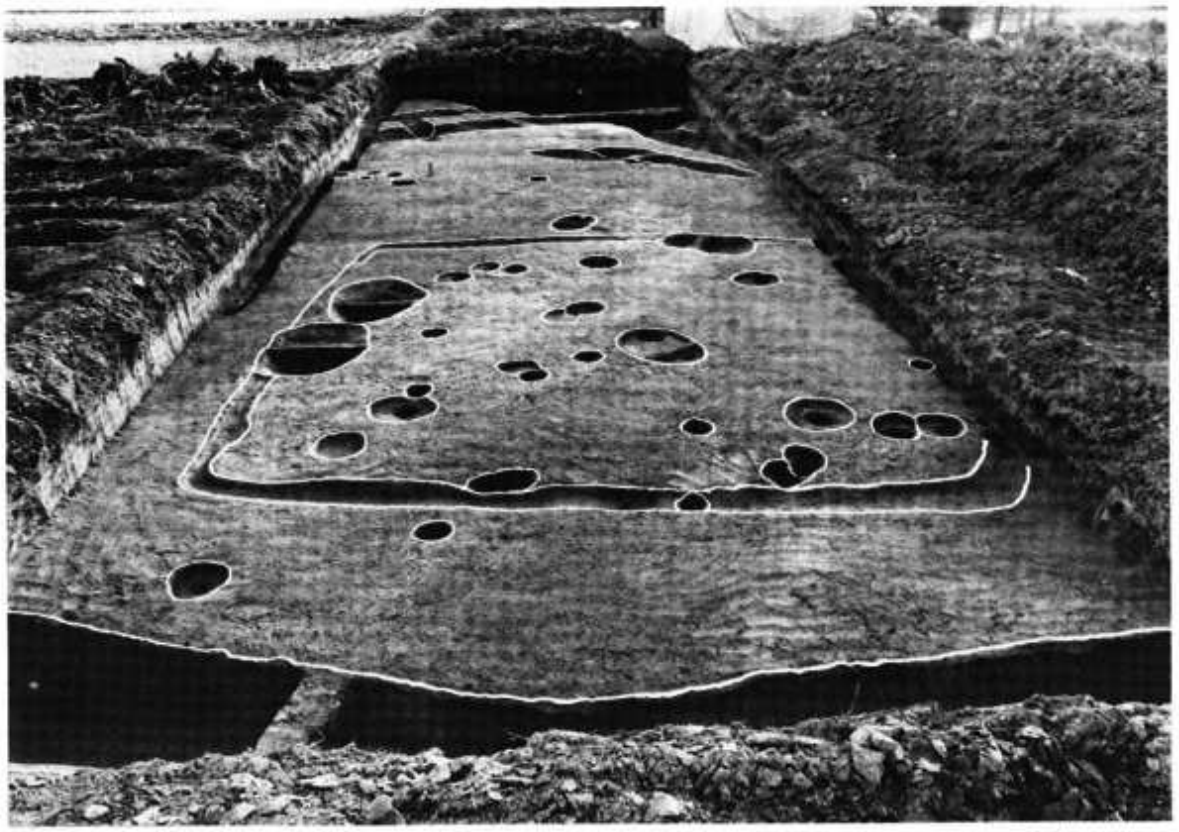
T－15　南半部(北より)

T－15　中央部(南より)

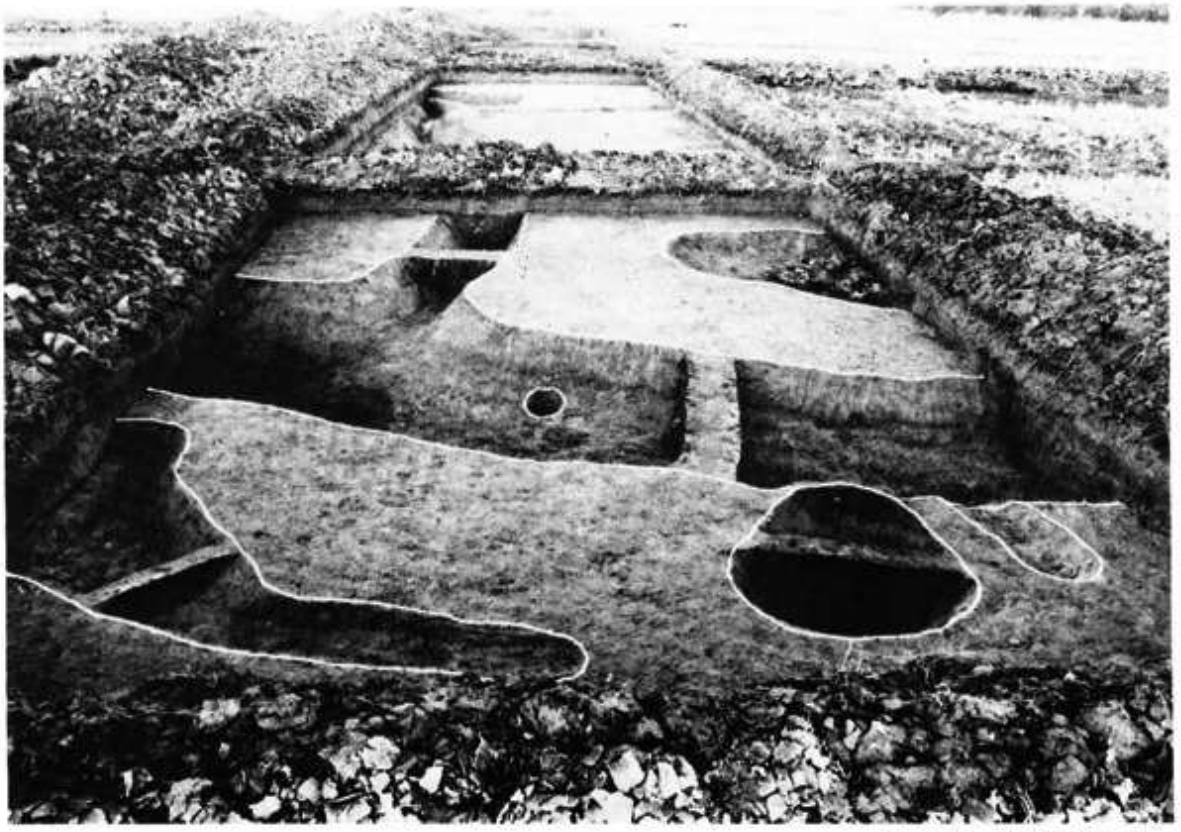
PL. 8

T－15　北半部(南より)

T－16　全景(南より)

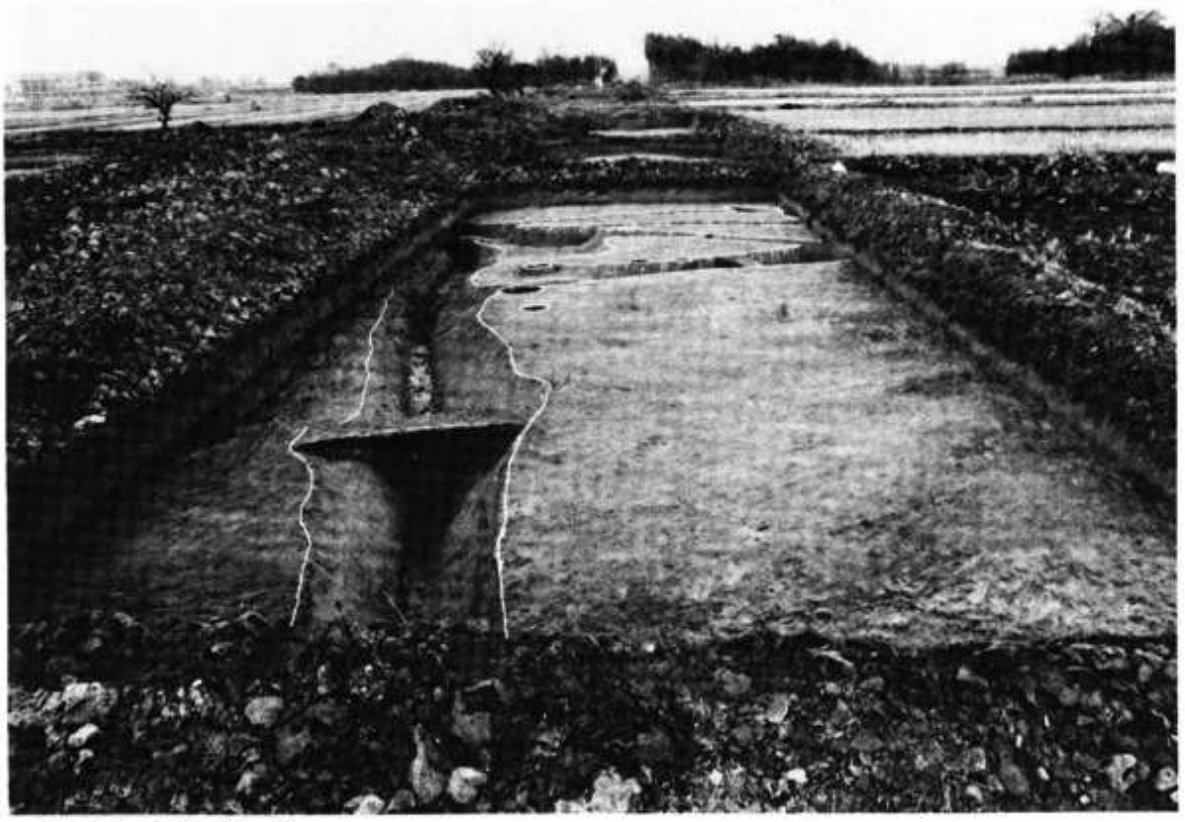


T－17　全景(北より)



T－18　全景(南より)

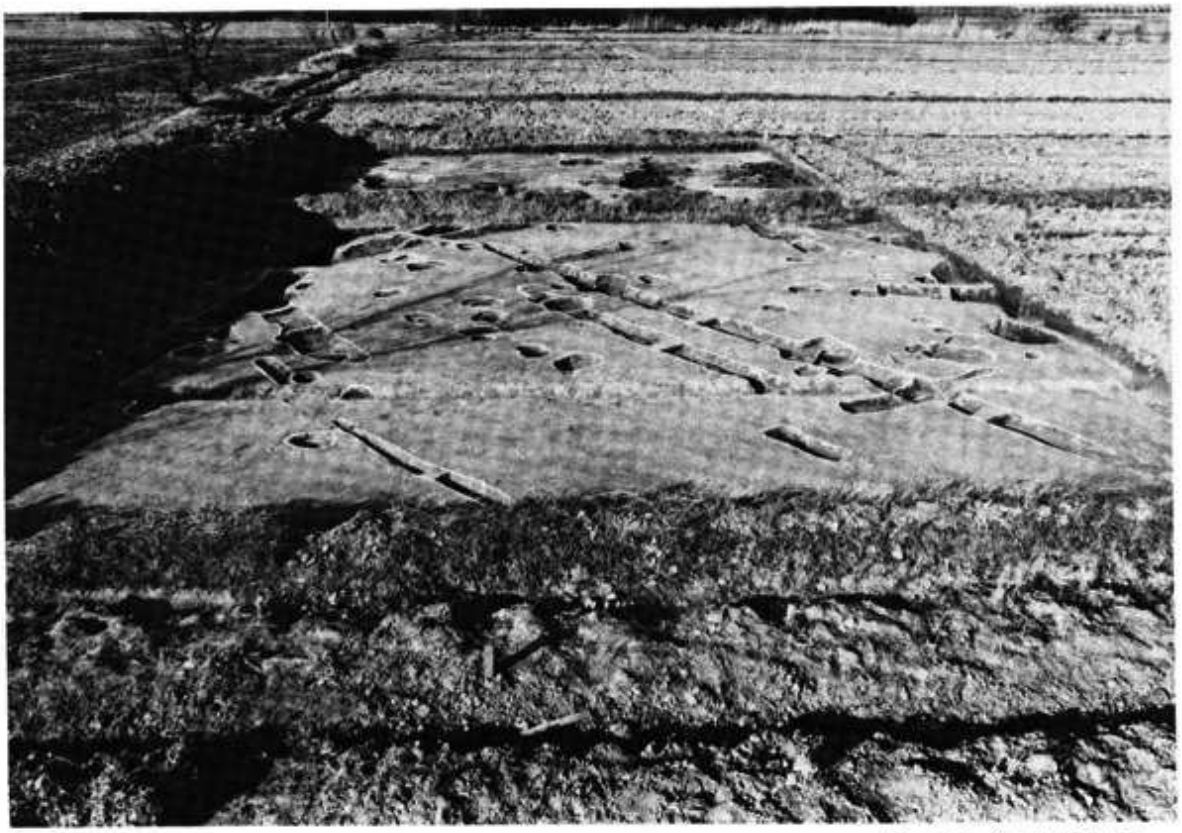
PL. 10



T－19　全景(南より)

T－20　全景(南より)

T－21　全景(北より)

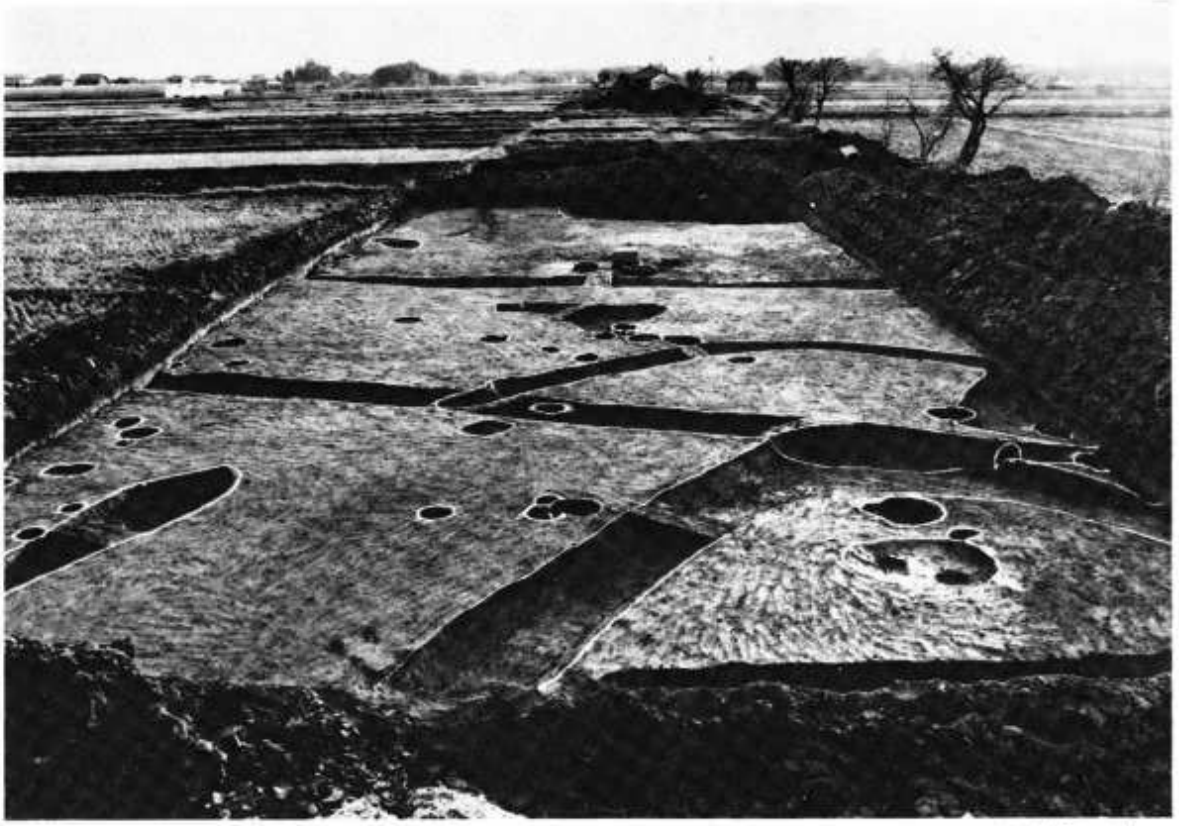


T－24　全景(南より)

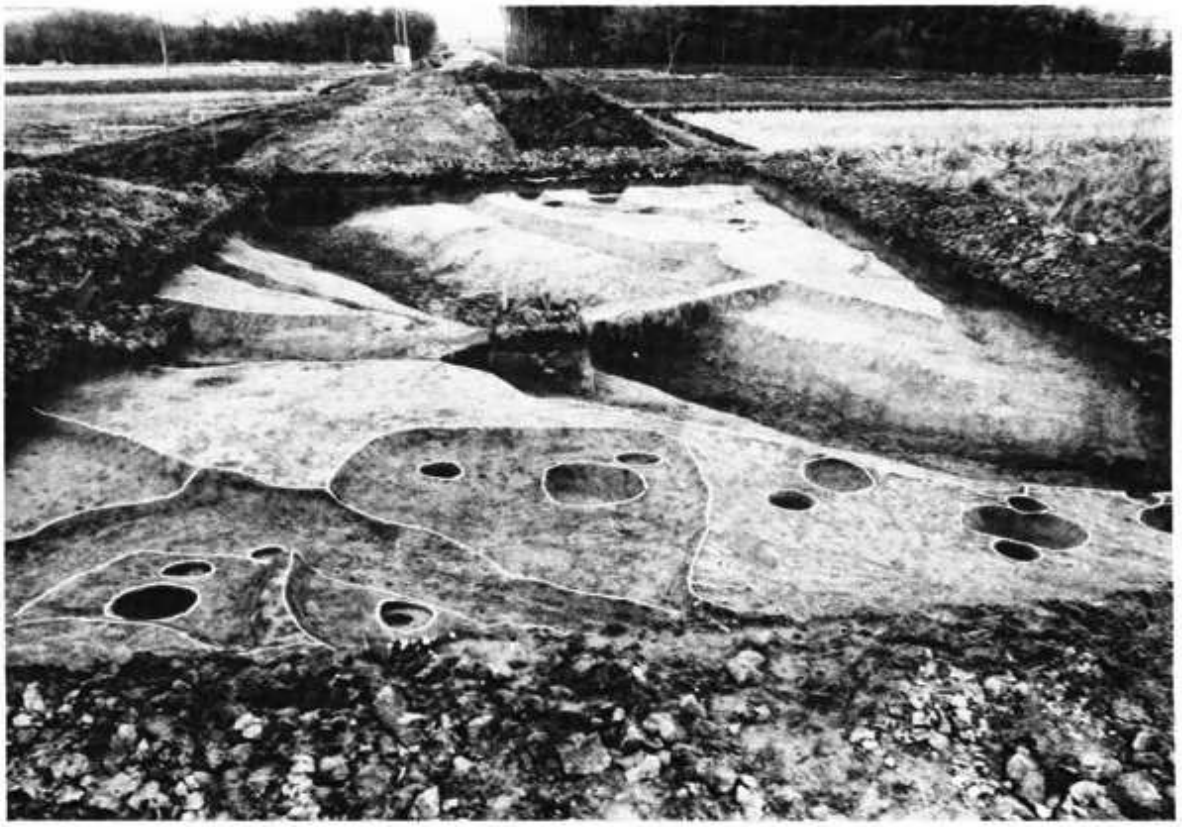
PL. 12

T－25　全景(北より)

T－26　全景(西より)

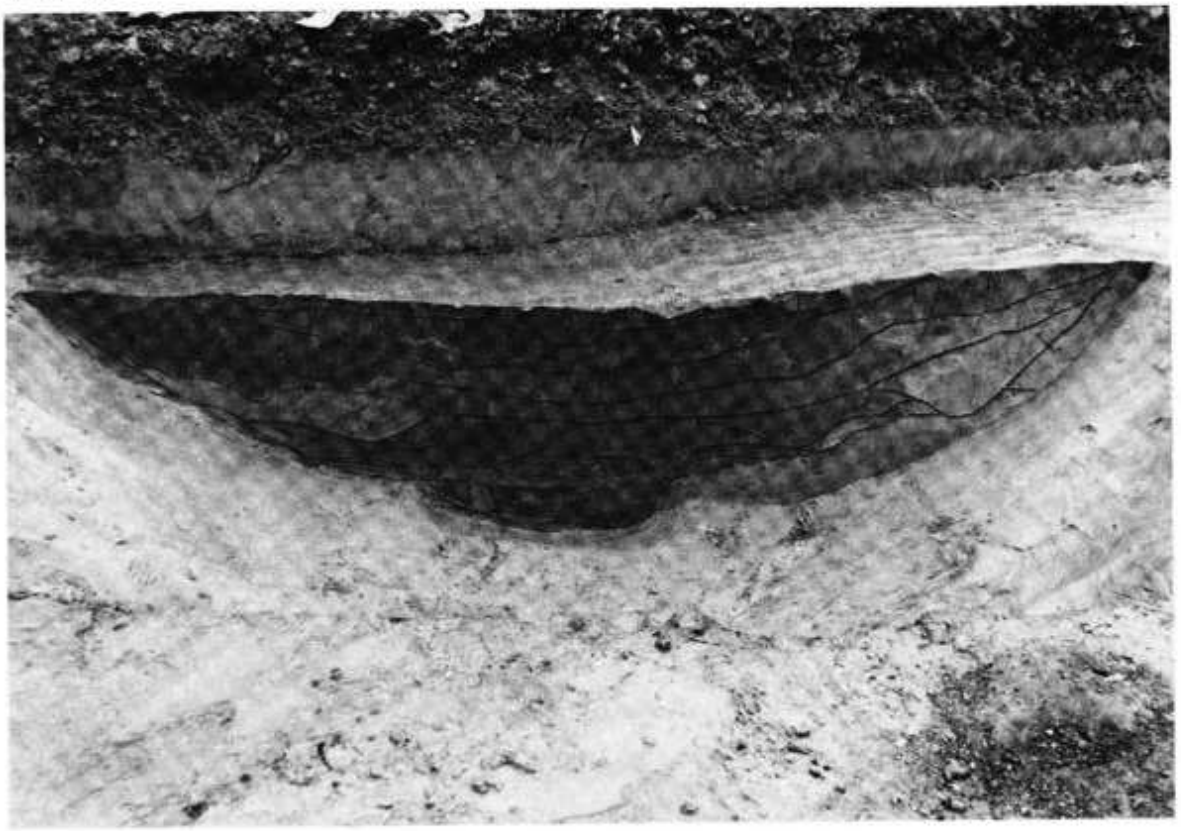


T－27　全景(北より)

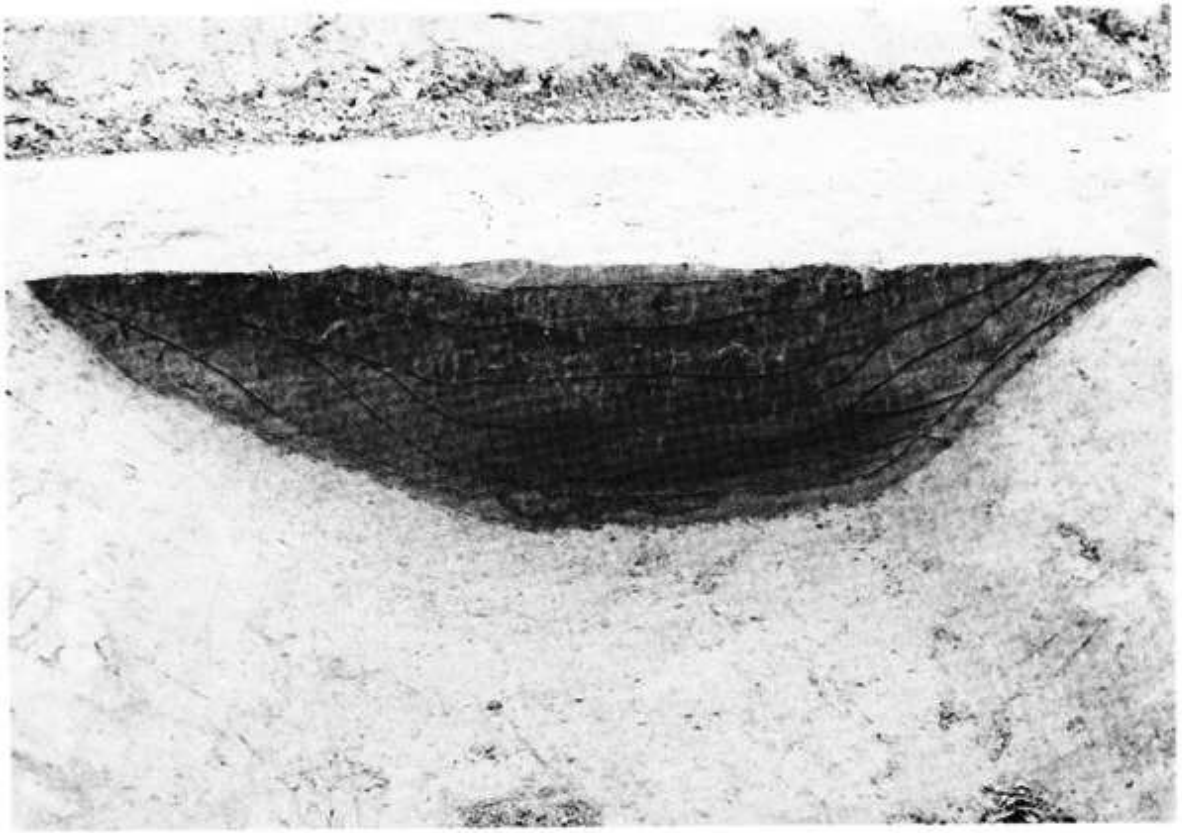


T－28　全景(南より)

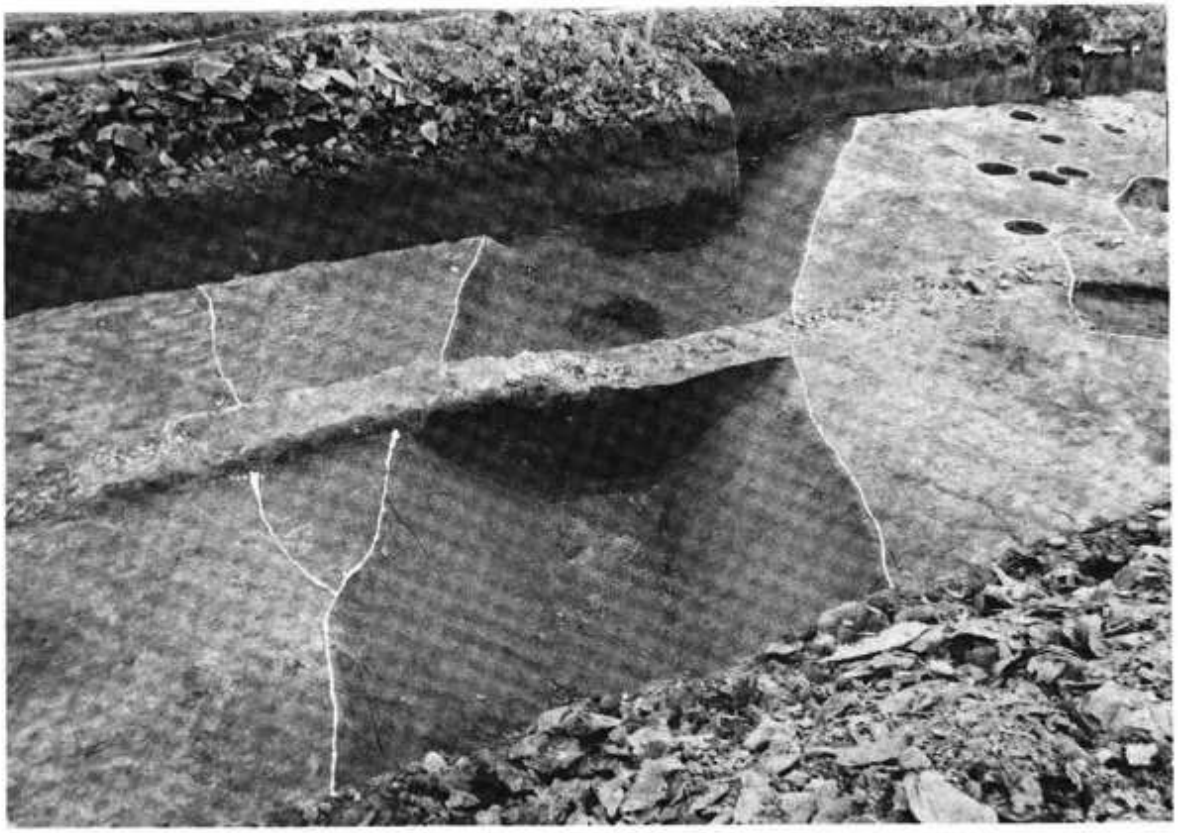
PL. 14



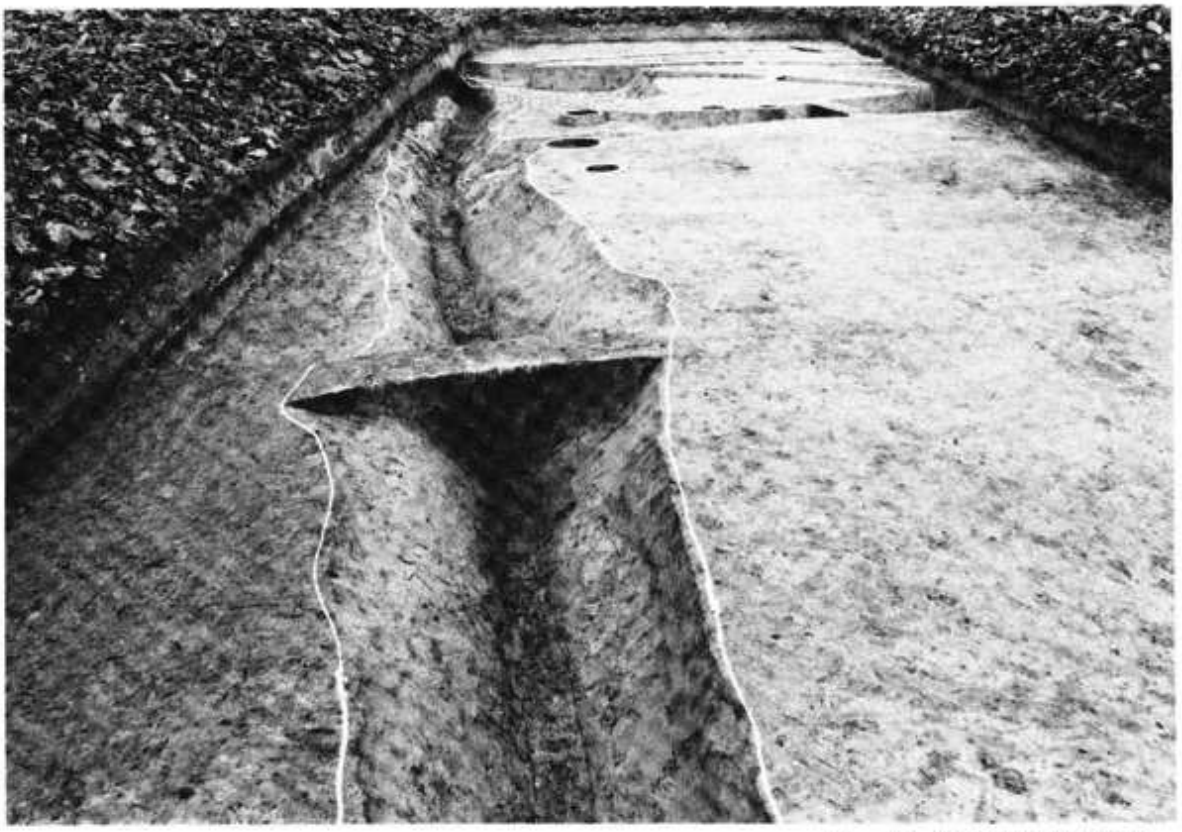
T－15　SD25近景(東より)



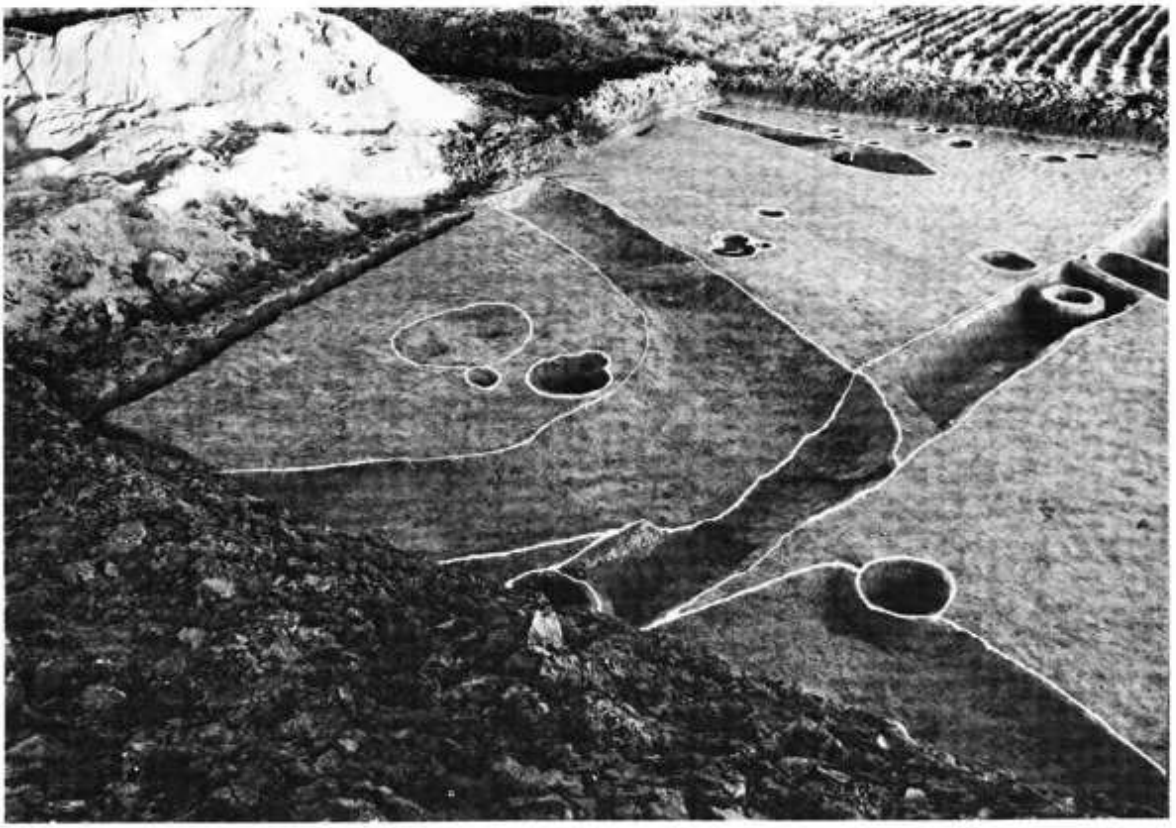
T－15　SD26近景(西より)



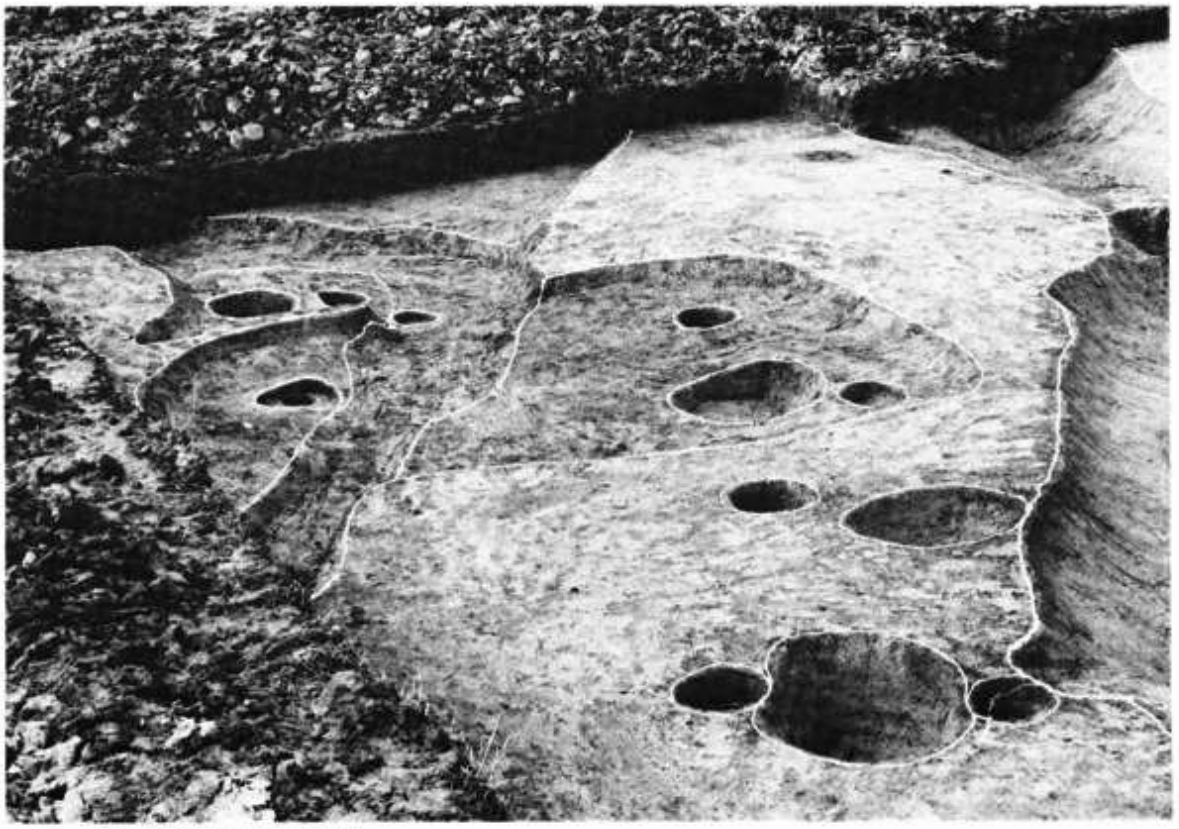
T－15　SD29近景(西より)



T－19　SD42近景(南より)

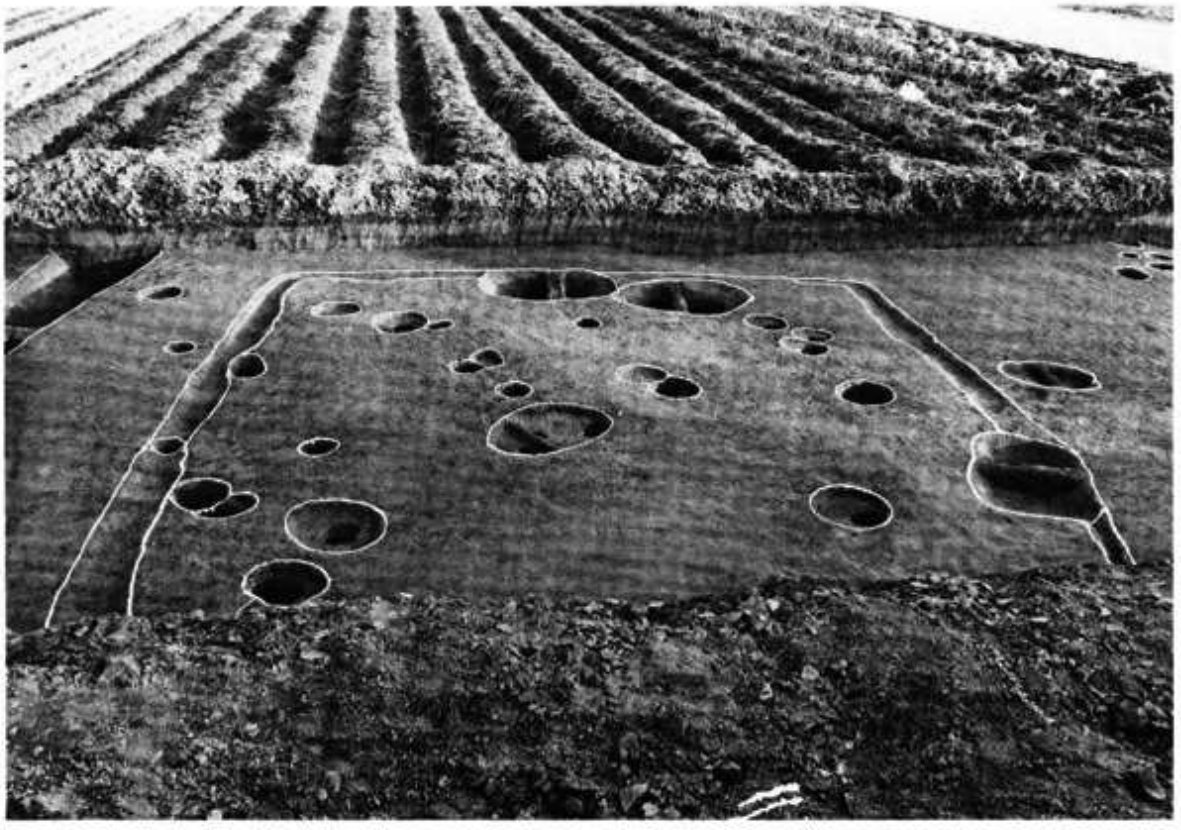


T－27　SM２近景(西より)



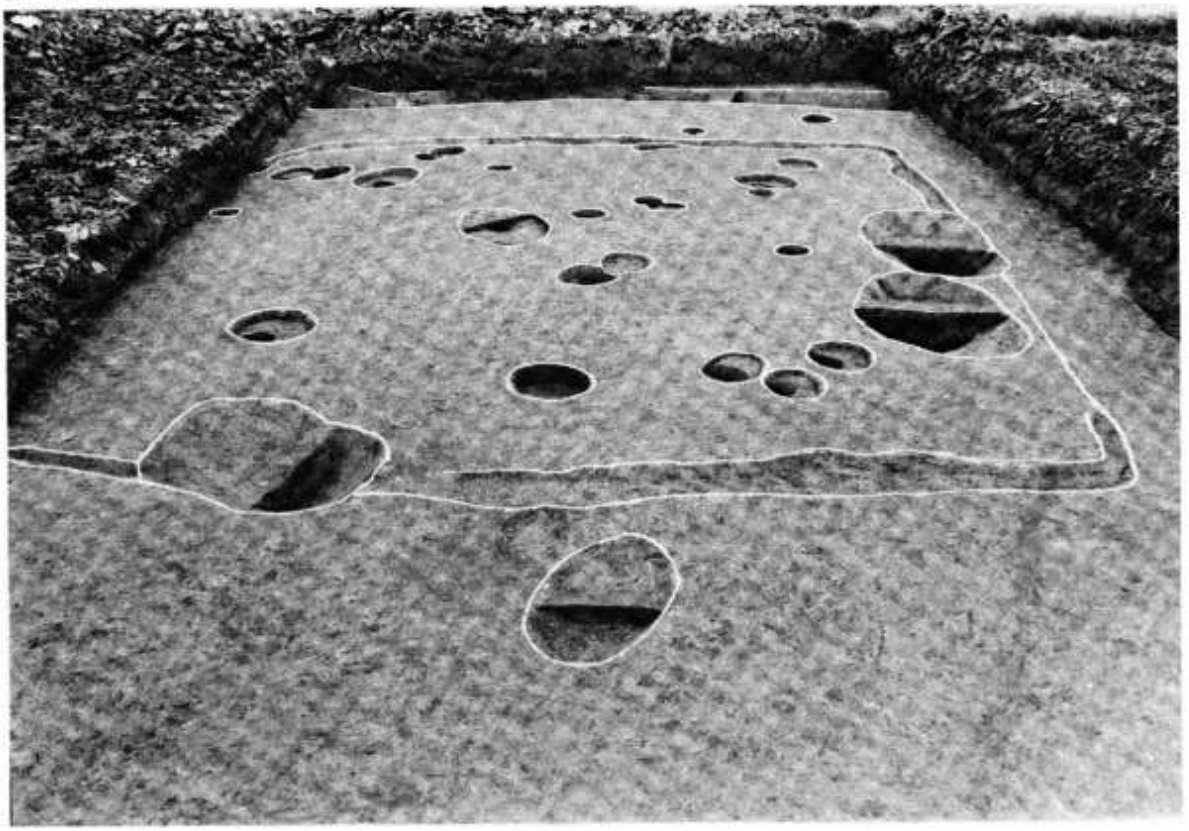
T－28　SM２近景(東より)

T－11　SH 1 近景(南より)

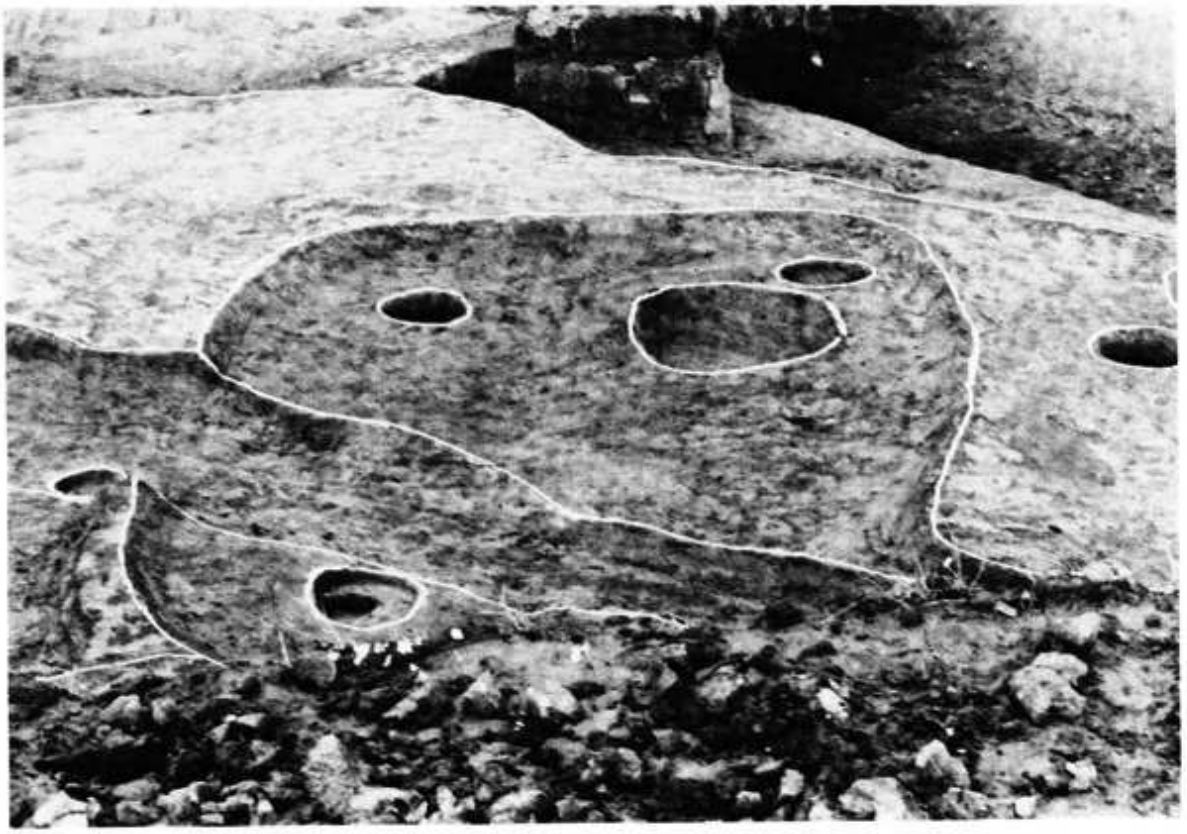


T－17　SH 2 近景(西より)

PL. 18

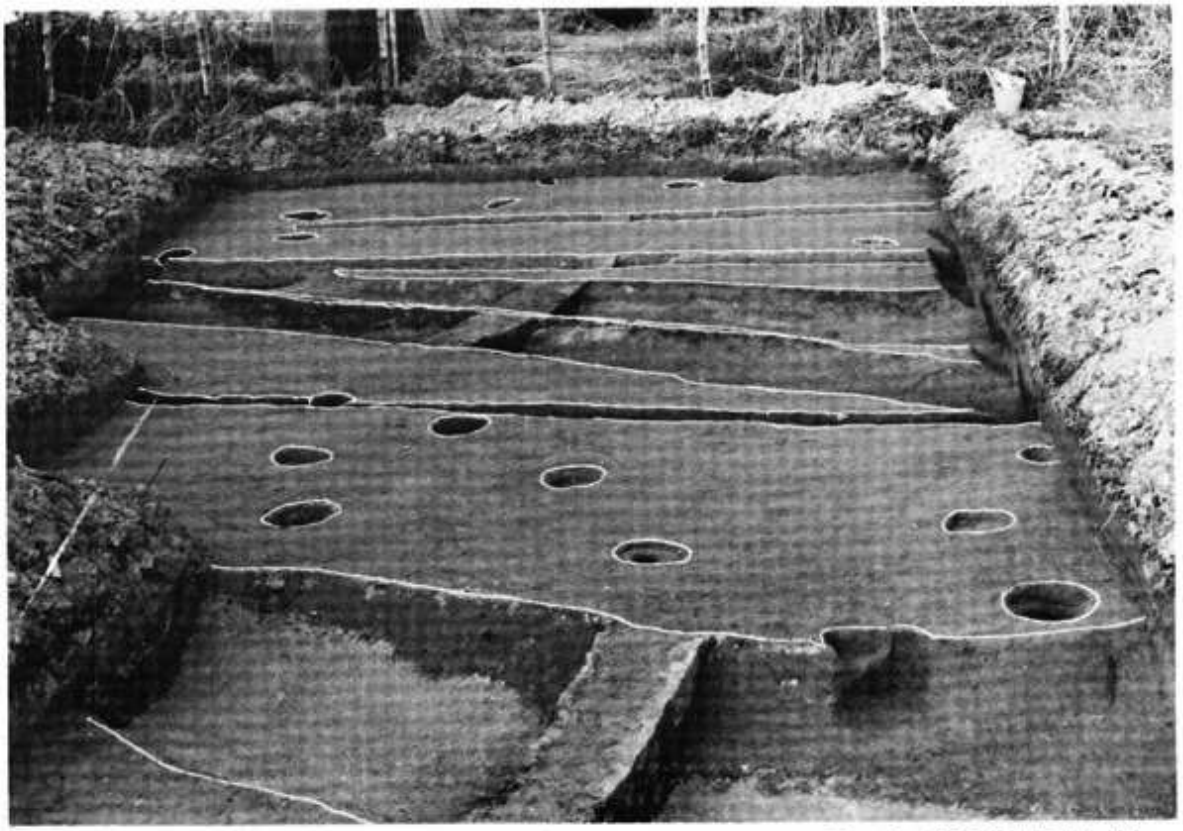


T－17　SH２近景(南より)



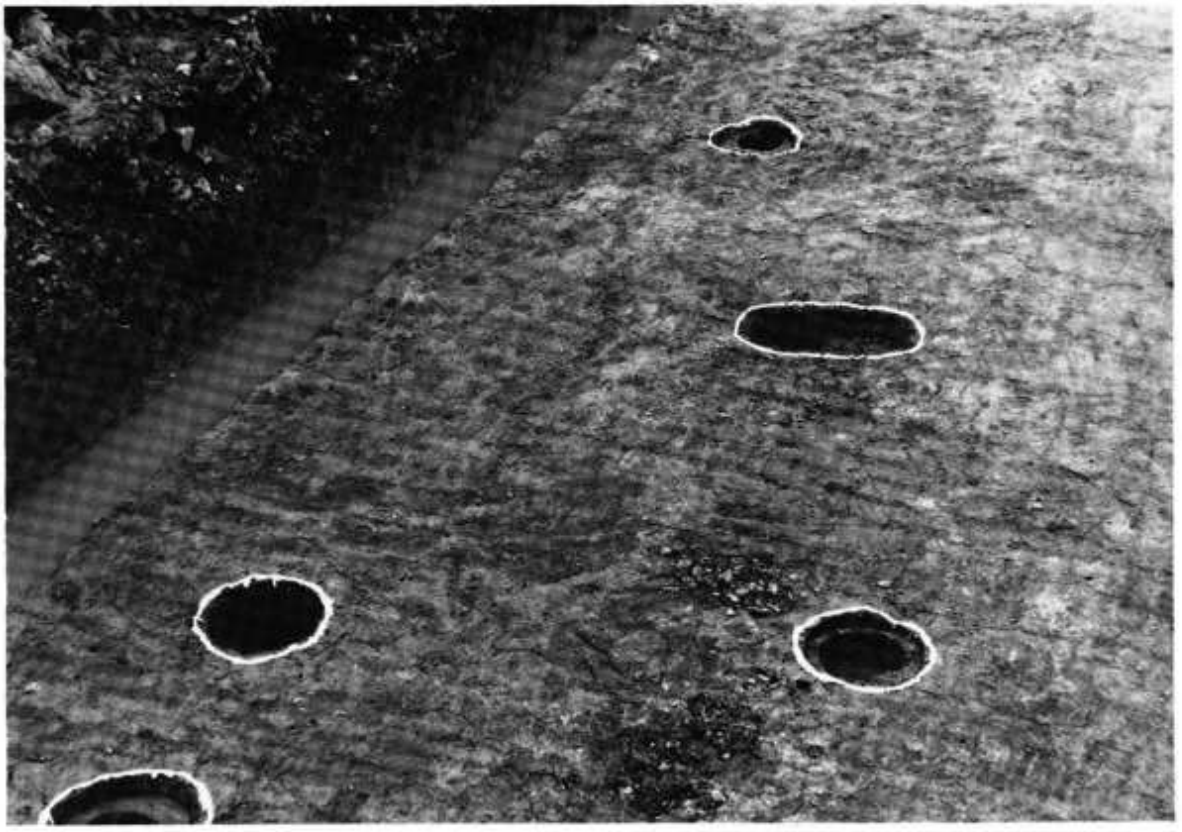
T－28　SH３近景(南より)

T－10　SB１近景(東より)

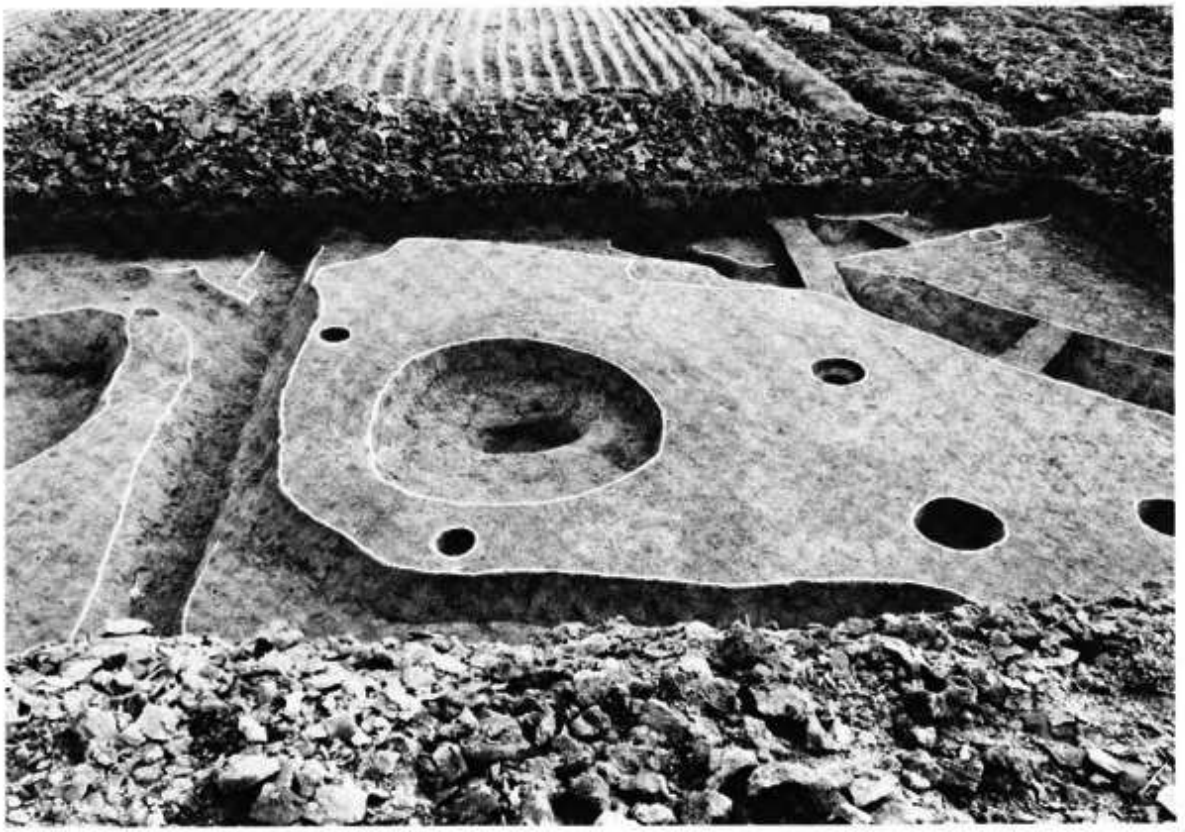


T－13　SB３近景(南より)

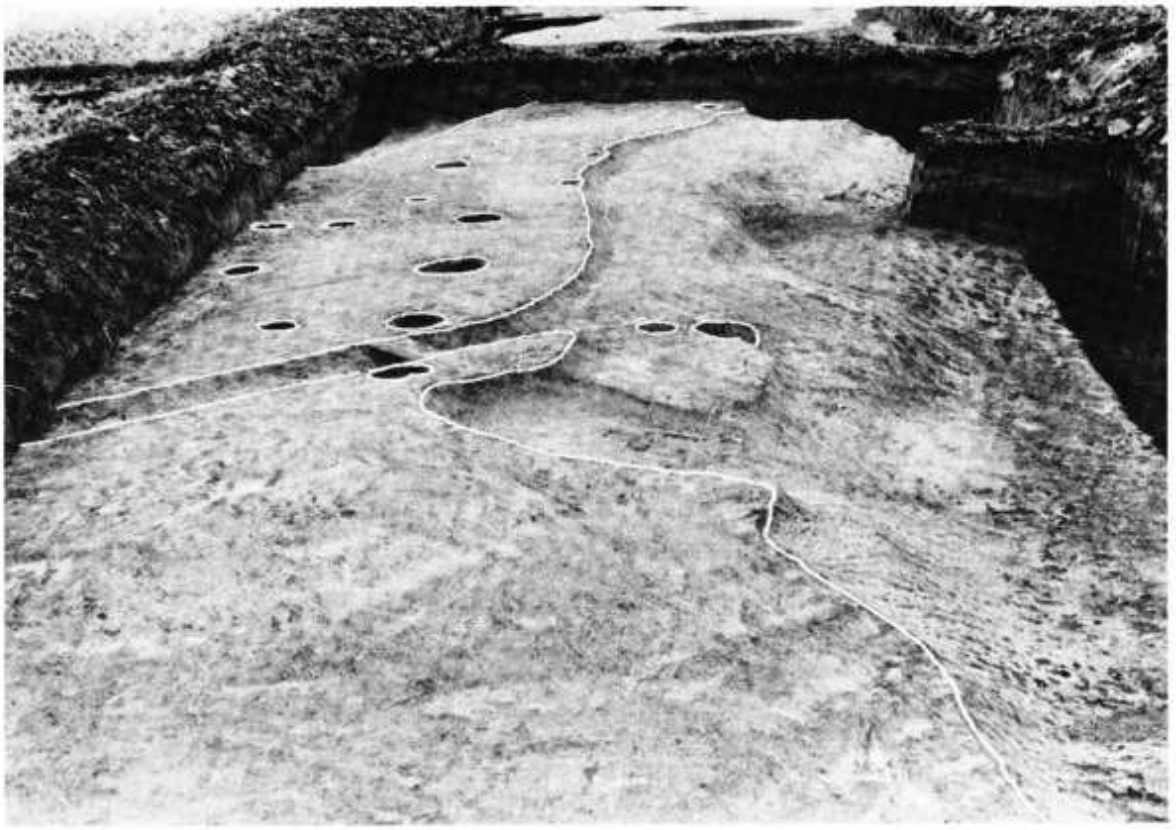
PL. 20



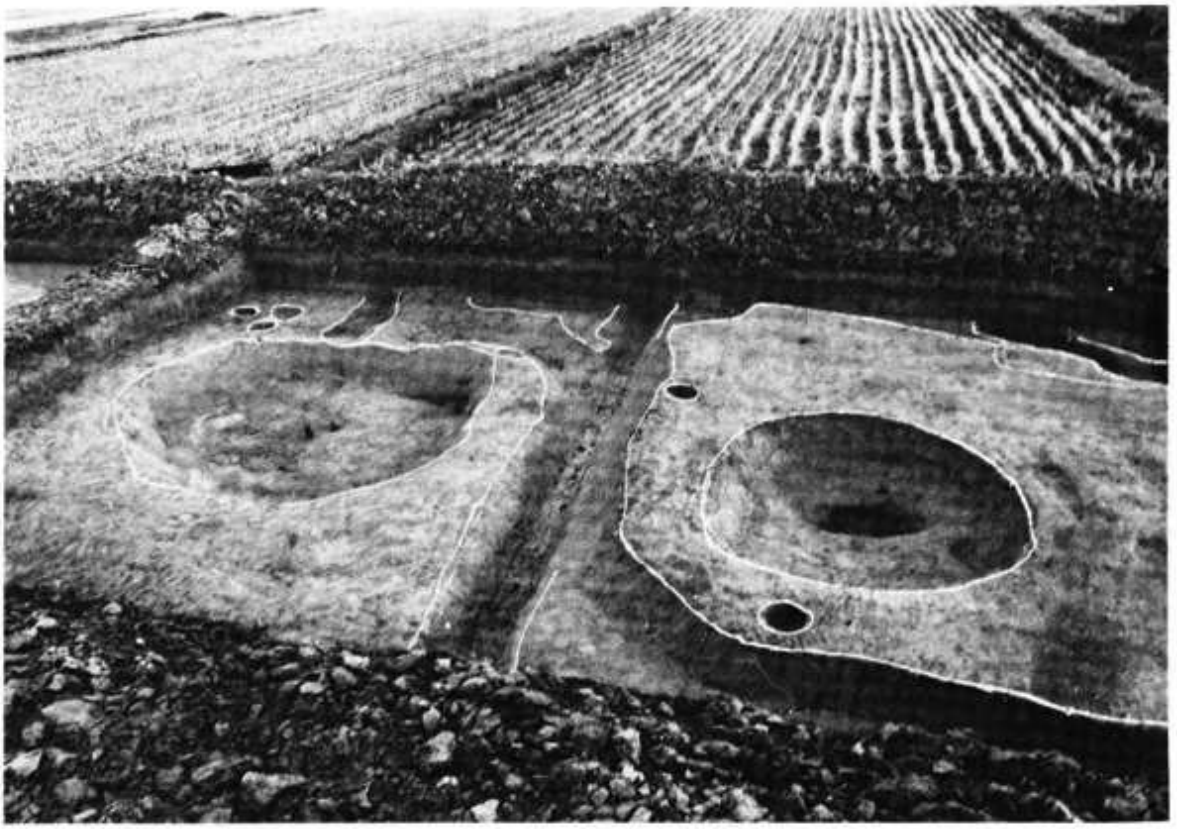
T－15　SB４近景(北より)



T－20　SB５・SK19近景(西より)

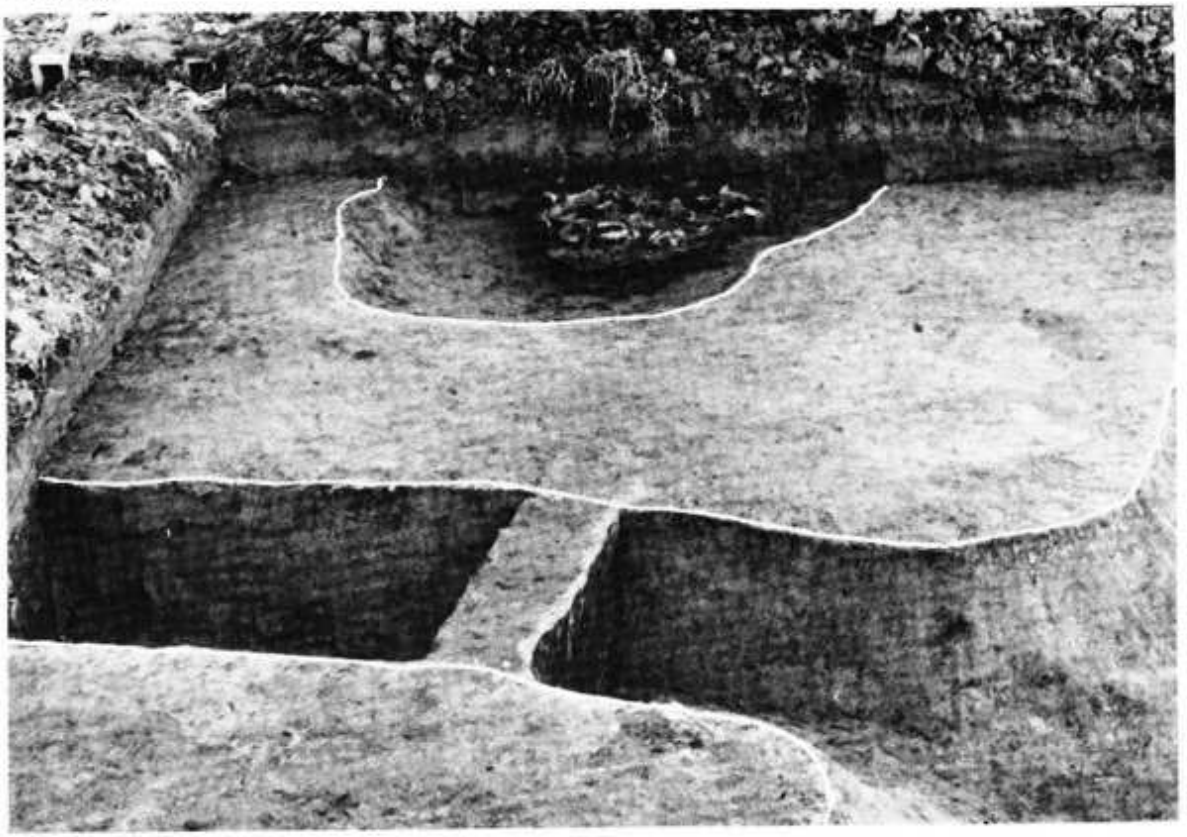


T－21　SB 6 近景(北より)



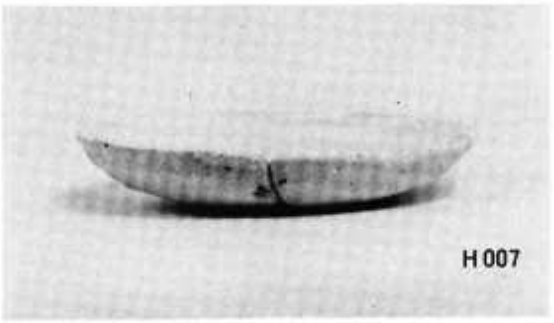
T－20　SK18・SX 5 近景(西より)

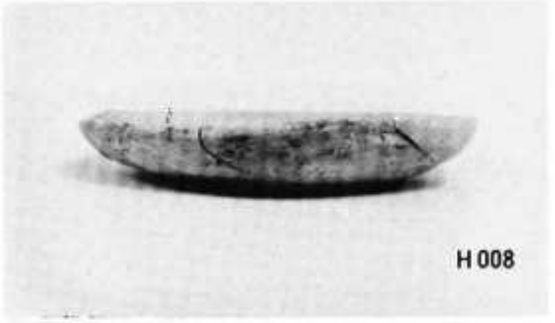
PL. 22

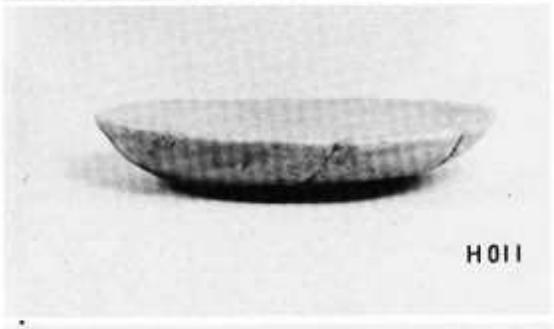


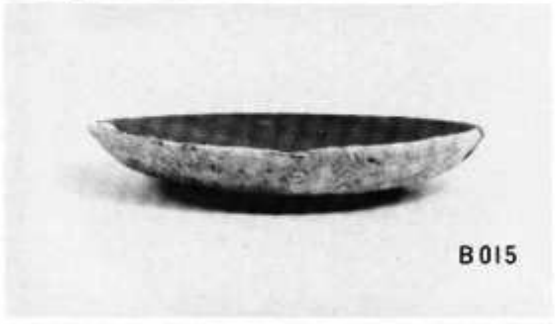
T－18　SK17近景(西より)

T－17　SD37木器出土状況(東より)


H007

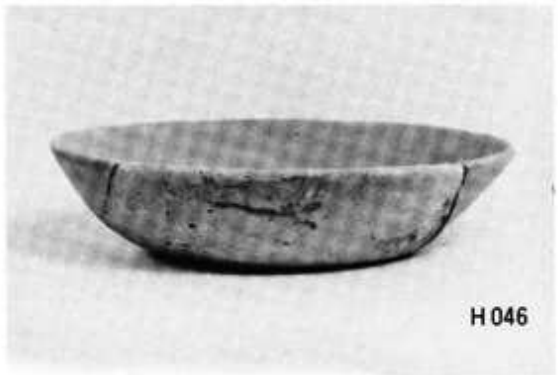

H008


H011


B015

B016

C029


H046

H052

C049

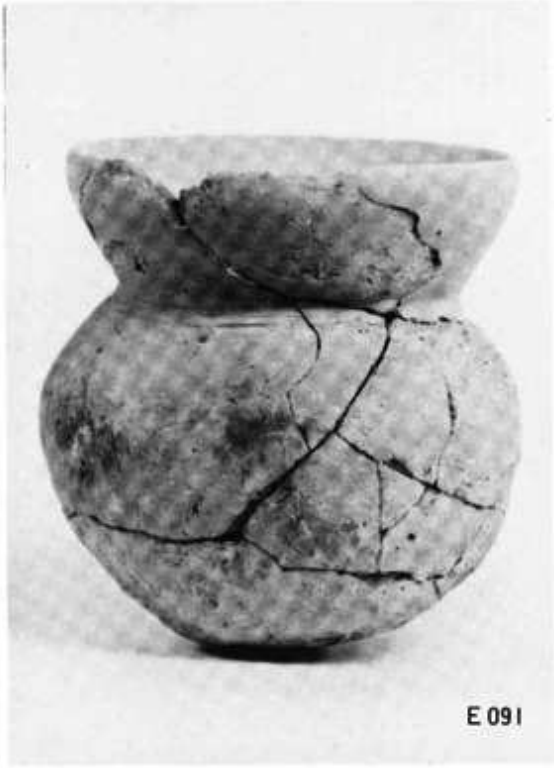
H007～C029(T－1包含層)，H046(T－2・SD4)，C049・H052(T－3包含層)

PL. 24

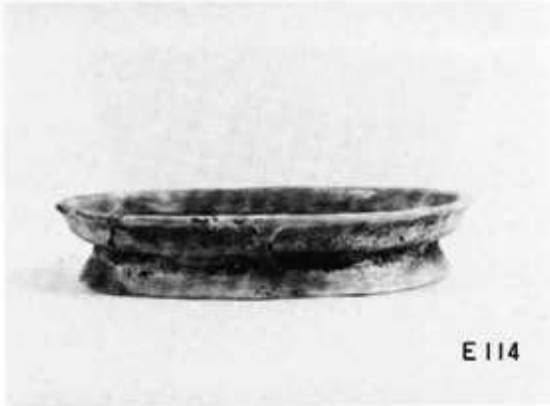
E 058

E 060

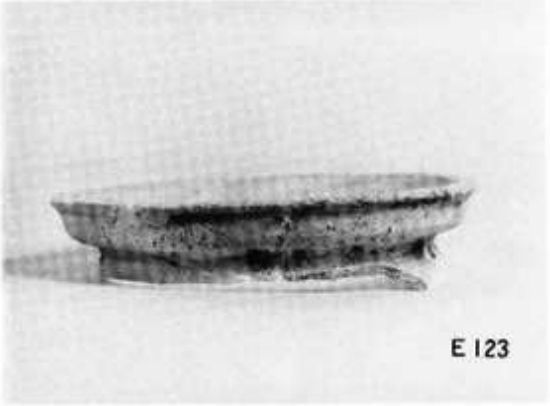
E 065



E 091

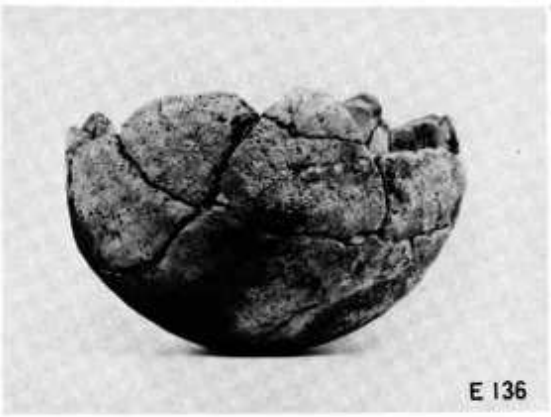


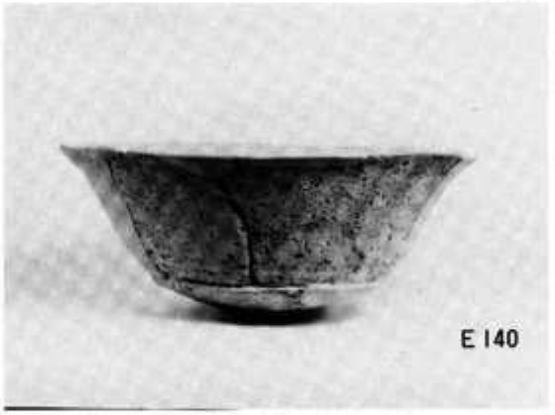
E 114



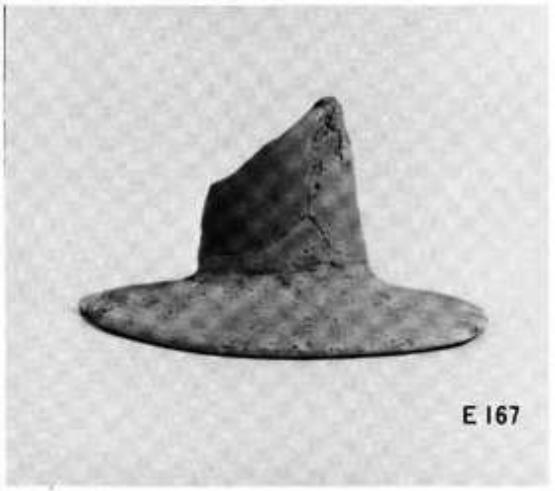
E 123

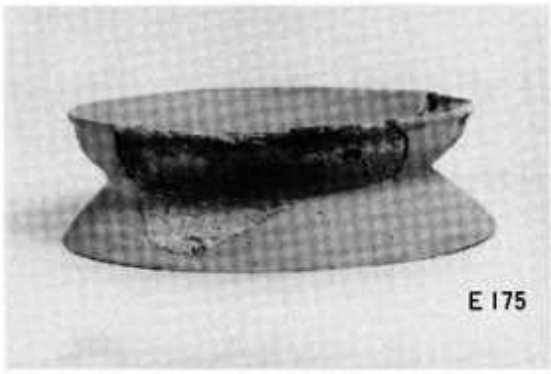
E058・E060(T－9・SD19), E065(T－9・SK 3), E091(T－10・SD20), E114・E123(T－10・S D21)

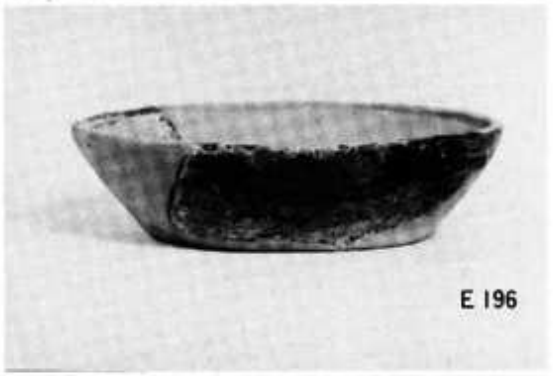

E 136


E 140

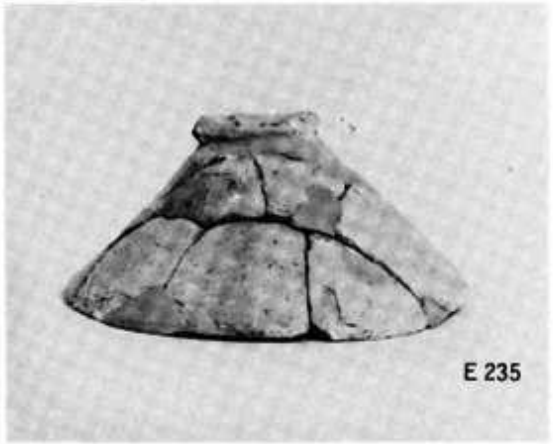
E 165


E 167


E 175

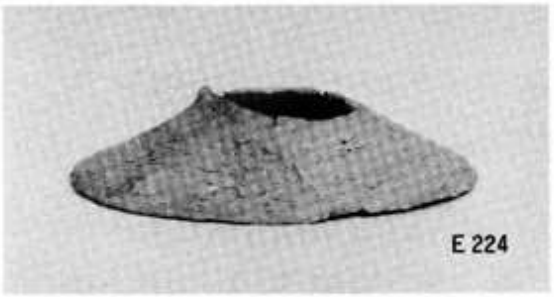

E 196

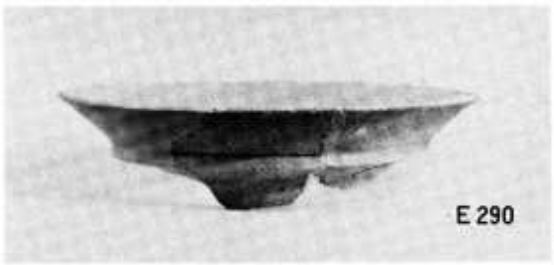
E 207


E 235

E 136・E 140(T －10・SD21)、 E 165・E 167(T －13・SD24)、 E 175～E 235(T －15・SD25)

PL. 26

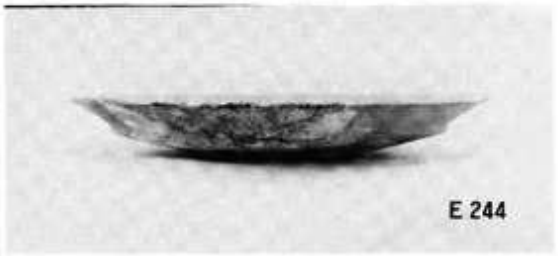

E 224


E 290

E 303

E 313

E 241

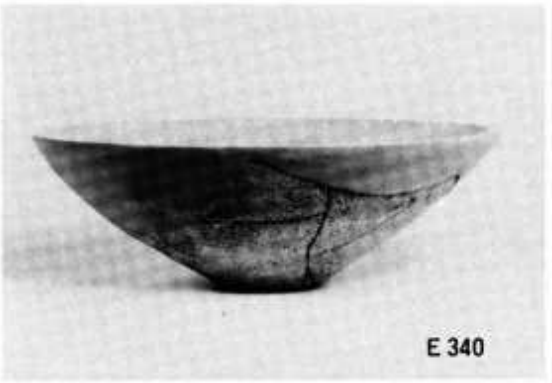

E 244

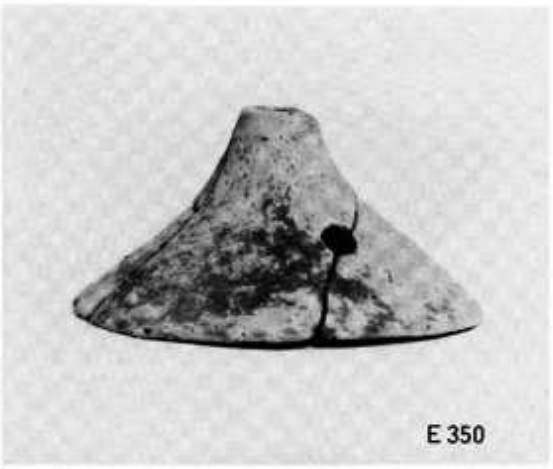
E 248

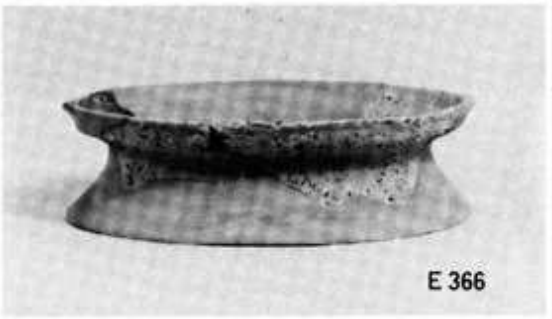
E 305

E 328

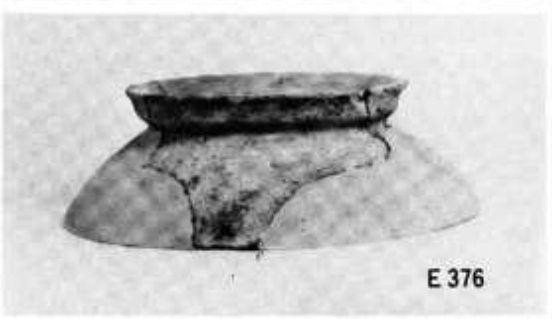
E 224(T－15·SD25), E 241(T－15·SD26), E 244·E 248(T－15·SD28)
E 303～E 313(T－15·SD29), E 328(T－16·SD34)

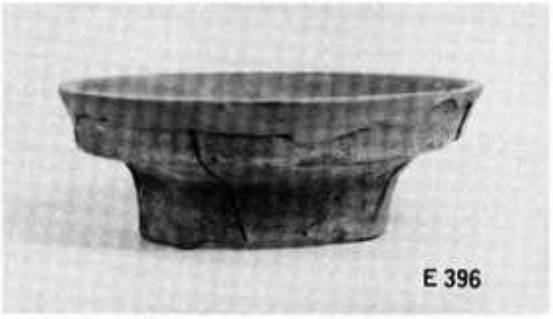

E 340


E 350

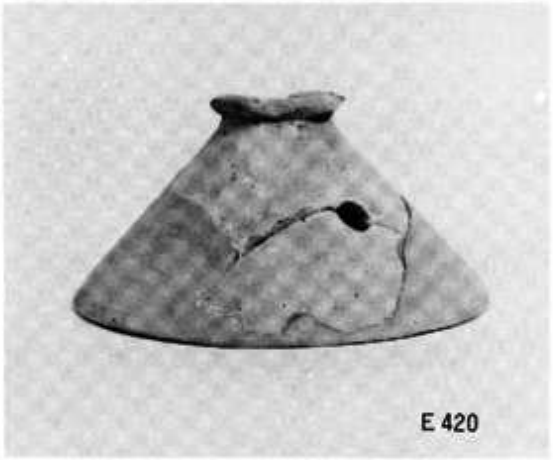

E 366

E 368


E 376


E 396

E 406

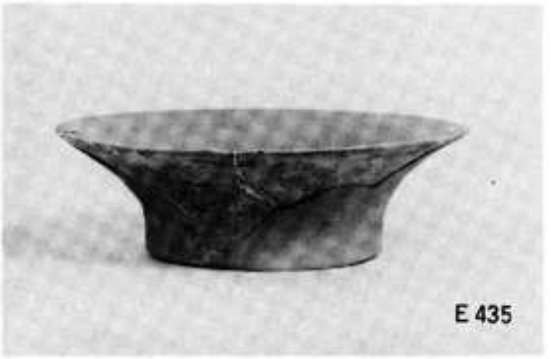

E 420

E 407

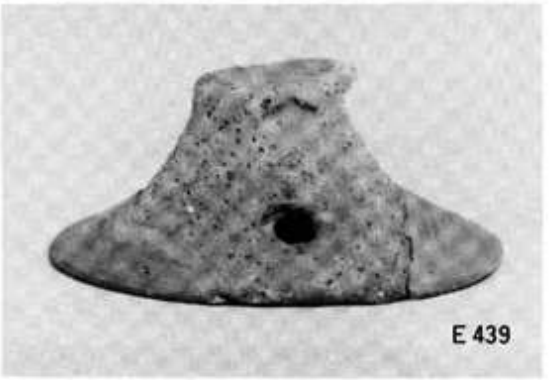
E340・E350(T－16・SD34)，E366・E368(T－16・S X2)，E376～E420(T－17・SD38)

PL. 28

C 421


E 435

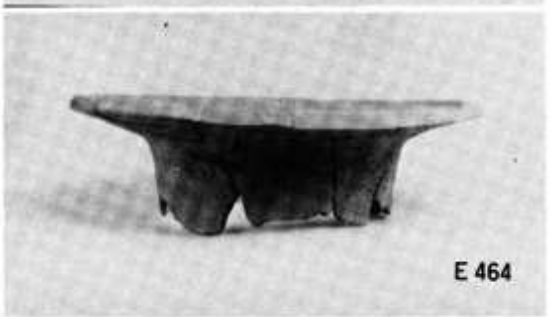
E 438

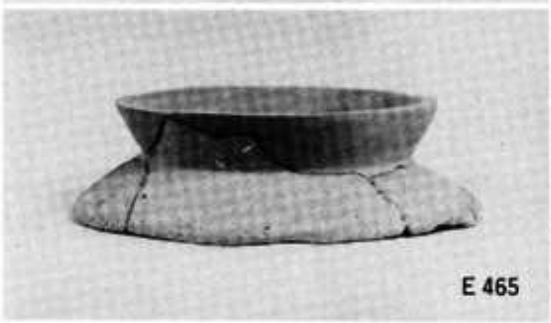

E 439

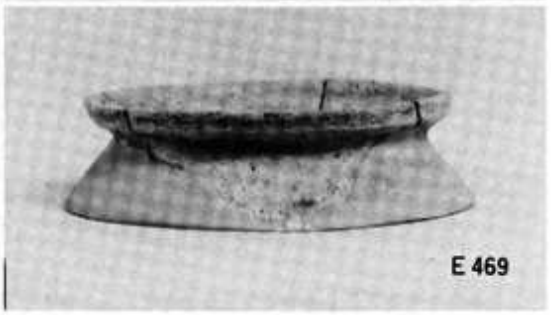
E 440

E 452

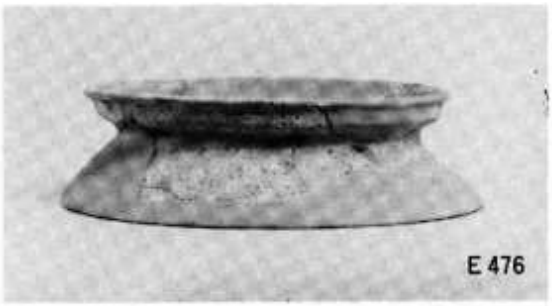
E 458

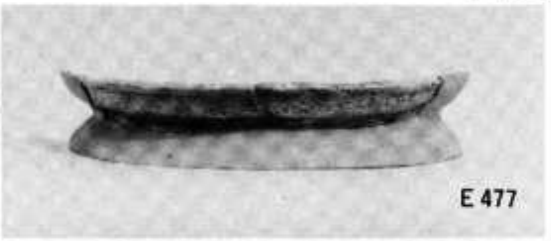

E 464


E 465

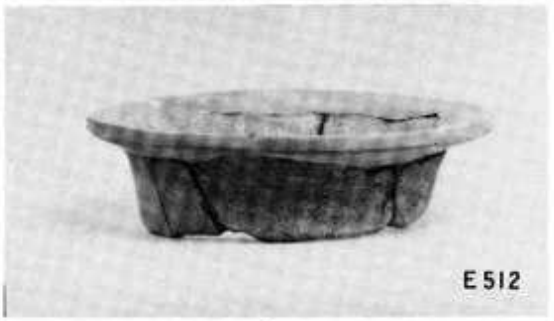

E 469

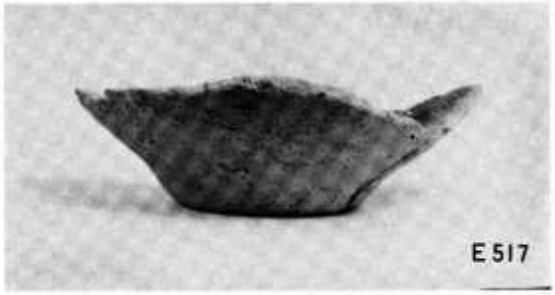
C 421(T－17·SD38), E 435～E 440(T－18·SD41), E 452～E 465(T－18·SK17)
E 469(T－15·SD42)

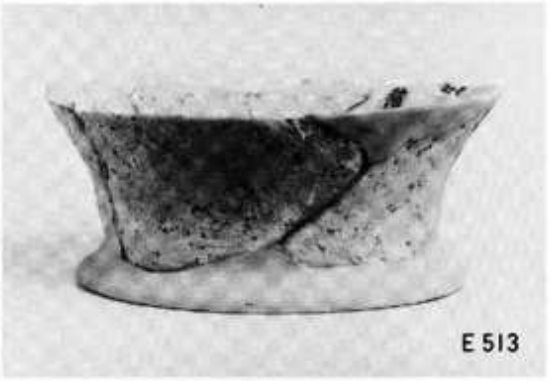

E 476


E 477

E 495


E 512

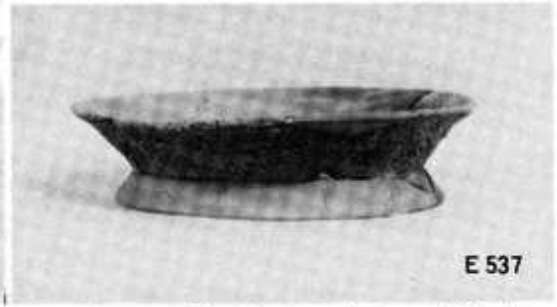

E 517


E 513

E 521

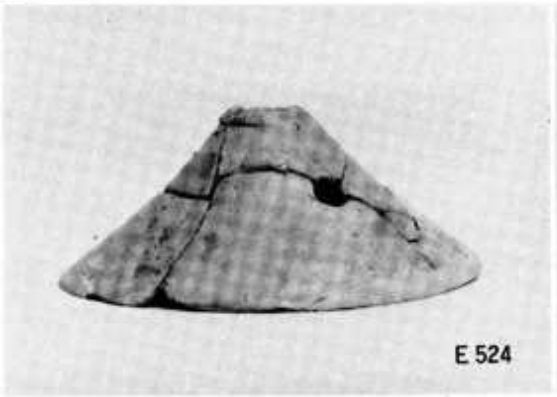
E 519

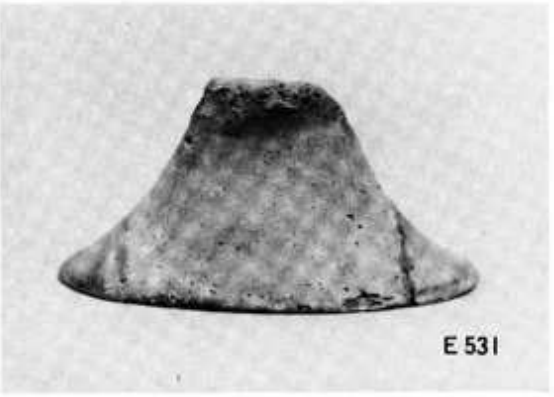
E 526


E 537

E476・E477(T－19・SD42), E495・E521(T－20・SD51), E526(T－20・SK19)
E537(T－20・SX 5)

PL. 30


E 524


E 531

E 538

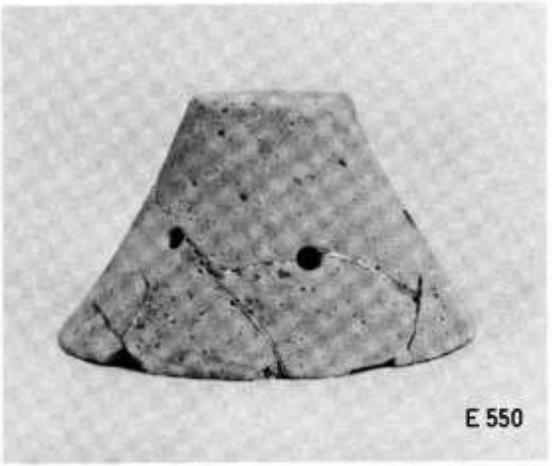
E 540

E 542

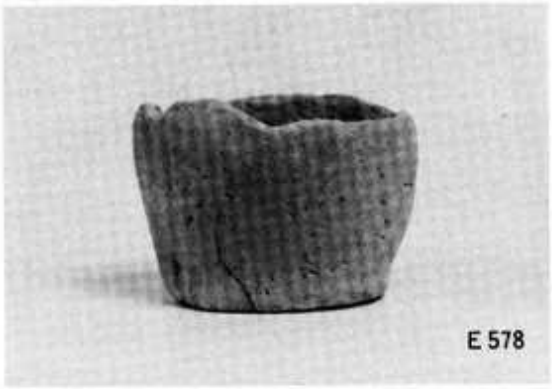
C 583

E 555

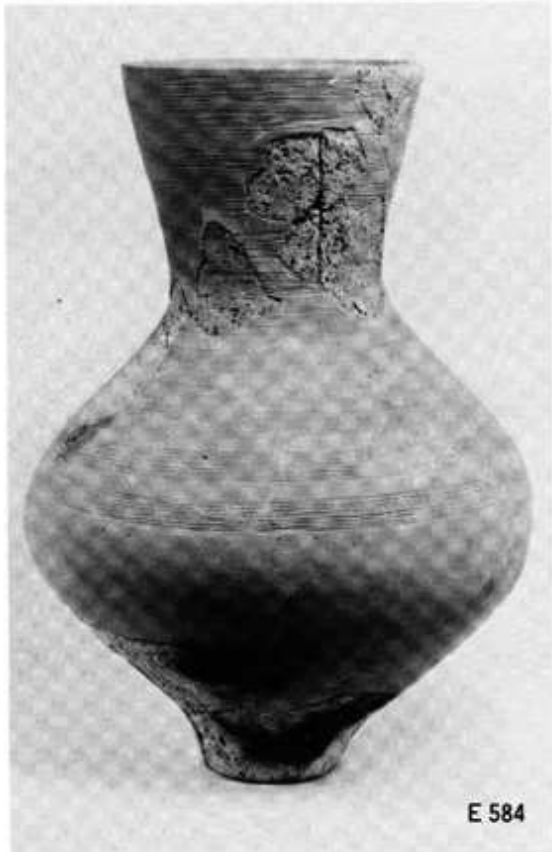
E524～E531(T－20·SK19), E538～E540(T－20·SX5), E542(T－20 ピット内)
E555(T－21·SD51), E583(T－26·SD66)


E 550

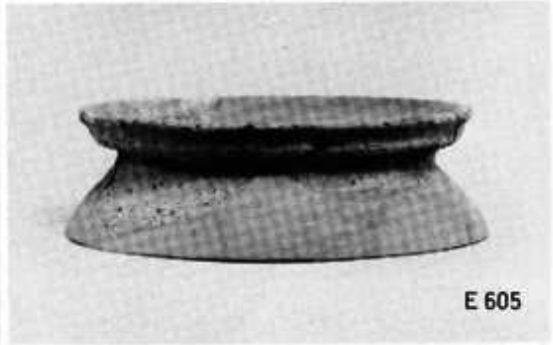
E 577


E 578

C 595


E 584

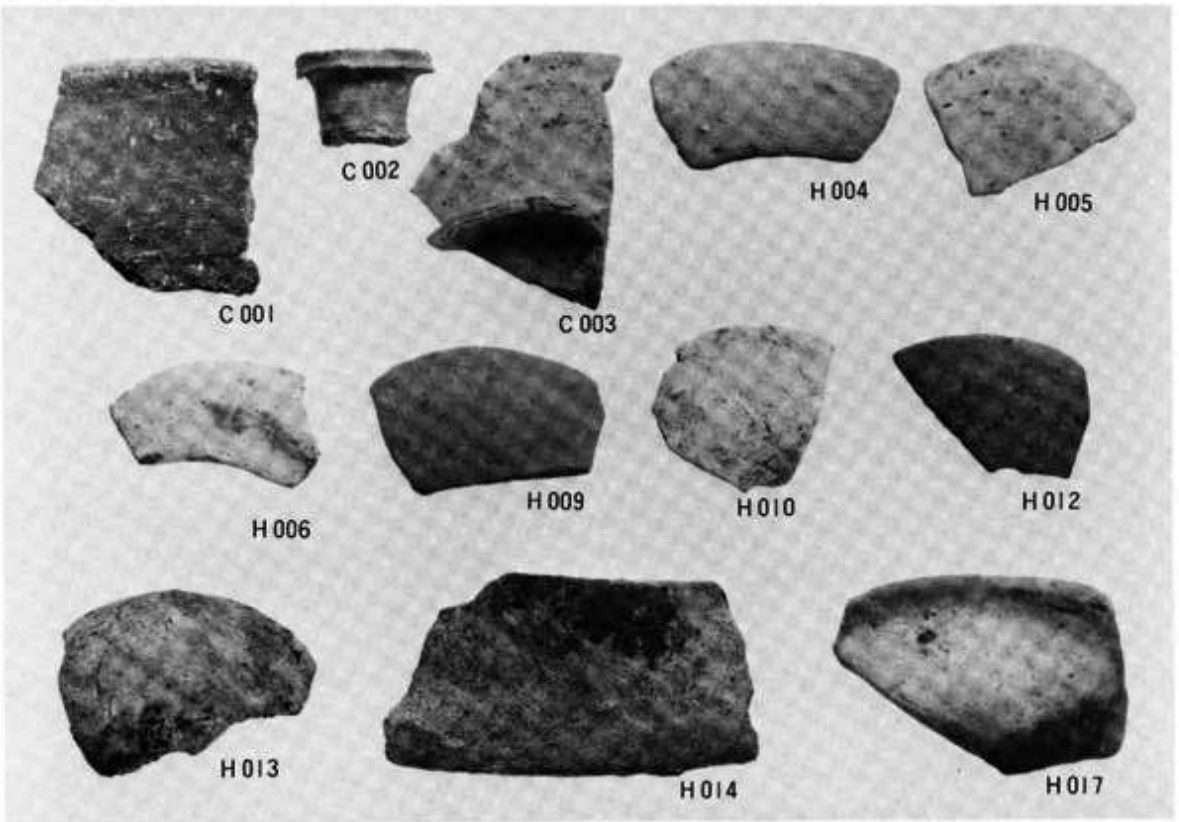
E 600


E 605

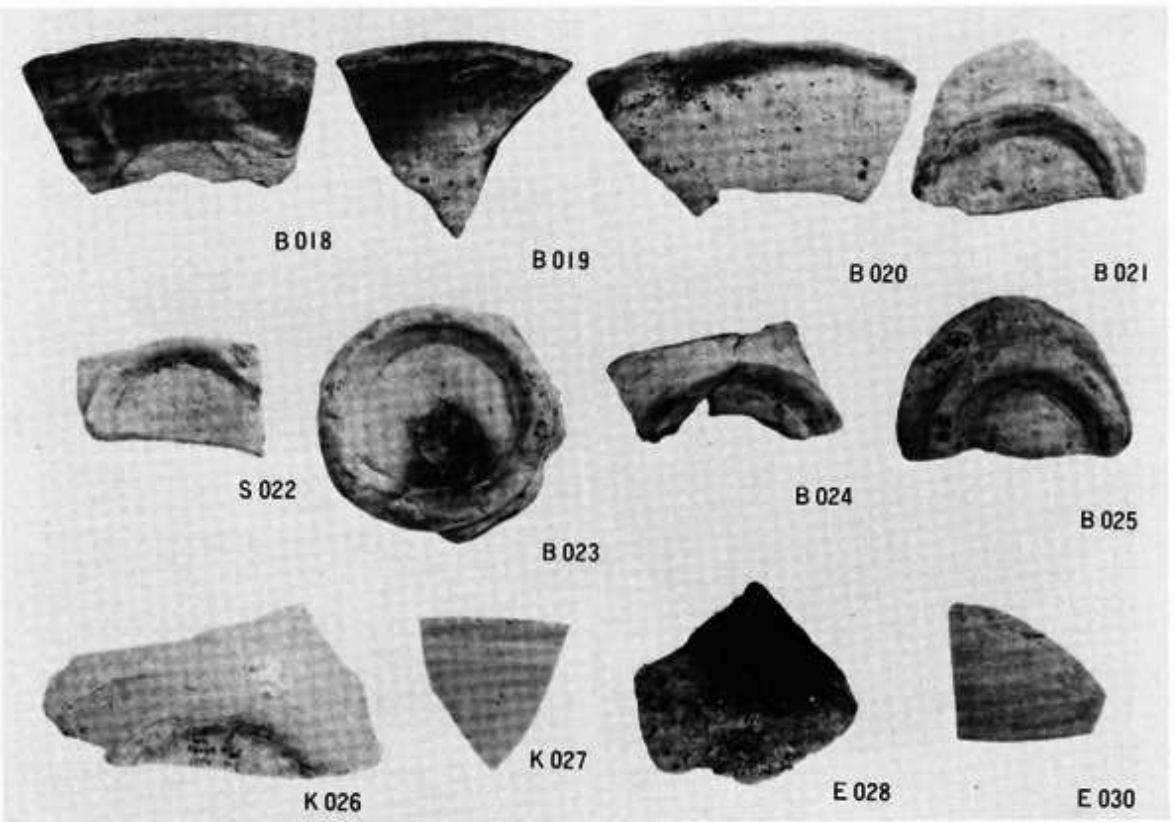
E 661

E550(T－21·SD51)，E577·E578(T－25·SD63)，E584·C595(T－28·包含層)
E600～E661(T－28·SD70)

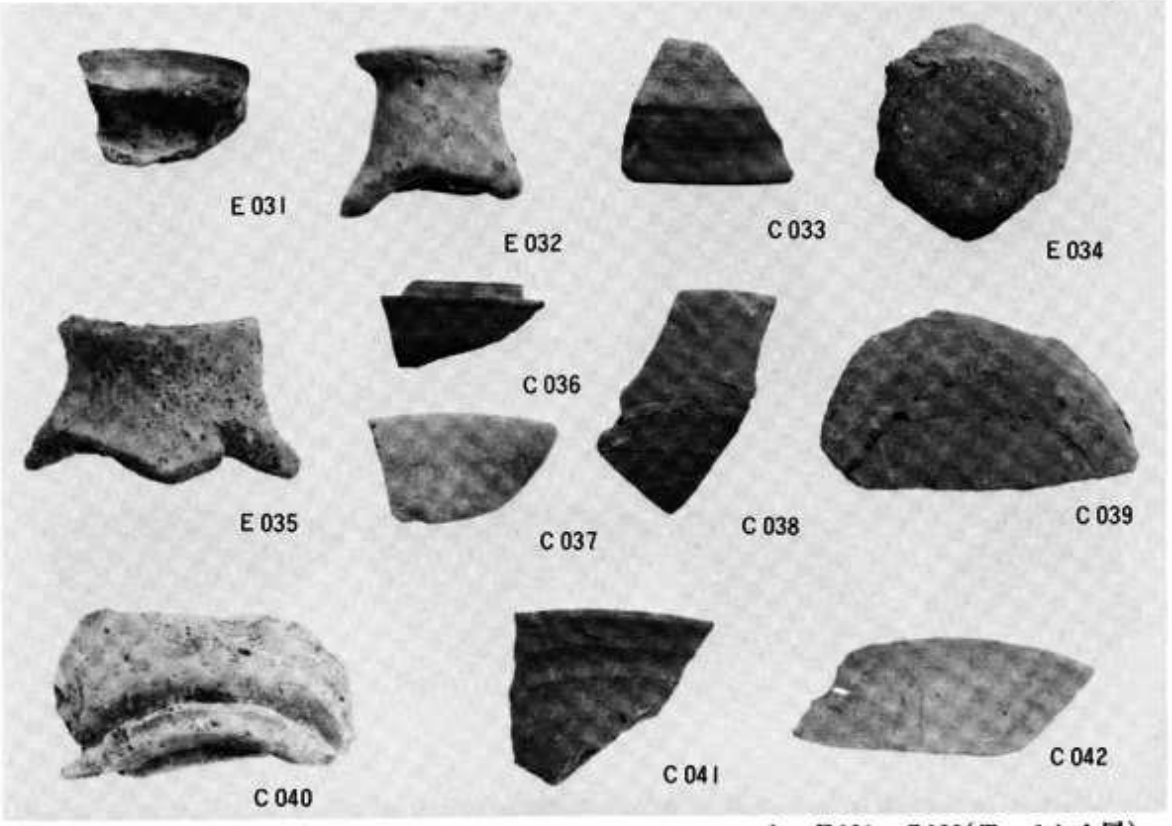
PL. 32



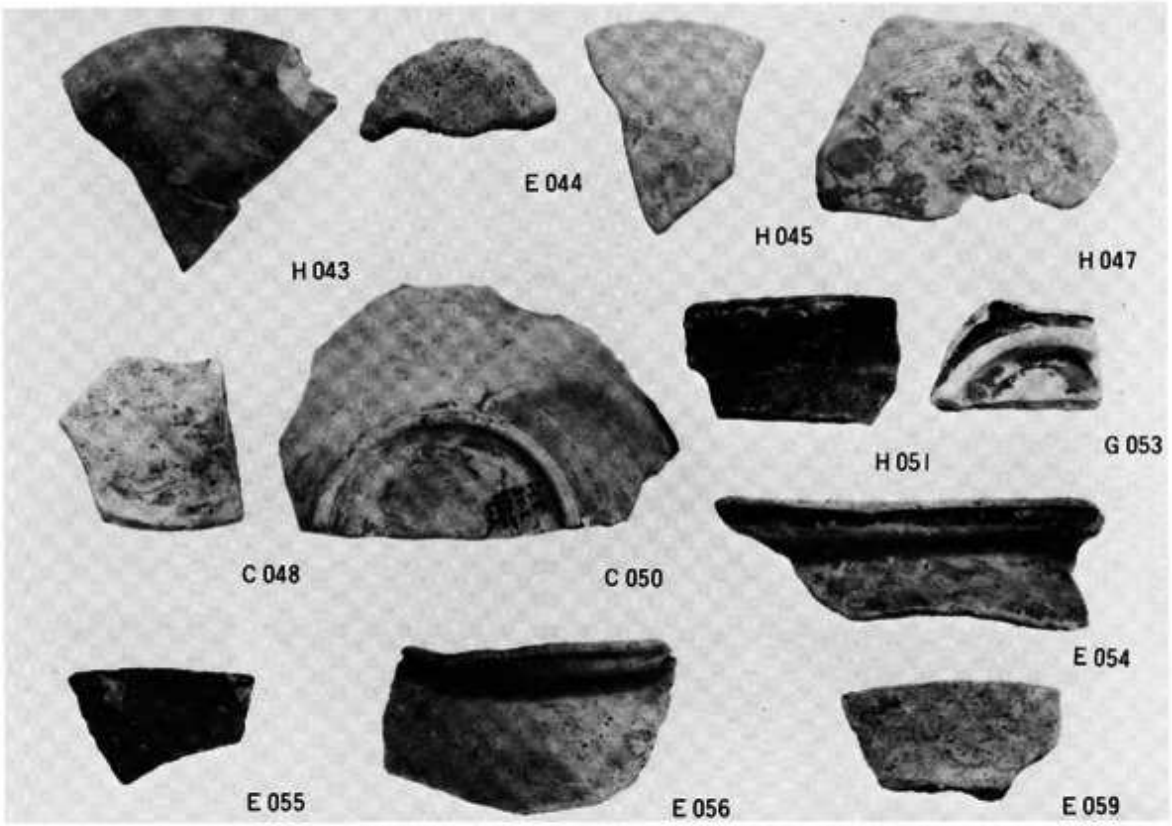
1. C001～H017(T－1包含層)



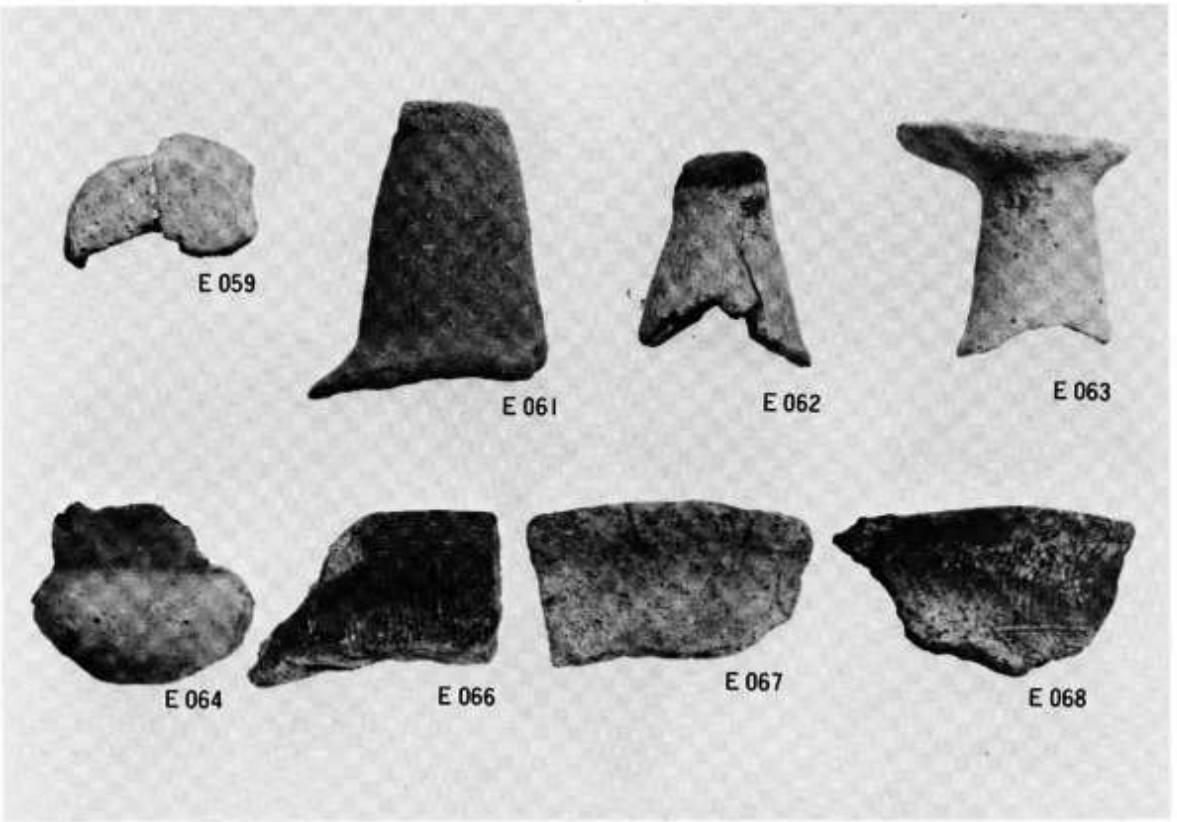
2. B018～K027(T－1包含層)
E028～E030(T－1SD3)



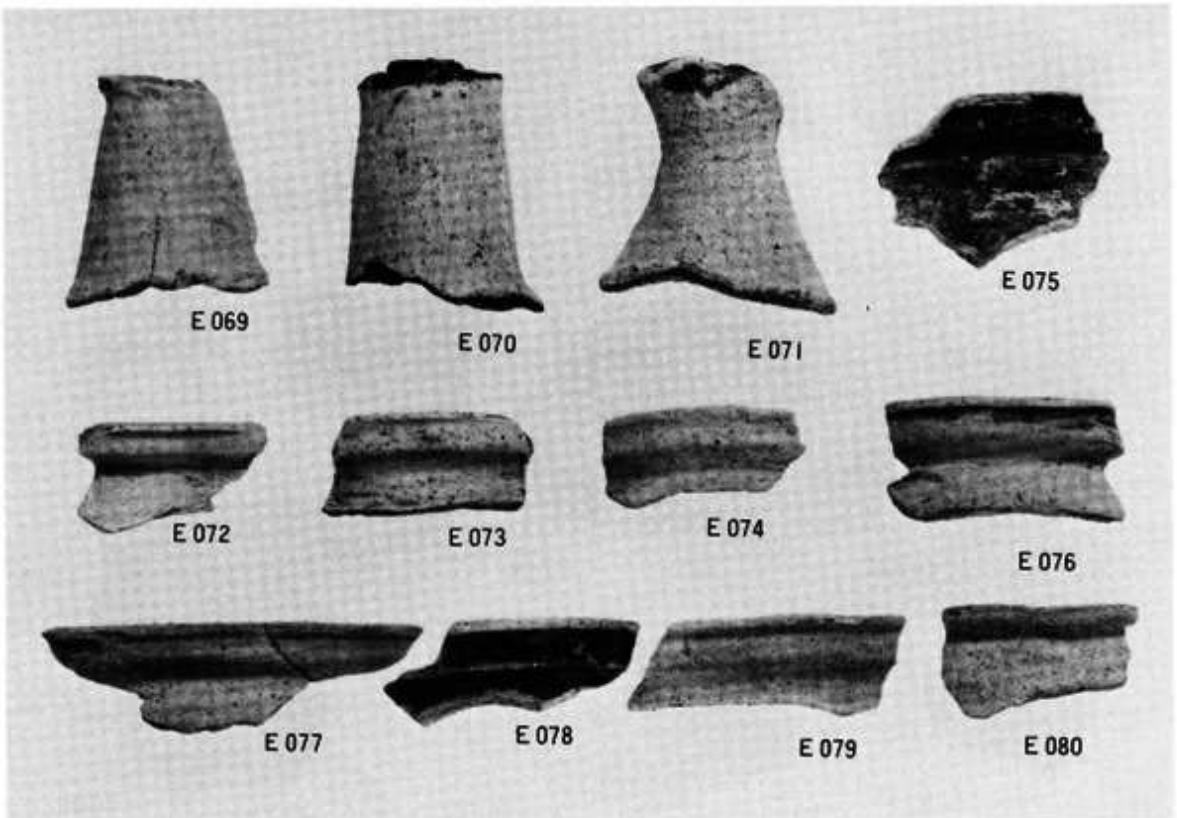
1．E031～C033(T－1包含層)
E034～H042(T－2SD3)



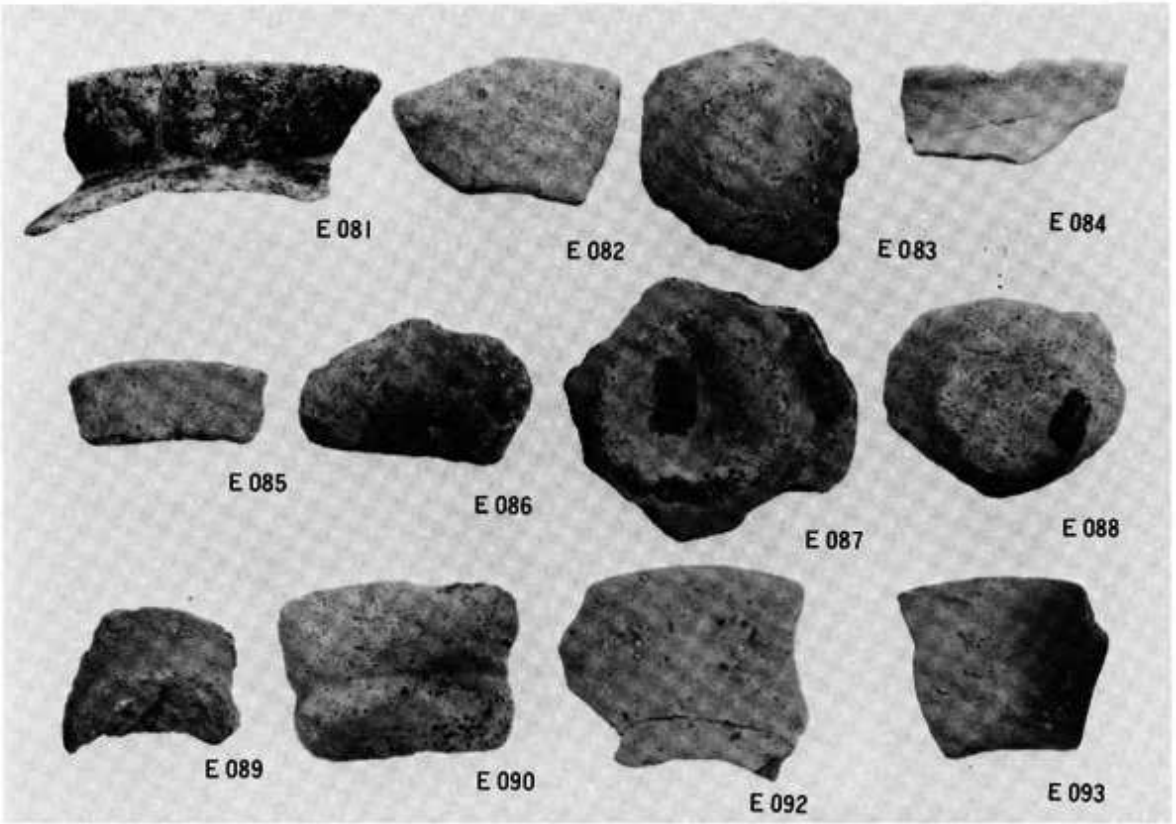
2．E043(T－2　SD3)，E044～H047(T－2　SD4)，C048～H052(T－3包含層)
G053・E054(T－3　SD6)，E055～E059(T－9　SD19)



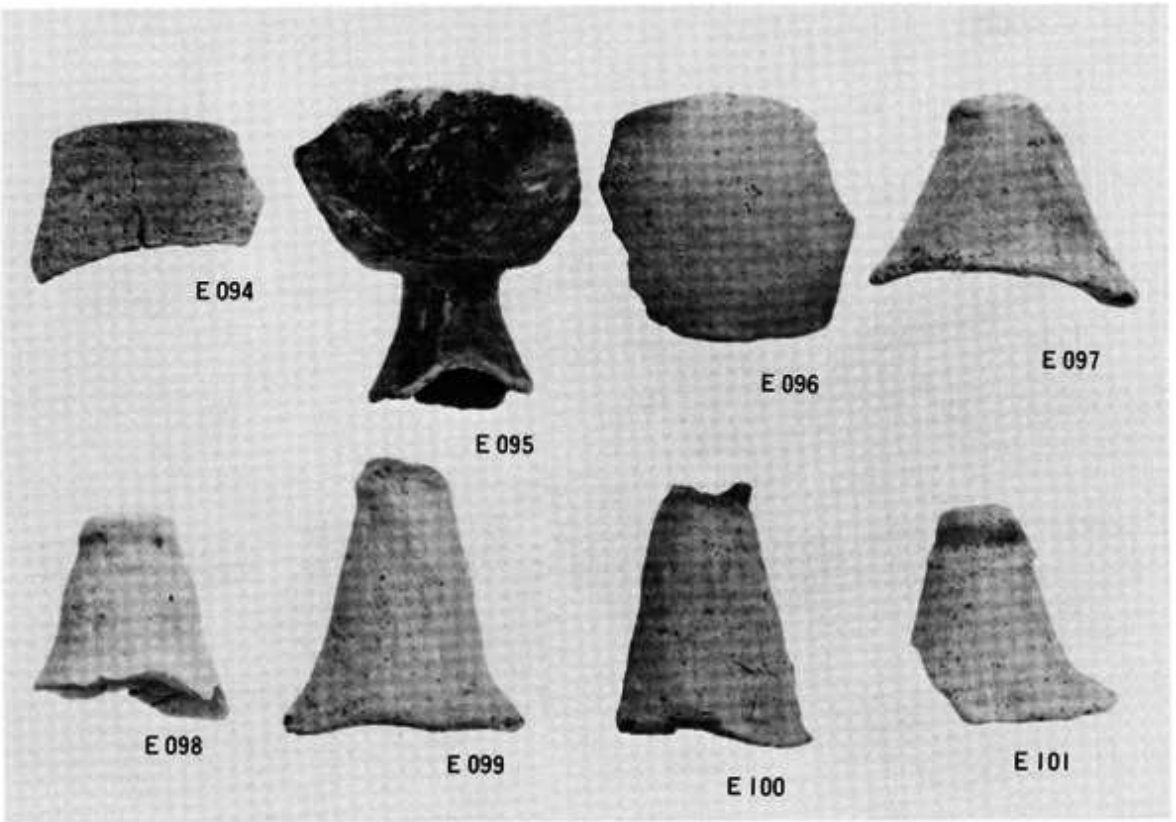
1. E059～E063(T－9　SD19)
E064～E065(T－9　SK3), E066～E068(T－10　SD20)



2. E069～E080(T－10　SD20)

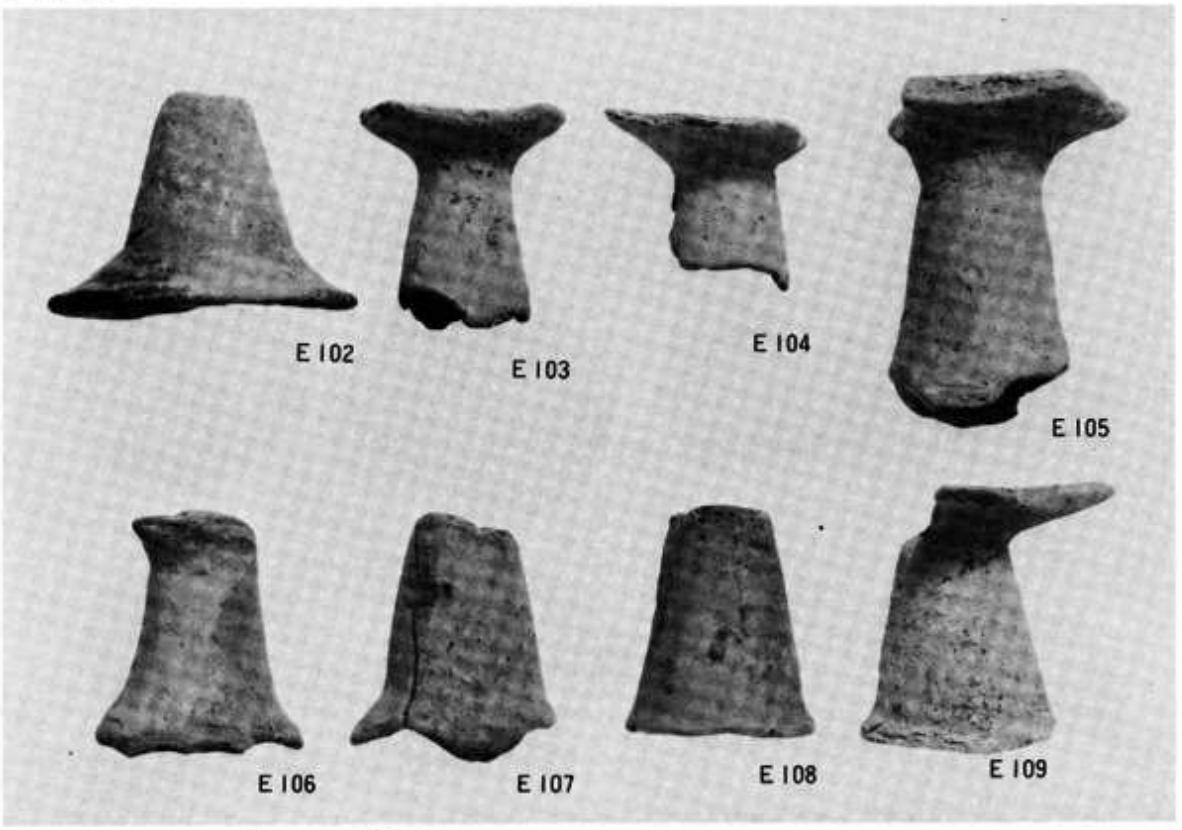


1. E081～E093(T－10 SD20)

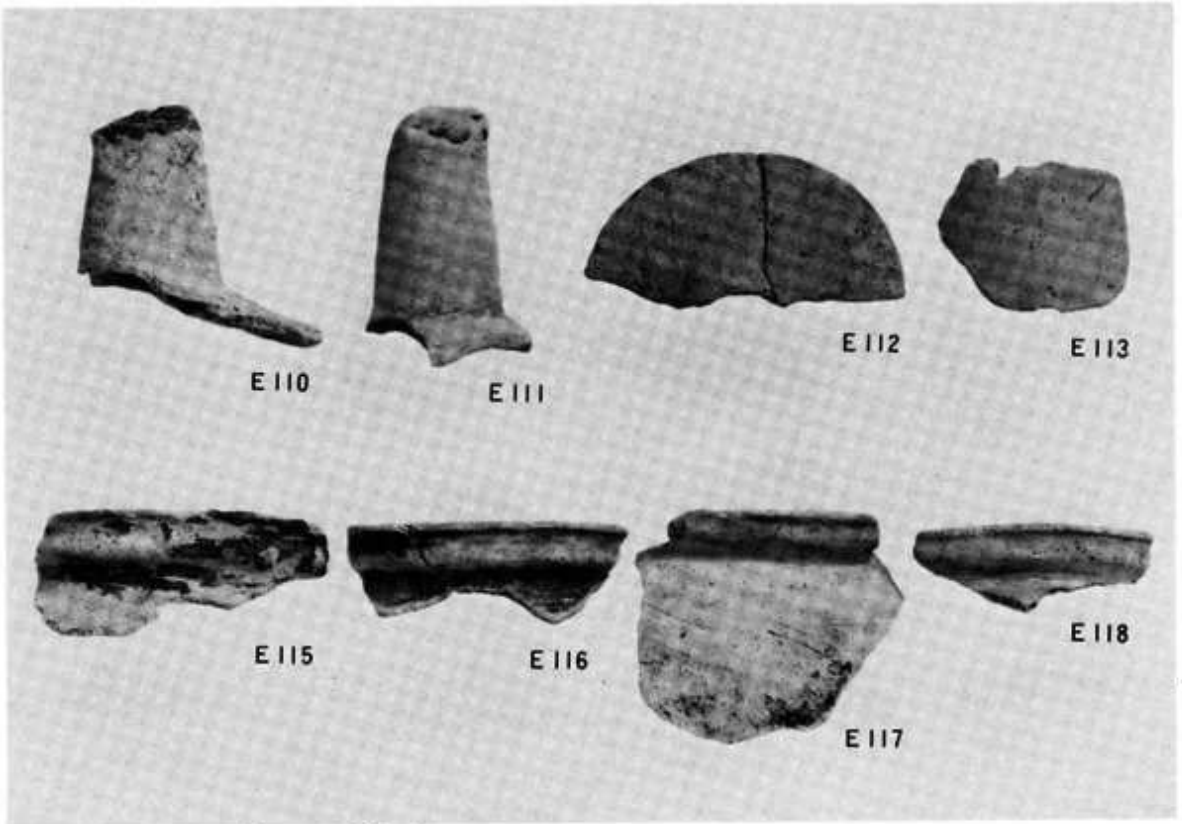


2. E094～E101(T－10 SD20)

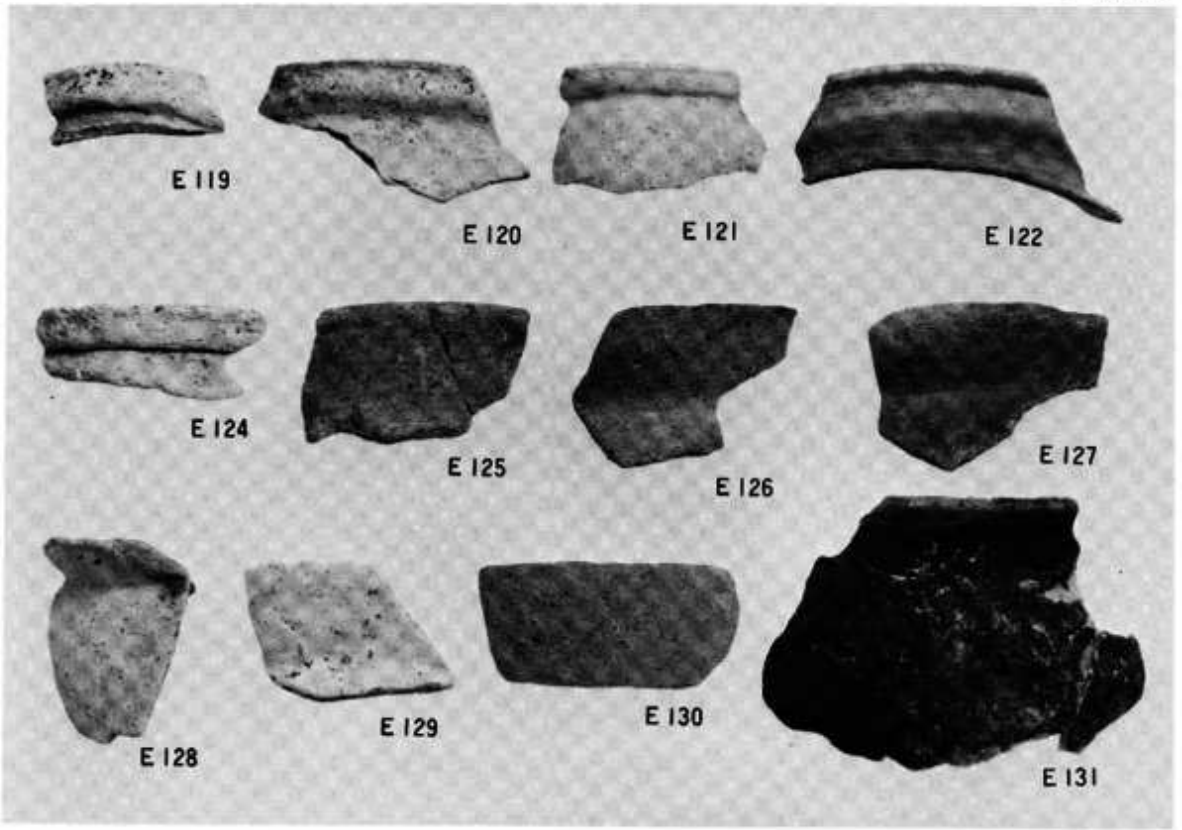
PL. 36



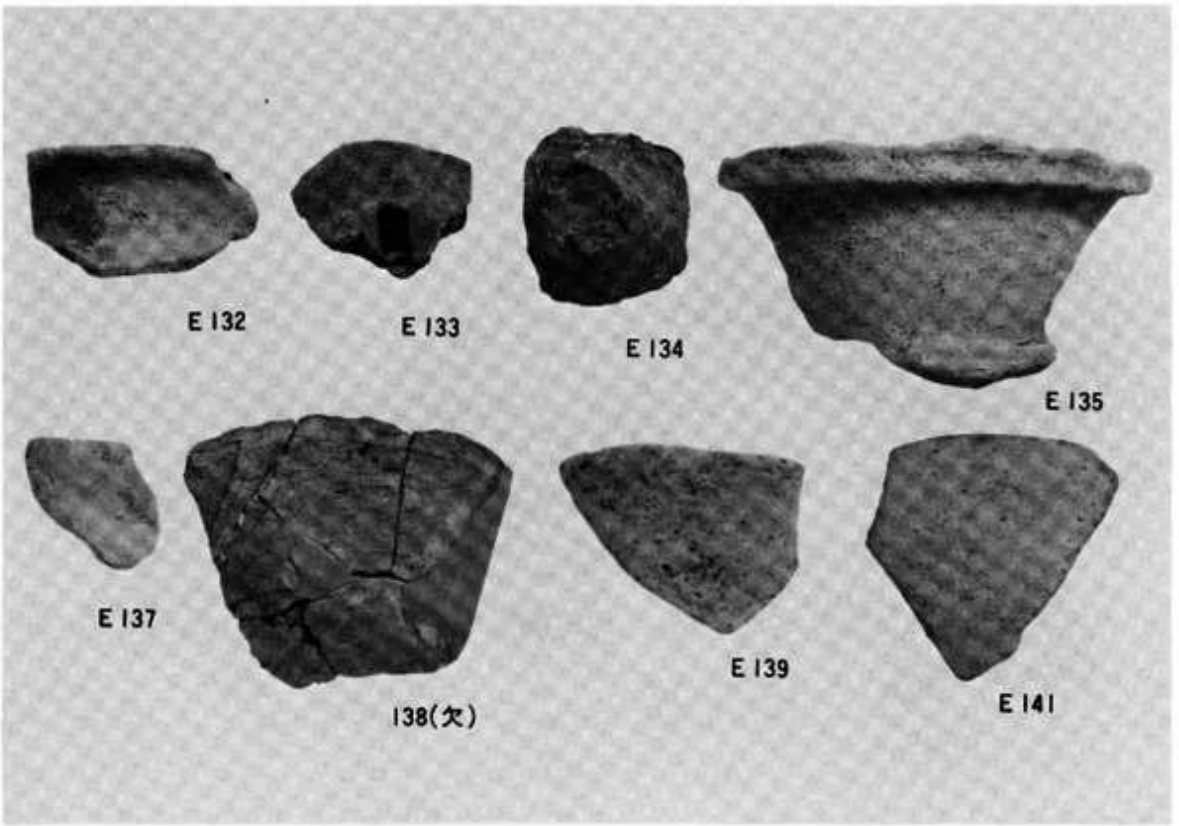
1. E102～E109(T－10 SD20)



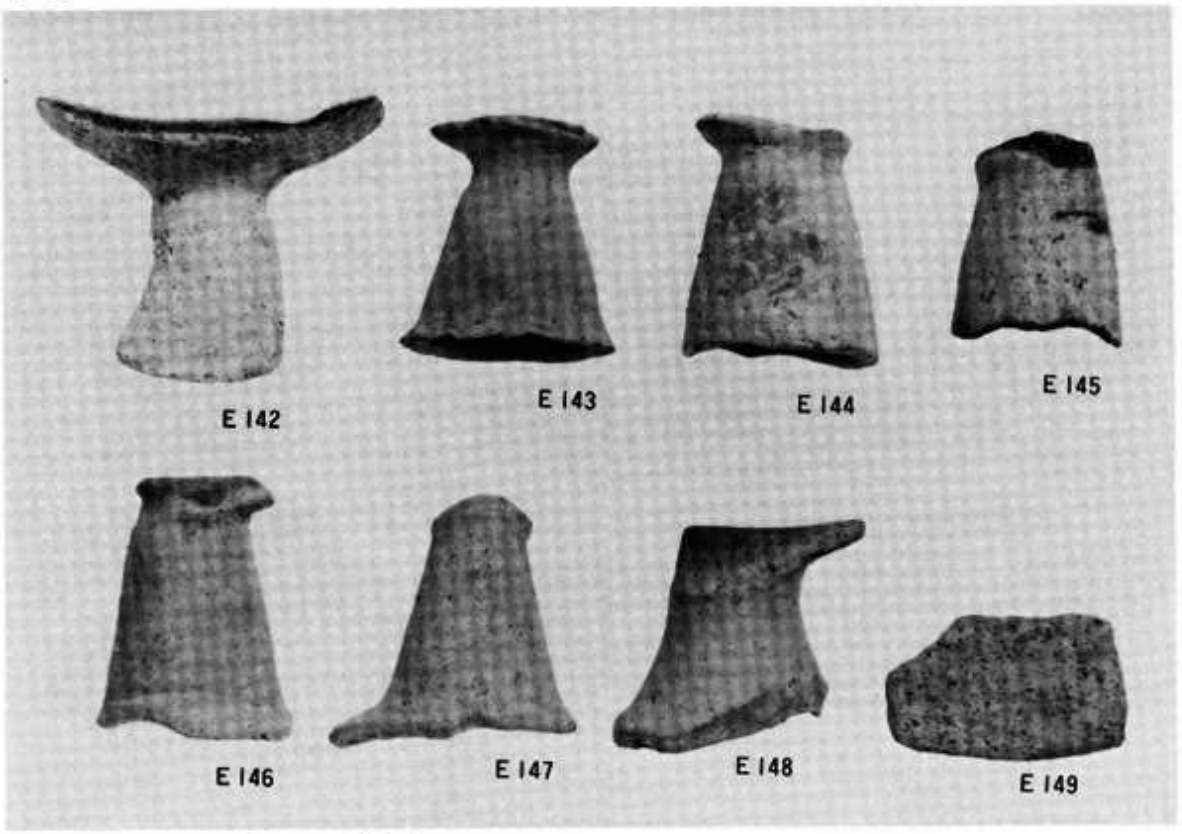
2. E110～E113(T－10 SD20)
E115～E118(T－10 SD21)



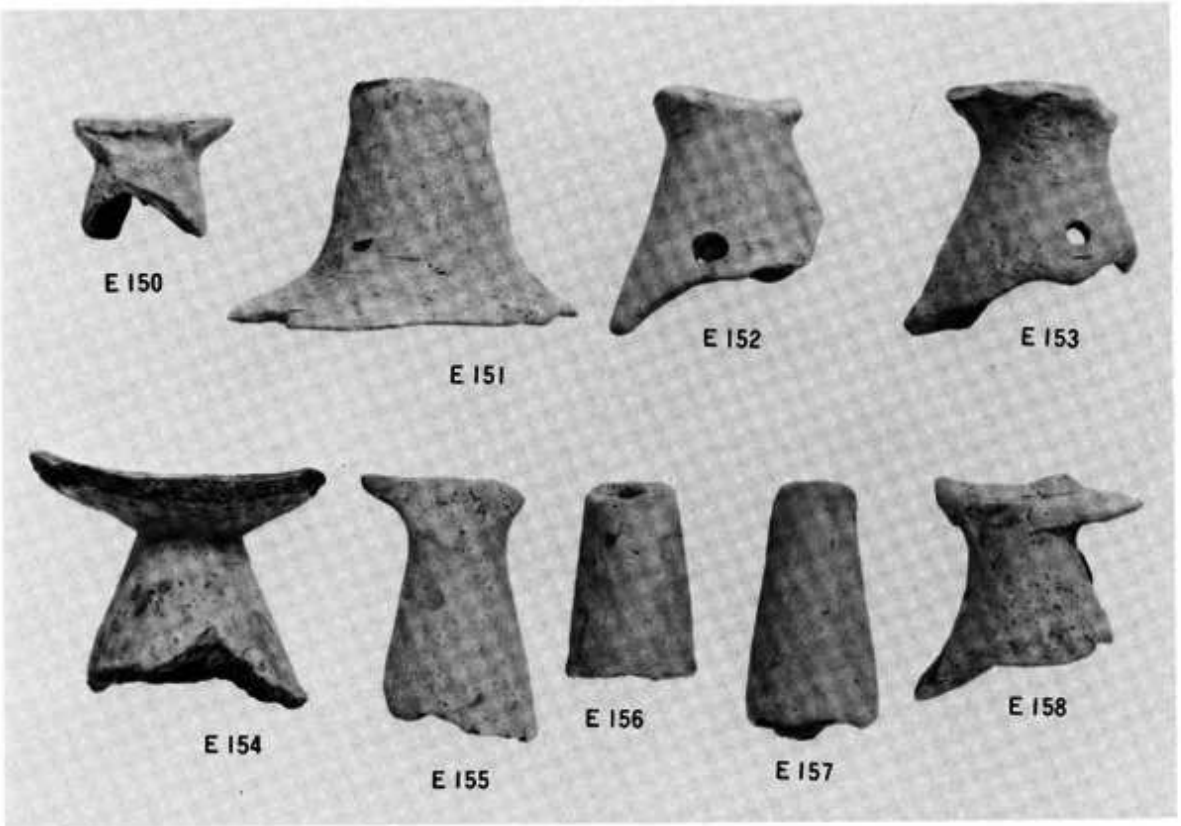
1. E119～E131(T－10 SD21)



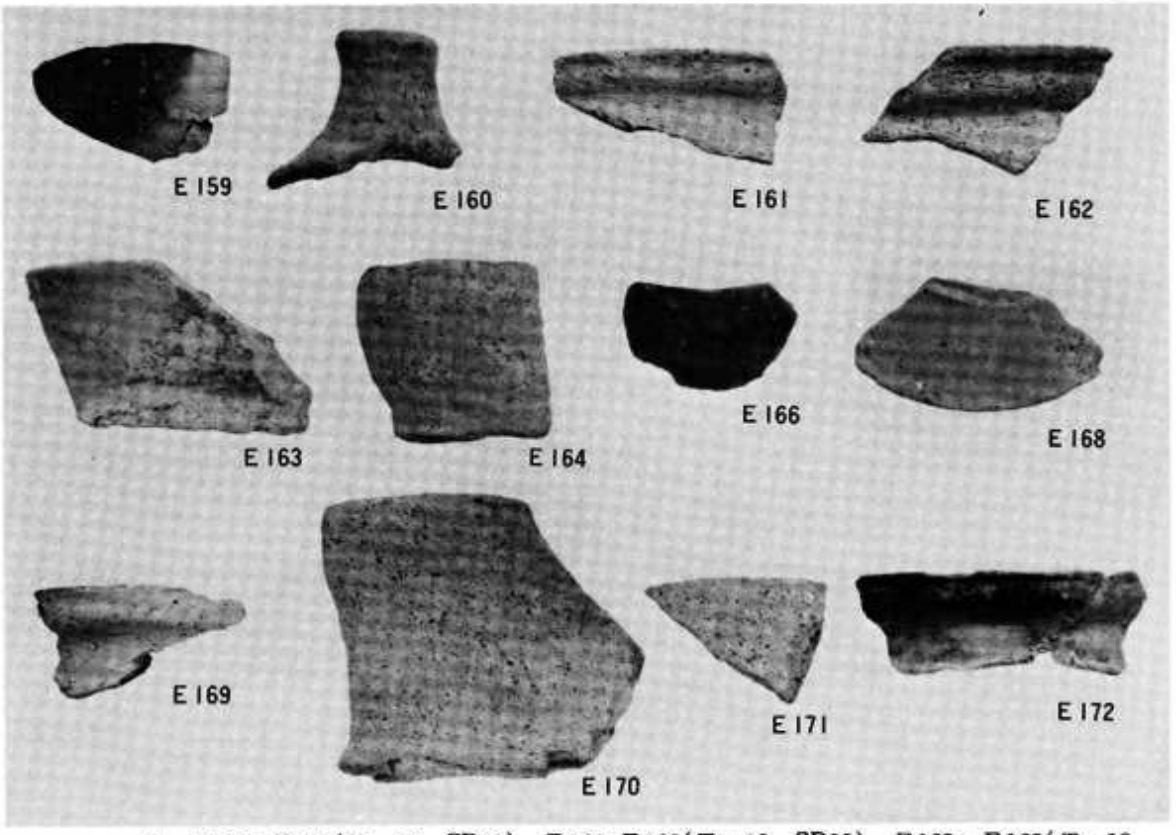
2. E132～E141(T－10 SD21)



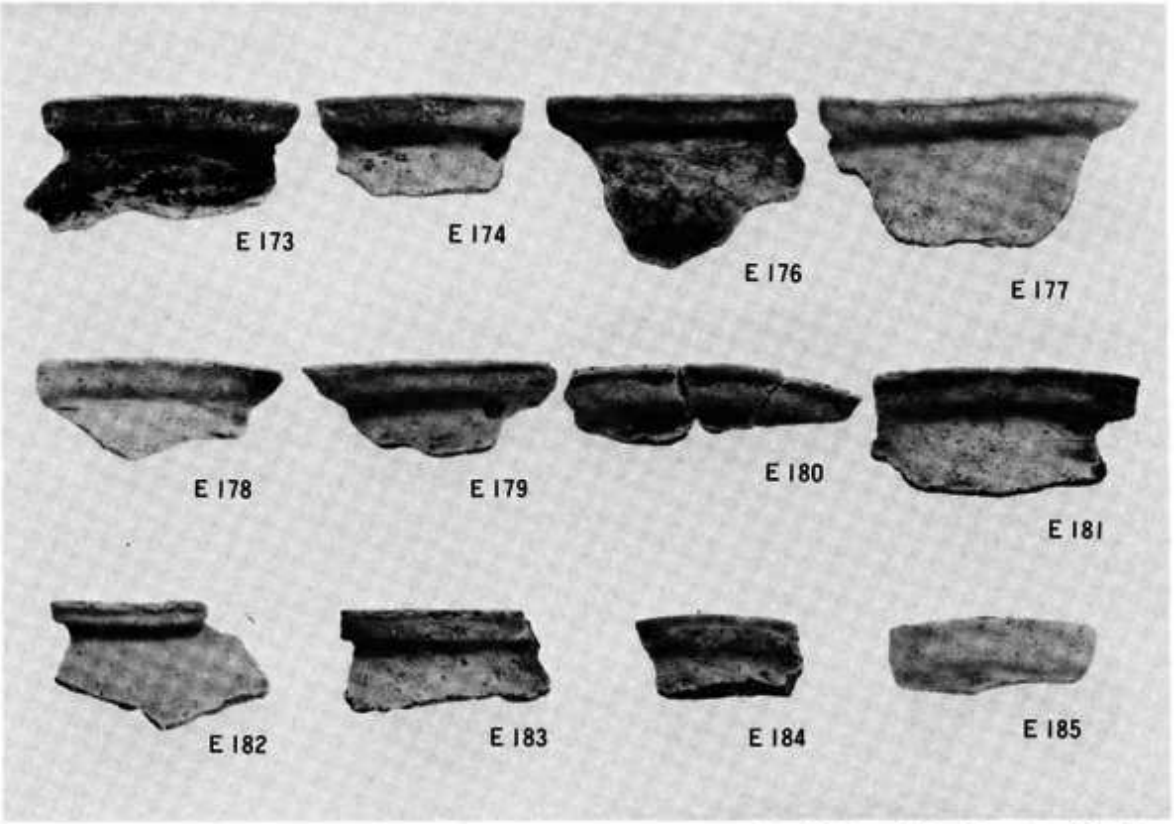
1. E142～E149(T－10 SD21)



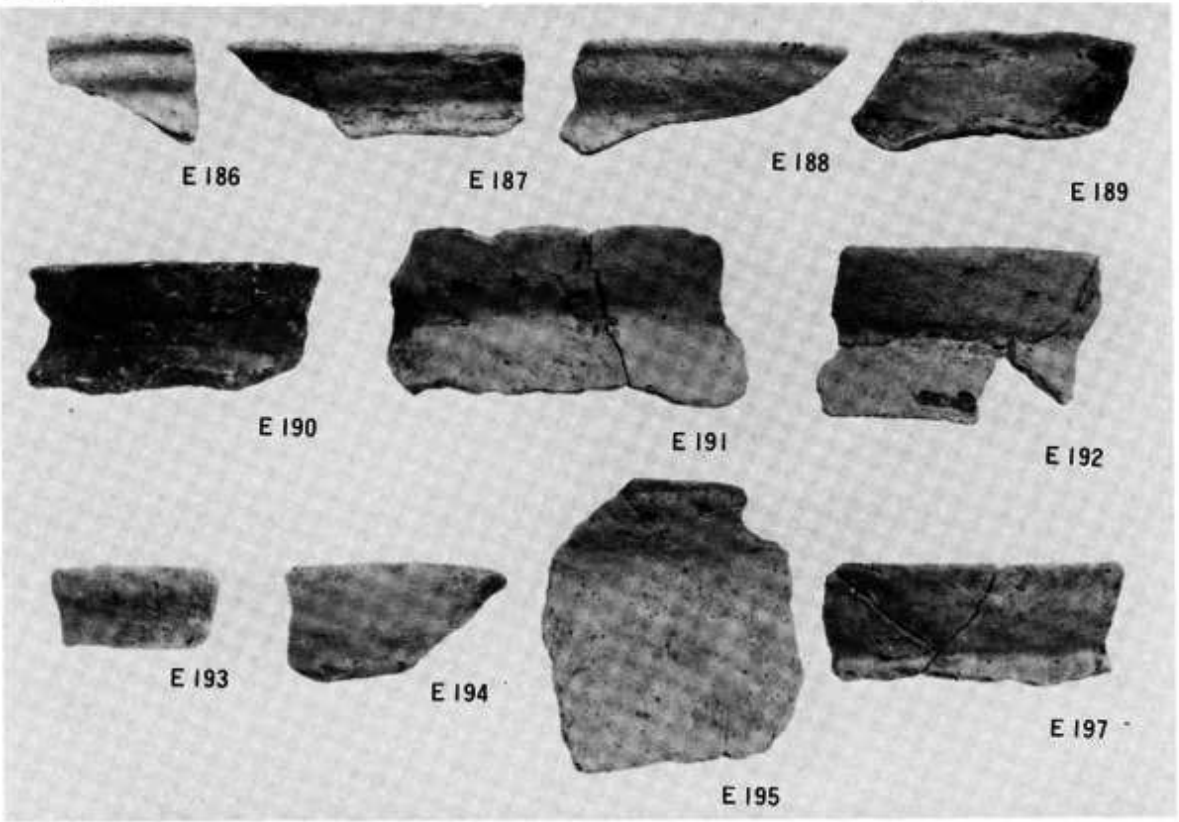
2. E150～E158(T－10 SD21)



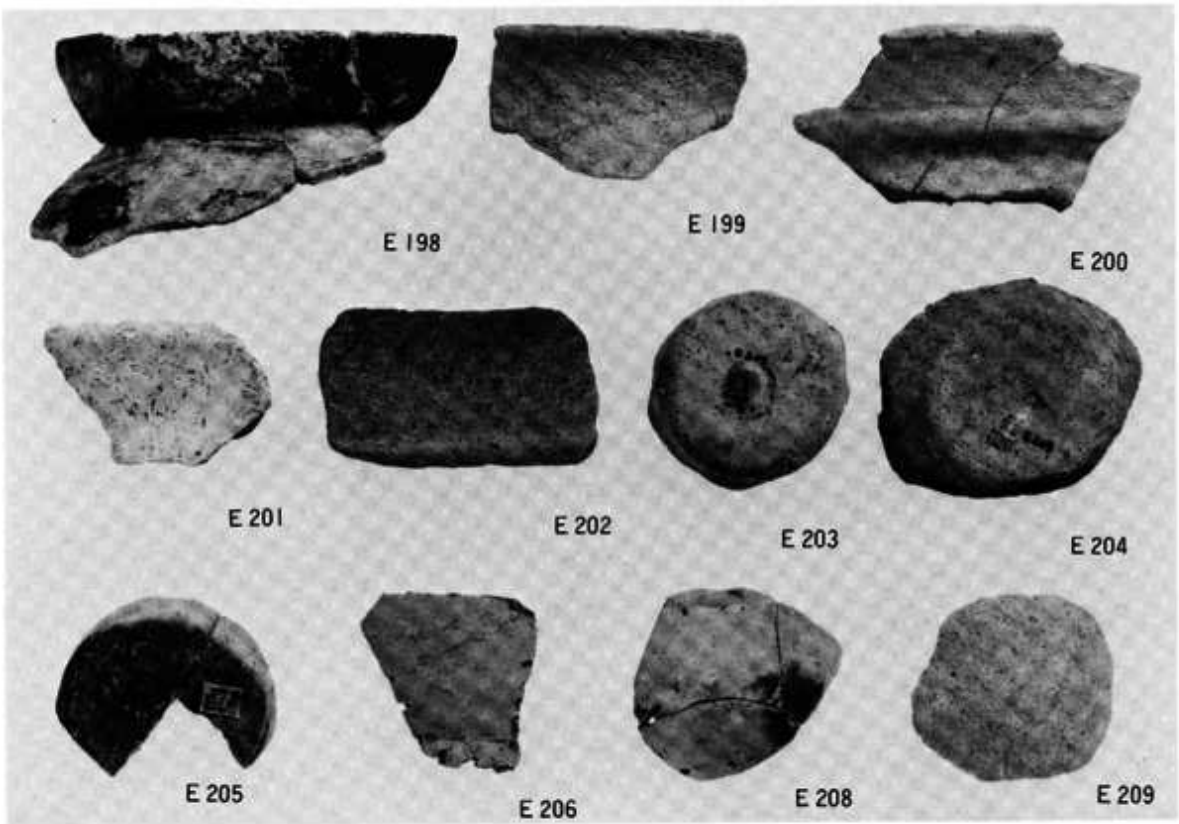
1．E159·E160(T－10　SD21)，E161·E162(T－13　SD22)，E163～E168(T－13　SD24)，E169～E170(T－15　包含層)，E171·E172(T－15　SD25)



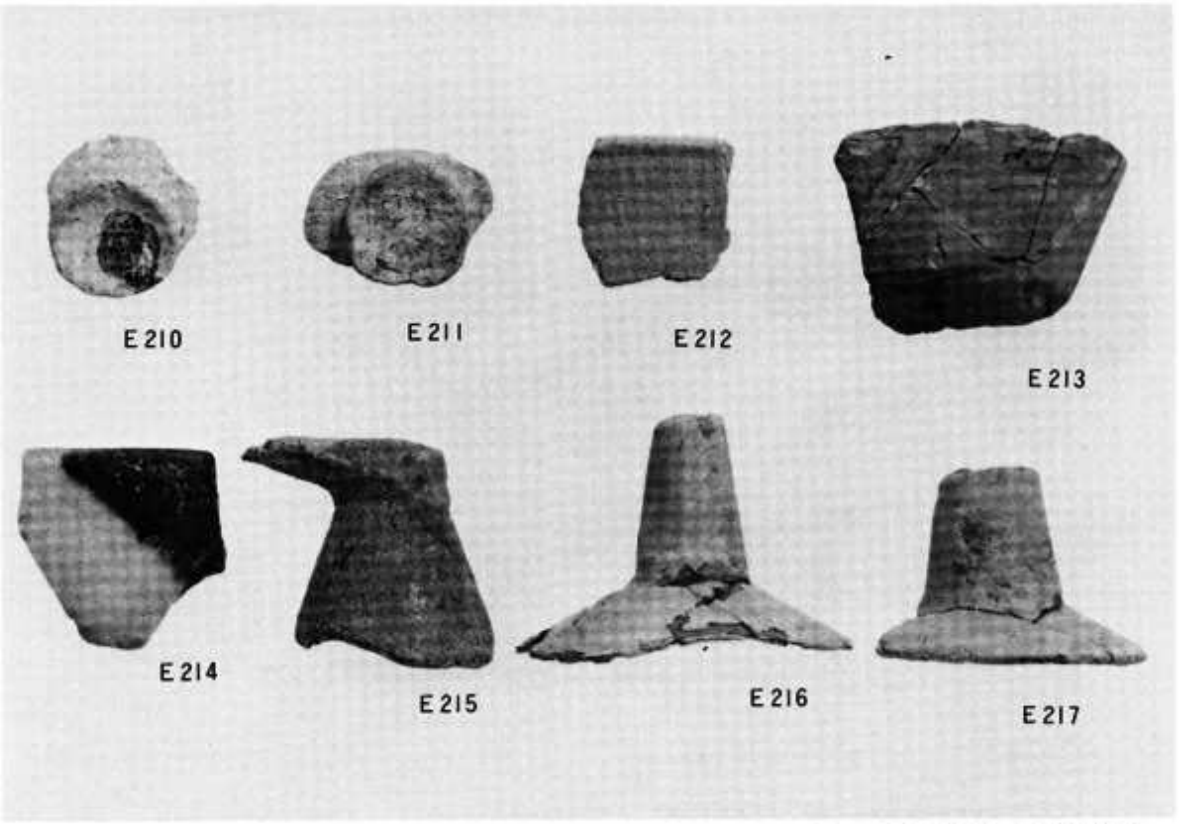
2．E173～E185(T－15　SD25)



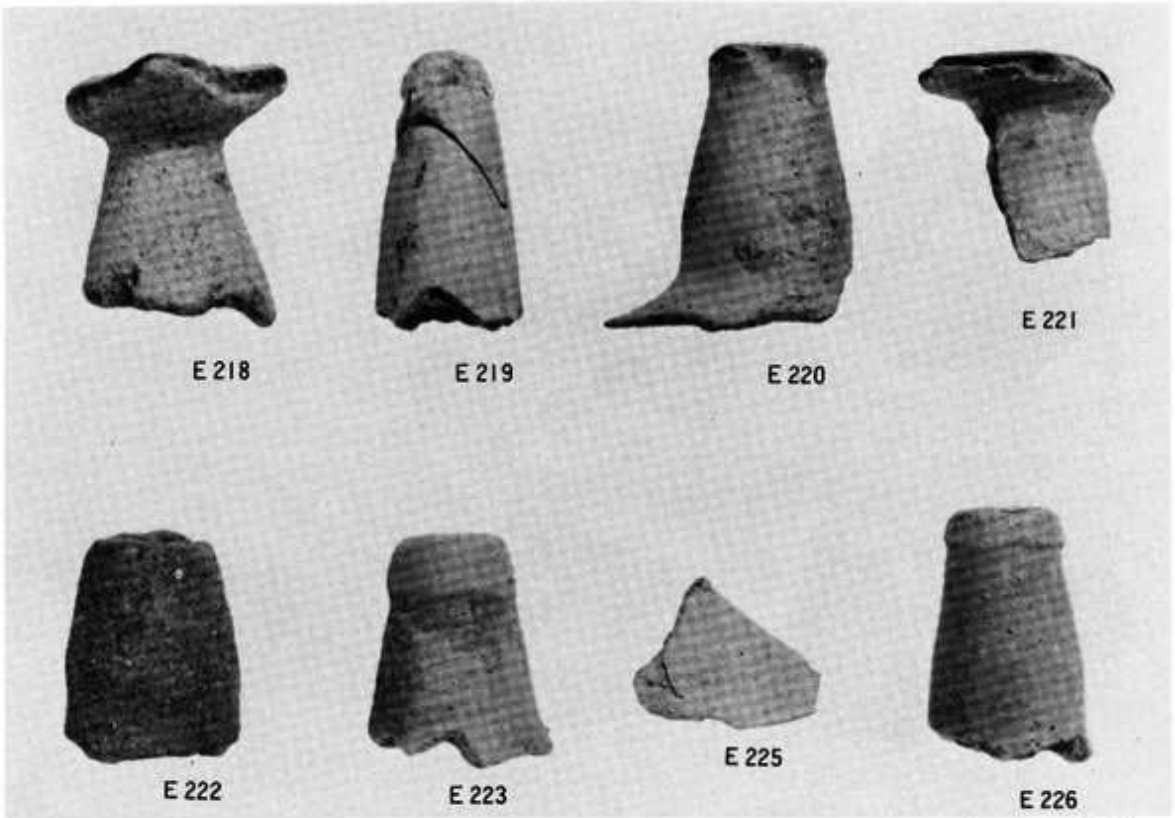
1. E186～E197(T－15 SD25)



2. E198～E209(T－15 S D25)

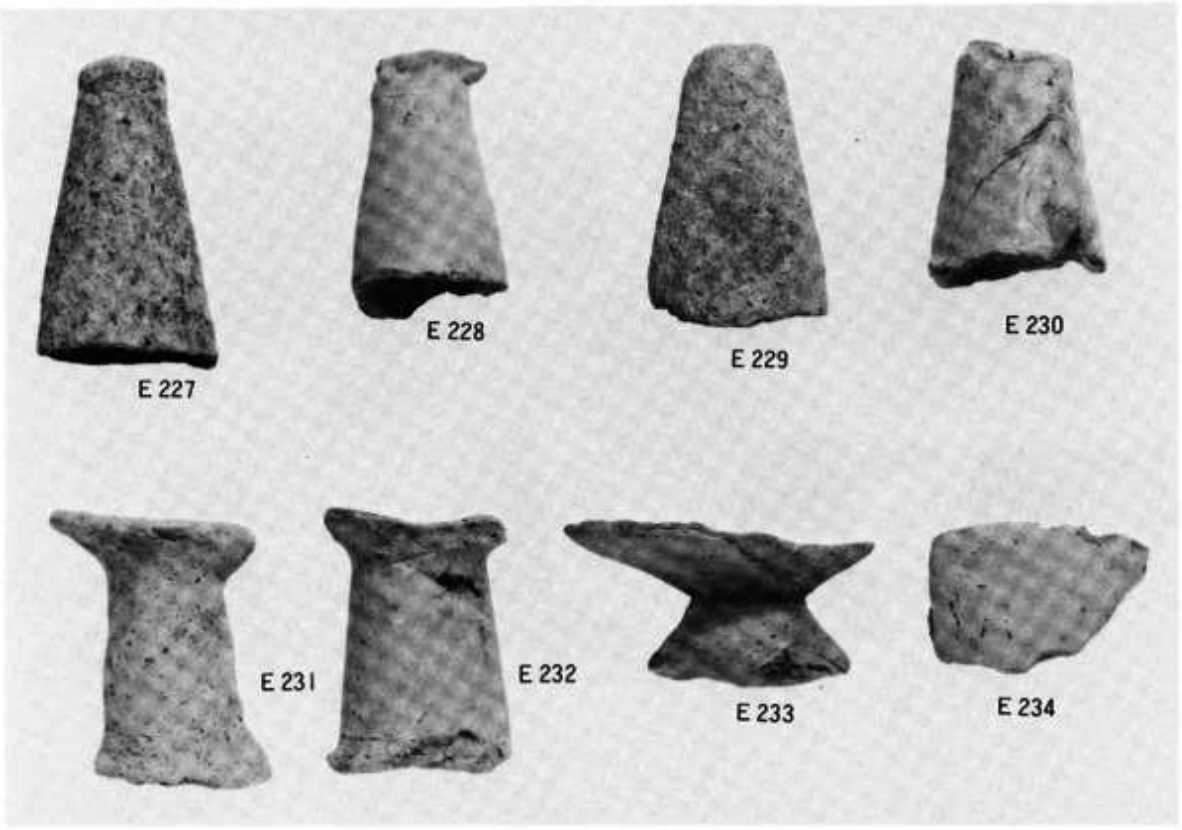


1. E210~E217(T−15 SD25)

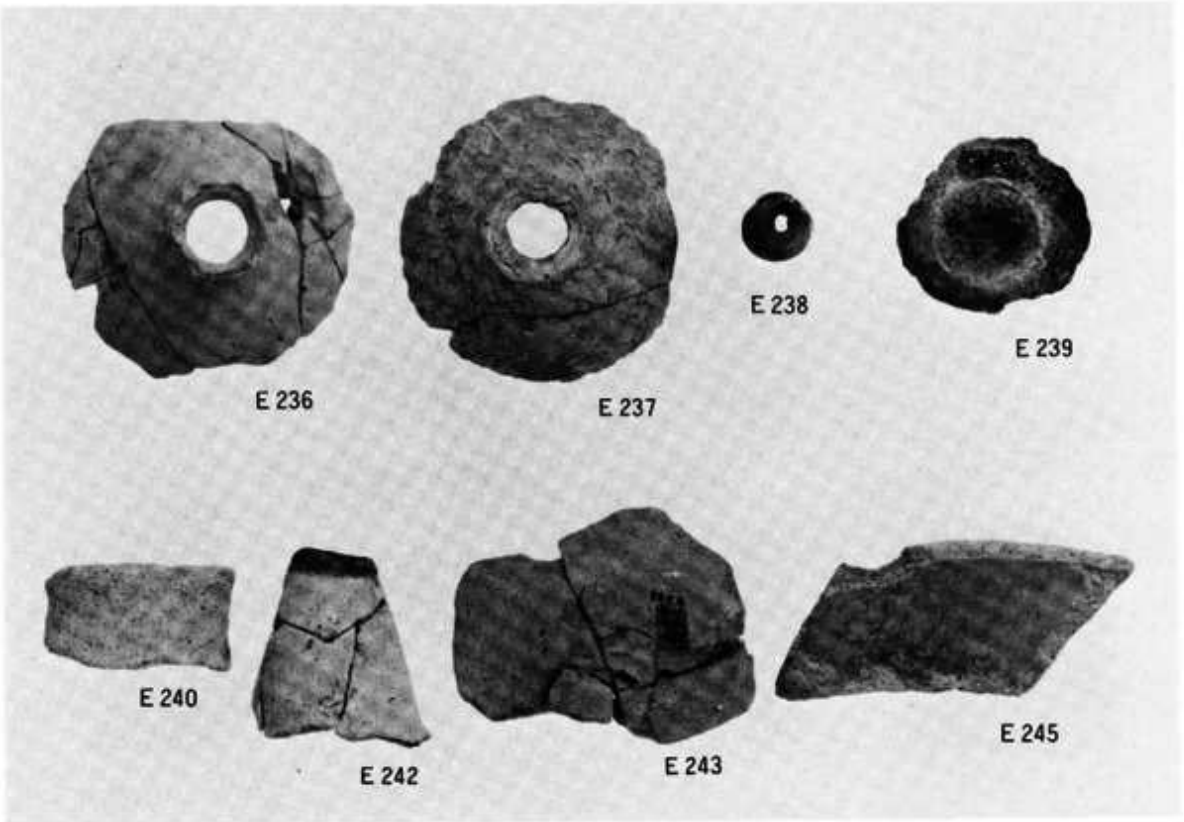


2. E218~E226(T−15 SD25)

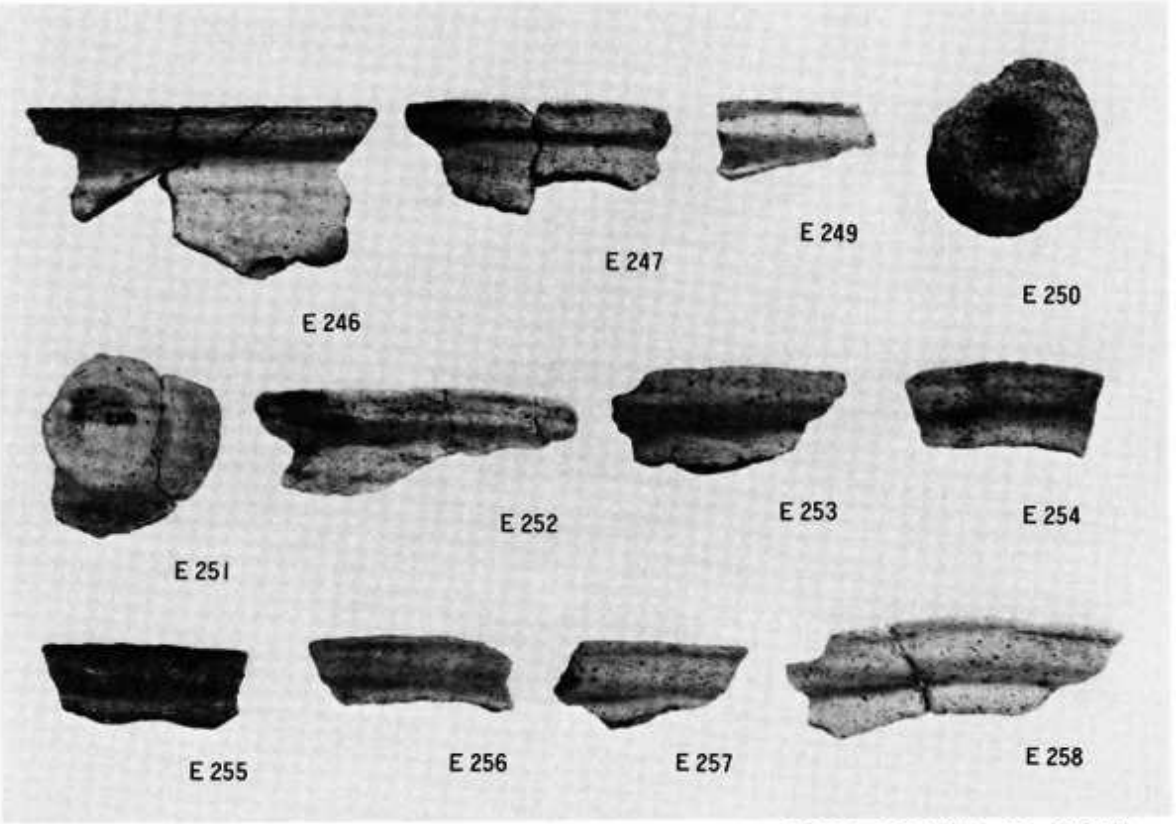
PL. 42



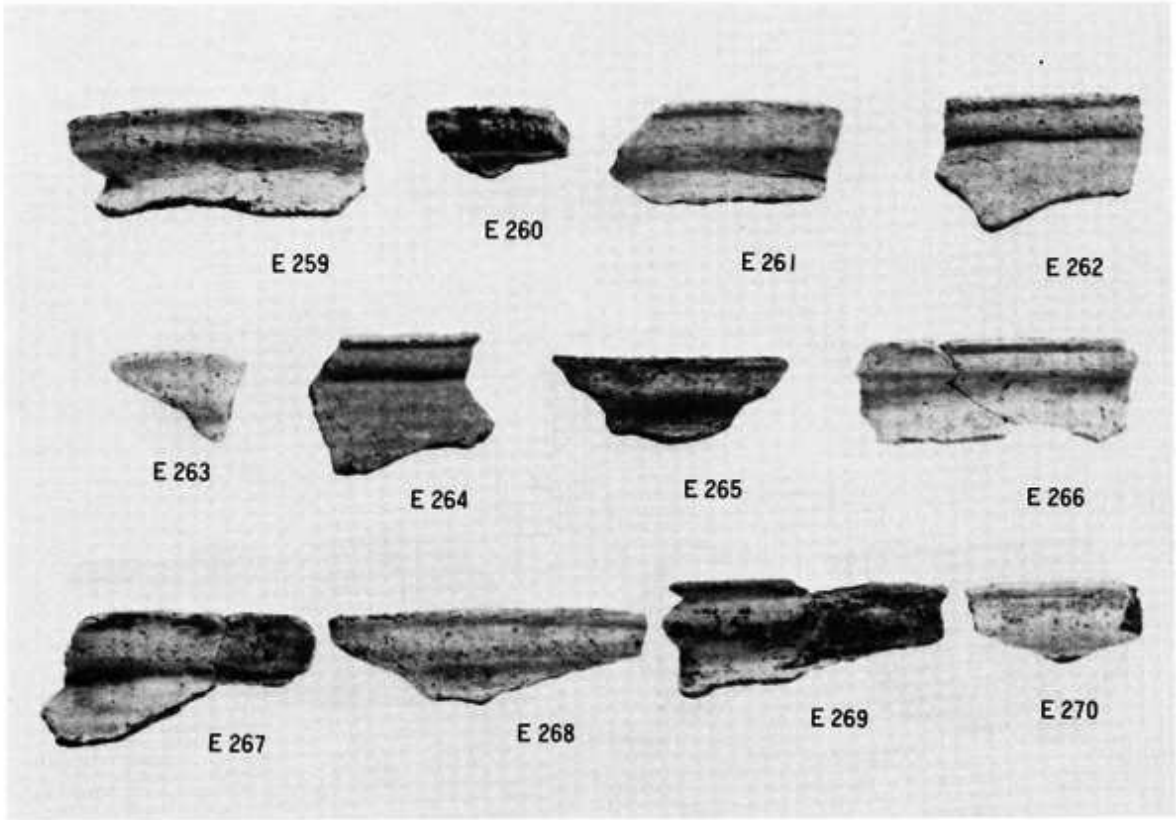
1. E227～E234(T－15　SD25)



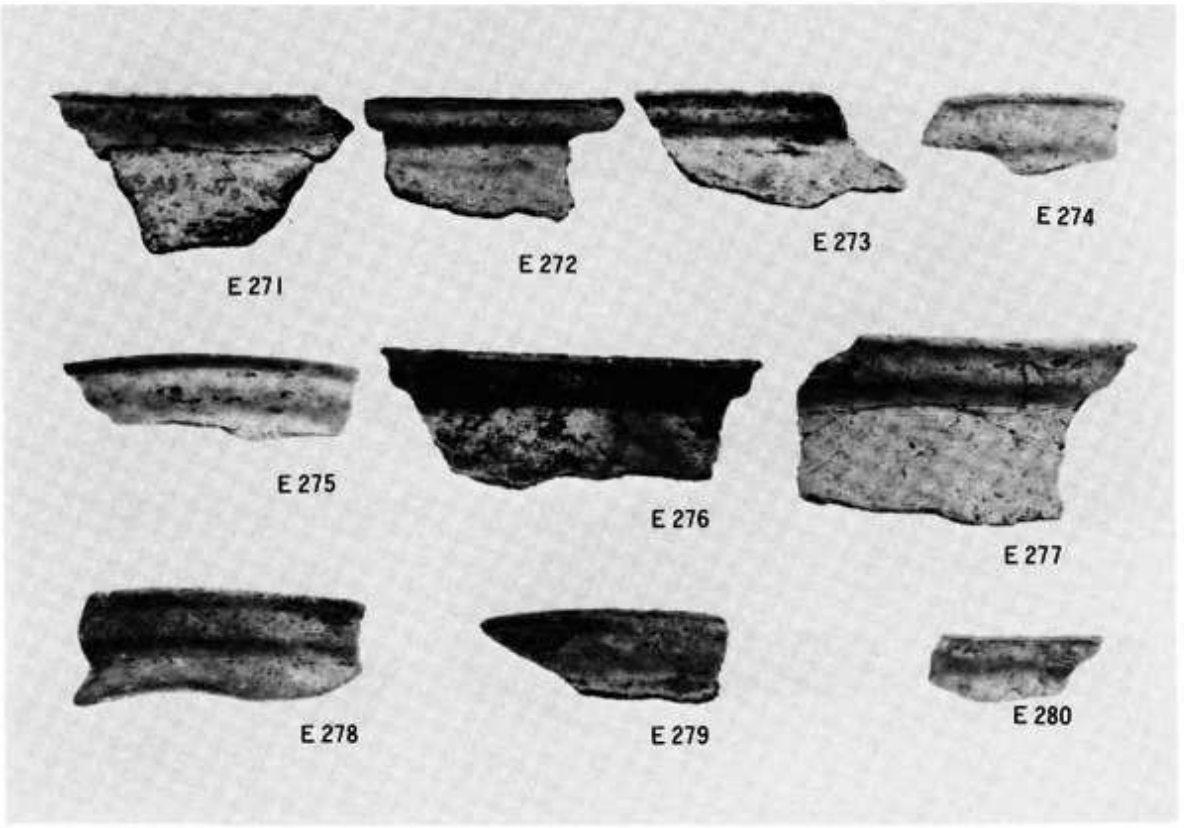
2. E237～E238・E243(T－15　SD25)，E242(T－15　SD26)
E245(T－15　SD28)



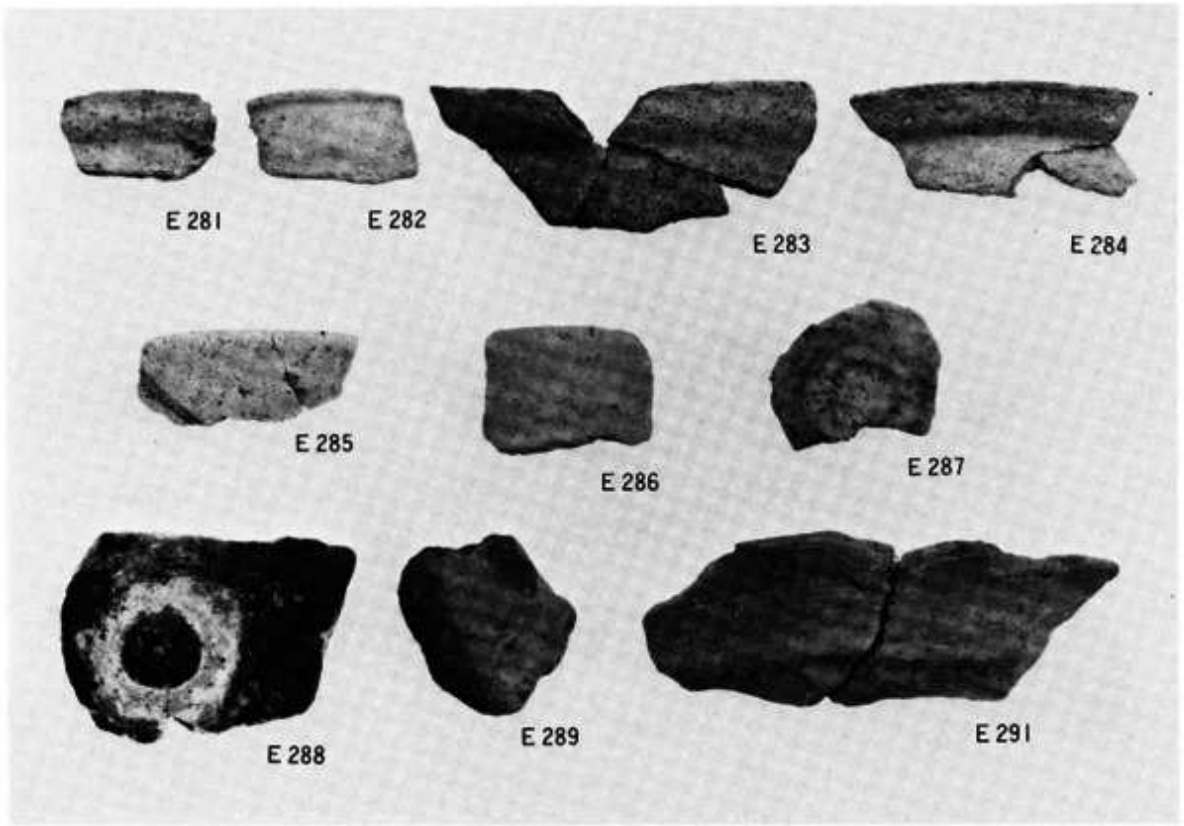
1. E246～E251(T－15　SD28)
E252～E258(T－15　SD29)



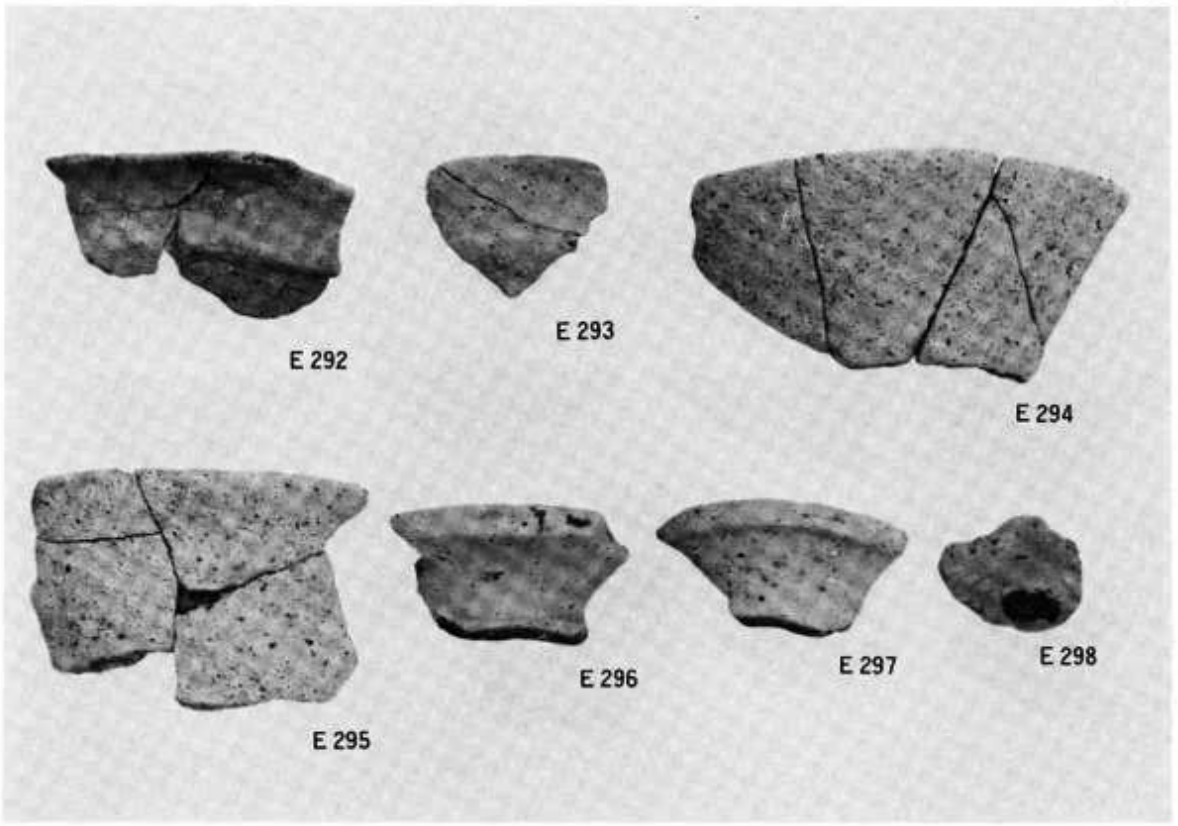
2. E259～E270(T－15　SD29)



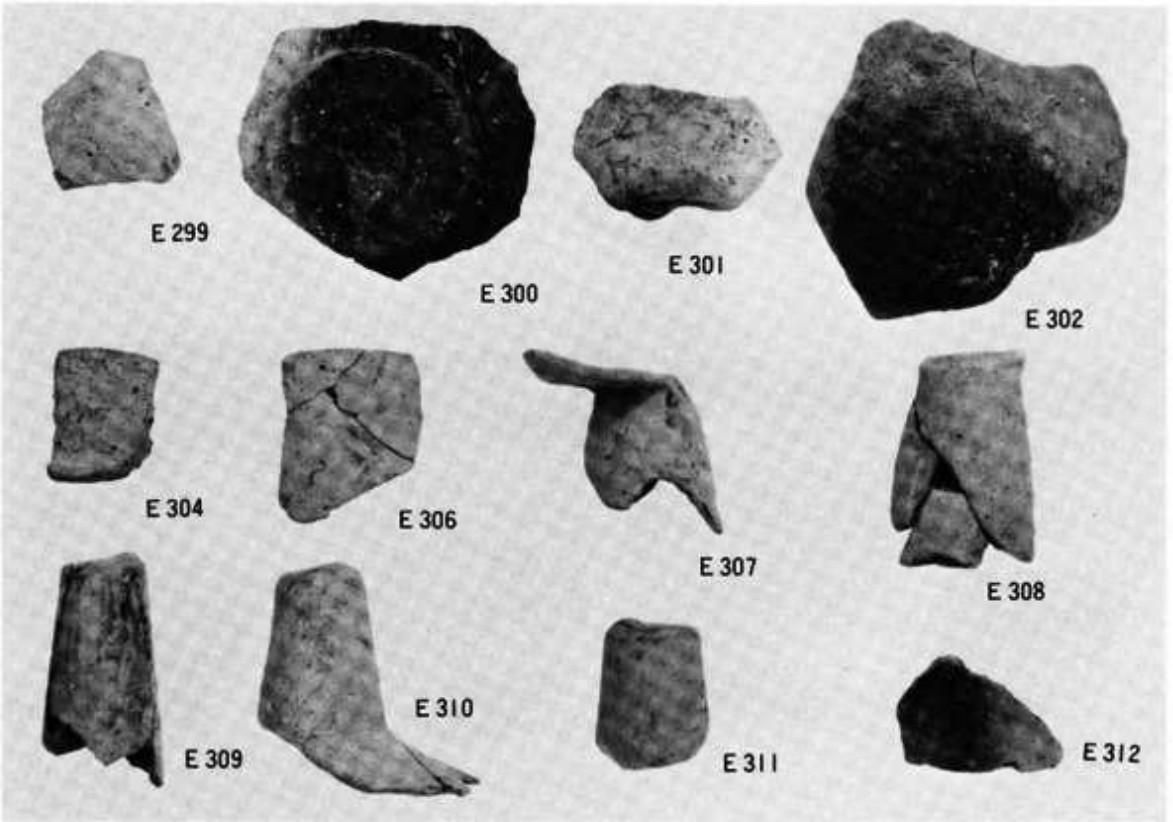
1. E271~280(T−15 SD29)



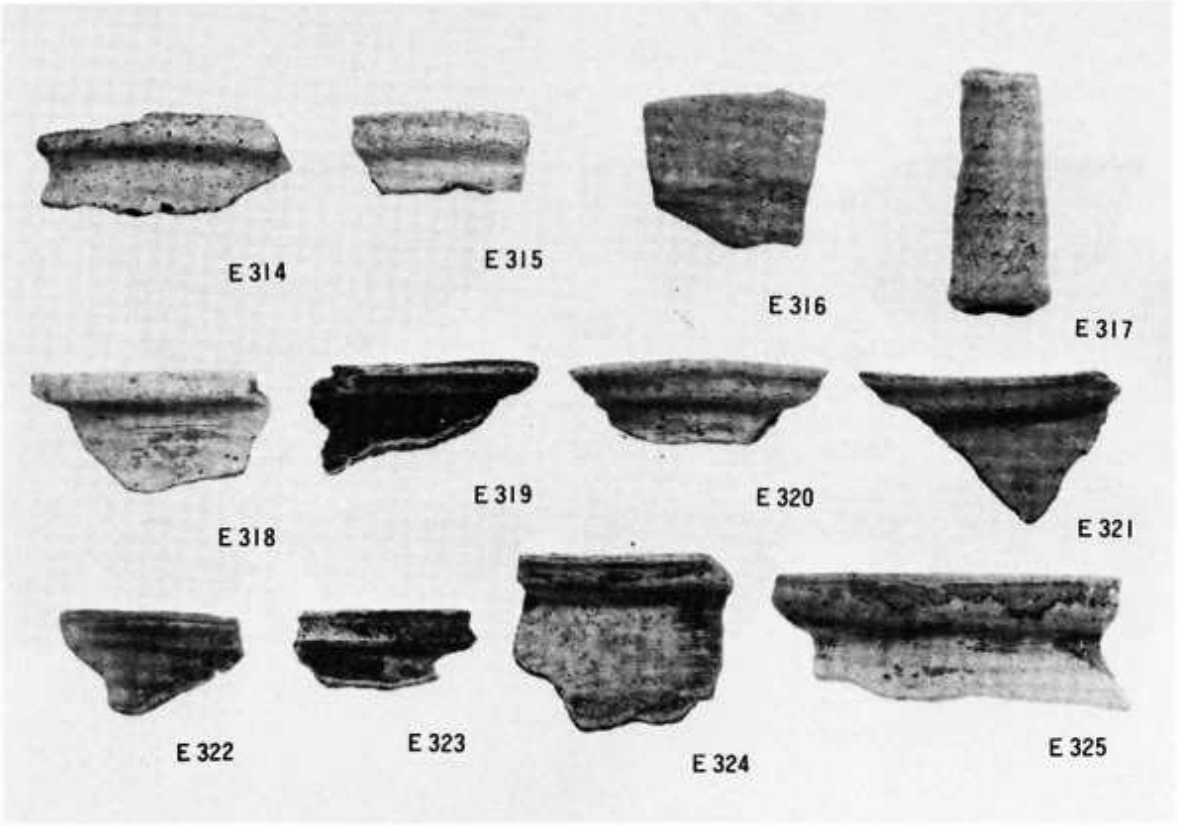
2. E281~E291(T−15 SD29)



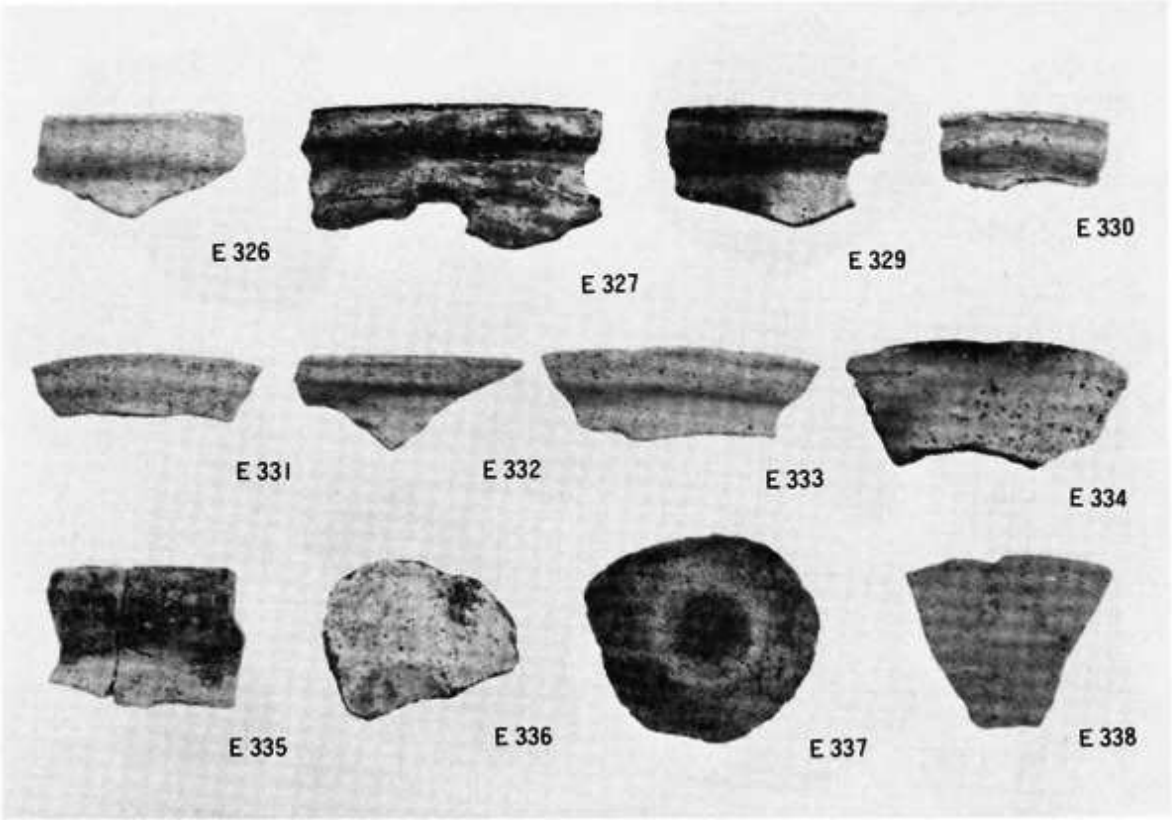
1. E292～E298(T－15 SD29)



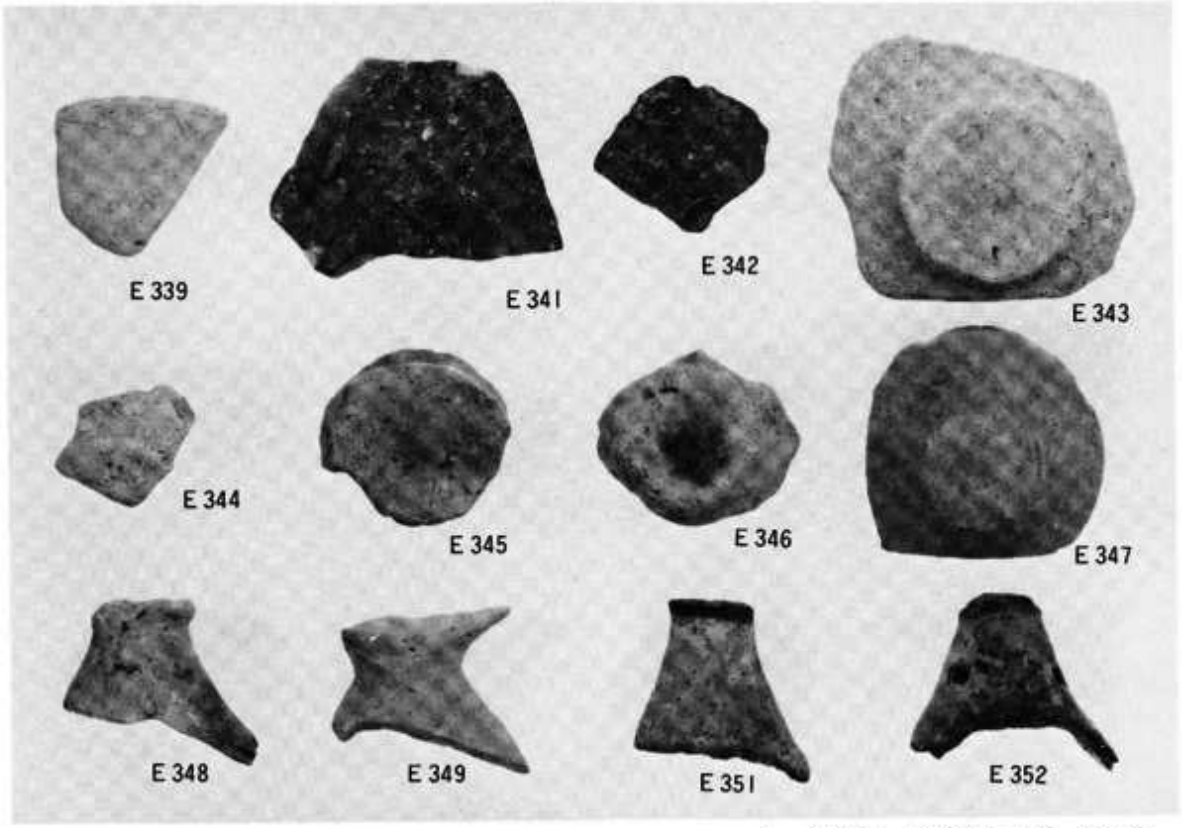
2. E299～E312(T－15 SD29)



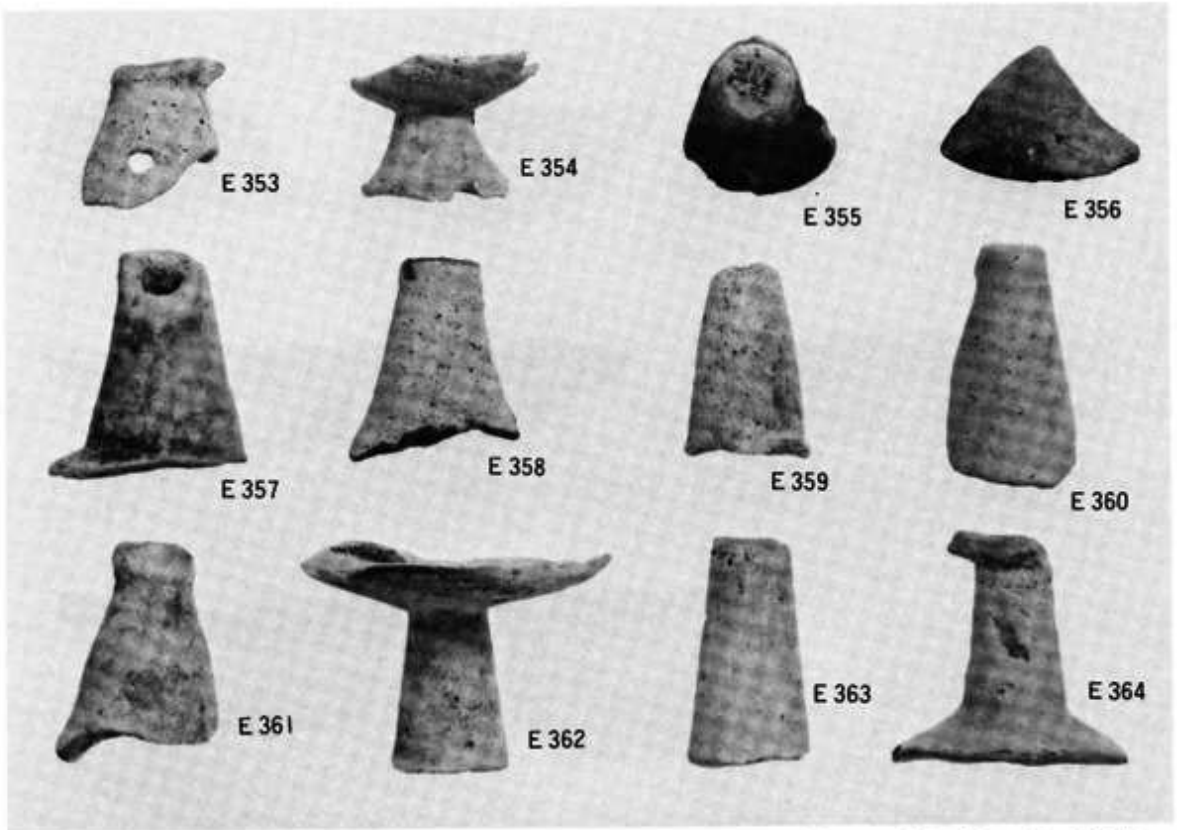
1. E314(T－16 包含層), E315～E317(T－16 SD33)
E318～E325(T－16 SD34)



2. E326～E338(T－16 SD34)

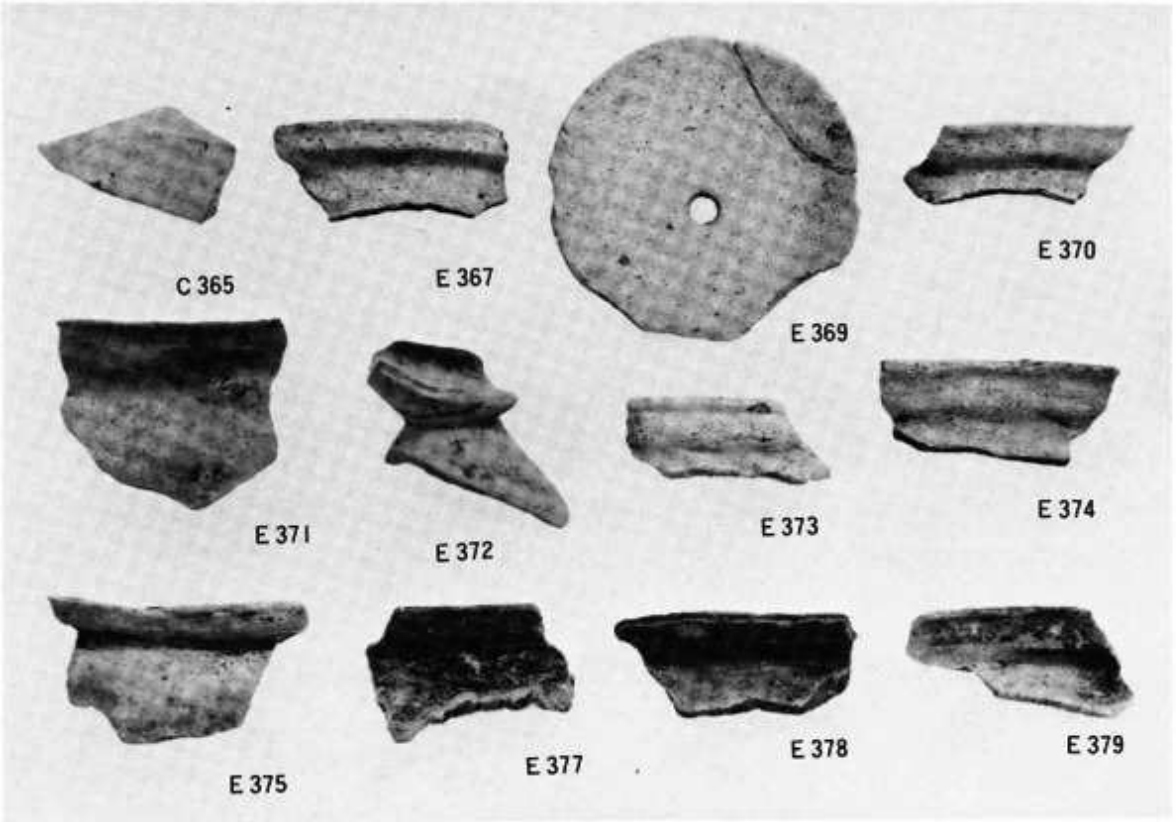


1. E339～E352(T－16 SD34)

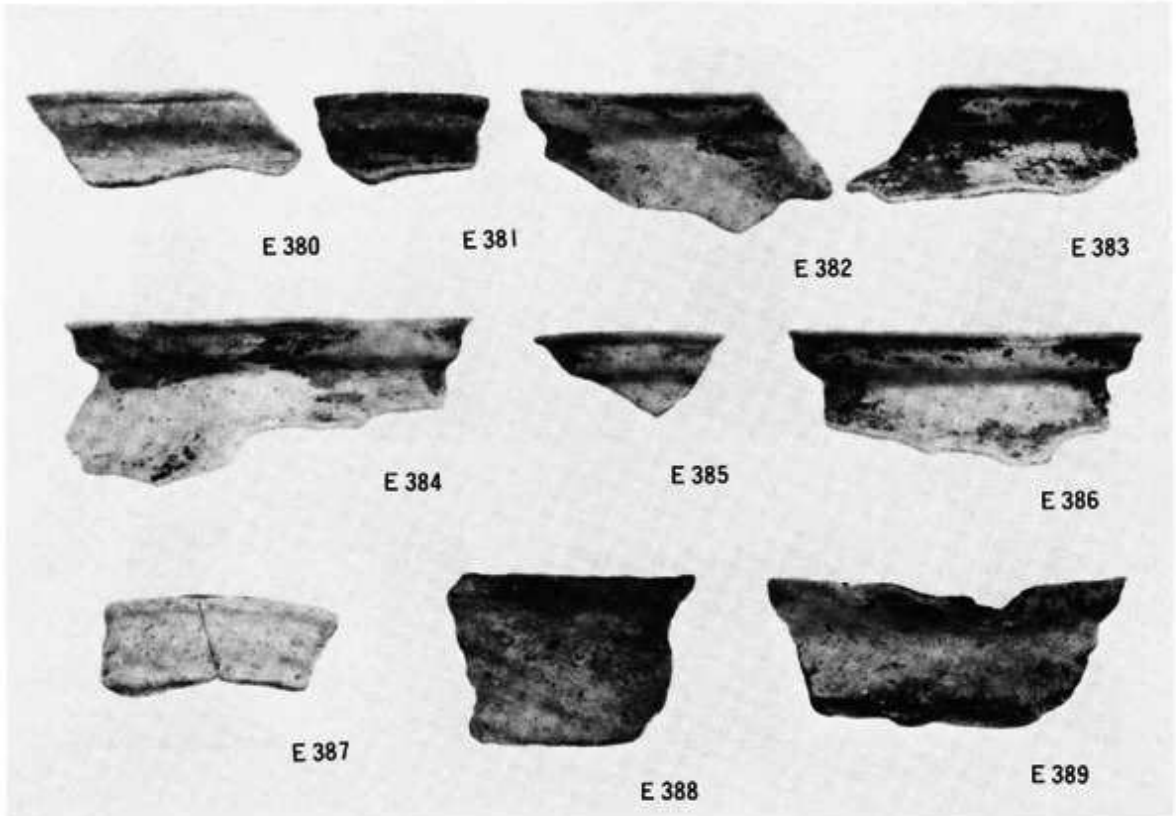


2. E353～E364(T－16 SD34)

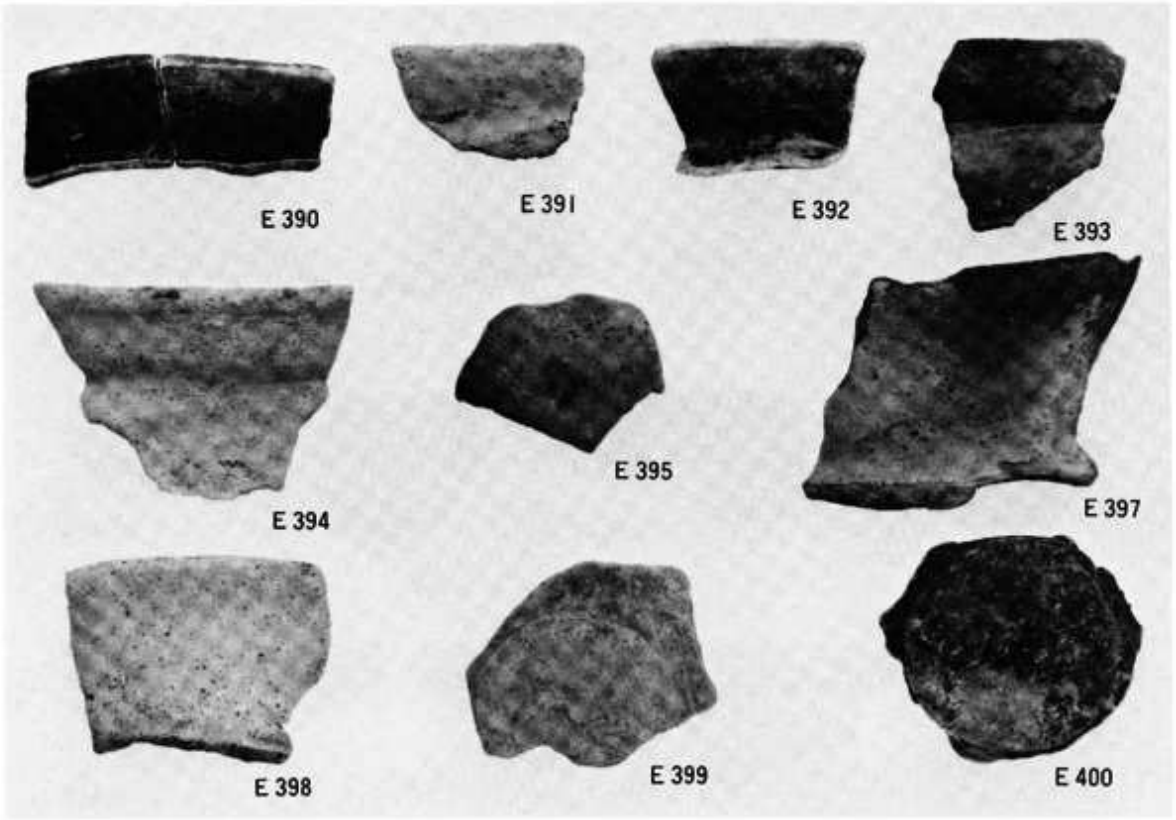
PL. 48



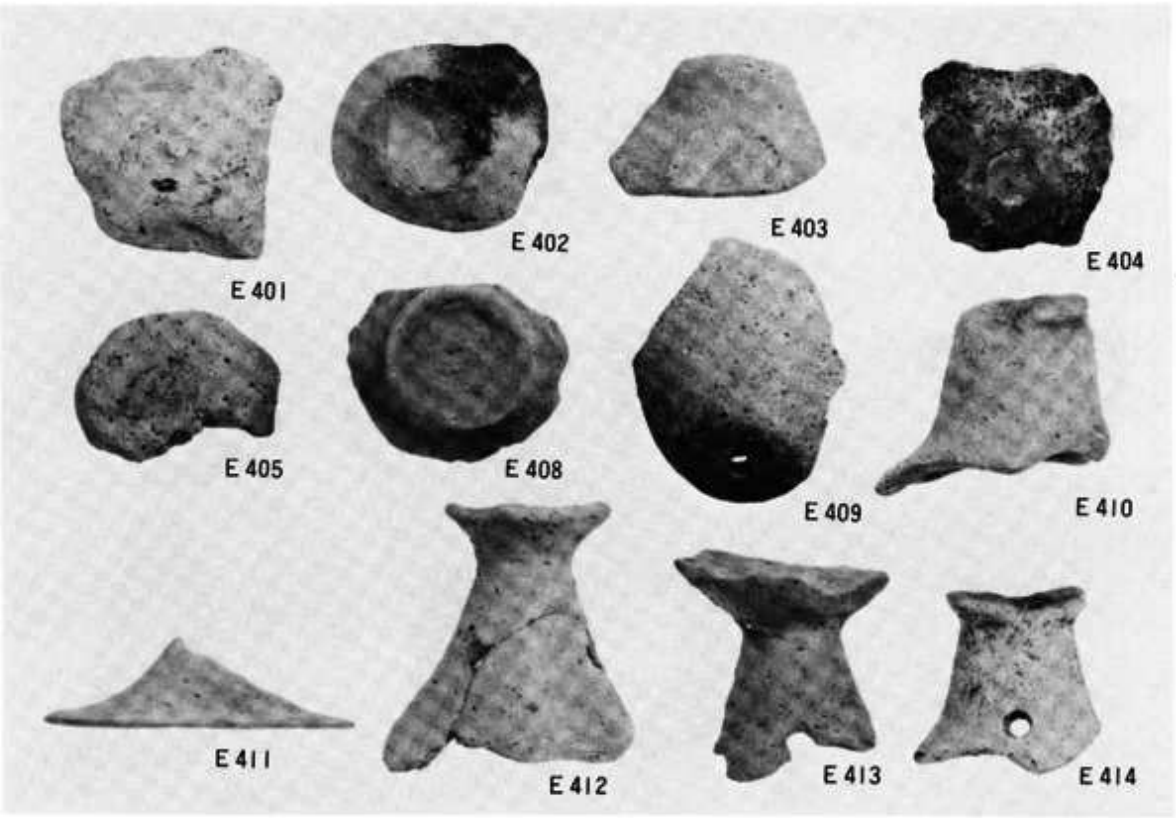
1. C365(T－16 SD34), E366～E369(T－17 SX 2), E370·E371(T－17 SD35)
E372(T－17 SD37), E373～E379(T－17 SD38)



2. E380·E389(T－17 SD38)

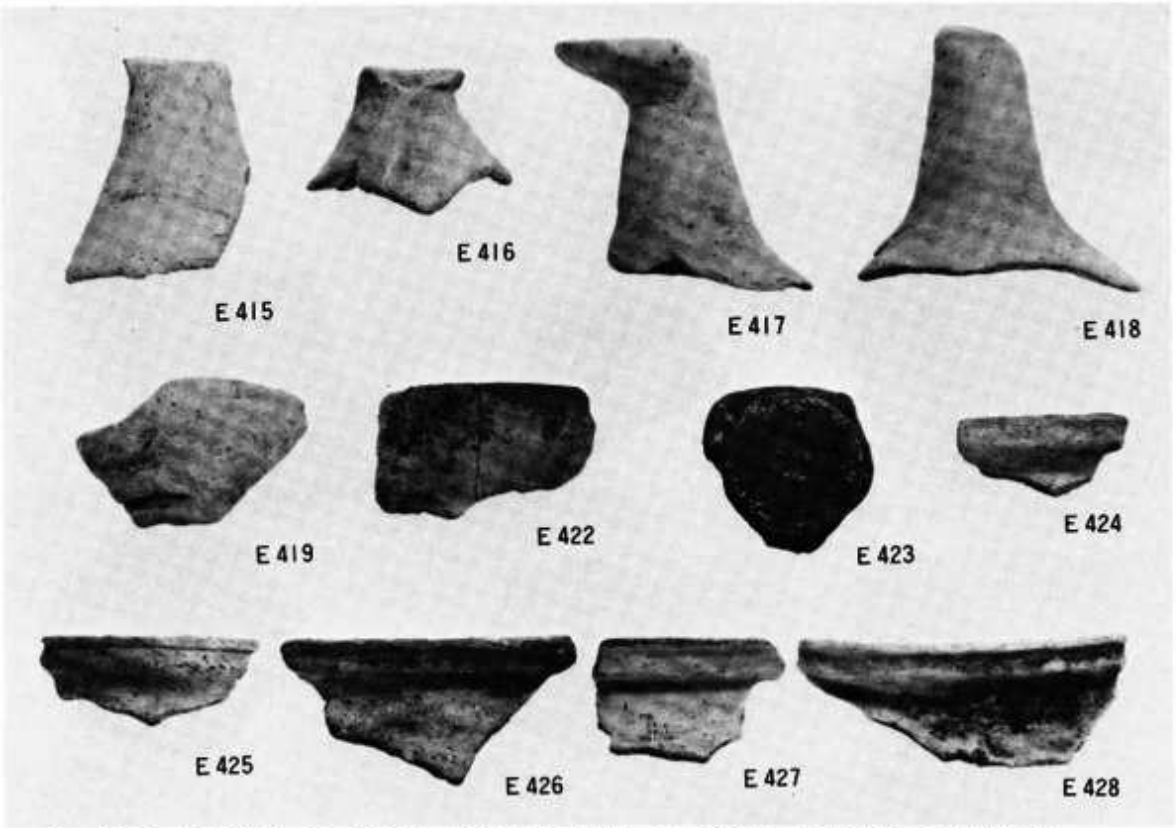


1. E390～E400(T－17　S D38)

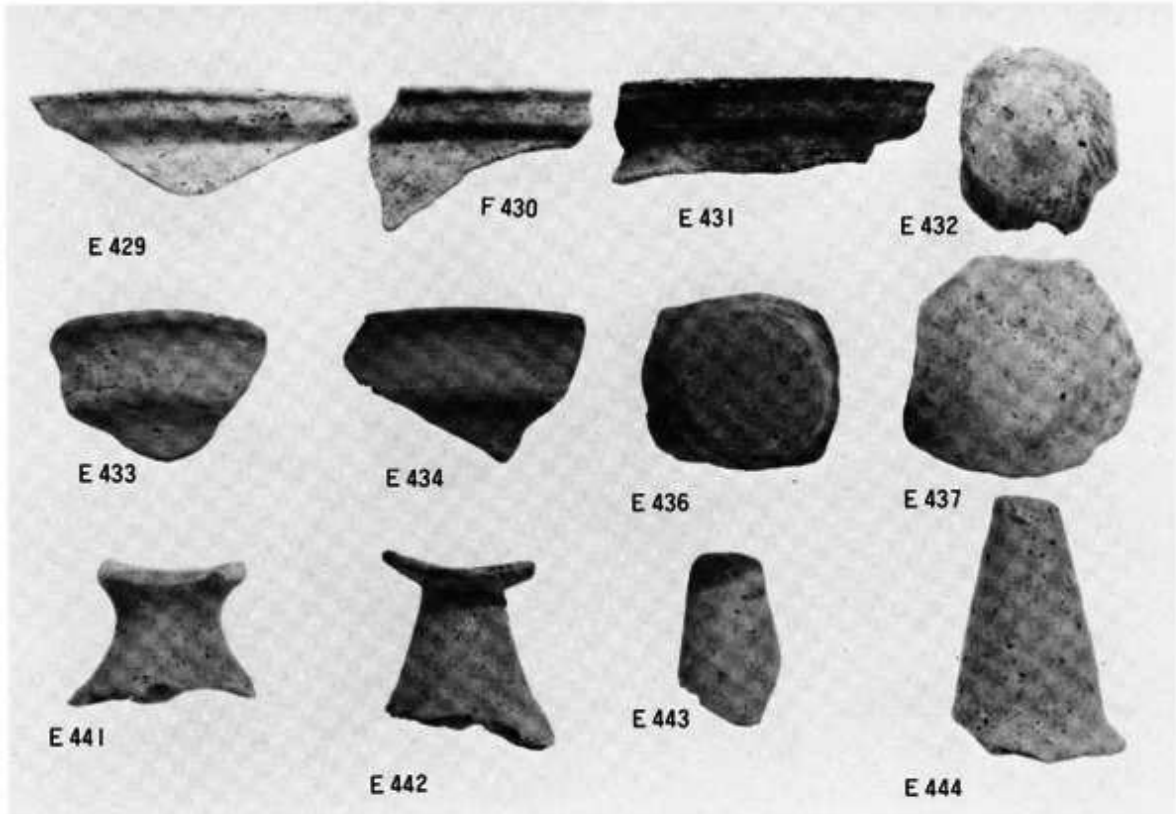


2. E401～E414(T－17　SD38)

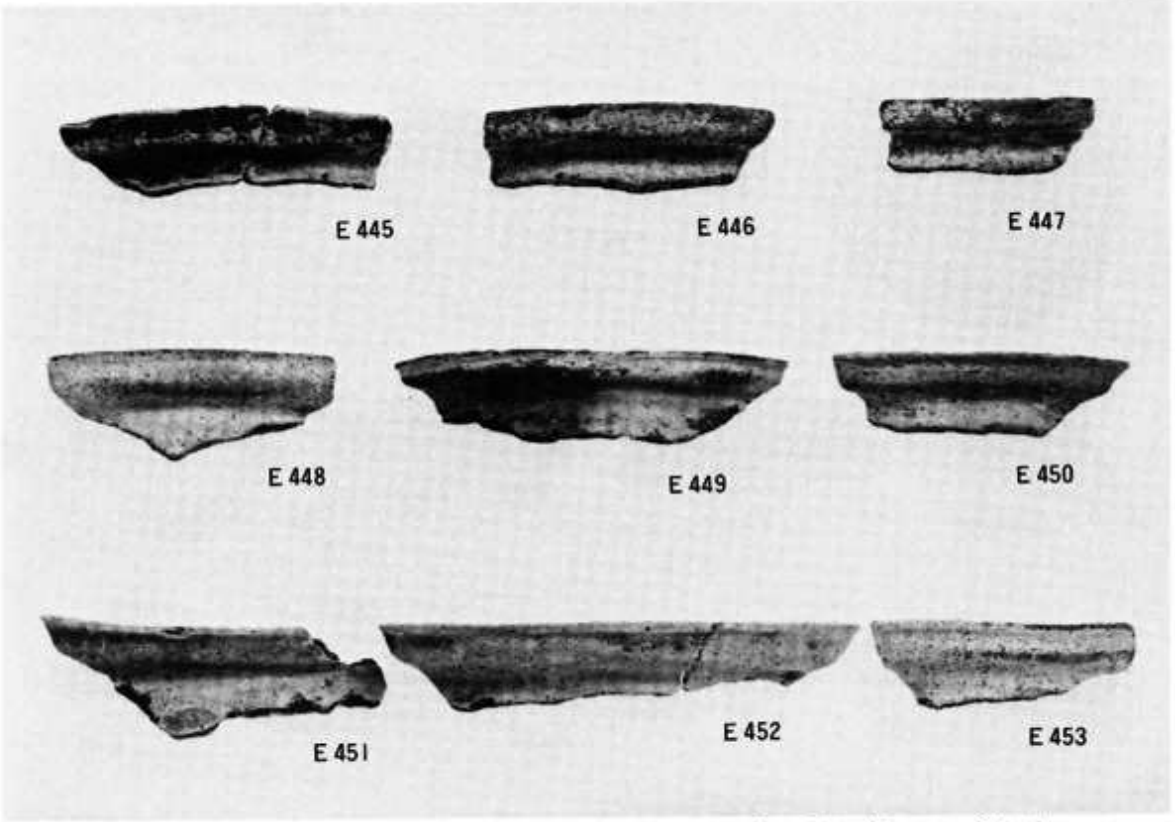
PL. 50



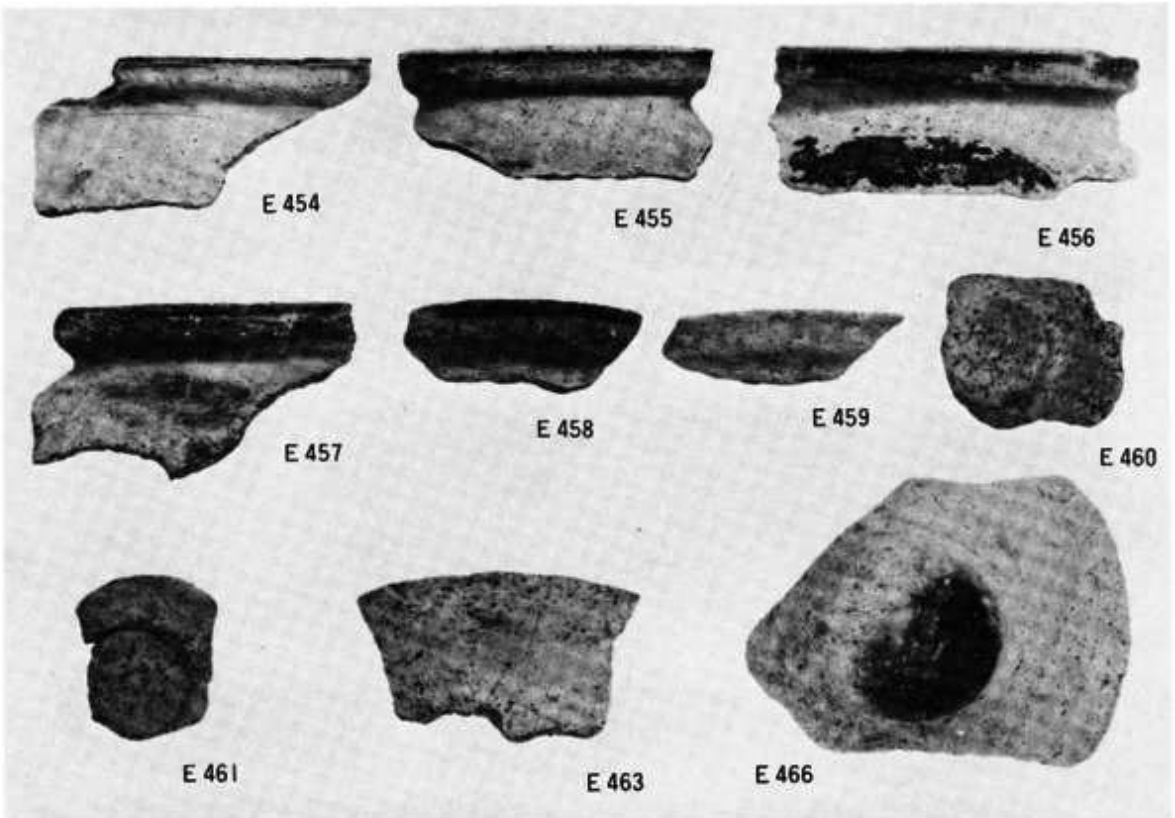
1. E415～E419(T－17 SD38), E422·E423(T－17 SD39), E424(T－17 SH2)
E425(T－18 SD40), E426～E428(T－18 SD41)



2. E429～E444(T－18 SD41)

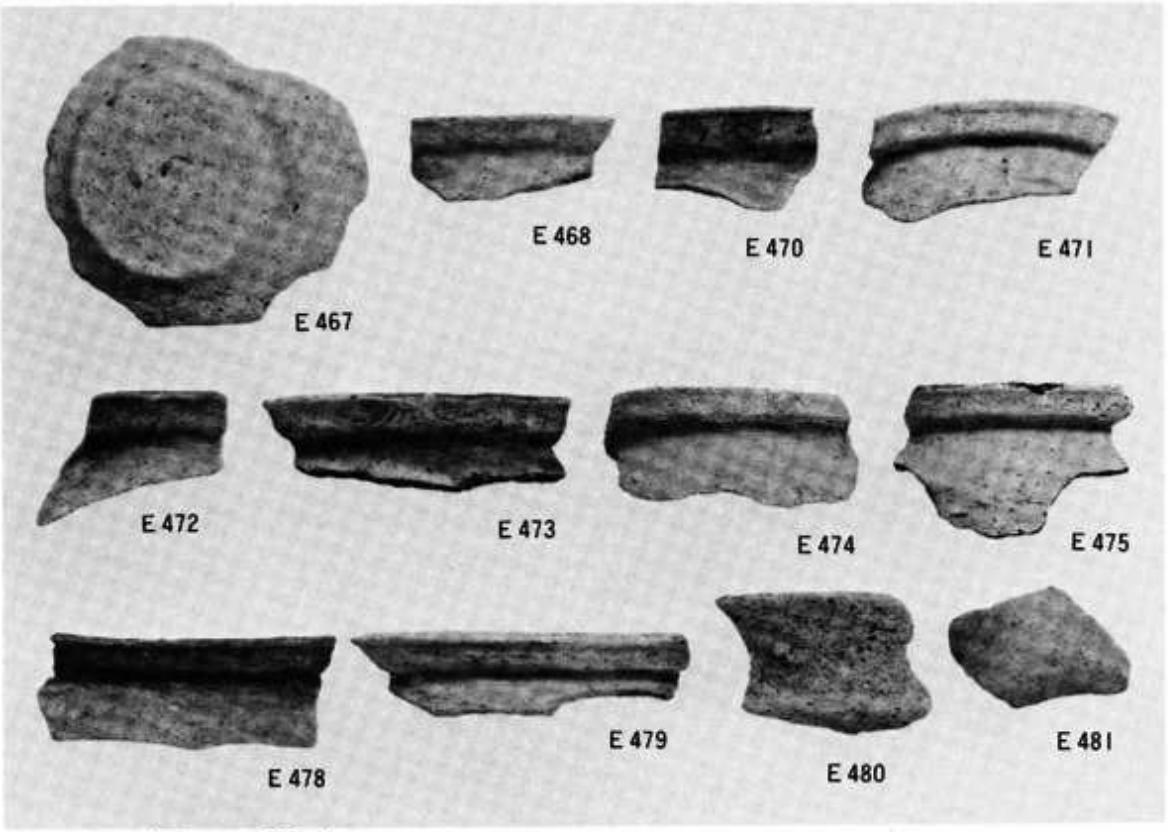


1. E445(T－18 SK16)
E446～E453(T－18 SK17)

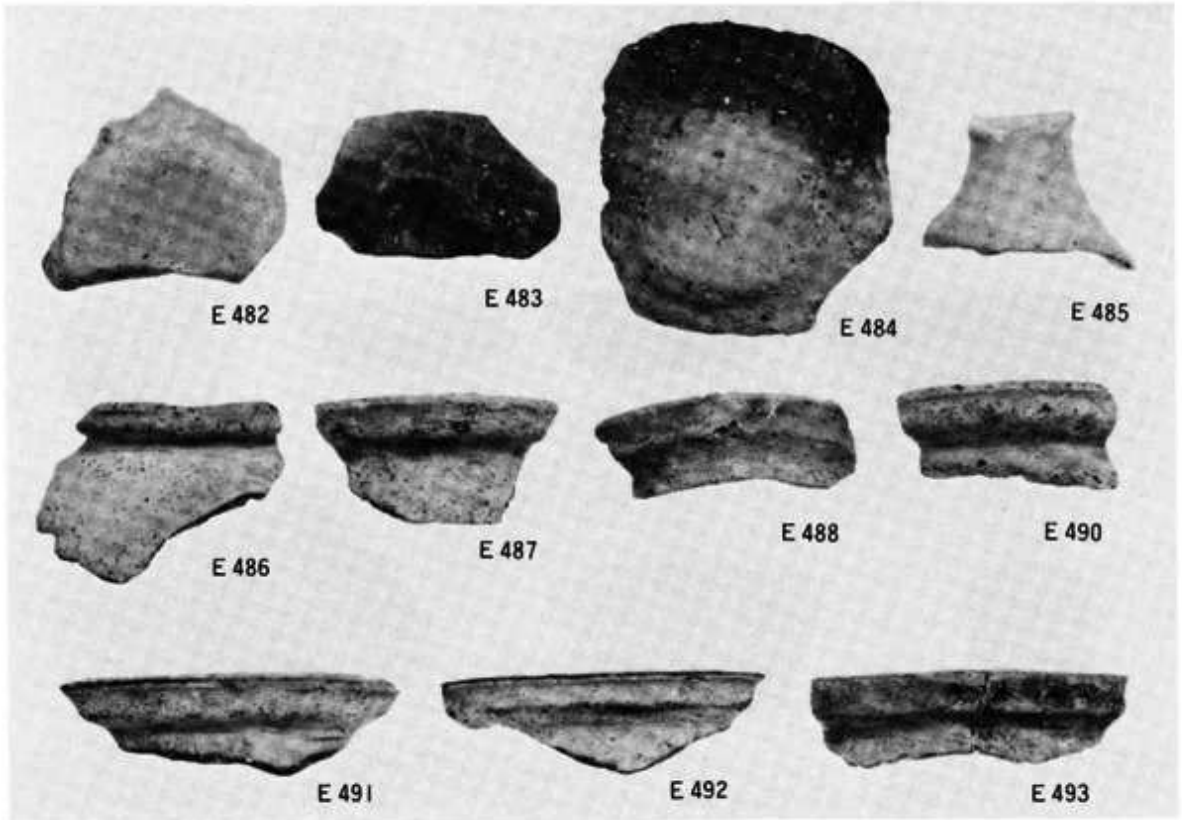


2. E454～E466(T－18 SK17)

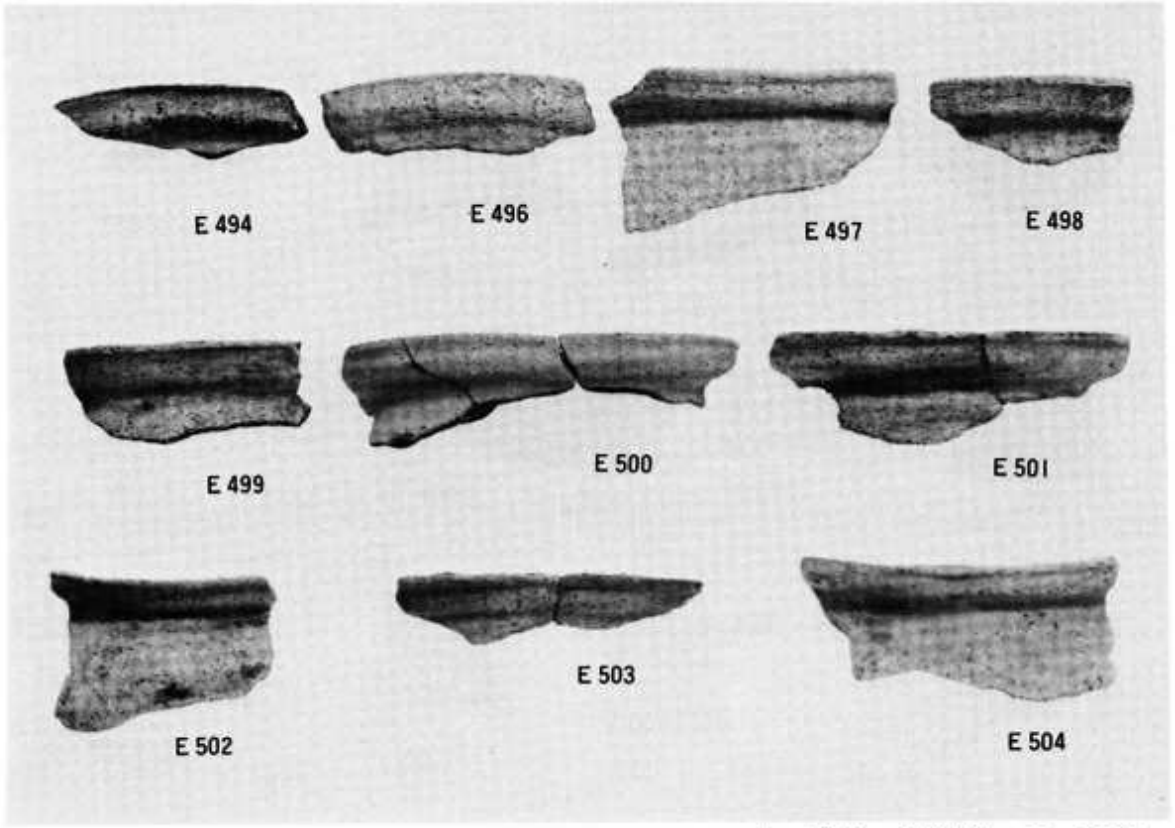
PL. 52



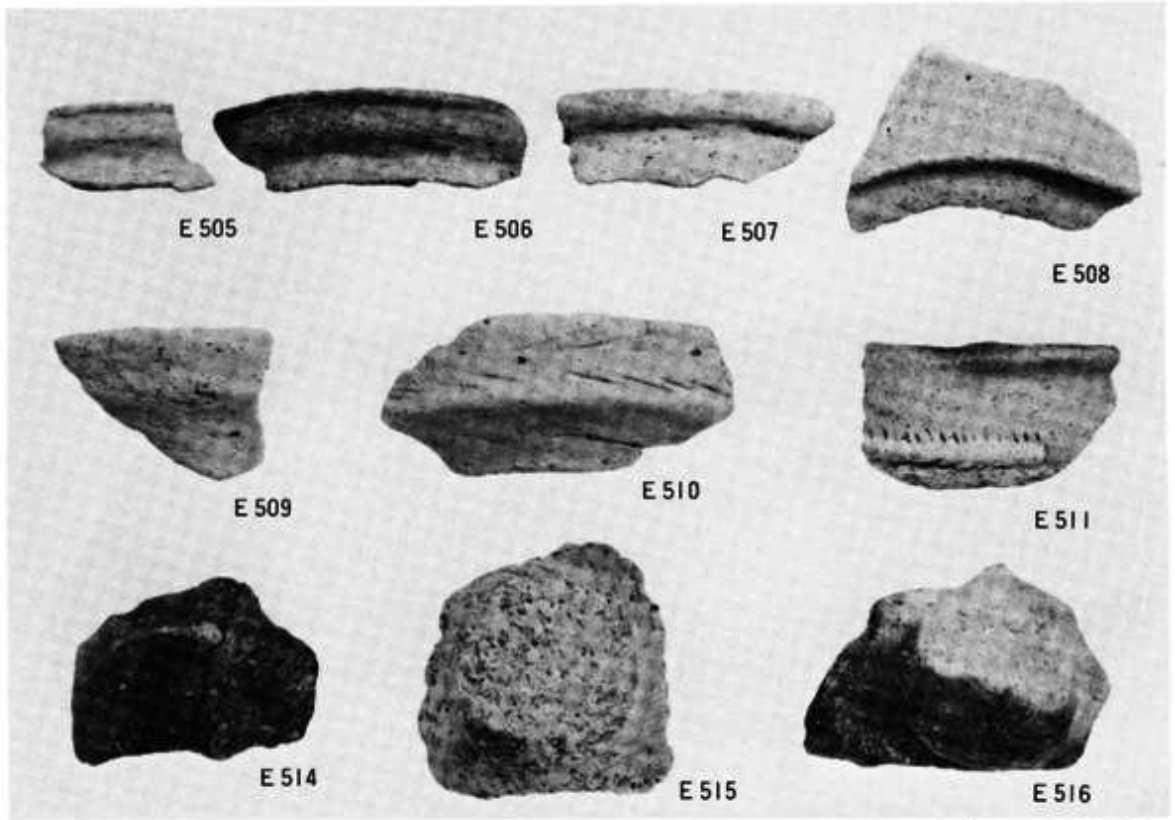
1. E467(T－18 SK17)
E468～E481(T－19 SD42)



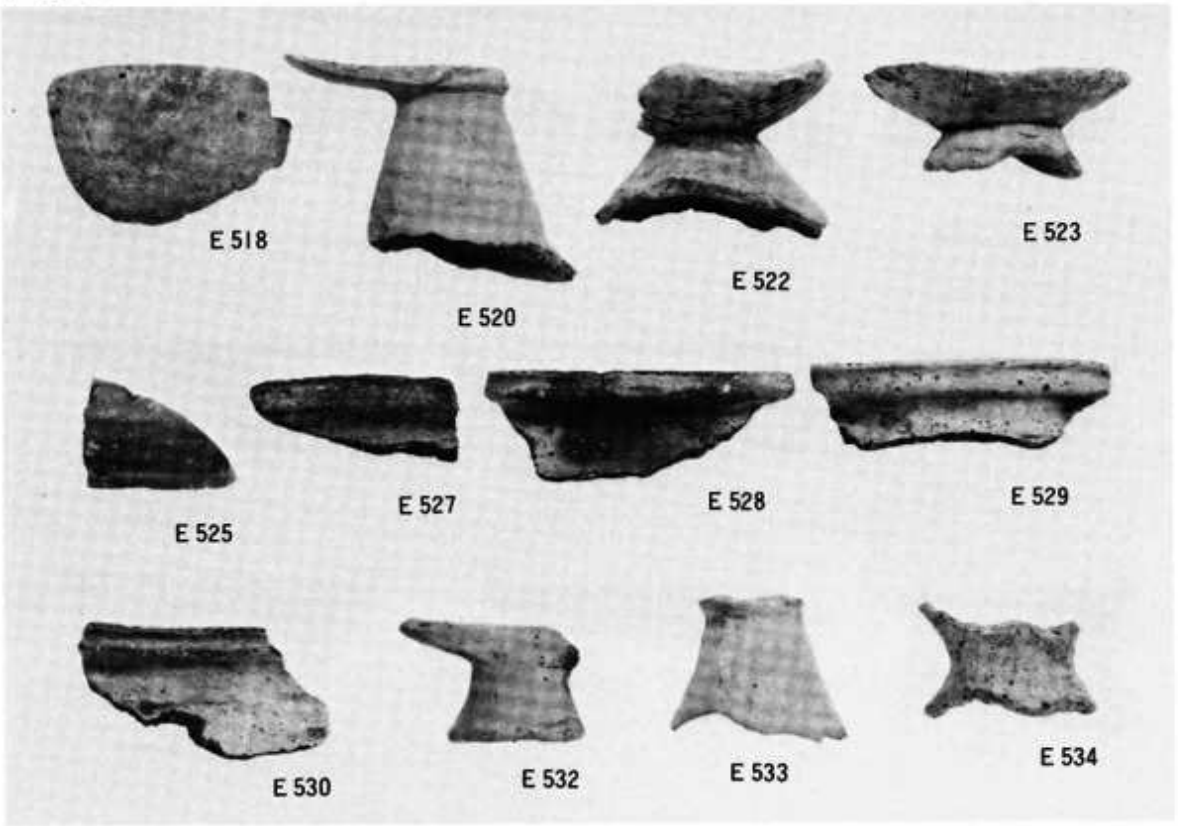
2. E482～E485(T－19 SD42)
E486～E493(T－20 SD51)



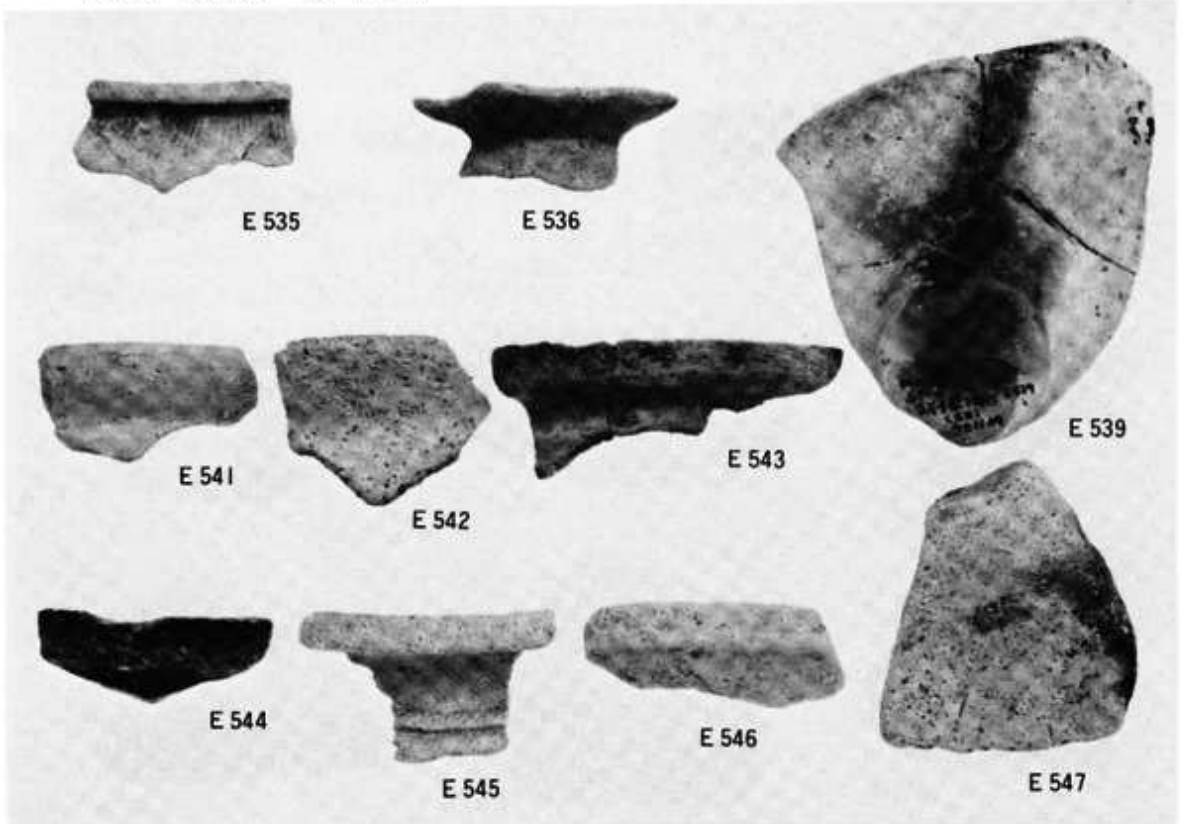
1. E494～E504(T－20 SD51)



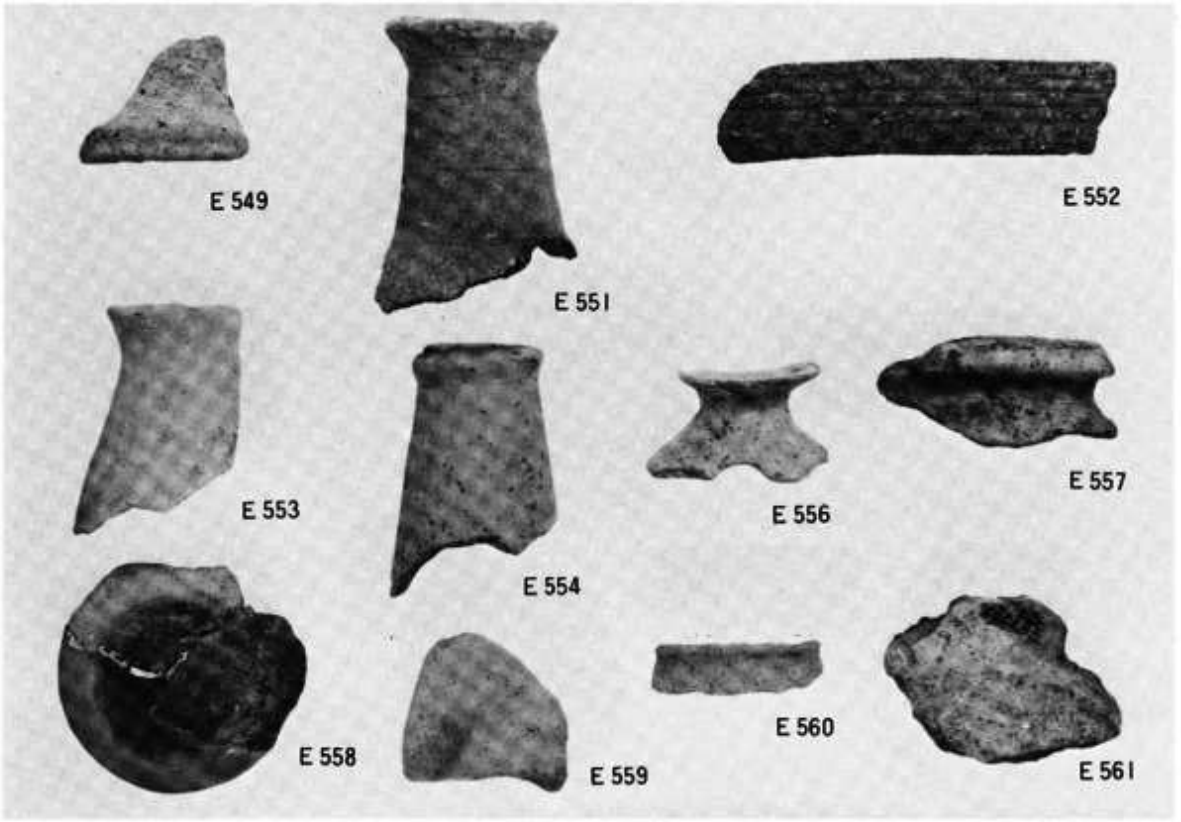
2. E505～E516(T－20 SD51)



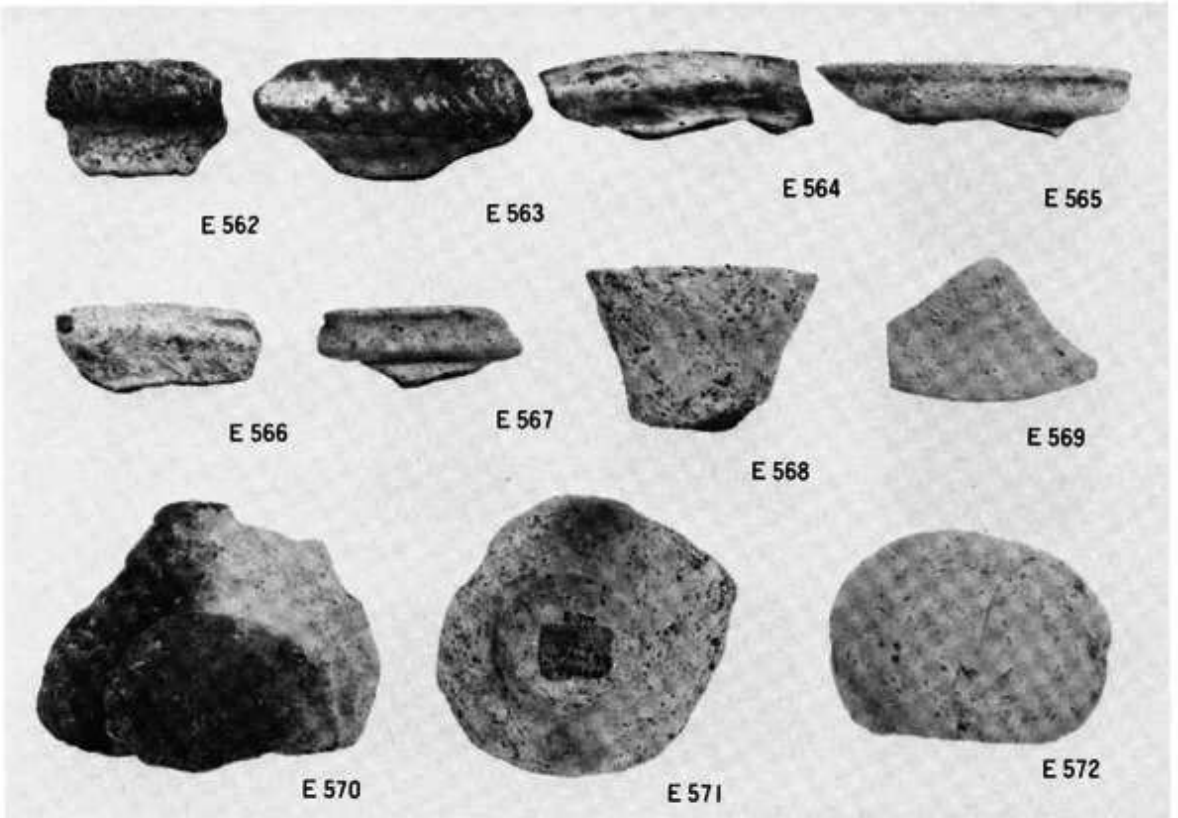
1. E518～E525(T－20　SD51)
E526～E534(T－20　SK19)



2. E535・E536(T－20　SK19)、E537～E541(T－20　SX5)
E542(T－20　ピット内)、E543～E547(T－20　SD51)

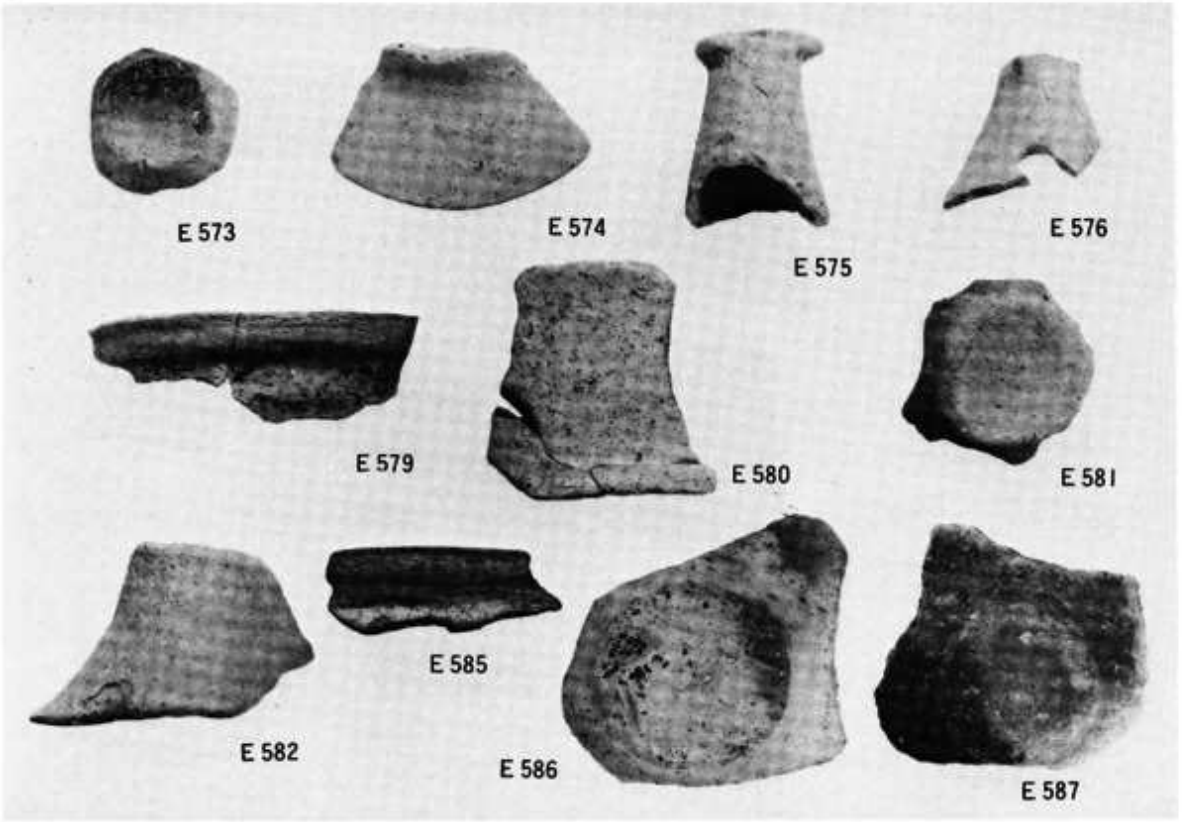


1．E549～E556(T－20　SD51)，E557～E560(T－24包含層)
E561(T－24　ピット内)

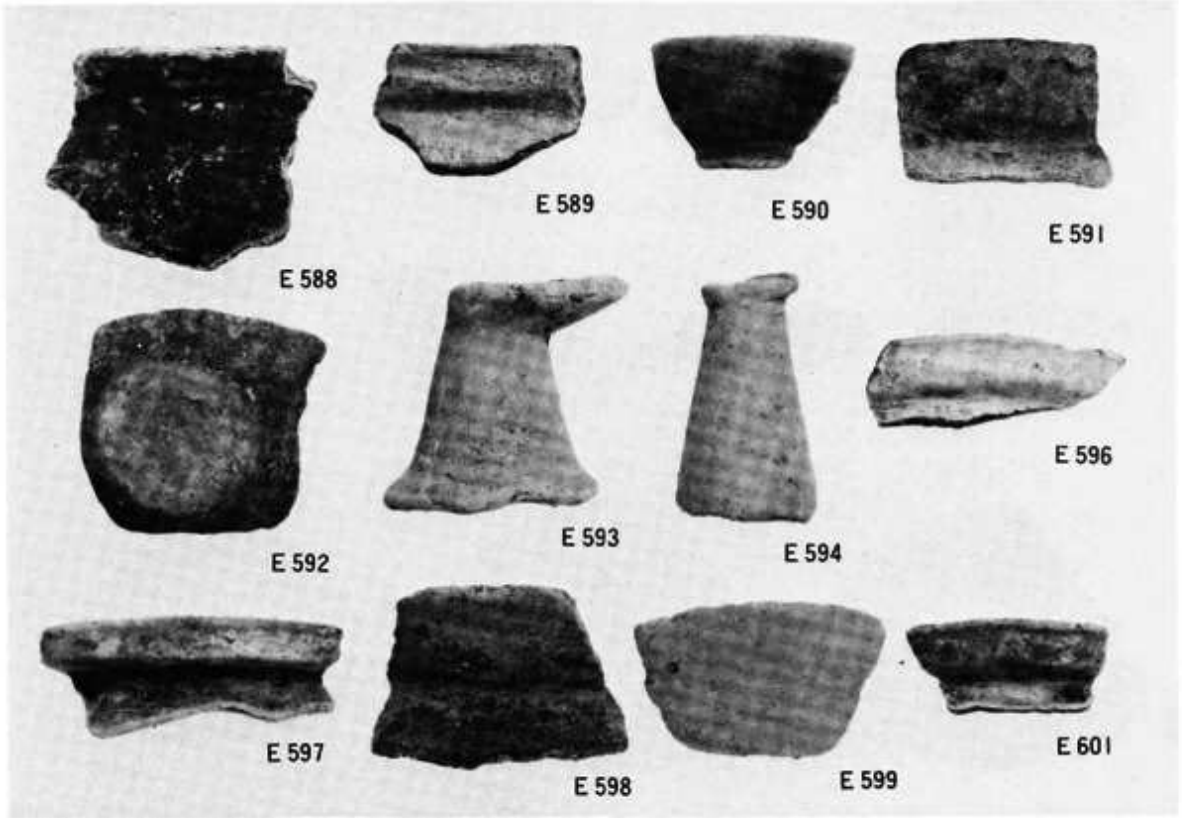


2．E562～E572(T－25　SD63)

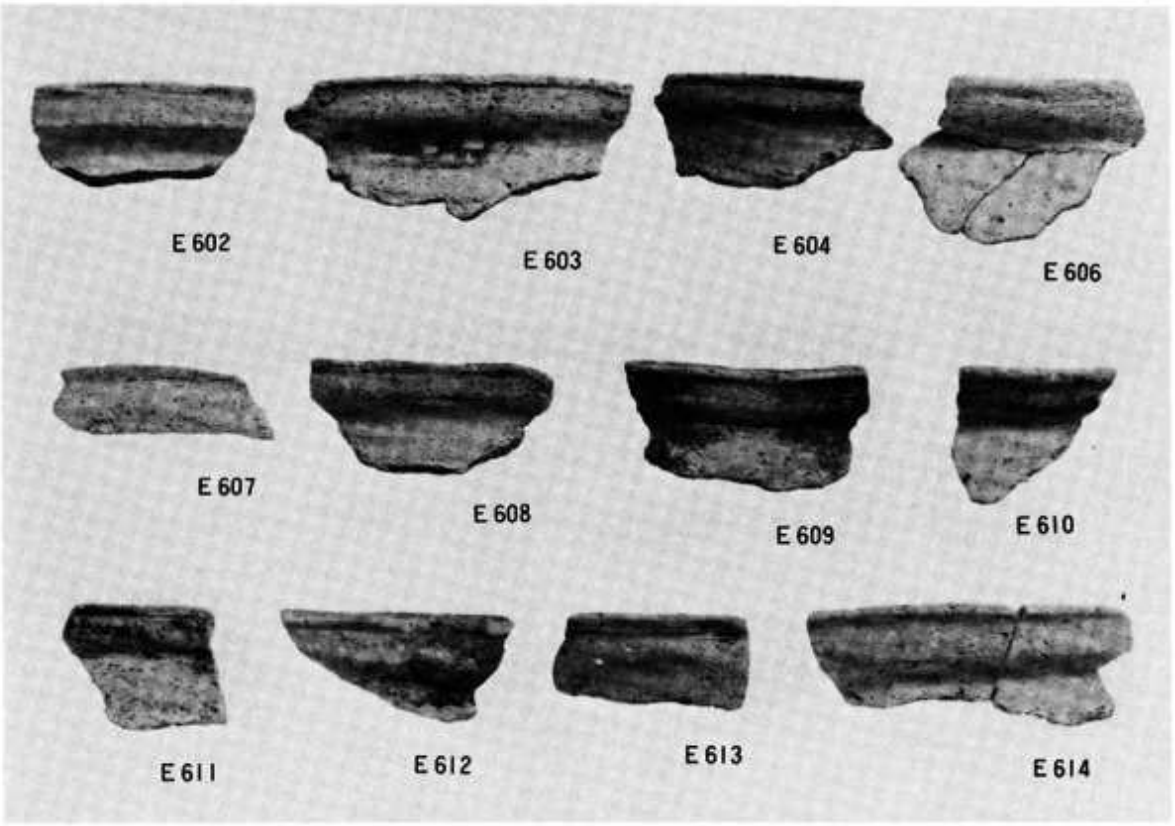
PL. 56



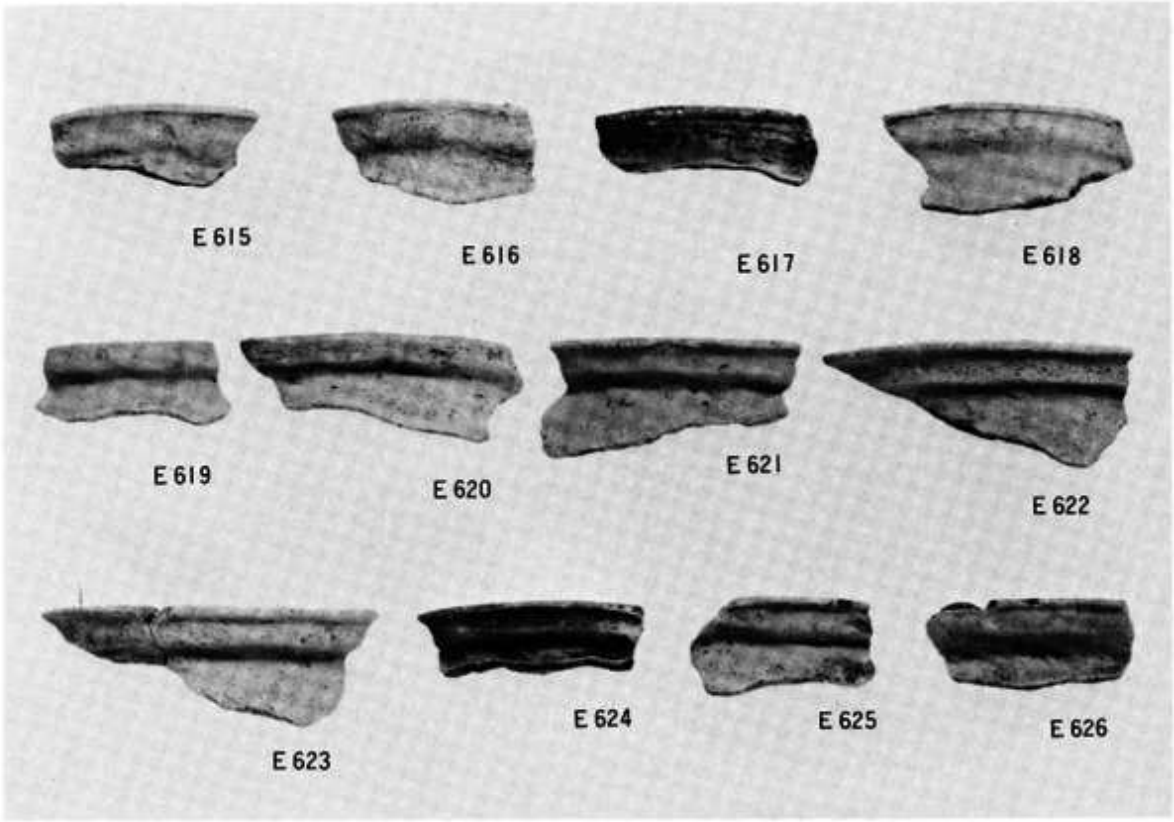
1. E573～E578(T－25　SD63), E579～C583(T－26　SD66)
E584(T－27　SD67), E585～E587(T－27　SK26)



2. E588～C595(T－28　包含層), E596～E599(T－28　SD69)
E601(T－28　SD70)

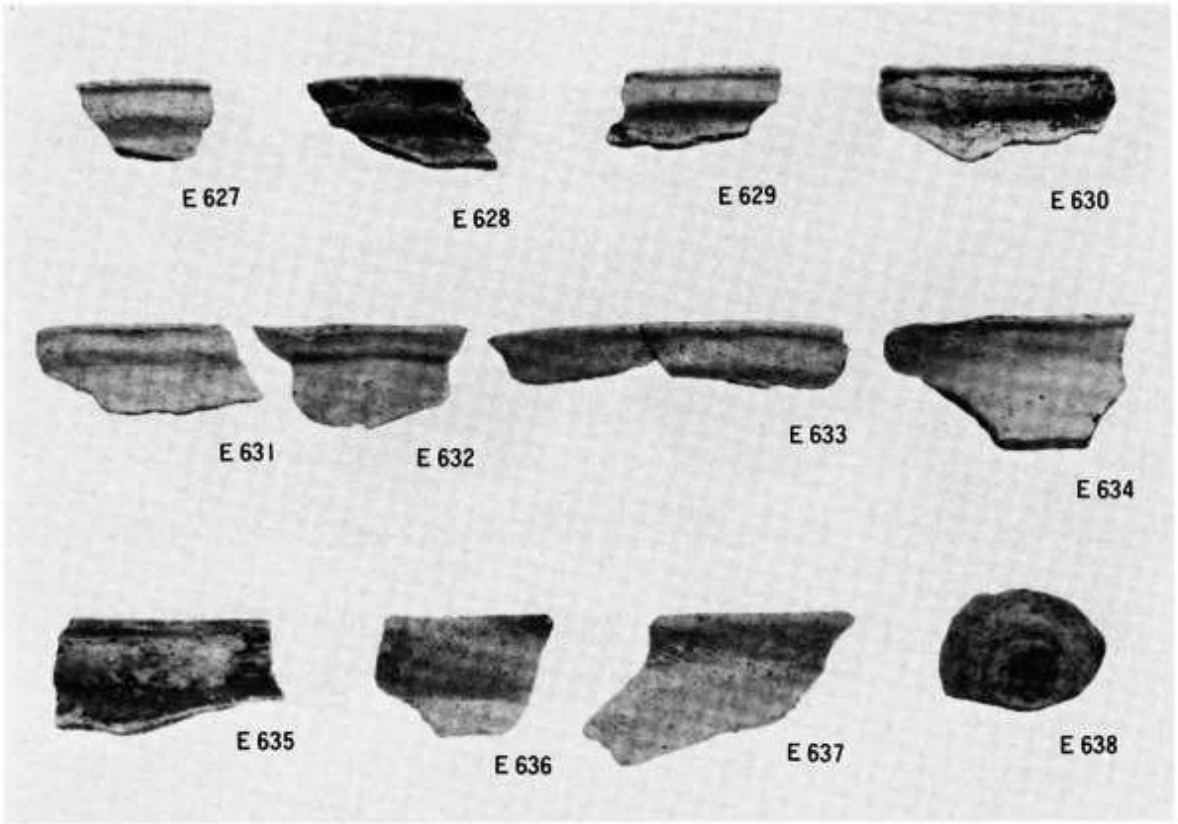


1. E602～E614(T－28 SD70)

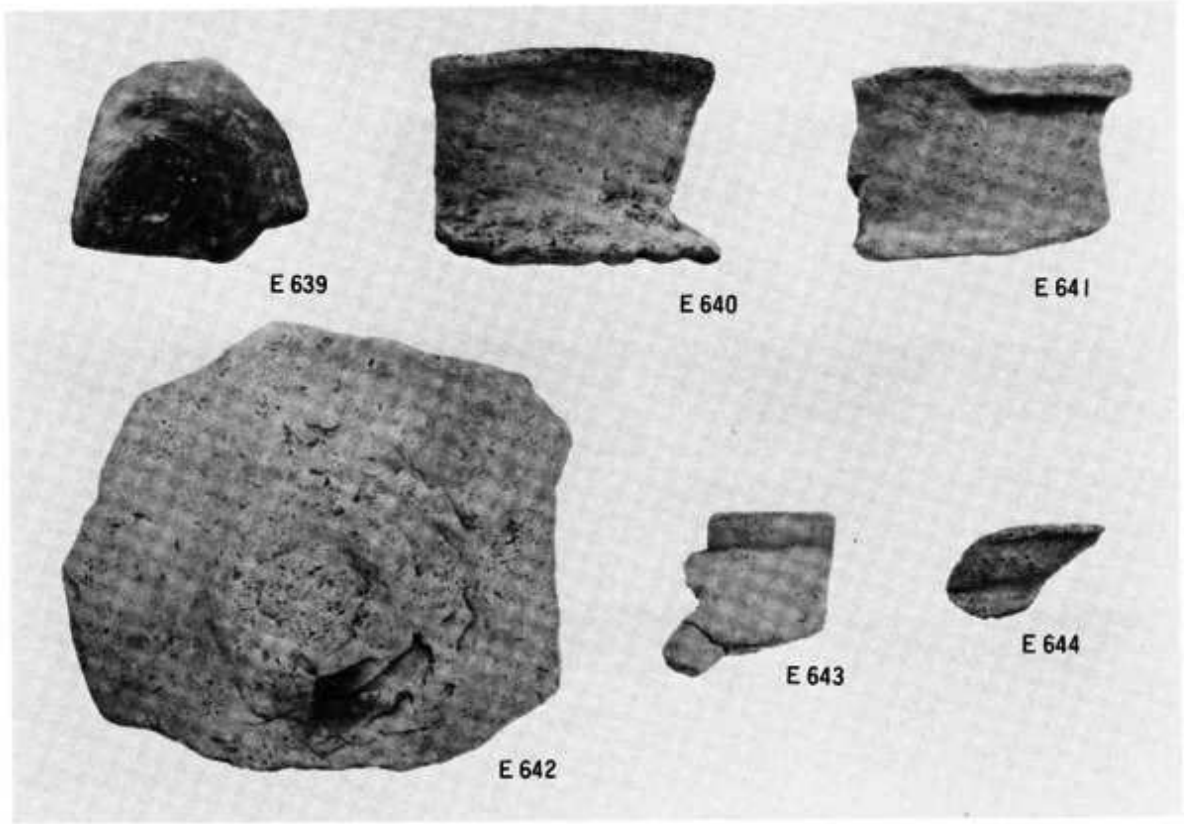


2. E615～E626(T－25 SD70)

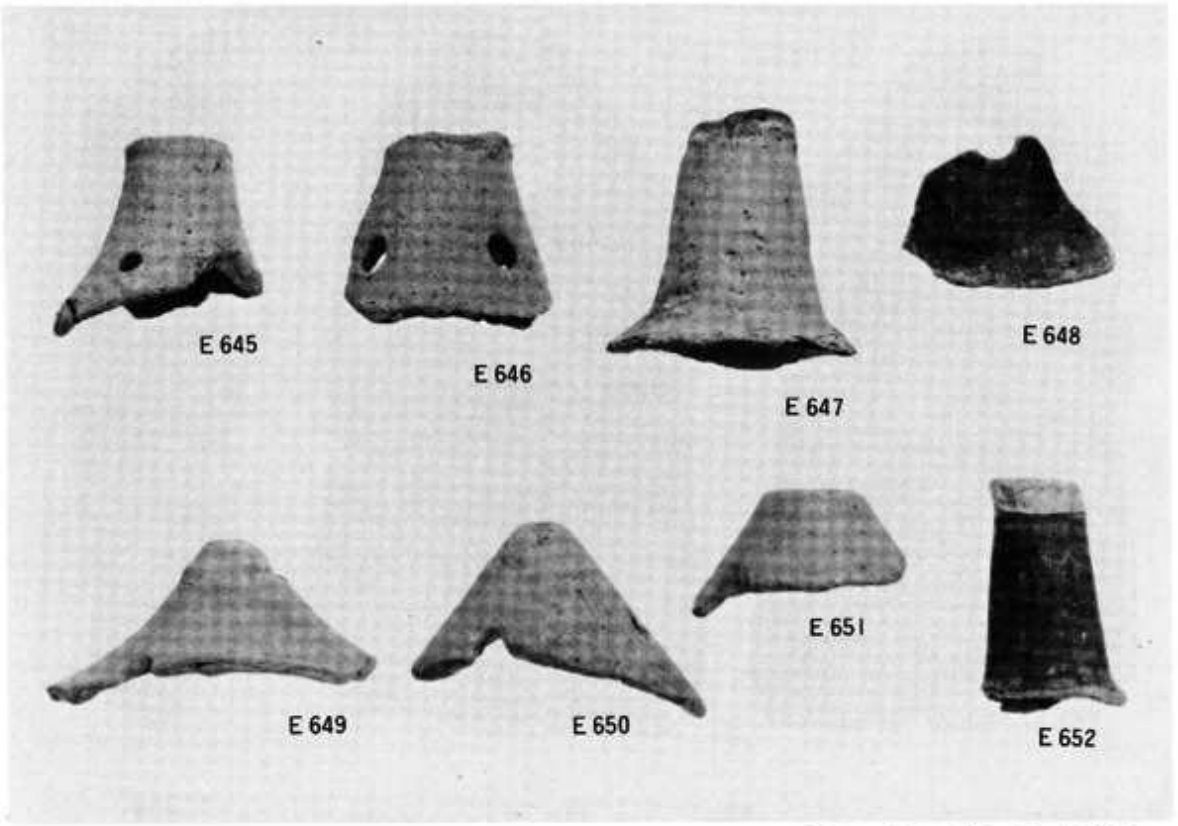
PL. 58



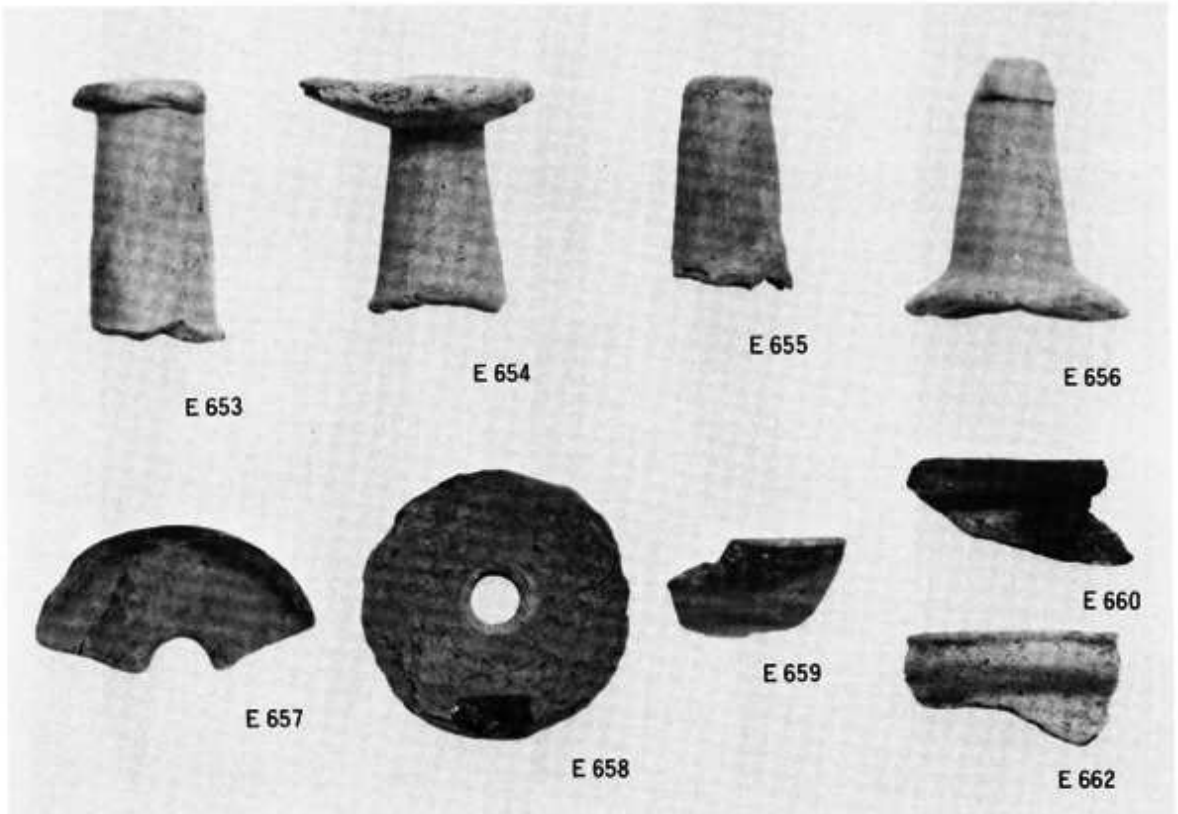
1. E627～E638(T－28　S D70)



2. E639～E644(T－28　SD70)

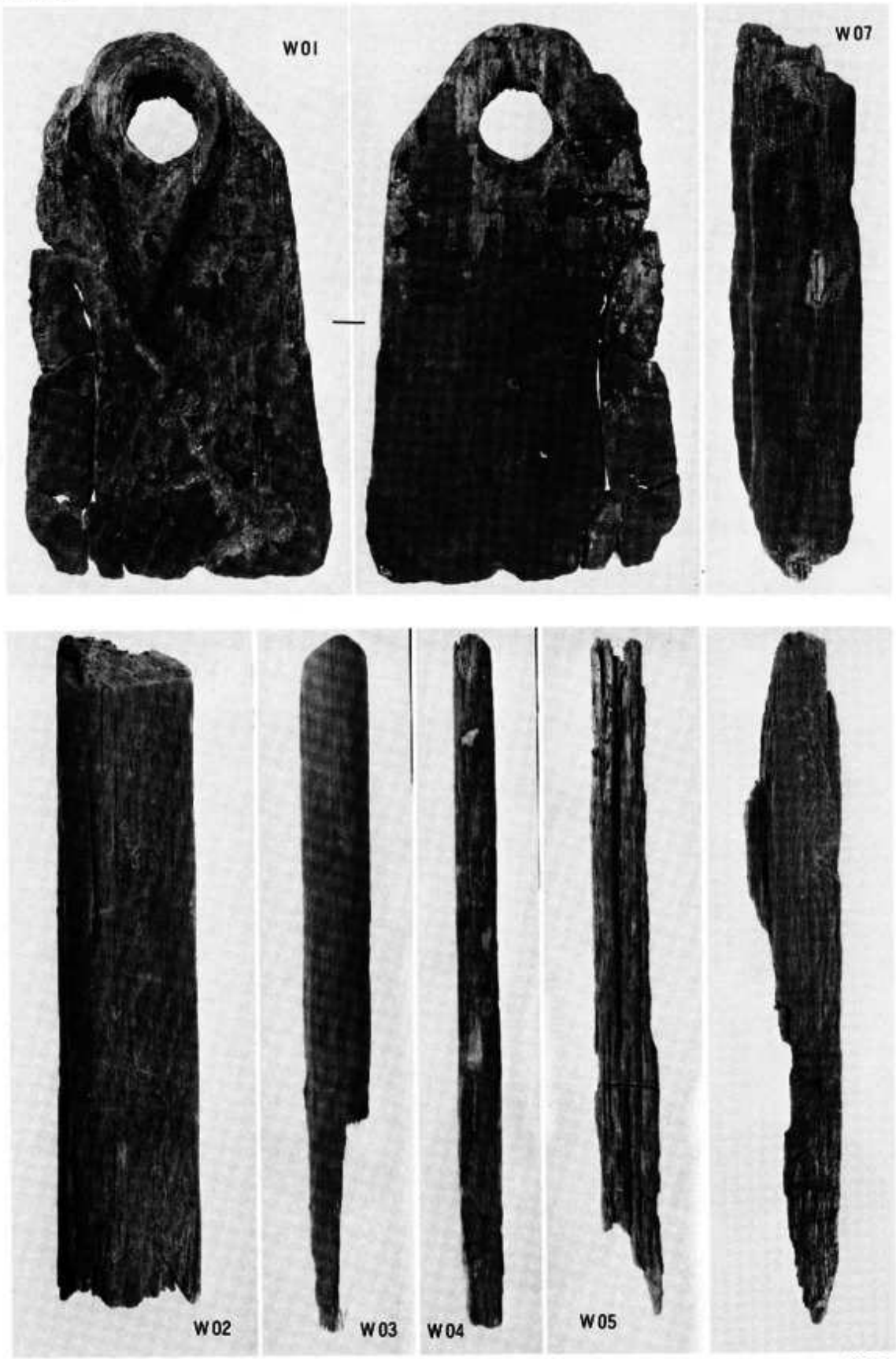


1. E645～E652(T－28　SD70)



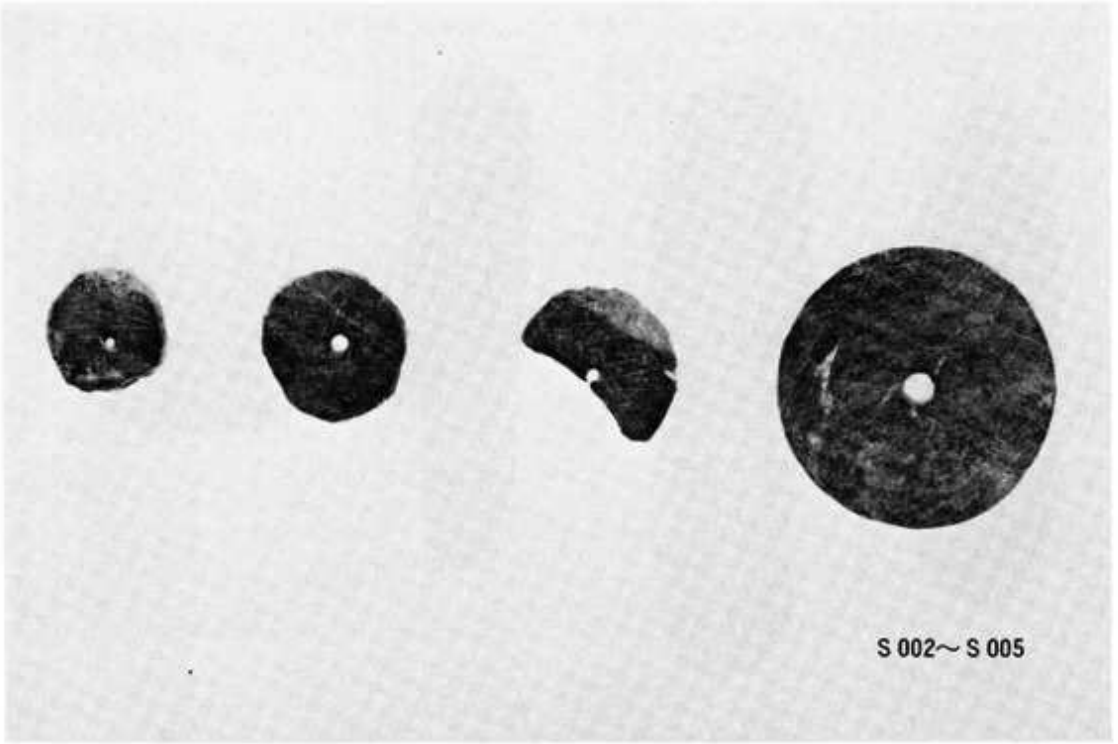
2. E653～E659(T－28　SD70), E660(T－28　SH3)
E661～E662(T－28　ピット内)

PL. 60



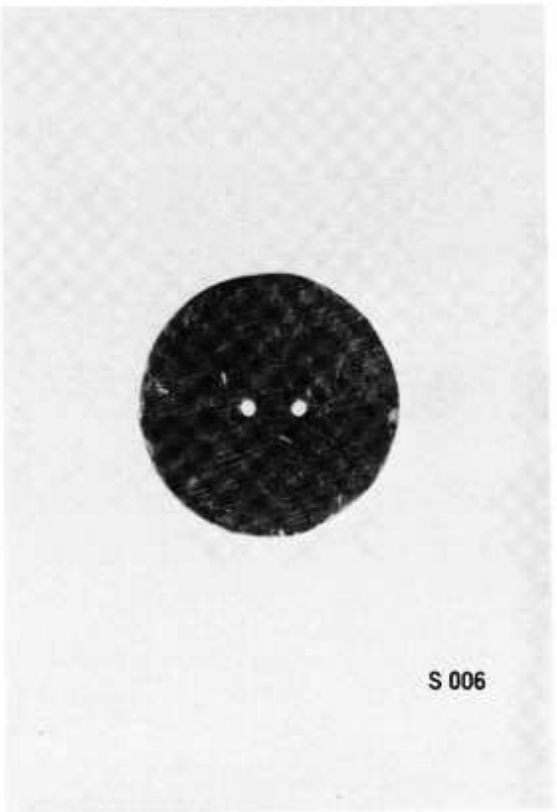
W01～W07

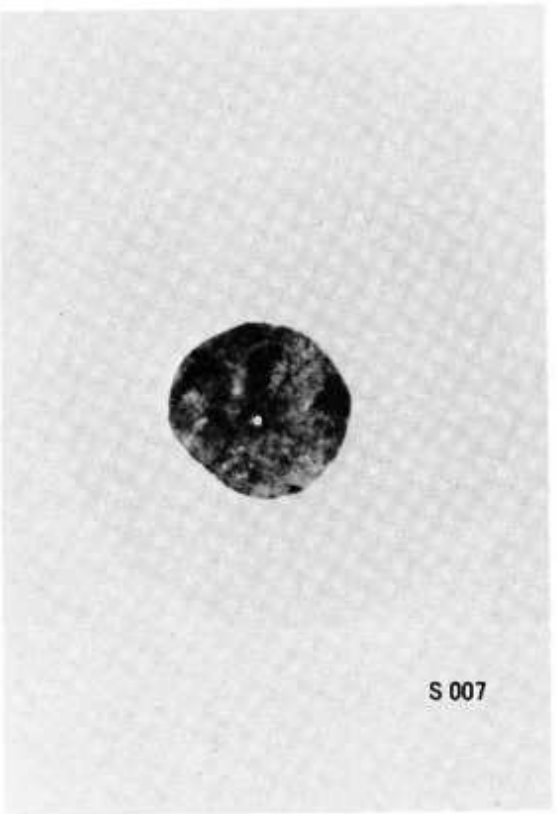
1．模造鏡(S001)



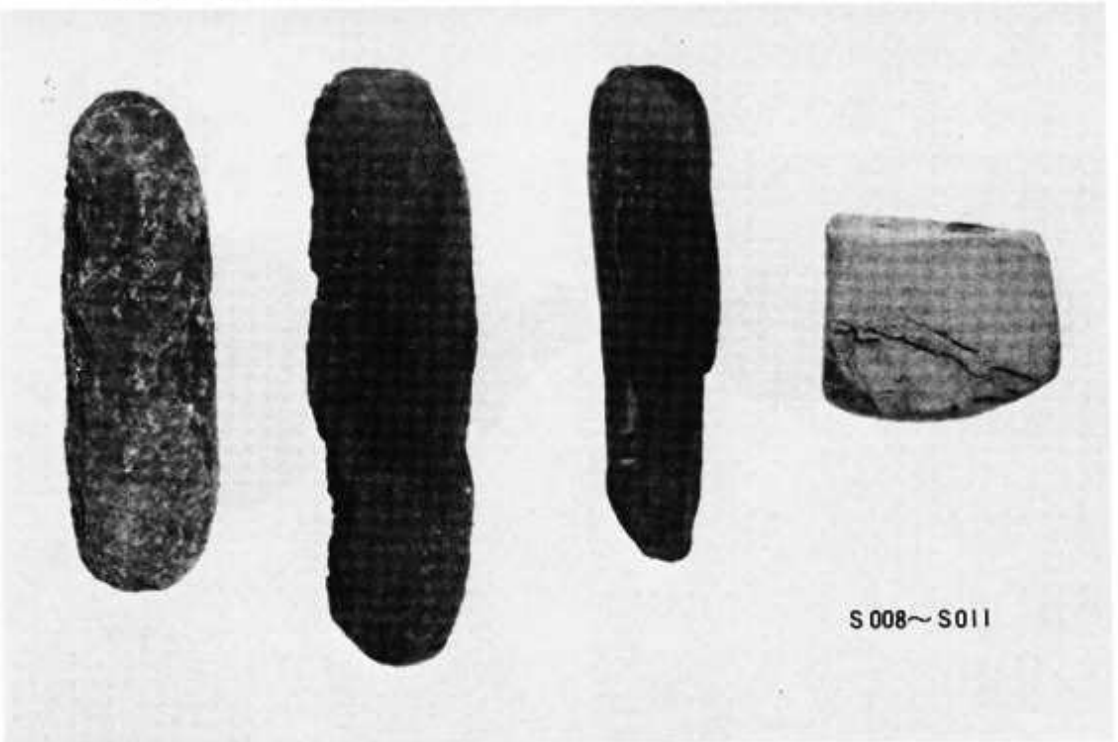
2．S002～S005(T－9　SD19)

PL. 62

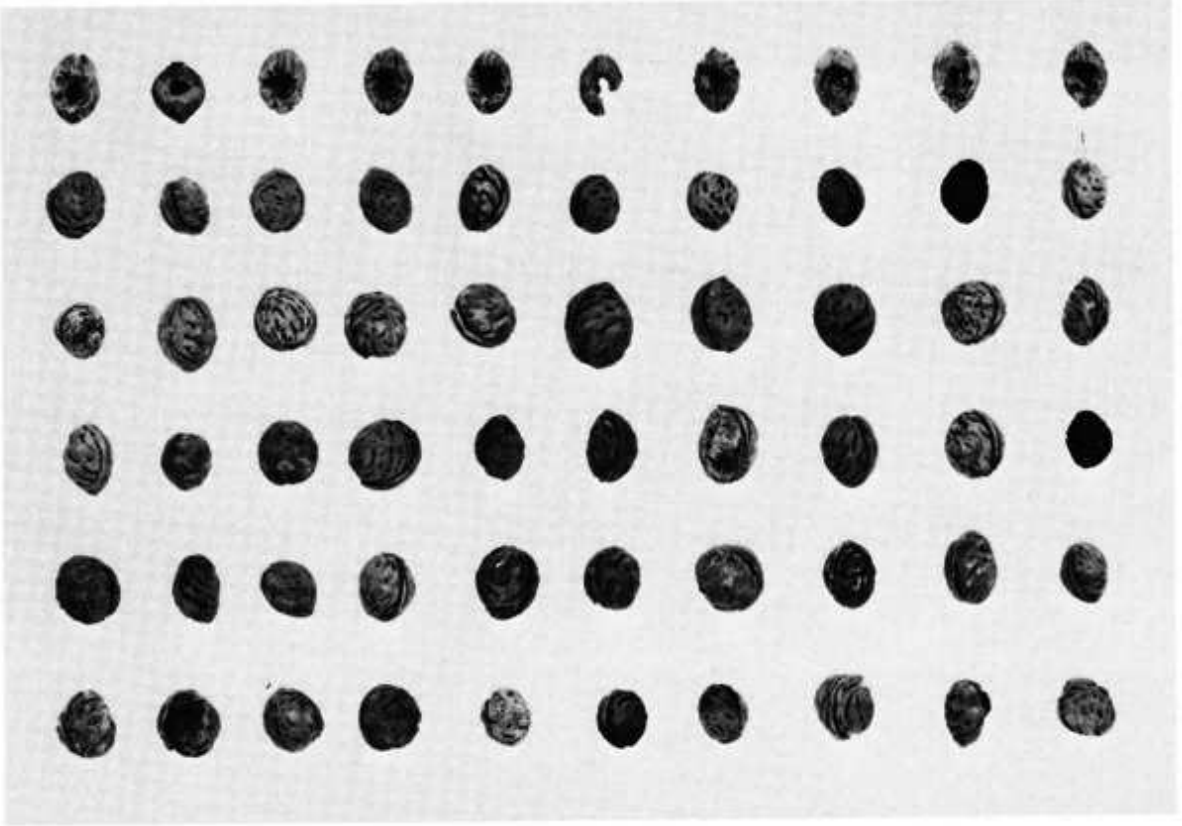




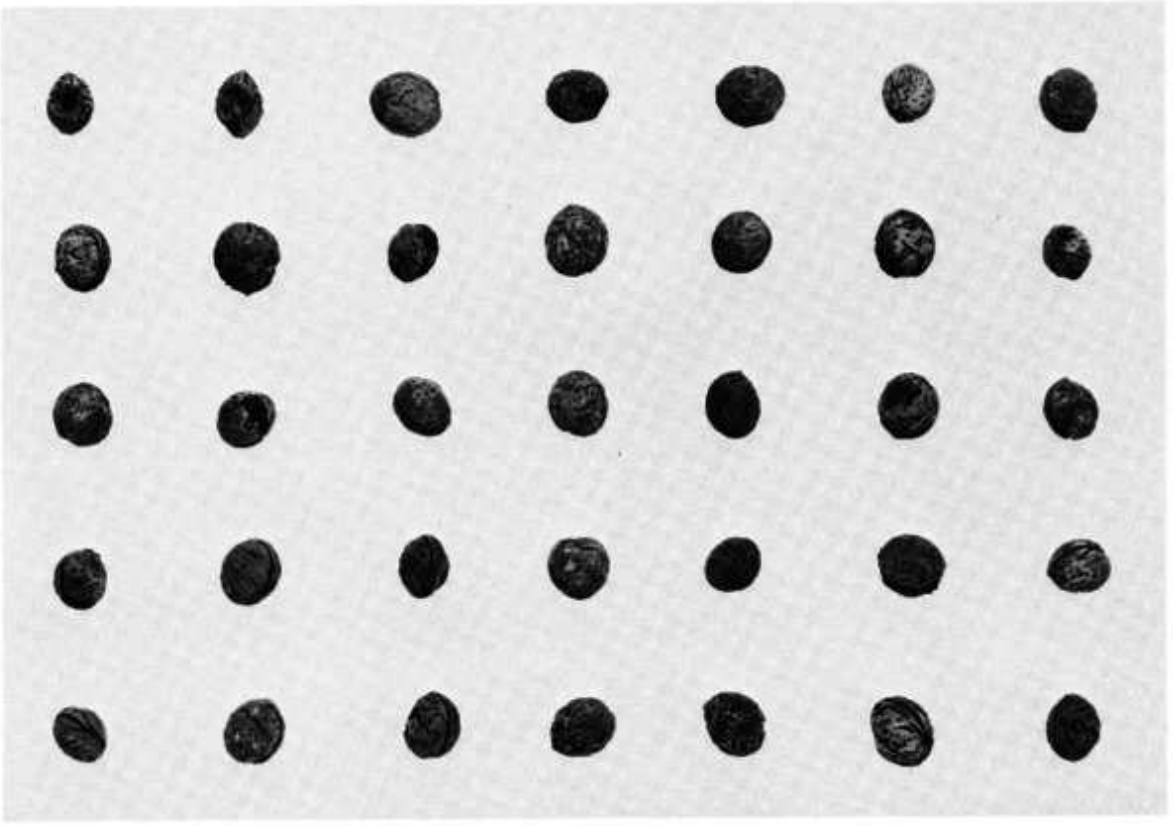
1. S 006(T－10　SD20)
S 007(T－15　SD29)



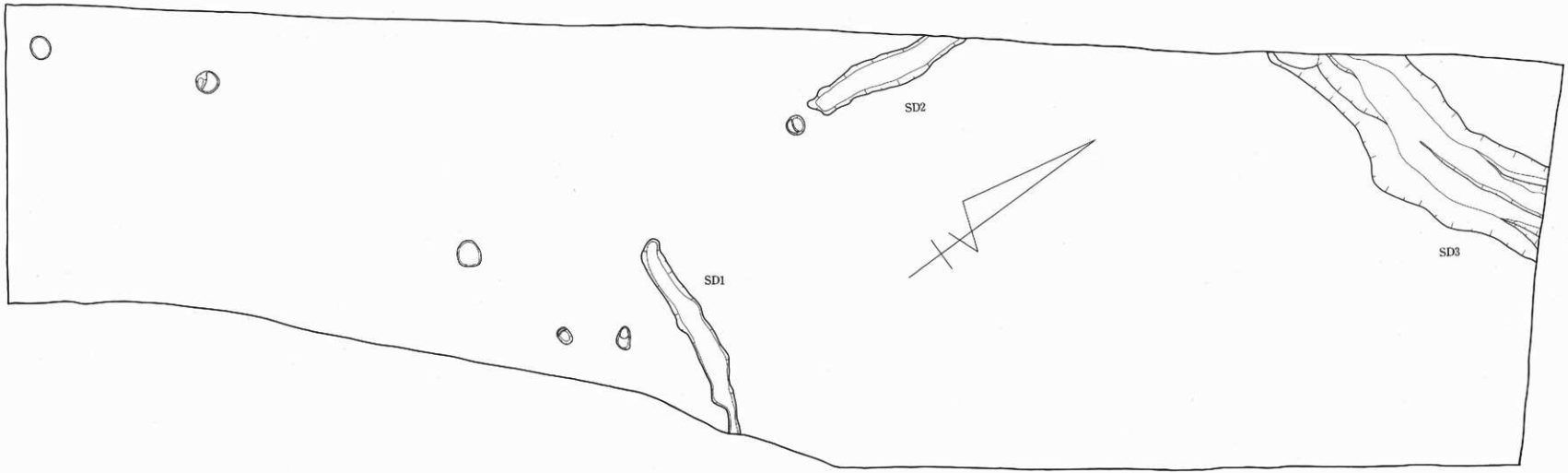
2. 石 製 品(S 009～S 011)



1．自然貴物(T－16　SD34)

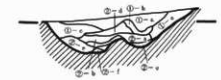


2．自然遺物(T－15　SD29)



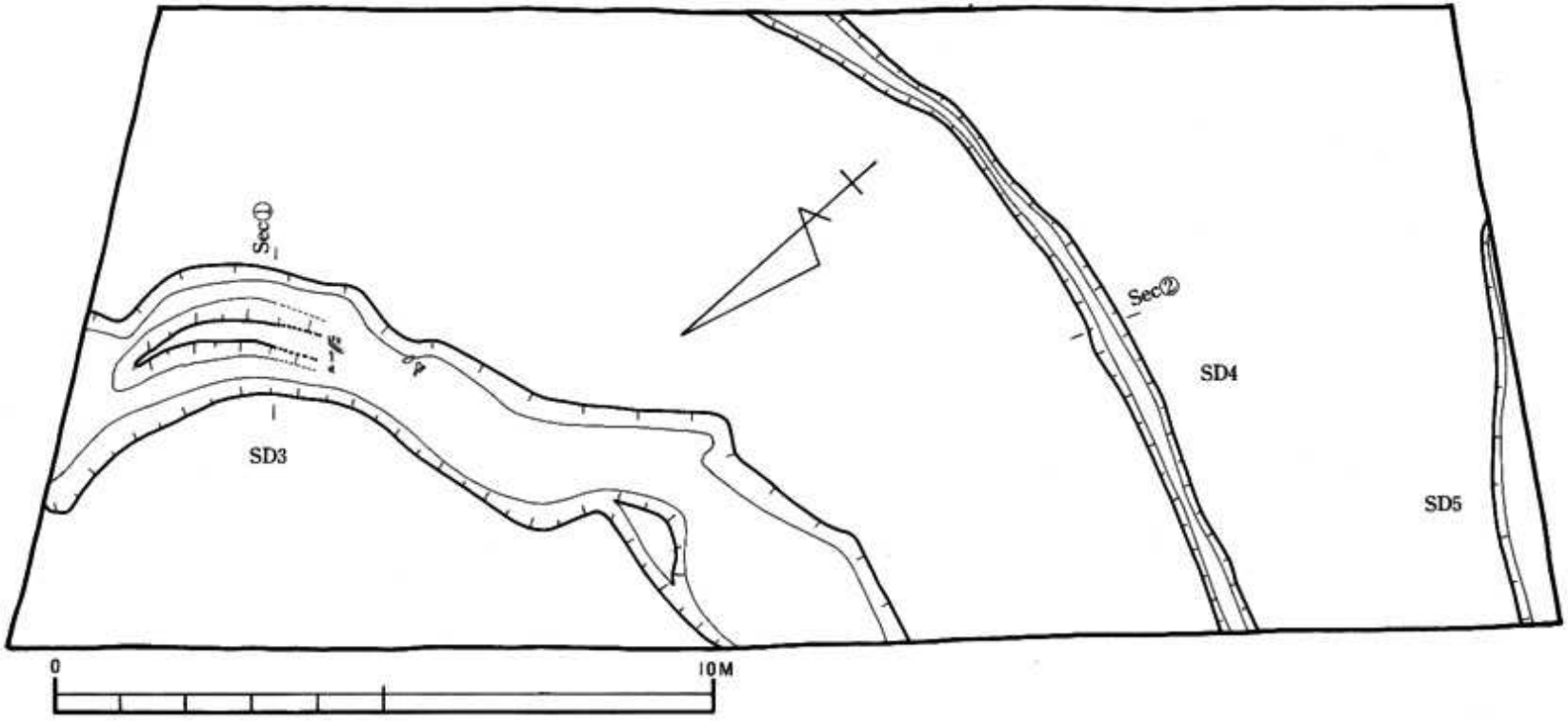
T－1 平面・断面実測図

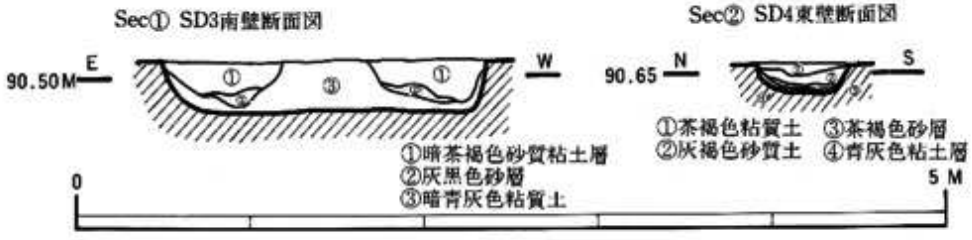
Sec① SD3南壁断面図



①暗灰色砂質粘土層（a－eまで細分される。このうち、c、eがもっとも粘質が強く、a、dが中間質で、bはもっとも砂っぽい。）
②淡灰黄色砂層
（aからfまで細分可能。この内eは、もっとも細かく黄色を含む。a－dは中間質で青味をまし、b、cはもっとも粘質で、やや褐色がかる。fは赤黄色をまし、やや粗い砂粒を含む。）

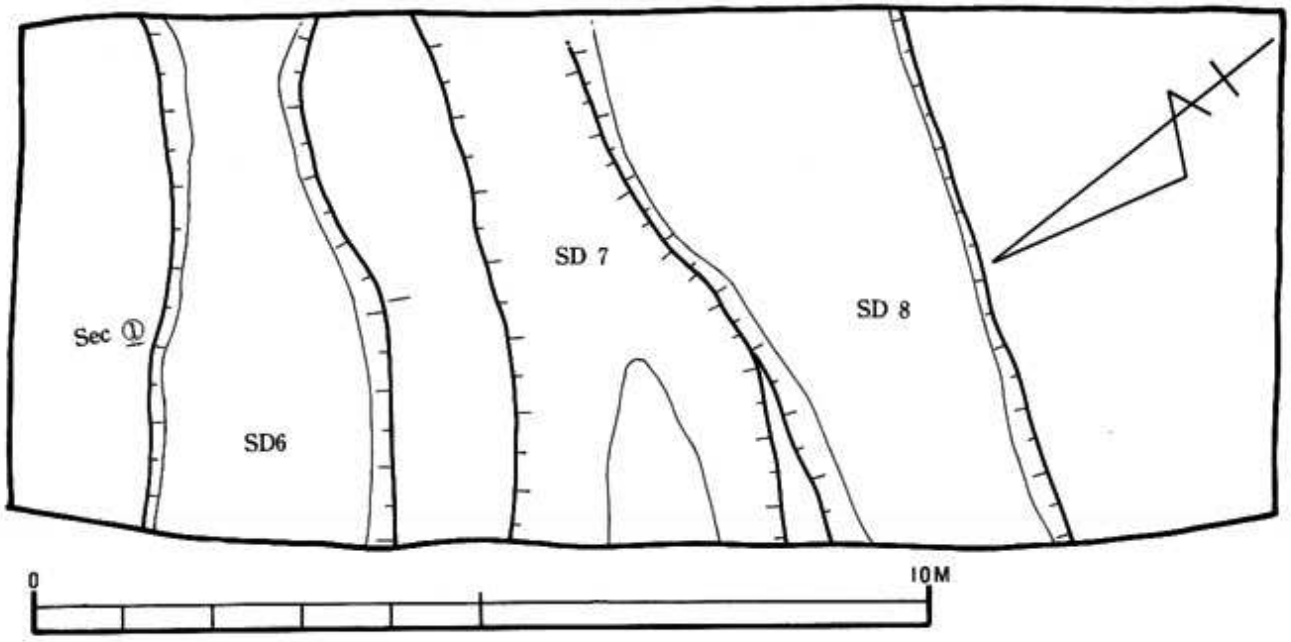
0 5M

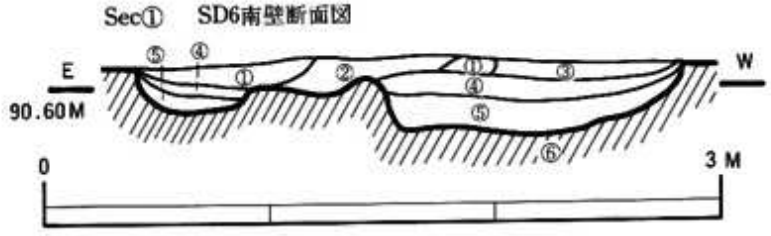

Sec①
Sec②
SD3
SD4
SD5
0
10M


Sec① SD3南壁断面図
90.50M
E
W
①暗茶褐色砂質粘土層
②灰黒色砂層
③暗青灰色粘質土
0
5 M

Sec② SD4東壁断面図
90.65
N
S
①茶褐色粘質土
②灰褐色砂質土
③茶褐色砂層
④青灰色粘土層

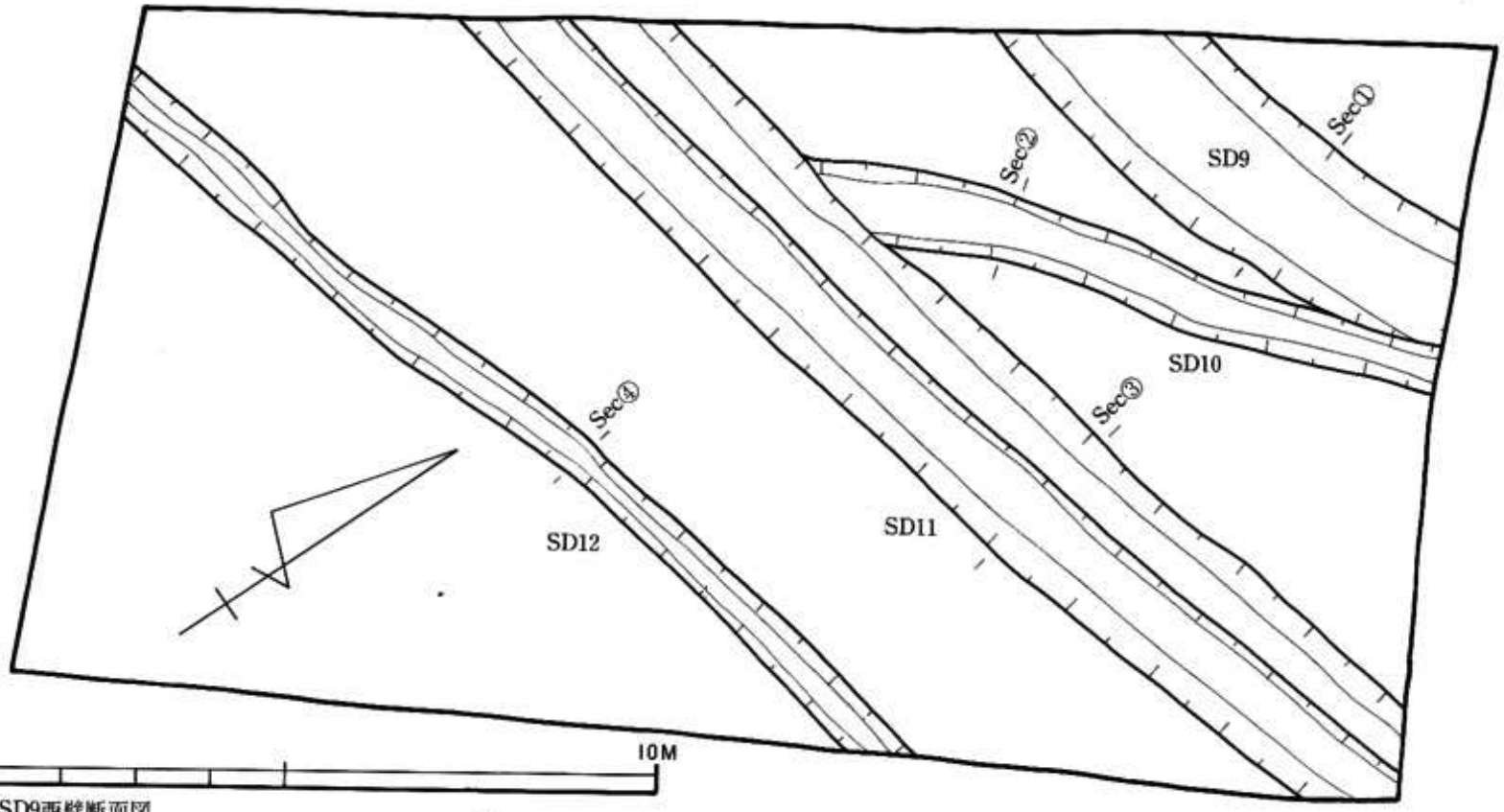
T－2　平面・断面実測図





①暗灰色砂質土　④暗灰色粘土層
②暗黄灰色粘土層　⑤暗黒灰青色粘土層
③暗黒灰色粘土層　⑥暗青灰色粘土層

T－3　平面・断面実測図



0 10M

Sec① SD9西壁断面図

91.40M S N

①淡黄茶褐色泥砂
②茶灰色粘質土
③暗茶灰色粘質土
④黒茶灰色粘質土

Sec② SD10西壁断面図

91.50M S N

①淡黄灰色粘質土

Sec③ SD11西壁断面図

91.50M S N

Sec④ SD12西壁断面図

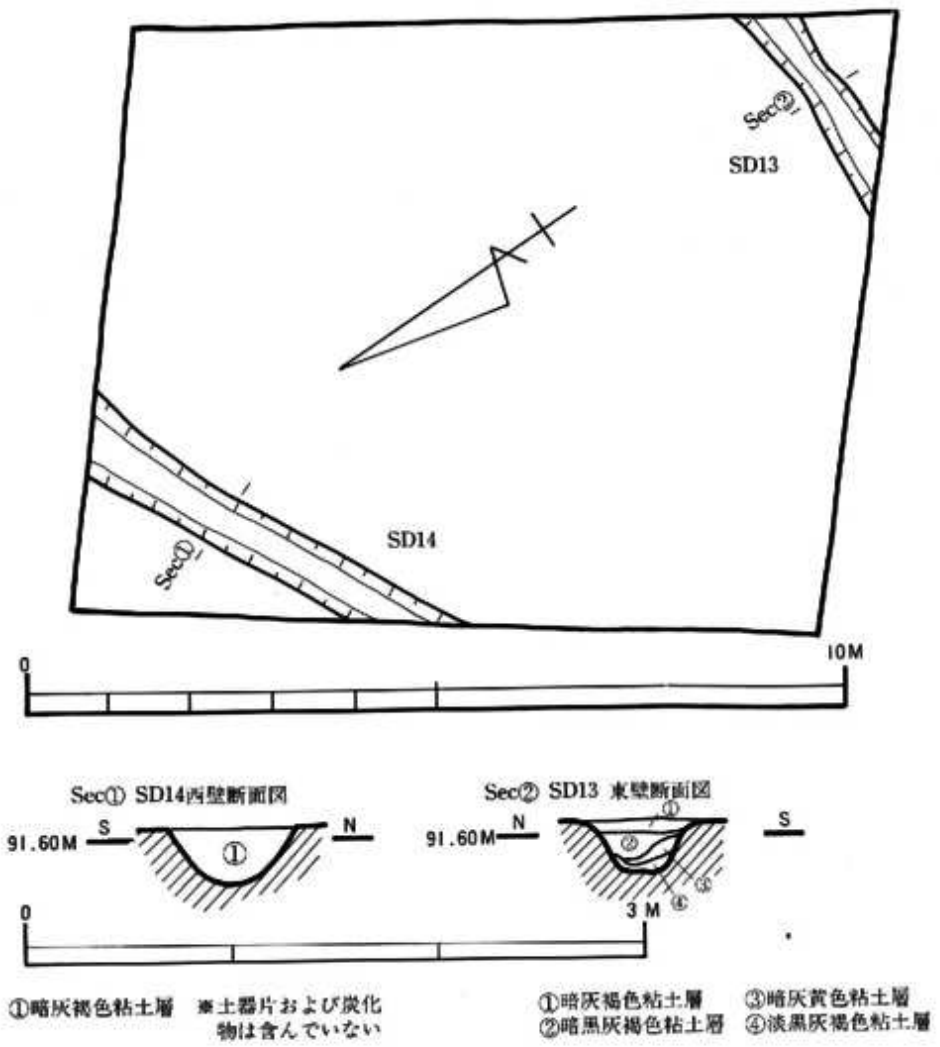
91.50M S N

①暗茶灰色粘質土 ②黒茶灰色粘質土

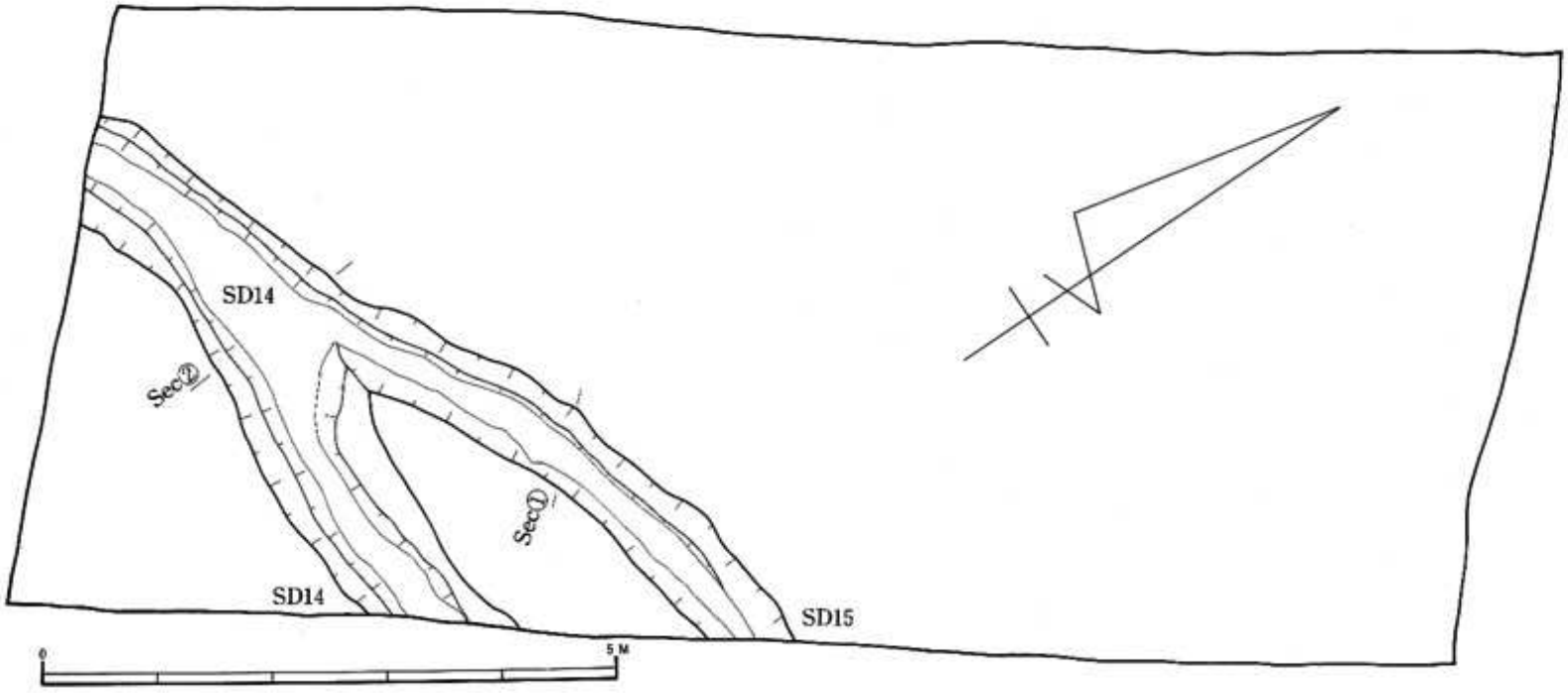
0 5M

T－4　平面・断面実測図

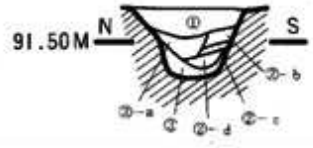
PL. 67


SD13
SD14
Sec②
Sec①
0
10M
Sec① SD14西壁断面図
91.60M
S
N
①
0
Sec② SD13 東壁断面図
91.60M
N
S
①
②
③
④
3 M
①暗灰褐色粘土層 ※土器片および炭化物は含んでいない
①暗灰褐色粘土層
②暗黒灰褐色粘土層
③暗灰黄色粘土層
④淡黒灰褐色粘土層

T－6　平面・断面実測図

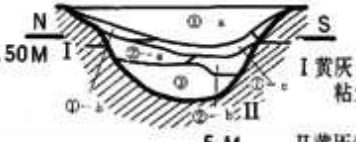


Sec① SD15東壁断面図



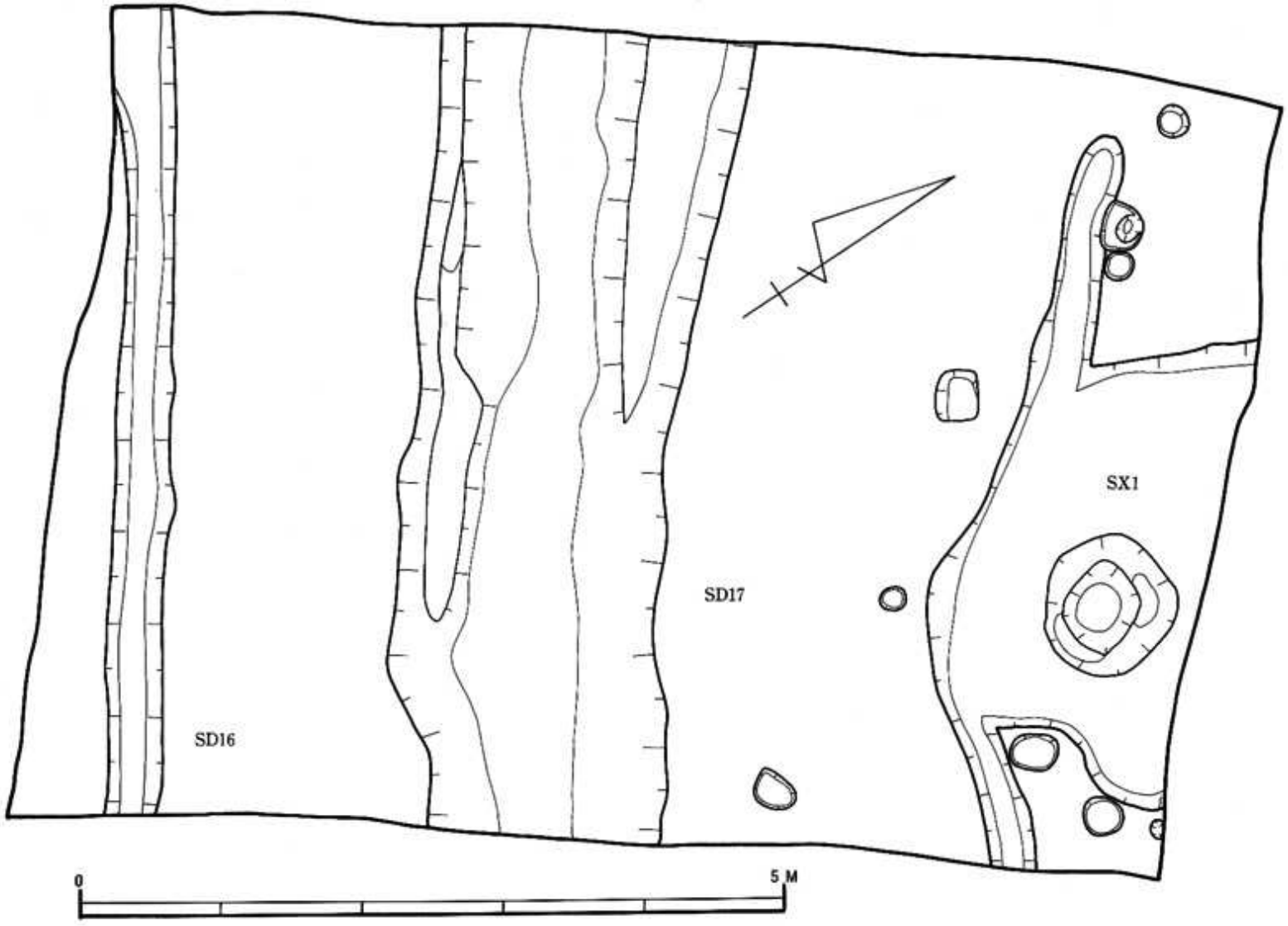
①淡黄灰白色粘土層
②基調は灰黒褐色粘土層
b、Cは最も①に近く黄灰白色を呈しdは最も黒い。aは両者の中間色である。
③黄灰褐色砂質粘土層
ベースは黄灰白色粘土層である。

Sec② SD14東壁断面図

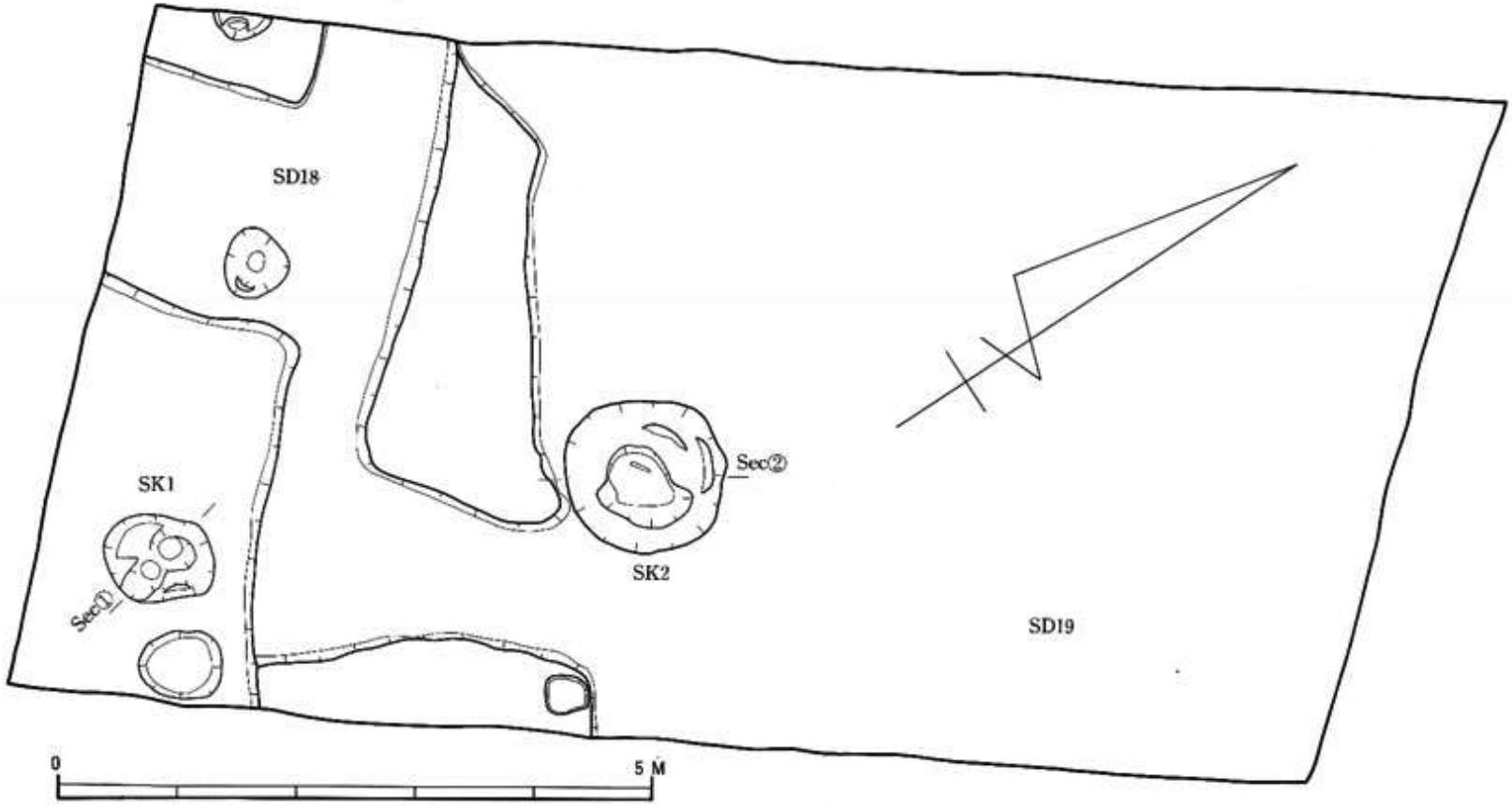


①暗黄灰白色粘土層
Ⅰ黄灰白色粘土層　aは黒斑がありやや黒ぼく
　bは明るくベースと違わない
②基調は灰黒褐色粘土層
Ⅱ黄灰青色粘土層　aより暗く
　bより明るい
③黄灰褐色砂質粘土層

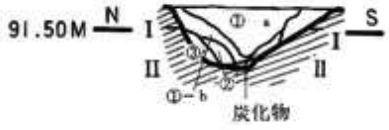
T－7　平面・断面実測図



T－8　平面・断面実測図

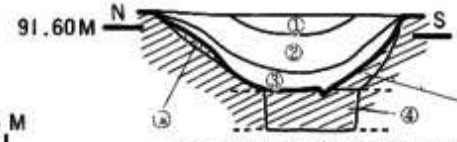


Sec① SK－1 東壁断面図



①a 黒褐色粘土層
b 淡黒褐色粘土層 } 中央に炭化物包含
②暗灰褐色粘土層
③暗灰色砂質粘土層
I．黄灰白色粘土層
II．淡黄灰色砂層

Sec② SK2東壁断面図

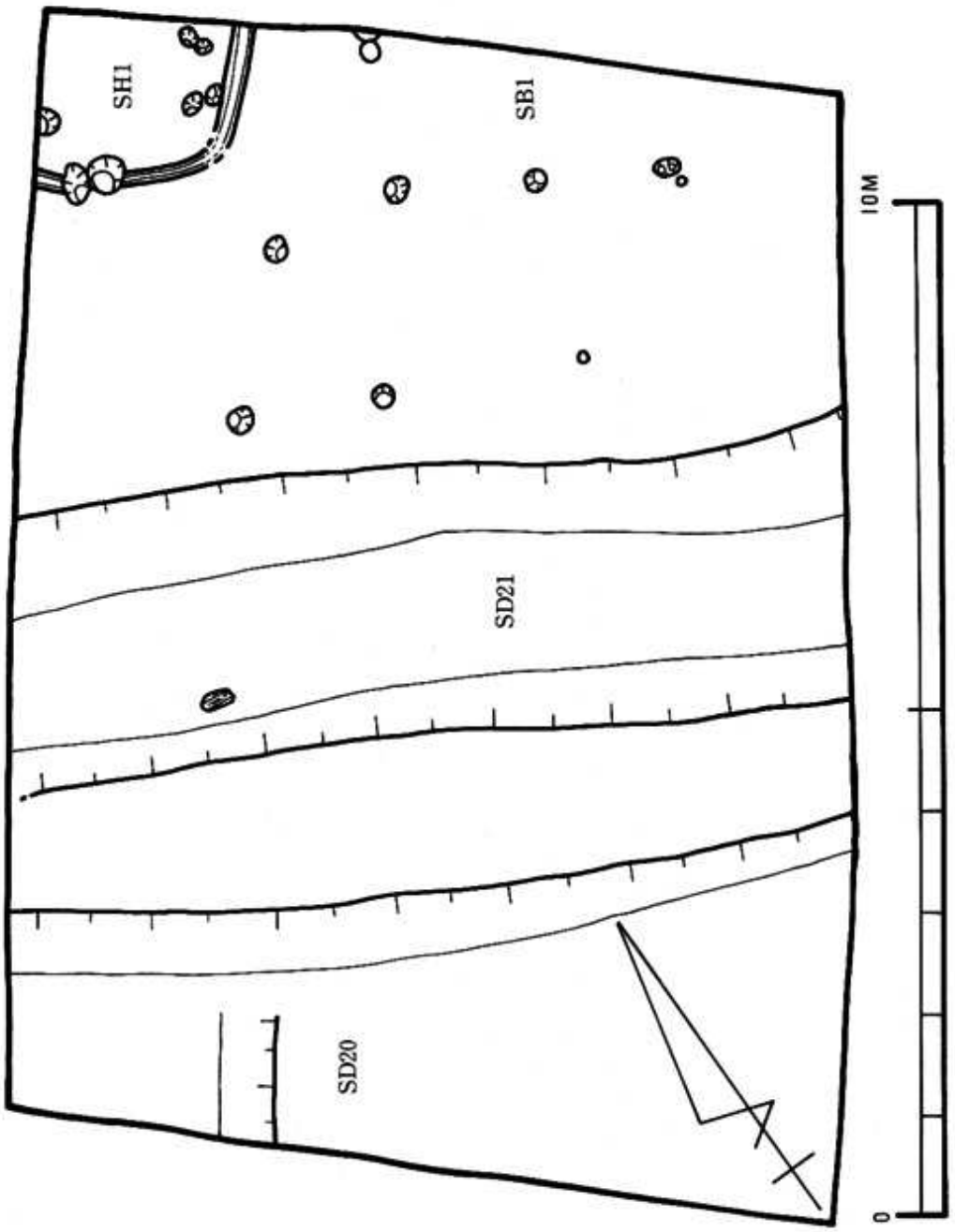


①黒灰褐色粘質砂層
②黒青灰褐色砂質粘土層
③黒灰色砂質粘土層
④暗青灰色砂質粘土層
ⓐ淡灰青色砂質粘土層

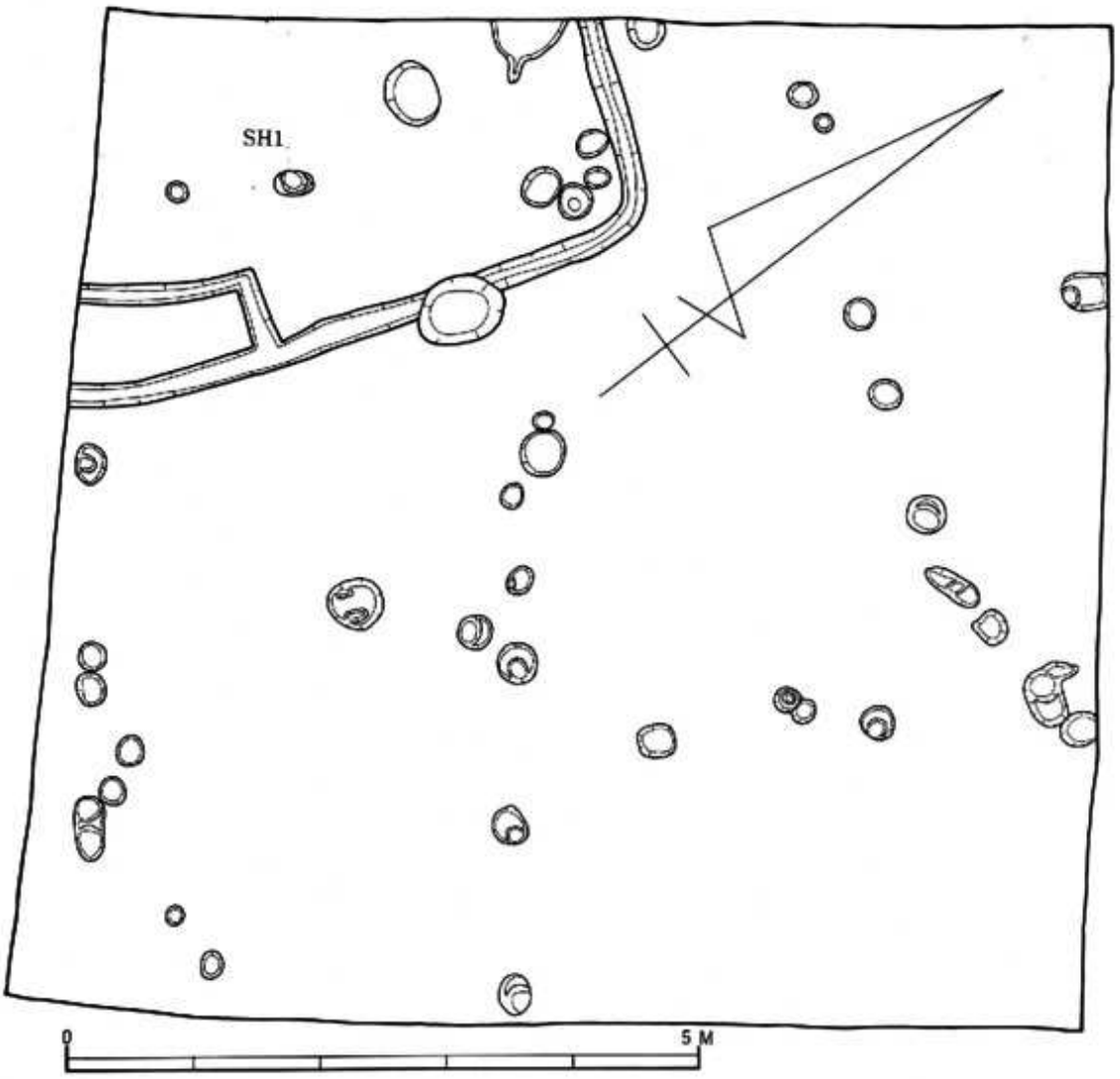
※① 色調としては①、②はそれほど変わらないが③の方が炭化物が多く赤褐色の土器を含んでいる。
㋐ ④の底部には土器があり、土質としては①、②、③のみ、はっきり区別できるため、上図のようになった。
㋑ 全般的に見て、①、②には炭化物および土器片を含んでおり③にはそれほどの混入物は見られない。
㋒ ⓐは掘りすぎである。

T－9 平面・断面実測図

PL. 72

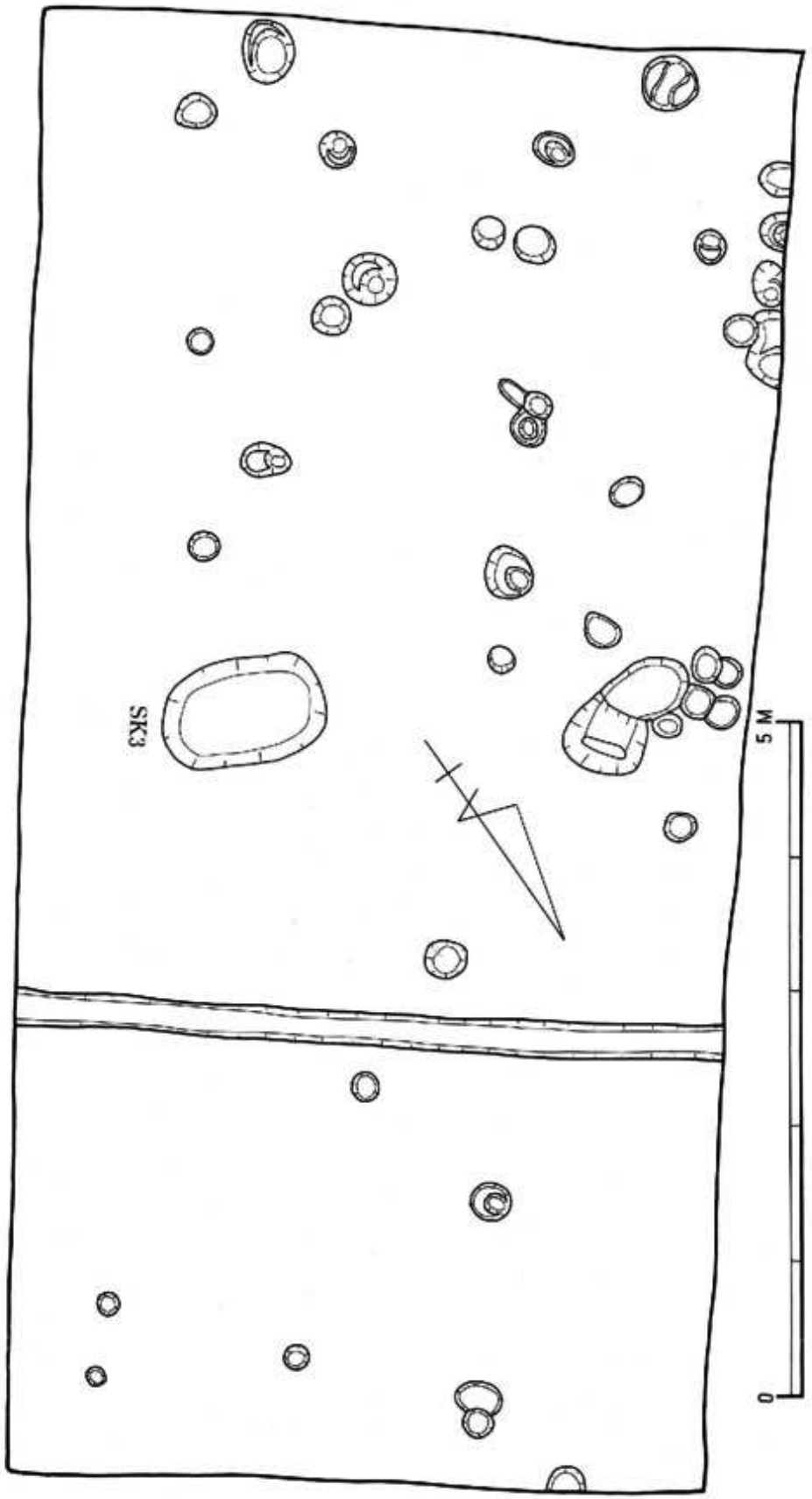


T－10　平面・断面実測図

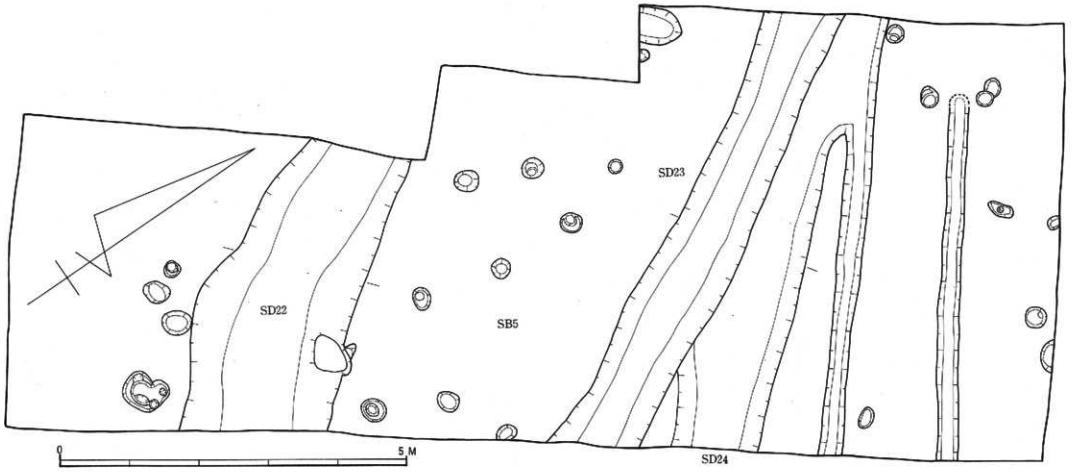


T－11　平面・断面実測図

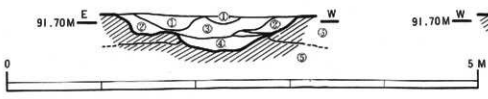
PL. 74



T－12　平面・断面実測図



Sec① SD22南壁断面図

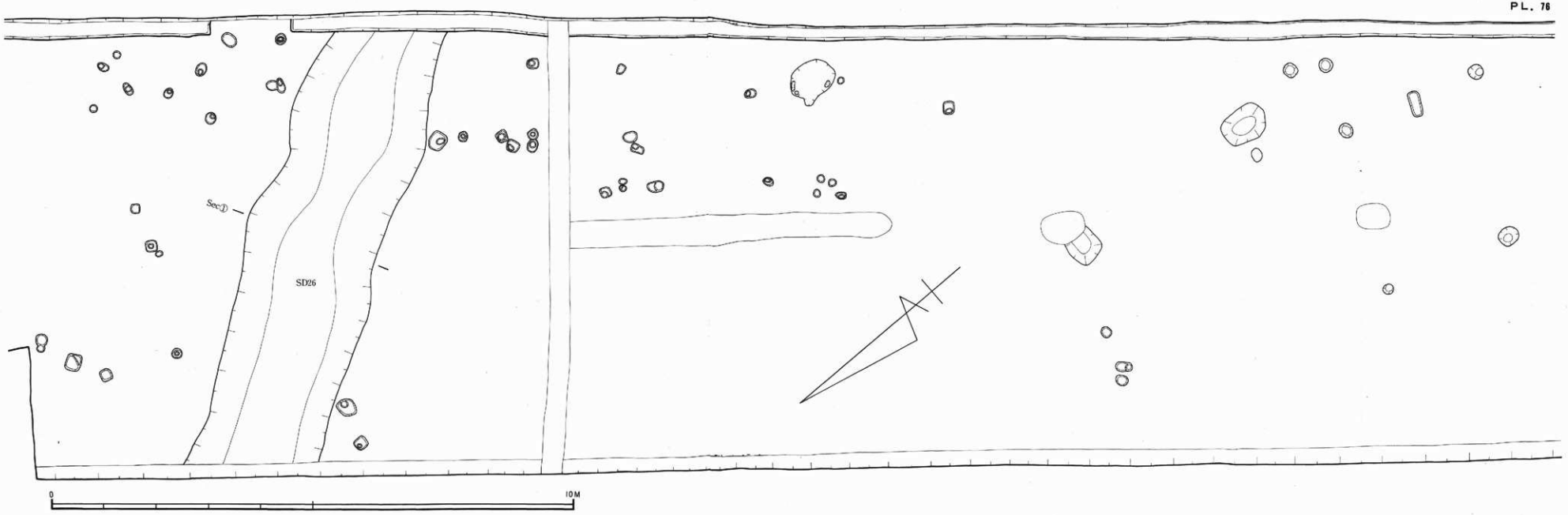


①暗灰褐色粘土層
(0.5cm位の角礫を含む)
②黒褐色粘土層
③暗黒灰褐色粘土層
④黒灰褐色礫層(1cm位の角礫)
⑤暗灰色砂層
⑥淡灰色粘土層
※②において、上器片を多く含む
上流へ向う程礫層がなくなっている。

Sec② SD23・SD24北壁断面図

①黒灰褐色粘土層
②暗黒灰褐色粘土層
③暗灰褐色粘土層
④灰色砂層
※①、②、FeO_2の沈着激しい。

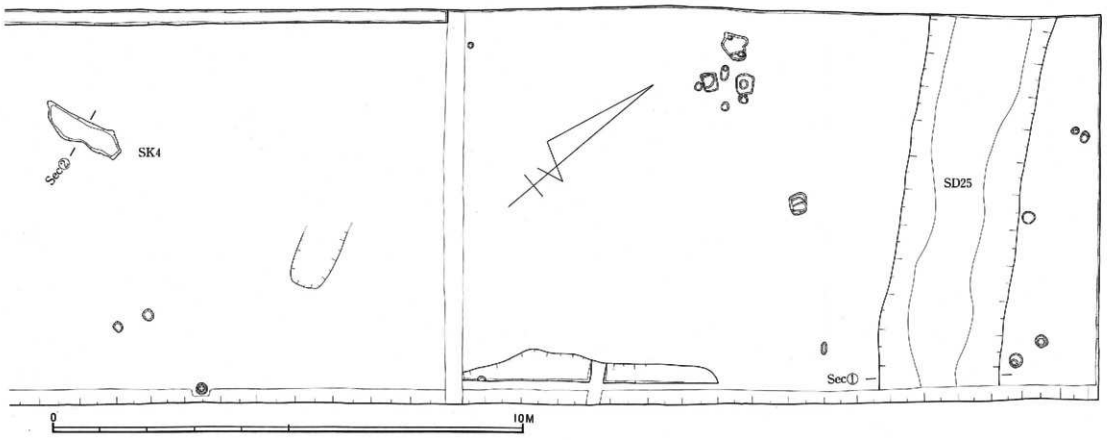
T－13　平面・断面実測図



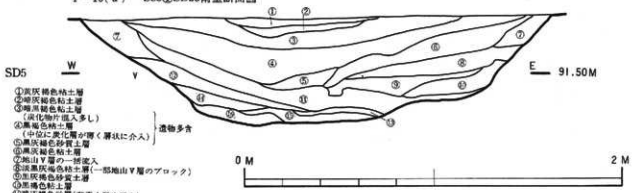
T－15(ａ)　Sec① SD26南壁断面図

①黒灰褐色粘土層
②暗黒褐色粘土層
（炭化層が薄く１条中位で層状に介入する）若干の土器片検出
③黒褐色粘土層
④地山Ⅴの一部混入
⑤暗黒褐色砂質土層
（炭化物片の混入が著しい）
⑥黒褐色砂質土層
（炭化物片が若干混入する）
⑦黒灰褐色砂混層
⑧黒褐色砂混層
⑨暗灰褐色砂層

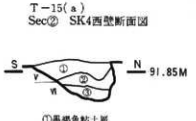
T－15(ａ)　平面・断面実測図



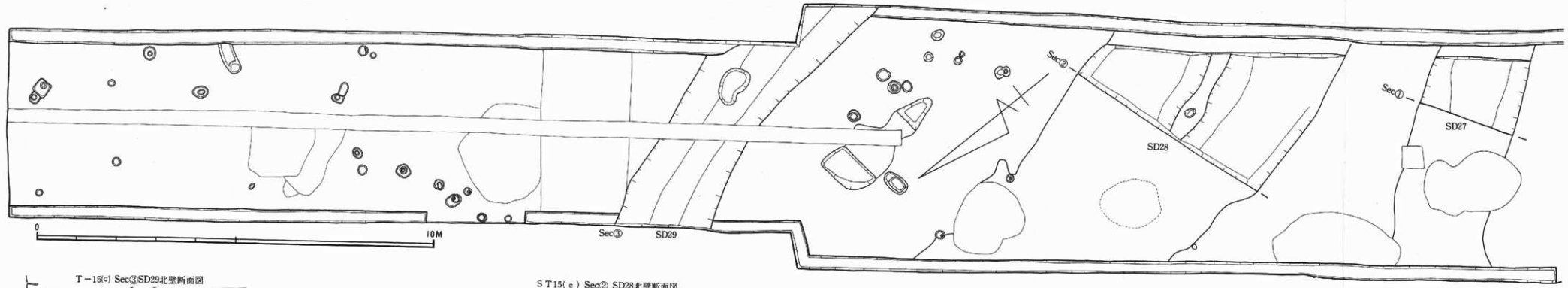
T－15(ａ)　Sec①SD25南壁断面図



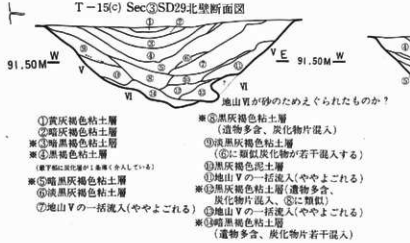
T－15(ａ)
Sec②　SK4西壁断面図



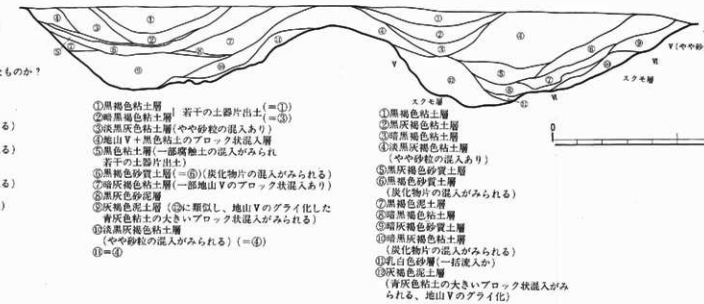
T－15(ｂ)　平面・断面実測図

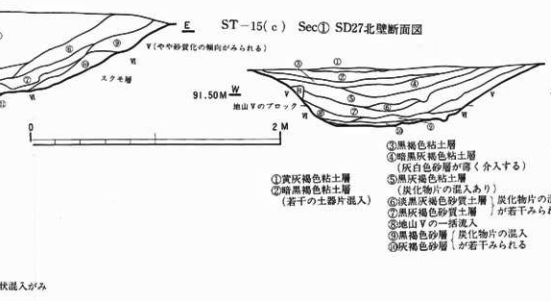


T－15(c) Sec③SD29北壁断面図



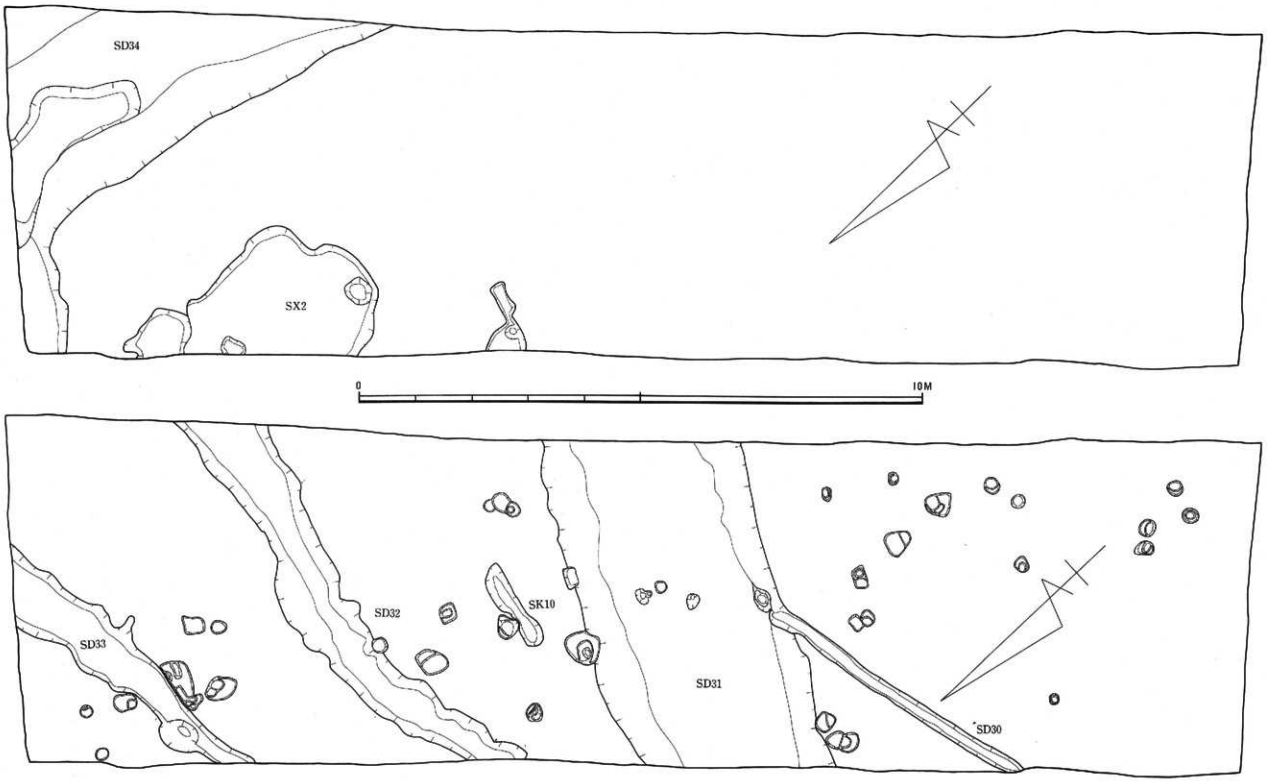
ST15(c) Sec② SD28北壁断面図



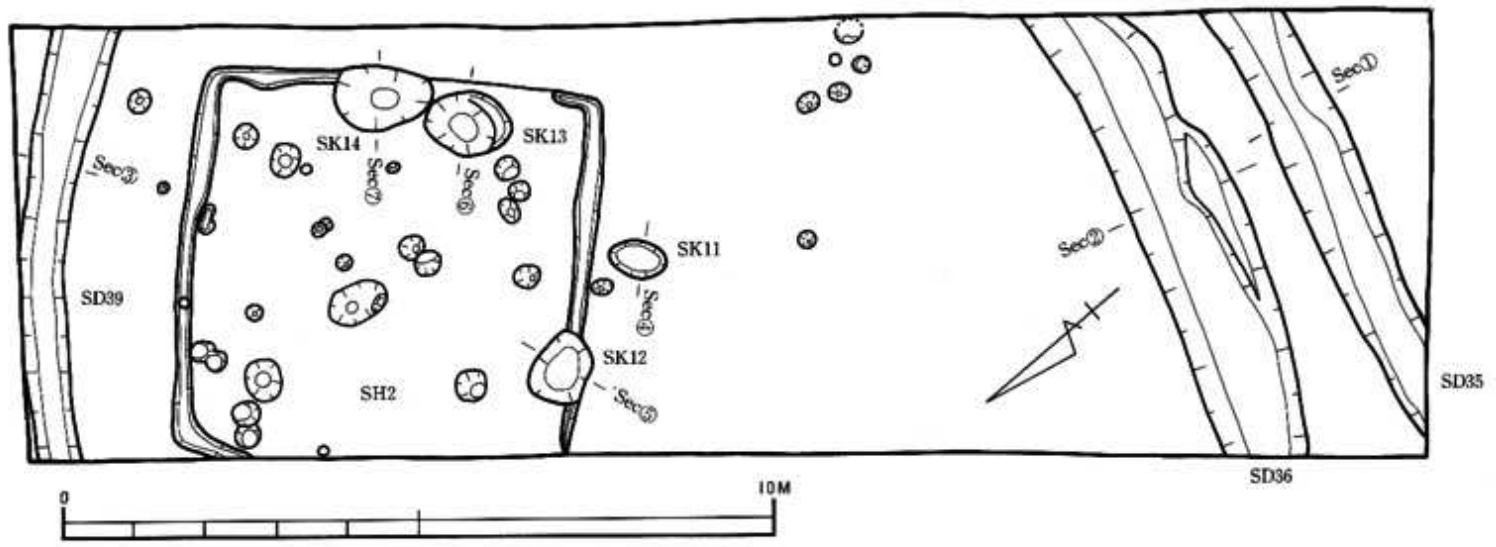


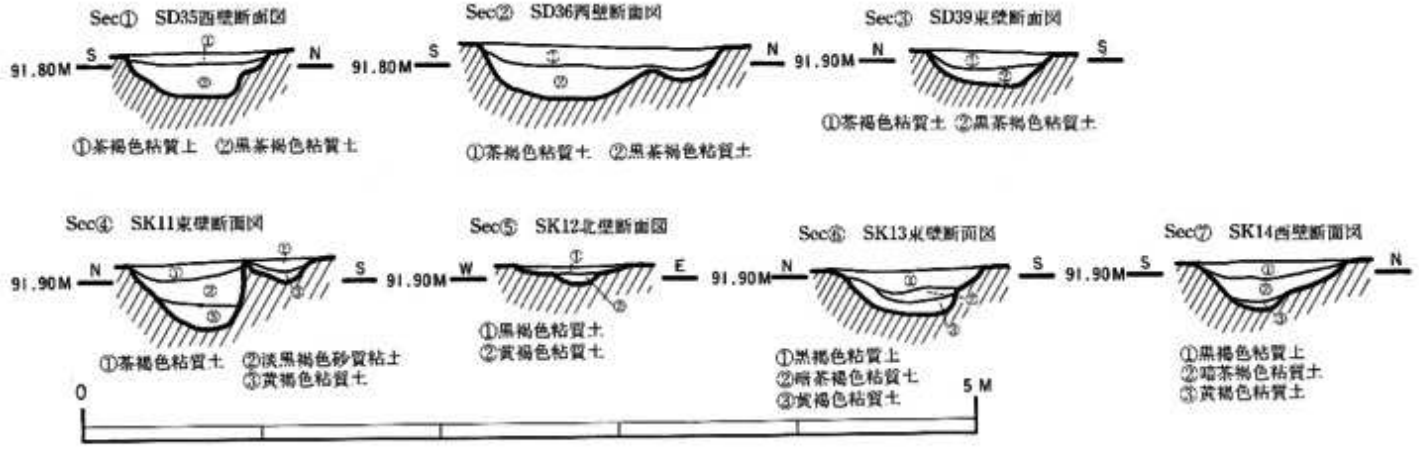
ST－15(c) Sec① SD27北壁断面図

T－15(c) 平面・断面実測図

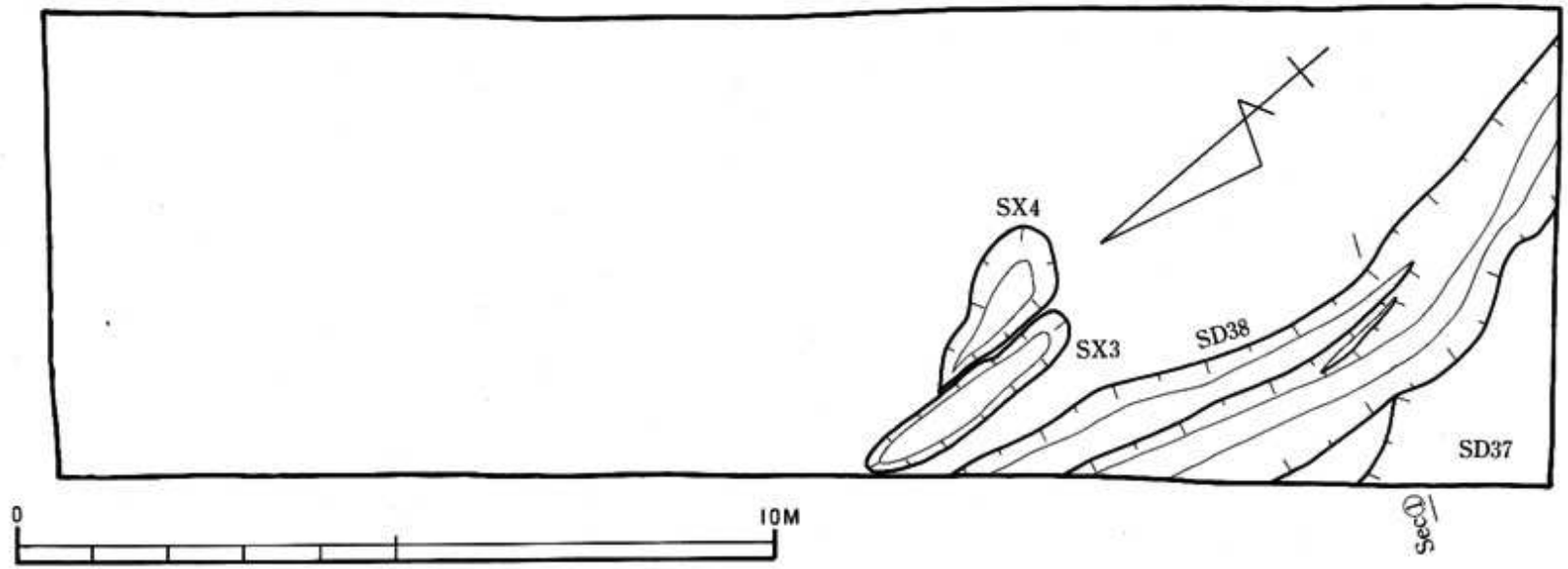


T－16　平面・断面実測図

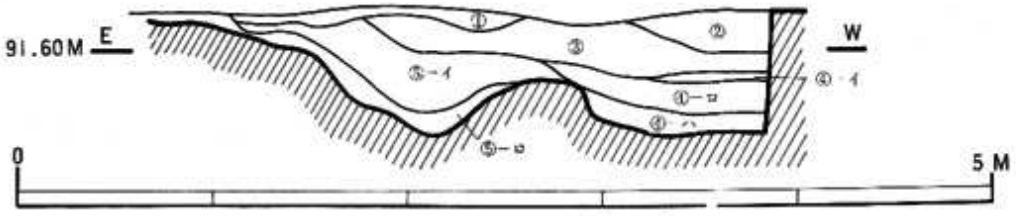




T－17　平面・断面実測図(第1遺構面)

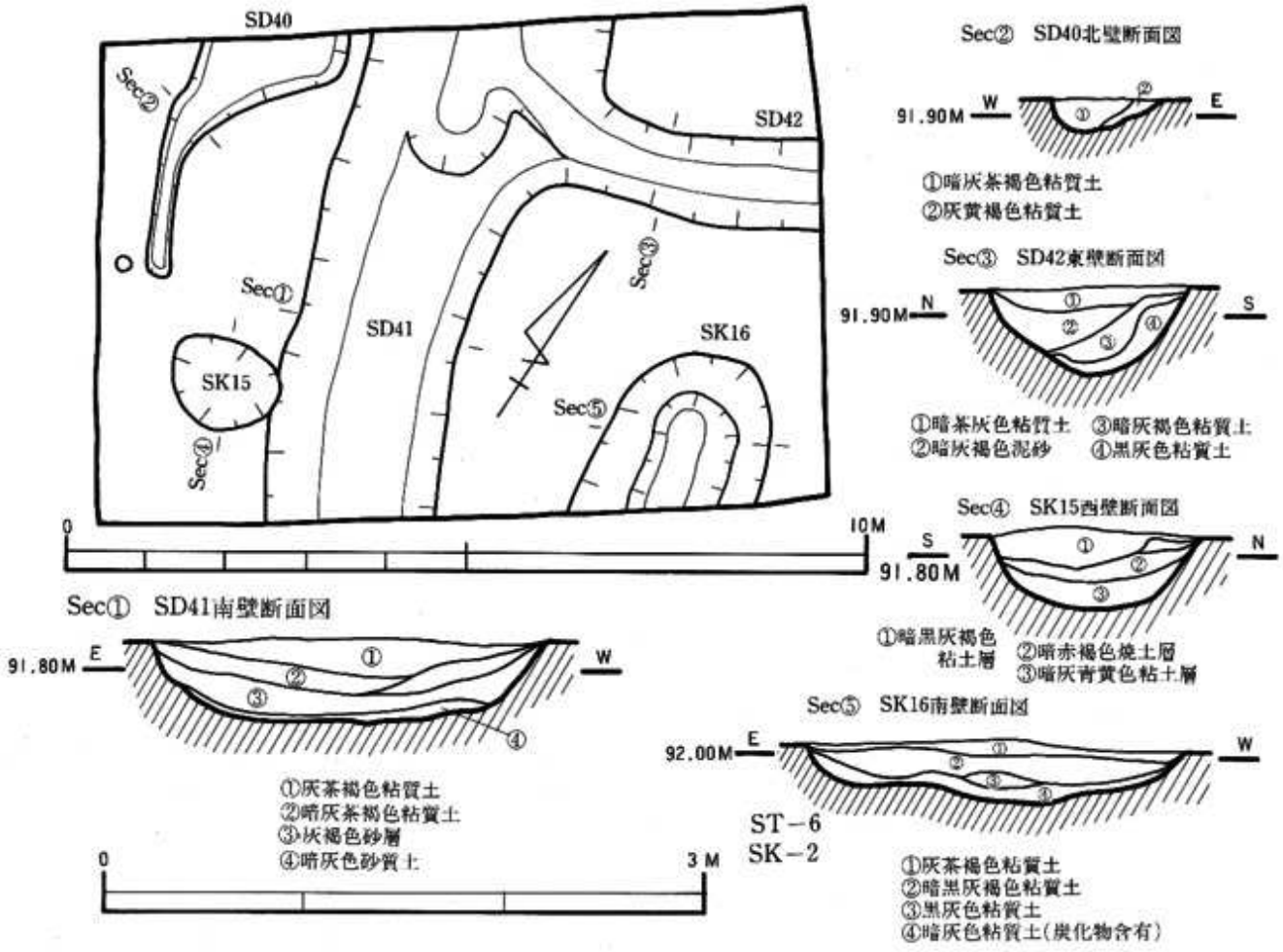


Sec① SD38南壁断面図

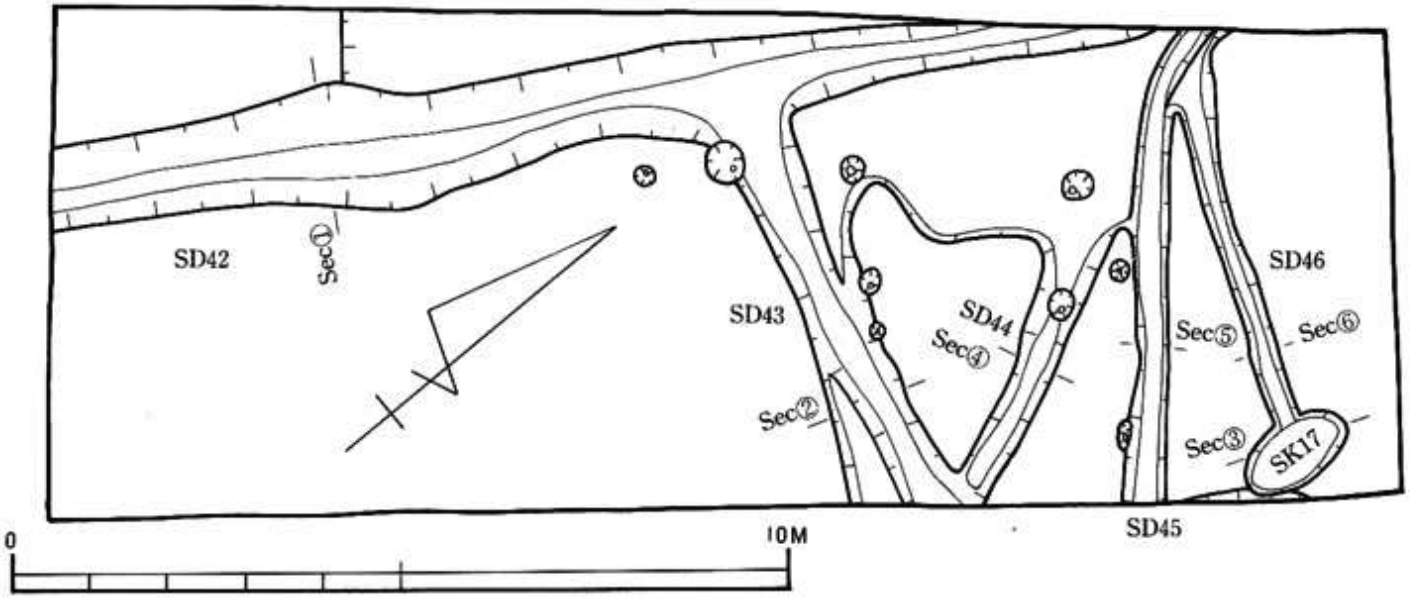


①黒色粘土層
②暗黒灰褐色粘土層
③暗灰褐色粘土層
④イ．暗灰色粘土層
ロ．黒灰青色粘土層
ハ．黒青灰色粘土層
⑤イ．暗灰青色粘土層
ロ．暗青灰色粘土層

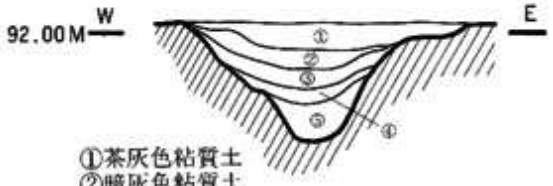
T－17　平面・断面実測図(第２遺構面)


SD40
SD42
SD41
SK16
SK15
Sec①
Sec②
Sec③
Sec④
Sec⑤
0
10M
Sec② SD40北壁断面図
91.90M
W
E
①暗灰茶褐色粘質土
②灰黄褐色粘質土
Sec③ SD42東壁断面図
91.90M
N
S
①暗茶灰色粘質土
②暗灰褐色泥砂
③暗灰褐色粘質土
④黒灰色粘質土
Sec④ SK15西壁断面図
S
N
91.80M
①暗黒灰褐色粘土層
②暗赤褐色焼土層
③暗灰青黄色粘土層
Sec① SD41南壁断面図
91.80M
E
W
①灰茶褐色粘質土
②暗灰茶褐色粘質土
③灰褐色砂層
④暗灰色砂質土
0
3M
Sec⑤ SK16南壁断面図
92.00M
E
W
ST－6
SK－2
①灰茶褐色粘質土
②暗黒灰褐色粘質土
③黒灰色粘質土
④暗灰色粘質土(炭化物含有)

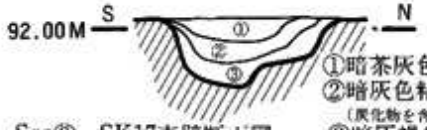
T－18　平面・断面実測図



Sec① SD42北壁断面図

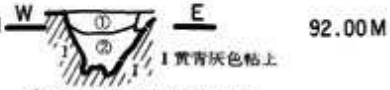


Sec② SD43西壁断面図



Sec③ SK17東壁断面図

Sec④ SD44北壁断面図

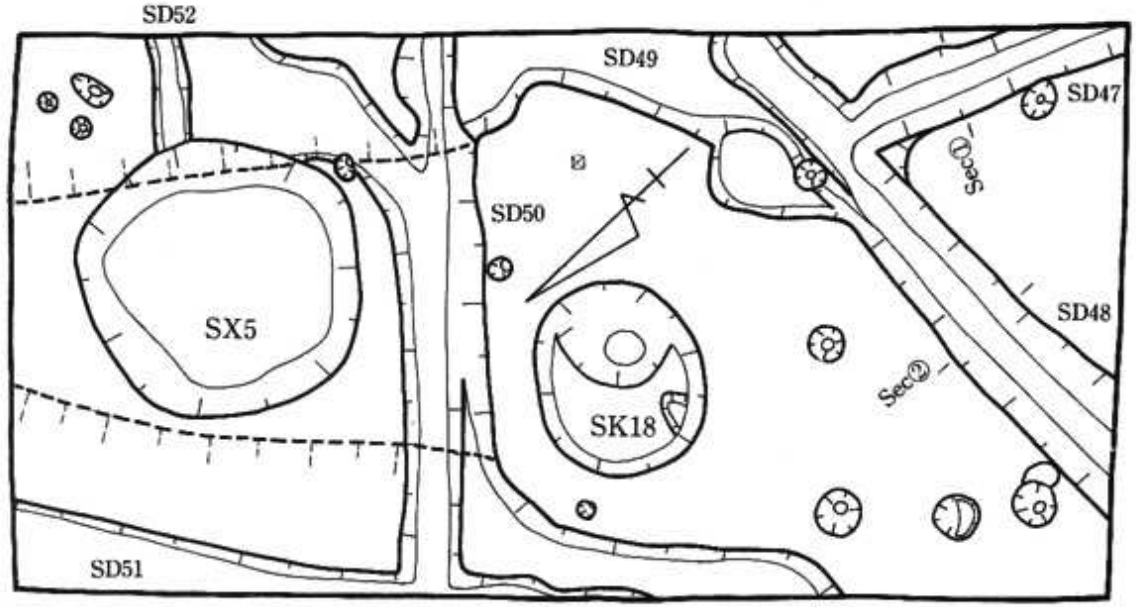


Sec⑤ SD45東壁断面図

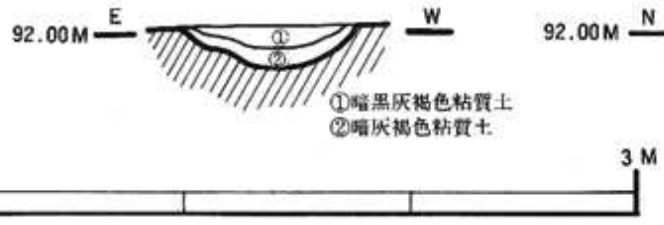
Sec⑥ SD46 西壁断面図

0 5M

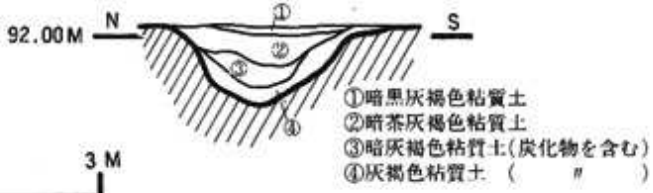
T－19 平面・断面実測図



Sec① SD47南壁断面図

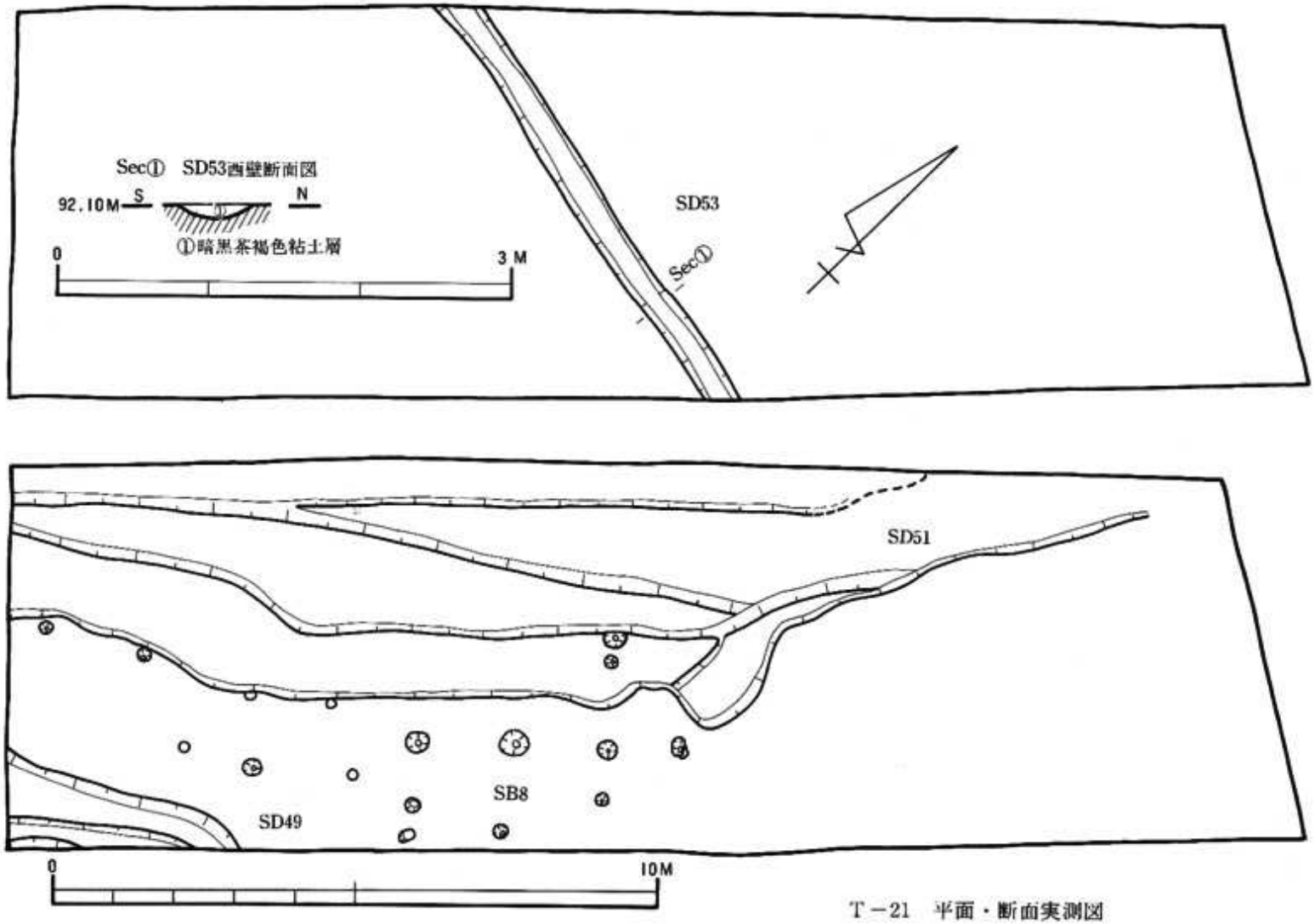


Sec②SD48東壁断面図

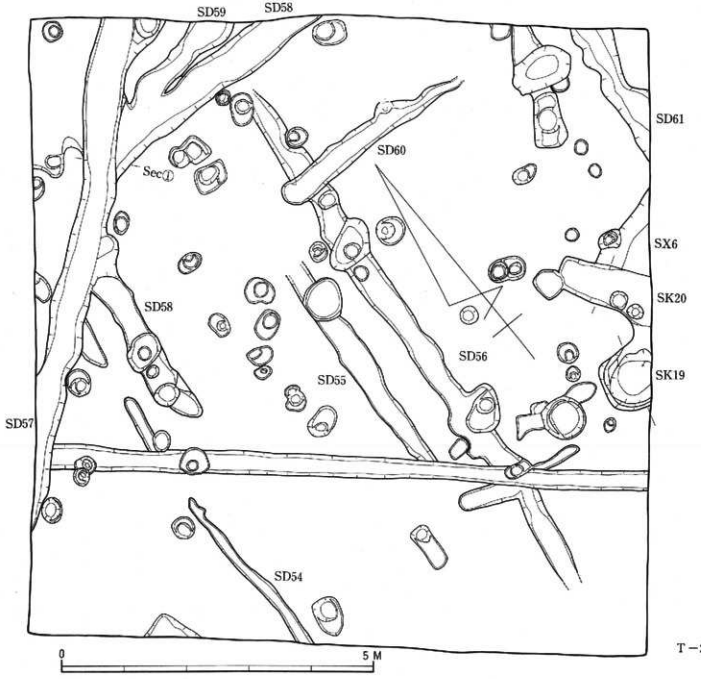


T－20 平面・断面実測図

PL. 84


Sec① SD53西壁断面図
92.10M
S
N
①暗黒茶褐色粘土層
0
3 M
SD53
Sec①
SD51
SB8
SD49
0
10M

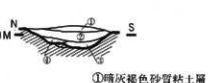
T－21　平面・断面実測図



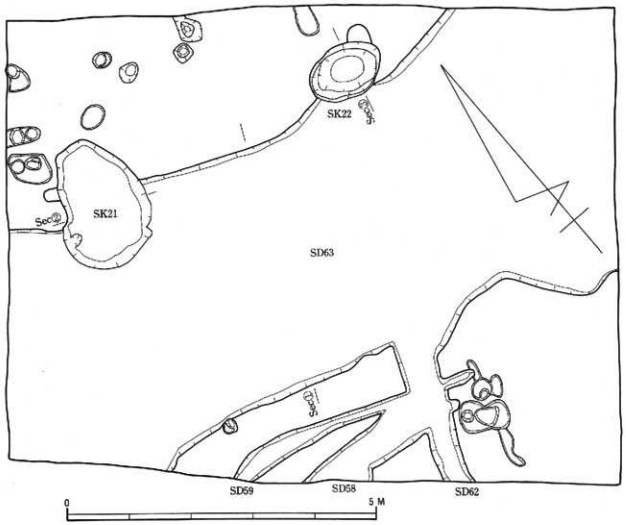
T－24　平面・断面実測図

Sec①　SD57南壁断面図

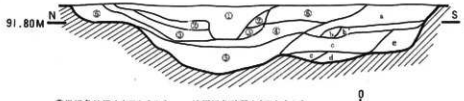
Sec②　SK19東壁断面図



Sec③　SK20東壁断面図

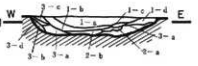


Sec① SD63東壁断面図



①黒褐色粘質土(礫を含む)
②暗灰色粘質土
③暗灰褐色粘質土
④暗灰色砂質土
⑤暗白色砂質土
⑥暗灰色砂質土(礫を含む)
a 淡灰褐色砂質土(礫を含む)
b 淡灰褐色砂質土
b 黄灰褐色砂質土
c 暗灰色砂質土
d 暗灰褐色砂質土
e 灰白色砂質土

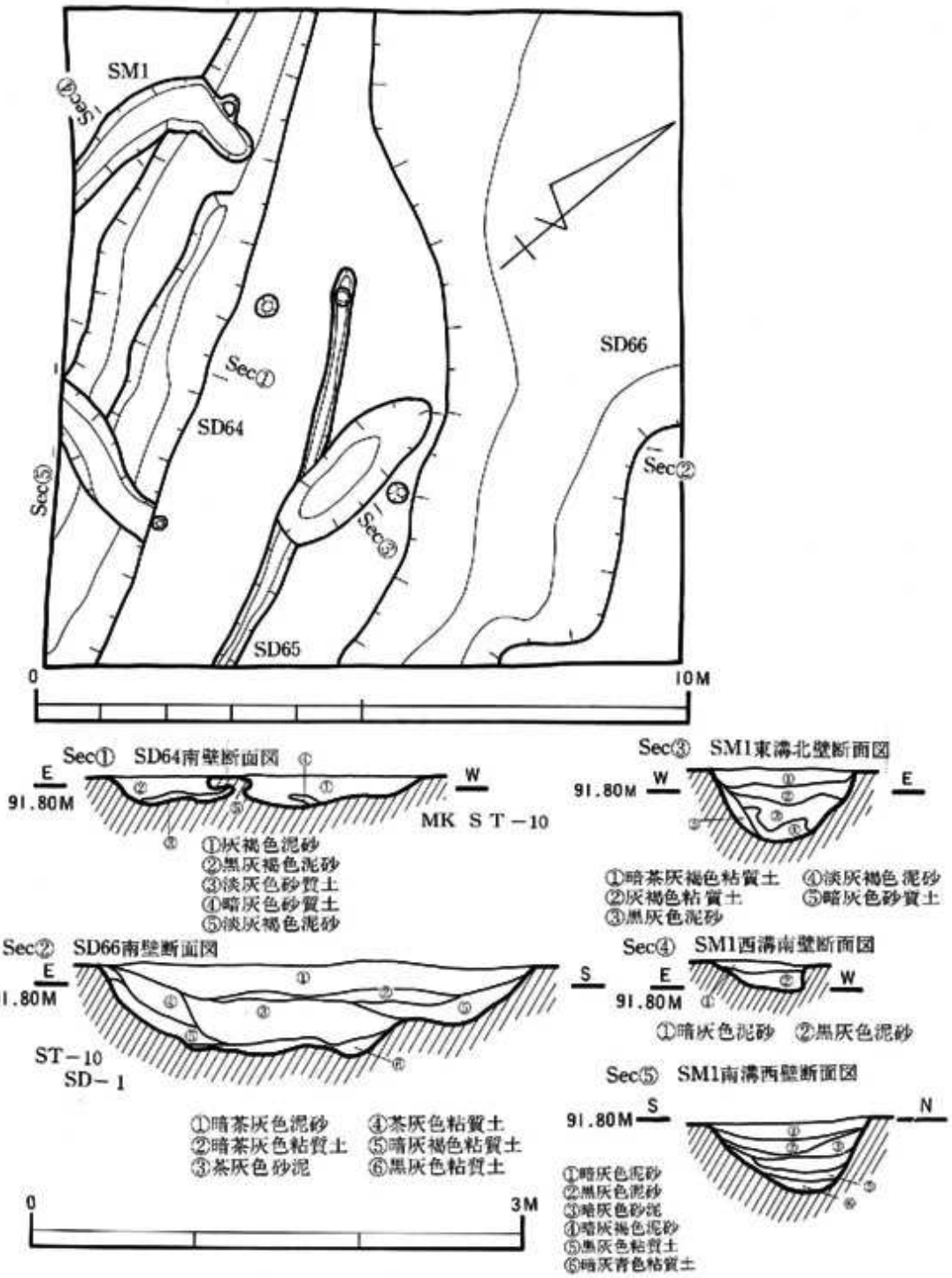
Sec② SK21北壁断面図



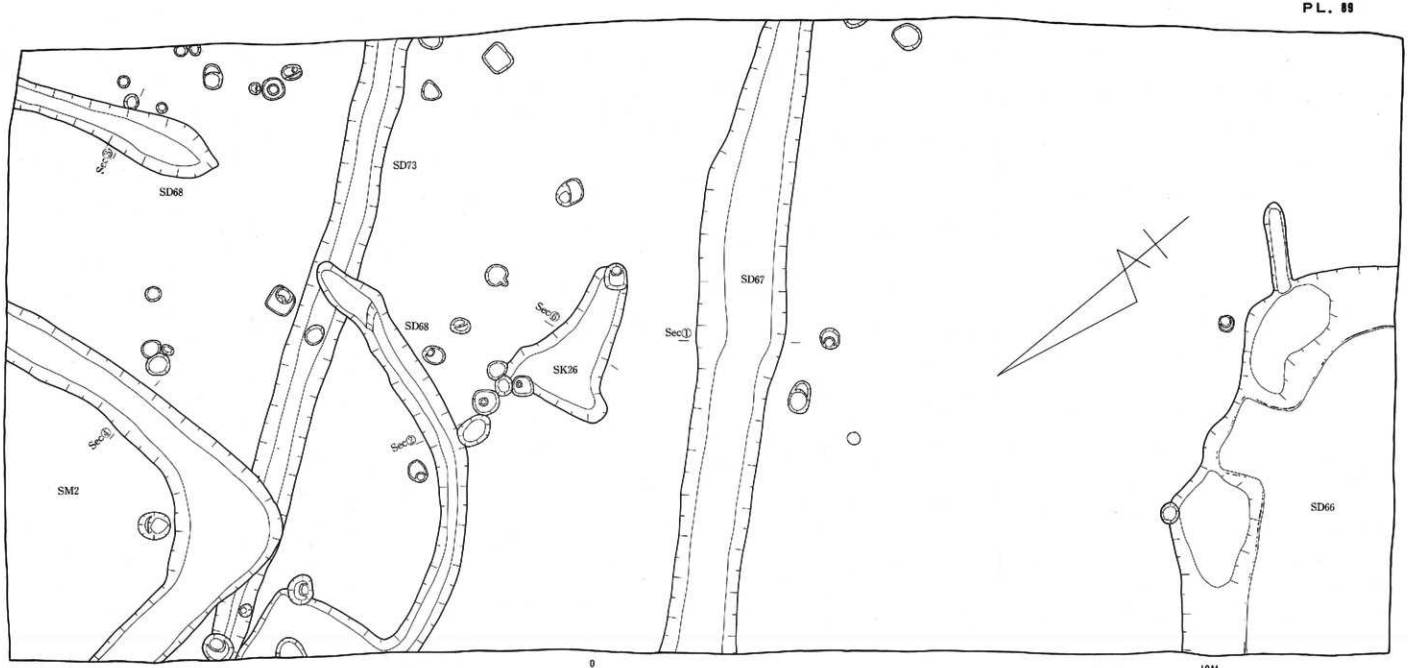
Sec③ SK22西壁断面図

①黒褐色粘質砂層
ⓐはやや褐色ぼく ⓒは最も粘質性 ⓒは最も黄灰色である
②黒灰色砂層
(黒色粘質土と黄灰色砂層の混入土層)
③基本的には黄灰色の砂層
b－dは黒色粘質土の一時的な混入土
ベースは黄灰白色砂層

①基調は黒褐色粘土層
1－f，gは青灰色の砂層が多く、1－cは地山の黄灰色砂粒の崩土
1－eは灰褐色の粘質土が多い
②基調は黄灰白色粘質土
b，cはやや灰色がかる
③灰黒色粘土層
④基調は黄灰青色砂層
4－cは灰色粘土がかり、4－eは灰黒色粘土層である。


SM1
Sec④
Sec①
SD64
Sec⑤
SD66
Sec②
Sec③
SD65
0
10M
Sec① SD64南壁断面図
E
91.80M
W
MK ST−10
①灰褐色泥砂
②黒灰褐色泥砂
③淡灰色砂質土
④暗灰色砂質土
⑤淡灰褐色泥砂
Sec③ SM1東溝北壁断面図
91.80M
W
E
①暗茶灰褐色粘質土
②灰褐色粘質土
③黒灰色泥砂
④淡灰褐色泥砂
⑤暗灰色砂質土
Sec② SD66南壁断面図
E
91.80M
S
ST−10
SD−1
①暗茶灰色泥砂
②暗茶灰色粘質土
③茶灰色砂泥
④茶灰色粘質土
⑤暗灰褐色粘質土
⑥黒灰色粘質土
Sec④ SM1西溝南壁断面図
E
91.80M
W
①暗灰色泥砂
②黒灰色泥砂
Sec⑤ SM1南溝西壁断面図
91.80M
S
N
①暗灰色泥砂
②黒灰色泥砂
③暗灰色砂泥
④暗灰褐色泥砂
⑤黒灰色粘質土
⑥暗灰青色粘質土
0
3M

T−26　平面・断面実測図



Sec① SD67北壁断面図

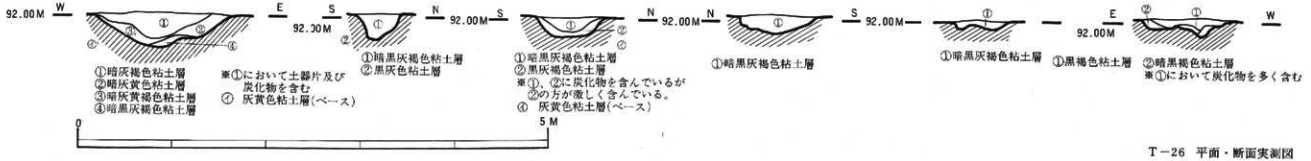
Sec② SD68西壁断面図

Sec③ SD68西壁断面図

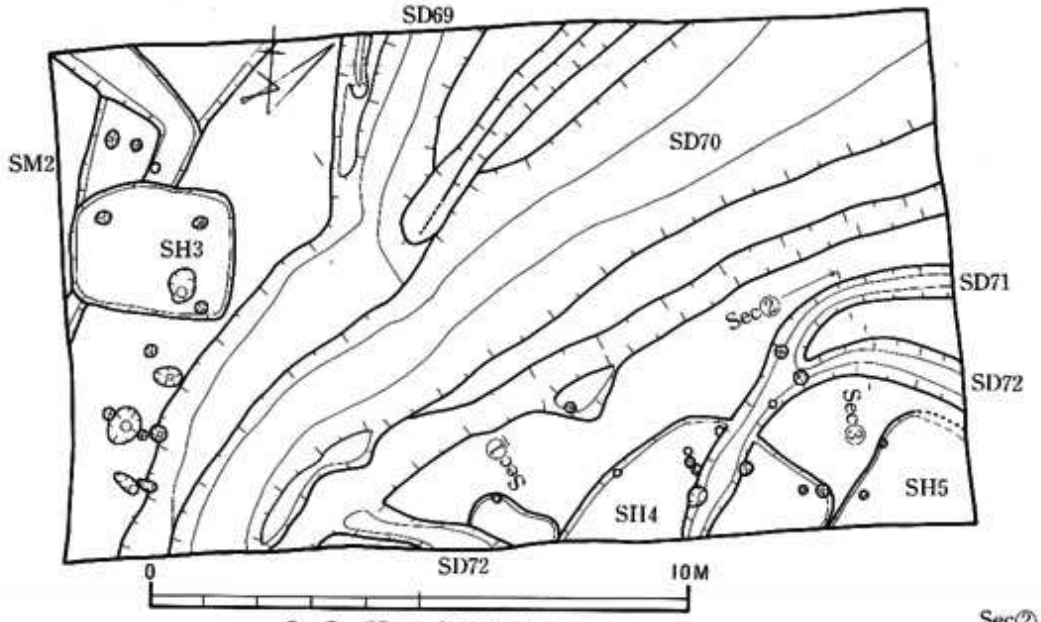
Sec④ SM2南端西壁断面図

Sec⑤ SK25

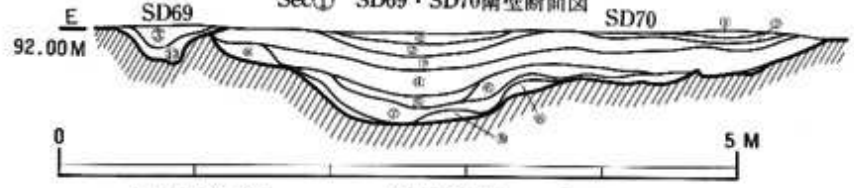
Sec⑥ SK26南壁断面図



T－26 平面・断面実測図



Sec① SD69・SD70南壁断面図



①黄灰褐色泥砂
②淡灰褐色泥砂
③暗茶灰色粘質土
④暗茶灰色泥砂
（炭化物・土器片多数含有）
⑤暗灰色砂泥
⑥灰色砂質土
⑦淡灰色砂質土
⑧淡灰色泥砂
⑨⑤に炭化物含有
⑩灰黄色泥砂

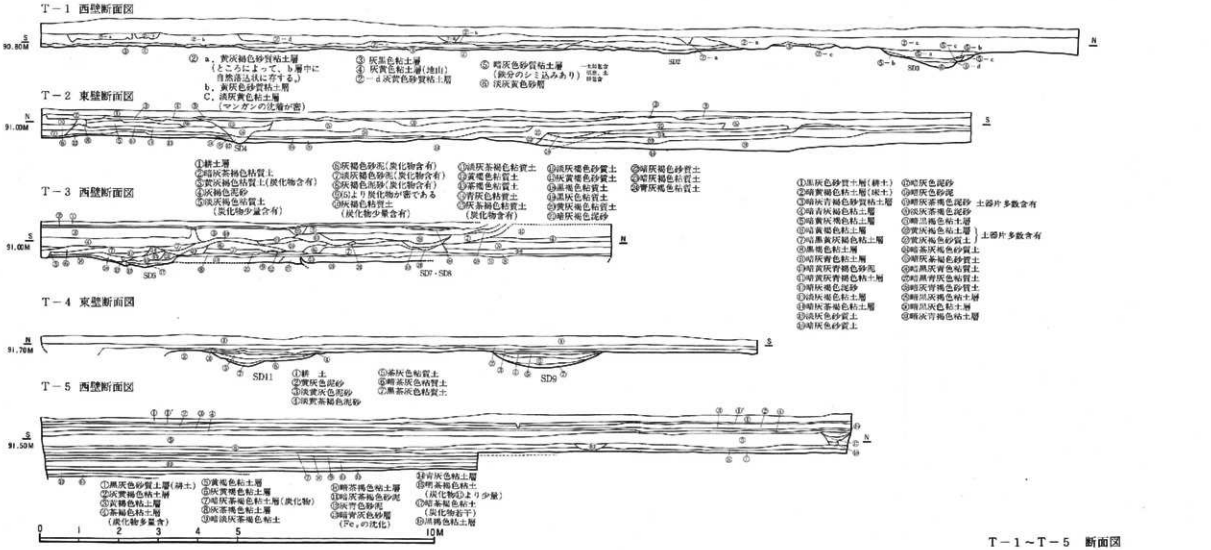
Sec② SD71南壁断面図

①茶褐色粘土層 ②暗黒茶褐色粘土層

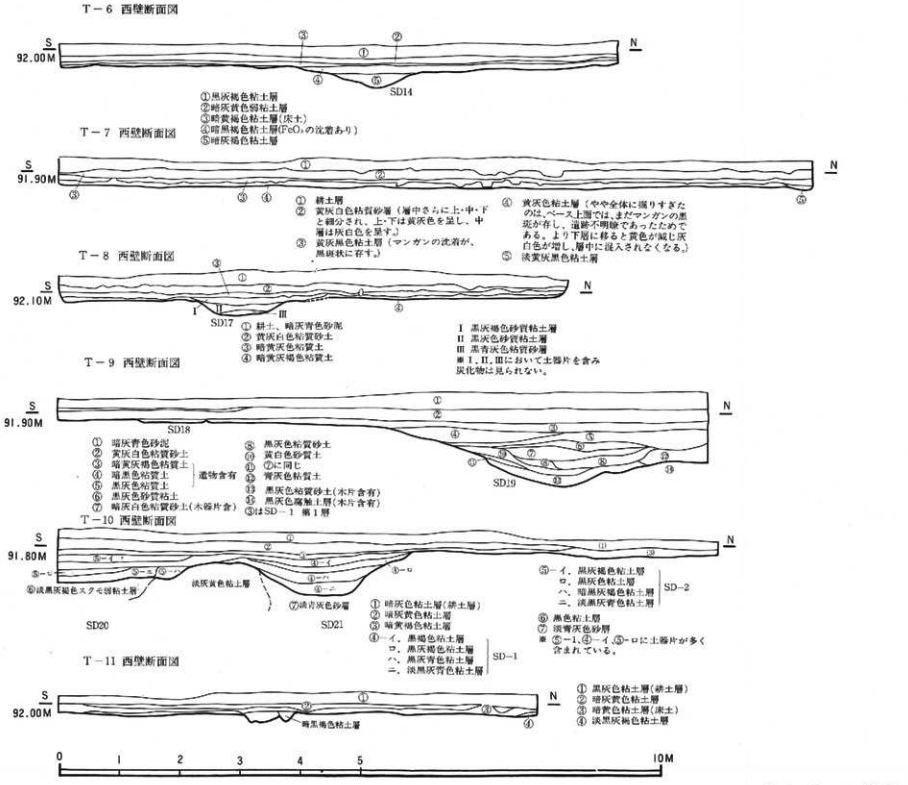
Sec③ SD72南壁断面図

①茶褐色粘土層

T－28　平面・断面実測図

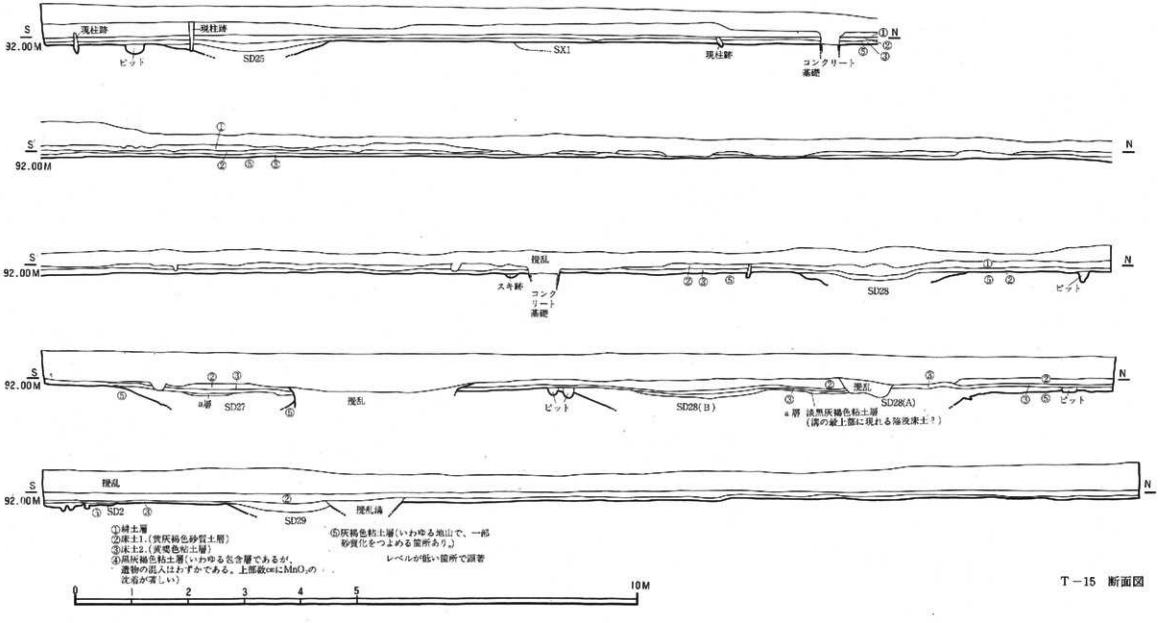

T－1 西壁断面図
T－2 東壁断面図
T－3 西壁断面図
T－4 東壁断面図
T－5 西壁断面図
90.80M
91.00M
91.00M
91.70M
91.50M
0 1 2 3 4 5 10M

T－1～T－5 断面図

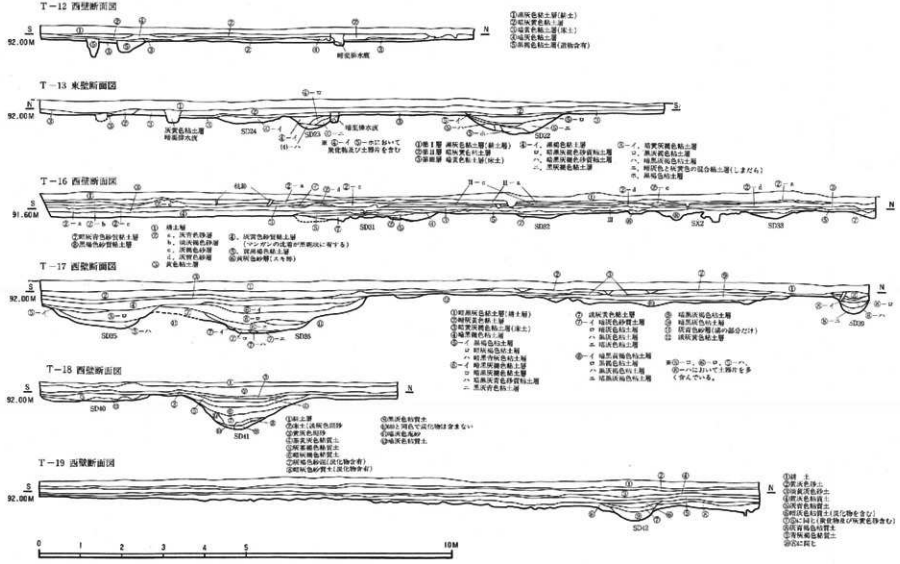

T－6 西壁断面図
S
92.00M
N
SD14
①黒灰褐色粘土層
②暗灰黄色弱粘土層
③暗黄褐色粘土層(床土)
④暗黒褐色粘土層(FeO₂の沈着あり)
⑤暗灰褐色粘土層
T－7 西壁断面図
S
91.90M
N
①耕土層
②黄灰白色粘質砂層（層中ほどに上・中・下と細分され、上・下は黄灰色を呈し、中層は灰白色を呈す。）
③黄灰黒色粘土層（マンガンの沈着が、黒斑状に存す。）
④黄灰色粘土層（やや全体に掘りすぎたのは、ベース上面では、まだマンガンの黒斑が存し、遺跡不明瞭であったためである。より下層に移ると黄色が減じ灰白色が増し、層中に混入されなくなる。）
⑤淡黄灰黒色粘土層
T－8 西壁断面図
S
92.10M
N
SD17
①耕土、暗灰青色砂質
②黄灰白色粘質砂土
③暗灰色粘質土
④暗黄灰褐色粘質土
I 黒灰褐色砂質粘土層
II 黒灰色砂質粘土層
III 黒青灰色粘質砂層
※I、II、IIIにおいて土器片を含み炭化物は見られない。
T－9 西壁断面図
S
91.90M
N
SD18
SD19
①暗灰青色砂泥
②黄灰白色粘質砂土
③暗黄灰褐色粘質土
④暗黒色粘質土
⑤黒灰色粘質土
⑥黒灰色砂質粘土
⑦暗灰白色粘質砂土(木器片含)
遺物含有
⑧黒灰色粘質砂土
⑨黄白色砂質土
⑩⑦に同じ
⑪青灰色粘質土
⑫黒灰色粘質砂土(木片含有)
⑬黒灰色腐植土層(木片含有)
⑭はSD－1 第1層
T－10 西壁断面図
S
91.80M
N
SD20
SD21
⑤－ロ
⑤－ハ
⑤－ニ
⑤－イ
①－イ
①－ロ
⑥淡黒灰褐色スクモ弱粘土層
淡黄灰黄色粘土層
⑦暗青灰色砂層
①暗灰色粘土層(耕土層)
②暗灰黄色粘土層
③暗黄褐色粘土層
④－イ、黒褐色粘土層
ロ、黒灰褐色粘土層
ハ、黒灰青色粘土層
ニ、淡黒灰青色粘土層
SD－1
⑤－イ、黒灰褐色粘土層
ロ、黒灰色粘土層
ハ、暗黒灰褐色粘土層
ニ、淡黒灰青色粘土層
SD－2
⑥黒色粘土層
⑦淡青灰色砂層
※⑤－1、④－イ、⑤－ロに土器片が多く含まれている。
T－11 西壁断面図
S
92.00M
N
暗黒褐色粘土層
①黒灰色粘土層(耕土層)
②暗灰黄色粘土層
③暗黄色粘土層(床土)
④淡黒灰褐色粘土層
0
1
2
3
4
5
10M

T－6 ～T－11 断面図

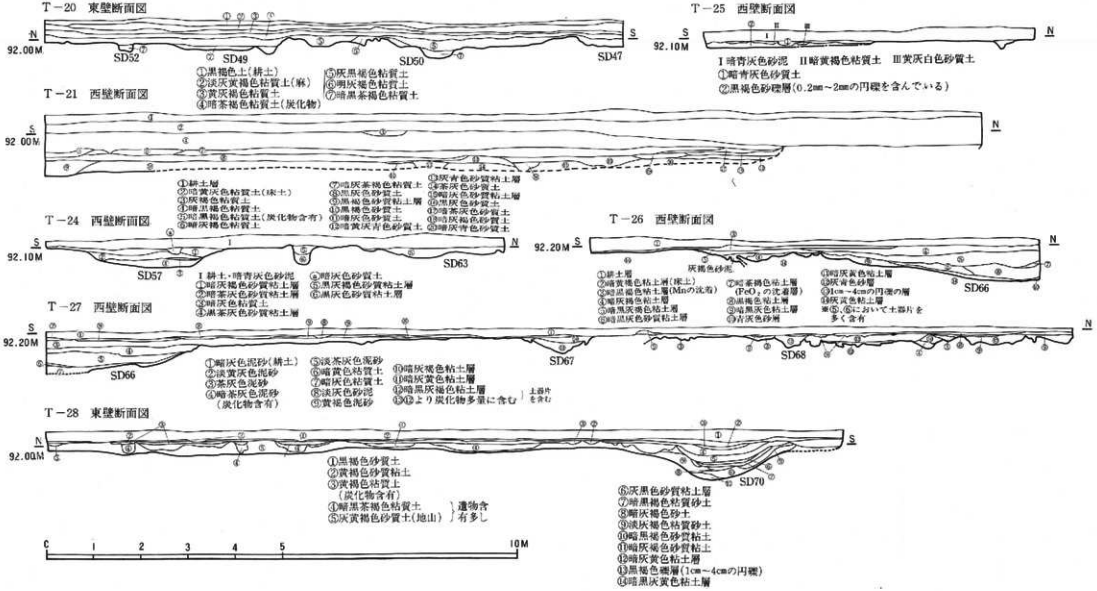
T－15 西壁断面図



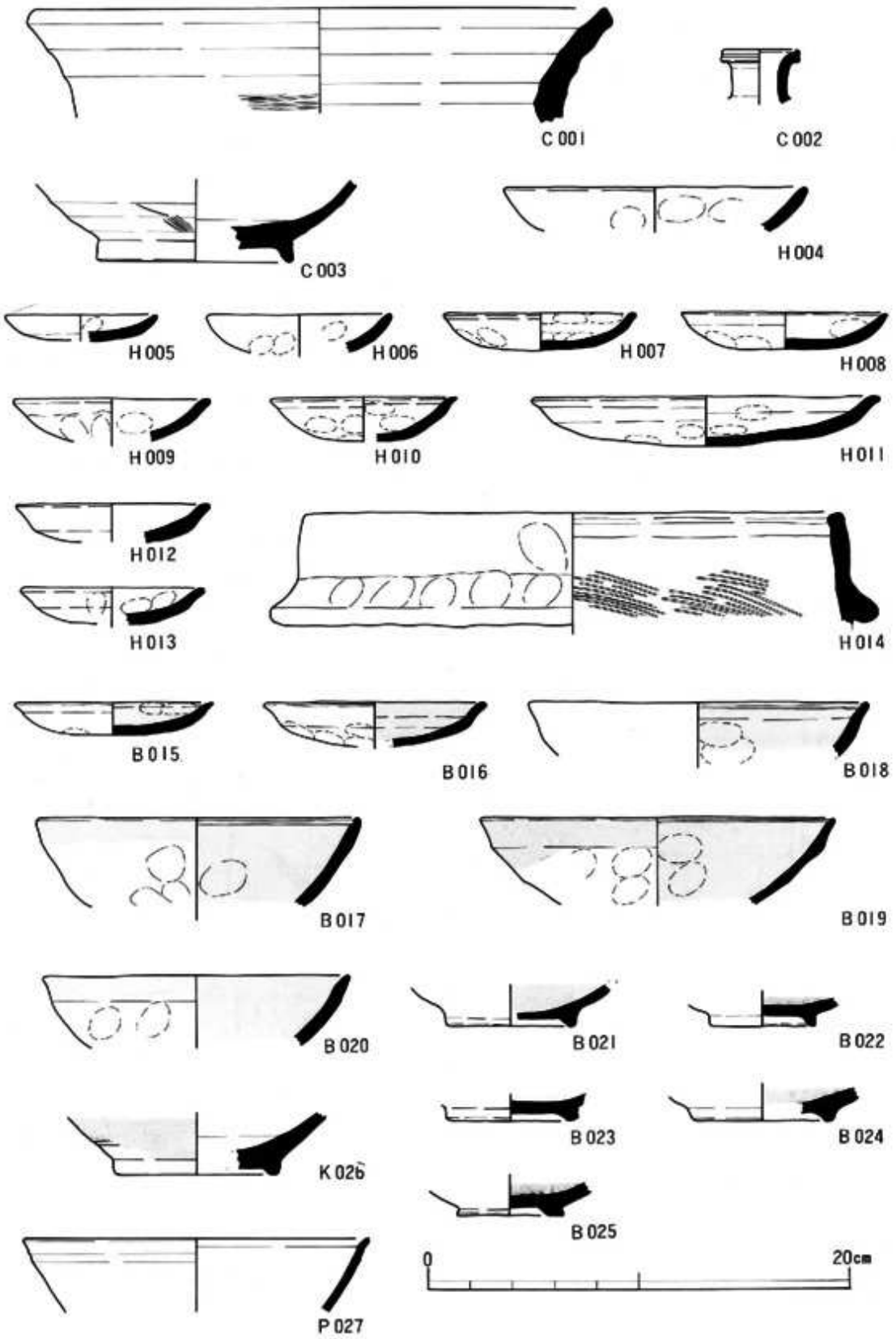
T－15 断面図



T－12、T－13、T－16～T－19断面図

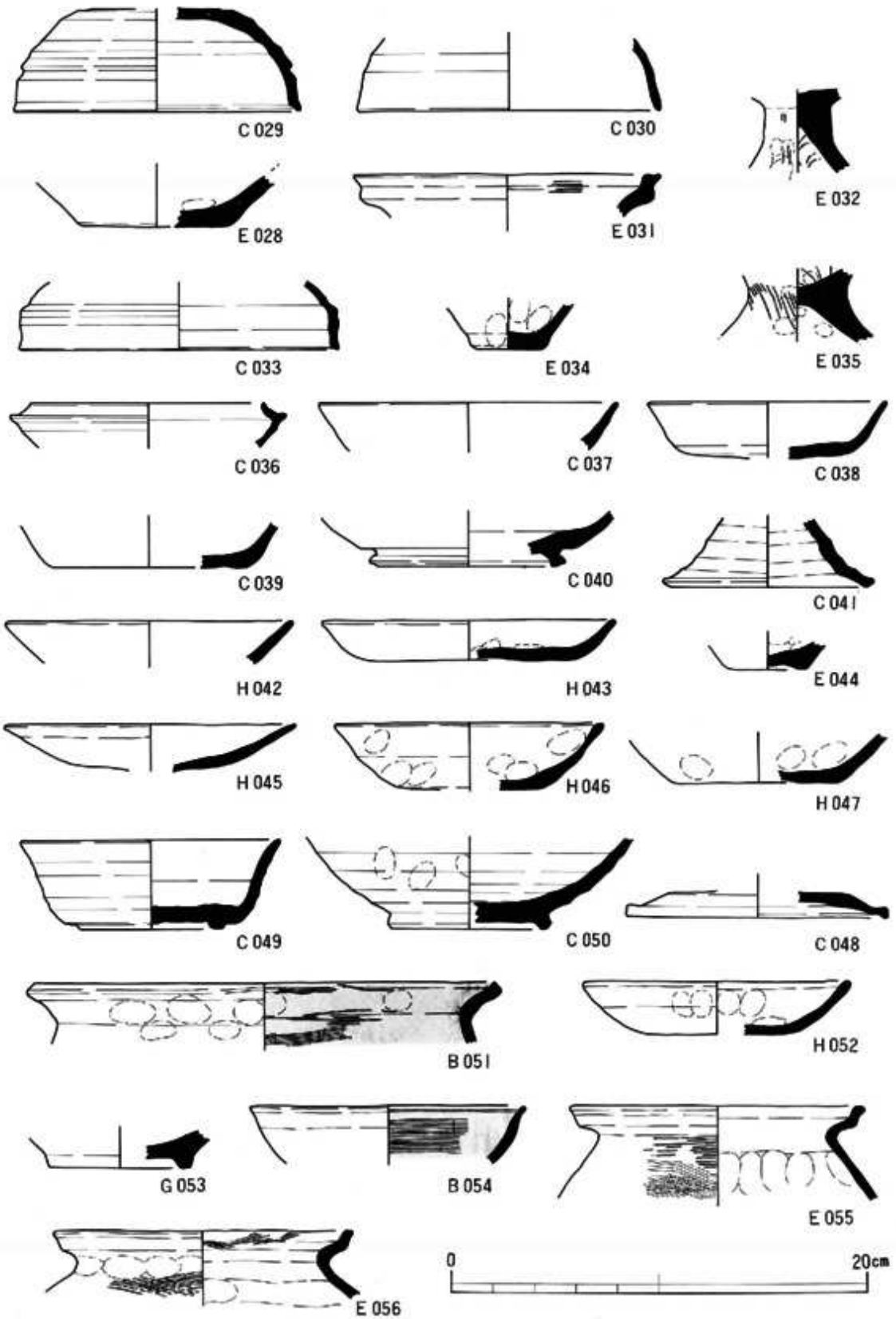


T－20～T－21、T－24～T－28断面図

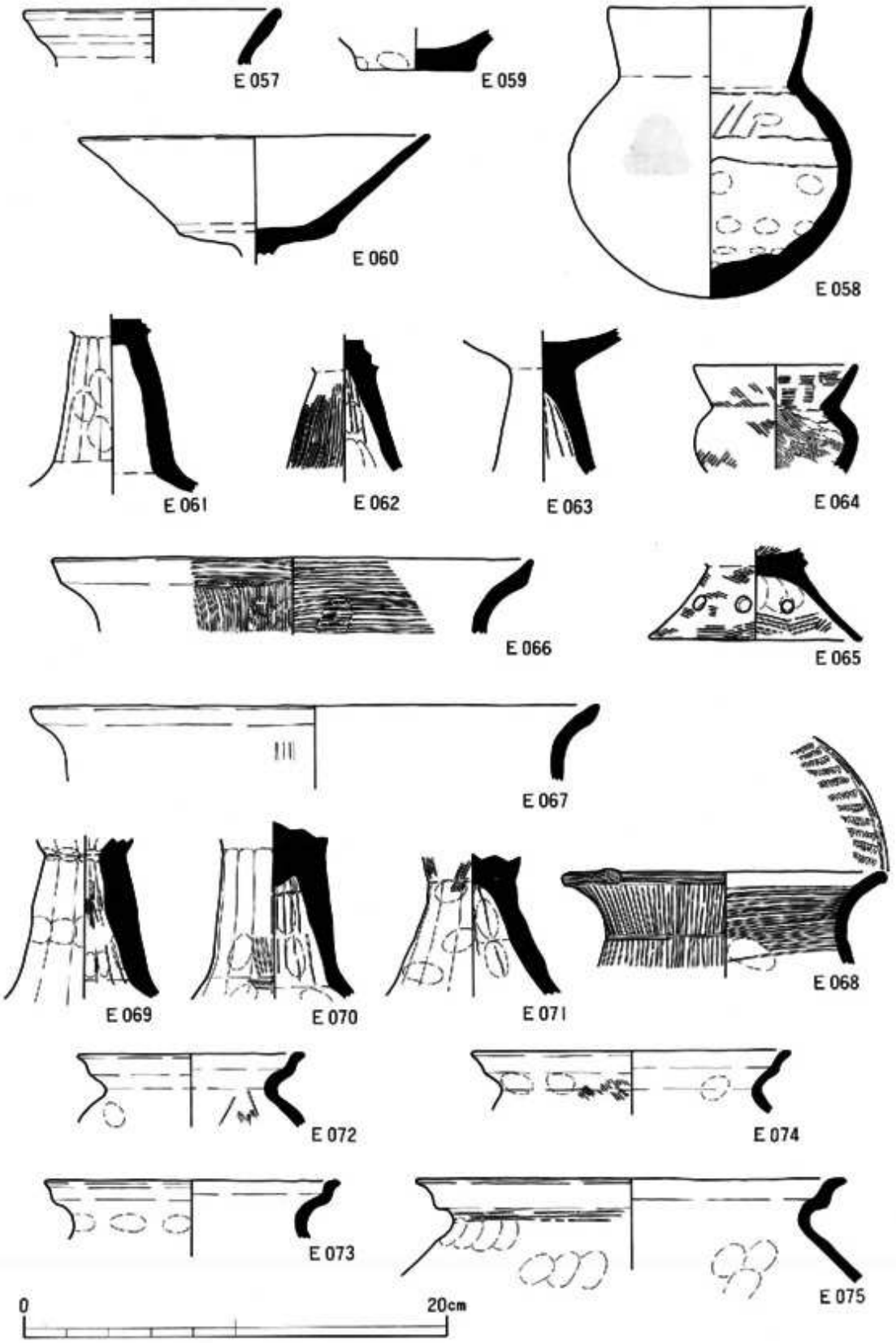


C001～P027(T－1　包含層)

PL. 97

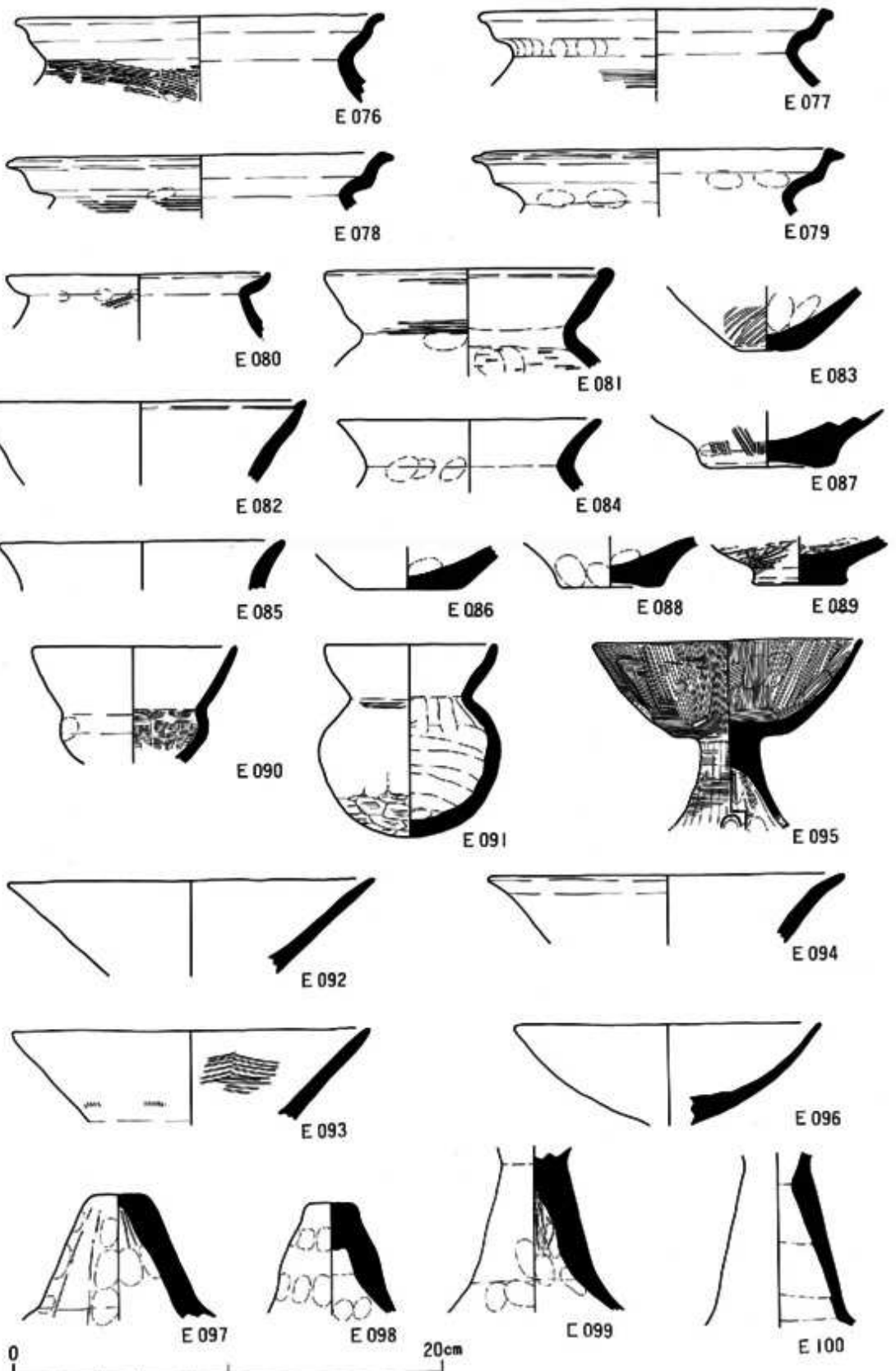


E028～C030(T－1　SD3) E031～C033(T－2　包含層)　E034～H043(T－2　SD3)　E044～H047(T－2　SD4)　C048～H052(T－3　包含層)　SD53～B054(T－3　SD6)　E055～E056(T－9　SD19)

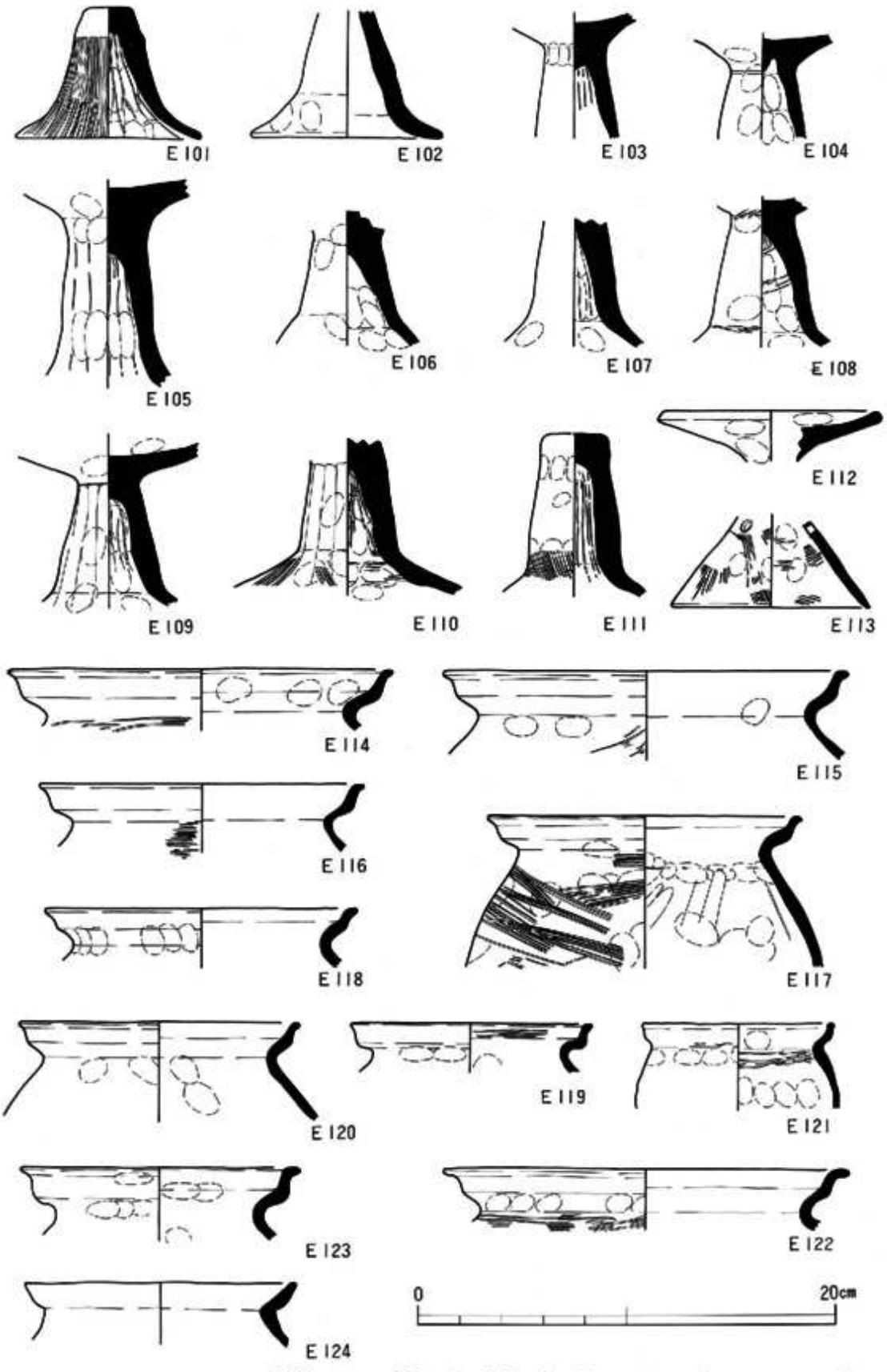


E057～E063(T－9　SD19)　E064・E065(T－9　SK3)　E066～E075 (T－10　SD20)

PL. 99

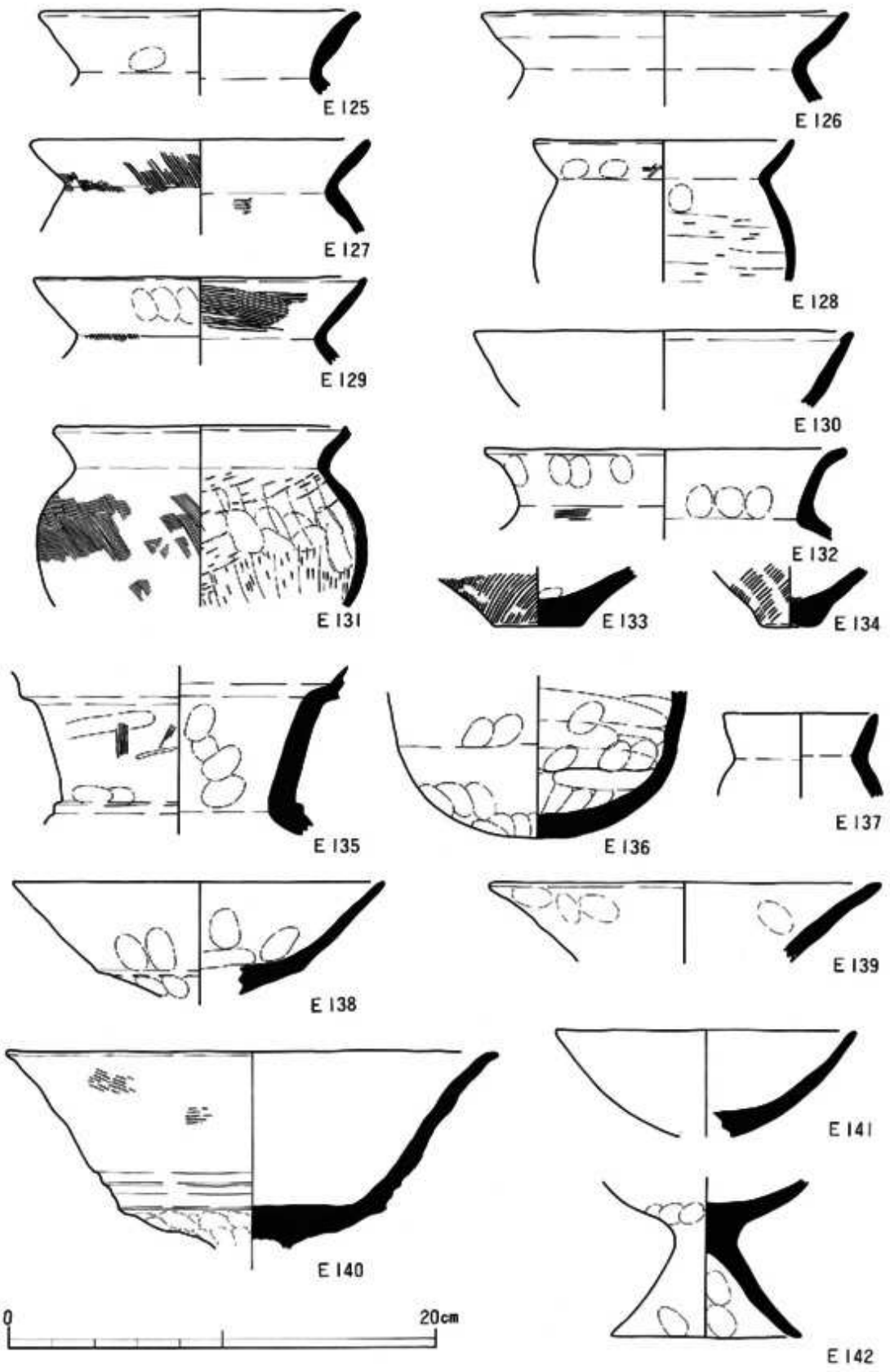


E076～E100(T－10　SD20)

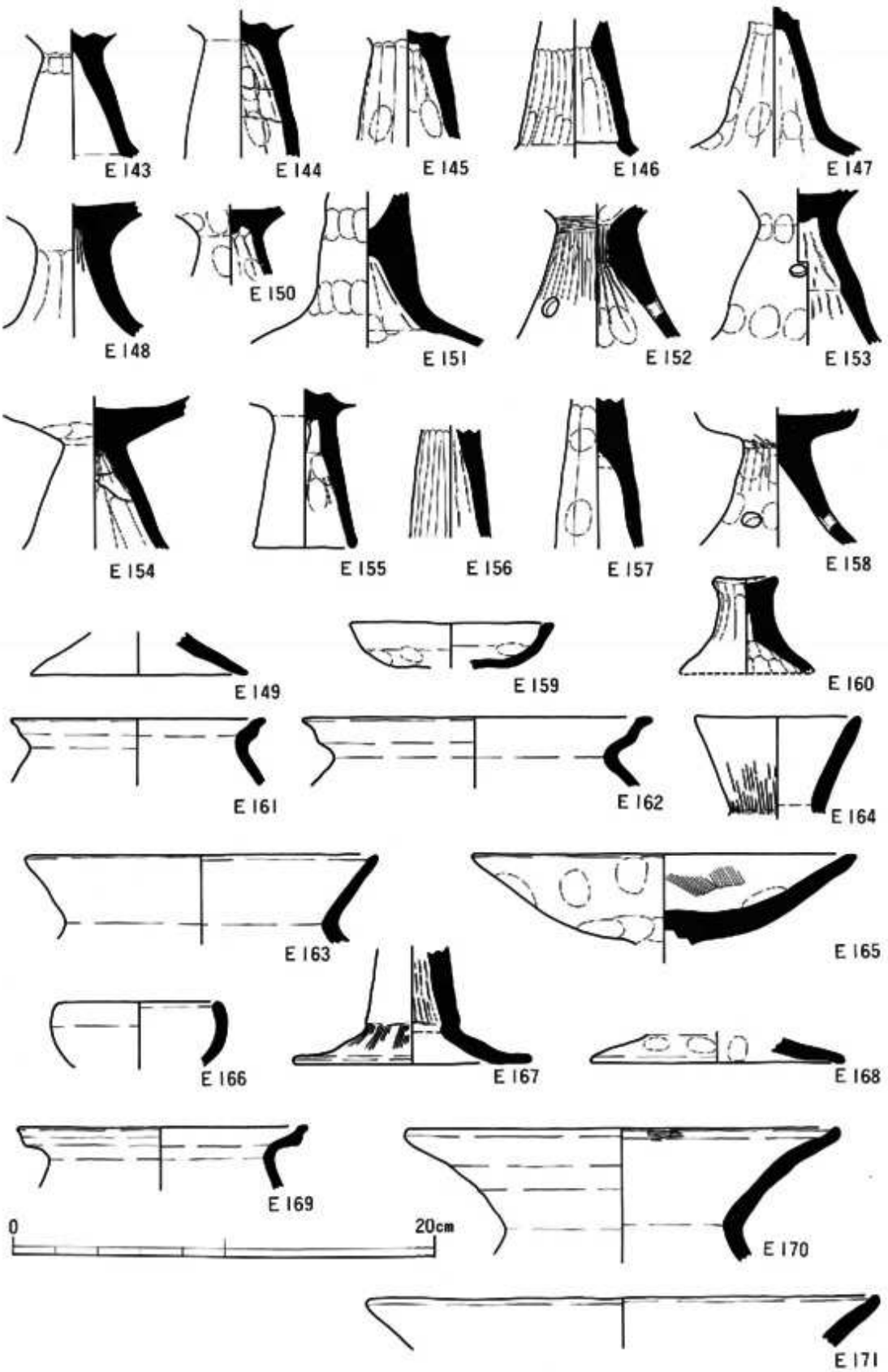


E101～E113 (T－10　S D20)　E114～E124 (T－10　S D21)

PL. 101

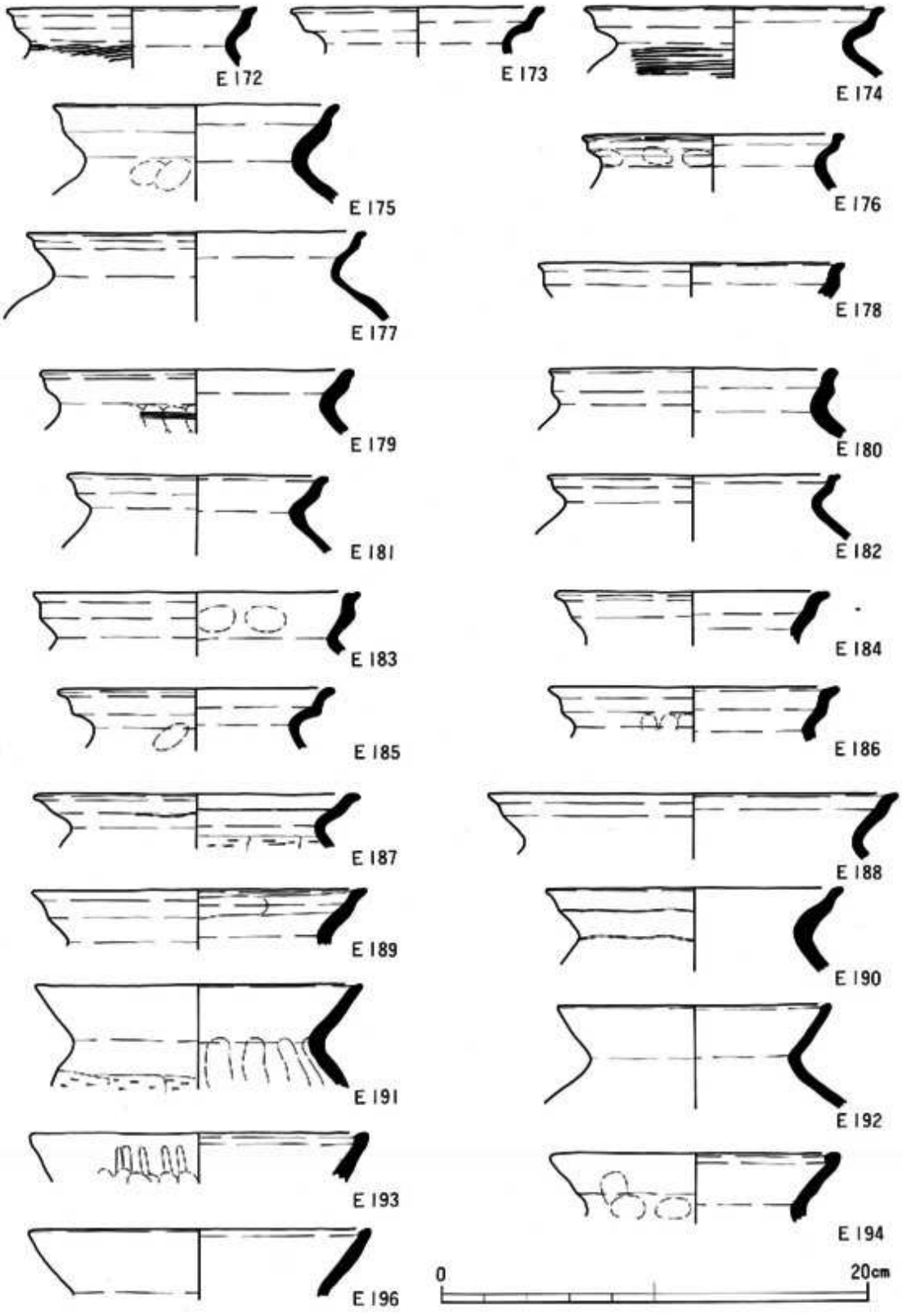


E125～E142(T－10　SD21)

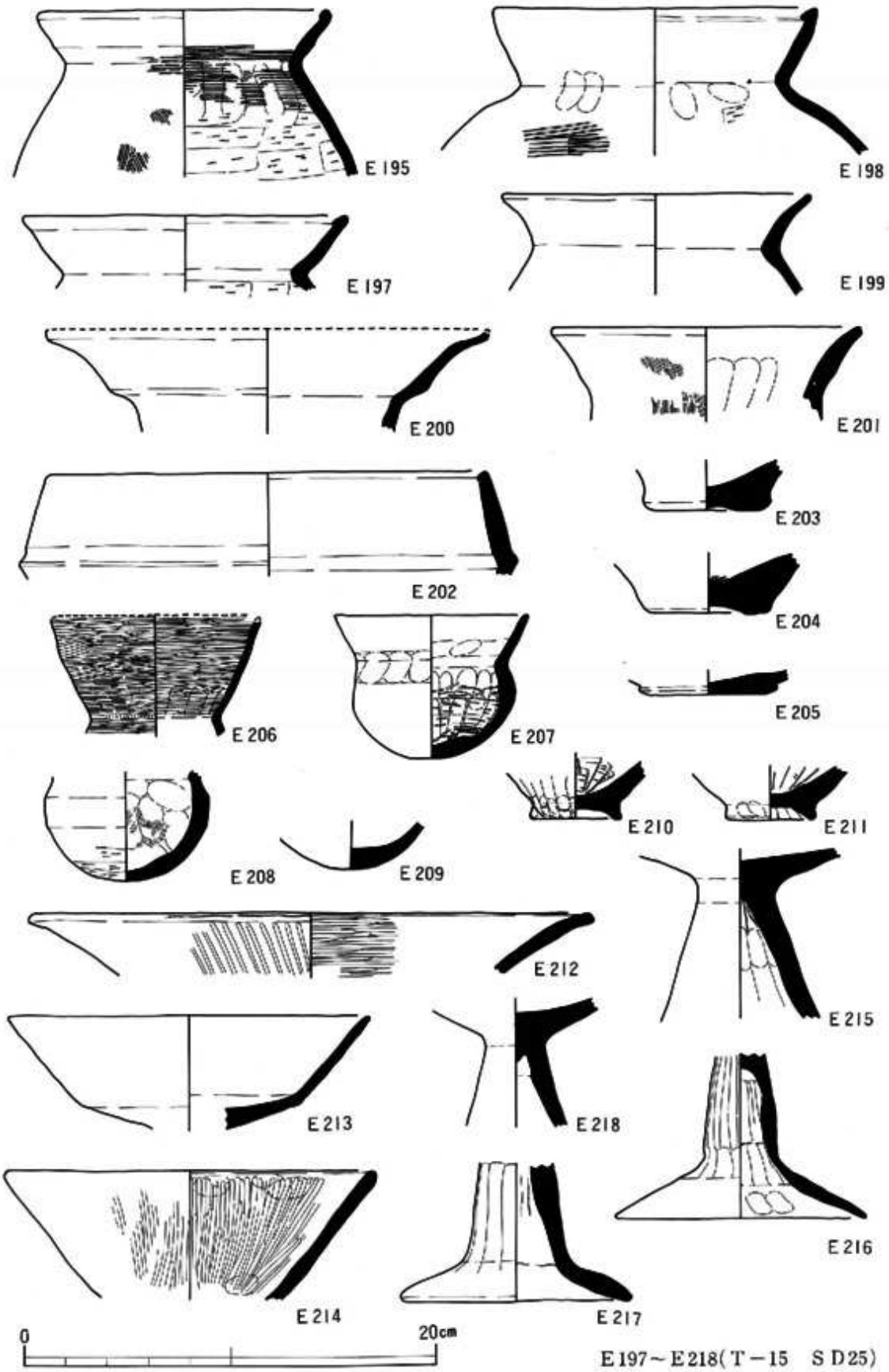


E143～E160(T－10　SD21)　E161・E162(T－13　SD22)　E163～E168(T－13　SD24)　E169～E170(T－15　包含層)

PL. 103

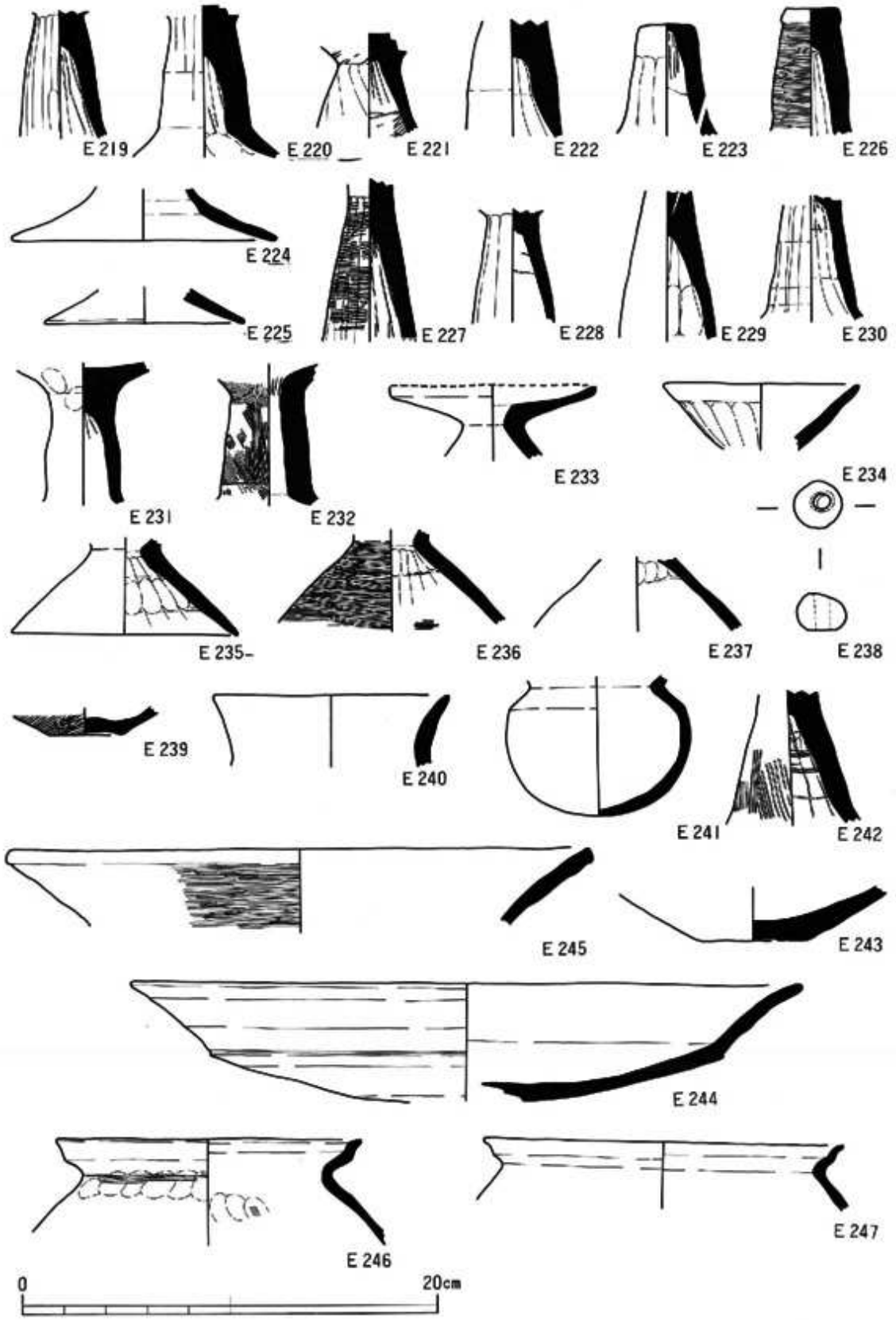


E172～E196(T－15　SD25)

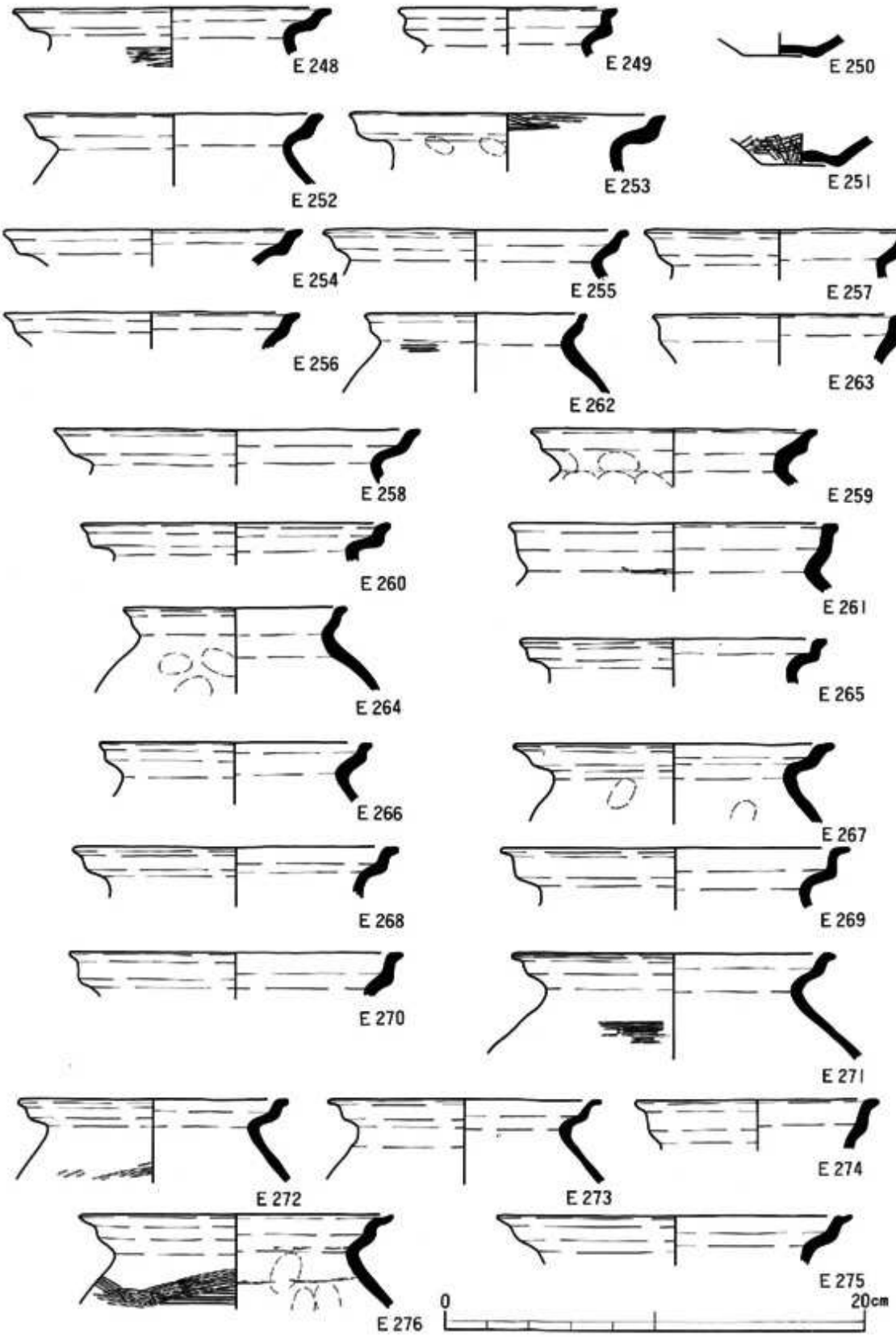


E 197～E 218(T－15　S D25)

PL. 105

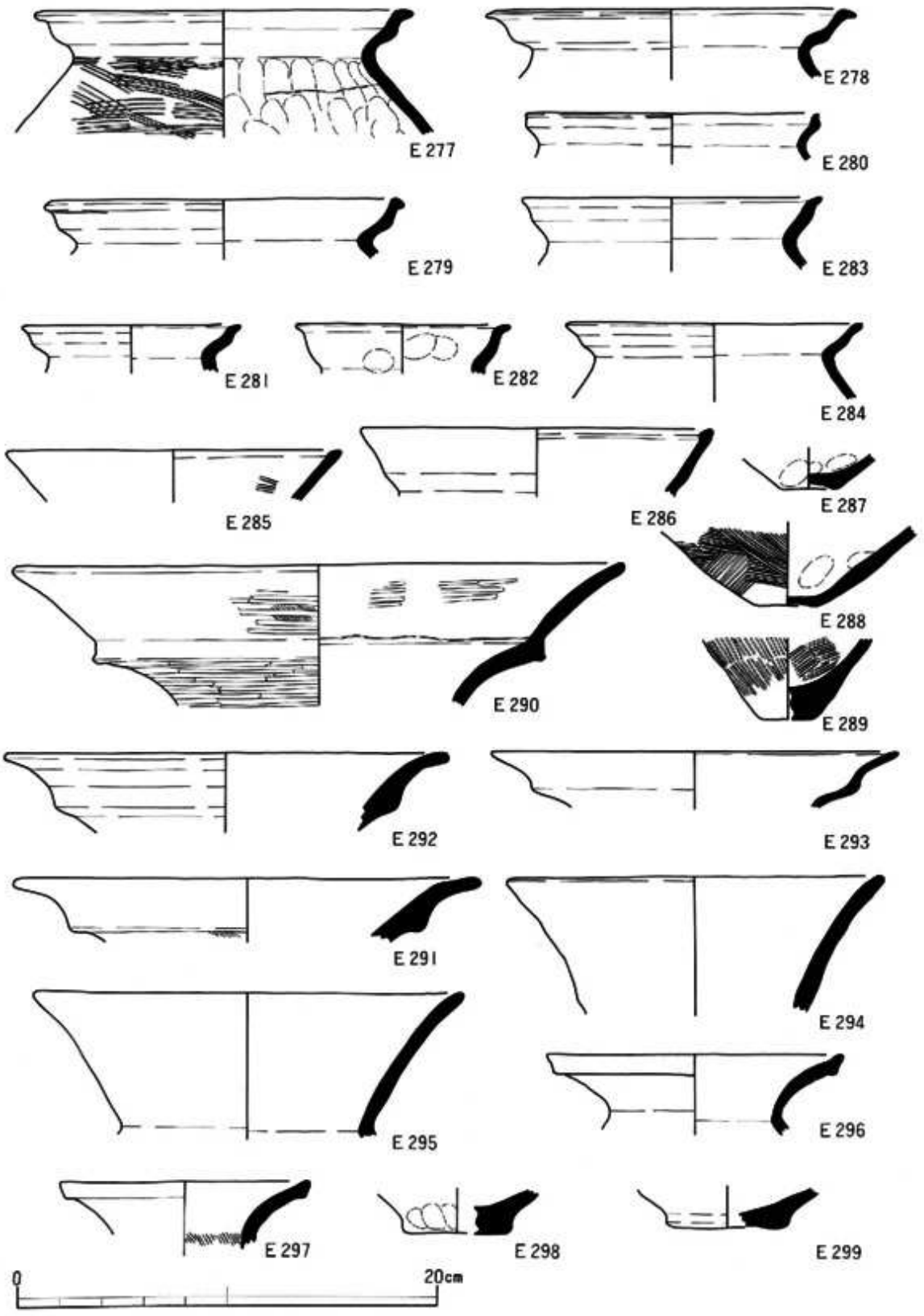


E219～E238(T－15　SD25)　E239～E242(T－15　SD26)　E243(T－15　SD25)
E244～E247(T－15　SD28)

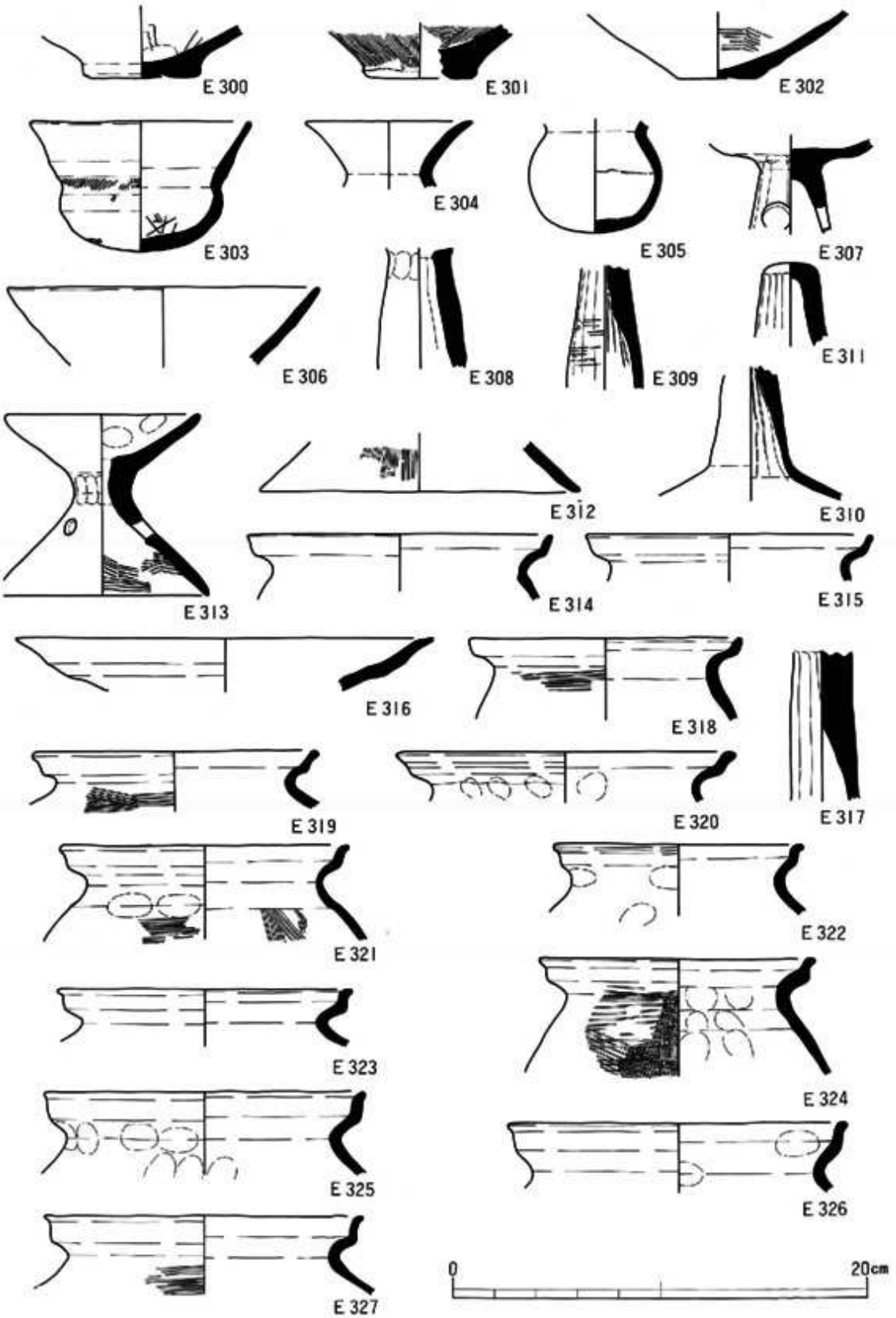


E248～E251(T－15　SD28)　E252～E276(T－15　SD29)

PL. 107

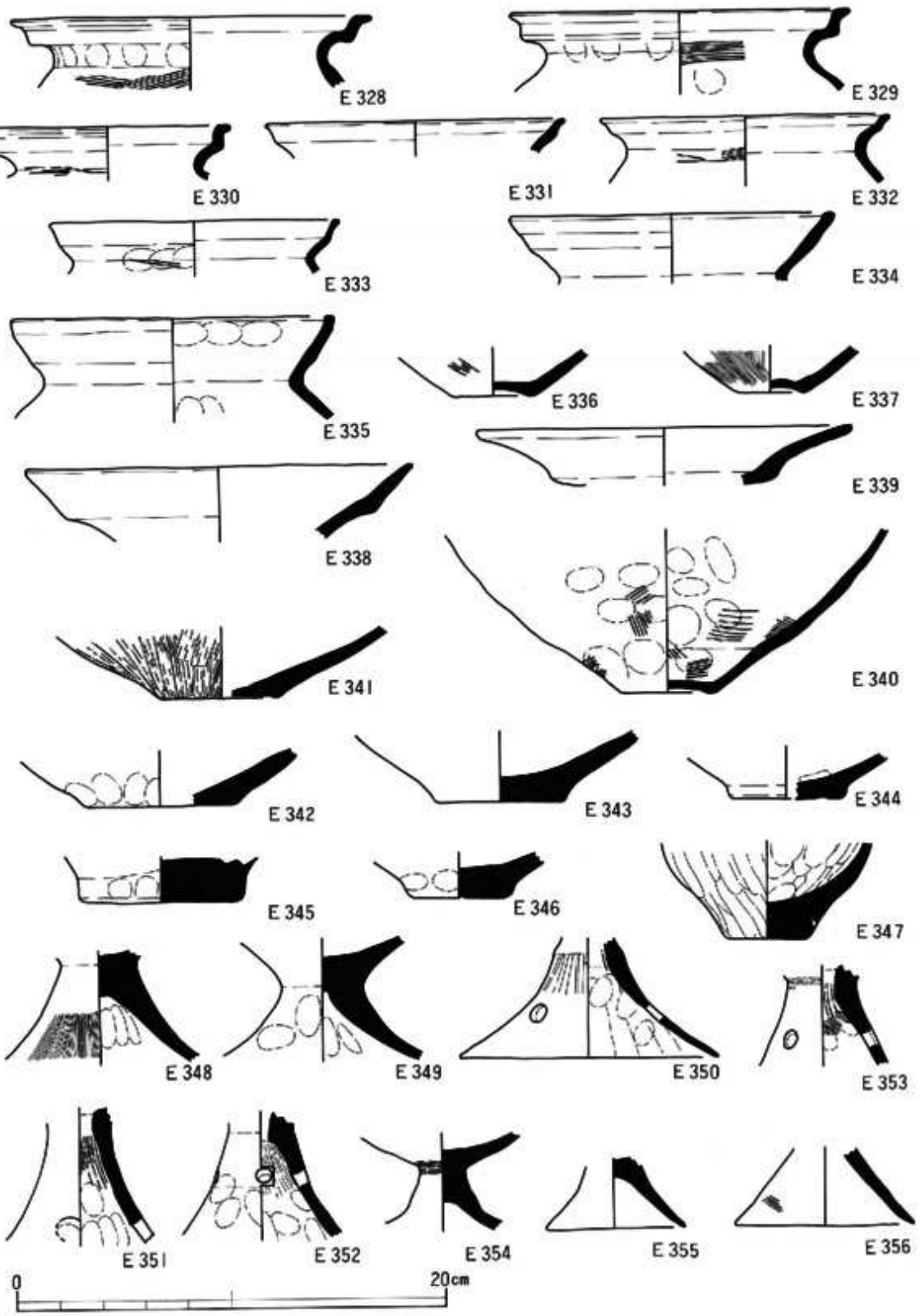


E277～E299(T－15　SD29)

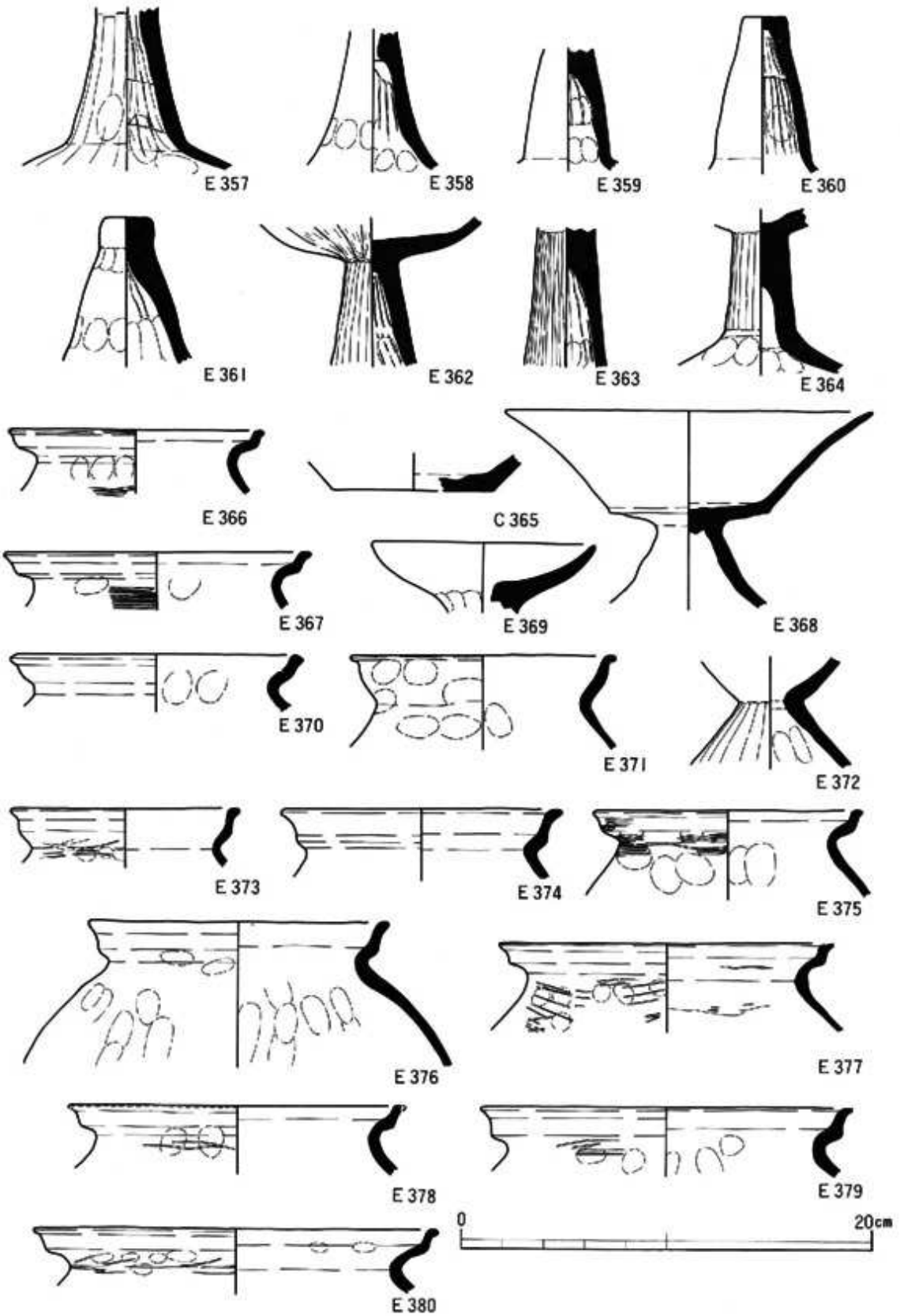


E300～E313(T－15　SD29)　E314(T－16　包含層)
E315～E317(T－16　SD33)　E318～E327(T－16　SD34)

PL. 109

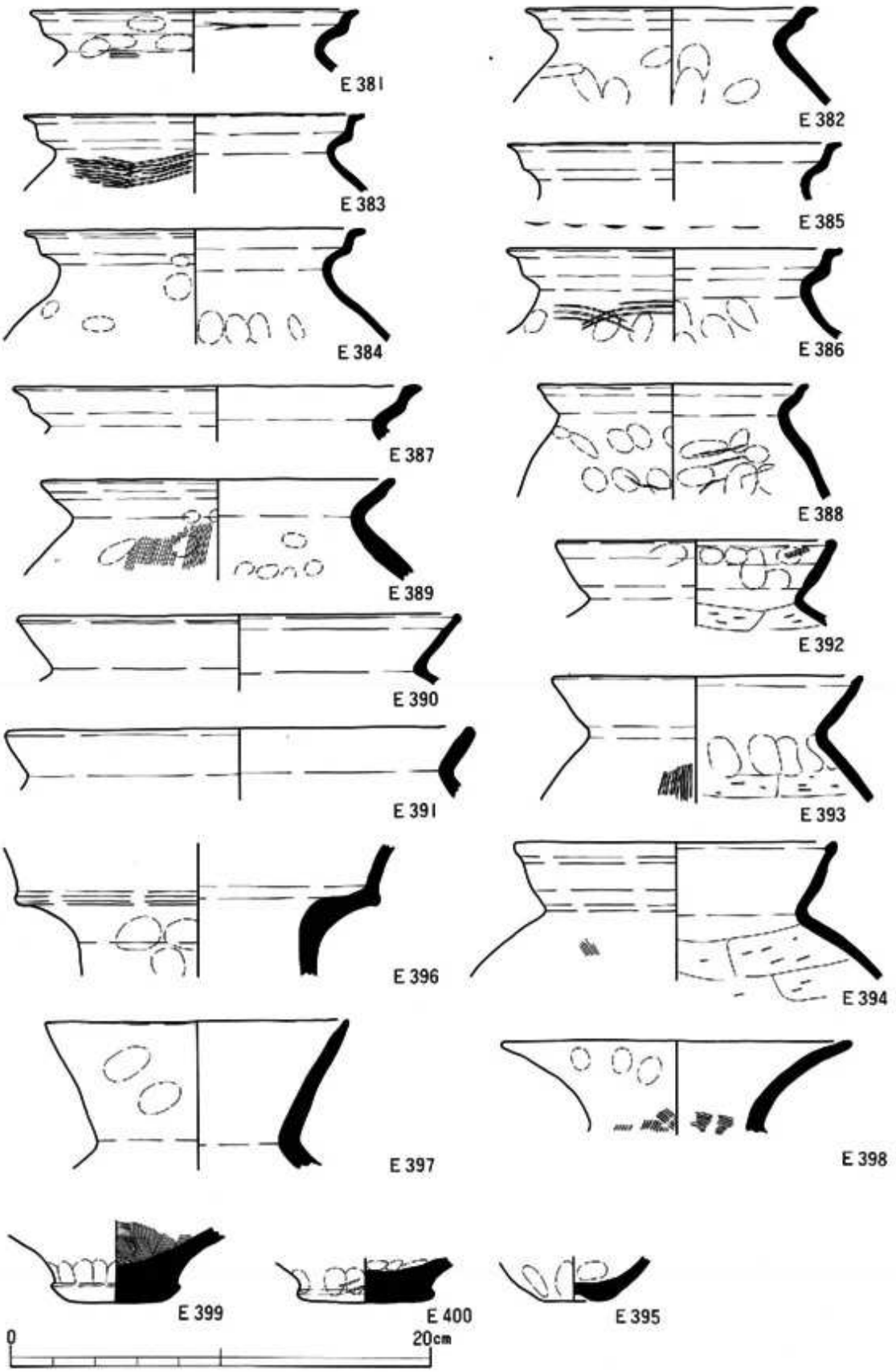


E328～E356(T－16　SD34)

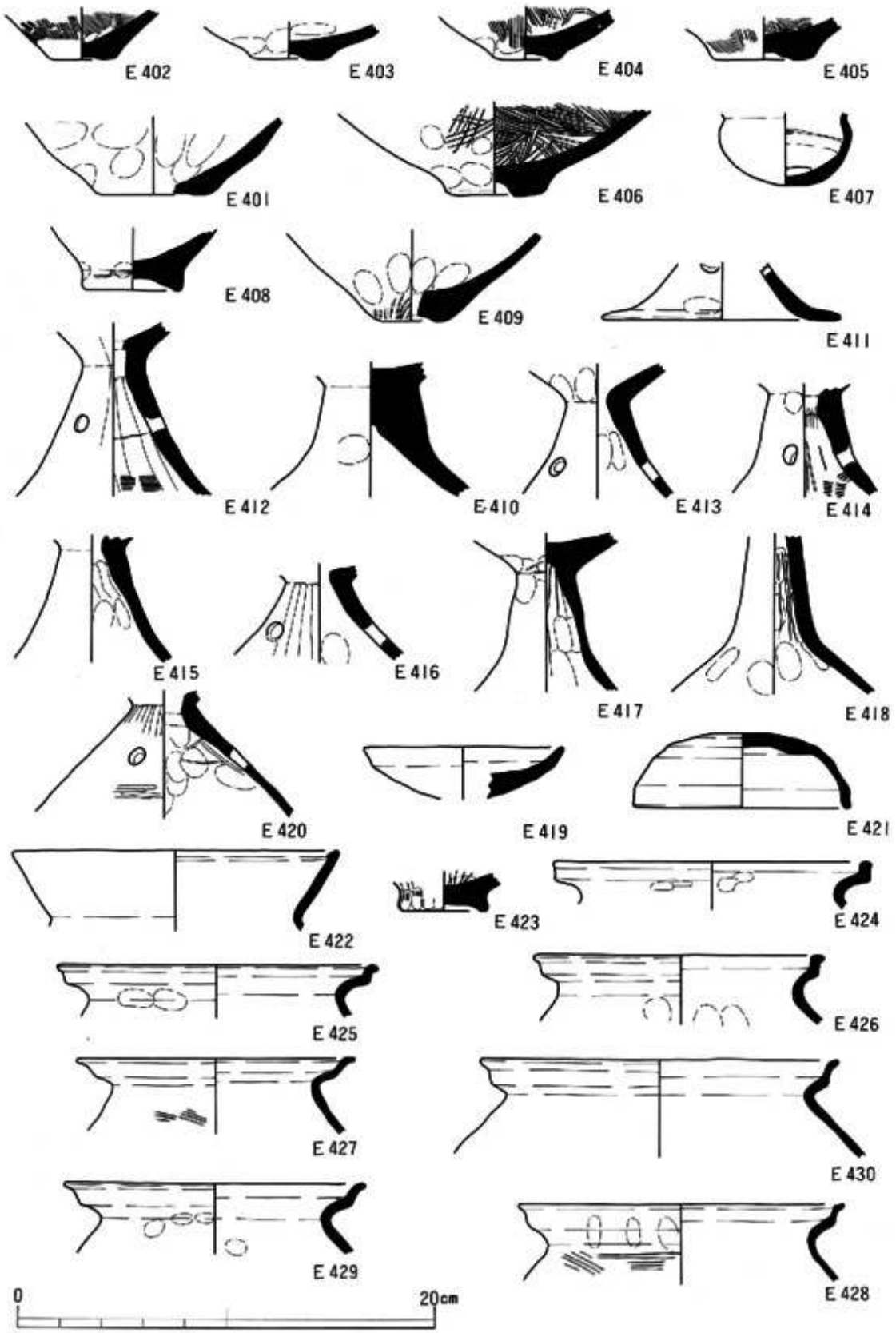


E357～C365(T－16　SD34)　E366～E369（T－16　SX2）　E370・E371（T－17　SD35)　E372(T－17　SD37)　E373～E380(T－17　SD38)

PL. 111

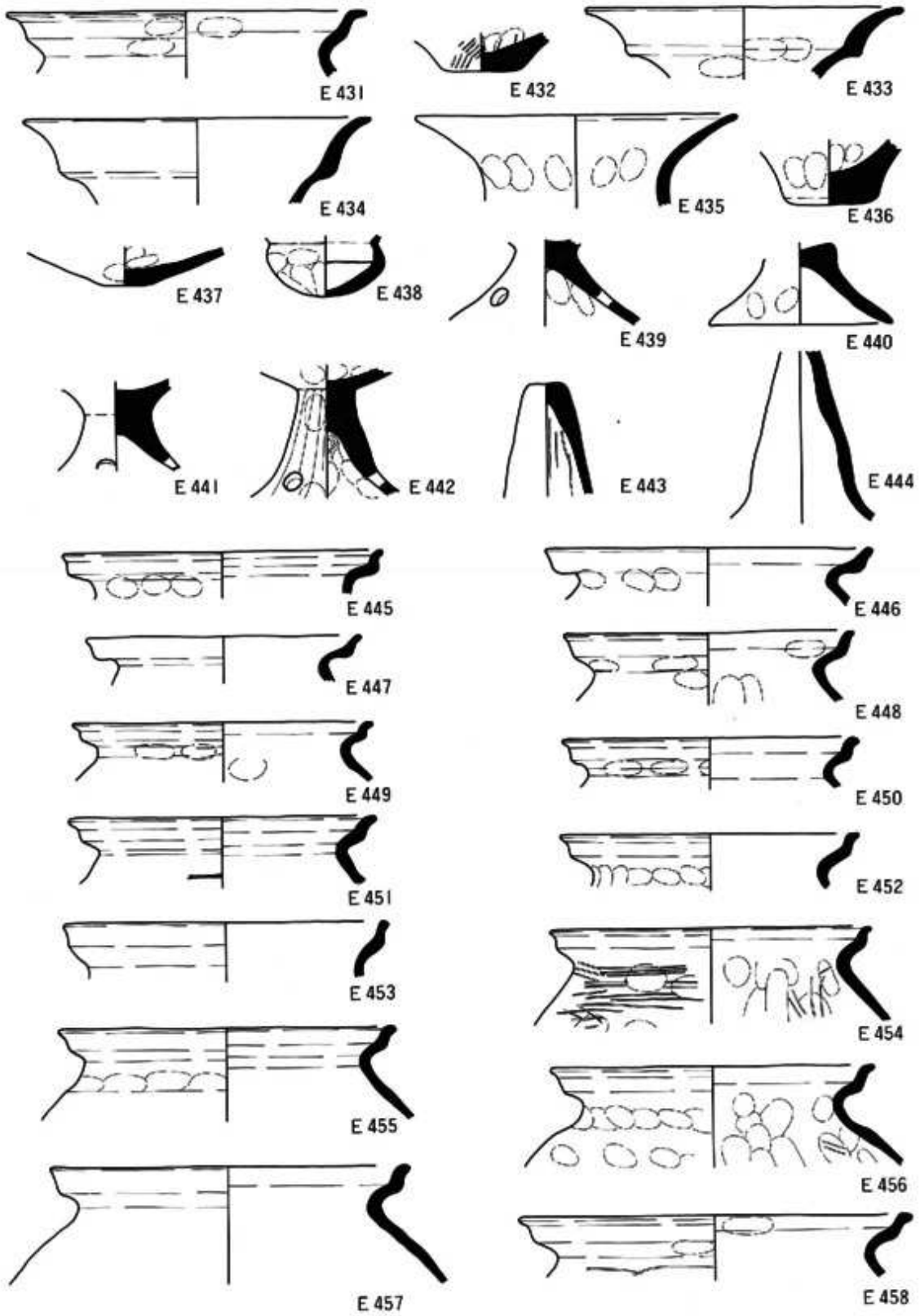


E 381～E 400(T－17　S D 38)

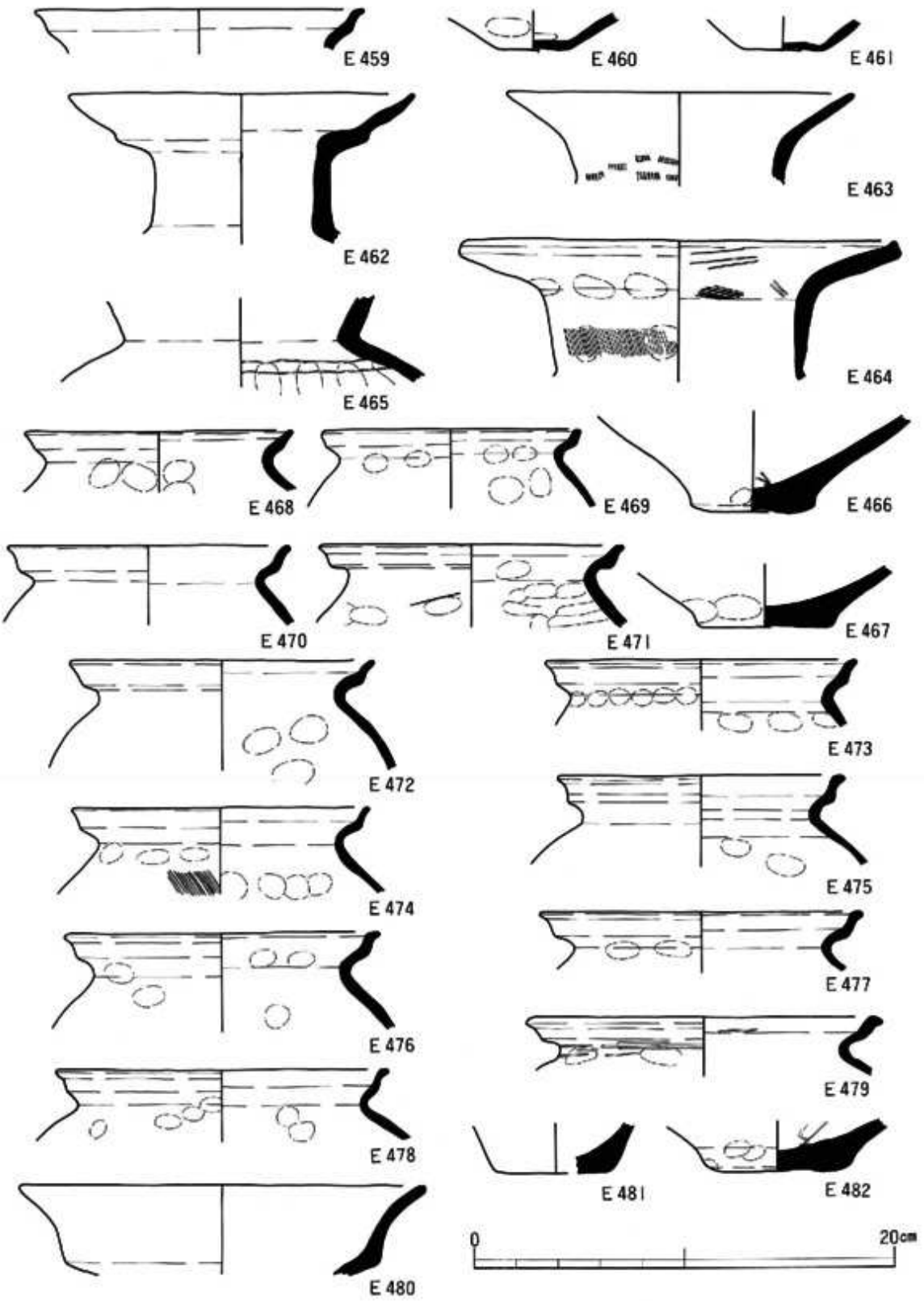


E402～E421(T－17　SD38)　E422～E423(T－17　SD39)　E434(T－17　SH 2)　E425(T－18　SD40)　E426～E430(T－18　SD41)

PL. 113

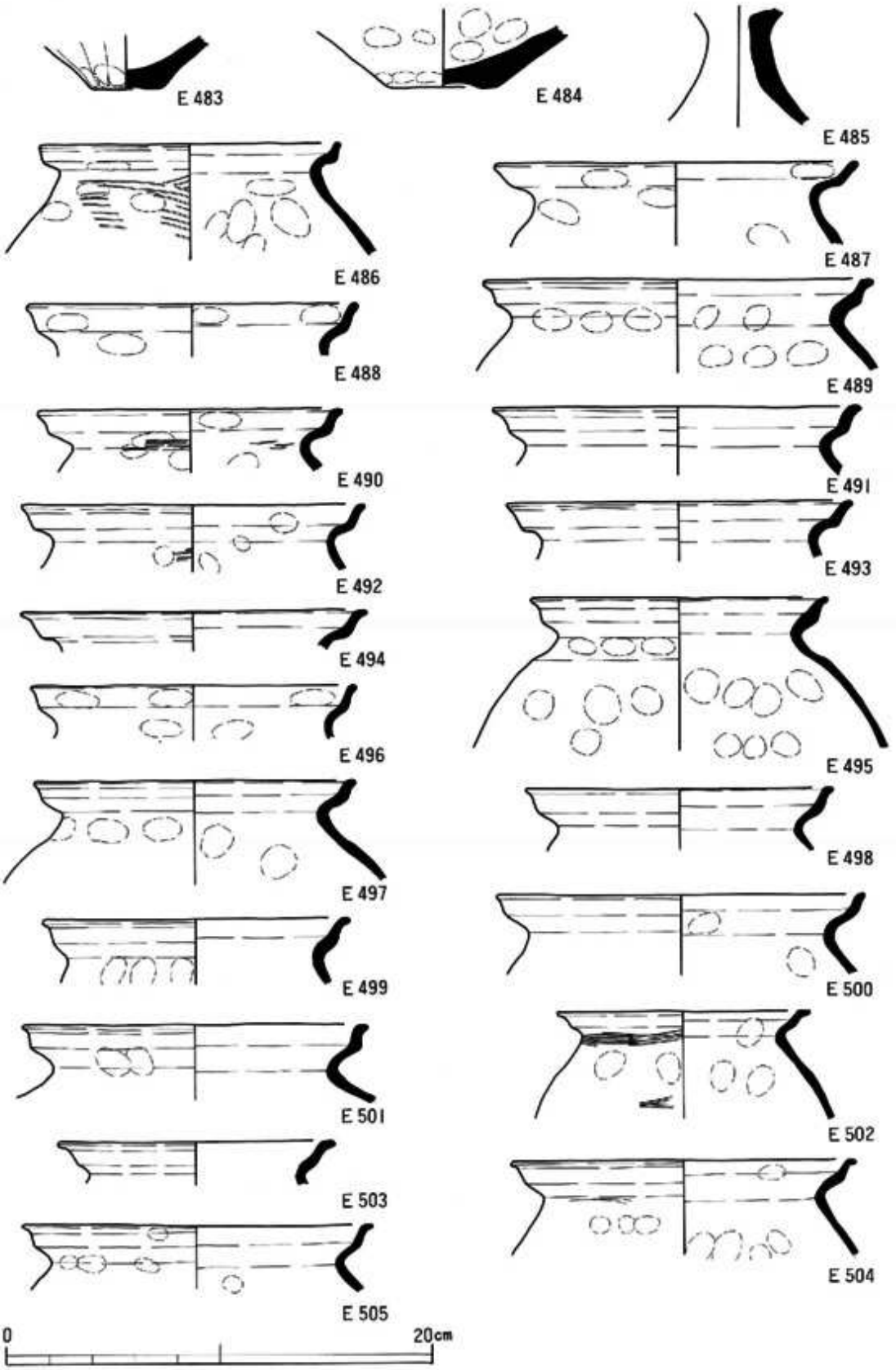


E431～E444(T－18　S D41)　E445(T－18　S K16)
E446～E458(T－18　S K17)

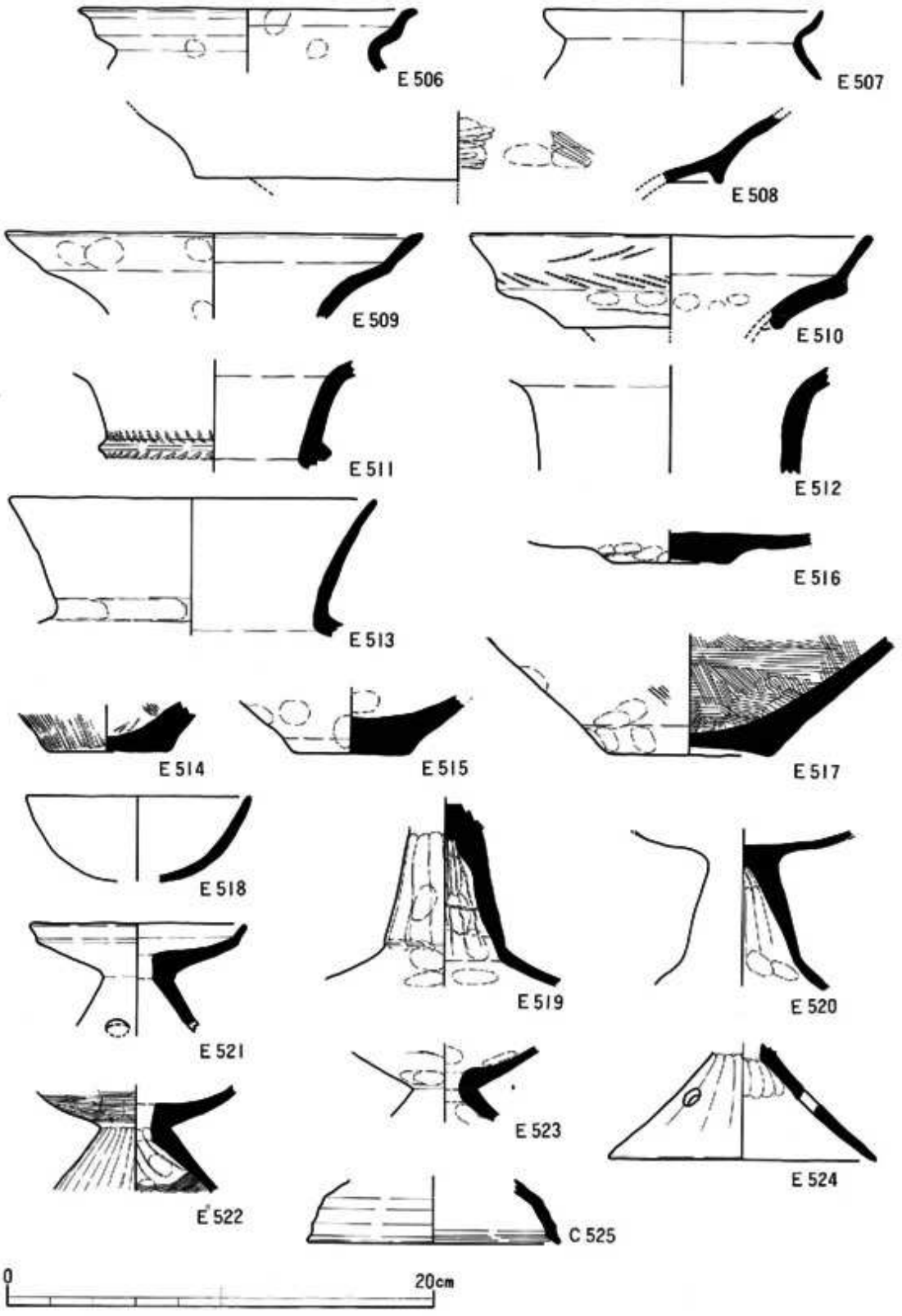


E459～E467(T－18　SK17)　E468～E482(T－19　SD42)

PL. 115

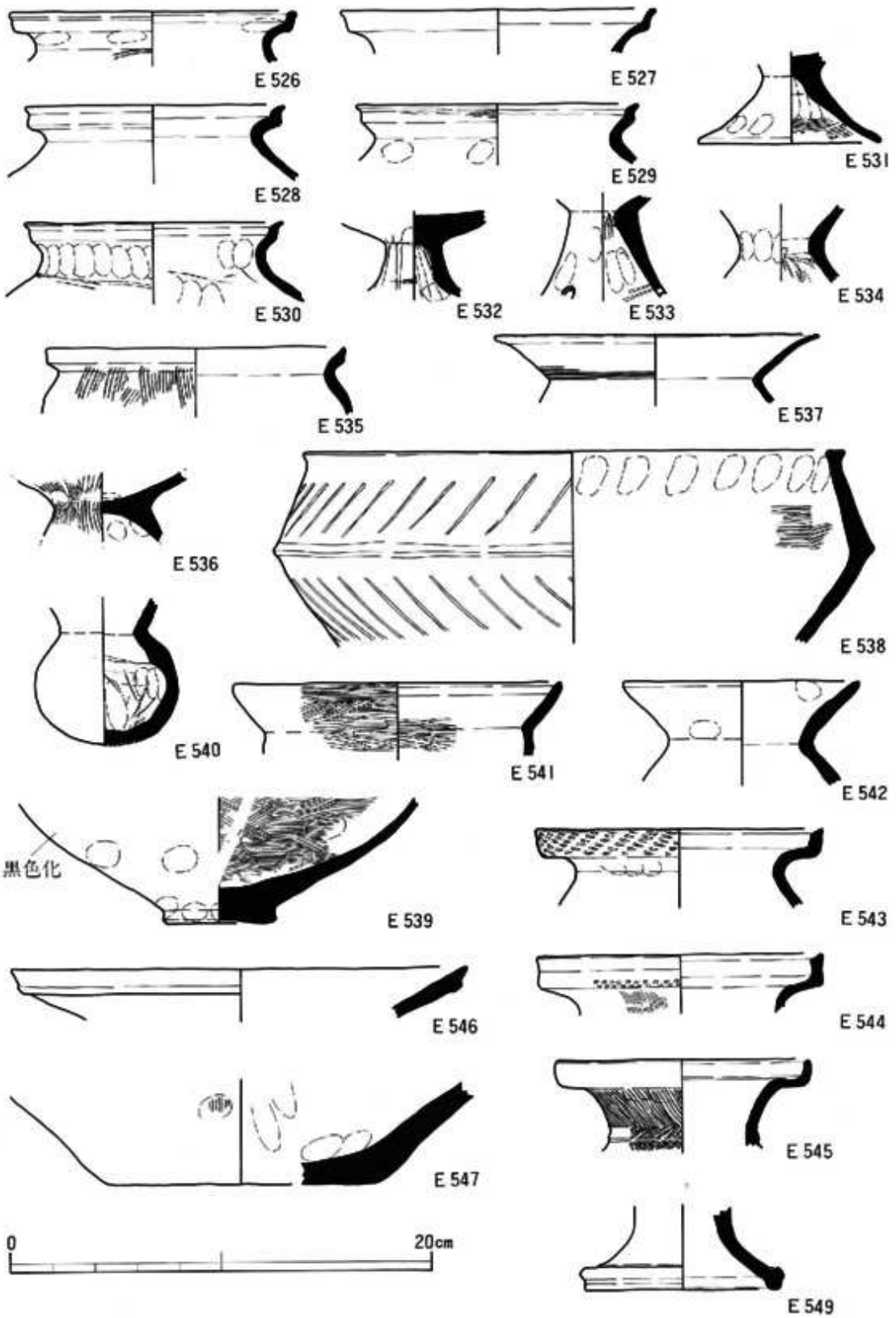


E483～E485(T－19　SD42)　E486～E505(T－20　SD51)

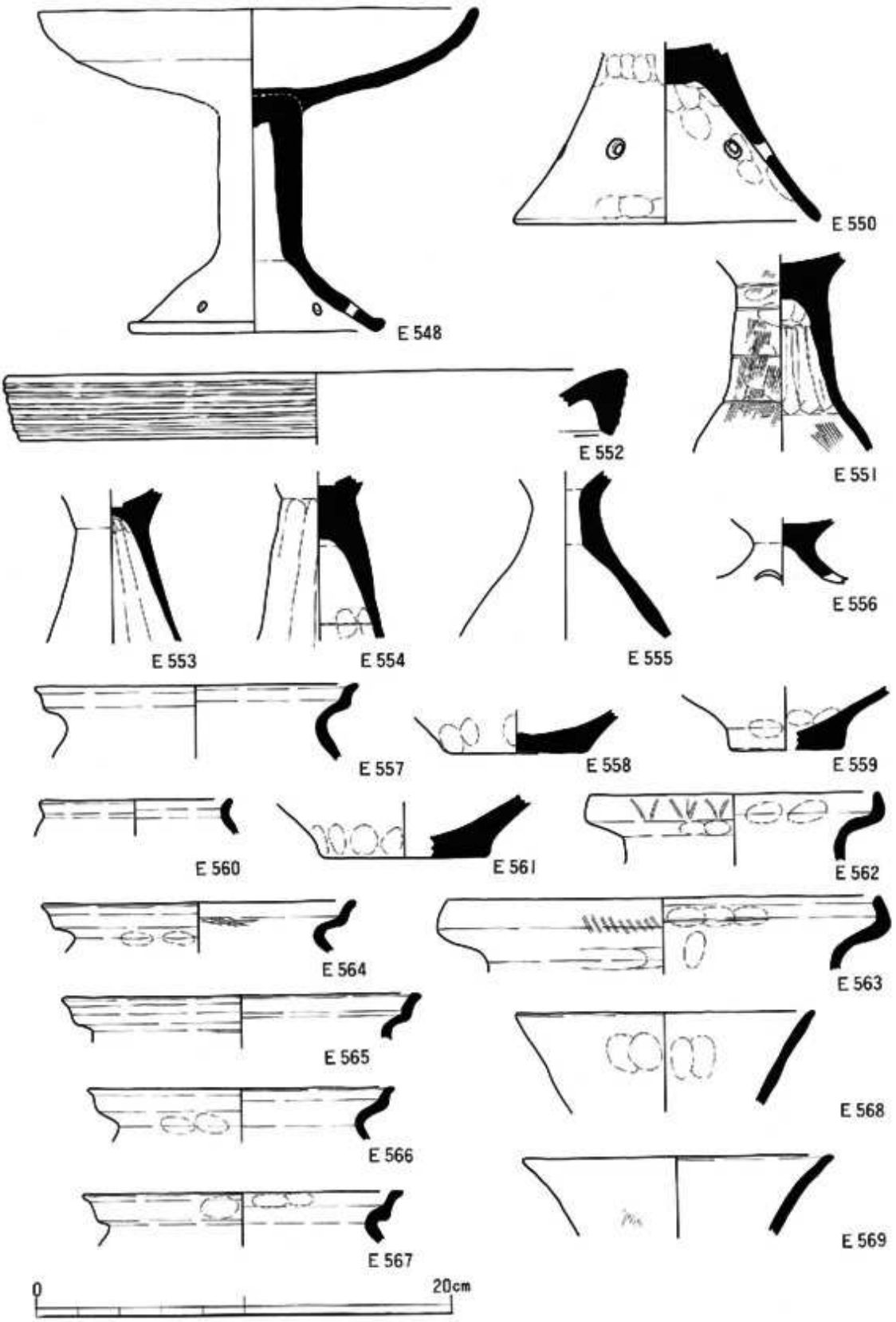


E506～C525(T－20　SD51)

PL. 117

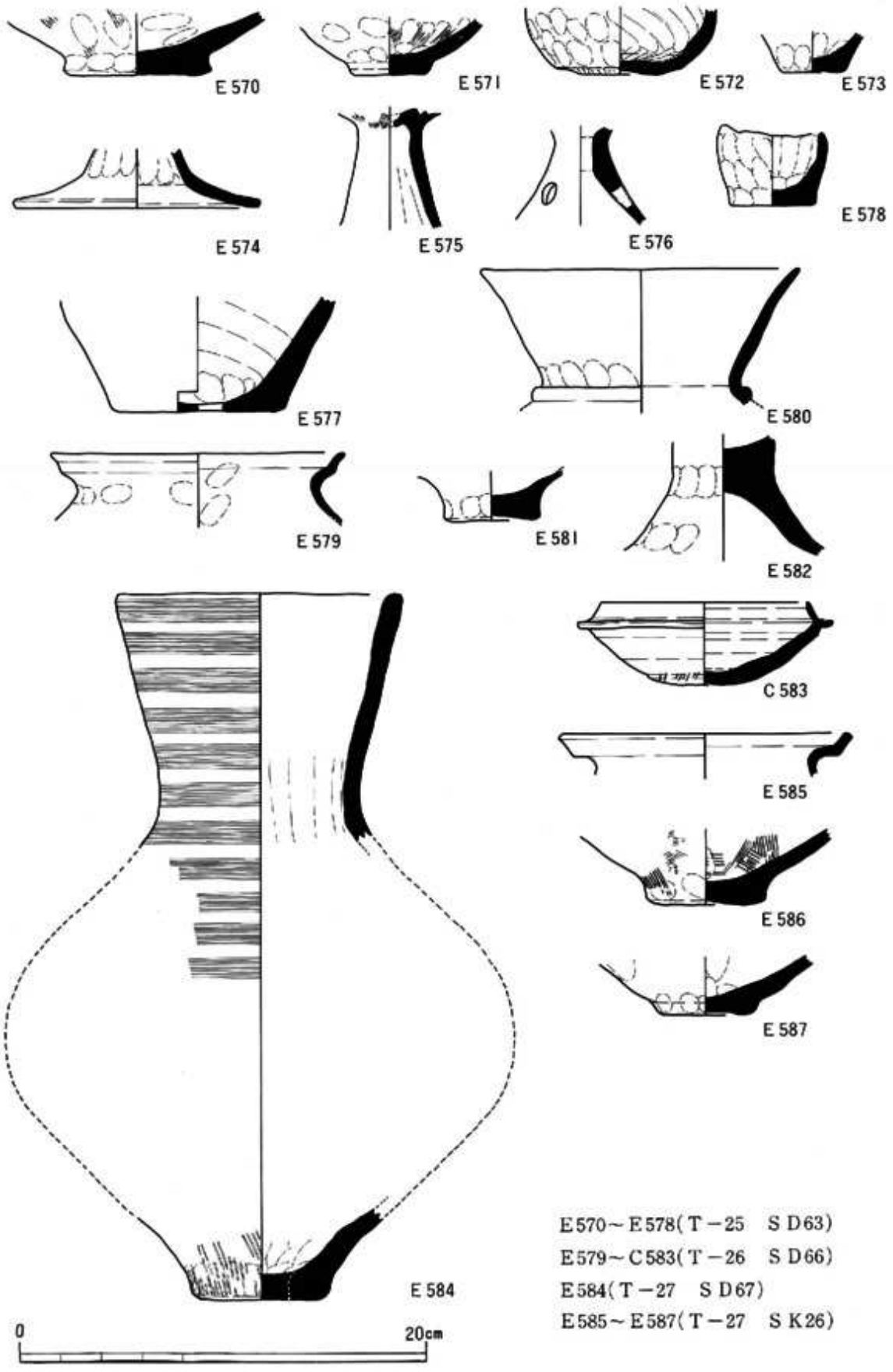


E526～E536(T－20　SK19)　E537～E541(T－20　SX
E542(T－20　ピット内)　E543～E549(T－20　SD51)

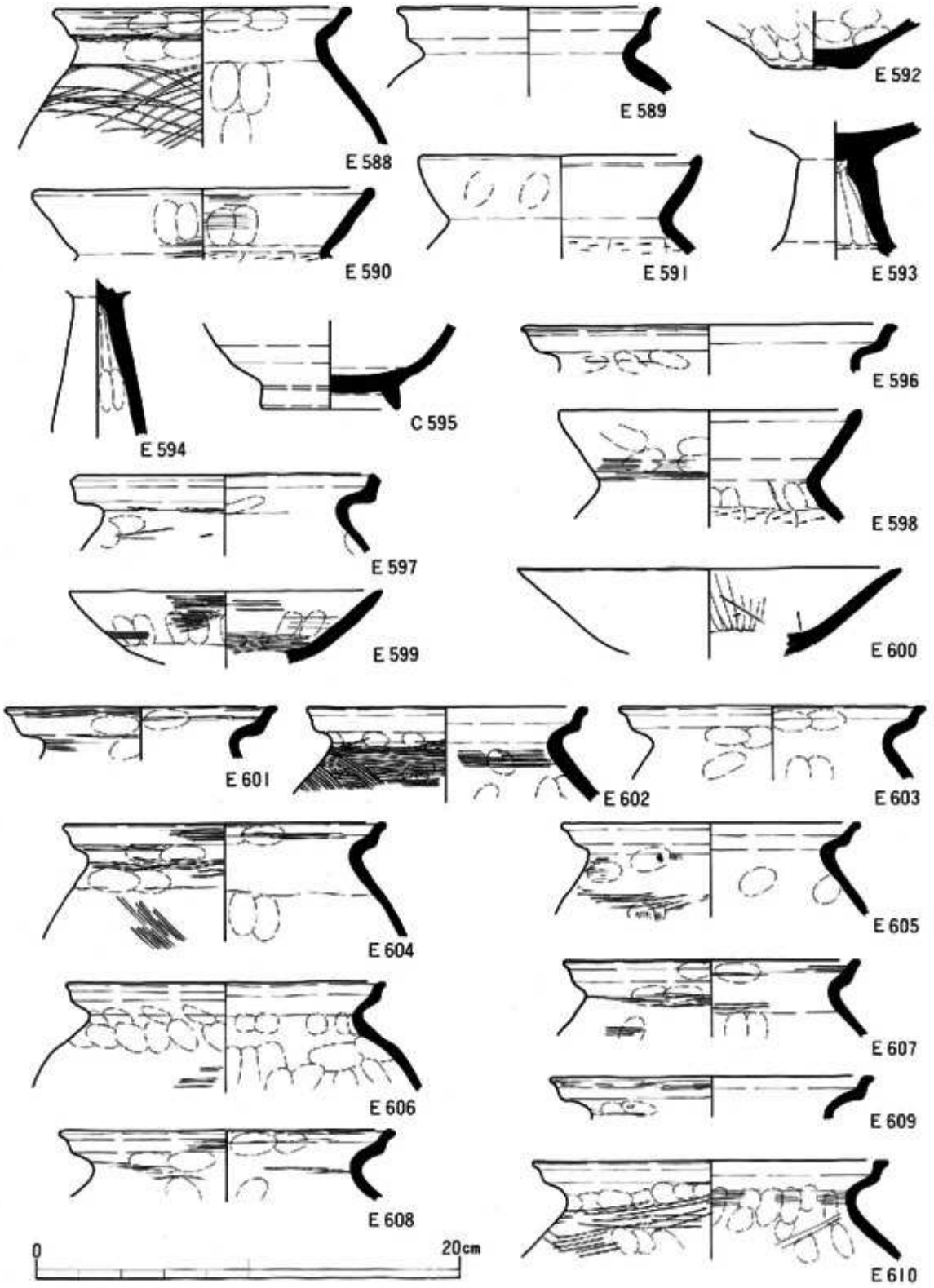


E548～E556(T－21　SD51)　E557～E560(T－24　包含層)
E561(T－24　ピット内)　E562～E569(T－25　SD63)

PL. 119

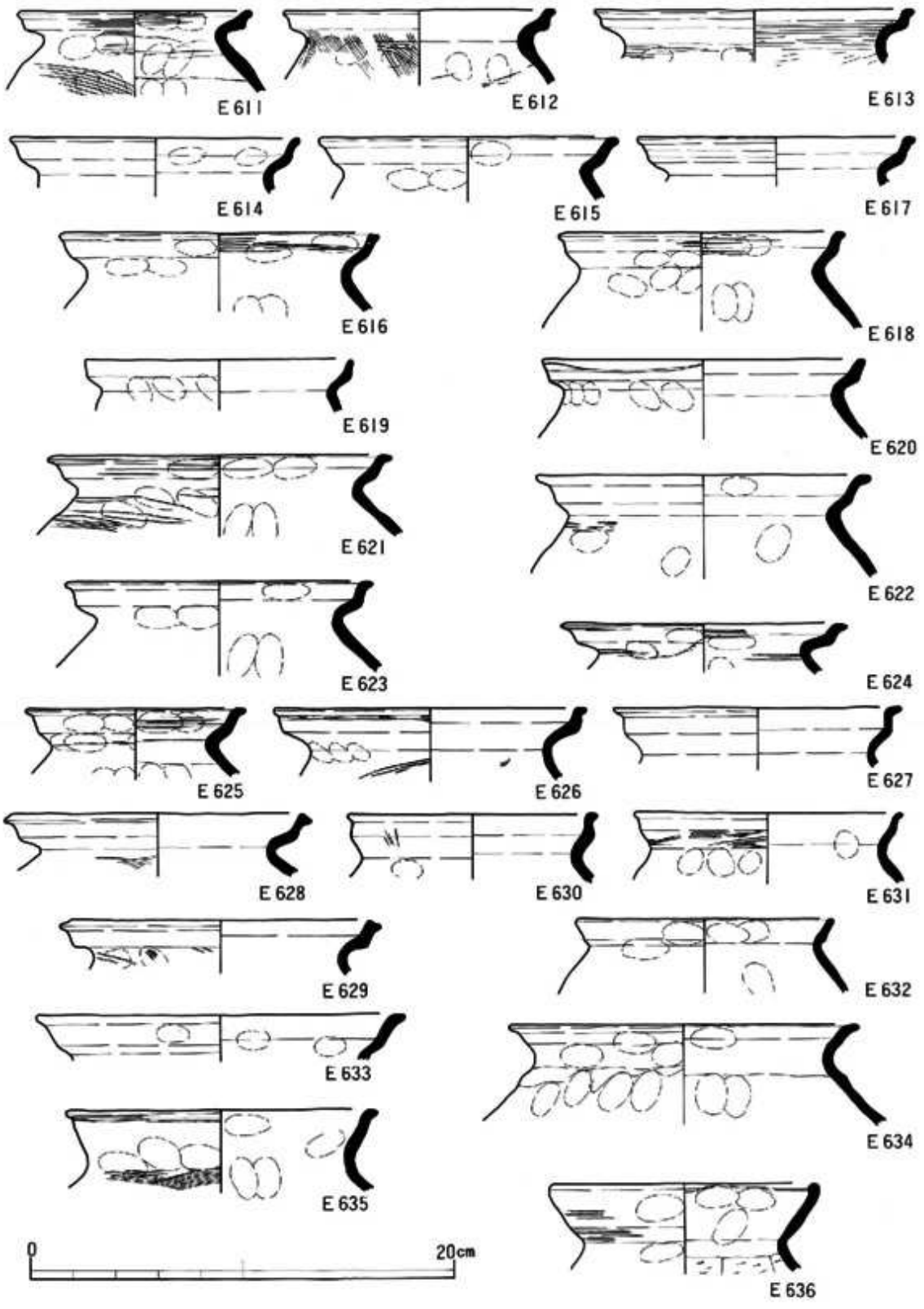


E570～E578(T－25　S D63)
E579～C583(T－26　S D66)
E584(T－27　S D67)
E585～E587(T－27　S K26)

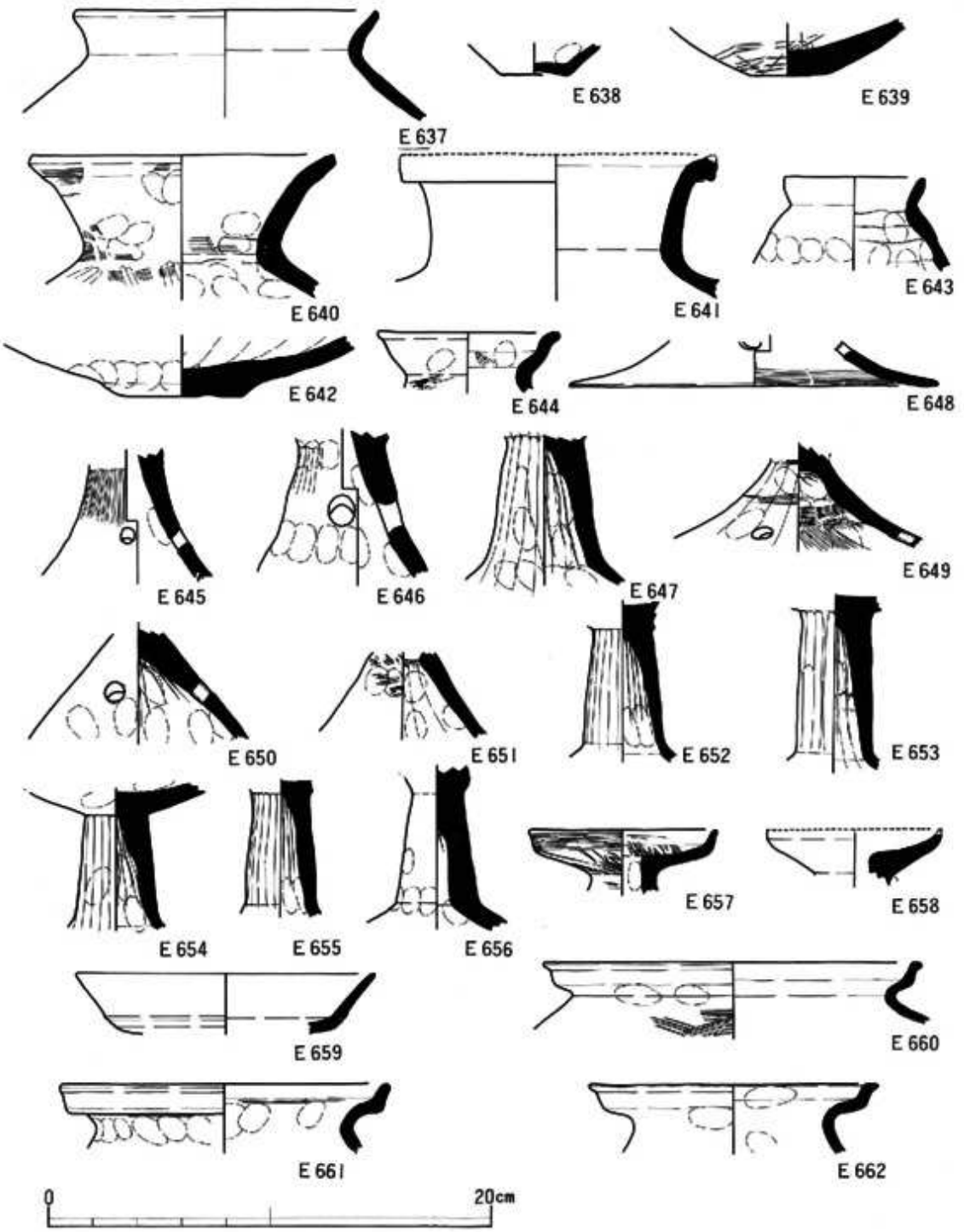


E588～C595(T－28　包含層)　E596～E600(T－28　SD69)
E601～E610(T－28　SD70)

PL. 121

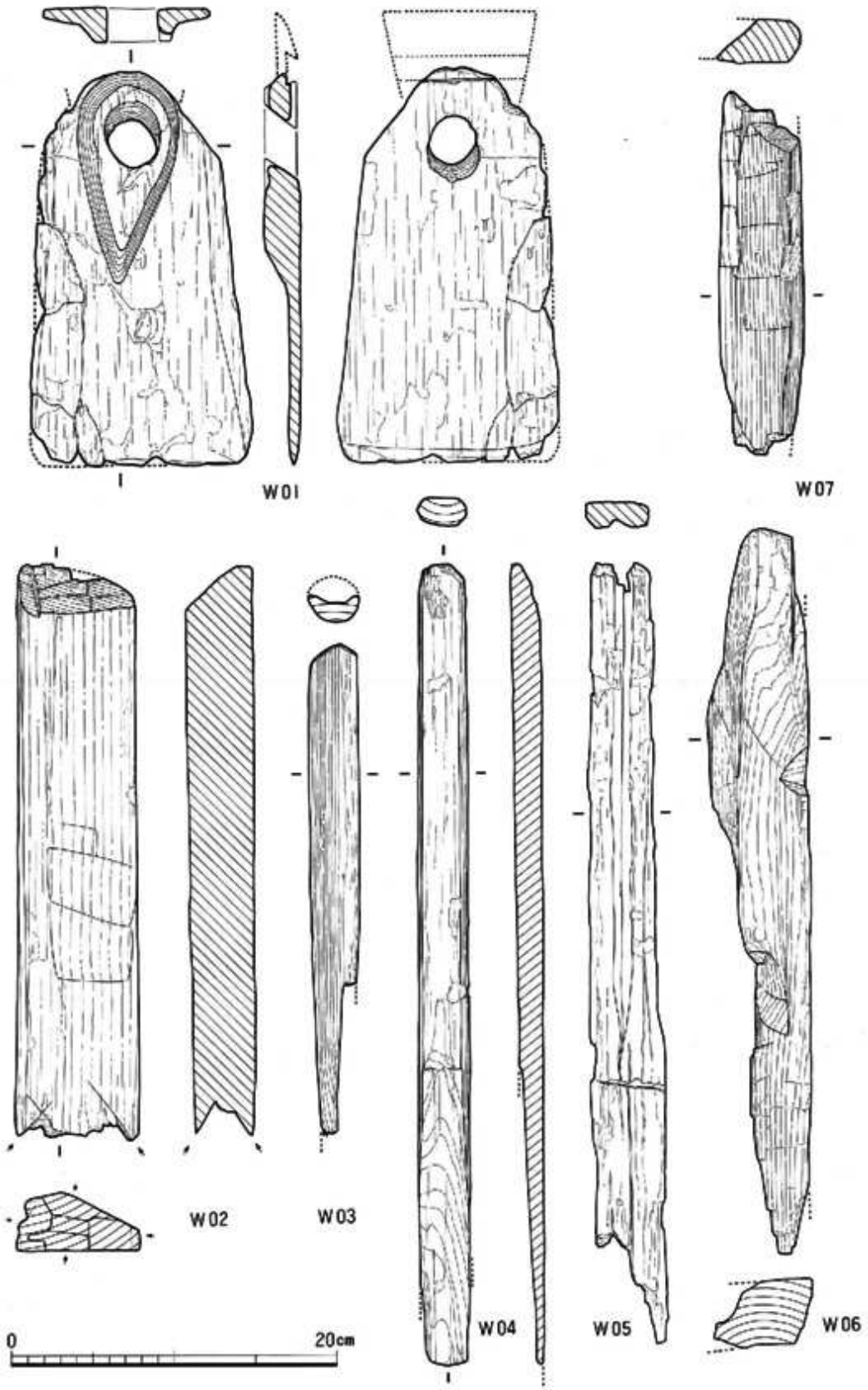


E611～E636(T－28　SD70)

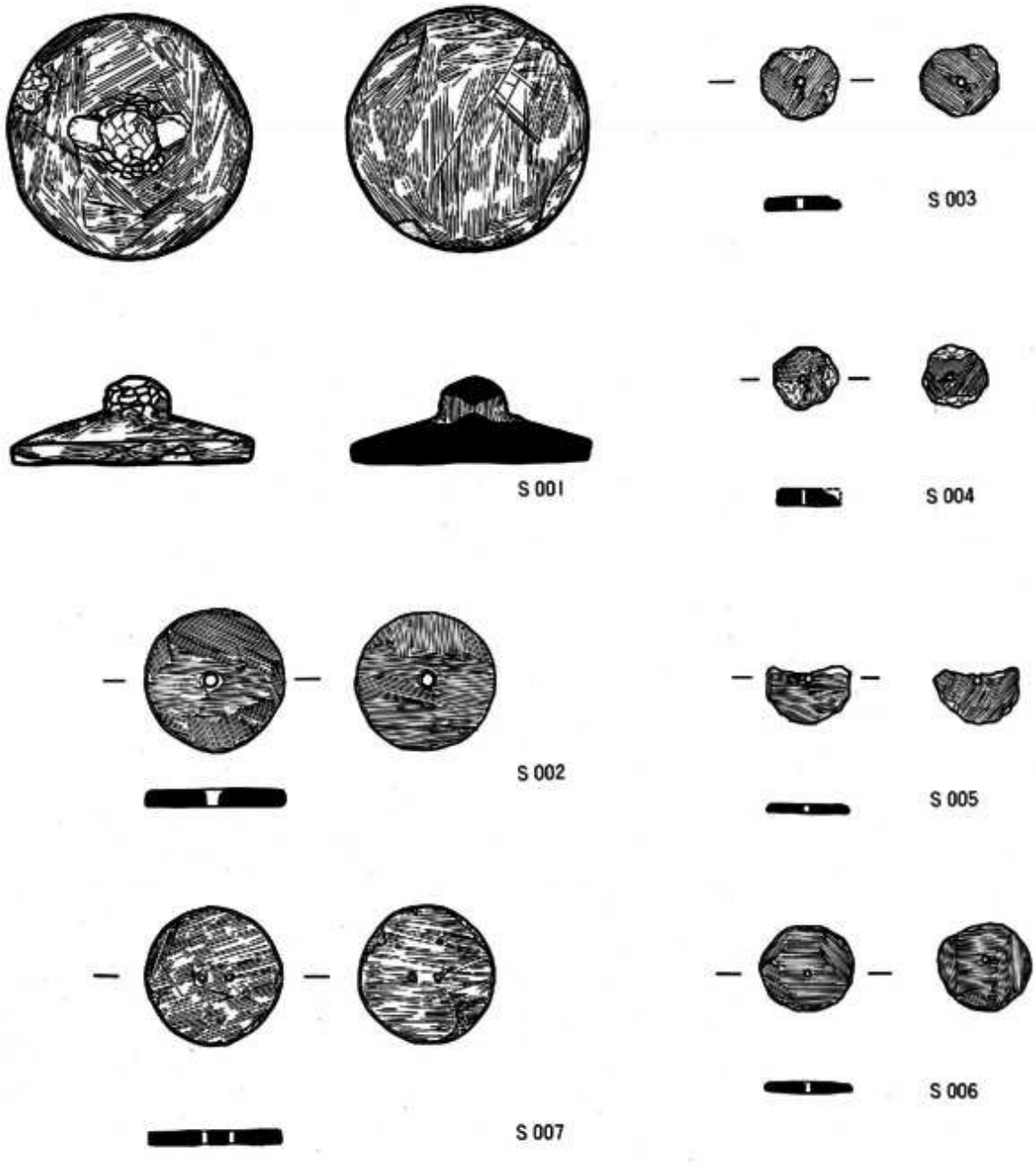


E637～E659(T－28　SD70)　E660(T－28　SH3)
E661・E662(T－28　ピット内)

PL. 123

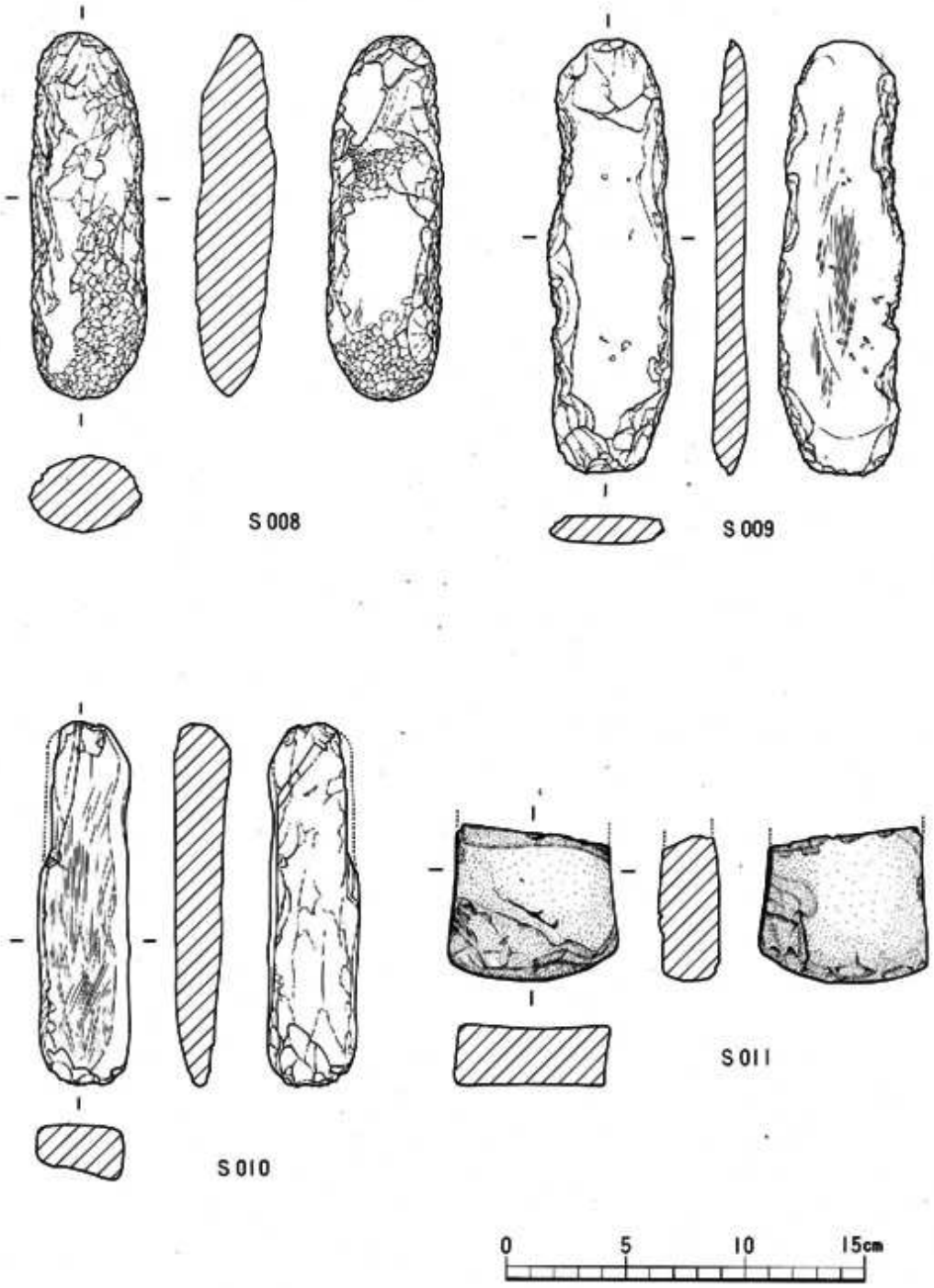


木器実測図



石器実測図

PL. 125



石器実測図

金ヶ森西遺跡発掘調査報告書

—湖南中部流域下水道管理用
道路関連遺跡発掘調査報告書II—

昭和56年3月

編集　滋賀県教育委員会
発行　滋賀県教育委員会
財団法人 滋賀県文化財保護協会
印刷　株式会社 中村太古舎